日本正教会翻訳

我主イイススハリストスの

新約

一九八五年

正教本会版

新約目錄

マトヲイに因る聖福音……第一頁
マルコに因る聖福音……第八十七頁
ルカに因る聖福音……第百四十一頁
イオアンに因る聖福音……第二百三十三頁
聖使徒行實……第三百七頁
イアコフの書……第三百九十九頁
ペトルの前書……第四百九頁
ペトルの後書……第四百十九頁
イオアンの第一書……第四百二十七頁
イオアンの第二書……第四百三十七頁
イオアンの第三書……第四百三十九頁

目錄

イウダの書……第四百四十一頁
ロマ人に達する書……第四百四十五頁
コリンフ人に達する前書……第四百八十三頁
コリンフ人に達する後書……第五百二十一頁
ガラティヤ人に達する書……第五百四十七頁
エフェス人に達する書……第五百六十一頁
フィリピ人に達する書……第五百七十五頁
コロサイ人に達する書……第五百八十五頁
テサロニカ人に達する前書……第五百九十五頁
テサロニカ人に達する後書……第六百三頁
ティモテイに達する前書……第六百九頁
ティモテイに達する後書……第六百十九頁
ティトに達する書……第六百二十七頁

目錄

フィリモンに達する書……第六百三十三頁
エウレイ人に達する書……第六百三十七頁
神學者イオアンの默示錄……第六百六十五頁

マトヱイに因る聖福音

第一章

一ダヴィドの子、アウラアムの子、イイススハリストスの族譜。二アウラアムは
イサアクを生み、イサアクはイアコフを生み、イアコフはイウダ及び其兄弟を生み、三
イウダはファマリに因りてファレス及びザラを生み、ファレスはエスロムを生み、エスロム
はアラムを生み、四アラムはアミナダフを生み、アミナダフはナアッソンを生み、ナアッソ
ンはサルモンを生み、五サルモンはラハフに因りてヴォヲズを生み、ヴォヲズはルヴィに因
りてオヴィドを生み、オヴィドはイモッセイを生み、六イモッセイはダヴィド王を生み、ダヴィド王
はウリヤの妻に因りてソロモンを生み、七ソロモンはロヴォアムを生み、ロヴォアムはア
ヴィヤを生み、アヴィヤはアサを生み、八アサはイヲサファトを生み、イヲサファトはイヲラム
を生み、イヲラムはオジヤを生み、九オジヤはイヲアファムを生み、イヲアファムはアハズ
を生み、アハズはエゼキヤを生み、一〇エゼキヤはマナッシヤを生み、マナッシヤはアモン
を生み、アモンはイヲシヤを生み、一一イヲシヤはイヲアキムを生み、イヲアキムは、ワ

ワイロンに徙さるゝ前、イエホニヤ及び其兄弟を生み、一二ワワイロンに徙されし後、イエ
ホニヤはサラフイイリを生み、サラフイイリはゾロワヱリを生み、一三ゾロワヱリはアワイ
ウドを生み、アワイウドはエリアキムを生み、エリアキムはアゾルを生み、一四アゾルは
サドクを生み、サドクはアヒムを生み、アヒムはエリウドを生み、一五エリウドはエレ
アザルを生み、エレアザルはマトフンを生み、マトフンはイアコフを生み、一六イアコ
フはイオシフを生めり、即マリヤの夫なり、マリヤよりハリストスと稱ふるイイスス
は生れたり。一七是くの如く世を歷ること、アウラアムよりダワイドに至るまで十四代、
ダワイドよりワワイロンに徙さるゝに至るまで亦十四代、ワワイロンに徙されしよりハリ
ストスに至るまで又十四代なり。一八イイススハリストスの生るゝこと左の如し、其
母マリヤイオシフに聘せられて、未だ婚せざる先に、聖神に由りて孕めること見れた
り。一九其夫イオシフは義人にして、之を顯にせんことを欲せず、私に彼を離さんこ
とを望めり。二〇然れども此の事を思へる時、視よ、主の使夢に彼に現れて曰へり、ダワイ
ドの子イオシフよ、爾の妻マリヤを納るゝことを懼るゝ勿れ、蓋其内に孕まれし者は

聖神に由るなり、二一彼は子を生まん、爾其名をイエスと名づけん、彼其民を其罪より救はんとすればなり。二二凡そ此の事の成りしは、主が預言者を以て言ひし所に應ふを致す、曰く、二三視よ、童女孕みて子を生まん、其名はエマヌエルと稱へられん、譯すれば神我等と偕にするなり。二四イオシフ寐より起きて、主の使の命じし如く彼に命ぜし如くせざるに、其家子を生むに迨べり、則其名をイエスと名づけたり。

第二章

一イエスはユダヤのベツレヘムに生れ、イロド王の時イウデヤの人東よりイエルサリムに來りて曰く、二生れたるユダヤ人の王は何處に在るや、蓋我等其星を東に見たれば、彼を拜せん爲に來れり。三イロド王之を聞きて心騷げり、イエルサリム擧りて亦然り。四乃ち凡の司祭長と民間の學士とを集めて、彼等に問へり、基者に因りて斯く錄されたり、五云く、イウダの地のベツレヘムよ、爾はイウダの諸郡の中に於て聊も小しとせず、蓋爾より我が民イズラヰルを牧せんとする君は出でんと。

七是に於てイロド密に博士を召し、詳に星の現れし時を問ひ、八彼等をヅフレエムに
遣して曰へり、往きて、細に嬰兒の事を尋ね、之に遇はゞ、我に告げよ、我も往きて彼を拜
せん爲なり。九彼等王に聞きて往けり、視よ、嘗て東に見たる星は彼等に先だちて行き、
遂に嬰兒の在る所に至りて、其上に止れり。一〇彼等星を見て喜に勝へざりき。一一乃
家に入りて、嬰兒の其母マリヤと偕に在るを見、俯伏して彼を拜し其寶盒を啓きて、之
に禮物を獻じたり、卽黃金、乳香、沒藥なり。一二既にして夢の中に、イロドに返る可か
らずとの默示を得て、他の途より其本地に歸れり。一三彼等の歸りし後、視よ、主の使夢
にイオシフに現れて曰く、起きて、嬰兒と其母とを攜へて、エギペトに奔り、彼處に在り
て、我が爾に告ぐるを待て、蓋イロドは嬰兒を索めて、之を殺さんと謀る。一四彼起きて、
夜間嬰兒と其母とを攜へて、エギペトに往き、一五彼處に在りて、イロドの死するに至
れり。是れ主が預言者を以て言ひし所に應ふを致す、云く、我吾が子を召してエギペト
より出せりと。一六當時イロドは己が博士に欺かれたるを見て、大に怒り、人を遣して
嘗て詳に博士に問ひし時を按り、ヅフレエム及び其四の境の內なる二歳以下の嬰兒

を盡く殺せり。一七 是に於て預言者イエレミヤの言ひし事應へり、云く、一八 ラマに悲
み哭き甚しく號ぶ聲は聞ゆ、ラヒリは其子の爲に哭きて、慰むるを欲せず、子の無きが
故なりと。一九 イロドの死せし後、視よ、主の使エギペトに於て夢にイオシフに現れて
二〇 曰く、起きて、嬰兒と其母とを攜へて、イズライリの地に往け、蓋嬰兒の生命を索む
る者は死せり。二一 彼起きて、嬰兒と其母とを攜へて、イズライリの地に來れり。二二 惟
アルヘライが其父イロドに繼ぎて、イウデヤに王たりと聞きて、彼處に往くことを懼
れ、乃夢の中に默示を得て、ガリレヤの境に往き、二三 ナザレトと名づくる邑に來りて、
此に居りたり、諸預言者を以て、彼はナゾレイと稱へられんと、言はれし事に應ふを致
す。

第三章

一 彼の日授洗イオアン來り、イウデヤの野に於て教を宣べて二 曰く、悔改せ
よ、蓋天國は邇づけり。三 此の人は、乃預言者イサイヤの言ひし者なり、曰く、野に呼ぶ者
の聲ありて云ふ、主の道を備へ、其徑を直くせよと。四 イオアンは駱駝の毛衣を衣、腰に
皮の帶を束ね、蝗蟲と野蜜とを其食とせり。五 當時イエルサリムと、全イウデヤと、イオ

ルダンの四方と出でゝ、彼に就き、六己の罪を認めて、イオルダンに於て彼より洗禮を
受けたり。七イオアンはフリセイ及びサドケイ等の多く其洗を受けん爲に來るを見
て、之に謂へり、蝮の類よ、誰か爾等に將來の怒を避くることを示したる、八然らば悔改
に合ふ果を結べ、九自ら意ひて、我等の父はアウラアムなりと云ふ勿れ、蓋我爾等に語
ぐ、神は此の石よりアウラアムの爲に子を興すを能す、一〇既に斧も樹の根に置かる、
凡そ善き果を結ばざる樹は斫られて、火に投げられん、一一我水を以て爾等に洗を授
けて悔改せしむ、然れども我の後に來る者は更に我より强し、我其履を提ぐるに堪へ
ず、彼は聖神及び火を以て爾等に洗を授けん、一二其箕は其手に在り、彼は其禾場を淨
めて、其麥を倉に斂め、糠を滅ぬざる火に燬かん。一三厥時イイススガリレヤよりイオ
ルダンに來り、イオアンに就きて、之より洗を受けんと欲す。一四イオアン彼を止めて
曰く、我爾より洗を受くべきに、爾我に就くか。一五イイスス答へて彼に謂へり、今姑く
許せ、蓋我等は是くの如く凡の義を盡すべし。是に於て之を許せり。一六イイスス洗を
受けて、直に水より上れるに、視よ、天彼の爲に開け、神の神鴿の如く降りて、其上に臨む

を見たり、一七 且天より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子、我が喜べる者なり。

第四章 一 當時イイスス神に導かれて野に遊けり、惡魔に試みられんとするなり。二 既に齋せしこと四十日四十夜にして、遂に飢ゑたり。三 試みる者彼に就きて曰へり、爾若し神の子ならば、此の石に命じて餅と爲らしめよ。四 彼答へて曰へり、錄せるあり、人は惟餅のみを以て生くべきに非ず、乃凡そ神の口より出づる言を以てすと。五 其時惡魔彼を聖なる城に至り、彼を殿の頂に立たしめて、六 言ふ、爾若し神の子ならば、自ら下に投ぜよ、蓋錄せるあり、爾の爲に其天使に命ぜん、彼等其手にて爾を抱へて、爾の足を石に觸かざらしめんと。七 イイススこれに謂へり、亦錄せるあり、主爾の神を試みる勿れと。八 惡魔復彼を攜へて、最高き山に至り、世界の萬國と其榮華とを示して、九 彼に謂ふ、爾若し俯伏して我を拜せば、悉く此を爾に與へん。一〇 其時イイススこれに謂ふ、サタナ、我より退けよ、蓋錄せるあり、主爾の神を拜せよ、獨彼のみに事へよと。一一 是に於て惡魔彼を離る、視よ、天使等就きて、彼に奉事せり。一二 イイススはイオアンが囚はれたりと聞きて、ガリレヤに去れり、一三 ナザレトを離れて、ザブロン及びヌフタリムの

境の内なる海濱のカペルナウムに來りて、此に居りたり、一四 預言者イサイヤを以て言はれしことを應ふ、曰く、一五 ザブロンの地、ナフタリムの地、海濱の路にヨルダンの外に在る異邦のガリレヤ、一六 幽暗に坐する民は大なる光を見、死の地及び陰に坐する者に光は輝けりと。一七 是よりイエスス始めて教を宣べて曰へり、悔改めよ、蓋天國は邇づけり。一八 ガリレヤの海邊を行く時、彼は兄弟二人、即ちシモン稱してペトルと曰ふ者、及び其兄弟アンドレイが、網を海に施せるを見たり、蓋彼等は漁者なりき。一九 乃ち我に從へ、我爾等を人を漁する者と爲さん。二〇 彼等直に網を舍て、別に兄弟二人、即ゼベダイが、父ゼベダイと僕に舟に在りて、網を補へるを見て、之を召せり。二一 彼處より往きて、ゼベダイの子イアコフと、其兄弟ヨハンが、父ゼベダイと僕に舟に在りて、網を補へるを見て、之を召せり。二二 彼等直に舟と父とを遺して、之に從へり。二三 イエスス徧くガリレヤを巡りて、其諸會堂に於て教を傳へ、天國の福音を宣べ、民間の諸の病、諸の疾を醫せり。二四 彼の聲名徧くシリヤに揚れり、人凡の患へる諸種種の病及び痛楚を負へる者、癲鬼に憑る者、癲癇の者、癱瘓の者を攜へて、彼に就きたるに、彼之を醫せり。二五 時にガリレ

ヤ、デカポリ、イエルサリム、イウデヤ、イオルダンの外より來くの民彼に從へり。

第五章

一イイスス群衆を見て、山に登れり、既に坐せしに、其門徒彼に就けり。二彼口を啓きて之を教へて曰へり、三神の貧しき者は福なり、天國は彼等の有なればなり。四泣く者は福なり、彼等慰を得んとすればなり。五溫柔なる者は福なり、彼等地を嗣がんとすればなり。六義に飢ゑ渇く者は福なり、彼等飽くを得んとすればなり。七矜恤ある者は福なり、彼等矜恤を得んとすればなり。八心の淸き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。九和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。一〇義の爲に窘逐せらるゝ者は福なり、天國は彼等の有なればなり。一一人我の爲に爾等を詬りて窘逐し、爾等の事を誣りて諸の惡しき言を言はん時は、爾等福なり。一二喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり、蓋人是くの如く爾等より先なりし預言者を窘逐せり。一三爾等は地の鹽なり、若し鹽其味を失はゞ、何を以て其鹹に復さん、後復用ゐる所なく、惟外に棄てられて、人に踐まれんのみ。一四爾等は世の光なり、山の上に建てる邑は隱るゝ能はず。一五人燈を燃して之を斗の下に置かず、乃燈臺の上に置く、然らば

凡そ家に在る者に照る。一六 是くの如く爾等の光は人人の前に照るべし、彼等が爾等の善き行を見て、天に在す爾等の父を讃榮せん爲なり。一七 我律法或は預言者を毀たん爲に來れりと意ふ勿れ、我が來れるは之を毀つに非ず、乃之を成さん爲なり。一八 蓋我誠に爾等に語ぐ、天地の廢するに至るまでは、律法の一點一畫も廢せずして、盡く成らん。一九 故に此の至小き誡の一を毀ち、且是くの如く人に教へん者は、天國に於て至小き者と稱へられん、惟之を行ひ、且教へん者は、天國に於て大なる者と稱へられん。二〇 蓋我爾等に語ぐ、若し爾等の義は學士及びパリセイ等の義に勝らずば、爾等天國に入るを得ず。二一 爾等古の人に言へることあるを聞けり、殺す勿れ、殺す者は審判に干らんと。二二 然れど我爾等に語ぐ、凡そ故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん、其兄弟に愚拙よと曰ふ者は公會に干らん、狂妄よと曰ふ者は火の地獄に干らん。二三 故に爾若し禮物を祭壇に携へ至り、彼處に於て、爾が兄弟の爾を障ひたることあるを憶ひ起さば、二四 爾の禮物を祭壇の前に置き、往きて、先づ爾の兄弟と和ぎ、後來りて、爾の禮物を獻ぐべし。二五 爾を訟ふる者と偕に途に在る時、急に之と和げ、恐らくは訟ふる者爾を裁

判官に付し、裁判官爾を下吏に付して、爾獄に投ぜられん。二六 我誠に爾に語ぐ、爾毫
釐だに償はずば、彼より出づるを得ず。二七 爾等古の人に言へるあるを聞けり、淫する
勿れと。二八 然れども我爾等に語ぐ、凡そ慾を懷きて婦を見る者は、心の中已に之と淫
せしなり。二九 若し爾の右の目爾を罪に誘はゞ、抉りて之を棄てよ、蓋爾が百體の一を
失ふは、全身地獄に投ぜらるゝより勝れり。三〇 若し爾の右の手爾を罪に誘はゞ、斷ち
て之を棄てよ、蓋爾が百體の一を失ふは、全身地獄に投ぜらるゝより勝れり。三一 又言
へるあり、若し人其妻を出さば、之に離書を與ふべしと。三二 然れども我爾等に語ぐ、淫
の故に非ずして其妻を出だす者は、之に姦淫を行はしむるなり、出されたる婦を娶る
者も姦淫を行ふなり。三三 又爾等古の人に言へるあるを聞けり、誓に背く勿れ、乃
爾の誓を主の前に守れと。三四 然れども我爾等に語ぐ、一切誓ふ勿れ、天を指して誓ふ
勿れ、是れ神の寶座なればなり、三五 地を指して誓ふ勿れ、是れ其足の凳なればなり、イ
エルサリムを指して誓ふ勿れ、是れ大王の城なればなり、三六 爾の首を指して誓ふ勿
れ、爾一縷の髮だに白く或は黑くする能はざればなり。三七 爾等の言は是是否否たる

べし、此に過ぐる者は惡よりするなり。三八 爾等言へるあるを聞けり、目を以て目を償
ひ、齒を以て齒を償へと。三九 然れども我爾等に語ぐ、惡に敵する勿れ、乃人爾の右の
頰を批たば、他の頰をも之に向けよ。四〇 爾を訟へて、爾の裏衣を取らんと欲する者に
は、外服をも取ることを聽せ。四一 人爾を強ひて、偕に一里を行かしめば、之と偕に二里
を行け。四二 爾に求むる者には與へ、爾に借らんと欲する者を卻くる勿れ。四三 爾等言
へるあるを聞けり、爾の隣を愛し、爾の敵を憎めと。四四 然れども我爾等に語ぐ、爾等の
敵を愛し爾等を詛ふ者を祝福し、爾等を憎む者に善を爲し、爾等を虐げ、爾等を窘逐す
る者の爲に禱れ、四五 天に在す爾等の父の子と爲らん爲なり、蓋彼は其日を惡しき者
と善き者の上に照し、雨を義なる者と不義なる者の上に降らす。四六 蓋爾等若し爾等
を愛する者を愛せば、何の賞かあらん、稅吏も是くの如き事を行ふに非ずや、四七 爾等
若し爾等の兄弟にのみ安を問はゞ、何の過ぎたることをか爲さん、異邦人も是くの如
く行ふに非ずや。四八 故に爾等純全なること、爾等の天の父の純全なるが如く爲れ。

第六章

一 爾等愼みて、人に見られん爲に、施濟を其前に爲す勿れ、然らずば天に在す

爾等の父より賞を獲ざらん。二故に施濟を爲す時は、偽善者が人より榮を得ん爲に、會堂及び街衢に於て爲すが如く己の前に號を吹く勿れ、我誠に爾等に語ぐ、彼等は已にその賞を受く。三爾施濟を爲す時、爾が左の手の爲す所を知らざる迄に、爾の施濟の隱ならん爲なり、然らば隱なるを鑒みる爾の父は顯に爾に報いん。五爾祷る時、偽善者の如くする勿れ、彼等は人に見られん爲に、會堂及び通衢の隅に立ちて祷ぐを好む、我誠に爾等に語ぐ、彼等は已にその賞を受く。六爾祷る時、爾の室に入り、戸を閉ぢて、隱なる處に在す爾の父に禱れ、然らば隱なるを鑒みる父は顯に爾に報いん。七又禱る時、異邦人の如く贅語を曰ふ勿れ、彼等は言の多きを以て聽かれんと意ふ。八彼等に效ふ勿れ、爾等の父は、爾等が願はざる先に、爾等の需むる所を知る。九故に爾等は是くの如く禱れ。天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、一〇爾の國は來り、爾の旨は、天に行はるゝが如く、地にも行はれん、一一我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、一二我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、一三我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ、蓋國と權能と光榮は爾に世世に歸す「アミン」。

一四蓋若し爾等人に其過を免さずば、爾等の天の父も爾等に過を免さゞらん。一六又爾等齋する時、偽善者の如く憂はしき容を爲す勿れ、蓋彼等は其齋の人に顯れん爲に、顏色を損ふ、我誠に爾等に語ぐ、彼等は已に其賞を受く。一七爾齋する時、首に膏ぬり、面を洗へ、一八爾の齋の人に顯れずして、隱なる處に在す爾の父に顯れん爲なり、然らば隱なるを鑒みる爾の父は顯れん爲に報いん。一九爾等の爲に財を地に積む勿れ、此處には蟲も銹も損はず、彼處には蟲も銹も損はず、彼處には盜穿ちて竊む。二〇乃爾等の爲に財を天に積め、彼處には蟲も銹も損はず、此處には盜穿ちて竊まず。二一蓋爾等の財の在る所には、爾等の心も在らん。二二身の燈は目なり、故に若し爾の目淨からば、爾の全身明ならん、二三若し爾の目惡しからば、爾の全身暗からん、故に若し爾の中の光は暗たらば、則暗は如何にぞや。二四人は二人の主に事ふる能はず、蓋或は此を惡み、彼を愛し、或は此を重んじ、彼を輕んぜん、爾等は神と財とに兼ね事ふる能はず。二五故に我爾等に語ぐ、爾等の生命の爲に何を食ひ、何を飲み、爾等の身體の爲に何を衣んと慮る勿れ、生命は糧より大にして、身體は衣より大なるに

非ずや。二六 試に天空の鳥を観よ、彼等は稼かず、穡らず、倉に積ます、而して爾等の天の父は之を養ふ、爾等は彼等より甚貴きに非ずや。二七 且爾等の中誰か慮れば一尺だに延ぶるを得ん。二八 衣の爲にも何ぞ慮る、試に野の百合の如何にか長ずるを観よ、勞かず紡がず、二九 然れども我爾等に語ぐ、ソロモンも其榮華の極に於て其衣も猶此の花の一に及ばざりき、三〇 今日在り、明日爐に投げらるゝ野の草にも、神は斯く衣すれば、況や爾等をや、小信の者よ。三一 故に慮りて、我等何を食ひ、或は何を飲み、或は何を衣んと云ふ勿れ、三二 蓋此れ皆異邦人の求むる所なり、爾等の天の父は此等の者の皆爾等に必要なるを知る。三三 爾等先づ神の國と其義とを求めよ、然らば此等の者も皆爾等に加はらん。三四 故に明日の事を慮る勿れ、蓋明日は自ら己の事を慮らん、一日の心勞は一日の爲に足れり。

第七章

一 人を議する勿れ、議せられざらん爲なり、二 蓋爾等何の議を以てか人を議せば、亦是くの如く議せられん、何の量を以てか人に量らば、是くの如く爾等にも量られん。三 爾何ぞ兄弟の目に物屑の在るを視て、己の目に梁木の在るを覚えざる、四 或は

己の目に梁木の在るに、如何ぞ爾の兄弟に告げて、我に物屑を爾の目より出だすを容
せと曰はん、五偽善者よ、先づ梁木を己の目より出せ、其時如何に兄弟の目より物屑を
出すべきを見ん。六聖物を犬に與ふる勿れ、爾等の眞珠を豕の前に投ぐる勿れ、恐らく
は彼等其足にて之を踐み、且轉じて爾等を噬まん。七求めよ、然らば爾等に與へられん、
尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば爾等の爲に啓かれん、八蓋凡そ求むる者は得、
尋ぬる者は遇ひ、門を叩く者には啓かれん。九爾等の中孰か其子餅を求めんに、之に石
を與ふる者あらん、一〇又魚を求めんに、之に蛇を與ふる者あらん。一一然らば爾等惡
しき者なるに、尚善き賜を其子に與ふるを知る、況や天に在す爾等の父は、之に求むる
者に善き物を與へざらんや。一二故に凡の事、人の爾等に行はんを欲する者は、爾等も
是くの如く之を人に行へ、蓋律法と預言者とは即是なり。一三窄き門より入れ、蓋沈淪
に導く門は闊く、其路は寬くして、之に入る者多し、一四惟生命に導く門は窄く、其路は
細くして、之を得る者少し。一五謹みて偽の預言者を防げ、彼等は羊の衣にて爾等に來
れども、内は殘き狼なり、一六爾等其果に由りて彼等を識らん、豈荊棘より葡萄を摘み、

或は茨藪より無花果を採らんや。一七 是くの如く凡そ善き樹は善き果を結ぶ、樹は悪しき果を結ぶ能はず、一八 善き樹は悪しき果を結ぶ能はず、又悪しき樹は善き果を結ぶ能はず。一九 凡そ善き果を結ばざる樹は、斫られて火に投げらる。二〇 故に爾等其果に由りて彼等を識らん。二一 凡そ我に主よ、主よ、と謂ふ者は、必しも天國に入るに非ず、唯天に在す我が父の旨を行ふ者は入らん。二二 彼の日多くの者我に謂はん、主よ、主よ、我等爾の名に由りて預言し、爾の名に由りて鬼を逐ひ、爾の名に由りて多くの異能を行ひしに非ずやと。二三 其時我彼等に告げて曰はん、我嘗て爾等を識らざりき、不法を作す者我を離れよと。二四 故に凡そ我が此の言を聞きて之を行ふ者は、我之を磐の上に其家を建てたる智き人に譬へん。二五 雨降り、河溢れ、風吹きて其家を撞ちたれども、倒れざりき、磐の上に基けたればなり。二六 凡そ我が此の言を聞きて之を行はざる者は、沙の上に其家を建てたる愚なる人に譬へん。二七 雨降り、河溢れ、風吹きて其家を衝きたれば、倒れたり、且其倒は大なりき。二八 イイスス此等の言を竟りし時、民其訓を奇とせり 二九 蓋し彼等を教へしこと権ある者の若し、學士及びフリセイ等の如き

に非ず。

第八章　一　彼山を下りしに、衆くの民彼に隨へり。二視よ、癩病の者來りて、之に觸れて曰へり、主よ、爾若し望まば、我を潔むる能す。三イエスス手を伸べて人に告ぐる勿れ、乃往きて、己を司祭に示せ、且モイセイの命ぜし禮物を獻じて、彼等に證を爲せ。五イエスカペルナウムに入りし時、百夫長彼に就きて、求めて曰へり、六主よ、我の僕癱瘋にて家に臥し、苦むこと甚し。七イエス曰へり、我往きて之を醫さん。八百夫長對へて曰へり、主よ、我が僕の我舍に入るは、我當らず、惟一言を出せ、然らば我僕愈えん、九蓋我人の權に屬すれど、我が下に兵卒ありて、我此に往けと云へば往き、彼に來れと云へば來り、我が僕に是を行へと云へば行ふ。一〇イエス之を聞きて奇と爲し、從ふ者に謂へり、我實に以色列の中にも、我是くの如き信を見ざりき。一一我又爾等に語ぐ、衆くの者東より西より來りて、アウラアム、イサアク、イアコフと偕に天國の諸子は外の幽暗に逐はれん、彼處には哀哭と切齒とあらん。

一三　イイスス又百夫長に謂へり、往け、爾の信ぜし如く爾に成るべし、斯の時其僕愈えたり。一四　イイススペトルの家に來りて、其岳母の熱を病みて臥せるを見て手に觸れたれば、熱即ち退けり、嬬起きて彼等に供事せり。一六　日暮るゝに及びて、鬼に憑かれし多くの者を彼に擡へ來れるあり、彼言を以て惡鬼を逐ひ出し、亦病ある者を悉く醫せり。一七　預言者イサイヤを以て言はれし事に應ふを致す、云く、彼は我等の患を任ひ、病を負ひたりと。一八　イイスス群衆の己を環れるを見て、門徒に彼の岸に往くことを命ぜり。一九　かんこさ一人の學士彼に就きて曰へり、師よ、爾何處に往くとも我爾に從はん。二〇　イイススも、我等には巢あり、天空の鳥には巢あり、惟人の子には首を枕する處なし。二一　又一の門徒彼に謂へり、主よ、我に先づ往きて我が父を葬せ。二二　然れどもイイススも之に謂へり、我に從へ、死者に其死者を葬るを任せよ。二三　彼が舟に登りし時、其門徒彼に從へり。二四　視よ、大なる颶風海に作りて、舟浪に蔽はるゝに至れり、彼適寢ねたり。門徒就きて、彼を醒まして曰へり、主よ、我等を救へ、殆ど亡ぶ。二六　彼は之に謂ふ、小信の者よ、何ぞ怯ろゝ、即起きて、風と海とを禁めたれば、大に穩

になれり。二七人奇さして曰へり、此れ何人ぞ、風も海も彼に順ふ。二八彼ゲ
ルゲシンの地に至りし時、兇鬼に憑らるゝ者二人墓より出でゝ、彼を迎ふ、甚猛し、人の
敢て其路を過ぐるなきに至れり。二九視よ、彼等號びて曰へり、神の子イエスよ、我等
と爾と何ぞ與らん、時未だ至らざる先に、爾我等を苦めん爲に此に來りしか。三〇此よ
り遙に豕の大なる群は牧はれたり。三一兇鬼彼に求めて曰へり、若し我等を逐ひ出さ
ば、豕の群に入るを容せ。三二彼は之に謂へり、往け、兇鬼出でゝ豕の群に入りしに、視よ、
豕の群悉く山坡より海に逸けて、水に溺れたり。三三牧ふ者奔りて邑に入り、此等の
事と兇鬼に憑らゝ者の事とを告げたるに、三四視よ、邑擧りて出でゝ、イエスを迎
へ、彼を見て、其境を離れんことを請へり。

第九章

一彼舟に登り、濟りて己の邑に來れり。二視よ、癱瘋を患ひて牀に臥せる者を
彼に舁き來れる者あり、イエス彼等の信を見て、癱瘋の者に謂へり、子よ、心を安んぜ
よ、爾の罪は爾に赦さる。三時に或學士等己の衷に謂へり、彼は瀆す言を言ふ。四イエス
ス其意を見て曰へり、爾等何ぞ心の中に惡しきことを懷ふ、五蓋爾の罪赦さるゝと言

ひ、或は起きて行けと言ふは、孰か易き、六然れども爾等が人の子の地に在りて罪を赦
す權あることを知らん爲、(是に於て癱瘋の者に謂ふ)起きて、爾の牀を取りて、爾の家
に往け、七彼即起きて、牀を取りて、其家に往けり。八民之を見て奇と爲し、是くの如き
權を人に賜ひし神を讃榮せり。九イイスス彼處より往きて、稅關に坐する一人、マトヱ
イと名づくる者を見て、之に謂ふ、我に從へ、彼起ちて從へり。一〇イイスス家に席坐せ
し時、視よ、多くの稅吏及び罪人來りて、彼及び其門徒と偕に席坐せり。一一ヱリセイ等
之を見て、其門徒に謂へり、爾等の師は何ぞ稅吏及び罪人と偕に食飲する。一二イイス
ス之を聞きて、彼等に謂へり、康强なる者は醫師を需めず、乃病を負ふ者は之を需む、一
三爾等往きて、我矜恤を欲して祭祀を欲せずと、云ふ事の意如何を學べ、蓋我が來りし
は、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して悔改せしめん爲なり。一四當時イオアンの
門徒彼に就きて曰く、我等とヱリセイ等とは多く齋するに、爾の門徒が齋せざるは何
ぞや。一五イイスス彼等に謂へり、婚筵の客は、新娶者の尚之と偕に在る時、豈哀しむを
得んや、然れども新娶者の彼等より取らるゝ日至らん、其時に齋せん。一六新しき布片

を用て舊き衣を補ふ者あらず、蓋補ひし片は衣を壞りて、其綻更に甚しからん。一七又新しき酒を舊き革嚢に盛らず、然らば嚢敗れて酒漏れ、嚢もまた亡びん、乃ち新しき酒を新しき嚢に盛る、然らば兩の者存す。一八イ|スス彼等に此を語れる時、或宰來りて彼を拜して曰く、我が女今死せり、求む、爾來りて之に手を按せよ、彼必ず生きん。一九イ|スス起ちて之に從へり、其門徒も偕にせり。二〇觀よ、十二年血漏を患ふる婦後より就きて、彼の衣の裾に捫れり、二一蓋己の衷に曰へり、我惟其衣にのみ捫らば、愈ゆるを得んと。二二イ|スス身を轉じて、彼を見て曰へり、女よ、心を安んぜよ、爾の信は爾を救へり、是の時より婦愈ゆるを得たり。二三イ|スス宰の家に來り、簫を吹く者と騒げる民とを見て、二四彼等に謂へり、退け、蓋女は死せしに非ず、乃睡ぬるなり、人人彼を哂へり。二五民の出されし後、彼入りて、其手を執りしに、女起きたり。二六此の事の聲聞徧く其地に傳はれり。二七イ|スス彼處より往く時、二人の瞽者彼に從ひて、呼びて曰へり、ダヰドの子イ|ススよ、我等を憐め。二八イ|スス家に入りしに、瞽者彼に就けり、イ|スス之に謂ふ、我之を成すことを能すと信ずるか、彼等曰く、主よ、然り。二九是に於て其目

に觸れて曰へり、爾等の信の如く爾等に成るべし。三〇 其目卽啓きたり。イイスス嚴しく彼等を戒めて曰へり、愼みて人に知らしむる勿れ。三一 然れども彼等出でゝ、其名を遍く其地に揚げたり。三二 彼等の出づる時、視よ、瘖にして魔鬼に憑らるゝ人をイイススに攝へ來れるあり。三三 魔鬼逐ひ出されて瘖者言へり。民奇として曰へり、イズライリの中に未だ是くの如き事あらざりき。三四 然れどもファリセイ等曰へり、彼は魔鬼の魁に藉りて魔鬼を逐ひ出す。三五 イイスス徧く邑と村とを巡りて、其諸會堂に於て敎を傳へ、天國の福音を宣べ、民間の諸の病諸の疾を醫せり。三六 彼群衆を見て、之を憫みたり、其牧者なき羊の如く、憊れ且散りたるが故なり。三七 是に於て其門徒に謂ふ、穡は多く、工は少し。三八 故に穡主に、工を其穡所に遣さんことを求めよ。

第十章

一 イイスス其十二門徒を召して、彼等に汚鬼を制する權を與へたり、之を逐ひ出し、又諸の病諸の疾を醫さん爲なり。二 十二使徒の名左の如し、第一にはシモン名づけてペトルと云ふ者、及び其兄弟アンドレイ、ゼヱデイの子イアコフ及び其兄弟イオアン、三 フィリップ及びワルフォロメイ、フォマ及び稅吏マトヱイ、アルヱイの子イアコ

フ及びレヱイ、稱してヱデイと云ふ者、四シモン「カナニト」及びイウダ「イスカリオト」、
即彼を賣りし者なり、五イイスス此の十二徒を遣し、之に戒めて曰へり、異邦の途に
往く勿れ、サマリヤの邑に入る勿れ、六寧イズライリの家の亡びし羊に往け。七往く
時宣べて曰へ、天國は邇づけりと。八病者を醫し、癩者を潔め、死者を起し、魔鬼を逐ひ出
せ、費なくして受けたり、費なくして與へよ。九金をも銀をも銅をも爾等の帶に貯ふる
勿れ、一〇行囊をも二の衣をも履をも杖をも執る勿れ、蓋勞する者の其糧を得るは宜
しきなり。一一何の邑或は村に入るとも、其中に孰か可なる者たるを尋ね、彼處に留り
て出づるに至れ。一二家に入る時は、其安を問ひて、此の家に平安と云へ。一三若し其家
之に當らば、爾等の平安は之に臨まん、若し當らずば、爾等の平安は爾等に歸らん。一四
若し爾等を接けず、爾等の言を聽かざる者あらば、其家或は其邑を出づる時、爾等の足
の塵を拂へ。一五我誠に爾等に語ぐ、審判の日に於て、ソドム及びゴモラの地は、斯の邑
より忍び易からん。一六視よ、我が爾等を遣すは、羊を狼の中に入るゝが如し、故に智き
こと蛇の如く、玷なきこと鴿の如くなれ。一七謹みて人人に意を用ゐよ、蓋彼等は爾等

を其公會に解し、其會堂に鞭うたん。一八 且爾等は我が爲の故に諸侯諸王の前に曳か
れん、彼等と異邦民とに證を爲さん爲なり。一九 爾等を解さん時、如何に或は何を言ふ
べきを慮る勿れ、其時言ふべきこと爾等に與へられんとすればなり。二〇 蓋爾等言は
んとするに非ず、乃爾等の父の神は爾等の衷に言はん。二一 兄弟は兄弟を父は子を
死に付し、子は親を攻め、且之を殺さん。二二 爾等我が名の爲に衆人に憎まれん、惟終に
至るまで忍ぶ者は救はれん。二三 爾等を此の邑に窘逐する時は、他の邑に奔れ、蓋我誠
に爾等に語ぐ、爾等が未だイズライリの諸邑を巡り盡さゞるに、人の子來らん。二四 門
徒は其師の上に在らず、僕は其主の上に在らず。二五 門徒は其師の如く、僕は其主の如
くなりて足れり、若し家主を呼びてゼエルゼウルと云ひしならば、況や其家人をや。二
六 故に彼等を懼るゝ勿れ、蓋覆はれて露れざる者なく、隱れて知られざる者なし。二七
我が暗の中に爾等に言ふ事を、爾等光の中に述べよ、耳を附けて聽く事を屋の上に傳
へよ。二八 身を殺して靈を殺す能はざる者を懼るゝ勿れ、寧靈と身とを地獄に滅す
ことを能する者を懼れよ。二九 二の雀は一錢にて售らるゝに非ずや、若し爾等の父の

旨なくば、其一も地に隕ちざらん。三〇 爾等に於ては首の髪も皆數へられたり。三一 故に懼るゝ勿れ、爾等は多くの雀より貴し。三二 然らば凡そ我を人の前に認めん者は、我も亦彼を天に在す我が父の前に認めん。三三 我を人の前に諱まん者は、我も亦彼を天に在す我が父の前に諱まん。三四 我和平を地に投ぜん爲に來れりと思ふ勿れ、我が來れるは和平に非ず、乃刃を投ぜん爲なり、三五 蓋我が來れるは、人をその父と、女をその母と、婦をその姑と分たん爲なり、三六 人の家人は其敵となるべし。三七 父或は母を我に過ぐる者は我に宜しからず、子或は女を我に過ぐる者は我に宜しからず。三八 己の十字架を負ひて我に從はざる者は我に宜しからず。三九 其生命を得る者は之を喪はん、我が爲に其生命を喪ふ者は之を得ん。四〇 爾等を接くる者は我を接くるなり、我を接くる者は我を遣しゝ者を接くるなり。四一 預言者を預言者なるが故に接くる者は預言者の賞を受けん、義人を義人なるが故に接くる者は義人の賞を受けん。四二 門徒の名に因りて此の小子の一に惟冷水一杯を飲ましめん者は、我誠に爾等に語ぐ、其賞を失はざらん。

第十一章

一 イイスス十二門徒に命じ畢りて、彼處より移り、其諸邑に教を傳へ、道を
の宣べたり。二 イオアン獄に在りてハリストスの行ふ所を聞き、其門徒の二人を遣して、
三 彼に謂へり、來るべき者は爾なるか、抑我等佗の者を俟つべきか。四 イイスス彼等に
答へて曰へり、往きて、聞く所見る所をイオアンに告げよ、五 即 瞽者は明き、跛者は歩
み、癩者は潔まり、聾者は聽き、死者は起き、貧者は福音す。六 凡そ我の爲に惑はざる者は
福なり。七 彼等が去りし後、イイスス イオアンの事を擧げて民に謂へり、爾等何を觀
さして野に出でしか、風に動かさるゝ葦か、八 抑何を觀んさして出でしか、柔き衣を
衣たる人か、視よ、柔き衣を衣る者は王の宮に在り。九 然らば何を觀んさして出でしか、
預言者か、然り、我爾等に語ぐ、彼は預言者より大なり。一〇 蓋彼は
我が使を爾の面前に遣し、爾に先だちて爾の道を備へしめんさ、曰へる
一 我誠に爾等に語ぐ、婦の生みし者の中、授洗イオアンより大なる者
れざるも天國に於ては至さ小き者は彼より大なり。一二 授洗イオアンの
まで、天國は力を以て得らる、而して力を用ゐる者は之を奪ふ、一三 諸悉くの預言者

と律法とは預言してイオアンまでに終れり。一四 且若し爾等承けんことを欲せば、彼
は來るべきイリヤなり。一五 耳ありて聽くを得る者は聽くべし。一六 抑我斯の世を
誰に譬へんか、是れ童子、街に坐して、其侶に呼びて、一七 我等は爾等に簫を吹きたれど
も、爾等踊らざりき、爾等に悲の歌を謠ひたれども、爾等哭かざりきと、云ふ者に似たり。
一八 蓋イオアン來りて、食はず、飲まず、人は言ふ、彼魔鬼に憑らると、一九 人の子來りて、
食ひ飲む、又言ふ、視よ、是れ食を嗜み酒を好む者、税吏及び罪人の友なりと、惟睿智の子
は睿智の義を明にせり。二〇 其時イイスス殊に多く異能の行はれし諸邑の悔改せざ
るに因りて、之を責めて曰へり、二一 禍なる哉爾ホラジンよ、禍なる哉爾ヲイフサイダ
よ、蓋爾等の中に行はれし異能は、若しティル及びシドンに行はれしならば、彼等は早く
麻を衣、灰を蒙りて、悔改せしならん、二二 故に我爾等に語ぐ、審判の日に於て、ティル及び
シドンは爾等より忍び易からん。二三 天にまで擧げられしカペルナウムよ、爾も地獄
にまで落されん、蓋爾の中に行はれし異能は、若しソドムに行はれしならば、彼尚存し
て今日に至りしならん、二四 故に我爾等に語ぐ、審判の日に於て、ソドムの地は爾より

忍び易からん。二五 其時イイスス語を續ぎて曰へり、父、天地の主よ、我爾を讃榮す、爾此
等を智者及び達者に隱して、之を赤子に顯しゝに因る、二六 父よ、然り、蓋是くの如きは
爾の旨の嘉せし所なり。二七 萬物は我が父より我に授けられたり、父の外に子を識る
者なく、子及び子が顯さんと欲する者の外に父を識る者なし。二八 凡そ勞苦する者及
び重を任ふ者は我に來れ、我爾等を安んぜしめん。二九 我が軛を負ひて我に學べ、我は
心溫柔にして謙遜なればなり、爾等は其靈に安息を獲ん。三〇 蓋我が軛は易く、我が
任は輕し。

第十二章

一 當時イイスス安息日に禾田を過ぎ行けるに、彼の門徒飢ゑて、穗を摘み
て食へり。二 ヲリセイ等之を見て、彼に謂へり、視よ、爾の門徒は安息日に行ふべからざ
ることを行ふ。三 彼曰へり、爾等は、ダヴィドが己及び其從者の飢ゑし時行ひし事、四 卽
如何にして彼は神の家に入りて、己も從者も食ふべからず、惟司祭等のみ食ふべき供
前の餅を食ひしを讀まざりしか、五 抑爾等は、司祭等が安息日に於て、殿の內に安息
日を犯すとも罪なきことを律法に讀まざりしか。六 然れども我爾等に語ぐ、此には殿

より大なる者あり。七若し爾等は、我矜恤を欲して祭祀を欲せずと、云ふことの意如何を知りしならば、罪なき者を罰せざりしならん。八　蓋人の子は安息日の主なり。九乃ち彼處を離れて、彼等の會堂に入れり。一〇視よ、茲に一手の枯へたる人あり、彼等イエスを罰せん爲に、之に問ひて曰へり、安息日に醫を施すは宜しきか。一一彼曰へり、爾等の中孰か一の羊有りて、若し此れ安息日に坑に陷らば、之を援けて上げざらんか、其人は羊よりも貴きこと幾何ぞ、故に安息日に善を行ふは宜しきなり。一三是に於てセイ等出でゝ、如何にしてイエスを滅さんと相謀れり。一五イエス之を知りて、彼處を離れたり、衆くの民彼に從へり、彼これ悉く之を醫し、一六且之を戒めたり。一七預言者イサイヤを以て言はれし事に應ふために致す、云く、

一八視よ、我が選びし我の僕、我も靈の悦ぶ所の我の至愛の者、我は我が神を彼に賦せん、彼は諸民に審判を示さん、一九彼は爭はず、號ばず、人其聲を衢に聞かさらす、烟れる麻を熄さずして、審判に勝を得しむるに至らん、二〇傷める蘆を折らず、

さ。二二 時に魔鬼に憑らるゝ瞽にして瘖なる者を彼に攜へ來れるあり、彼之を醫し、瞽にして瘖なる者は言ひ且見るを得たり。二三 衆民駭きて曰へり、此れダワイドの子ハリストスなるに非ずや。二四 然れども、ファリセイ等之を聞きて曰へり、彼が魔鬼を逐ひ出すは、魔鬼の魁ゼエルゼウルに藉るに外ならず。二五 イイスス其意を知りて、彼等に謂へり、凡の國自ら分れ爭はゞ、荒墟となり、凡の邑或は家自ら分れ爭はゞ、立たざらん、二六 若しサタナにしてサタナを逐ひ出さば、彼自ら分れ爭ふなり、然らば其國如何にして立たん。二七 若し我ゼエルゼウルに藉りて魔鬼を逐ひ出さば、爾等の諸子は誰に藉りて之を逐ひ出すか、故に彼等は爾等の審判者と爲らん。二八 然れども若し我神の神に藉りて魔鬼を逐ひ出さば、則神の國果して爾等に臨みしなり。二九 或は人如何にして強き者の家に入りて、其器を劫すを得るか、豈先づ強き者を縛りて、然る後其家を劫すべきに非ずや。三〇 我と偕にせざる者は我に敵し、我と偕に棄めざる者は散らすなり。三一 故に我爾等に語ぐ、凡の罪と褻瀆とは人人に赦されん、然れども神に對する褻瀆は人人に赦されざらん。三二 人の子に敵して言を出さば、其人赦されん、然れど

も聖神に敵して言を出さば、其人今世にも來世にも赦されざらん。三三或は樹を善しとし、其果をも善しとせよ、或は樹を悪しとし、其果をも悪しとせよ、樹は其果によりて識らる。三四蝮の類よ、爾等悪しき者にして、何ぞ善きことを言ふを得んや、蓋心に充つる者は口に言ふなり。三五善き人は善き寶庫より善き者を出し、悪しき人は悪しき寶庫より悪しき者を出す。三六我爾等に語ぐ、凡そ人の言ふ所の虚しき言は、審判の日に於て之が答をなさん、三七蓋爾は己の言に由りて義とせられ、亦己の言に由りて罰に定められん。三八其時或る學士及びパリセイ等曰へり、師よ、我等爾より休徴を觀んと欲す。三九彼答へて曰へり、姦悪の世は休徴を求む、而して預言者イオナの休徴の外、之に休徴は與へられざらん、四〇蓋イオナが三日三夜鯨の腹に在りし如く、人の子も三日三夜地の心に在らん。四一ニネベの人は審判の時に斯の世と共に起ちて、之を罪せん、蓋彼等はイオナの傳教に由りて悔改めり、視よ、此にはイオナより大なる者あり。四二南方の女王は審判の時に斯の世と共に起ちて、之を罪せん、蓋彼は地の極よりソロモンの智慧を聽かん爲に來れり、視よ、此にはソロモンより大なる者あり。

四三 汚鬼人より出でゝ後、水なき地を巡り、安息を求むれども得ず、四四 其時曰く、我曾
て出でし我が家に歸らんと、既に來りて、其家の虚しくして、掃き且飾りたるを見、四五
乃往きて、己よりも惡しき他の七鬼を攜へ來り、偕に入りて彼處に居るなり、是に於
て其人の爲に、後の患は先より更に甚し、斯の惡しき世にも亦是くの如くならん。四六
イイススが尚民に語れる時、彼の母及び兄弟外に立ちて、彼と言はんと欲せり、四七
或彼に謂へり、視よ、爾の母及び爾の兄弟外に立ちて、爾と言はんと欲す。四八 彼は言
ひし者に答へて曰へり、孰か我が母たり、孰か我が兄弟たる、四九 乃手を伸べて、其門
徒を指して曰へり、是れ我が母なり、我が兄弟なり、五〇 蓋凡そ天に在す我が父の旨を
行はん者は、彼卽我が兄弟なり、姉妹なり、母なり。

第十三章

一 當日イイススの家を出でゝ、海濱に坐せり。二 衆くの民彼の許に集りたれ
ば、彼舟に登りて坐するに至れり、民皆岸に立てり。三 乃多く譬を以て彼等に語りて
曰へり、視よ、種を播く者出でゝ、種を播きたり。四 播く時、路の旁に遺ちし者あり、鳥來り
て、之を啄めり。五 土の薄き磽地に遺ちし者あり、土の深からざるに因りて、直に萌え出

でしが、六日の出でゝ後萎み、根なきに因りて槁れたり。七棘の中に遺らし者あり、棘起
きて、之を蔽へり。八沃壤に遺ちし者あり、實を結びしこと或は百倍或は六十倍、或は三
十倍なり。九耳ありて聽くを得る者は聽くべし。一〇門徒彼に就きて曰へり、爾何の故
に譬を以て彼等に語るか。一一彼答へて曰へり、爾等には天國の奥義を知ること與へ
られたれども、彼等には與へられざりし故なり。一二蓋有てる者は、之に與へて餘あら
しめ、有たざる者は、其有てる物も之より奪はれん。一三我が譬を以て彼等に語るは、彼
等が視て見ず、聽きて聞かず、又悟らざる故なり。一四斯く彼等に於てイサイヤの預言
應へり、云く、爾等耳にて聽けども悟らず、目にて視れども見ざらん、一五蓋此の民の心
は頑になれり、耳は聽くに慵く、目は自ら閉ぢたり、恐らくは目にて見、耳にて聞き、心に
て悟り、轉じて我が彼等を醫さんと。一六然れども爾等の目は見、爾等の耳は聞くが故
に福なり、一七蓋我誠に爾等に語ぐ、多くの預言者と義人とは、爾等が見る所を見ん
と欲して見ざりき、爾等が聞く所を聞かんと欲して聞かざりき。一八故に爾等種を播
く者の譬の義を聽け、一九凡そ天國の言を聞きて悟らざる者には、凶惡者來りて其心

に播かれたる者を奪ふ、此れ路の旁に播かれたる者なり。二〇礫地に播かれたる者は、此れ言を聽きて、直に喜びて受くれども、二一己に根なきが故に暫時のみ、言の爲に艱難或は窘逐に遇はゞ躓く。二二棘の中に播かれたる者は、此れ言を聽けども、斯の世の慮と貨財の惑ひ其言を蔽ひて、實を結ばず。二三沃壤に播かれたる者は、此れ言を聽きて悟り、實を結ぶこと或は百倍、或は六十倍、或は三十倍に至る者なり。二四又譬を設けて彼等に謂へり、天國は人の其田に美種を播きたるが如し。二五人人の寢ぬる時、其敵來り、麥の中に稗を播きて去れり。二六苗秀でゝ實るに及び、稗も亦見れたり。二七家主の諸僕來りて之に謂へり、主よ、爾は美種を爾の田に播きたるに非ずや、然らば何に由りて稗あるか、二八彼は之に謂へり、敵人之を爲せり。諸僕彼に謂へり、爾は我等が往きて、之を拔かんことを欲するか、二九彼曰へり、否、恐らくは爾等稗を拔く時、之と共に麥をも拔かん。三〇二の者共に長するを容して、收穫に至れ、收穫の時我刈る者に謂はん、先づ稗を集め、之を束ねて焚かん爲に備へ、而して麥を我が倉に斂めよと。三一又譬を設けて彼等に謂へり、天國は芥種、人取りて其田に播きたる者の如し、

三二 是れ萬の種の中に最も小き者なれども、長ずるに及びては、悉くの野菜より大に
して、樹と爲り、天空の鳥來りて、其枝に棲むに至る。三三 又譬を彼等に語りて曰へり、天
國は酵の如し、婦之を取りて、三斗の麪の中に納れしに、悉く發酵するに至れり。三四 此
れ皆イイスス譬を以て民に語れり、譬に非ずしては彼等に語らざりき、三五 預言者を
以て言はれし事に應ふを致す、云く、我が口を啓きて譬を言ひ、創世以來隱れたること
を述べんと。三六 其時イイスス民を散じて、家に入れり。其門徒彼に就きて曰く、請ふ、田
の稗の譬を我等に解け。三七 彼は之に答へて曰へり、美種を播く者は人の子なり、三八
田は世界なり、美種は天國の子、稗は凶惡者の子なり。三九 之を播きたる敵は惡魔なり
収穫は世の終末なり、刈る者は天使等なり。四〇 故に稗を集めて、火に焚くが如く、此の
世の終末にも是くの如くならん。四一 人の子は其天使等を遣して、其國より凡の誘惑
と不法を行ふ者とを集めて、四二 之を火の爐に投ぜん、彼處に哀哭と切齒とあらん。四
三 時に義人等は其父の國に於て日の如く輝かん。耳ありて聽くを得る者は聽くべし。
四四 又天國は田に藏れたる寶の如し、人之を見出したれば秘し、喜びて往き、盡く其所

有を鬻ぎて、斯の田を買ふ。四五 又天國は美き眞珠を求むる商賈の如し、四六 彼一の値
貴き眞珠を見出したれば、往きて盡く其所有を鬻ぎて、之を買へり。四七 又天國は海に
施して種種の魚を集むる網の如し、四八 既に盈ちたれば、之を岸に曳き上げ、坐して、嘉
き者を擇びて器に入れ、惡しき者を外に棄てたり。四九 世の終末にも是くの如くなら
ん、天使等出でゝ、惡者を義者の中より分ちて、五〇 之を火の爐に投ぜん、彼處には哀哭
と切齒とあらん。五一 イイスス彼等に謂ふ、此れ皆爾等悟りしか、彼等曰く、主よ、然り。五
二 彼は之に謂へり、故に凡そ天國を學びたる學士は、其寶庫より新しき物と舊き物と
を出す家主の如し。五三 イイスス此等の譬を竟りて、彼處を去れり。五四 己の故土に來
りて、會堂に於て彼等を教へたるに、彼等奇とするに至れり、曰く、斯の人何より斯る智
慧と異能とを得たる。五五 彼は木工の子なるに非ずや、其母はマリヤと名づけらるゝ
に非ずや、其兄弟はイアコフ、イオシイ、シモン、イウダなるに非ずや。五六 其姉妹は皆我
等の間に在るに非ずや、然らば此等皆斯の人何より得たるか、五七 遂に彼の爲に惑へ
り。イイスス彼等に謂へり、預言者は其故土及び其家の外に於ては尊ばれざるなし。五

八 乃彼等の信ざるに由りて、彼處に多くの異能を行はざり
第十四章 き。二 其侍臣に謂へり、此れ
授洗イオアンなり、彼死より復活せり、故に彼に由りて異能は行
其兄弟フィリップの妻イロデアダの故に因りて、イオアンを執へ、之を縛りて、獄に入れ
たり。四 蓋しイオアン彼に謂へり、爾此の婦を納るゝは宜しからずと。五 且之を殺さん
と欲したれども、民を懼れたり、其之を預言者と爲しゝ故なり。六 適〻イロドの誕生日
に値り、イロデアダの女席上に舞ひて、イロドの喜を獲たり。七 故に彼誓ひて、其求むる
所に隨ひて、之を與へんことを約せり。八 女母の嗾に因りて曰へり、授洗イオアンの
首を盤に盛りて、此に我に與へよ。九 王憂ひたれども、誓の爲、又共に席坐する者の爲の
故に、之を與へんことを命ぜり。一〇 乃人を遣して、イオアンを獄に斬り、一一 其首を
盤に盛り、攜へ來りて女に與へたれば、女之を其母に擔へたり。一二 彼の門徒來りて其
屍を取りて、之を葬り、且往きてイイスに告げたり。一三 イイスス聞きて舟に乘り、
彼處を離れて、獨野の處に往けり、民之を聞きて、諸邑より歩みて彼に從へり。一四 イイ

ヌス出でゝ、群衆を見て、之を憫み、其病める者を醫せり。一五 日暮るゝに就きて曰へり、此は野の處にして、時已に晩し、民を去らしめよ、彼等が諸村に往きて、己の爲に食を市ばん爲なり。一六 然れどもイイスス、彼等に謂へり、其往くを要せず、爾等之に食を與へよ。一七 彼等曰く、我等には此に惟五の餅と二の魚とあるのみ。一八 彼曰へり、之を此に我に攜へ來れ。一九 乃民に命じて、草の上に坐せしめ、五の餅と二の魚とを取りて、天を仰ぎて祝福し、餅を擘きて、之を門徒に與へ、門徒民に與へたり。二〇 皆食ひて飽き、其餘りの屑を拾ひて、十二の筐に盈てたり。二一 食ひし者は、婦と幼童とを除きて、凡五千人なりき。二二 イイスス直に其門徒を促して、舟に登らしめ、自ら民を去らしむる間に、己に先だちて、彼の岸に往かしめたり。二三 民を去らしめて後、彼は獨禱に於て祈禱せん爲に山に登り、既に暮れて、獨彼處に在りき。二四 時に舟海の中に在りて、浪に撼られたり、風の逆ひし故なり。二五 夜四更の時、イイスス海を履みて彼等に往けり。二六 門徒其海を履むを見て、驚きて曰へり、是れ怪物なり、乃懼れて呼べり。二七 然れどもイイスス直に彼等に語りて曰へり、心を安んぜよ、是れ我なり懼るゝ勿

れ。二八ペトル彼に答へて曰へり、主よ、若じ是れ爾ならば、我に水を履みて爾に至らん
ことを命ぜよ。二九彼曰へり、來れ、ペトル舟を下り、水を履みて、イイススの許に往けり。
三〇然れども風の烈しきを見て懼れ、溺れんとして、呼びて曰へり、主よ、我を救へ。三一
イイスス直に手を伸べて、之を援けて曰く、小信の者よ、何ぞ疑ひたる。三二共に舟に登
るに迨びて、風息みたり。三三舟に在る者就きて、彼を拜して曰へり、爾は誠に神の子な
り。三四既に濟りて、ゲンニサレトの地に來れり。三五其處の人人彼を識りたれば、遍く
其近傍に人を遣して、病ある者を悉く攜へ來らしめ、三六唯彼の衣の裙に捫らんこと
を求めたり、之に捫りし者は愈ゆるを得たり。

第十五章

一其時イエルサリムより來れる學士及びフリセイ等イイススに就きて
曰く、二爾の門徒は何ぞ古人の傳を犯す、蓋餅を食ふ時其手を盥はざるなり。三彼答へ
て曰へり、爾等も何ぞ爾等の傳の爲に神の誡を犯す、四蓋神誡めて曰へり、父母を敬
へ、又曰へり、父或は母を詈る者は死すべしと、五然れども爾等曰く、人若し父或は母に
對ひて、爾が我より得べき者は、禮物と爲れりと云はゞ、六其父或は母を敬はずとも可

なりと、斯く爾等は其傳を以て神の誡を廢せり。七僞善者よ、イサイヤは爾等の事を善
く預言して云へり、八斯の民は口にて我に近づき、唇にて我を敬へども、其心は遠く我
に離る、九彼等は人の誡を教と爲して、教へて、徒に我を尊むと。一〇是に於て衆を召し
て彼等に謂へり、聽きて悟れ。一一口に入る者は人を汚さず、乃口より出づる者は、斯れ
人を汚すなり。一二時に門徒彼に就きて曰へり、ファリセイ等が斯の言を聞きて惑ひし
を、爾知れるか、一三彼答へて曰へり、凡そ我が天の父の植ゑざりし植物は、其根絶され
ん。一四姑く彼等を舍け、彼等は瞽にして、瞽を導く者なり、若し瞽にして、瞽を導かば、二
人ながら坑に陷らん。一五ペトル對へて彼に謂へり、請ふ、斯の瞽を我等に解け。一六イ
イズス曰へり、爾等も未だ悟らざるか。一七豈凡そ口に入る者は、腹を運りて外に還て
らるゝを知らざるか。一八然れども口より出づる者は心より出づ、斯れ人を汚すなり。
一九蓋心より出づる者は、惡念、凶殺、姦淫、邪淫、盜竊、妄證、褻瀆なり。二〇此等は人
を汚す、然れども盥はざる手を以て食ふは、人を汚さゞるなり。二一イイスス彼處を離
れてティル及びシドンの地に往けり。二二視よ、ハナアンの婦其疆より出でゝ、彼に呼び

て曰へり、主ダヴィドの子よ、我を憐め、我が女鬼に憑らるゝこと甚し。二三 然れども彼一言も之に答へざりき。其門徒就きて、彼に請ひて曰へり、之を去らしめよ、蓋我等の後より呼ぶ。二四 彼答へて曰へり、我は惟イズライリの家の亡びし羊にのみ遣されたり。二五 婦近づきて、彼を拝して曰へり、主よ、我を助けよ。二六 彼答へて曰へり、兒曹の餅を取りて、狗に投ぐるは、宜しからず。二七 婦曰へり、主よ、然り、但狗も亦其主の食卓より遺つる屑を食ふ。二八 其時イイスス答へて彼に謂へり、嗚呼婦よ、爾の信は大なり、爾が望む如く爾に成るべし、其女斯の時より愈いたりき。二九 イイスス彼處を去りて、ガリレヤの海濱に來り、山に登りて坐せり。三〇 衆くの民は、跛者、瞽者、瘖者、殘缺者及び他の多くの者を伴ひ來りて、イイススの足下に置きたれば、彼之を醫せり。三一 民は瘖者の言ひ、殘缺者の健になり、跛者の歩み、瞽者の見るを見て、之を奇として、イズライリの神を讃榮せり。三二 イイスス其門徒を召して、彼等に謂へり、我斯の民を憫む、蓋已に三日我と偕に在りて、食ふ物なし、我彼等を飢ゑて去らしむるを欲せず、恐らくは途中に憊れん。三三 門徒彼に謂ふ、我等野に在りて、斯く多くの民を飽かしむるに足る餅を何處より

得んや、三四 イイスス彼等に謂ふ、爾等に餅幾何かある、彼等曰へり、七及び些須の小き魚。三五 是に於て民に命じて地に坐せしめ、三六 七の餅と魚とを取りて、感謝し、之を擘きて、門徒に與へ、門徒民に與へたり。三七 皆食ひて飽き、其餘りたる屑を拾ひて、七の籃に盈てたり。三八 食ひし者は、婦と幼童との外、四千人なりき。三九 既に民を去らしめて、彼舟に登りマグダラの疆に至れり。

第十六章

一 ファリセイ及びサドカイ等就きて、彼を試みて、天より休徴を示さんことを請へり。二 彼答へて曰へり、暮には爾等言ふ、晴天ならん、天紅なるに因てなり。三 朝には言ふ、今日風雨ならん、天紅なるに因てなり。偽善者よ、爾等天の面を別つを知りて、時の休徴を究むる能はざるか。四 姦悪の世は休徴を求む、而して預言者イオナの休徴の外、之に休徴は與へられざらん、遂に彼等を離れて去れり。五 門徒彼岸に濟りて、餅を取ることを忘れたり。六 イイスス彼等に謂へり、謹みて、ファリセイ及びサドカイ等の酵を防げ。七 彼等竊に議して曰へり、是れ我等が餅を取らざりしことを知りて、彼等に謂へるなり。八 イイスス之を

竊に議する、九爾等未だ悟らざるか、又五の餅を五千人に分ちて、幾筐を拾ひしか、一〇
七の餅を四千人に分ちて、幾籃を拾ひしかを記憶せざるか、一一我が爾等にファリセイ
及びサドケイ等の酵を防げと言ひしは、爾等何ぞ餅の事に非ずと悟らざる。一二是に
於て彼等、其言ひしは、餅の酵に非ず、乃ファリセイ及びサドケイ等の教を防ぐべきこ
となるを悟れり。一三イイススはフィリップのケサリヤの地に來りて、其門徒に問ひて曰
へり、人人我人の子を言ひて、誰とか爲す、一四彼等曰へり、或人は授洗イオアンと爲し、
他の者はイリヤと爲し、又他の者はイエレミヤ、若くは預言者の一人と爲す。一五イイ
スス彼等に謂ふ、爾等は我を言ひて誰とか爲す、一六シモンペトル對へて曰へり、爾は
ハリストス、活ける神の子なり。一七イイスス答へて彼に謂へり、イオナの子シモンよ、
爾は福なり、蓋血肉は之を爾に示しゝに非ず、乃天に在す我の父なり。一八我も亦
爾に語ぐ、爾はペトルなり、我此の磐の上に我の教會を建てん、而して地獄の門は、之に
勝たざらん。一九且我爾に天國の鑰を與へん、爾が地に縛る者は、天にも縛られ、爾が
地に釋く者は、天にも釋かれん。二〇其時イイスス其門徒に戒めて、己がハリストスた

るを人に告ぐること勿らしめたり。二一 是れよりイイスス始めて其門徒に、己がイエルサリムに往き、長老、司祭長、學士等より多く苦を受け、且殺されて、第三日に復活すべきことを示せり。二二 ペトル彼を援きて、諫めて曰へり、主よ、自ら憐め、此の事爾に及ぶべからず。二三 彼は顧みてペトルに謂へり、サタナ我より退け、爾は我の爲に礙なり、蓋爾は神の事を念はず、乃人の事を念ふ。二四 時にイイスス其門徒に謂へり、人若し我に從はんと欲せば、己を舍て、其十字架を負ひて、我に從へ。二五 蓋己の生命を救はんと欲する者は、之を喪はん、我の爲に己の生命を喪はん者は、之を得ん。二六 人若し全世界を獲とも、己の靈を損はゞ、何の益かあらん、抑人何を與へて、其靈の償と爲さんや。二七 蓋人の子は其父の光榮を以て、其天使等と偕に來らん、其時各人に其行に依りて報いん。二八 我誠に爾等に語ぐ、此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、人の子が其國に來るを見んとする者あり。

第十七章

一 六日を越ねて、イイススはペトル、イアコフ及び其兄弟イオアンを攜へ獨彼等を率ゐて、高き山に登り、二 彼等の前にて容を變へたり、其面は日の如く耀き、

其衣は光の如く皎くなれり。三視よ、モイセ及びイリヤ現れて、彼と與に語れり。四時にペトルイエスに謂へり、主よ、我等此に居るは善し、爾若し欲せば、我等此に三の廬を建てん、一はモイセの爲、一はイリヤの爲にせん。五彼が尚言ふ時、視よ光れる雲は彼等を蓋ひ、且雲より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子、我が喜べる者なり、彼に聽け。六門徒聞きて俯伏し、懼るゝこと甚し。七イエスに就きて、彼等に觸れて曰へり、起きよ、懼るゝ勿れ。八彼等其目を擧げて、獨イエスの外に誰をも見ざりき。九山を下る時イエス彼等に戒めて曰へり、人の子が未だ死より復活せざる先には、見たる事を人に告ぐる勿れ。一〇門徒彼に問ひて曰へり、然らば學士等がイリヤ先に來るべしと云ふは何ぞや。一一イエス答へて曰へり、イリヤ既に來れり、而して人彼を識らざりき、乃欲する所に隨ひて、彼を待へしなり、是くの如く人の子も、彼等より苦を受けん。一三是に於て門徒は、其授洗イオアンの事を彼等に言ひしを悟れり。一四既に民の處に至りしに、或人彼に就きて、跪きて　一五曰へり、主よ、我が子を憐めよ、彼癲癇を患ひて、苦むこと甚し、屢火に倒

れ、亦屢水に倒る、一六 我之を擡へて、爾の門徒に就きたれども、彼等醫すこと能はざりき。一七 イイスス答へて曰へり、噫信なき悖れる世や、我何時まで か爾等を忍ばん、彼を此に我に擡へ來れ。一八 イイスス寃鬼を禁めたれば、寃鬼出でゝ、其子斯の時より愈ゐたり。一九 其時門徒私にイイススに就きて曰へり、我等が之を逐ひ出す能はざりしは何の故ぞ。二〇 イイスス彼等に謂へり、爾等信なき故なり、蓋我誠に爾等に語ぐ、爾等に若し芥種の如き信あらば、此の山に、此より彼へ移れと言ふとも、移らん、又爾等に一も能はざることなからん。二一 此の類に至りては祈禱と齋とに由らざれば出でざるなり。二二 カリレヤに在る時、イイスス彼等に謂へり、人の子は人の手に付されん。二三 且彼を殺さん、而して第三日に彼復活せんと哀めり。二四 カペルナウムに來りし時、殿稅を集むる者ペトルに就きて曰へり、爾の師は殿稅を納むるか。二五 彼曰く、然り。家に入りし時、イイスス先んじて彼に謂へり、シモン爾如何に意ふか、地の諸王は貢若くは稅を誰より取るか、己の子よりか、外の者よりか。二六 ペトル曰く、外の者よりす、イイスス彼に謂へり、然らば子は免さる

然れごし我等が彼等を惑さゞらん爲に、爾海に往きて、釣を垂れよ、初に上る魚を取りて、其口を啓かば、「スタテル」を得ん、之を取りて、我と爾との爲に彼等に與へよ。

第十八章

一　其當時門徒イイスに就きて曰へり、天國に於ては孰か大なる。二　イイス幼兒を召して、彼等の中に立てゝ三　曰へり、我誠に爾等に語ぐ、爾等若し轉じて、幼兒の如くならずば、天國に入るを得ず。四　故に此の幼兒の如く自ら謙らん者は、是れ天國に於て大なる者なり。五　又我が名に因りて、是くの如き幼兒の一人を接くる者は、我を接くるなり。六　然れごも我を信ずる此の小子の一人を罪に誘はんより、寧磨石を其頸に懸けられて、海の深處に沈められん。七　世は誘惑に由りて禍なる哉、蓋誘惑は來らざる可からず、但誘惑を來す人は禍なる哉。八　若し爾の手或は爾の足罪に誘はゞ、斷ちて之を棄てよ、爾の爲には、跛或は殘缺にして生命に入るは、兩の手兩の足ありて永火に投ぜらるゝより勝れり。九　又若し爾の目罪に誘はゞ抉りて之を棄てよ、爾の爲には、一の目ありて生命に入るは、兩の目ありて火の地獄に投ぜらるゝより勝れり。一〇　愼みて此の小子の一人をも輕んずる勿れ、蓋我爾等に語ぐ、彼等の天使等は

天に於て常に我が天の父の顔を覩る。一一 蓋し人の子は亡びし者を尋ねて救はん爲に來れり。一二 爾等如何に意ふか、人若し百匹の羊あらんに、其一迷はゞ、九十九を山に遺し、往きて迷へる者を尋ねざるか。一三 若し之を獲ば、我誠に爾等に語ぐ、彼が其羊の爲に喜ぶこと、迷はざりし九十九の者より勝れりと。一四 斯く此の小子の一人の亡ぶるは、爾等が天の父の旨に非ず。一五 若し爾の兄弟爾に罪を得ば、往きて、爾と彼と獨處る時に之を諫めよ、若し爾に聽かば、爾の兄弟を獲たるなり。一六 若し聽かずば、一人或は二人を伴ひ、往きて、二三證者の口を以て、凡の言を定むるを致せ。一七 若し彼等に聽かずば、教會にも聽かずば、爾の爲には教會に告げよ、若し教會にも聽かずば、爾の爲には異邦人と稅吏との如くなるべし。一八 我誠に爾等に語ぐ、凡そ爾等が地に縛る者は天にも縛られん、爾等が地に釋く者は天にも釋かれん。一九 又誠に爾等に語ぐ、若し爾等の中二人地に於て心を合せて凡そ其事を求めば、何を求むるに論なく、天に在す我が父より彼等に賜はらん。二〇 蓋二人或は三人の我が名に因りて集る處には、我も其中に在るなり。二一 其時ペトル彼に就きて曰へり、主よ、我が兄弟我に罪を得ば、幾次之に免すべきか、七次迄か。二二 イイスス

彼に謂ふ、我爾に七次迄と言はず、乃七十次の七倍迄。二三 是の故に天國は、其諸僕と會
計せんと欲せし君王に似たり。二四 會計を始めし時、一千萬金の債ある者を彼に曳き
來れるあり。二五 其償ふこと能はざるに因りて、主は彼の身と、其妻子と、其悉くの所有
とを鬻ぎて、償はんことを命ぜり。二六 其僕俯伏して、彼を拜して曰へり、主よ、我を寛う
せよ、我盡く爾に償はん。二七 其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。二八 其僕
出でゝ、一人の同僚の、己に銀一百の債ある者に遇ひて、之を執へ、喉を扼めて曰へり、爾
が負ふ所を我に償へ。二九 其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰へり、我を寛うせよ、我
盡く爾に償はん。三〇 然れども、彼肯はず、乃往きて、其債を償ふに至るまで、之を獄に
下せり。三一 佗の同僚之を見て、甚憂ひ、來りて有りし所を悉く主に告げたり。三二 其時
主は彼を召して曰く、惡しき僕よ、爾我に求めしに因りて、我其債を悉く爾に免せり、
三三 我が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非ずや。三四 主乃怒りて、其
悉くの債を償ふに至るまで、彼を獄吏に付せり。三五 若し爾等各其心より己の兄弟
に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く爾等に行はん。

第十九章

イイスデヤの境に來れり。二多くの民彼に從ひしに、彼は彼處に於て彼等を醫せり。三ファリセイ等就きて、彼を試みて曰へり、人何の故を論ぜず、其妻を出すは宜しきか。四彼答へて曰へり、元始に造りし者は、之を男女に造れりと讀まざりしか。五又曰へり、是の故に人は其父母を離れ、其妻に着きて、二の者一體とならん、六然らば彼等は既に二ならず、一體なり、故に神の繋せし者は、人之を分つ可からず。七彼等曰く、然らばモイセイは爾等の殘忍なるに因りて、爾等に妻を出すを容せり、然れども元始には斯くあらざりき。九我爾等に語ぐ、淫の故に非ずして、其妻を出し、他に娶る者は、姦淫を行ふなり。出されたる婦を娶る者も、姦淫を行ふなり。一〇其門徒彼に謂ふ、若し人の其妻に於ける本分是くの如くば、寧娶らざらん。一一彼曰へり、此の言は、人皆納るにあらず、乃賦へられたる者のみ。一二蓋母の胎より生れつきたる閹者あり、又人より閹せられたる閹者あり、又天國の爲に自ら閹せし閹者あり、之を納るにことを能する者は納るべし。一三時に

幼兒をイエスに攜へ來りて、其手を按せて禱らんことを求むるに、門徒之を戒めたり。一四 然れどもイエス曰へり、幼兒を容して、我に就くを禁ずるな、蓋天國は是くの如き者に屬す。一五 すなはち乃ち彼等に手を按せて、彼處を去れり。一六 視よ、或人彼に就きて曰へり、善なる師よ、我永遠の生命を得んが爲に、何の善き事を爲すべきか。一七 彼は之に謂へり、爾は何ぞ我を善と稱ふるや、獨神よりの外に善なる者なし、爾若し生命に入らんと欲さば、誡を守れ。一八 彼曰く、何の誡ぞ。イエス曰へり、殺すな、姦淫するな、竊むな、僞證するな、一九 爾の父母を敬へ、又爾の隣を愛すること己の如くせよ。二〇 少き者彼に謂ふ、我幼よりみな皆之を守れり、尙足らざる者は何ぞや。二一 イエス之に謂へり、爾完全ならんと欲せば、往きて、爾の所有を售りて、貧者に施せ、然らば、財を天に有たん、且來りて我に從へ。二二 少き者此の言を聞きて、憂ひて去れり、大なる資産を有てる故なり。二三 イエス其門徒に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、富める者は天國に入ること難し。二四 又爾等に語ぐ、駱駝が針の孔を穿るは、富める者が神の國に入るより易し。二五 門徒之を聞きて、甚く驚きて曰へり、然らば誰か能く救はれん。二六

イイスス目を注ぎて、彼等に謂へり、此れ人には能せざる所なし。二七 其時ペトル答へて彼に謂へり、視よ、我等一切を舍てゝ爾に從へり、然らば我等何を得んか。二八 イイスス彼等に謂へり、我誠に爾等に語く、爾等我に從へる者は、復生の時、人の子が其光榮の位に坐するに及びて、亦十二の位に坐して、イズライリの十二支派を審判せん。二九 凡そ我が名の爲に家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は子、或は田疇を舍つる者は、百倍を受け且永遠の生命を嗣がん。三〇 惟多く先なる者は後になり、後なる者は先にならん。

第二十章

一 蓋天國は其葡萄園に工人を僱はんが爲に、朝早く出でたる家主の如し。二 工人と一日に銀一枚を約して、彼等を其葡萄園に遣せり。三 第三時の頃出でゝ、別に市に空しく立てる者を見て、四 之に謂へり、爾等も我が葡萄園に往け、我至當の者を爾等に與へん、彼等往けり。五 又第六時及び第九時の頃に出でゝ、是の如くの行へり。六 第十一時の頃出でゝ、別に空しく立てる者に遇ひて、之に謂ふ、爾等何ぞ終日此に空しく立てるや。七 彼等曰く、我等を傭ふ者なかりし故なり。彼は之に謂ふ、爾等も我が葡萄

園に往け、然らば至當の者を受けん。八暮に及びて、葡萄園の主其家宰に謂ふ、工人を呼びて、其値を給せよ、後なる者より始めて、先なる者に及べ。九第十一時の頃の者來りて各銀一枚を受けたり。一〇先の者來りて意へらく、是より多く受くるならんと、然れども彼等も各銀一枚を受けたり。一一之を受けて、家主を怨みて、一二曰へり、此の後なる者は一時のみ勞きしに、爾は彼等を終日の苦勞と暑さを忍びたる我等と等しくせり。一三彼其一人に答へて曰へり、友よ、我爾に義ならざることを爲さず、爾は我と銀一枚を約せしに非ずや、一四爾の物を取りて往け、我此の後なる者にも、爾と等しきに因りて、爾の目惡しきか。一六是くの如く後なる者は先になり、先なる者は後になるべし、召されたる者は多けれども、選ばれたる者は少し。一七イエスエルサリムに上るの時、途中獨り十二門徒を招きて、之に謂へり、一八視よ、我等エルサリムに上る、人の子は司祭諸長及び學士等に付されん、彼等之を死に定め、一九之を異邦人に付して、嘲め、鞭ち、十字架に釘せしめん、而して彼第三日に復活せん。二〇時にゼベデイの子

の母、其子と偕に彼に就きて、拜して求むる所あり。二一 彼は之に謂へり、爾何を欲するか。曰く、我が此の二人の子が爾の國に於て、一は爾の右に、一は爾の左に坐せんことを許せ。二二 イイスス答へて曰へり、爾等求むる所を知らず、爾等我が飲まんとする爵を飲むことを能するか、我が受くる洗を受くることを能するか。彼等曰く、能す。二三 彼は之に謂ふ、爾等は我が爵を飲み、我が受くる洗を受けん、然れども我が右及び我が左に坐することは、我が與ふべきに非ず、乃我が父より備へられたる者に與へられん。二四 十門徒之を聞きて、二人の兄弟を慍れり。二五 イイスス彼等を召して曰へり、諸民の王侯其民を主り、大人等其上に權を執るは、爾等の知る所なり、二六 惟爾等の中には斯くある可からず、乃爾等の中に大ならんと欲する者は、爾等の役者と爲る可し。二七 爾等の中に首たらんと欲する者は、爾等の僕と爲るべし、二八 蓋人の子の來りしは、人を役はん爲に非ず、乃人に役はれ、且己の生命を與へて、衆くの者の贖を爲さん爲なり。二九 彼等イエリホンを出づる時、衆くの民彼に從へり。三〇 視よ、道の傍に坐せる二人の瞽者、イイススの過ぐるを聞きて、呼びて曰へり、主、ダワイドの子よ、我等を憐め。三一 民彼

等を禁めて、默さしむれども、彼等愈呼びて曰へり、主、ダヲイドの子よ、我等を憐め。三二
イイスス止りて、彼等を呼びて曰へり、我が爾等に何を爲さんことを欲するか。三三彼
等曰く、主よ、我等の目の啓かれんことを。三四イイスス憫みて、彼等の目に觸れたれば、
目直に見るを得て、彼等イイススに從へり。

第二十一章

一イエルサリムに近づき、橄欖山に邇く、ヲイヲギヤに來りし時、イイス
ス二人の門徒を遣して、二之に謂へり、爾等の前なる村に往け、直に繫ぎたる牝驢及
び之と偕に在る小驢に遇はん、之を解きて、我に牽き來れ。三若し爾等を詰る者あら
ば、主之を需むと言へ、然らば直に之を遣さん。四此れ皆成りしは、預言者を以て言はれ
し事に應ふを致す、曰く、五シオンの女に告げて云へ、視よ、爾の王は溫柔にして、牝驢
及び重任を負ふ者の子なる、小驢に乘りて、爾に臨むと。六門徒往きてイイススの命
ぜし如く行ひ、七牝驢及び小驢を牽き來りて、己の衣を其上に置き、彼其上に乘れ
り。八衆くの民は己の衣を途に布き、他の者は樹の枝を伐りて途に布けり。九且前に行
き後に從ふ民は呼びて曰へり、ダヲイドの子に「オサンナ」、主の名に因りて來る者は祝

福せらる、至高きに「ホサンナ」。一〇彼がイエルサリムに入りし時、城擧りて騷ちて曰へり、此れ誰ぞや。一一民曰へり、此れイイスス、ガリレヤのナザレトの預言者なり。一二イイスス神の殿に入りて、其中に賣買する者を悉く逐ひ出し、兌錢する者の牀と鴿を賣る者の椅子を倒して、一三彼等に謂へり、我が家は祈禱の家と稱へらるべしと錄されたるに、爾等之を盜賊の巢窟と爲せり。一四瞽者及び跛者殿に於て彼に就きたれば、彼等を醫せり。一五祭司長と學士等さは其行ひし奇蹟を見、又童子等が殿に呼びて、ダヰドの子にホサンナと云ふを見て憤りて一六彼に謂へり、爾此の云へるを讀まざりしか。イイスス彼等に謂ふ、然り爾等未だ、嬰兒と哺乳兒との口より讃美を備へたりと云へるを讀まざりしか。一七遂に彼等を離れて、城の外に出で、ベタニヤに至りて彼處に宿れり。一八朝に及びて、城に返る時飢ふたれば、一九道の旁に一の無花果樹の在るを見て、之に近づきしに、一も得る所なし、惟葉あるのみ、乃之に謂ふ、今より後永く果を結ばざれと、無花果樹立に枯れたり。二〇門徒之を見て、奇さして曰へり、無花果樹何ぞ立に枯れたるか。二一イイスス答へて彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、爾等若し信あ

りて疑はずば、唯無花果樹に於ける事を行はんのみならず、乃此の山に、移りて海に投
ぜよと、云ふとも、亦成らん。二二 且凡そ祈禱の時信じて求むる所は、悉く之を得ん。二三
彼が殿に來りて教ふる時司祭諸長と民の長老等と彼に就きて曰へり、爾何の權を以
て是を行ふか、誰か爾に此の權を與へたる。二四 イイスス答へて彼等に謂へり、我も亦
一言爾等に問はん、若し之を我に語げば、我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げん。
二五 イオアンの洗禮は奚よりせしか、天よりか、抑人よりか。彼等竊に議して曰へり、若
し天よりと云はゞ、爾等何ぞ彼を信ぜざりしと云はん、二六 若し人よりと云はゞ、我等
民を畏る、蓋皆イオアンを以て預言者とするなり。二七 遂にイイススに答へて曰へり、
知らず。彼も亦之に謂へり、我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げざらん。二八 然れ
ども爾等如何に意ふか、或人に二子の子あり、其第一の者に就きて曰へり、子よ、往きて、
今日我が葡萄園に工作せよ。二九 彼答へて曰へり、我欲せず、然れども後悔いて往けり。
三〇 又第二の者に就きて、是くの如く言ひしに、彼答へて曰へり、主よ、我往く、而して往
かざりき。三一 二人の中孰か父の旨を行ひたる。曰く、第一の者なり。イイスス彼等に謂

ふ、我誠に爾等に語ぐ、稅吏と娼妓とは爾等に先だちて、神の國に往く。三二イヲン義の道を以て爾等に來りしに、爾等彼を信ぜざりき、然れども稅吏と娼妓とは之を信ぜり、爾等は之を見たる後も、仍悔いず、又彼を信ぜず。三三聞等復一の譬を聽け、家主あり、葡萄園を樹ゑ、之に籬を環らし、其中に酒槽を掘り、塔を建て、之を園丁に託して、他方に往けり。三四果期近づきたれば、彼は其果を收めん爲に、諸僕を園丁に遣しゝに、園丁は其僕を執へて、或者を扑ち、或者を殺し、或者を石にて擊てり。三五復他の僕を先より多く遣しゝに、之にも是くの如く行へり。三六遂に己の子を彼等に遣して曰へり、我が子に愧ぢん。三七然れども園丁子を見て、相語りて曰へり、此れ嗣子なり、往きて、彼を殺して、其嗣業を取らん。三八乃彼を執へて、葡萄園の外に曳き出して殺せり。三九然らば葡萄園の主來らん時、何を此の園丁に行はん。四〇彼等曰く、此の惡しき者を情なく滅し、葡萄園を以て他の園丁、即時に及びて彼に果を收めん者に託せん。四一イヱス彼等に謂ふ、爾等は聖書に、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり、此れ主の成す所にして、我等の目に奇異なりさ、云ふを未だ嘗て讀まざりしか。四二

三 故に我爾等に語ぐ、神の國は爾等より奪はれて、其果を結ぶ民に與へられん。四四 且
此の石の上に倒るゝ者は壞られ、此の石の其上に墜つる者は碎かれん。四五 司祭諸長
とヱリセイ等と彼の譬を聞きて、其彼等を指して言ふを悟り、四六 彼を執へんと謀り
たれども、民を懼れたり、蓋民は彼を以て預言者とせり。

第二十二章

一 イイスス又譬を以て彼等に語りて曰へり。二 天國は其子の爲に婚
筵を設けたる君王の如し。三 彼其諸僕を遣して、召されし者を婚筵に招きたれども、彼
等來るを欲せざりき。四 又他の僕を遣して曰へり、召されし者に告げて云へ、視よ、我已
に餐を具へ、我が牛と肥えたる畜と已に宰りて、一切備はれり、婚筵に來れ。五 然れども
彼等は顧みずして、或者は其田に、或者は其貿易に往けり、六 餘の者は彼の諸僕を執へ
辱しめて、之を殺せり。七 王之を聞きて怒り、其軍を遣して、彼の兇人を滅し、彼等の邑を
燬けり。八 時に彼其諸僕に謂ふ、婚筵備はりたれども、召されし者は堪へず、九 故に爾等
通衢に往きて、遇はん者を悉く婚筵に招け。一〇 其僕途に出でゝ、凡そ遇ひたる者、惡し
きと善きとを問はず、之を集めたれば、婚筵に席坐する者滿ちたり。一一 王は席坐する

者を觀んが爲に入りて、彼處に一人の婚禮の服を衣ざる者あるを見て、
よ、爾何ぞ婚禮の服を衣ずして此に入りたるや、彼默然たり。一三其時王は役者に謂へり、
彼の手足を縛りて、彼を取りて、外の幽暗に投ぜよ、彼處に哀哭と切齒とあらん。一四蓋
召されたる者は多けれども、選ばれたる者は少し。一五其時ファリセイ等往きて、如何に
して彼を其言に因りて罟せんと謀れり。一六遂に己の門徒をイロデの
遣して曰く、師よ、我等は爾が眞なる者にして、眞に神の道を教へ、何人
知る、蓋爾は貌を以て人を取らず。一七故に我等に語げよ、爾如何に憶ふか、稅を
に納むるは宜しや否や。一八イイスス其惡意を知りて曰へり、僞善者
る、一九稅金を我に示せ。彼等銀一枚を擡へ來れるに、二〇彼曰く、斯
か。二一曰く、ケサリの。是に於て彼等に謂ふ、然らばケサリの物を
を神に納めよ。二二彼等之を聞きて奇と爲し、彼を離れて去れり。二三是の日サドゥケイ
等、卽ち復活なしと言ふ者、彼に就きて、問ひて二四曰く、師よ、モイセイ云へり、人子なく
して死せば、其兄弟其妻を娶りて、兄弟の嗣を興すべしと。二五我等の中に兄弟七人あ

りしが、第一の者娶りて死し、子なきが故に其妻を弟に遺せり。二六 其のごとくして第二、其三、其七に至るまで皆然り。二七 其後妻も亦死せり。二八 然らば復活には、此の婦は七人の中誰の妻たるべきや、皆之を娶れり。二九 イイスス彼等に答へて曰へり、爾等は聖書をも神の能をも知らずして迷へり。三〇 蓋復活には娶らず嫁がず、乃神の使等の如く天に在るなり。三一 死者の復活に付きては、神が爾等に語りて、三二 我はアブラハムの神、イサアクの神、ヤコブの神なりと言ひしことを爾等未だ讀まざりしか、神は死者の神に非ず、乃生者の神なり。三三 民聞きて其訓を奇とせり。三四 ファリセイ等はイイススが撒都該人を黙せしめたりと聞きて、相集れり。三五 其中なる一人の律法師彼を試みて、三六 問ひて曰へり、師よ、律法の中に何の誡が大なるか。三七 イイスス之に謂へり、爾心を盡し、靈を盡し、意を盡して、主爾の神を愛せよ、三八 此れ誡の第一にして大なる者なり。三九 第二は是に同じき者、即 爾の鄰を愛すること己の如くせよ。四〇 斯の二の誡に二曰へり、爾等ハリストスの事を如何に意ふか、彼は誰の子なるか。曰く、ダヰドの子なる

り。四三 彼曰く、然らば如何ぞダヰドは聖神に由りて、彼を主と稱ふる、云く、
主に謂へり、爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れと。
ダヰド彼を主と稱ふれば、如何ぞ彼は其子たるや。四六 一人も之に言を答ふる能はず、是
の日より敢て復彼に問ふ者なかりき。

第二十三章

一 當時イイスス民及び其門徒に語りて曰へり。二 モイセの位に學
士及びパリセイ等は坐せり。三 故に彼等が凡そ爾等に守らんことを命ずる者は、守り
て之を行へ、然れども彼等の行に效ふ勿れ、蓋彼等は言ひて行はず。四 彼等は重く且負
ひ難き任を縛りて、人の肩に負はすれども、己は一の指を以てすら、之を動かすを欲せ
ず。五 凡そ彼等が行ふ所は、人に見られん爲に行ふ、其佩經を闊くし、其衣の裾を大にす。
六 又筵には上席、會堂には首座、七 街衢には問安、人々より師と稱へらるゝを
を好む。八 然れども爾等は兄弟なり、爾等は皆兄弟なり。九 亦地に在る者を父と稱ふる勿れ、蓋爾等の父は一人、天に在
す者なり。一〇 亦導師と稱へらるゝ勿れ、蓋爾等の導師は一人、卽ハリストスなり。一一

爾等の中に大なる者は爾等の役者となるべし。一二蓋自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。一三禍なる哉爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は天國を人の前に閉ぢて、自ら入らず、入らんと欲する者にも入るを許さず。一四禍なる哉爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は寡婦の家を呑み、併りて長き祈を爲す、是に由りて更に重き定罪を受けん。一五禍なる哉爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は一人をも教に進ましめん爲に、海陸を巡り、既に進めば、彼を爾等に倍したる地獄の子となす。一六禍なる哉爾等、盲なる嚮導者よ、爾等は云ふ、人若し殿を指して誓はゞ、事なし、其殿の金を指して誓はゞ、執か大なる、金か、一七愚にして盲なる者よ、孰か大なる、金か、金を聖ならしむる殿か。一八又云ふ、人若し祭壇を指して誓はゞ、事なし、其上の禮物を指して誓はゞ、債ふべし。一九愚にして盲なる者よ、孰か大なる、禮物か、禮物を聖ならしむる祭壇か。二〇故に祭壇を指して誓ふ者は、祭壇及び其上に在る者を指して誓ふなり、二一又殿を指して誓ふ者は、殿及び其中に居る者を指して誓ふなり、二二又天を指して誓ふ者は、神の寶座及び其上に坐する者を指

して醇ふなり。二三禍なる哉爾等、僞善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は薄荷、茴香、馬芹の十分の一を納めて、律法の尤重き義と仁と信とを遺てたり、此れ行ふ可きなり、彼も亦遺つ可からず。二四瞽なる嚮導者よ、爾等は蚊を濾して、駱駝を呑む者なり。二五禍なる哉爾等、僞善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は杯と皿との外を潔むれども、其内には貪婪と不義とを充てり。二六瞽なるファリセイよ、先つ杯と皿との内を潔めよ、其外も潔くならん爲なり。二七禍なる哉爾等、僞善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、内は骸骨と諸の汚穢とを充てり。二八是くの如く爾等も外は人人に義なる者と見ゆれども、内は僞善と不法とを充てり。二九禍なる哉爾等、僞善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は預言者の墓を飾り、三〇且云ふ、我等若し我が先祖の日に在りしならば、彼等が預言者の血を流すに與せざりしならんと。三一是くの如く爾等は自ら已が預言者を殺しゝ者の子たるを證す。三二爾等先祖の量を充たせ。三三蛇蝮の類よ、爾等安ぞ地獄の定罪を逃れん。三四故に觀よ、我爾等に預言者と智者と學士とを遣す、而して爾等は其中或者

を殺し、又は十字架に釘し、或者を爾等の會堂に鞭ち、又は邑より邑に逐はん、三五凡そ地上に流されし義人の血、義なるアベルの血より、バラキヤの子ザハリヤの血に至るまで、皆爾等に歸せん爲なり。三六我誠に爾等に語ぐ、此等皆斯の代に歸せん。三七イエルサリムよ、イエルサリムよ、預言者を殺し、爾に遣されし者を石にて擊つ者よ、我幾次か母鷄が其雛を翼の下に集むる如く、爾の諸子を集めんと欲したれども、爾等は欲せざりき。三八觀よ、爾等の家は虚しくして爾等に遺さるるまで、爾等我を見ざらん。三九蓋我爾等に語ぐ、今より後、主の名に因りて來る者は祝福せらるると、云ふに至

第二十四章

一イエスス出でゝ、殿より往けるに、其門徒彼に就きて、殿の造構を觀さんとせり。二イエスス彼等に謂へり、爾等盡く此等の者を見るか、我誠に爾等に語ぐ、此には一の石も他の石の上に遺らずして、皆壞たれん。三彼がエレオン山に坐せる時、門徒私に彼に就きて曰へり、請ふ、我等に告げよ、何の時に此の事あらん、又爾の降臨と世の終末との兆は如何なるか。四イエスス彼等に答へて曰へり、愼みて人に惑はさるゝ勿れ。

五蓋多くの者は我が名を冒して來り、我はハリストスなりと云ひて、多くの者を惑は
さん。六又爾等戰と戰の風聲とを聞かん、愼みて懼るゝ勿れ、蓋此れ皆有るべし、惟此
れ尙末期には非ず。七蓋民は民を攻め、國は國を攻めん、饑饉、疫病、地震處處に在らん。
八此れ皆苦難の始なり。九其時人爾等を艱苦に付し、爾等を殺し、爾等我が名の爲に萬
民に憎まれん。一〇其時多くの者は躓き、相付し、相憎まん。一一又多くの僞預言者起り
て、多くの者を惑はさん。一二不法の增すに因りて、多くの者の愛は冷にならん。一三惟
終に至るまで忍ぶ者は救はれん。一四又此の天國の福音は徧く天下に傳へられん、萬
民に證を爲さん爲なり、然る後末期至らん。一五故に爾等預言者ダニイルを以て言は
れたる荒廢の憎むべき物の聖處に立つを見ば、(讀む者悟るべし、)一六其時イウデヤ
に在る者は山に遁るべし、一七屋の上に在る者は、其家より物を取らん爲に、下るべか
らず、一八田に在る者は、其衣を取らん爲に、歸るべからず。一九當日には妊める者と乳
を哺ます者と禍なる哉。二〇爾等の遁ぐることの冬或は安息日に在らざらん爲に
祈れ。二一蓋其時大なる患難あらん、世界の始より今に至るまで、未だ此くの如きは

あらざりき、後も亦あらざらん。二二 若し其日減ぜられずば、凡の肉身の救はるゝ者な
からん、然れども選ばれたる者の爲に其日減ぜられん。二三 其時若し人爾等に告げて、
視よ、ハリストス此に在り、或は彼に在りと云はゞ、信ずる勿れ。二四 蓋僞ハリスト及び
僞預言者起りて、大なる奇徴と奇蹟とを施し、若し能すべくば、選ばれたる者をも惑は
すに至らん。二五 視よ、我預め爾等に言へり。二六 故に若し爾等に告げて、視よ、彼は野
に在りと云ふ者あらば、出づる勿れ、視よ、彼は密室に在りと云ふ者あらば、信ずる勿れ。
二七 蓋電の東より發して、西にまで閃くが如く、人の子の來るも亦是くの如くなら
ん。二八 蓋屍の在る所には、鷲集らん。二九 其日の患難の後、忽日は晦み、月は其光を
施さず、星は天より隕ち、天勢は震ひ動かん。三〇 其時人の子の記號は天に現れん、其時
地上の諸族は哭き哀み、人の子が、權能と大なる光榮とを以て、天の雲に乘りて來るを
見ん。三一 彼は其天使等を大なる聲の箛と與に遣し、彼等は其選ばれたる者を四風よ
り集めて、天の此の極より彼の極に至らん。三二 無花果樹の譬を學べ、其枝已に柔にし
て葉萠ぜば、爾等夏の近きを知る。三三 是くの如く爾等凡そ此等の事を見ば、時の近く

して、門に在るを知れ。三四 我誠に爾等に語ぐ、此の代未だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。三五 天地は廢せん、然れども我が言は廢せざらん。三六 其日其時は、之を知る者なし、天の使等も知らず、惟我が父のみ之を知る。三七 然れども ノイの日の如く、人の子の來るも亦是くの如くならん。三八 蓋洪水の先の時、ノイの方舟に入る日まで、人人食ひ飲み、娶り嫁ぎて、三九 洪水の來りて、盡く彼等を滅すに至るまで、知らざりし如く、人の子の來るも亦是くの如くならん。四〇 其時二人田に在らんに、一人は取られ、一人は遺さる。四一 二の婦麿を旋かんに、一人は取られ、一人は遺さる。四二 故に儆醒せよ、爾等の主の何の時に來るを知らざればなり。四三 若し家主盜賊の何の更に來るを知らば、儆醒して、其家を穿つを許さざらん、是れ爾等の知る所なり。四四 是の故に爾等も已を備へよ、蓋爾等が意はざる時に人の子來らん。四五 孰か忠にして智なる僕、其主が諸僕の上に立てゝ、時に隨ひて彼等に糧を與へしむる者たる。四六 主の來る時、彼が斯く行ふを見ば、其僕福なり。四七 我誠に爾等に語ぐ、彼を立てゝ其一切の所有を督らしめん。四八 然れども若し其惡しき僕、心の中に我が主の來るは遲からんと曰ひて、四九

其同僚を打ち、酒徒と偕に食飲せば、五〇 乃ち俟たざる日、知らざる時に、其僕の主來りて、五一 彼を斷ち、彼を偽善者と同じき分に處せん、彼處に哀哭と切齒とあらん。

第二十五章

一 厥時天國は、燈を執りて、己と偕に油を取らざりき。四智き者は其燈と偕に其器に油を取れり。五新娶者の遲るるに依りて、皆假寐して眠れり。六中夜呼ぶ聲ありて曰く、視よ、新娶者來る、出でゝ彼を迎へよ。七其時燈火ともしよりて、其燈を整へたり。八愚なる者は智き者に謂へり、爾等の油を分けてよ、我等の燈は熄ゆ。九智き者答へて曰く、恐らくは我等と爾等とに足らざらん、寧ろ賣る者に往きて、己の爲に買へ。一〇 彼等往きて買ふ時、新娶者來れり、備を爲したる者は偕に婚筵に入りて、門閉されたり。一一 後其餘の處女も來りて曰ふ、主よ、主よ、我等に啓け。一二 彼答へて曰へり、我誠に爾等に語ぐ、我爾等を識らずと。一三 故に敬醒せよ、蓋爾等は何の日、何の時に、人の子の來らんことを知らず。一四 蓋彼は、他の地に往かんとして、其僕を召し、彼等に其所有を託したる人の如し。一五 一人には銀

五千、一人には二千、一人には一千、各其才能に應じて、之を與へて、直に起ち行けり。一六 五千を受けし者は往きて、之を用ゐて、他に五千を獲たり。一七 二千を受けし者も亦他に二千を獲たり。一八 惟一千を受けし者は往きて、之を地に埋めて、其主の銀を藏せり。一九 久しくして後、此の諸僕の主歸りて、彼等と會計せり。二〇 五千を受けし者は他に五千を擡へて、就きて曰く、主よ、爾五千を我に託せり、視よ、我之を以て他に五千を獲たり。二一 其主彼に謂へり、善い哉、善にして忠なる僕よ、爾は寡き者に於て忠なりき、我爾に多くの者を督らしめん、爾が主の歡樂に入れ。二二 二千を受けし者も亦就きて曰へり、主よ、爾二千を我に託せり、視よ、我之を以て他に二千を獲たり。二三 其主彼に謂へり、善い哉、善にして忠なる僕よ、爾は寡き者に於て忠なりき、我爾に多くの者を督らしめん、爾が主の歡樂に入れ。二四 一千を受けし者も亦就きて曰へり、主よ、我爾が嚴酷なる人にして、播かざりし處に穫り、散らさざりし處に聚むるを知れり、二五 是を以て我懼れて、往きて、爾の銀を地に藏せり、視よ、爾の物は爾之を有てり。二六 主彼に答へて曰へり、惡しくして惰れる僕よ、爾は我が播かざりし處に穫り、散らさざりし處に聚むるを知

れり、二七故に我が銀を貿易者に託すべかりしなり、然らば我來りて、本銀と利とを受けしならん。二八故に彼より一千を取りて、十千を有てる者に與へよ。二九蓋凡そ有てる者には與へて、餘あらしめ、有たざる者よりは其有てる物も奪はれん。三〇無益な僕を外の闇暗に投ぜよ、彼處に哀哭と切齒さあらん。三一人の子は、其光榮を以て、諸の聖なる天使と偕に來らん時、其光榮の寶座に坐し、三二萬民彼の前に集り、而して牧者の綿羊を山羊より別つが如く、彼等を相別ちて、三三綿羊を其右に、山羊を其左に置かん。三四其時王は右に在る者に謂はん、我が父に祝福せられし者よ、來りて、創世以來爾等の爲に備へられたる國を嗣げ。三五蓋我が飢ゑし時、爾等我に食はせ、我が渴きし時、我に飲ませ、三六我が裸なりし時、我を宿らせ、三七時に義人等彼に答へて曰はん、主よ、我等何時爾の飢うるを見て、食はせ、或は渴くを見て、飲ませしや。三八何時爾の旅するを見て、宿らせ、或は裸なるを見て、衣せしや。三九何時爾の病み、或は獄に在るを見て、爾に來りしや。四〇王彼等に答へ

て曰はん、我誠に爾等に語ぐ、爾等が之を我に行ひしなり。四一其時又左に在る者に謂はん、詛はれし者よ、我を離れて、惡魔及び其使等の爲に備へられたる永遠の火に往け。四二蓋我が飢ゑし時、爾等我に食はせず、我が渇きし時、我に飲ませず、四三我が旅ぜし時、我を宿らせず、我が裸なりし時、我に衣せず、我が病み、又は獄に在りし時、我を顧みざりき。四四時に彼等も答へて曰はん、主よ、我等何時爾の飢ゑ、或は渇き、或は旅し、或は裸なる、或は病み、或は獄に在るを見て、爾に事へざりしが。四五其時彼等に答へて曰はん、我誠に爾等に語ぐ、爾等が之を此の至小き者の一人に行はざりしは、即我に行はざりしなりと。四六此等の者は永遠の苦しみに往き、義人等は永遠の生命に往かん。

第二十六章

一イイスス悉く此等の言を竟へて、其門徒に謂へり、二爾等知る、二日の後は逾越節なり、人の子は十字架に釘ぜらるゝ爲に付されん。三其時司祭諸長老等と民の長老等とは、カイアフと名づくる司祭長の中庭に集り、四譎計を用ゐてイイススを執へて、之を殺さんと謀れり。五惟曰へり、節期に於てすべからず、恐らくは

民の中に亂は起らん。六イイスス|ベタニヤに於て、癩者シモンの家に在りし時、七一の婦|價貴き香膏を盛れる玉の盒を擎へ、彼の席坐に就きて、其首に沃げり。八門徒之を見て憤りて曰へり、此の靡費を爲すは何の爲ぞ、九蓋此の香膏は多くの價に賣りて、貧しき者に施すを得しならん。一〇イイスス之を知りて、彼等に謂へり、何ぞ婦を擾す、彼は我が爲に善き功を爲せり、一一蓋貧しき者は常に爾等と偕にすれども、我は常に爾等と偕にするにあらず。一二彼は此の香膏を我が體に沃ぎて、我を葬に備へたり。一三我誠に爾等に語ぐ、全世界の中、凡そ此の福音の傳へられん處には、此の婦の爲しゝ事も述べられて其記念さるゝ爲らん。一四其時十二の一、イウダ「イスカリオト」と名づくる者、司祭諸長に往きて、一五曰へり、爾等我に幾何を與へんと欲するか、我彼を爾等に付さん、彼等は之に銀三十を約せり。一六其時より彼を付さん爲に好き機を覗へり。一七除酵節の首の日、門徒イイススに就きて曰へり、我等が何處に爾の爲に逾越節筵を備へんことを欲するか。一八彼曰へり城に往き、某に至りて曰へ、師言ふ、我が時近し、我門徒と偕に爾の家に逾越節筵を行はんと。一九門徒イイススの命ぜし如く行ひて、逾越節筵を

備へたり。二〇暮に及びて、彼十二門徒と偕に席坐せり。二一食する時、彼曰へり、我誠に爾等に語ん、つ爾等の中の一人は我を賣らん。二二彼等大に憂ひて、各彼に謂へり、主よ、是れ我に非ずや。二三答へて曰へり、我と偕に手を盂に著けし者は、此の人我を賣らん。二四人の子は逝く、之を指して錄されしが如し、惟人の子を賣る者は禍なるかな、斯の人生れざりしならば、彼の爲に善かりしならん。二五彼を賣るイウダも問ひて曰へり、夫子、是れ我に非ずや。曰く、爾言へり。二六彼等が食する時、イイスス餅を取り、祝福して、之を擘き、門徒に與へて曰へり、取りて食へ、是れ我の體なり。二七又爵を取り、感謝して、彼等に與へて曰へり、皆之を飲め、二八蓋是れ我の新約の血、衆くの人の爲に流さるゝ者、罪の赦を得るを致す。二九我爾等に語ぐ、今より後、我復此の葡萄の實より飲まずして、我が父の國に於て、爾等と偕に、新しき者を飲む日に至らん。三〇既に詠ひて、往けり。三一其時イイスス彼等に謂ふ、爾等皆今夜我の爲に躓かん、蓋錄せる者を擊たん、而して群の羊は散らんと。三二我が復活の後、我爾等に先だちてガリレヤに往かん。三三ペトル彼に答へて曰へり、皆

四 イイスス彼に謂へり、我誠に爾に語ぐ、今夜鷄の鳴かざる先に、爾三次我を諱まん。三五 ペトル彼に謂ふ、我爾と偕に死すとも、爾を諱まざらん、門徒皆亦是くの如く言へり。三六 其時イイスス彼等と偕に、ゲフシマニヤと名づくる處に來りて、門徒に謂ふ、爾等此に坐して、我が彼處に往きて祈るを待て。三七 乃ペトル及びゼベダイの二人の子を攜へて、憂ひて悲みを催せり。三八 時にイイスス彼等に謂ふ、我が靈憂ひて死に近づけり、爾等此に在りて、我と偕に儆醒せよ。三九 乃少しく離れて、俯伏して、祈りて曰へり、我が父よ、若し能すべくば、願はくは此の爵は我を過ぎん、然れざら我が欲する如くならず、爾の欲する如くなるべし。四〇 遂に門徒に來りて、其寢ぬるを見て、ペトルに謂ふ、爾等斯く一時も我と偕に儆醒する能ばざりしか。四一 儆醒せよ、祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり、神は勇めども、肉體は弱し。四二 再往きて、復祈りて曰へり、我が父よ、若し此の爵、我之を飲まずして過ぐる能ばずば、爾の旨成るべし。四三 來りて、復彼等の寢ぬるを見る、其目倦みたればなり。四四 彼等を離れて、復往き、同じき言を言ひて、三次祈れり。四五 其時門徒に來りて、之に謂ふ、爾等尚寢れて休むか、視よ、時は邇づけり、

人の子は罪人の手に付さる。四六 起きよ、行かん、視よ、我を付す者は近づけり。四七 彼が尚言ふ時、視よ、十二の一なるイウダは來り、劍と棒とを持てる多くの民、司祭諸長及び民の長老等より遣されし者は、彼と偕にせり。四八 イイススを付す者彼等に號を與へて曰へり、我が接吻せん者は即斯の人なり、彼を執へよと。四九 直にイイススに就きて曰へり、夫子慶べよ、乃彼に接吻せり。五〇 イイスス之に謂へり、友よ、胡爲れぞ來れる。其時彼等就きて、手をイイススに措きて、之を執へたり。五一 視よ、イイススと偕に在りし一人、手を伸べ、其劍を拔きて、司祭長の僕を擊ちて、其耳を削げり。五二 イイスス彼に謂ふ、爾の劍を其處に歸せ、蓋凡そ劍を執る者は劍にて亡びん。五三 或は爾は、我今我が父に求めて、彼をして我に十二軍餘の天使を遣さしむること能はずと意ふか。五四 然らば聖書に、斯くあるべしと、言へること如何ぞ應はん。五五 其時イイスス民に謂へり、爾等は盜賊に向ふ如く、劍と棒とを持ちて、我を捕へん爲に出でたり、我日日殿の中に誨へて、爾等と偕に坐せしに、爾等我を執へざりき。五六 此れ皆成りしは、諸預言者の書に應ふを致す。其時門徒皆彼を遺てゝ奔れり。五七 イイススを執へたる者彼を曳きて、司

祭長カイアファの許に至れり、五九彼に隨ひて、司祭長、長老等、及び全公會は、イエスを死に致さん爲に、彼に對す僞證を求めたれども、六〇得ざりき、多くの妄證者就きたれども、遂に二の妄證者就きて曰く、此人言へり、我は神の殿を毀ち、三日にして之を建つるを能すと。六一司祭長起ちて、彼に謂へり、汝何も答ふる所なきか、彼等が爾に對して證する所如何。六二イエス默然たり。司祭長彼に謂へり、我活ける神を以て爾に嚴かに命ず、我等に告げよ、爾は神の子キリストなるか。六四イエス之に謂ふ、爾言へり、且我爾等に語ぐ、此より後、爾等は人の子が大能の右に坐し、天の雲に乘りて來るを見ん。六五其時司祭長己の衣を裂きて曰へり、彼は神を瀆せり、何ぞ復證者を求めん、視よ、今爾等は其神を瀆すを聞けり。六六爾等如何に意ふか。彼等答へて曰へり、死に當る。六七是に於て彼等其面に唾し、彼を擊ち、或者は其頰を批ちて曰へり、六八キリストよ、我等に預言せよ、爾を擊ちし者は誰ぞ。六九時にペトル外に中庭に坐せるに、一人の婢彼に就きて曰く、爾も

がリレヤのイイススと偕に在りき。七〇然れども彼は衆の前に諱みて曰ふ所を識らず。七一彼が門を出つる時、他の婢彼を見て、彼處に在る者に謂ふ、此の人もイイススナゾレイと偕に在りき。七二彼復諱みて、誓ひて曰へり、我其人を識らずと。七三少頃ありて、彼處に立てる者近づきて、ペトルに謂へり、誠に爾も其黨の一人なり、蓋爾の言語も爾を顯す。七四其時彼は詛ひ且誓ひ起して、外に出でゝ、痛く哭けり。

七五ペトルはイイススの言を憶ひし言を憶ひ出でゝ、痛く哭けり。

第二十七章

一平旦に及びて、司祭諸長老等さ民の長老等さ皆相會して、イイススを議せり、之を死に致さんが爲なり。二乃之を縛りて、曳きて、方伯ポンティオ、ピラトに解せり。三時に彼を賣りしユダは其定罰せられたるを見て、悔いて、銀三十を司祭諸長老等さに返して四曰へり、我辜なき血を賣りて罪を犯せり。彼等曰へり、我等何ぞ與らん、自ら願みよ。五彼銀を殿に擲ちて出でて、往きて自ら縊れたり。六司祭諸長老等銀を取りて曰へり、之を殿の庫に納るゝは宜しからず、是れ血の價なればなり。七乃相議し

て、此を以て陶人の田を買ひ、賓旅を瘞る地と爲せり。八 故に其田は、今日に至るまで、血
の田と稱へらる。九 是に於て預言者イエレミヤを以て言はれしこと應へり、曰く、彼等
銀三十乃値を附けられし者、即イズライリの諸子が値を附けし者の價を取りて、
一〇 之を陶人の田の爲に與へたり、主の我に示しゝが如しと。一一 イイスス方伯の前
に立ちしに、方伯彼に問ひて曰へり、爾はイウデヤ人の王なるか。イイスス之に謂へり、
爾言ふ。一二 司祭諸長と長老等と彼を訟へしに、一も答へざりき。一三 時にピラト彼に
謂ふ、爾に對して證すること斯く多きを爾聞かざるか。一四 彼其一言にも答へざりき、
方伯甚奇むに至れり。一五 節斯には、方伯が民に一人の囚、其欲する所の者を釋す
例ありき。一六 其時ワラウワと名づくる著しき囚ありしが、一七 民の集りし時、ピラト
之に謂へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲する、ワラウワか、抑ハリス
トスと稱ふるイイススか。一八 蓋娼嫉に因りて彼を解しゝを知れり。一九 方伯が審判
座に坐せる時、其妻人を遣して、之に謂べり、爾此の義人に何事をも爲す勿れ、蓋我今日
夢の中に彼の爲に多く苦めりと。二〇 然るに司祭諸長と長老等とは民に唆めて、ワラ

ウワを釋し、イイスを滅さんことを乞はしめたり。二一 方伯彼等に問ひて曰へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲するや。彼等曰へり、ワラウワを。二二 ピラト曰へり、然らば我はハリストスと稱ふるイイスに何を爲さんか。皆彼に謂ふ、十字架に釘けよ。二三 ピラト曰へり、彼は何の惡を行ひしか。然れども彼等愈〻號びて曰へり、せらるべし。二四 ピラトは何事も益なく、惟亂の滋起るを見て、水を取り、民の前に手を盥ひて曰へり、我此の義人の血に對して罪なし、爾等自ら顧みよ。二五 民皆對へて曰へり、其血は我等及び我等の子孫に歸すべし。二六 其時ワラウワを彼等に釋し、イイスを鞭ちて、十字架に釘せん爲に付せり。二七 時に方伯の兵卒イイスを曳きて、公廨に入れ、全營を彼の許に集め、二八 其衣を褫ぎて、絳き袍を衣せ、二九 棘の冕を編みて、其首に冠らせ、葦を其右の手に持たせ、彼の前に跪きて、彼に戲れて曰へり、イウデヤ人の王、慶べよ。三〇 又彼に唾し、葦を取りて、其首を擊てり。三一 既に戲れ畢りて、其袍を褫ぎ、故の衣を衣せ、十字架に釘せん爲に彼を曳き往けり。三二 出づる時、キリネヤの人シモンと名づくる者に遇ひ、之を强ひて、其十字架を負はしめたり。三三 ゴルゴ

ヲと云ふ處、譯すれば、髑髏の處に來りて、三四 醋に膽を和へて、彼に飲ましめたるに、之
を嘗めて、飲むことを欲せざりき。三五 彼を十字架に釘せし者は圖を取りて、其衣を分
ち、三六 而して坐して、彼處に彼を守れり。三七 又其罪を記せる標を其首の上に置けり、
曰く、是れ乃イイスス、イウデヤ人の王と。三八 其時二人の盜賊は彼と偕に十字架に釘
せられたり、一人は其右、一人は其左なり。三九 過ぐる者彼を誚り、首を搖かして曰へり、
四〇 殿を毀ちて、三日に之を建つる者よ、己を救へ、若し爾神の子ならば、十字架より下
れ。四一 同じく司祭諸長も、學士、長老、ヲリセイ等と偕に嘲りて曰へり、四二 他人を救ひ
て、己を救ふ能はず、若し彼イズライリの王ならば、今十字架より下るべし、然らば我等
彼を信ぜん。四三 神を恃めり、若し神彼を悅ばゞ、今彼を拯ふべし、蓋彼は、我神の子なり
と云へり。四四 彼と偕に十字架に釘せられたる盜賊も亦彼を詬れり。四五 第六時より
晦冥は全地を蔽ひて、第九時に至れり。四六 第九時の頃、イイスス大聲に呼びて曰へり、
「イリ、イリ、ラマ、サワヲニ」、卽我が神よ、我が神よ、何ぞ我を遺てたる。四七 彼處に立てる
者の中、或人之を聞きて曰へり、彼はイリヤを呼ぶなり。四八 其中の一人直に走り、海絨

を取りて、醋を盈たし、葦に束ねて、彼に飲ましめたり。四九 餘の者曰へり、姑く舍け、イリヤ來りて、彼を救ふや否やを觀ん。五〇 イイススス復大聲に呼びて、氣絶えたり。五一 視よ、殿の幔は、上より下に至るまで裂けて、二となり、地震ひ、磐裂け、五二 墓啓けて、寢ねたる聖人の身は多く復活し、五三 彼の復活の後、墓より出でゝ、聖なる城に入り、多くの者に現れたり。五四 百夫長及び之と偕にイイススを守れる者は、地震と有りし事とを見て、甚しく懼れて曰へり、此れ誠に神の子なり。五五 彼處に亦多くの婦ありて、遙に望めり、是れガリレヤよりイイススに從ひて、彼に事へたる者なり。五六 其中にマリヤ「マグダリナ」、イアコフ及びイオシヤの母マリヤ、又ゼヱデイの子の母ありき。五七 日暮るゝに及びて、アリマヱヤの富める人、名はイオシフ、自も亦イイススに學びし者は來れり。五八 彼ピラトに就きて、イイススの屍を求めたれば、ピラト屍を與へんことを命ぜり。五九 イオシフ屍を取りて、之を潔き布に裹み、六〇 之を磐に鑿ちたる己の新なる墓に置き、大なる石を墓の門に轉して去れり。六一 マリヤ「マグダリナ」と他のマリヤと彼處に在りて、墓に對ひて坐せり。六二 明日即備節日の翌日司祭諸長とアリセイ

等とピラトの許に集りて謂へり、六三主よ、我等憶ひ起すに、彼の惑はす者尚生ける時、
我三日の後に復活せんと言へり。六四是の故に命じて、三日に至るまで、墓を固めしめ
よ、恐らくは其門徒夜來りて、彼を竊み、民に向ひて、彼は死より復活せりと言はん、然ら
ば後の惑は先より更に甚しからん。六五ピラト彼等に謂へり、爾等に番兵あり、往きて、
爾等の意に任せて、之を固めよ。六六彼等往きて、石に封印し、番兵をして墓を固めしめ
たり。

第二十八章

一安息日過ぎて、七日の首の日の黎明に、マリヤ「マグダリナ」と他のマ
リヤと墓を觀ん爲に來れり。二視よ、地大に震へり、蓋主の使天より降り、就きて、墓の門
より石を移して、其上に坐せり。三其容は電の如く、其衣は白きこと雪の如し。四守る
者は彼を懼れ、戰きて、死せし者の如くなれり。五天使婦に對ひて曰へり、爾等懼るる勿
れ、我爾等が十字架に釘せられしイイススを尋ぬるを知る。六彼は此に在らず、蓋其言
ひし如く、復活せり、來りて、主の置かれし處を觀よ、七且速に往きて、其門徒に告げて
曰へ、彼死より復活せり、爾等に先だちてガリレヤに往く、爾等彼處に於て彼を見んと、

視よ、我爾等に言へり。八婦急ぎて墓を離れ、懼れ且大に喜びて、其門徒に報ぜん爲に往けり。九彼等が門徒に報ぜん爲に往ける時、視よ、イイスス之に遇ひて曰へり、慶べよ、彼等就きて、其足を抱きて、彼を拜せり。一〇イイスス之に謂ふ、懼るゝ勿れ、往きて我が兄弟に報じて、ガリレヤに往かしめよ、彼處に於て我を見ん。一一婦の往く時、視よ、番兵の中の或者城に入りて、有りし事を以て、悉く司祭諸長に告げたり。一二彼等は長老等と與に集り相議して、多くの銀を兵卒に給へて一三曰へり、爾等云へ、我等が寢れたる時、其門徒夜來りて、彼を竊めりと、一四若し此の事方伯に聞えば、我等彼に勸めて爾等に慮なからしめん。一五彼等銀を取りて、教へられし如く行ひたり、是に於て斯の言はイウデヤ人の中に傳はりて、今日に至れり。一六十一の門徒がリレヤに往きてイイススの彼等に命ぜし山に至り、一七彼を見て拜せり、然れども猶疑へる者ありき。一八イイスス就きて、彼等に語げて曰へり、天に在り地に在る一切の權は我に與へられたり、一九故に爾等往きて、萬民に教を傳へて、彼等を教へて、我が一切爾等に命ぜしことを守らしめよ、視よ、我恒に爾

等(ら)と偕(とも)にして世(よ)の終末(をはり)まで在(あ)るなり」

マルコに因る聖福音

第一章

一 神の子イエスキリストの福音の始なり。二 諸預言者に錄されしが如し、云く、視よ、我我が使を爾の面前に遣し、爾に先だちて、爾の道を備へしめん。三 野に呼ぶ者の聲ありて云よ、主の道を備へ、其徑を直くせよと。四 イオアン野に在りて洗を授け、罪の赦の爲に悔改の洗禮を傳へたり。五 イウデヤの全地及びイエルサリムの人人出でゝ、彼に就き、己の罪を認めて、皆イオルダン河に於て彼より洗を受けたり。六 イアンは駱駝の毛衣を衣、腰に皮の帶を束れ、蝗蟲と野蜜とを食へり。七 彼宣べて曰へり、我の後に更に我より強き者は來る、我は屈みて、其履の帶を解くにも堪へず。八 我は水を以て爾等に洗を授けたり、彼は聖神を以て爾等に洗を授けん。九 彼の日に當りイエスガリレヤのナザレトより來りて、イオルダンに於てイオアンより洗を受けたり。一〇 直に水より上る時、天開け、聖神鴿の如く其上に降るを見たり。一一 又天より聲ありて云へり、爾は我の至愛の子、我が喜べる者なり。一二 聖神直に彼を引きて、野に遊か

しむ。一三 彼は彼の野に在ること四十日、サタナに試みられ、野獸と共に居り、天使等彼
に奉事せり。一四 イオアンの囚はれし後、イイススガリレヤに來り、神の國の福音を傳
へて 一五 曰へり、期は滿ち、神の國は邇づけり、悔改して、福音を信ぜよ。一六 ガリレヤの
海邊を行く時、彼はシモン及び其兄弟アンドレイが、網を海に施せるを見たり、蓋彼等
は漁者なりき。一七 イイスス彼等に謂へり、我に從へ、我爾等を人を漁する者たらしめ
ん。一八 彼等直に其網を遺して、之に從へり。一九 此より少しく進みて、ゼヱデイの子イ
アコフと其兄弟イオアンと、亦舟に在りて、網を補へるを見て、二〇 直に彼等を召した
り、彼等も父ゼヱデイを傭人と偕に舟に遺して、之に從へり。二一 カペルナウムに來れ
る後、安息日に遇ひて、彼會堂に入りて、教を宣べたり。二二 人人其訓を奇とせり、蓋彼等
を教ふること權ある者の如し、學士等の如きに非ず。二三 彼等の會堂に汚鬼を患ふる
人あり、呼びて 二四 曰へり、唉ナザレトのイイススよ、我等と爾と何ぞ與らん、爾は我等
を滅さん爲に來りしか、我爾が誰なるを知る、乃神の聖なる者なり。二五 イイスス彼
を禁めて曰へり、口を緘ぢて、之より出でよ。二六 汚鬼は其人を拘攣させ、大なる聲を以

て叫びて、之より出でたり。二七 人皆駭きて、相問ひて曰へり、此れ何ぞ、此れ如何なる新しき教ぞ。蓋彼權を以て汚鬼にも命じて、亦彼に順ふ。二八 其聲名忽ち加リラヤの四方に擴まれり。二九 直に會堂より出でゝ、イアコフ、イオアンと倶に、シモンとアンドレイの家に來れり。三〇 シモンの岳母熱を病みて臥したるに、或人直に之をイエスに告ぐ。三一 彼就きて、其手を執りて、之を起したれば、熱忽ち退きて、婦彼等に供事せり。三二 暮に及びて、日の入る時、凡そ病を負ひ、鬼に憑らるゝ者を彼に舁き來れるあり。三三 邑擧りて門に集れり。三四 彼は種種の病に苦めらるゝ多くの者を醫し、多くの鬼を逐ひ出し、且鬼に其ハリストスたるを識ることを言ふを許さゞりき。三五 朝未だ夜の明けざる前に、彼起きて、出でゝ野の處に適き、彼處に於て祈禱せり。三六 シモン及び之と倶に在りし者其跡を追ひ、三七 既に遇ひて、彼に謂ふ、皆爾を尋ぬ。三八 彼は之に謂ふ、我等近傍の村と邑とに往くべし、我が彼處にも教を宣べん爲なり、蓋我は是が爲に來れりと。三九 乃全ガリレヤに、彼等の會堂に於て、教を宣べ、且鬼を逐ひ出せり。四〇 癩病の者來りて、彼に求め、彼の前に跪きて曰く、爾若し望まば、我を潔むるを能す。四一 イ

イイス憫みて、手を伸べ、彼に觸れて曰く、我望む、潔まれ。四二其人潔まれり。四三イイス厳しく彼を戒めて、直に去らしめ、四四又彼に謂ふ、慎みて、何事をも人に語るなかれ、乃往きて、己を司祭に示せ、且潔まりしが為に、モイセの命ぜし物を献じて、彼等に證を為せ。四五然れども其人出でゝ後、多く宣べて、其事を播揚し、イイス是より顯に城に入ることを得ずして、外なる野の處に居るに至れり、人四方より彼に來れば、

第二章

一數日を越えて、彼復カペルナウムに入れり、彼が家に在ることを聞えたれば、二直に多くの人集りて、門の傍にも身を容るゝ處なきに至れり、彼は之に教を宣べたり。三癱瘋の者を擔へて、彼に來れる者あり、四人之を舁けり、四人の衆きに因りて、彼に近づくを得ずして、其在る處の屋蓋を啓き、之に穴して、癱瘋の者の臥したる牀を縋り下せり。五イイス彼等の信を見て、癱瘋の者に謂ふ、子よ、爾の罪は爾に赦さる。六此に或學士等の坐せるあり、心の中に議して曰く、七斯の人何ぞ斯く褻瀆を言ふ、獨神より外に、誰か罪を赦すを得ん。八イイス其神を以て、直に彼等が斯く己の裏に議するを知

り て、彼等に謂へり、爾等何ぞ心の中に斯く
或は起きて、爾の
に在りて罪を赦す権あることを知らん爲、（
きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。一二彼
り、衆駭きて、神を讃榮し、我等未だ嘗て斯く
三イイスス復海邊に出でしに、民皆彼に就き、彼之を教へたり。一四過ぐる時、彼はア
ルパイの子レワイが稅關に坐せるを見て、之に
スがレワイの家に席坐せし時、多くの稅吏及び罪人も亦彼と其門徒と偕に席
り、蓋此等の者多く有り、而して彼に從へり。一六學士等とパリセイ等とは彼が稅吏及
び罪人と偕に食するを見て、其門徒に謂へり、彼は何ぞ稅吏及び罪人と偕に食飲する。
一七イイスス之を聞きて、彼等に謂ふ、康强なる者は醫師を需めず、乃病める者は
之を需む、我が來りしは、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して、悔改せしめん爲なり。
一八イオアンとパリセイ等との門徒は齋ぜり、來りて彼に謂ふ、イオアンと

等との門徒は齋するに、爾の門徒が齋せざるは何ぞや。一九 イイスス彼等に謂へり、婚
筵の客は新娶者の尚彼等と偕に在る時、豈齋するを得んや、新娶者の彼等と偕に在
る時は、齋するを得ず、二〇 然れども新娶者の彼等より取らるゝ日至らん、其日には齋
せん。二一 新しき布片を用て舊き衣を補ふ者あらず、然らずば新しき者は舊きを壞り
て、其綻更に甚しからん。二二 又新しき酒を舊き革囊に盛る者あらず、然らずば新し
き酒は囊を敗りて、酒漏れ、囊も亡びん、乃新しき酒は新しき囊に盛るべし。二三 安息
日にイイスス禾田を過ぎ行けることあり、彼の門徒行く時穗を摘めり。二四 ファリセイ
等彼に謂へり、觀よ、何ぞ彼等は安息日に行ふべからざることを行ふ。二五 彼は之に謂
へり、爾等は、ダヴィドが乏しくして、己及び其從者の飢ゑし時に行ひし事、二六 即如何
にして彼は、司祭長アヴィアファルの時に、神の家に入りて、司祭等の外何人も食ふべから
ざる供前の餅を食ひ、且之を從者に與へしを、未だ嘗て讀まざりしか。二七 又彼等に謂
へり、安息日は人の爲に設けられたり、人は安息日の爲に非ず、二八 故に人の子は亦安
息日の主なり。

第三章　一彼又會堂に入りしに、彼處に一手の枯へたる人あり。二人々彼を醫すや否やを窺へり。三彼は手の枯へたる人に謂ふ、中に立てよ。四又彼等に謂ふ、安息日には善を行ひ、或は惡を行ふ、生命を救ひ、或は之を滅す、孰か宜しき、彼等默然たり。五イエス怒を含みて、彼等を圍視し、其心の頑なるを憂ひて、斯の人に謂ふ、爾の手を伸べよ。之を伸ぶれば、其手は健になりしこと、他の手の如し。六パリセイ等出でゝ、直にイロドの黨と共に、如何にして彼を滅さんと謀れり。七イエスは門徒と偕に出でゝ、海濱に往けり、衆多くの民はガリレヤより、又イルサリム、イドメヤ及びイオルダンの外より、又ティルとシドンの邊に居る者は、其行ひしことを聞きて、甚多く彼に來れり。八又イエスが爲に小舟を備へんことを命ぜり、人の彼に逼らざらん爲なり。九蓋彼は多くの者を醫しゝに因りて、凡そ疾ある者は、彼に捫らん爲に擁し逼るに至れり。一〇惟彼は之に已を顯すことを戒めたり。一一又汚鬼は彼を見し時、其前に俯伏して、呼びて曰へり、爾は神の子なり、一二遂に山に登りて、自ら欲する所の者を召したれば、

來りて彼に就けり。一四 乃ち十二人を立てたり、彼等が己と偕に居りて之を傳へしめ、一五 且權を以て病を醫し、鬼を逐ひ出さしめん爲なり。一六 乃ちシモンに之をペトルと名づけたり、一七 ゼベダイの子ヤコフ、ヤコフの弟ヨハネ、之にボアネルゲス、譯すれば雷の子と名づけたり、一八 アンドレイ、フィリップ、バルトロメイ、マトタイ、トマ、アルパイの子ヤコフ、タダイ、シモン「カナニト」、一九 及びイスカリオテ「卽ち彼を賣りし者なり。二〇 彼等家に入りしに、民復集り、彼等餅を食ふ遑なきに至れり。二一 彼の親屬は聞きて、彼を取らんが爲に出でたり、蓋彼は狂へりと言へり。二二 又イエルサリムより下れる學士等は、彼はベルゼブルに憑られ、鬼の魁に藉りて、鬼を逐ひ出すと云へり。二三 彼は之を召して、譬を以て之に謂へり、サタナを逐ひ出すを得ん。二四 若し國自ら分れ爭はゞ、其國立つ能はず、二五 若し家分れ爭はゞ、其家立つ能はず、二六 若しサタナ自ら攻めて、分れ爭はゞ、立つ能はず、卽ち其終に至れるなり。二七 人強き者の家に入りて、其器を劫す能はず、必先づ強き者を縛りて、然る後其家を劫さん。二八 我誠に爾等に謂ふ、凡の罪と褻瀆と、人之を以て瀆さば、人の

諸子に教まれん、二九然れども聖神を瀆さん者は世世に赦されず、乃永遠の定罪に干らん。三〇斯く言へるは人人が彼は汚鬼に憑らると言ひし故なり。三一時に民彼を環りて坐せり、或彼に謂兄弟來りて、外に立ち、人を遣して、彼を呼べり。三二へり視よ、爾の母及び爾の兄弟外に在りて、爾を尋ぬ。三三彼は之に答へて曰へり、孰か我が母、或は我が兄弟たる。三四乃環り坐せる者を圍視して曰く、是れ我が母、及び我が兄弟なり。三五凡神の旨を行はん者は、其人卽我が姉妹及び母なり。

第四章

一復海濱に於て教へ始めしに、衆くの民彼の許に集りたれば、彼舟に登りて、海に坐し、民皆海に沿ひて陸に在りき。二乃多く譬を以て彼等を教へたり、其教に於て彼等に謂へり、三聽け、種を播く者は播かんと爲に出でたり。四播く時、路の旁に遺ちし者あり、鳥來りて之を啄めり。五土の薄き磽地に遺ちし者あり、土の深からざるに因りて、直に萠え出でしが、六日の出でゝ後萎み、根なきに因りて、槁れたり。七棘の中に遺ちし者あり、棘起きて之を蔽ひたれば實を結ばざりき。八沃壤に遺ちし者あり、乃發し長ずる實を結びて、或は三十倍、或は六十倍、或は百倍と爲れり。九又曰へり、耳ありて

聽くを得る者は聽くべし。一〇民の散じて後、彼を環れる者は十二徒と偕に、彼に譬の事を問へり。一一彼は之に謂へり、爾等には神の國の奥義を知ることを與へられたれど、彼の外の者には凡て譬を用ゐる、一二蓋彼等は視て視れども見ず、聽きて聽けども悟らず、恐らくは轉じて其罪の赦されん。一三又彼等に謂ふ、爾等此譬を識らずば如何にして凡ての譬を識らん。一四播く者は、言を播くなり。一五路の旁に遣ちたる者は、此れ播かるゝ言を聽きし後、直にサタナ來りて、彼等の心に播かれたる言を奪ふ。一六礫地に播かるゝとは、言を聽きて、直に喜びて受くれども、一七己に根なきが故に暫時のみ、後言の爲に艱難或は窘逐に遇はば、直に躓く。一八棘の中に播かれたる者は、同じく是れ言を聽きて、一九斯の世の慮と、貨財の惑と、其他の慾とは入りて、言を塞ひて、實を結ばしめず。二〇沃壤に播かれたる者は、是れ言を聽きて之を受け、實を結ぶこと或は三十倍、或は六十倍、或は百倍なり。二一又彼等に謂へり、燈を取り來るは牀の下、或は牀の下に置かん爲ならず燈臺の上に置かん爲なるか、之を燈臺の上に置かん爲に非ずや。二二隱れて顯れざる者なく藏して露ならざる者なし。二三耳ありて聽くを得る

者は聽くべし。二四 又彼等に謂へり、聽く所を愼め、爾等何の量を以てか人に量らば、是
くの如く爾等にも量られん、且爾等聽く者に加へられん。二五 蓋有てる者は、之に與へ
られ、有たざる者は、其有てる物も、之より奪はれん。二六 又曰へり、神の國は人種を地に
投ずるが如し、二七 夜に晝に寢ね興き、種の如何に發し長ずるを知らず。二八 蓋地は自
ら始に苗、次に穗を生じ、次に穗の中に穀を盈たす。二九 實の熟するに及びて、直に鎌を
遣す、穫る時至りたればなり。三〇 又曰へり、我等神の國を何に比へんか、抑何の譬を
以て之を譬へんか、三一 此れ芥種の如し、其地に播かるゝ時は、地上の悉くの種より小
しと雖、三二 播かれたる後は、萌え出でゝ、悉くの野菜より大になり、巨なる枝を出し、天
空の鳥其蔭に棲むを得べきに至る。三三 イイスス斯くの如き多くの譬を以て、彼等が
聽くを得る所に循ひて、教を宣べたり。三四 譬に非ずしては、彼等に語らざりき、獨處の
時悉く之を其門徒に解けり。三五 其日の暮に及びて、彼等に謂ふ、我等彼の岸に濟る
べし。三六 彼等民を去らしめて、彼を猶舟に在るまゝ取りて往けり、他の舟も亦彼と偕
に在りき。三七 颶風大に起り、浪舟に打ち入りて、殆ど滿つるに至れり。三八 時に彼は舟

尾に在りて、枕して寢ねたり、彼を醒まして曰く、師よ、我等が亡ぶるを爾顧みざるか。三
九 彼起きて、風を禁め、海に謂へり、默せ、靖まれ、風即息みて、大に穩になれり。四〇 又彼
等に謂へり、爾等何爲れぞ是くの如く怯るゝ、何ぞ信なき。四一 彼等大に懼れて、互に謂
へり、此れ何人ぞ、風も海も亦彼に順ふ。

第五章

一 遂に海の彼の岸なるガダラの地に至れり。二 彼が舟を離れし時、汚鬼を患
ふる人墓より出でゝ、直に彼を迎へたり。三 此の人墓を住處と爲せり、鐵索を以てすと
も、何人も彼を繫ぐ能はざりき、四 蓋彼は屢桎梏と鐵索とに繫がれたれども、鐵索を
斷ち、桎梏を毀り、人彼を制するを得ざりき。五 夜も晝も恒に、山と墓とに在りて號び、又
其身を石に打てり。六 彼遙にイイススを見て、趨り附きて、之を拜し、七 大なる聲を以て
呼びて曰へり、至上なる神の子イイススよ、我と爾と何ぞ與らん、神に因りて爾に求む、
我を苦むる勿れ。八 蓋イイスス之に謂へり、汚鬼、斯の人より出でよ。九 又之に問へり
爾の名は何ぞ。答へて曰へり我の名は大隊、我等多き故なり。一〇 乃切に彼等を此の
地の外に逐はざらんことを求めたり。一一 彼處に、山の側に、豕の大なる群牧はれたれ

ば、一二 魔鬼皆彼に求めて曰へり、我等を豕に遣して、其中に入らしめよ。一三 イイスス
直に之を許せり汚鬼出でゝ、豕に入りしに、群は山坡より海に逸け、約二千匹ありて海
に溺れたり。一四 豕を牧ふ者奔りて、邑及び諸村に告げたれば、人人有りしことを觀ん
爲に出で、一五 イイススに來りて、先に魔鬼を患ひ、大隊に憑られたる者が、衣を着、心慥
にして坐せるを見て、懼れたり。一六 見し者は魔鬼を患ひたる者に有りし事の如何、及
び豕の事を彼等に語げたれば、一七 彼等はイイススに其境を離れんことを請へり。一
八 彼が舟に登れる時、魔鬼に憑られたる者彼と偕にせんことを求めたり。一九 イイス
ス許さずして、之に謂ふ、爾の家に爾の親屬に歸りて、彼等に主が如何なる事を爾に行
ひ、及び如何に爾を憐みしを告げよ。二〇 彼往きて、デカポリに於てイイススが彼に如
何なる事を行ひしを宣べたれば、人皆之を奇とせり。二一 イイスス舟に乘りて、復彼の
岸に濟りし時、衆くの民は、彼に集り、彼は海濱に在りき。二二 視よ、會堂の宰の一人、イア
イルと名づくる者來り、彼を見て、其足下に俯伏し、二三 切に彼に求めて曰く、我が女死
せんとす、請ふ來りて、之に手を按せ、之をして愈ゐて、生くるを得しめよ。二四 イイスス

之と偕に往けり、時に衆くの民從ひて、彼に擁し逼れり。二五 或婦十二年血漏を患ひ、二
六 多くの醫師に因りて多く苦み、其所有を盡く費したれども、聊も益なくして、益惡し
くなれり。二七 イイススの事を聞きて、民の中に後より來りて、彼の衣に捫れり。二八 蓋
曰へり、我第其衣に捫らば、愈ゆるを得んと。二九 直に其血の源涸れて、婦其身に病の愈
されしを覺ねたり。三〇 イイスス忽自ら能の己より出でたるを覺ね、民の中に顧み
て曰へり、誰か我が衣に捫りたる。三一 門徒彼に謂へり、爾は民が爾に擁し逼るを見る
に、誰か我に捫りたると云ふか。三二 然れども彼は圍視して、之を行ひし者を見んと欲
せり。三三 婦己に成りしことを知り、懼れ慄きて、來りて彼の前に俯伏し、悉く實を以
て彼に語げたり。三四 彼は之に謂へり、女よ、爾の信は爾を救へり、安然として往き、爾の
病より健になれ。三五 彼が尚言ふ時、會堂の宰の家より人來りて曰く、爾の女已に死せ
り、何ぞ復師を煩はす。三六 イイスス語ぐる所の言を聞きて、直に會堂の宰に謂ふ、懼る
る勿れ、惟信ぜよ。三七 乃ペトル、イアコフ、及びイアコフの兄弟イオアンの外、誰にも
己に從ふを許さず、三八 會堂の宰の家に來りて、人人の號咷、其哭きて大に叫ぶを見、

三九　既に入りて、彼等に謂ふ、何ぞ吶ぎ且泣く、小女は死せしに非ず、乃寐ぬるなり。四〇人人彼を哂へり。彼衆を出して、小女の父母と彼に従へる者とを率ゐて、小女の居る處に入り、四一小女の手を執りて、之に謂ふ「タリタ、クミ」、譯すれば、女よ、爾に言ふ、起きよ。四二女直に起き、且歩めり、蓋其年は十二なり、見し者大に駭けり。四三イエスは此を人に知らしめんことを厳に禁じ、又女に食を與へんことを命ぜり。

第六章

一イエス彼處を出でゝ、己の故郷に至れり、其門徒彼に従へり。二安息日に及びて、彼會堂に於て教を宣べしに、衆くの聽ける者奇として曰へり、斯の人何より斯を得たるか、彼に賦へられし智慧は如何にして其手に由て行はるゝか、三彼は木工にして、マリヤの子、イアコフ、イオシヤ、イウダ、シモンの兄弟なるに非ずや、其姉妹は此に我等の間に在るに非ずや、乃彼の爲に感へ、イエス彼等に謂へり、預言者は其故郷、其親屬、其家の外に於て尊ばれざるなし。五乃彼處に於ては何の異能をも行ふを得ざりき、唯數人の病者に手を按せて、之を醫せり。六且彼等の不信を怪めり。又十二徒を召して、

彼等を二人づゝ遣し、彼等に汚鬼を制する權を與へたり。八又彼等に杖の外、嚢をも、糧をも、帶に貯ふる銅をも、一切執る勿らんことを命じ、九惟履を著くるのみにして、二の衣を衣ること勿らしめたり。一〇又彼等に謂へり、何處に於ても人の家に入らば、彼處に留りて、出づるに至れ。一一若し爾等を接けず、爾等が足の下の塵を拂へ、彼等に對する證を爲さん爲なり、我誠に爾等に告ぐ、審判の日に於て、ソドム及びゴモラは斯の邑より忍び易からん。一二彼等出でゝ、悔改の教を宣べ。一三且多くの鬼を逐ひ出し、多くの病める者に油を傳けて、之を醫せり。一四イロド王イイススの事を聞きて、（蓋其名は揚れり）曰へり、此れ授洗イオアンが死より復活せしなり、故に彼に由りて異能は行はる。一五他の者は是れイリヤなりと曰ひ、又他の者は是れ預言者、或は諸預言者の一の若き者なりと曰へり。一六惟イロドは聞きて曰へり、是れ我が首を斬りしイオアンなり、彼は死より復活せり。一七蓋此のイロデアダの爲の故なり、其之を娶りたればなり。一八蓋イオアンはイロドに謂へ

り、爾兄弟の妻を娶るは宜しからずと。一九 イロデアダ彼を怨みて殺さんと欲したれども、能はざりき。二〇 蓋イロドはイオアンの義にして聖なる人たるを知りて彼を畏れ、及び彼を護り、彼に聞きて多くの事を行ひ、且欣びて彼に聞けり。二一 適好き機會の日は至れり、卽イロド、其誕生日に於て、諸大臣、千夫長、及びガリレヤの尊者の爲に筵を設けたり。二二 イロデアダの女入りて舞ひ、イロド及び共に席坐する者の喜を獲たり。王女に謂へり、閣が欲する所を我に求めよ、我爾に與へん。二三 又彼に誓へり、閣が欲する所は、我が國の半に至るも雖、爾に與へん。二四 女出でゝ其母に謂へり、何をか求むべき。彼曰へり、授洗イオアンの首。二五 女直に急ぎ入りて、王に求めて曰へり、我爾が授洗イオアンの首を今盤に盛りて、我に與へんことを欲す。二六 王憂ひたれども、誓の爲、又共に席坐する者の爲の故に、之を拒むを欲せざりき。二七 王直にいつそつ一卒を遣して、其首を擡へんことを命ぜり。卒往きて、之を獄に斬り、其首を盤に盛り、擡へて之を女に與へ、女之を其母に與へたり。二八 彼徒等イエスの許に集りて、凡そ行ひし事、教へし事を彼に取りて、墓に藏めたり。二九 其門徒之を聞きて來り、其屍を

に告げたり。三一彼は之に謂へり、爾等獨野の
くありて、彼等食ふ遑だになかりき。三二乃
民其往くを見て、多
に先だちて、彼の許に集れり。三四イエス出でゝ、群衆を見て、之
き羊の如き故なり、乃多く之を教へたり。三五時已に晩くなりて
曰く、此は野の處にして、時已に晩し、三六衆を去らしめよ、彼等が四
己の爲に餅を市はん爲なり、蓋彼等に食ふべき物なし。三七彼答へて曰へり、爾等之に
食を與へよ。彼に謂ふ、我等往きて、銀二百を以て餅を市ひ、之に與へて食はしめんか。三
八彼曰く、爾等に餅幾何かある、往きて觀よ。彼等知り得て曰く、五の餅及び二の魚。三九
彼は之に命じて、衆人を青草の上に區區に坐せしめたり。四〇乃百人或は五十人
づゝ列列に席坐せり。四一彼は五の餅と二の魚とを取りて、天を仰ぎて祝福し、餅を擘き、其門徒に與へて、衆の前に陳れしめ、又二の魚をも衆に分てり。四二皆食ひて、飽きた
り。四三餘りたる屑と殘りたる魚とを拾ひて、十二の筐に盈てたり。四四餅を食ひし者

は約五千人なりき。四五 イイスス直に其門徒を促して、舟に登らしめ、自ら民を去らしむる間に、己に先だちて、彼の岸なるベツサイダに往かしめたり。四六 民を去らしめて後、彼祈禱せん爲に山に登れり。四七 暮に及びて、舟は海の中に在り、彼は獨陸に在りて、四八 彼等が舟を漕ぐに苦めるを見たり、風の彼等に逆ふ故なり。夜四更の頃、彼海を履みて、彼等に近つき、而して彼等を過ぎんと欲せり。四九 彼等は其海を履むを見て、是怪物なりと意ひて呼べり、五〇 蓋皆彼を見て懼れたり。彼直に之と語り、而して之に謂ふ、心を安んぜよ、是れ我なり懼るゝ勿れ。五一 乃舟に登りて、彼等に就きたれば、風息みたり。彼等中心に極めて甚しく駭き且奇めり、五二 蓋餅の奇蹟を悟らざりき、其心の頑なりし故なり。五三 既に濟り、ゲンニサレトの地に至りて、岸に泊けり。五四 舟より出でし時、人直に彼を識りたれば、五五 徧く近傍の地を馳せ廻りて、病ある者を牀に載せ、彼の在る所を聞きて、彼處に舁き至れり。五六 凡そ彼の入りし所、或は村、或は邑、或は鄉は、人其市に病者を置き、唯彼の衣の裾にだに捫らんことを求めたり、彼に捫りし者は愈ゆるを得たり。

第七章

一 イエルサリムより來りしファリセイ等と或學士等と彼の
門徒の中の或者が潔からざる手、卽ち 盥はざる手を以て餠を食ふを見て、之を咎め
たり。三 蓋ファリセイ等及び悉くのイウデヤ人は、古人の傳を執りて
されば食はず、四 市より歸りて、自ら洗はざれば、亦食はず、此の外又多くの事あり、彼等
受けて之を守れり、卽 杯、瓶、銅器及び牀を洗ふが若し。五 是に於てファリセイ等と學
士等と彼に問ふ、爾の門徒は何ぞ古人の傳に遵はずして、盥はざる手を以て餠を食ふ。
六 彼答へて之に謂へり、イサイヤは爾等僞善者の事を善く預言せり、錄されしが如し、
云く、斯の民は口にて我を敬へども、其心は遠く我に離る、七 彼等は人の誡を教へ
て、空しく我を尊むこと。八 蓋爾等神の誡を棄てゝ人の傳を執れり、卽瓶、杯を
洗ひ、其他多くの是くの如きことを行ふ。九 又彼等に謂へり、爾等己の傳を守らん爲に、善
く神の誡を廢す。一〇 蓋モイセイ曰へり、爾の父及び爾の母を敬へ、又曰へり、父或は
母を詈る者は死すべしと。一一 然れども爾等曰ふ、人若し父或は母に對ひて、爾が我よ
り得べき者は「コルバン」、譯すれば、禮物と爲れりと云はゞ、一二 爾等既に其人に已の

ちゝあるひは母の爲に何事をも爲さざるを許す。一三 斯く爾等が設けし傳を以て神の言を廢し、且多く是くの如きことを行ふ。一四 乃衆民を召して、之に謂へり、凡そ外より人に入る者は汚すなり。一六 耳ある者は聽くべし。一七 彼が民を離れて家に入りし時、門徒彼に譬の事を問へり。一八 彼は之に謂ふ、爾等も亦斯く悟鈍きか、豈知らずや、凡そ外より人に入る者は、斯れ人を汚す能はず、一九 蓋其心に入らず、乃腹に入りて外に出づ、是に由りて凡の食物は潔めらる。二〇 又曰へり、人より出づる者は、斯れ人を汚すなり。二一 蓋内より、即人の心より出づる者は、惡念、姦淫、邪淫、兇殺、二二 盜竊、貪婪、惡毒、詭譎、邪侈、疾視、褻瀆、驕傲、狂妄なり。二三 此等の惡は、皆内より出でゝ、人を汚すなり。二四 彼は彼處を起ちて、テル及びシドンの境に來り、家に入りて、人の知らんことを欲せざりしが、隱るゝを得ざりき。二五 蓋汚鬼を患ふる女を有てる婦彼の事を聞きて、來りて、其足下に俯伏せり。二六 此の婦は異邦人にしてシロフィニキヤに生れしより寃鬼を逐ひ出さんことを請へり。二七 然れども イイスス之に謂へり、先づ兒曹に

飽かしむるを容せ、蓋兒曹の餅を取りて、狗に投ぐるは宜しからず。二八 婦彼に答へて
曰へり、主よ、然り、但狗も食卓の下に在りて、兒曹の屑を食ふ。二九 彼は之に謂へり、此の
言に因りて、往け、魔鬼は爾の女より出でたり。三〇 婦其家に來りて、魔鬼已に出でゝ、
女の其牀に臥せるを見たり。三一 イイスス復ティル及びシドンの境を出で、デカポリの
境の中を經て、ガリレヤの海に至れり。三二 聾にして訥れる者を彼に攜へ來りて、手
を其上に按せんことを求むる者あり。三三 彼獨之を攜へて、民を離れ、指を其耳に入
れ、唾して其舌に捫り、三四 天を仰ぎて、歎息して、之に謂ふ、「ヱッファ」、譯すれば、啓け。三五
直に其耳は啓け、舌の結は解け、其言ふこと明になれり。三六 イイスス彼等に何人に
も告げざらんことを戒めたり、然れども彼愈戒めて、彼等愈播揚せり。三七 且駭異
に勝へずして曰へり、其爲せる事皆善し、聾者をも聞く者と爲し、啞者をも言ふ者と爲
す。

第八章

一 當日民極めて多く有りて、食ふ物なかりしに、イイスス其門徒を召して、之
に謂ふ、二 我斯の民を憫む、蓋已に三日我と偕に在りて、食ふ物なし。三 我若し彼等を飢

ふて其家に歸らしめば、途中に憑れん、蓋其中に遠くより來りし者あり。四其門徒彼に答へて曰へり、人此に野に在りて、彼等を飽かしむべき餅を何處より得んや。五彼等に問へり、爾等に餅幾何かある。曰く、七。六是に於て民に命じて、地に坐せしめ、七の餅を取りて、感謝して之を擘き、其門徒に與へて、之を陳れしむるに、彼等は民の前に陳れしめたり。七又些須の小き魚あり、之をも祝福して、前に陳れしめたり。八乃食ひて飽き、其餘りたる屑七籃を拾へり。九食ひし者は約四千人なりき。乃彼等を歸らしめたり。一〇直に其門徒と偕に舟に登りて、ダルマヌファの境に來れり。一一ファリセイ等出でゝ彼を詰り、彼を試みて天より休徴を求めたり。一二彼中心より歎息して曰く、斯の世何ぞ休徴を求むる、我誠に爾等に語ぐ、斯の世に休徴は與へられざらん。一三乃彼等を離れて、復舟に登りて、彼の岸に往けり。一四時に其門徒餅を取ることを忘れたり、舟には惟一の餅の外有らざりき。一五彼は之に戒めて曰へり、謹みて、ファリセイ等の酵とイロデの酵とを防げ。一六彼等相議して曰へり、是我等に餅なきことを議するなり。一七イエス之を知りて、彼等に謂ふ、何ぞ餅なきことを議する、爾等猶未だ知らず、未だ悟らざる

か、爾等の心猶頑なるか。一八爾等目あり
ざるか。一九我五の餅を五千人の爲に擘き
に謂ふ、十二。二〇又七の餅を四千人の爲に
彼等に謂へり、何ぞ悟らざる。二一ワイダに來れるに、
んことを求むる者あり。二三彼醫者の手を
彼の上に手を按て、見る所ありやと問へり。二四彼仰ぎ視て曰へり
と樹の如くなるを見る。二五後復手を其目に按て、彼に仰ぎ視るこ
彼愈えて、明に庶物を見たり。二六乃彼を其家に遣して曰へり、村
の人に告ぐる勿れ。二七イイスス其門徒と偕にフィリップのケサリヤの諸村に出でし、
途中其門徒に問ひて曰へり、人人我を言ひて誰とか爲す。二八彼等對へて曰へり、
イオアンと爲し、他の者はイリヤと爲し、又他の者は預言者の一人と爲す。二九彼は之
に謂ふ、爾等は我を言ひて誰とか爲す。ペトル彼に對へて曰く、爾はハリストスなり。三
○乃彼等に戒めて、己の事を人に語ぐる勿らしめたり。三一是に於て始めて彼等に

人の子が多く苦を受け、長老等と司祭諸長と學士等とに棄てられ、且殺されて、第三日に復活すべきことを教へたり。三二　彼明に此の事を語れるに、ペトル彼を擯きて諫めたり。三三　彼身を轉じて、其門徒を見て、ペトルを戒めて曰へり、サタナ我より退け蓋し關は神の事を念はず、乃人の事を念ふ。三四　遂に民を其門徒と共に召して曰へり、我に從はんと欲する者は、己を舍て、其十字架を負ひて我に從へ。三五　蓋己の生命を救はんと欲する者は之を喪はん、我及び福音の爲に己の生命を喪ふ者は之を救はん。三六　若人若し全世界を獲とも、己の靈を損はば、何の益かあらん、三七　抑人何を以て其靈の價と爲さんや。三八　蓋此の姦惡の世に於て、我及び我の言を恥ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖なる天使等と偕に來らん時彼を恥ぢん。

第九章

一　又彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、此に立てる者の中には未だ死を嘗めずして、神の國が權能を以て來るを見んとする者あり。二　六日を越えて、イエスはペトル、イアコフ、イオアンを攜へ、獨彼等のみを率ねて、高き山に登り、彼等の前にて容を變へたり。三　其衣は耀きて、雪の如く甚白くなれり、地上の漂工の白くすること能はざ

ろ者の如し。四イリヤはモイセイと偕に彼等に現れて、イエスと語れり。五ペトル、イエスに謂ふ、夫子、我等此に居るは善し、我等三の廬を建てゝ、一はイの爲、一はモイセの爲、一はイリヤの爲にせん。六蓋自ら言ふ所を知らざりき、彼等大に懼れし故なり。七又雲有りて彼等を蔭ひ、雲より聲出でゝ云ふ、此は我の至愛の子なり、彼に聽け。八イエスのみ彼等と偕に在りき。九山を下る時、人に語ぐる勿らんことを命じたり。一〇彼等斯の言を其中に留めて、相議して曰へり、死より復活すとは何の意ぞ。一一又彼に問ひて曰へり、學士等がイリヤ先に來るべしと云ふは何ぞや。一二彼答へて曰へり、然り、イリヤ先に來りて、萬事を整ふべし、人の子も亦之を指して錄されし如く、多く苦を受け、人に卑められるべし。一三惟我爾等に語ぐ、イリヤ已に來れり、彼を指して錄されし如し。一四既に門徒の所に來りて、群衆の彼等を環り、且學士等の彼等と議論するを見たり。一五衆民皆彼を見て駭き、趨り前みて安を問へり。一六彼學士等に問ひて曰へり、彼等と議論

するは何の事ぞ。一七民中の一人答へて曰へり、師よ、我啞の鬼に憑られたる我が子を
爾に攜へ來れり。一八鬼は何處に彼を執ふとも、投げ仆し、彼沫を噴き、齒を切み、體枯る、
我爾の門徒に之を逐ひ出ださんことを請ひたれども、彼等能はさりき。一九イイスス
彼に答へて曰く、噫信なき世や、我何時までか爾等と偕に在らん、何時までか爾等を忍
ばん、彼を我が許に攜へ來れ。二〇乃彼を攜へ來れり、彼イイススを見れば、鬼忽彼
を拘攣させ、彼地に仆れ輾びて沫を噴けり。二一イイスス其父に問へり、彼に斯く爲り
しは何の時よりか。曰へり、幼き時よりなり。二二鬼は彼を滅さん爲に、屢火に又水に
投じたり。爾若し何をか能せば、我等を憫みて、我等を助けよ。二三イイスス之に謂へり、
爾若し幾何か信ずることを能せば、信ずる者には能せざることなし。二四童子の父直
に涙を垂れて、呼びて曰へり、主よ、我信ず、我が不信を助けよ。二五イイスス民の趨せ集
るを見て、汚鬼を禁めて、之に謂へり、啞にして聾なる鬼よ、我爾に命ず、彼より出でゝ、再
彼に入る勿れ。二六鬼號びて、甚しく彼を拘攣させて出でたり、彼は死せし者の若くな
りて、多くの者彼死せりと云ふに至れり。二七イイスス其手を執りて、彼を起したれば、

彼即立てり。二八イエス家に入りし時、其門徒私に彼に問へり、我等が之を逐ひ出す能はざりしは何の故ぞ。二九彼曰へり、祈禱と齋とに由らざれば、此の類出づるを得ざるなり。三〇彼等彼処を出でゝ、ガリレヤを過ぐ、彼は人の之を知らんことを欲せざりき。三一蓋其門徒に教へて、人の子は人人の手に付され、人彼を殺し、殺されて後彼れたり。三二彼カペルナウムに來りて家に在る時、彼等に問へり、爾等が途中相議したるは何の事ぞ。三四彼等默然たり、蓋途中孰か大なるさ相議したりき。三五イエス坐して、十二徒を召して、之に謂ふ、先たらんと欲する者は、衆の後さなり、衆の役者さなるべし。三六又幼兒を取りて、彼等の中に立て、且之を抱きて、三七我が名に因りて、是くの如き幼兒の一人を接くる者は、我を接くるなり、我を接けん者は、我を接くるに非ず、我を遣したる人を接くるなり。三八イオアン彼に答へて曰へり、師よ、我等は爾の名を以て鬼を逐ひ出し、而して我等に從はざるを見て、之に禁じたり、三九イエス曰へり、之に禁ずる勿れ、蓋我が名を以て異能を行ひし者は、

未だ幾ならずして我を誹る能はず。四〇蓋爾等に敵せざる者は爾等の與屬なり。四一爾等がハリストスに屬する故を以て、我が名に因りて、爾等に水一杯を飲ましめん者は、我誠に爾等に語ぐ、其賞を失はざらん。四二然れども我を信ずる此の小子の一人を罪に誘はん者は、寧磨石を其頸に懸けられて、海に投ぜられん。四三若し爾の手爾を罪に誘はゞ、之を斷て、爾の爲には、殘缺にして生命に入るは、兩の手ありて地獄に滅ぬざる火に入るより勝れり、四四彼處には彼等の蟲死せず、火滅えず。四五若し爾の足爾を罪に誘はゞ、之を斷て、爾の爲には、跛にして生命に入るは、兩の足ありて地獄に滅ぬざる火に投ぜらるゝより勝れり、四六彼處には彼等の蟲死せず、火滅ぬず。四七若し爾の目爾を罪に誘はゞ、之を抉れ、爾の爲には、一の目ありて神の國に入るは、兩の目ありて火の地獄に投ぜらるゝより勝れり、四八彼處には彼等の蟲死せず、火滅えず。四九蓋凡の人は火を以て鹽せられん、又凡の祭物は鹽を以て鹽せられん。五〇鹽は善き物なり、然れども鹽若し其味を失はゞ、何を以て之を鹹くせん。爾等の內に鹽を有ち、亦互の和平を有て。

第十章　一イイスス起ちて彼處を去りヨルダンの外よりイウデヤの境に來れり、民復彼に集れるに、彼は常の如く復之を教へたり。二ファリセイ等就きて、彼を試みて問へり、人其妻を出すは宜しきか。三彼答へて曰へり、モイセイは爾等に何を命ぜしか。四彼等曰へり、モイセイは離書を書きて、之を出すを許せり。五イイスス曰へり、彼は爾等の殘忍なるに因りて、爾等の爲に此の誡を書せり。六然れども造成の始には、神之を男女に造れり。七是の故に人は父母を離れ、其妻に着きて、二の者一體なり。八されば彼等は既に二人に非ず、一體なり。九故に神の繋せし者は、人之を分つ可からず。一〇家に在りて其門徒彼に復此の事を問へり。一一彼は之に謂ふ、其妻を出して他に娶る者は、妻に對して姦淫を行ふなり。一二妻も若し其夫を棄てゝ他に適かば、姦淫を行ふなり。一三幼兒を彼に攜へ來れるあり、彼等に觸れしめん爲なり、門徒攜ふる者を戒めたり。一四然れども イイスス之を見て、慍りて彼等に謂へり、幼兒の我に就くを容せ、之に禁ずる勿れ、蓋神の國は是くの如き者に屬す。一五我誠に爾等に語ぐ、幼兒の如くに神の國を承けざる者は、之に入るを得ず。一六乃彼等を抱き、手を其上へ

に按せて、彼等に祝福せり。一七　彼が途に出づる時、或人趨り前みて、彼の前に跪きて問へり、善なる師よ、我永遠の生命を嗣がん爲に、何を爲すべきか。一八　イエス彼に謂へり、爾は何ぞ我を善と稱ふる、獨神より外に善なる者なし。一九　爾は誡を識れり、淫すること勿れ、殺すこと勿れ、竊むこと勿れ、僞證すること勿れ、欺き取ること勿れ、爾の父母を敬へ。二〇　彼對へて曰へり、師よ、我幼よりこれを皆之を守れり。二一　イエス彼に目を注ぎて、彼を愛し、而して彼に謂へり、爾に猶一つの足らざる事あり、往きて、爾の所有を鬻りて貧者に施せ、然らば財を天に有たん、且來りて我に從へ。二二　彼此の言に縁りて色沮み、憂ひて去れり、大なる貲産を有てる故なり。二三　イエス環視して、其門徒に謂ふ、富を有つ者の神の國に入るは難き哉。二四　門徒其言に駭けり。イエス復答へて彼等に謂ふ、小子よ、富を恃む者の神の國に入るは難き哉。二五　駱駝が針の孔を穿るは、富める者が神の國に入るより易し。二六　彼等甚驚きて互に言へり、然らば誰か能く救はれん。二七　イエス彼等に目を注ぎて曰く、此れ人には能せざる所なれども、神には然らず、蓋神には能せざる所なし。二八　是に於てペトル彼に謂へり、視よ、我等一切を舍てゝ爾に

從へり。二九 イイスス答へて曰へり、我誠に爾等に語ぐ、我及び福音の爲に家、或は兄弟、或は姉妹、或は母、或は父、或は妻、或は子、或は田疇を舍て、三〇 而して今斯の時、窘逐の中に在りては、百倍多く受け、又未來の世に在りては、永遠の生命を受けざる者あらず。三一 惟多く先なる者は後になり、後なる者は先にならん。三二 イイススエルサリムに上る時、途中イイスス先だちて行き、彼等駭き且懼れて、之に從へり。彼復十二徒を召して、己に及ばんとする事を語げて、三三 曰へり、視よ、我等イエルサリムに上る、人の子は司祭諸長及び學士等に付されん、彼等之を死に定め、之を異邦人に付し、三四 之を辱め、之に唾し、之を殺さん、而して三日に復活せん。三五 時にゼベダイの子イアコフ及びイオアン彼に就きて曰く、師よ、我等の求むる所、願はくは爾我等の爲に之を行へ。三六 彼は之に謂へり、我が爲に何を行はんことを欲するか。三七 彼等曰へり、我等に爾が光榮の中に於て、一人は爾の左に坐せんことを賜へ。三八 イイスス彼等に謂へり、爾等求むる所を知らず。爾等我が飲む酌の飲むことを能するか、我が受くる洗を受くることを能するか。三九

彼等曰へり、能す。イイスス彼等に謂へり、爾等は我が飲む爵を飲み、我が受くる洗を受
けん。四〇 然れども我が右及び我が左に坐することは、我が與ふべきに非ず、乃備へ
られたる者に與へられん。四一 十門徒之を聞きて、イアコフ及びイオアンを慍れり。四
二 イイスス彼等を召して曰く、諸民の稱して王侯と爲す者其民を主り、大人等其上に
權を執るは、爾等の知る所なり、四三 惟爾等の中には斯くある可からず、乃爾等の中
に大ならんと欲する者は、爾等の役者と爲る可し、四四 爾等の中に首たらんと欲する
者は、衆人の僕と爲るべし。四五 蓋人の子の來りしも、人を役はん爲に非ず、乃人に役
はれ、且己の生命を與へて、衆くの者の贖を爲さん爲なり。四六 イエリホンに來る。彼が
其門徒及び衆くの民と偕にイエリホンを出づる時、ティメイの子ヮルティメイと云ふ瞽
者道の旁に坐して乞へり。四七 是れイイススナゾレイなりと聞きて、彼呼びて曰へり、
ダヮィドの子イイススよ、我を憐め。四八 多くの者彼を禁めて默さしむれども、彼愈大
に呼べり、ダヮィドの子よ、我を憐め。四九 イイスス止りて、彼を呼ばしめたれば、人人瞽者
を呼びて之に謂ふ、心を安んぜよ、起て、爾を呼ぶ。五〇 彼上衣を棄てゝ、起ちてイイスス

に就けり。五一イイスス答へて彼に謂ふ、我が閙に何を爲さんことを欲するか。醫者曰く、夫子、我が見ることを得んことを。五二イイスス彼に謂へり、往け、閙の信は閙を救へり。彼直に見ることを得て、イイススに路に從へり。

第十一章

一イエルサリムに近づき、橄欖山に邇く、ベファギヤ及びベタニヤに至らんとする時、イイスス二人の門徒を遣して、二之に謂ふ、閙等の前なる村に往け、其内に入らば、直に繫ぎたる小驢、人の未だ乘らざりし者に遇はん、之を解きて、牽き來れ、三若し爾等に何を爲すかと言ふ者あらば、主之を需むと言へ、然らば直に之を此に遣さん。四彼等往きて、岐路に門の外に繫ぎたる小驢に遇ひて、之を解けり。五彼處に立てる者の中、或人彼等に謂へり、小驢を解きて何をか爲す。六彼等イイススの命ぜし如く對へたれば、乃ち之を許せり。七已に小驢をイイススに牽き來りて、己の衣を其上に置き、イイスス之に乘れり。八多くの者は己の衣を途に布き、他の者は樹の枝を伐りて途に布けり。九且前に行き後に從ふ人人呼びて曰へり、「オサンナ」、主の名に因りて來る者は祝福せらる、一〇我が父ダヴィドの國、主の名に因りて來る者は、祝福せらる、至

高きに「オサンナ」。一一イイススイエルサリムに至り、殿に入りて、徧く闌視し、時已に
晩くなりしに因りて、十二徒と偕にヲファニヤに出でたり。一二明日彼等がヲファニヤを
出でし時、彼飢ゑたり。一三遙に葉の有る無花果樹を見て、之に往けり、其上に得る所な
きかと、既に來れば、葉の外に得る所なかりき、無花果の時未だ至らざればなり。一四イ
イスス之に對ひて曰へり、今より後人永く爾の果を食ふ可からず。其門徒之を聞けり。
一五彼等復イエルサリムに來れり。イイスス殿に入りて、其中に貿易する者を逐ひ出
だし、兌錢する者の案と鴿を鬻ぐ者の椅とを倒し、一六且器を攜へて殿の中を過ぐ
るを許さゞりき。一七又彼等に誨へて曰へり、我が家は萬民の爲に祈禱の家と稱へら
れんと錄されたるに非ずや、然るに爾等之を盜賊の巣窟と爲せり。一八學士等及び司
祭諸長は此を聞きて、如何にして彼を滅さんと謀れり、蓋彼を懼れたり、衆民其訓を奇
とせしが故なり。一九時已に晩くなりて、彼城の外に出でたり。二〇翌朝過ぐる時、無花
果樹の根より枯れたるを見たり。二一ペトル憶ひ起して、彼に謂ふ、夫子、觀よ、爾が詛ひ
し無花果樹は枯れたり。二二イイスス答へて彼等に謂ふ、神を信ぜよ、二三蓋我誠に

爾等に語ぐ、若し人此の山に移りて海に投ぜよと云ひ、而して其心に疑はずして、其言の如く成らんと信ぜば、何を言ふとも、彼に成らん。二四是の故に我爾等に語ぐ、凡そ祈禱の時に求むる所は、之を得んと信ぜよ、然らば爾等に成らん。二五又立ちて祈禱する時、若し人を憾むる事あらば、之を免せ、天に在す爾等の父も爾等の過を免さん爲なり。二六爾等若し人を免さずば、天に在す爾等の父も爾等の過を免さん。二七復イエルサリムに來れり。彼が殿を歩めゐる時、司祭諸長と學士等と長老等と彼に就きて二八曰く、爾何の權を以て是を行ふか、誰か爾に是を行ふ權を與へたる。二九イエス答へて曰へり、我も亦一言爾等に問はん、我に答へよ、然らば我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げん。三〇イオアンの洗禮は天よりせしか、抑人よりせしか、我に答へよ。三一彼等編に議して曰へり、若し天よりと云はゞ、爾等何ぞ彼を信ぜざりしと云はん、三二若し人よりと云はゞ民を畏る、蓋皆イオアンを以て實に預言者なりとせり。三三遂にイエスに答へて曰く、知らず。イエスも彼等に答へて曰く、我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げざらん。

第十二章

一 遂に譬を以て彼等に語りて曰へり、或人葡萄園を樹ゑ、之に籬を環らし、
酒榨を掘り、塔を建て、之を園丁に託して他方に往けり。二 期に及びて、彼は園丁より葡
萄の果を收めん爲に、其僕を園丁に遣せり。三 彼等之を執へて扑ち、空しく返らしめた
り。四 復他の僕を彼等に遣しゝに、之をも石にて擊ち、其首に傷つけ、辱めて返らしめた
り。五 又他の者を遣しゝに、之を殺せり、其他の多くの者を或は扑ち、或は殺せり。六 猶其
一の至愛の子あり、卒に是をも彼等に遣して曰へり、我が子に愧ぢんと。七 然れども彼
の園丁は相語りて曰へり、此れ嗣子なり、往きて彼を殺さん、然らば其嗣業は我等の有
とならん。八 乃之を執へて殺し、葡萄園の外に棄てたり。九 然らば葡萄園の主は何を
爲さんか、彼來りて園丁を滅し、葡萄園を他の者に託せん。一〇 爾等聖書に、工師が棄て
たる石は屋隅の首石と爲れり、一一 此れ主の成す所にして、我等の目に奇異なりとす
と、云ふを未だ讀まざりしか。一二 彼等はイイススを執へんと謀りたれども、民を懼れ
たり、蓋其彼等を指して譬を言ひしを覺れり、乃彼を離れて去れり。一三 又彼を其言
に因りて罟せん爲に、ファリセイ等及びイロドの黨の數人を彼に遣せり。一四 此等の者

來りて、彼に謂ふ、師よ、我等は爾が眞なる者にして、何人にも偏らざるを知る、蓋爾は貌を以て人を取らず、乃眞に神の道を教ふ、稅をケサリに納むるは宜しや否や、一五我等納めんか、納めざらんか。イエス彼等の詐を知りて、之に謂へり、何ぞ我を試みる、銀一枚を攜へて我に視せ。一六彼等攜へ來りしに、之に謂ふ、斯れ誰の像と號なるか。曰く、ケサリの。一七イエス彼等に答へて曰へり、ケサリの物をケサリに納め、神の物を神に納めよ。彼等之を奇と爲せり。一八又サドカイ等、卽ち復活なしと言ふ者彼に就きて問ひて曰く、一九師よ、モイセイ我等の爲に書して云へり、若し人の兄弟死して、妻を遺し、子を遺さずば、其兄弟其妻を娶りて、兄弟の嗣を興すべしと。二〇兄弟が第一の者妻を娶れり、而して死して子を遺さゞりき、二一第二の者も之を娶りて死せり、亦子を遺さざりき、第三の者も亦然り、二二七人之を娶りて子を遺さざりき、其後妻も亦死せり。二三然らば復活には、彼等が復活せん時は、此の婦は其中誰の妻と爲らんや、蓋七人之を妻と爲せり。二四イエス彼等に答へて曰へり、爾等は聖書をも神の能をも知らずして、之が爲に迷ふか。二五蓋死より復活せん時は、娶らず、嫁がず、乃天

使等の如く天に在るなり。二六 死者の復活すること、モイセイの書に、棘の篇において、如何に神が彼に、我はアウラアムの神、イサアクの神、イアコフの神なりと言ひしを未だ讀まざりしか、二七 神は死者の神に非ず、乃生者の神なり、故に爾等大に迷へり。二八 學士等の一人彼等の議論を聞き、イエスの善く對へしを見て、彼に就きて問へり、一切の誡の中何が第一たるや。二九 イエス之に答へて曰へり、一切の誡の中第一なる者は云はく、イスライリよ、聽け、主我等の神は一の主なり、三〇 又爾心を盡し、靈を盡し、意を盡し、力を盡して、主爾の神を愛せよ、此れ第一の誡なり。三一 第二は是に同じき者、即爾の隣を愛すること己のごとくせよ。斯の二の者より大なる誡は有らず。三二 學士彼に謂へり、善い哉師よ、爾が神は一にして、其外に神なしと謂ひしは實なり。三三 又心を盡して、智を盡し、力を盡して、彼を愛し、又己のごとく隣を愛するは、悉くの全燔祭祀祭祀に愈れり。三四 イエス其智を以て對へしを見て、之に謂へり、爾は神の國に遠からず。是より敢て復彼に問ふ者なかりき。三五 イエス又殿において教へつゝ宣べて曰へり、學士等何ぞ、キリストはダヲドの子なりと云ふ、三六 蓋

自ら聖神に由りて言へり、主我が主に謂へ
の覺さ爲すに迄れと。三七 斯くダヰド自ら彼を主と稱ふ、如何ぞ彼
民は樂みて彼に聞けり。三八 彼又其教の中に曰へり、謹みて學士等を防げ、彼等は長き
衣にて遊ぶを好み、街衢には問安、三九 會堂には首座、筵には上席を好む。四〇 此等嫠の
家を呑み、偖りて長き祈を爲す者は、尤重き定罰を受けん。四一 イイスス獻賽函に對
ひて坐し、民が金錢を獻賽函に投するを見たり。多くの富める者は、多く投じたり。四二
一人の貧しき嫠來りて、二「レプタ」を投じたり、卽五釐なり。四三 イイスス其門徒を召し
て、之に謂ふ、我誠に爾等に語ぐ、此の貧しき嫠は凡そ獻賽函に投する者より多く投じ
たり。四四 蓋皆其羨餘より投じ、彼は其乏しき所より、凡の有てる者卽其生計を盡く
投じたり。

第十三章

一 イイスス殿を出づる時、其門徒の一人彼に謂ふ、師よ、此の石の若何、此の
造構の若何を觀よ。二 イイスス彼に答へて曰へり、爾此等の大なる造構を見るか、此に
は一の石も上に遺らずして、皆圮されん。三 彼が橄欖山に殿に對ひて坐せる時、ペ

トル、イアコフ、イオアン、アンドレイ竊に彼に問へり、四請ふ、我等に告げよ、何の時に此
の事あらん、又此れ皆成らんとする時は、如何なる兆あるか。五イイスス彼等に答へて
曰へり、愼みて人に惑はさるゝ勿れ。六蓋多くの者は我が名を冒して來り、是れ我なり
と云ひて、多くの者を惑はさん。七爾等戰と戰の風聲とを聞かん時、懼るゝ勿れ、蓋此
れ有るべし、惟此れ尚末期には非ず。八蓋民は民を攻め、國は國を攻めん、處處に地震あ
り、饑饉變亂あらん、此等は苦難の始なり。九爾等自ら愼め、蓋人人爾等を公會に解し、
會堂に鞭たん、又爾等は我が爲の故に諸侯諸王の前に立てられん、彼等に證を爲さ
ん爲なり。一〇福音は必先づ萬民に傳へらるべし。一一爾等を曳きて解さん時、先づ
何を言ふべきを慮る勿れ、亦預め籌る勿れ、乃其時爾等に與へられん事を言へ、蓋
爾等言はんとするに非ず、乃聖神なり。一二兄弟は兄弟を父は子を死に付し、子は
親を攻め、且之を殺さん。一三爾等我が名の爲に衆人に憎まれん、惟終に至るまで忍ぶ
者は救はれん。一四爾等預言者ダニイルに因りて言はれたる荒廢の憎むべき物の立
つ當からざる處に立つを見ば、(讀む者悟るべし)其時イウデヤに在る者は山に遁る

べし。一五屋の上に在る者は家に下るべからず、其家より物を取らん爲に内に入るべ
からず。一六田に在る者は其衣を取らん爲に歸るべからず。一七當日には妊める者と
乳を哺ます者と禍なる哉。一八爾等の遁ぐることの冬に在らざらん爲に祈れ。一九
蓋其日に有らんとする患難は、神が萬物を造りし始より今に至るまで、未だ此くの如
きは有らざりき、後も亦有らざらん。二〇若し主其日を減ぜざりしならば、凡の肉身は
救はれざりしならん、然れども彼は其選びし所の選ばれたる者の爲に其日を減じた
り。二一其時若し人爾等に告げて、視よハリストス此に在り、或は視よ、彼に在りと云は
ば、信ずる勿れ。二二蓋僞ハリスト及び僞預言者起りて、奇徵と奇蹟とを施し、若し能す
べくば、選ばれたる者をも惑はすに至らん。二三爾等愼め、視よ、我預め皆爾等に言
へり。二四其日、彼の患難の後、日は晦み、月は其光を施さず、二五星は天より隕ち、天勢は
震ひ動かん。二六其時人の子が大なる權能と光榮とを以て雲に乘りて來るを見ん。二
七其時彼は其天使等を遣し、其選ばれたる者を四風より集めて、地の極より天の極に
至らん。二八無花果樹の譬を學べ、其枝已に柔にして、葉萠せば、爾等夏の近きを知る。二

九是くの如く爾等此等の事の成るを見ば、時の近くして、門に在るを知れ。三〇我誠に
爾等に語ぐ、此の代未だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。三一天地は廢せん、然れども我
が言は廢せざらん。三二其日其時は、之を知る者なし、天の使等も子も知らず、唯父のみ
之を知る。三三愼め、敬醒祈禱せよ、蓋爾等此の期の何の時に來るを知らず。三四譬へば
人他の地に往かんとして、其家を離るゝ時、其諸僕に權を與へ、各に爲すべきことを授
け、關者に敬醒せんことを命ぜしが如し。三五故に敬醒せよ、蓋爾等は家主の何の時、
卽暮に、或は夜半に、或は鷄鳴に、或は平旦に來るを知らず、三六恐らくは、彼突に來り
て、爾等の寢ぬるに遇はん。三七我が爾等に敬醒せよと謂ふは、卽衆人に謂ふなり。

第十四章

一二日の後は逾越節及び除酵節なり。司祭諸長と學士等とは如何に詭計
を用ゐて、イイススを執へて、之を殺さんと謀れり、二惟曰へり、節期に於てすべからず
恐らくは民の中に亂は起らん。三彼がヲイスニヤに於て癩者シモンの家に在りて席坐
せる時、一の婦價貴き純良なる「ナルド」の香膏を盛れる玉の盒を擱へ來り、盒を破
りて、彼の首に沃げり。四或者慍りて、相語りて曰へり、此の香膏の糜費は何の爲ぞ、五

蓋此れ銀三百餘の價に賣りて、貧しき者に施すを得しならん。乃婦を咎めたり。六イ
イスス曰へり之を舍け、何ぞ之を擾す、彼は我が爲に善き功を爲せり、七蓋貧しき者は
常に爾等と偕にし、爾等欲する時之に善を行ふを得、我は常に爾等と偕にするにあら
ず。八彼は能する所を行へり、卽我が體に膏ぬりて、之を葬に備へたり。九我誠に爾等に
語ぐ、全世界の中、凡そ此の福音の傳へられん處には、此の婦の爲しゝ事も述べられて、
其記念と爲らん。一〇時に十二の一なるイウダ「イスカリオト」司祭諸長に往けり、イイ
ススを之に賣らん爲なり。一一彼等聞きて喜び、銀を彼に與へんことを約したれば、彼
は如何にして好き機に於て之を付さんと謀れり。一二除酵節の首の日、卽逾越節の
羔を宰る時、門徒イイススに謂ふ、我等が往きて、何處に爾の爲に逾越節の食を備へ
んことを欲するか。一三彼二人の門徒を遣して、之に謂ふ、城に往け、水を盛れる瓶を擺
ふる人爾等に遇はん、之に從ひて、一四其入る所の家の主に語げよ、師言ふ、我が門徒と
偕に逾越節筵を食すべき室は何處に在るかと。一五彼爾等に敷き飾りて備へたる大
なる樓を示さん、彼處に我等の爲に備へよ。一六門徒出でゝ、城に來りしに、其言ひし若

き事に遇へり、乃逾越節を備へたり。一七 暮に及びて、彼十二徒と偕に來る。一八 既に席坐して食する時、イイスス曰へり、我誠に爾等に語ぐ、爾等の中の一人、我と共に食する者は、我を賣らん。一九 彼等愛ひて、一一（彼に）謂へり、是れ我に非ずや。二〇 答へて曰へり、十二の中の一、我と偕に盂に蘸す者、是なり。二一 人の子は逝く、之を指して録されしが如し、惟人の子を賣る者は禍なる哉、斯の人生れざりしならば、彼の爲に善かりしならん。二二 彼等が食する時、イイスス餅を取り、祝福して擘き、彼等に與へて曰へり、取りて食へ、是れ我の體なり。二三 又爵を取り、感謝して之を與へ、彼等皆之を飲めり。二四 彼曰へり、是れ我の新約の血、衆くの人の爲に流さるゝ者なり。二五 我誠に爾等に語ぐ、我復葡萄の實より飲まずして、神の國に於て新しき者を飲む日に至らん。二六 既に詠ひて、橄欖山に往けり。二七 イイスス彼等に謂ふ、爾等皆今夜我の爲に躓かん、蓋録せるあり、我牧者を擊たん、而して羊は散らんと。二八 我が復活の後、我爾等に先だちてガリレヤに往かん。二九 ペトル彼に謂ふ、我誠に爾に語ぐ、今日此の夜、鷄の再鳴かざるに、イイスス彼に謂ふ、我誠に爾に語ぐ、今日此の夜、鷄の再鳴か

ざる先に、爾三次我を諱まん。三一 彼益力言して曰へり、我爾と偕に死すとも、爾を
諱まざらん、皆亦是くの如く言へり。三二 ゲフシマニヤと名づくる處に來りて、イイス
ス其門徒に謂ふ、爾等此に坐して、我が往きて祈るを待て。三三 乃ペトル、イアコフ、イ
オアンを攜へて己と偕にし、畏と哀とを催せり。三四 又彼等に謂ふ、我が靈憂ひて死
に近づけり、爾等此に在りて敬醒せよ。三五 乃少しく離れて、地に伏し、若し能すべく
ば、斯の時の彼を過ぎんことを祈りて 三六 曰へり、「アウワ」父よ、爾には能せざる所な
し、此の爵をして我を過ぎしめよ、然れども我が欲する所成らずして、爾が欲する所成
るべし。三七 遂に來りて、彼等の寢ぬるを見て、ペトルに謂ふ、シモンよ、爾寢ぬるか、一時
も敬醒する能はざりしか、三八 爾等敬醒せよ、祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり、神は
勇めども、肉體は弱し。三九 復往きて、同じき言を言ひて祈れり。四〇 返りて、彼等の復寢
ぬるを見たり、其目倦みたればなり、彼等何を以て彼に對ふべきを知らざりき。四一 第
三次來りて、彼等に謂ふ、爾等尚寢ねて休むか、已みぬ、時至れり、視よ、人の子は罪人の手
に付さる。四二 起きよ、行かん、視よ、我を付す者は近づけり。四三 彼が尚言ふ時、忽十二

の一なるイウダは來り、劍と棒とを持てる多くの民、司祭諸長、學士等より遣はされし者は、彼と偕にせり。四四 イイスを付す者彼等に號を與へて曰へり、我が接吻せん者は、卽ち此人なり、彼を執へて、愼みて之を曳け去と。四五 來りて、直に彼に就き曰く、夫子夫子、乃ち彼に接吻せり。四六 彼等其手をイイスに措きて之を執へたり。四七 此に立てる者の一人劍を拔きて、司祭長の僕を擊ちて、其耳を削げり。四八 イイス彼等に謂へり、爾等我を執へざりき、然れども聖書は應に爲に出でたり。四九 我日日爾等と偕に殿に在りて誨へしに、爾等は盜賊に向ふ如く、劍と棒とを持ちて、我を捕へんとは爲ざりき。五〇 其時皆彼を遺てゝ奔れり。五一 一の少き者裸體に布を纏ひて、彼に從ひしが、人々之を執へんとせしに、五二 布を棄てゝ、裸體にして奔れり。五三 イイスを曳きて、司祭長に至りしに、彼處には司祭諸長、長老等、學士等、咸く集れり。五四 ペトル遠く彼に隨ひて、司祭諸長及び庭の內に入り、下吏等と偕に坐して、火に煖れり。五五 司祭諸長及び全公會は、イイスを死に致さん爲に、彼に對する證を求めたれども、得ざりき。五六 蓋多くの者彼に對して妄證したれども、其證は符はざりき。五七 或者起ちて、彼に對して

妄證して曰へり。五八　我等其言ふを聞けり、曰く、我手にて造られたる此の殿を毀ちて、三日の中に手にて造られざる他の者を建てんと。五九　但し此の證も亦符はさりき。六〇　是に於て司祭長中に立ちて、イイスに問ひて曰へり、爾は讃美せらるゝ者の子ハリストスなるか。六一　イイスは默然として、一も答へざりき。司祭長復彼に問ひて曰へり、爾答ふる所なきか、彼等が爾に對して證する所如何。六二　然れども彼默然として、一も答へざりき。司祭長復彼に問ひて曰へり、爾は讃美せらるゝ者の子ハリストスなるか。六二　イイス曰へり、我なり、且爾等は人の子が大能の右に坐し、天の雲に乘りて來るを見ん。六三　其時司祭長己の衣を裂きて曰く、我等何ぞ復證者を求めん、六四　爾等其神を瀆すを聞けり、爾等如何に意ふ。彼等皆之を死に當る者と定めたり。六五　是に於て或者は彼に唾し、又其面を掩ひて、彼を擊ちて曰へり、預言せよ、下吏等も亦其頬を批てり。六六　ペトル下に中庭に在る時、司祭長の婢の一人は來り、六七　ペトルの煖まれるを見て、之に目を注ぎて曰く、爾もナザレトのイイスと偕に在りき。六八　然れども彼諱みて曰へり、我爾が言ふ所を知らず、又覺らず。乃外に前庭に出でたれば、鷄鳴けり。六九　婢又彼を見て、旁に立てる者に謂へり、此の人も其黨の一人なりと。七〇　彼復諱みたり。少頃ありて彼處に立

てる者、復ペトルに謂へり、誠に爾も其黨の一人なり、蓋爾はガリレヤ人にして爾の言語は、似たり。七一彼は詛ひ且誓へり、我爾等が言ふ所の人を識らずと。七二斯の時鷄再鳴けり。ペトルはイエスの彼に、鷄の二次鳴かざる先に爾三次我を諱まんと、云ひし言を憶ひ起して、突けり。

第十五章　一平旦に及びて、直に司祭諸長老等學士等及び全公會と共に集議し、イエスを縛りて、曳きてピラトに解せり。二ピラト彼に問へり、爾はユダヤ人の王なるか。彼答へて曰へり、爾言ふ。三司祭諸長は多くの事を以て彼を訟へたり。四ピラト復彼に問ひて曰へり、爾答ふる所なきか、觀よ、爾に對して證することの幾何ぞ。五イエス仍一言も答へざりき、ピラト奇むに至れり。六節期には、彼一人の囚人を、民の求むる所に任せて釋すことありき。七時にバラバと名づくる者、其共謀者と偕に繋がれ居たり、即騒亂の時に殺人を爲しゝ黨なり。八民は聲を揚げて、常に彼等の爲に行ひし如く爲さんことを求めたれば、九ピラト答へて曰へり、我が爾等にユダヤ人の王を釋さんことを欲するか。一〇蓋司祭諸長が嫉みに因りて彼を解しゝを知れり。一一然

るに司祭諸長は民に唆めて、寧ワラウワを釋さんことを乞はしめたり。一二 ピラト答
へて復彼等に謂へり、然らば爾等がイウデヤ人の王と名づくる者には、我が何を爲さ
んことを欲するか。一三 彼等復號びて曰へり、彼を十字架に釘せよ。一四 ピラト彼等に
謂へり、彼は何の惡を行ひしか。然れども彼等愈號べり、彼を十字架に釘せよ。一五 其
時ピラト民の望に適はしめんと欲して、ワラウワを彼等に釋し、イイススを鞭ちて、十
字架に釘せん爲に付せり。一六 兵卒彼を曳きて、中庭の内卽公廨に至り、全營を集め、
一七 彼に紫袍を衣せ、棘の冕を編みて冠らせ、一八 其安を問ひて曰へり、イウデヤ人
の王、慶べよ。一九 又葦を以て其首を擊ち、彼に唾し、跪きて彼を拜せり。二〇 既に戲れ畢
りて、其紫袍を褫ぎ、彼の衣を衣せ、十字架に釘せん爲に彼を曳き往けり。二一 或キ
リ子ヤの人シモン、卽アレキサンドル及びルフの父が、田より來り過ぐるを強ひて、
其十字架を負はしめたり。二二 ゴルゴフの處、譯すれば、髑髏の處に曳き至りて、二三 沒
藥を和へたる酒を彼に飲ませしに、彼受けざりき。二四 彼を十字架に釘せし者は其衣
を分ち、孰も何を得んと闇を取れり。二五 第三時に在りて、彼を十字架に釘せり。二六 其

罪の標に書して曰へり、イウデヤ人の王と。二七 彼と偕に二人の盜賊を十字架に釘せ
り、一人は其右、一人は其左なり。二八 是に於て聖書の言應へり、曰く、罪犯者と偕に算へ
られたりと。二九 過ぐる者彼を誚り、首を搖がして曰へり、嘘殿を毀ちて三日に之を建
つる者よ、三〇 己を救ひて十字架より下れ。三一 同じく司祭諸長も學士等と偕に嘲り
て、相語りて曰へり、他人を救ひて、己を救ふ能はず。三二 ハリストス、イズライリの王、今
十字架より下るべし、我等が見て彼を信ぜん爲なり。彼と偕に十字架に釘せられし者
も彼を詬れり。三三 第六時に及び、晦冥は全地を蔽ひて、第九時に至れり。三四 第九時に
イイスス大聲に呼びて曰へり、「エロイ、エロイ、ラマ、サワフニ」譯すれば、我が神よ我が
神よ、何ぞ我を遣てたる。三五 旁に立てる者の中、或人之を聞きて曰へり、視よ、イリヤ
を呼ぶ。三六 一人趨り往きて、海絨に醋を盈たし、葦に束ねて、彼に飲ましめて曰へり、姑
く舍け、イリヤ來りて、彼を下すや否やを觀ん。三七 イイスス大聲を發して、氣絶えたり。
三八 時に殿の幔は、上より下に至るまで裂けて、二となれり。三九 彼に對ひて立ちたる
百夫長は、其斯く呼びて氣絶えしを見て、曰へり、斯の人は誠に神の子なり。四〇 彼處に

亦遙に望める婦等あり、其中にマリヤ「マグダリナ」、小なるイアコフとイオシヤとの
母マリヤ、及びサロミヤ、四一 卽彼がガリレヤに在りし時にも彼に從ひて事へし者、
及び其他彼と偕にイエルサリムに上りし多くの婦ありき。四二 日已に暮れしに、(是の
日は備節日にして安息日の前日なりし故)、四三 アリマゴヤの人イオシフ、貴き議士、自
らも神の國を俟てる者は來り、毅然としてピラトの許に入りて、イイススの屍を求め
たり。四四 ピラト其已に死せしを奇み、百夫長を召して、彼死して久しきかと問ひ、四五
百夫長より之を知りて、屍をイオシフに與へたり。四六 彼は布を買ひ、之を下して布に
裹み、之を磐に鑿ちたる墓に置き、石を墓の門に轉せり。四七 マリヤ「マグダリナ」及び
イオシヤの母マリヤは彼を置きたる處を見たり。

第十六章

一 安息日過ぎて、マリヤ「マグダリナ」イアコフの母マリヤ、及びサロミヤ、
香料を買ひたり、往きてイイススに釁らん爲なり。二 七日の首の日甚早く、墓に來る、
日の出づる頃なり。三 相語りて曰へり、誰か我等の爲に石を墓の門より移さん。四 目を
擧げて、石の已に移されたるを見る、蓋其石は甚大なり。五 彼等墓に入りて、白衣を衣

たる少者が右の方に坐せるを見て駭けり。六彼は之に謂ふ、駭く勿れ、爾等はナザレトのイエスを尋ぬ、彼は復活して此に在らず、視よ、此は彼を置きし處なり。七往きて、其門徒及びペトルに語げて言へ、彼は爾等に先だちてガリレヤに往く、爾等彼處に於て彼を見ん、其爾等に言ひしが如しと。八婦急ぎ出でゝ、墓より奔り、戰きかつ驚きて、一言も人に語げざりき、懼れしが故なり。九七日の首の日朝早く、イエス復活して、先づマリヤ「マグダリナ」、即ち其嘗て七の魔鬼を逐ひ出しし所の者に現れたり。一〇婦往きて、先に彼と偕に在りし哀み哭ける者に告げたれど、その其生きて、之に見られたりと聞きて、信ぜざりき。一一其後彼等の中の二人が村に往く時、イエス變りたる容を以て之に途に現れたり。一二二人返りて、餘の者にも、一一彼等の信ぜざりき。一四卒に十一門徒に其席坐の間に現れて、其信なきと心の頑なるとを責めたり、彼の復活したるを見し者を信ぜざりし故なり。一五又彼等に謂へり、全世界に往きて、福音を悉くの受造物に傳へよ、一六信じて洗を受くる者は救にれ、信ぜざる者は罪に定められん。一七信ずる者には斯の休徴は從はん、我が名に因りて、魔

鬼を逐ひ出し、新なる方言を語ひ、一八蛇を操り、毒を飲むとも、彼等を害せざらん、手を病者に按せば、愈ゆるを得ん。一九主は彼等に語りし後天に升り、神の右に坐せり。二〇彼等は出でゝ、四方に教を傳へ、主は彼等を相け、之に従ふ休徴を以て其言を固めたり、

「アミン」。

ルカに因る聖福音

第一章

一　我等の中に明に知られたる事、二　即ち始より目の實見者及び役者たりしものが我等に傳へたる事に就きて、多くの者が手を擧げて傳記を作るに因り、三　尊惠なるテオピルよ、我も凡の事を始より審に推し原れ、次第を以て爾の爲に書さんこそのよしと思ひ起せり、四　爾が學びたる教の堅き基を知らん爲なり。五　イウデヤの王ヘロドの時、アビヤの班に屬する司祭にザハリヤと名づくる者あり、其妻はアアロンの裔にして、名をエリサベタと云ふ。六　二人ながら神の前に義なる者にして、主の一切の誡命禮儀を嚴くるなく行へりし故なり、七　彼等に子なかりき、エリサベタは妊まざる者たりし上、二人共に年已に老いたり。八　ザハリヤが其班の次に依りて、司祭の職を神の前に行ふに、九　祭司例に循ひ、籤を擊きて、主の殿に入りて、香を焚くを得たりし時、十　衆民外に在りて禱れり。一一　主の天使ザハリヤに現れて、香壇の右に立てり。一二　ザハリヤ之を見て、驚き且懼れたり。一三　天使彼に謂へり、ザハリヤ懼るゝ勿れ、蓋爾の

祈禱は聞かれたり、爾の妻エリサベタ子を生まん、爾之をイオアンと名づけん。一四爾には喜と樂とあらん、且多くの者は其生るゝに因りて悦ばん。一五蓋彼は主の前に大なる者となり、酒と濃醪とを飲ます、其母の胎より聖神に充てられん。一六彼はイスラエルの諸子の多くの者を轉じて、主彼等の神に歸せしめん。一七彼はエリヤの精神と能力とを以て主の前に行かん、父の心を子に、逆ふ者を義者の智慧に歸らしめて、備へられたる民を主に進めん爲なり。一八ザハリヤ天使に謂へり、我何を以て之を知らん、蓋我老いたり、我が妻も年進けり。一九天使彼に答へて曰へり、我はガブリエル、神の前に立つ者なり、使を奉じて爾に告げ、爾に此の福音を爲す。二〇視よ、爾瘖者となり、此の事の成る日に至らん、我が言を信ぜざりし故なり、是の言は時に及びて必應ばん。二一時に民はザハリヤを俟ちて、其殿の内に久しく在るを奇めり。二二遂に出でゝ彼等に言ふ能はざれば、乃其殿の内に異象を見しことを曉れり、彼は首を以て彼等に意を示し、而して瘖たりき。二三其職事の日滿つるに及びて、家に歸れり。二四此の日の後、其妻エリサベタ妊みて、隱れ居りしこと五月にして曰へり、二五主

は斯く我に爲せり、彼は此の日に於て我を眷みて、我が耻を人人の間に洒がしめたり。
二六 第六月に於て、天使ガウリイルは神より使を奉じて、ガリレヤの邑ナザレトと名
づくる所に、二七 ダワイドの家の人、名はイオシフと云ふ者に聘せられたる處女に臨め
り、處女の名はマリヤなり。二八 天使入りて之に謂へり、恩寵を蒙れる者、慶べよ、主は爾
と偕にす、爾は女の中に祝福せられたり。二九 女彼を見て、其言を訝り、此の問安は何事
ならんと思へり。三〇 天使之に謂へり、マリヤ懼るゝ勿れ、蓋爾は神の前に恩寵を獲た
り。三一 視よ、爾妊みて子を生まん、其名をイイスと名づけん。三二 彼は大なる者とな
りて、至上者の子と稱へられん、主神は彼に其祖ダワイドの位を與へん、三三 彼は世世イ
アコフの家に王となりて、其國終なからん。三四 マリヤ天使に謂へり、我人に適かざる
に、如何にして此の事あらん。三五 天使彼に答へて曰へり、聖神爾に臨み、至上者の能爾
を蔭はん、故に生む所の聖なる者も神の子と稱へられん。三六 視よ、爾の親戚エリサヌ
タ年老いて子を妊めり、素妊まざる者と稱せられしに、今已に六月なり。三七 蓋神に在
りては凡そ其言ふ所能はざることなし。三八 マリヤ曰へり、我は主の婢なり、爾の言の

如く我に成るべし。天使彼を離れたり。三九 當日マリヤ起ちて、亟に山地に邇き、イウダの邑に至り、四〇 ザハリヤの家に入りて、エリサベタに安を問へり。四一 エリサベタ聖神に滿てられたり、胎兒其腹の内に躍れり。エリサベタ聖神に滿てられたり、聲を大擧に呼びて曰へり、爾は女の中に祝福せられたり、爾が胎の菓も祝福せられたるか。四二 我が主の母我に臨めり、我何より此を得たるか。四四 聲爾が安を我が耳に入りし時、胎兒我が腹の内に喜び躍れり。四五 信ぜし者は福なり、蓋主より彼に告げられし事は必ず成らん。四六 マリヤ曰へり、我が霊は主を崇め、四七 我が神は神我が救主を悦べり、四八 蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと謂はん。四九 蓋權能者は我に大なる事を爲せり、其名は聖なり、五〇 其矜恤は世世彼を畏るゝ者に臨まん。五一 彼は其臂の力を顯し、心の意の驕れる者を散らせり。五二 權ある者を位より黜け、卑しき者を擧げ、五三 飢うる者を善き物に飽かしめ、富める者を空しく返らしめたり。五四 其僕イズライリを納れて。五五 其嘗て我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其裔とを世世に憶まんことを記念せり。五六 マリヤはエリサベタと共に居りしこ

三月にして、其家に歸れり。五七 エリサベタに産期届りて、乃子を生めり。五八 彼の近隣と親戚とは、主が其大なる矜恤を彼に垂れしを聞きて、彼と偕に喜べり。五九 第八日に及びて、子に割禮を行はん爲に來り、之を其父の名に依りて、ザハリヤと名づけんとせしに、六〇 其母答へて曰へり、否之をイオアンと名づく可し。六一 彼等曰へり、爾が親戚の中に一人も此の名を名づくる者なし。六二 遂に其父に形を以て如何に之を名づけんと欲するを問ひしに、六三 彼簡を請ひて書して曰へり、其名はイオアンなりと、皆之を奇とせり。六四 直に其口啓け、舌解け、彼言を發して、神を祝讃せり。六五 其近隣の者皆懼れ、且此等の事遍くイウデヤの山地に揚れり。六六 凡そ聞きし者其心に之を藏めて曰へり、此の子は若何にならんと、主の手は彼と偕にせり。六七 其父ザハリヤ聖神に滿てられ、預言して曰へり、六八 祝讃せらるゝ哉主、イズライリの神、蓋其民を眷みて、之に贖を爲し、六九 我等の爲に救の角を其僕ダヰドの家に興せり、七〇 古世より其聖なる預言者の口を以て言ひしが如し、七一 即我等を我が諸敵及び凡そ我等を惡む者の手より救ひ、七二 以て矜恤を我が先祖に施し、其聖なる約、七三 即我が祖アウラア

ムに矢ひたる誓を記念せん、七四謂ふ、我等に我が諸敵の手より救はれし後、七五懼な
く、彼の前に在りて、聖を以て、義を以て、生涯彼に事へしめんと。七六子よ、爾も至上者の
預言者と稱へられん、蓋主の面前に行きて、其道を備へ、七七彼の民に、其救は即諸罪
の赦にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。七八此の矜恤に因りて、東旭は上
より我等に臨めり、七九幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向
はしめん爲なり。八〇子は漸く生長し、精神益強健にして、其イズライリに顯るゝ
日に至るまで野に居りき。

第二章

一彼の日クサリアウグストより詔出でゝ、天下の人を咸く籍に登らしむ。二
此の籍はキリニイのシリヤを治むる時、初めて行はれし者なり。三是に於て衆人籍に
登らん爲に、各其邑に往けり。四イオシフも亦ダヲドの宗族と血統となるを以て、五
マリヤ其聘せられたる妻、已に孕める者と偕に、籍に登らん爲に、ガリレヤの邑ナザレ
トより、イウデヤに、ダヲドの邑ヲフレエムと名づくる處に往けり。六彼等が彼處に在
る時に、産日届れり。七乃其冢子を生み、之を襁褓に裹みて、槽に置けり、旅館には彼等

の爲に居る所なかりし故なり。八此の地に牧者あり、夜間野に於て其羊の群を守れり。
九視よ、主の天使彼等の前に立ち、主の光榮彼等を環り照せり、彼等大に懼れたり。一〇
天使彼等に謂へり、懼るゝ勿れ、蓋視よ、我爾等に大なる喜、萬民に及ばんとする者を
福音す、一一今日爾等の爲にダヴィドの邑に於て、救主即主ハリストス生れたり。一二
爾等襁褓に裹まれたる嬰兒の槽に臥せるを見ん、是れ其徵なり。一三倏天使と偕に
衆くの天軍あり、神を讃美して曰へり、一四至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、
人には惠臨めり。一五天使等が彼等を離れて天に升りし時、牧者互に言へり、ヴィフレエ
ムに往きて、彼處に成りし事、主が我等に示しゝ所を觀ん。一六乃急ぎ來りて、マリヤ
とイオシフ及び槽に臥せる嬰兒を見たり。一七既に見て、此の兒に關して彼等に告げ
られし事を語れり。一八聞きし者皆牧者が語りし事を奇とせり。一九惟マリヤは此等
の言を悉く其心に藏めて、之を守れり。二〇牧者は、凡そ彼等に告げられし如く、聞きし
事見し事の爲に、神を讃榮讃美して返れり。二一八日滿ちて、嬰兒に割禮を行ふべき時
至りたれば、其名をイイススと名づけたり、即其未だ妊まれざる先に天使の名づけ

し所なり。二二 モイセイの律法に依りて、潔の日の滿つるに及び、嬰兒をエルサリムに上れり、之を主に奉らん爲なり。二三 主の律法に錄されしが如し、曰く、凡そ初めて胎を開く男子は主に聖なりと稱へらるべしと。二四 又、主の律法に言ふ所に依りて、雙の班鳩或は二の雛鴿を祭に獻げんが爲なり。二五 視よ、イエルサレムにシメオンと名づくる人あり、斯の人義にして敬虔なりイズライリを慰むる者を俟ち、而して聖神彼に臨めり。二六 彼に、聖神に由りて、主のハリストスを見ざる先には、死を見ざらんと示されたり。二七 彼神に依りて殿に來れり、父母が嬰兒イイスを攜へて、之に律法の例を行はん爲に入りし時、二八 彼は嬰兒を攜へて懷に抱き、神を祝讃して曰へり、二九 主宰よ、今爾の言に循ひて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ。三〇 蓋我が目は爾の救を見たり、三一 爾が萬民の前に備へし者なり、三二 是れ異邦人を照す光、及び爾の民イズライリの榮なり。三三 イオシフ及び嬰兒の母は彼に關して言はるゝ事を奇とせり。三四 シメオン彼等を祝福して、其母マリヤに謂へり視よ、此の子は置かれて、イズライリの中に衆くの者の顛れ又は興るを致し、且駁論の號と爲らん、三五 衆くの心の念の露れ

ん爲なり、爾にも劔は靈を貫かん。三六 又預言女アンナあり、アシルの支派ファイルの
女なり、處女の時より夫と偕に居りしこと七載、年大に老いたり、三七 齡約八十四の
嫠にして、殿を離れず、齋と祈禱とを以て晝夜奉事せし者なり。三八 彼も斯の時來り就
きて、主を讃榮し、且此の嬰兒の事を凡そイエルサリムに在りて贖を俟つ者に語れり。
三九 既に主の律法に遵ひ、悉く之を竟へて、ガリレヤの故邑ナザレトに歸れり。四〇 子
は漸く成長し、精神益强健にして、智慧充ち、神の恩寵は彼に臨めり。四一 其父母歲
毎に逾越節筵にイエルサリムに往けり。四二 彼の十二歲になりし時、亦節筵の例に遵
ひて、イエルサリムに上りしに、四三 日卒りて返る時、童子イイススイエルサリムに留
れり。イオシフと其母とは之を知らずして、四四 彼は同行者の中に在りと意へり、一日
程を行きて、彼を親戚知己の間に尋ねしに、四五 遇はざりき、乃彼を尋ねてイエルサリ
ムに返れり。四六 三日の後彼に殿に遇へるに、彼教師の中に坐して、且聽き、且問へり。四
七 彼に聞く者皆其智慧と其應對とを奇とせり。四八 父母彼を見て駭けり、其母彼に謂
へり、兒よ、何ぞ我等に斯く行ひたる、視よ、爾の父と我と憂ひて爾を尋ねたり。四九 彼曰

へり、奚ぞ我を尋ねたる、豈我は我が父に屬する所に在るべきを知らずや。五〇然れど
も彼等は其言ひし言を曉らざりき。五一イイスス彼等と偕に下りて、ナザレトに來り、
彼等に順ひ居りき。彼の母は此等の言を悉く其心に藏めたり。五二イイススは智慧と
齡と神及び人人の寵愛とに益進めり。

第三章

一ティヱリイケサリ在位の十五年、ポンティイピラトイウデヤの方伯たり、イロ
ドガリレヤの分封の君たり、其兄弟フィリップイトゥレヤ及びトラホニダの地の分封の君
たり、リサニイアフィリニヤの分封の君たり、二アンナ及びカイアフの司祭長たる時、神
の言はザハリヤの子イオアンに野に臨めり。三彼はイオルダンの近傍を周く行きて、
罪の赦の爲に悔改の洗禮を傳へたり、四預言者イサイヤの言の書に錄せるが如し、云
く、野に呼ぶ者の聲ありて云ふ、主の道を備へ、其徑を直くせよ、五凡の谷は塡められ、凡
の山と岡とは卑くせられ、曲れるは直くせられ、險しきは平にせられん、六而して凡の
肉身は神の救を見んと。七イオアンは洗を受くる爲に來れる民に謂へり、蝮の類よ、誰
か爾等に將來の怒を避くることを示したる、八然らば悔改に合ふ果を結べ、自ら意ひ

て、我等の父はアウラアムなりと云ふ勿れ、蓋我爾等に語ぐ、神は此の石よりアウラアムの爲に子を興すを能す。九既に斧も樹の根に置かる、凡そ善き果を結ばざる樹は、斫られて火に投げられん。一〇民彼に問ひて曰へり、然らば我等何を爲すべきか。一一彼答へて曰へり、二の衣を有てる者は有たざる者に與へよ、食を有てる者も然せよ。一二稅吏も亦洗を受くる爲に來りて、彼に謂へり、師よ、我等何を爲すべきか。一三彼答へて曰へり、爾等に定められたる者より多く取る勿れ。一四軍士も亦彼に問ひて曰へり、我等は何を爲すべきか。彼等に謂へり、人を刼す勿れ、誣ふる勿れ、爾等の俸給を以て足れりとせよ。一五民が望を懷きて、皆其心に、イオアンを是れハリストスに非ずやと度りし時、一六イオアン衆に答へて曰へり、我水を以て爾等に洗を授く、然れども更に我より強き者は來る、我其屨の帶を解くにも堪へず、彼は聖神及び火を以て爾等に洗を授けん。一七其箕は其手に在り、彼は其禾場を淨めて、麥を其倉に斂め、糠を滅ぼざる火に燬がん。一八其他多くの事を教へて民に福音せり。一九分封の君イロド、其兄弟の妻イロデアダの爲、及び凡そイロドの行ひし惡の爲に、彼に責められて、二〇凡の事に又之

ロム、其父はアレス、其父はイウダ、三四 其父はヤコブ、其父はイサアク、其父はアブラハム、其父はテラ、其父はナホル、三五 其父はセルフ、其父はラガフ、其父はファレク、其父はヘベル、其父はサラ、三六 其父はカイナン、其父はアルファクサド、其父はシム、其父はノイ、其父はラメフ、三七 其父はマフサラ、其父はエノフ、其父はイアレド、其父はマレレイル、其父はカイナン、其父はエノス、其父はシフ、其父はアダム、其父は神なり。

第四章

一 イイスス聖神に満てられて、イオルダンより歸り、神に導かれて野の二 四十日の間惡魔に試みられたり。此の諸日には一切食はざりき、其卒るに及びて遂に飢ゑたり。三 惡魔彼に謂へり、爾若し神の子ならば、此の石に命じて、餅とせよ。四 イイススに答へて曰へり、錄せるあり、人は惟餅のみを以て生くべきに非ず、乃凡の神の言を以てす。五 惡魔彼を攜へて、高き山に登り、瞬の間に世界の萬國を示して、六 彼に謂へり、此等の一切の權威と榮華とを爾に與へん、蓋此れ我に委ねられたり、我欲する者に之を與ふ。七 故に爾若し我を拜せば、悉く爾の有とならん。八 イイススに答へて曰へり、サタナ、我より退け、蓋錄せるあり、主爾の神を拜せよ、獨彼のみに事へよ

さ。九 又彼を攜へて、イエルサリムに至り、殿の頂に立たしめて、彼に謂へり、爾若し神の子ならば、自ら是より下に投ぜよ、一〇 蓋錄せるあり、爾の爲に其天使に命じて、爾を護らしめん、一一 彼等其手にて爾を抱へて、爾の足を石に躓かざらしめんと。一二 イエス之に答へて曰へり、言へるあり、主爾の神を試みる勿れと。一三 惡魔は既に其誘試を盡して、暫く彼を離れたり。一四 イエス神の能を滿てヽ、ガリレヤに歸れり、其聲名徧く四方に播れり。一五 彼其諸會堂に於て教を宣べ、衆人に讃榮せられたり。一六 彼はその養育せられし所のナザレトに來り、安息の日に、其常例に依りて、會堂に入り、讀まんと欲して起てり。一七 預言者イサイヤの書を彼に與ふるあり、彼は書を披きて、左に錄せる所を出せり、云く、一八 主の神我に在り、蓋彼は我に膏して、貧しき者に福音せしめ、我を遣して、心の傷める者を醫し、擄者に釋を、瞽者に見ることを傳へ、壓せらるヽ者に自由を與へ、一九 主の禧年を傳へしめたりと。二〇 乃書を卷て、役者に與へて坐せしに、會堂に在る者皆彼に目を注げり。二一 彼宣べ始めて曰へり、此の爾等が聽きし所の書は今應へり。二二 衆皆之を證し、且其口より出づる恩寵の言を奇として曰へり、

是れイオシフの子に非ずや。二三 イイスス彼等に謂へり、爾等必我に諺を引きて云はん、醫師よ、己を醫せ、我等が聞きし所、カペルナウムに行はれし事を、此に爾の故土に行へ也。二四 又曰へらく、預言者は其故土に在りて納れらるゝ者あらず。二五 我眞實に爾等に語ぐ、イリヤの日に、三年六月天閉ぢて、大なる饑饉全地に至りし時、イズライリの中に多くの孀婦ありたれども、二六 イリヤは其一人にも遣されざりき、唯シドンのサレプタにのみ、孀なる婦に遣されたり。二七 又預言者エリセイの時、イズライリの中に多くの癩病者ありたれども、其一人も潔められざりき唯シリヤの人ナアマンのみ潔められたり。二八 會堂に在る者此を聞きて、皆大に怒り、二九 起ちて彼を邑の外に逐ひ、曳きて其邑の建てられたる山の崖に至り、彼を推し下さんとせしに、三〇 彼は衆の中を過ぎて去れり。三一 かりレヤの邑カペルナウムに來りて彼等を教へしに、三二 人人其訓を奇とせり、其言に權ありし故なり。三三 會堂に汚鬼に憑らるゝ人あり、大聲に呼びて曰へり、三四 咦ナザレトのイイススよ、我等と爾と何ぞ與らん、爾は我等を滅さん爲に來りしか、我爾が誰なるを知る、乃神の聖なる者

なり。三五 イイスス彼を禁めて曰へり、口を緘らて、此の人より出でよ。魔鬼之を堂中に
仆し、少しも之を傷はずして出でたり。三六 衆皆驚きて、相語りて曰へり、是れ如何な
る言ぞ、蓋彼權を以て、能を以て、汚鬼に命じて、彼等出づ。三七 其聲聞徧く地の四方に揚
れり。三八 彼會堂を出でゝ、シモンの家に入れり、シモンの居母熱を病むこと甚し、人之
が爲に彼に請へり。三九 彼其傍に立ちて、熱を禁めたれば、乃退けり、婦直に起きて彼
等に供事せり。四〇 日の入る時、種種の病を患ふる者を有てる人、咸之を攜へて、彼に就
きたるに、彼一一手を其上に按せて、之を醫せり。四一 魔鬼も亦多くの人より出でゝ、呼
びて曰へり、爾は神の子ハリストスなり。然るに彼は之に禁めて、其ハリストスたるを
識ることを言ふを許さざりき。四二 朝に及びて、イイスス出でゝ、野の處に適けり、民彼
を尋ね、彼に來りて、其彼等を離れ去らんことを止めたり。四三 然れども彼は之に謂へ
り、我他の邑にも神の國を福音す可し、蓋我は是が爲に遣されたり。四四 乃ガリレヤ
の諸會堂に於て教を宣べたり。

第五章

一 民が神の言を聽かん爲に、彼に擁し逼りし時、彼ゲンニサレトの湖の濱に

立ちて、二二の舟の湖に在るを見たり、漁者は舟を離れて網を洗へり。三彼はシモンに
屬する一の舟に登りて、少しく岸より離れんことを請ひ、坐して舟より民を教へたり。
四語り竟りて、シモンに謂へり、深き處に移り、網を下して、漁せよ。五シモン彼に對へて
曰へり、夫子よ、我等終夜勞して、得る所なかりき、然れども爾の言に依りて、我網を下さ
ん。六既に之を行ひて、魚を圍めること甚多く、網裂くるに至れり。七乃他の舟に在る
侶を招きて、來り助けしむるに、彼等來りて、魚二の舟に物ちて、幾ど沈まんとせり。八シ
モンペトル之を見て、イイススの膝下に伏して曰へり、主よ、我を離れよ、我罪人なれば
なり。九蓋彼及び彼と偕に在りし者は、皆漁りたる魚の爲に甚驚けり、一〇シモンの
侶たりしゼビデイの子イアコフ及びイオアンも亦然り。イイススシモンに謂へり、懼
るゝ勿れ、今より後爾人を漁らん。一一彼等舟を岸に曳き、一切を舍てゝ、彼に從へり。一
二イイスス一の邑に在りし時、全身癩病を患ふる人來り、イイススを見て俯伏し、彼に
求めて曰へり、主よ、爾若し望まば、我を潔むるを能す。一三彼手を伸べて、之に觸れて曰
へり、我望む、潔まれ。癩病直に離れたり。一四イイスス彼に戒めて言ふ、人に告ぐる勿

れ、乃往きて、己を司祭に示せ、且爾の潔まりし爲に、モイセイの命ぜし如く獻じて、彼
等に證を爲せ。一五 然れども其聲名益播り、衆くの民は教を聽き、又其諸病を醫され
ん爲に彼に集れり。一六 唯彼は退きて、野に適きて禱れり。一七 一日彼教を宣べしに、ア
リセイ等と教法師等と、ガリレヤの諸鄕、イウデヤ、及びイエルサリムより來りし者は
坐し、主の能は病者を醫すことに於て顯れたり。一八 視よ、人人癱瘋の者を牀に載せて、
舁き來り、之を家に入れて、イイススの前に置かんと欲したれども、一九 人の衆きに因
りて、舁き入るゝ所を得ざれば、屋上に升り、瓦の間より、彼を牀のまゝに縋り下して、中
にイイススの前に置けり。二〇 イイスス彼等の信を見て、其人に謂へり、人よ、爾の罪は
爾に赦さる。二一 學士等及びファリセイ等竊に議して曰へり、此の褻瀆を言ふ者は誰ぞ、
獨神より外に、誰か罪を赦すを得ん。二二 イイスス彼等の意を知りて、彼等に答へて曰
へり、爾等何ぞ心の中に議する、二三 爾の罪は爾に赦さると言ひ、或は起きて行けと言
ふは、孰か易き、二四 然れども爾等が人の子の地に在りて罪を赦す權あることを知ら
ん爲、(癱瘋の者に向ひて曰へり)、爾に謂ふ、起きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。二五

彼直に彼等の前に起き、臥し居たる牀を取り、神を讃榮して家に往けり。二六 衆皆驚きて、神を讃榮し、且大に懼れて曰へり、我等今日奇異なることを見たり。二七 イイスス出でゝ、稅吏、名はレヷイと曰ふ者の稅關に坐せるを見て、之に謂へ。二八 彼一切を舍てゝ、起ちて、彼に從へり。二九 レヷイ其家に於て彼の爲に大なる筵を設けしに、諸稅吏及び他の者は多く彼等と與に席坐せり。三〇 學士等とさは怨言して、彼の門徒に謂へり、爾等は何ぞ稅吏及び罪人と與に食飲するや。三一 イイスス彼等に答へて曰へり、康強なる者は醫師を需めず、乃病を負ふ者は之を需む。三二 我が來りしは、義人を召すに非ず、乃罪人を召して悔改せしめん爲なり。三三 彼等イイススに謂へり、イオアンの門徒は屢齋して祈禱を爲す、ファリセイ等の門徒も亦然り、惟爾の門徒が食飲するは何ぞや。三四 彼は之に謂へり、爾等は婚筵の客に新婿者の尙彼等と偕に在る時、豈齋せしむるを得んや。三五 然れども新婿者の彼等より取と らるゝ日至らん、其日には齋せん。三六 又譬を設けて彼等に謂へり、新しき衣の布を取りて、舊き衣を補ふ者あらず、然らずば新しき衣をも裂き、且新しき者より取りたる布

は舊き者と合はざらん。三七 又新しき酒を舊き革嚢に盛る者あらず、然らずば新しき
酒は嚢を敗りて、酒漏れ、嚢も亡びん。三八 乃新しき酒は新しき嚢に盛るべし、然らば
兩の者存せん。三九 又舊き酒を飲みて、直に新しきを欲する者あらず、蓋曰ふ、舊きは更
に善し。

第六章

一 逾越節の二日の後の首の安息日に、イイスス禾田を過ぎ行けることあり、
彼の門徒穗を摘み、手に摶みて食へり。二 或ファリセイ等彼等に謂へり、爾等何ぞ安息日
に行ふべからざることを行ふ。三 イイスス之に答へて曰へり、爾等はダヴィドが、己及び
其從者の飢ゑし時、行ひし事、四 即如何にして彼は神の家に入りて、司祭等の外何人
も食ふべからざる供前の餅を取りて食ひ、且之を從者に與へしを讀まざりしか。五 又
彼等に謂へり、人の子は亦安息日の主なり。六 他の安息日に彼會堂に入りて、教ふるこ
とありしに、彼處に右の手の枯へたる人ありき。七 學士等とファリセイ等とは、彼が安息
日に於て、斯の人を醫すや否やを窺へり、彼を罪する間を得ん爲なり。八 彼は其意を知
りて、手の枯へたる人に謂へり、起きて、中に立て、彼起きて立てり。九 イイスス彼等に謂

へり、我爾等に問はん安息日には善を行ひ、或は惡を行ふ、生命を救ひ、或は之を滅す、孰
か宜しき、彼等默然たり。一〇遂に衆人を環視して、斯の人に謂へり、爾の手を伸べよ、彼
斯く爲したれば、其手は健になりしこと他の手の如し。一一彼等狂ひ怒りて、互に何を
イイススに爲さんと議れり。一二當日彼は祈禱の爲に山に登りて、終夜神に禱れり。一
三夜の明くるに及びて、其門徒を召し、彼等の中より十二人を選びて、之を使徒と名づ
けたり。一四卽シモン、名をペトルと命ぜし者、及び其兄弟アンドレイ、イアコフ及び
イオアン、フィリップ及びワルフォロメイ、一五マトフェイ及びフォマ、アルフェイの子イアコフ及
びシモン、稱してジロトと云ふ者、一六イアコフの兄弟イウダ及びイウダ「イスカリオ
ト」、卽後に彼を賣りし者なり。一七イイスス彼等と偕に下りて平地に立てり、爰に其
衆くの門徒、及び衆くの民、イウデヤの四方イエルサリム幷にティルとシドンとの海濱
よりして、一八彼に聽かん爲、且己の疾の醫されん爲に來りし者、又汚鬼を患ふる者あ
りき、彼等醫されたり。一九衆民彼に捫らんと欲せり、蓋能彼より出でゝ、衆を醫せ
り。二〇彼は目を擧げて、其門徒を視て曰へり、神の貧しき者は福なり、神の國は爾等の

有なればなり。二一 今飢うる者は福なり、爾等飽くを得んとすればなり。今泣く者は福
なり、爾等笑ふを得んとすればなり。二二 人の子の爲に人人爾等を憎み、爾等を絶ち、且
詬り、爾等の名を惡しき者として棄つる時は、爾等福なり、二三 其日に喜び樂めよ、天
には爾等の賞多ければなり、蓋彼等の先祖は是くの如く預言者に行へり。二四 然るに
爾等富める者は禍なる哉、爾等既に慰を得たればなり。二五 今飽きたる者は禍なる哉、
爾等飢ゑんとすればなり。今笑ふ者は禍なる哉、爾等哀み哭かんとすればなり。二六 人
皆爾等の事を善く言はん時は、爾等禍なる哉、蓋彼等の先祖は是くの如く僞預言者
に行へり。二七 我爾等聽く者に語ぐ、爾等の敵を愛し、爾等を憎む者に善を爲し、二八 爾
等を詛ふ者を祝福し、爾等を虐ぐる者の爲に禱れ。二九 爾の頰を批つ者には、他の頰を
も向けよ、爾の外服を奪ふ者には、裏衣をも取ることを拒む勿れ。三〇 凡そ爾に求むる
者には與へ、爾の物を取る者には、復之を促す勿れ。三一 人の爾等に行はんを欲する事
は、爾等も是くの如く之を人に行へ。三二 爾等若し爾等を愛する者を愛せば、爾等に何
の感謝かあらん、蓋罪人等も彼等を愛する者を愛す。三三 若し爾等に善を行ふ者に善

を行はゞ、爾等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も是くの如き事を行ふ。三四若し返さるゝ望ある者に借さば、爾等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も數の如く返されん爲に罪人等に借すなり。三五然れど爾等敵を愛し、善を行ひ、又借し與へよ、則爾等の賞は多からん、爾等至上者の子さ爲らん、蓋彼は恩に負くる者及び惡しき者に慈愛を施す。三六故に爾等慈憐なるが如く、爾等の父の慈憐なるこさを議する勿れ、然らば議せられざらん、人を罪する勿れ、然らば罪せられざらん、人を怨せ、然らば爾等怨さるゝ事なかれん。三八人に與へよ、然らば爾等に與へられん、嘉き量を以て、押し溢れしめて、爾等の懐に納れられん、蓋何の量を以てか人に量らば、之を以て爾等にも量られん。三九又彼等に譬を言へり、瞽は瞽を導くを得るか、二人ながら坑に陷らざらんや。四〇門徒は其師の上に在らず、凡そ全備したる者も其師の如くならん。四一爾何ぞ兄弟の目に物屑の在るを視て、己の目に梁木の在るを覚えざる、四二或は己の目に梁木の在るを視ずして、如何ぞ爾の兄弟に告げて、兄弟よ、我に爾の目より物屑を出せ、と曰ふを得ん、僞善者よ、先づ梁木を己の目より出せ、其時

如何に兄弟の目より物屑を出すべきを見ん。四三 善き樹には惡しき果を結ぶ者なく、
又惡しき樹には善き果を結ぶ者なし。四四 凡の樹は其果に由りて識らる、蓋荊棘より
は無花果を摘まず、又蒺藜よりは葡萄を採らず。四五 善き人は其心の善き寶庫より善
き者を出し、惡しき人は其心の惡しき寶庫より惡しき者を出す、蓋心に充つる者は口
に言ふなり。四六 爾等何ぞ我を主よ、主よ、と稱へ、而して我が言ふ所を行はざる。四七 凡
そ我に來り、我が言を聞きて、之を行ふ者は、我其何人に似たるを爾等に示さん。四八 彼
は、家を建つるに、掘り且つ深くし、基を磐の上に置きたる人に似たり、洪水の有りし時、
横流は其家を衝きたれども、之を動かす能はざりき、磐の上に基けたればなり。四九 聞
きて行はざる者は、家を土の上に基なくして建てたる人に似たり、横流の之を衝きし
時、直に倒れたり、且其家の頽壞は大なりき。

第七章

一 彼は悉く其言を民に聽かしめ畢りて、カペルナウムに入れり。二 或百夫
長、其愛する僕病みて死せんとせしに、三 イイススの事を聞きて、イウデヤの長老等
を彼に遣し、來りて其僕を醫さんことを請へり。四 彼等イイススに來りて、切に彼に求

めて曰へり、爾此の人の爲に此を爲すは宜しきなり、五蓋彼は我が民を愛し、我等の爲に會堂を建てたればなり。六イイスス彼等と偕に往きて、既に其家に遠からざる時、百夫長友を遣して、彼に謂へり、主よ、勞する勿れ、蓋爾が我の舍に入るは、我當らず。七故に我亦己を以て爾に就くに堪へずと思せり、然らば我が僕愈ん。八蓋我人の權に屬すれど、我下に兵卒ありて、我此に往けと云へば往き、彼に來れと云へば來り、我が僕に是を行へと云へば行ふ。九イイススイイリの中にも我れ之を聞きて、彼を奇とし、顧みて、從へる民に謂へり、我爾等に語ぐ、イズラヒルの中にも我是くの如き信を見ざりき。一〇遣されし者家に歸りて病める僕の已に愈されしを見たり。一一其後イイススナインと名づくる邑に往けるに、其門徒の多人及び衆くの民は彼と偕に行けり。一二邑の門に近づきし時、彼處に死者の舁き出さるゝあり、母の獨の子にして、其母は孀婦なり、邑の民多く彼と偕にせり。一三主彼を見て、憫みて、彼に謂へり、少者よ、爾に謂ふ、起きよ。一四乃近づきて、櫬に觸れたれば、舁く者止れり、彼曰へり、死者起きて坐し、且言へり、イイススは之を其母に與へたり。一五衆皆懼れて、神を讃榮して曰へり、大なる預言

者は我等の中に興れり、神は其民を眷みたり。一七 彼に於ける此の事、全國及び其四方に揚れり。一八 イオアンの門徒は悉く此等の事を彼に告げたれば、二 イオアン其門徒の二人を召し、イエスに遣して曰へり、來るべきは汝なるか、抑我等他の者を俟つべきか。二〇 彼等イエスに來りて曰へり、授洗イオアン我等を爾に遣して云く、來るべきは汝なるか、抑我等他の者を俟つべきかと。二一 斯の時彼は多くの者を諸の疾病及び惡鬼より醫し、又多くの瞽者に見ることを賜へり。二二 イエス彼等に答へて曰へり、往きて、見しと所聞きし所をイオアンに告げよ、盲者は明き、跛者は歩み、癩者は潔まり、聾者は聽き、死者は起き、貧者は福音す。二三 凡そ我の爲に惑はざる者は福なり。二四 イオアンの使者が去りし後、イエスイオアンの事を擧げて民に謂へり、爾等何を觀んとして野に出でしか、風に動かさるゝ葦か、二五 抑何を觀んとして出でしか、預言者か、然り、我爾等に語ぐ、彼は預言者よりも大なり。二六 然らば何を觀んとして出でしか、柔き衣を衣たる人か、觀よ、錦の衣て奢れる者は王の宮に在り。二七 彼は即ち夫の錄して、觀よ、我我が使を爾の面前に遣し、爾に先だちて、爾の道

を備へしめんと、曰はれたる者なり。二八 蓋我爾等に語ぐ、婦の生みし者の中、授洗イオアンより大なる預言者は有らず、然れども神の國に於て至小き者は彼より大なり。二九 彼に聞きし衆民及び稅吏等はイオアンの洗禮を受けて、神の義を稱せり。三〇 然れどもファリセイ等及び律法師等は彼より洗禮を受けずして、彼等に於ける神の旨を拒みたり。三一 主又曰へり、然らば我此の世の人人を誰に譬へん、彼等は誰に似たる か、三二 彼等は童子、街に坐して相呼びて、我等笛を吹きたれども爾等踊らず、我等哀かざりきと云ふ者に似たり。三三 蓋授洗イオアン來りて餅を食はず、酒を飲まず爾等云ふ、彼鬼に憑らると。三四 人の子來りて食ひ飲む、又言ふ、視よ、是れ食を嗜み、酒を好む者、稅吏及び罪人の友なりと。三五 惟容智の子は皆容智の義を明にせり。三六 ファリセイ等の一人彼に共に食せんことを請ひたれば、彼はファリセイの家に入りて席坐せり。三七 時に其邑の婦にして罪ある者、彼が下に立ち、哭きて、淚を以て其足を濡し、己の首の髮を以て之を拭ひ、其足に接吻して、之に香膏を盛れる玉の盒を揣へ來り、三八 其後に足の

に香膏を抹れり。三九 彼を招きたるファリセイは此を見て、己の中に謂へり、此の人若し
預言者たらば、彼に捫る者の孰たり、如何なる婦たるかを知らん、蓋是れ罪女なり。四〇
イイスス彼に答へて曰へり、シモンよ、我爾に言ふべき事あり、彼曰く、師よ、之を言へ。四
一 イイスス曰へり、或債主に二人の負債者ありて、一人は銀五百枚、一人は五十枚を負
へり、四二 其償ふ能はざるに因りて、彼は二人に免せり、然らば二人の中彼を愛するこ
と孰か多からん、試に言へ。四三 シモン對へて曰へり、意ふに、多く免されし者ならん。彼
は之に謂へり、爾が議りしこと正し。四四 是に於て婦を顧みて、シモンに謂へり、爾此の
婦を見るか、我爾の家に入りしに、爾は我が足の爲に水を給へざりき、然るに彼は涙を
以て我が足を濡し、首の髪を以て之を拭へり。四五 爾は我に接吻せざりき、然るに彼は、
我が此に入りし時より、我が足に接吻して已めず。四六 爾は我が首に油を抹らざりき、
然るに彼は香膏を我が足に抹れり。四七 是の故に我爾に語ぐ、彼の多くの罪は赦さる、
蓋彼多く愛せり、然れども少く赦さるゝ者は、少く愛するなり。四八 乃婦に謂へり、
爾の罪は赦さる。四九 彼と共に席坐する者己の中に言へり、此れ何人にして罪をも赦

すか。五〇彼婦に謂へり、爾の信は爾を救へり、安然として往け。

第八章

一厥後彼は諸の邑及び村を巡りて、教を宣べ、神の國を福音せり、彼と偕に十
二徒あり、二亦曾て惡鬼及び諸病より痊されたる數人の婦あり、卽七の魔鬼の出で
たるマリヤ、稱して「マグダリナ」と云ふ者、三又イロドの家宰フザの妻イオアンナ、又ス
サンナ、及び其他多くの婦、其所有を以て彼に事へし者なり。四衆くの民諸の邑より
集りて、彼に就きたれば、彼譬を設けて曰へり、五播く者は其種を播かん爲に出でたり、
播く時路の旁に遺ちし者あり、乃踐まれたり、又天空の鳥之を啄めり。六石の上に遺ち
し者あり、萠え出でゝ稿れたり、潤澤なきが故なり。七棘の中に遺ちし者あり、棘共に長
びて、之を蔽へり。八沃壤に遺ちし者あり、萠え出でゝ、實を結ぶこと百倍せり。之を言ひ
て呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。九其門徒彼に問ひて曰へり、此の譬は何
ぞ。一〇彼曰へり、爾等には神の國の奧義を知ること與へられたれども、他の者には譬
を用ゐる、彼等視れども見ず、聽けども悟らざる爲なり。一一此の譬の義は左の如し、種
は神の言なり。一二路の旁の者は、是れ聽けども、後惡魔來りて、其心より言を奪ふ、彼等

が信じて救はれざらん爲なり。一三石の上の者は、是れ聽く時喜びて言を受くれども、己に根なくして暫く信じ、誘惑の時に背く。一四棘の中に遺ちし者は、是れ言を聽きて、清潔且善なる心に之を守り、忍耐して實を結ぶ。（之を言ひて呼べり、耳あり聽くべし。）一六燈を得る者は聽くべし。一六燈を燃し、而して器を以て之を覆ひ、或は牀の下に置く者あらず、乃燈臺の上に置く、入る者が光を見ん爲なり。一七蓋隱れて顯れざる者なく、藏して知られず且露ならざる者なし。一八故に爾等聽くことの如何を愼め、蓋有てる者は、其有てりと意ふ物も、之より奪はれん。一九時に彼の母及び兄弟彼に來りしに、群衆の爲に近づくを得ざりき。二〇或彼に告げて曰へり、爾の母及び爾の兄弟外に立ちて、爾を見んと欲す。二一彼は之に答へて曰へり、我が母及び我が兄弟さは、神の言を聽きて行ふ者是なり。二二一日彼は門徒と偕に舟に登りて、我等湖の彼の岸に濟るへし、乃行けり。二三行く時彼寢れり。颶風湖に吹き下し、水舟に滿たんとして、危きこと甚し。二四門徒就きて彼を醒まし

て曰へり、夫子、夫子、我等亡ぶ。彼起きて、風と水の浪とを禁めたれば、則止みて、穩になれ
り。二五 彼等に謂へり、爾等の信は安に在るか。彼等懼れ驚きて、互に言へり、是れ何人ぞ、
風にも水にも命じて、亦彼に順ふ。二六 ガリレヤに對へるガダラの地に着きて、二七 彼
が岸に登りし時、邑の一人の者彼を迎へたり、乃久しく魔鬼に憑られ、衣を衣ず、家に住
まずして、墓に住める者なり。二八 此の人イイススを見て號び、彼の前に俯伏し、大なる
聲を以て曰へり、至上なる神の子イイススよ、我と爾と何ぞ與らん、爾に求む、我を苦し
むる勿れ。二九 蓋イイススは汚鬼に此の人より出づるを命じたり、其彼を拘へしこ
と久しければなり。彼を守りて、鐵索と桎梏とに繫ぎたれども、彼繫を斷ちて、魔鬼の爲
に野に逐はれたり。三〇 イイスス彼に問ひて曰へり、爾の名は何ぞ、彼曰へり、大隊、多く
の魔鬼彼に入りたればなり。三一 魔鬼はイイススに、彼等に淵に往くを命ぜざらんこ
とを求めたり。三二 彼處に豕の大群の山に牧はれたるあり、魔鬼は彼に、其中に入るを
許さんことを求めたれば彼之を許せり。三三 魔鬼人より出でゝ、豕に入りしに、群は山
坡より湖に逸けて溺れたり。三四 牧ふ者有りし事を觀て、奔り往きて、邑及び諸村に告

げたれば、三五 人人有りし所を觀ん爲に出で、イイススに來りて、魔鬼の出でたる人が
衣を着、心慥にして、イイススの足下に坐せるを見て、懼れたり。三六 見し者は魔鬼に
憑られたる人の如何に愈されしを告げたれば、三七 ガダラ地方の民は、皆イイススに
彼等を離れんことを請へり、大に懼れし故なり。彼舟に登りて返れり。三八 魔鬼の出で
たる人は彼と偕に居らんことを求めたれども、イイスス之を去らしめて曰へり、三九
爾の家に歸りて、神が爾に如何なる事を行ひしを告げよ。彼往きて、全邑にイイススが
彼に如何なる事を行ひしを宣べたり。四〇 イイススが返りし時、民彼を接けたり、皆彼
を俟ちたればなり。四一 視よ、イアイルと名づくる人にして、會堂の宰たる者、來りてイ
イススの足下に俯伏し、其家に入らんことを求めたり、四二 蓋彼に獨の女、年約十
二の者ありて、今死せんとせり。彼が行く時、民之に擁し逼れり。四三 十二年血漏を患ふ
る婦、醫師の爲に其悉くの所有を費したれども、一人にも痊さるゝを得ざりし者は、
四四 後より就きて、彼の衣の裾に捫りしに、其血漏直に止れり。四五 イイスス曰へり、誰
か我に捫りたる。衆の認めざる時、ペトル及び彼と偕に在りし者曰へり、夫子、民爾を繞

權とを與へ、二彼等を神の國を傳へ、亦病者を醫さん爲に遣し、三且彼等に謂へり、旅の
爲に杖をも、嚢をも、糧をも、銀をも、一切取る勿れ、二の衣をも攜ふる勿れ。四何の家に入
るとも、彼處に留りて、亦彼處より途に出でよ。五若し爾等を接けざる者あらば、其邑を
出づる時、爾等の足の塵をも拂へ、彼等に對する證を爲さん爲なり。六彼等出でゝ、鄕村
を行き、遍く福音を宣べ、醫を施せり。七分封の君イロド、凡そイイスの行ひし事を聞
きて、惑へり、蓋或者は是をイオアンの死より復活せしなりと言ひ、八他の者はイリヤ
の現れしなりと言ひ、又他の者は古の預言者の一人の復活せしなりと云へり。九イロ
ド曰へり、イオアンは、我已に其首を斬れり、今我が是くの加き事を聞くは、斯れ何人ぞ、
乃彼を見んと欲せり。一〇使徒等歸りて、其行ひし事を以てイイススに告げたり彼
は之を攜へて、潛にワイフサイダと名づくる邑に近き野の處に退けり。一一民之を知り
て、彼に隨ひしに、彼は之を接けて、神の國の事を語り、且醫を需むる者を醫せり。一二日
の戻く時、十二徒彼に就きて曰へり、民を去らしめよ、彼等が四周の鄕村に往きて、宿を
取り、食を覓めん爲なり、蓋我等は此に野の處に在るなり。一三然れども彼曰へり、爾等

之に食を與へよ。彼等曰へり、若し往きて、此の衆民の爲に食を市はずば、我等には五の餅と二の魚との外に有るなし。一四蓋其人約五千ありき。彼其門徒に謂へり、衆人を坐せしめよ。一五是くの如く行ひて、衆人を坐せしめたり。一六彼は五の餅と二の魚とを取りて、天を仰ぎて之を祝福し、之を擘き、門徒に與へて、民の前に陳れしめたり。一七皆食ひて飽き、其餘りたる屑十二筐を拾へり。一八イイスス獨處に於て祈禱する事ありしに、門徒彼と偕にせり。彼は之に問ひて曰へり、民我を誰と爲すと。一九彼等答へて曰へり、或は洗イオアンと爲し、他の者はイリヤと爲し、又他の者は古の預言者の一人復活したりと爲す。二〇曰へり、神のハリストスと爲す。二一イイスス彼等に戒めて、此の事を人に告ぐる勿らんことを命じたり。二二又曰へり、人の子は多く苦を受け、長老等・司祭諸長・學士等に棄てられ、且殺されて、第三日に復活すべし。二三又衆に謂へり、人若し我に從はんと欲せば、己を舍て、日日其十字架を負ひて、我に從へ。二四蓋己の生命を救はんと欲する者は、之を喪はん、我の爲に己の生命を喪はん者は、之を救は

ん。二五蓋人全世界を獲とも、己を喪ひ、或は損はゝ、何の益かあらん。二六蓋我及び我の言を恥ぢん者は、人の子は、己と父と聖なる天使等との光榮を以て來らん時、彼を恥ぢん。二七我誠に爾等に語ぐ、此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、神の國を見んまでする者あり。二八此等の言の後約八日を越ねて、彼はペトル、イアン、イアコフを擁へ、山に登りて禱れり。二九禱る時其面の容は變り、其衣は皎くして輝けり。三〇視よ、二人の彼と語れるあり、即モイセイ及びイリヤなり、三一光榮の中に現れて、彼がイエルサリムに成すべき逝世の事を言へり。三二ペトル及び之と偕に在りし者は倦みて寢ねたり、既に寤めて、イエスの光榮、及び二人の彼と偕に立てるを見たり。三三其彼を離るゝ時、ペトル、イエスに謂へり、夫子よ、我等此に居るは善し、我等三の廬を建てゝ、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん、自ら言ふ所を知らざりき。三四彼が尙之を言ふ時、雲ありて彼等を蓋へり、雲に入りし時、懼れたり。三五雲より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子なり、彼に聽け。三六聲已に發して、イエスの獨在るを見たり。彼等默して、當時には見し事を誰にも告げざりき。三七翌日彼等が山より下

りし時、衆くの民は彼を迎へたり。三八 視よ、民の中の一人呼びて曰へり、師よ、願くは我が子を眷みよ、此は我が獨子なり。三九 惡鬼彼を執ふれば、彼忽ち叫び、彼を拘攣させ、沫を噴かしめ、彼を傷ひて、漸く離る。四〇 我爾の門徒に之を逐ひ出さんことを求めたれども、彼等能はざりき。四一 イイスス答へて曰へり、噫信なき悖れる世や、我何時まで爾等と偕にし、爾等を忍ばん、爾の子を此に攜へ來れ。四二 彼が來る時、魔鬼彼を倒し て、拘攣させたり、イイスス汚鬼を禁め、子を醫して、其父に與へたり。四三 衆皆神の大能を奇とせり。衆がイイススの行ひし凡ての事を奇とする時、彼其門徒に謂へり、四四 爾等此の言を曉らざりき、此れぞ彼等の爲に掩はれて、其之に達せざるを致せり、而して此の言を彼に問ふことを懼れたり。四五 時に彼等に爭念は起れり、彼等の中孰か大なるぞ。四六 イイスス其心の念を觀て、幼兒を取り、之を己の側に立てゝ、四八 彼等に謂へり、我が名に因りて此の幼兒を接くる者は我を接くるなり、我を接ん者は我を遣しゝ者を接くるなり、蓋爾等衆の中に最小き者は、是れ大なる者なり。四九 イオアン答へて曰へ

り、夫子よ、我等は爾の名を以て魔鬼を逐ひ出す人を見て、之に禁じたり、其我等に從はざる故なり。五〇イイススは之に謂へり、禁ずる勿れ、蓋爾等に敵せざる者は爾等の與に屬なり。五一彼が世より擧げらるゝ日の近づきし時、彼イエルサリムに面して行かんとて、ことを定めたり。五二使を其面前に遣しゝに、彼等往きて、サマリヤの鄉に入り、彼が爲に備へんとしたれども、五三彼處には彼を納れざりき、其イエルサリムに面して往くが故なり。五四其門徒イアコフ及びイオアンは之を見て謂へり、主よ、爾は我等がイリヤの爲しゝ如く、火の天より降りて、彼等を滅さんことを命ずるを欲するか。五五イイススは顧みて、彼等を戒めて曰へり、爾等は自ら如何なる神に屬するを知らず。五六蓋人の子の來りしは、人人の靈を滅さん爲に非ず、乃之を救はん爲なり。遂に他の鄉に往けり。五七彼等が道を行く時、或彼に謂へり、主よ、爾何處に往くとも、我爾に從はん。五八イイススは之に謂へり、狐には穴あり、天空の鳥には巢あり、惟人の子には首を枕する處なし。五九又他の者に謂へり、我に從へ。彼曰へり、主よ、我に先づ往きて我が父を葬るを容せ。六〇然れどもイイススは之に謂へり、死者に其死者を葬るを任せよ、爾は往きて、

神の國を傳へよ。六一又他の者曰へり、主よ、我爾に從はん、但先づ往きて家の者に別を告ぐるを容せ。六二イエス之に謂へり、手を犂に著けて、後を顧みる者は、神の國に當らざるなり。

第十章　一厥後主は又別に七十門徒を選び、彼等各二人を己に先だてゝ、自ら往かんと欲する所の諸邑諸處に遣し、二彼等に謂へり、穫は多く、工は少し、故に穫主に、工を其穫所に遣さんことを求めよ。三往け、我が爾等を遣すは、羔を狼の中に入るゝが如し。四金囊をも、行嚢をも、履をも、擾ふる勿れ、途中にて人に安を問ふ勿れ。五人の家に入る時は、先づ此の家に平安あれかしと曰へ。六若し彼處に平安の子あらば、爾等の平安は彼に留らん、然らずは、爾等に歸らん。七其家に居りて、彼等に在る所の者を食飲せよ、蓋勞する者の其値を得るは宜しきなり、家より家に移る勿れ。八何の邑に入るとも、人爾等を接けば、其爾等の前に供ふる者を食へ。九其中に在る病者を醫せ、又衆に告げて曰へ、神の國は爾等に近づけりと。一〇何の邑に入るとも、人爾等を接けずば、其衢に出でゝ曰へ、一一爾等の邑より我等に著きたる塵をも、我等は爾等に對ひて拂ふ、然れど

も之を知れ、神の國は爾等に近づけりさ
の邑より忍び易からん。一三 禍なる哉爾ホラジンよ、禍なる哉
等の中に行はれし異能は、若しティル及びシドンに行はれしならば、彼等は早く麁衣、
灰を蒙り、坐して悔改せしならん。一四 然らば審判に於てティル及びシドンは爾等より
忍び易からん。一五 天にまで擧げられしカペルナウムよ、爾も地獄にまで落されん。
一六 爾等に聽く者は我に聽く、爾等を拒む者は我を拒む、我を拒む者は我を遣しゝ者
を拒むなり。一七 七十門徒喜びて返りて曰へり、主よ、爾の名に因りて鬼も我等に服
す。一八 彼は之に謂へり、我サタナの電の如く天より隕ちしを見たり。一九 視よ、我爾等
に蝮、蠍、及び悉くの敵の能を踐む權を與ふ、一も爾等を害せざらん。二〇 然れども惡鬼
の爾等に服するを喜ぶ勿れ、乃ち爾等の名の天に錄されしを喜べ。二一 當時
イエス神を以て喜びて曰へり、父、天地の主よ、我爾を讃榮す、爾此等を智者及び達者
に隱して、之を赤子に顯しゝに因る、父よ、然り、蓋是くの如きは爾の旨の嘉せし所なり。
二二 門徒を顧みて曰へり、萬物は我が父より我に授けられたり、父の外に、子の誰たる

を識る者なく、子及び子が顯さんと欲する者の外に、父の誰たるを識る者なし。二三 又門徒を顧みて、特に彼等に謂へり、爾等が見る所を見る目は福なり。二四 蓋我爾等に語ぐ、多くの預言者と君王とは、爾等が見る所を見んと欲して、見ざりき、爾等が聞く所を聞かんと欲して、聞かざりき。二五 時に一の律法師起ちて、彼を試みて曰へり、師よ、我何を爲して永遠の生命を嗣がんか。二六 彼は之に謂へり、律法に何と記せるか、爾如何に讀むか。二七 答へて曰へり、爾心を盡し、力を盡し、意を盡して、主爾の神を愛せよ、又爾の鄰を愛すること己を如くせよ。二八 イエス之に謂へり、爾の答へし所正し、之を爲せ、乃生きん。二九 然れども彼は己を義とせんと欲して、イエスに謂へり、我が鄰とは誰ぞや。三〇 イエス答へて曰へり、或人イエルサリムよりイエリホンに下る時、盜賊に遇へり、彼等其衣を剝ぎ、彼に傷つけ、幾と死するばかりにして、彼を捨て去れり。三一 適一の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。三二 同じく一レ人は行きて此に至り、彼を見て、過ぎ去れり。三三 惟或サマリヤ人は行きて此に至り、彼を見て憫み、三四 就きて、其傷に油と酒とを沃ぎて、之を裹み、彼を己の家畜に乘

せ、旅館に引き至りて、彼を看護せり。三五 明日行かんとする時、銀二枚を出し、館主に與
へて、之に謂へり、此の人を看護せよ、費若し此より益さば、我返る時爾に償はん。三六 此
の三人の中、爾孰を盜賊に遇ひし者の鄰と意ふか。三七 彼曰へり、此の人に矜恤を施
しゝ者なり。イイスス彼に謂へり、往きて、爾も是くの如く行へ。三八 彼等が行ける時、イ
イスス一の村に入りしに、或婦マルファと名づくる者、彼を其家に迎へたり。三九 其姉妹
にマリヤと名づくる者あり、イイススの足下に坐して、其言を聽けり。四〇 マルファは供
事の多きに因りて心を煩はし、就きて曰へり、主よ、我が姉妹我一人を遺して供事せし
むるを爾意と爲さざるか、之に命じて、我を助けしめよ。四一 イイスス彼に答へて曰へ
り、マルファよ、マルファよ、爾は多くの事を慮りて心を勞せり、四二 然れども需むる所は一
のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪ふ可からず。

第十一章

一 イイスス某處に祈りて、既に休めし時、其門徒の一人彼に謂へり、主よ、我
等に禱ることを教へよ、イオアンも其門徒に教へしが如し。二 彼は之に謂へり、爾等禱
る時言へ、天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は、

天に行はるゝが如く、地にも行はれん、三我が日用の糧を毎日我等に與へ給へ、四我が罪を免し給へ、蓋我等も凡そ我等に負ふ者に免す、我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ、と。五又彼等に謂へり、爾等の中孰か友あり、夜半彼に來りて、友よ、我に三の餅を借せ、六蓋我が友途中より我に來りしに、我之に供すべき者なし、と曰はん、七彼内より之に答へて、我を煩はす勿れ、門已に閉ぢ、我が兒曹我と與に床に在り、我起きて、爾に與ふる能はず、と曰はん。八我爾等に語ぐ、若し彼は友なるが故に、起きて其需むる如く彼に與へざるも、其切迫に依りて、起きて與へん。九我も爾等に語ぐ、求めよ、然らば爾等に與へられん、尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば爾等の爲に啓かれん。一〇蓋凡そ求むる者は得、尋ぬる者は遇ひ、門を叩く者には啓かれん。一一爾等の中父たる者、孰か其子餅を求めんに、之に石を與へ、或は魚を求めんに、之に魚に代へて蛇を與へ、一二或は卵を求めんに、之に蠍を與へん。一三然らば爾等惡しき者なるに、尚善き賜を其子に與ふるを知る、況や天に在す父は、之に求むる者に、聖神を與へざらんや。一四或時彼瘖なる鬼を逐ひ出せり、鬼出でゝ、瘖者言ひしに、民之を奇させ

り。一五 然れども其中の或者曰へり、彼は鬼の魁ベルゼブルに藉りて鬼を逐ひ出すなり。一六 他の者は彼を試みて、天より休徴を求めたり。一七 イエス彼等の意を知りて、彼等に謂へり、凡て國自ら分れ爭はば、荒墟となり、家自ら分れ爭はば、倒れん。一八 若しサタナも分れ爭はば、其國如何にして立たん。然るに爾等は言ふ、我ベルゼブルに藉りて鬼を逐ひ出すと。一九 若し我ベルゼブルに藉りて鬼を逐ひ出さば、爾等の諸子は誰に藉りて之を逐ひ出すか、故に彼等は爾等の審判者と爲らん。二〇 然れども若し我神の指に藉りて鬼を逐ひ出さば、即ち神の國果して爾等に臨みしなり。二一 強き者武器を執りて、其家を守る時は、其所有安全なり。二二 然れども更に強き者來りて、彼に勝つ時は、其恃む所を悉く奪ひて、贓物を分たん。二三 我と偕にせざる者は、我に敵し、我と偕に聚めざる者は、散らすなり。二四 汚鬼人より出でゝ、後、水なき地を巡り、安息を求むれども、得ずして曰く、我舊て出でし我が家に歸らんと。二五 既に來りて、其家の掃き且つ飾りたるを見、二六 乃往きて、己より更に惡しき他の七鬼を攜へ來り、偕に入りて、彼處に居るなり。是に於て其人の爲に後の患は先より更

に甚し。二七 此を言ふ時、一の婦民の中より聲を揚けて、彼に謂へり、爾が哺ひし乳、さは福なり。二八 彼は曰へり、然り、神の言を聽きて之を守る者は福なり。二九 民の多く集れる時彼宣べ始めて曰へり、此の世は惡しくして、休徴を求む、而して預言者イオナの休徴の外、之に休徴は與へられざらん。三〇 蓋イオナが尼尼ヤ人の爲に休徴となりし如く、人の子も此の世の爲に是くの如く爲らん。三一 南方の女王は審判の時に斯の世の人と共に起ちて、彼等を罪せん、蓋彼は地の極より來れり、視よ、此にはソロモンより大なる者あり。三二 尼尼ヤの人は審判の時に斯の世と共に起ちて、之を罪せん、蓋彼等はイオナの傳教に由りて悔改せり、視よ、此にはイオナより大なる者あり。三三 燈を燃して、之を隱れたる處、或は斗の下に置く者あらず、乃燈臺の上に置く、入る者が光を見ん爲なり。三四 身の燈は目なり、故に爾の目の淨き時は、爾の全身も明なれども、其惡しき時は、爾の身も暗し。三五 故に愼めよ、爾が內の光の暗さならざらんことを。三六 若し爾の全身明にして、一部の暗き所もなくば、則全く明ならん、燈の其光を以て爾を照すが如し。三七 彼が言ふ時、或ファリ

セイ彼に共に食せんことを請ひたれば、彼入りて席坐せり。三八 ファリセイは彼が食す
る前に手を洗はざりしを見て、異めり。三九 主は之に謂へり、爾等ファリセイ今杯と盤
の外を潔むれども、爾等の内には貪婪と惡慝と充てり。四〇 無知者よ、外を造りし者は
亦内をも造りしに非ずや。四一 惟所有の中より施濟を爲せ、然らば爾等の爲に
皆潔からん。四二 禍なる哉爾等ファリセイよ、薄荷、芸香、及び凡の野菜の十分の
一を納めて、義と神に於ける愛とを遺つ、此れ行ふ可きなり、彼も亦遺つ可からず。四三
禍なる哉爾等ファリセイよ、蓋爾等は會堂には首座、街衢には問安を好む。四四 禍なる
哉爾等は隠れたる墓に似たり、其上を履む人之を知らず。四五 律法師等の一人彼に答へて
曰へり、師よ、爾之を言ひて、我等をも辱しむ。四六 彼曰へり、爾等律法師も禍なる哉、蓋
一の指をも其任に觸れず。四七 爾等禍なる哉、蓋爾等は其先祖が殺しゝ預言者の
墓を建つ。四八 是を以て爾等は先祖の爲しゝことを證し、且之に與す、蓋彼等は預言者
を殺し、爾等は其墓を建つ。四九 故に神の智慧も曾へり、我預言者及び使徒等を彼等に

遣さん、彼等は其中或者を殺し、或者を逐はん、五〇創世以來流されし諸預言者の血は、
五一アスリの血より、祭壇と殿との間に殺されしザハリヤの血に至るまで、皆此の代
より索められん爲なり。然り、我爾等に語ぐ、是れ此の代より索められん。五二禍なる哉
爾等律法師よ、蓋爾等は知識の鑰を取りて、自ら入らず、入る者をも阻めり。五三彼が之
を言ふ時、學士等及びファリセイ等迫りて、彼を詰り、彼に多くの事を答へしめ、五四彼を
伺ひて、其口より出づる何事をか捕へんと欲せり、彼を罪せん爲なり。

第十二章

一民數萬集りて、相蹂むに至れる時、彼先づ其門徒に謂へり、謹みてファリセ
イ等の酵を防げ、是れ僞善なり。二覆はれて露れざる者なく、隱れて知られざる者なし。
三故に爾等が暗の中に言ひし事は、光の中に聞えん、密なる室に於て耳に附きて語り
し事は、屋の上に傳へられん。四我爾等我が友に言ふ、身を殺して後に何事をも爲す能
はざる者を懼るゝ勿れ。五我爾等に誰をか懼るべきを示さん、卽殺して後に地獄に
投ずる權を有つ者を懼れよ、然り、我爾等に語ぐ、斯の者を懼れよ。六五の雀は二錢にて
得らるゝに非ずや、然るに其一も神の前に忘れられず。七爾等に於ては首の髮も皆數

へられたり。故に懼るゝ勿れ、爾等は多くの雀より貴し。八我又爾等に語ぐ、凡そ我を人の前に認めん者は、人の子も彼を神の使等の前に認めん。九我を人の前に諱まん者は、神の使等の前に諱まれん。一〇凡そ人の子に敵して言を出す者は赦されん、然れども聖神を瀆す者は赦されざらん。一一爾等を曳きて、會堂、又は政を執り權を有つ者の前に至らん時如何に、或は何を答ふべく、或は何を言ふべきことを預め思ひ煩ふ勿れ。一二蓋其時聖神爾等に教へん。一三一人衆民の中の一人彼に謂へり、師よ、我が兄弟に我と遺産を分つことを命ぜよ。一四彼は之に謂へり、人よ、誰か我を爾等の裁判官或は分配者と爲したる。一五是に於て彼等に謂へり、愼みて貪を防げ、蓋人の生命は其所有の饒なるに因らざるなり。一六又譬を設けて彼等に謂へり、或富める人に田畝の善く實れることあり、一七彼自ら忖りて曰へり、我何を爲さんや、蓋我が作物を藏むべき處なし。一八又曰へり、我斯く爲さん、我が倉を毀ちて更に大なる者を建て、此の中に我が穀物と貨物とを聚めて、一九我が靈に謂はん、靈よ、爾には多年の爲に蓄へたる多くの貨物あり、息み、食ひ、飲み、樂めよ。二〇然れども神は彼に謂へり、無知なる者

よ、今夜爾の靈を爾より索めん、然らば爾が備へし所の者は誰に歸せんや。二一　凡そ己の爲に財を積み、神に於て富まざる者は是くの如し。二二　又其門徒に謂へり、故に我爾等に語ぐ、爾等の生命の爲に何を食ひ、身體の爲に何を衣んと慮る勿れ。二三　生命は糧より大にして、身體は衣より大なり。二四　試に鴉を思へ、彼等は播かず穫らず、倉もなく納屋もなし、而して神は之を養ふ、爾等は鳥より貴きこと幾何ぞ。二五　且爾等の中誰か慮りて、其身の長一尺だに延ぶるを得ん。二六　然らば至さ小き事すら能せざるに、何ぞ其餘の事を慮る。二七　試に百合の如何にか長ずるを思へ、勞かず紡がず、然れども我爾等に語ぐ、ソロモンも其榮華の極に於て、其衣猶此の花の一に及ばざりき。二八　今日野に在り、明日爐に投げらるゝ草にも、神は斯く衣すれば、況や爾等をや、小信の者よ。二九　故に爾等何を食ひ、或は何を飲んと求むる勿れ、亦思ひ煩ふ勿れ。三〇　蓋此れ皆世の異邦人の求むる所なり、爾等の父は此等の者の爾等に必要なるを知る。三一　惟神の國を求めよ、然らば此れ皆爾等に加はらん。三二　小き群よ、懼るゝ勿れ、蓋爾等の父は爾等に國を賜はんことを喜べり。三三　爾等の所有を售りて、施濟を爲せ、己

の爲に古びざる囊、盡きざる財を天に備へよ、彼處には盜賊近づかず、蟲壞はず。三四蓋爾等の財物の在る所には、爾等の心も在らん。三五爾等は其主が婚筵より歸るを俟ちて、彼來りて門を叩く時、直に彼の爲に啓かんとする人人に似るべし。三七主來りて其諸僕の儆醒するを見ば、彼等福なり、我誠に爾等に告ぐ、彼自ら腰に帶し、彼等を席坐せしめ、前みて彼等に供事せん。三八若し第二更に來り、又第三更に來りて、彼等の是くの如きを見ば、其諸僕福なり。三九若し家主盜賊の何の時に來るを知らば、儆醒して、其家を穿つを許さざらん、是れ爾等の知る所なり。四〇故に爾等も已を備へよ、蓋爾等が意はざる時に人の子來らん。四一ペトル彼に謂へり、主よ、此の譬は我等に言ふか、抑衆人に言ふか。四二主曰へり、孰か忠にして智なる家宰、其主が諸僕の上に立てゝ、時に隨ひて、彼等に定量の糧を與へしむる者たる、四三主の來る時、彼が斯く行ふを見ば、其僕福なり。四四我誠に爾等に語ぐ、彼を立てゝ其一切の所有を督らしめん。四五然れども若し其僕心の中に、我が主の來るは遲からんと曰ひて、僕婢を打ち、食ひ飲み且醉へば、四六乃ち俟たざる日、知らざる時

に、其僕の主來りて、彼を斷ち、彼を不忠の者と同じき分に處せん。四七　其主の旨を知りて備へず、其旨に順ひて行はざりし僕は、多く扑たれん、四八　知らずして罰に當る事を行ひし者は、少く扑たれん。凡そ多く與へられし者は、多く託せられし者は、更に多く索められ、多く託せられし者は、更に多く要められん。四九　我火を地に投ぜん爲に來れり、此の火の已に燃ねんことを、我望むこと幾何ぞ。五〇　我に受くべき洗禮あり、其成るに至るまで、我憂に迫ることを如何ばかりぞ。五一　なんぢら爾等は我和平を地に與へん爲に來れりと意ふか、我爾等に謂ふ、然らず、卽ち分離なり。五二　蓋是より後、一家に五人分離して、三人は二人に、二人は三人に敵せん、五三　父は子に、子は父に敵し、母は女に、女は母に敵し、姑は其婦に、婦は姑に敵せん。五四　又民に謂へり、爾等雲の西より起るを見れば、直に言ふ、雨ふらんと、果して然り。五五　風の南より吹くを見れば、言ふ、暑くならんと、果して然り。五六　僞善者よ、爾等天地の面を別つを知りて、何ぞ此の時を別たざる。五七　且爾等何ぞ已に依りて、宜しきを得んことを勉めよ、恐らくは彼爾を曳きて、裁判官に至り、裁判官爾を下吏に付し、下

吏は爾を獄に下さん。五九我爾に語ぐ、爾毫釐だに償はずば、彼より出つるを得ず。

第十三章

一 其時數人來りて、ピラトが其血を其祭物に雜へしガリレヤ人の事をイエスに告げたり。二彼は之に答へて曰へり、爾等此のガリレヤ人は斯く苦を受けしが故に、悪くの罪ありしことを意ふか。三我爾等に語ぐ、然らず、乃爾等悔改せずば、皆是くの如く亡びん。四或は彼のシロアムの塔倒れて殺されし十八人は、悪くのイエルサリムに居る者より多く罪を負ひたりと意ふか。五我爾等に語ぐ、然らず、乃爾等悔改せずば皆同じく亡びん。六又譬を設けて曰へり、或人其葡萄園に植ゑたる無花果樹ありしに、來りて之に果を求むれども得ざりき。七遂に園丁に謂ひけるは、我三年來りて此の無花果樹に果を求むれども得ず、之を斫れ、何ぞ徒に地を塞ぐ。八園丁彼に對へて曰く、主よ、今年も之を容して、我が其周圍を掘りて、肥料を置くを待て、九或は果を結ばん、否ずば後に之を斫らんと。一〇安息日に彼一の會堂に在りて教を宣べたり。一一爰に十八年病の鬼を患ふる婦あり、腰みて、少しも伸ぶる能はざりき。一二イエス之を見て、呼びて之に謂へり、婦よ、爾は其病より釋かれたり。一三乃

て手を彼に按せたれば、彼直に伸びて神を讃榮せり。一四 會堂の宰、イイススが安息日に醫を施しゝを憤りて、民に謂へり、工作を爲すべき日は六日あり、其中に來りて醫さるべし、安息日に於てせざれ。一五 主彼に答へて曰へり、僞善者よ、爾等各〻その牛或は驢を槽より解き、之を牽きて飲はさるか、一六 況やアブラハムの女なる此の婦十八年サタナに縛られたるを、安息の日に於て解くべからざりしか。一七 彼が之を言ふ時、彼に敵する者は皆愧ぢ、衆民は彼が凡の光明なる行事を喜べり。一八 彼曰へり、神の國は何に似たるか、我之を何に譬へん。一九 是れ芥種、人取りてその園に播きたる者の如し、乃長じて大なる樹となり、天空の鳥其枝に棲めり。二〇 又曰へり、神の國を何に譬へん。二一 是れ酵の如し、婦之を取りて、三斗の麪の中に納れしに、悉く發酵するに至れり。二二 イイススエルサリムに向ひて行けり。二三 或彼に謂へり、主よ、救はるゝ者寡きか。二四 イイススが彼等に謂へり、力を竭くして窄き門より入れ、蓋我爾等に誌ぐ、多くの者は入るを求めて得ざらん。二五 家主起きて門を閉ぢて後、爾等外に立ちて、門を叩きて曰はん、主よ、主よ、我等

の爲に啓け、彼爾等に答へて曰はん、我爾等が
は ん、我等爾の前に食飲し、爾亦我等の衢に教へたり。二七 然れど
つ 語ぐ、我爾等が 奚れより來れを識らず、凡そ不義を行ふ者は我より離れよと。二八 時に
爾等アウラアム、イサアク、イアコフ及び諸預言者が神の國に在り、己が外に逐はるゝ
を見て、彼處に哭き切齒せん。二九 東より、西より、北より、南より、人來りて、神の國に席坐
せん。三〇 視よ、後なる者の先となり、先なる者の後さなることあらん。三一 當日或ファリ
セイ等就きて、彼に謂へり、出でゝ此を離れよ、蓋イロド爾を殺さんと欲す。三二 彼は之
に謂へり、往きて、彼の狐に告げよ、視よ、我今日及び明日鬼を逐ひ出し、醫を施し、第三
日に終らん。三三 然れども今日明日及び次の日に我行くべし、蓋預言者のイエルサリ
ムの外に亡ぶるは有らざるなり。三四 イエルサリムよ、イエルサリムよ、預言者を殺し、
爾に遣されし者を石にて擊つ者よ、我幾次か母鷄が其雛を翼の下に集むる如く、爾の
諸子を集めんことを欲したれども、爾等は欲せざりき。三五 視よ、爾等の家は虛しくし
て爾等に遺さる、我爾等に語ぐ、今より後、主の名に因りて來る者は祝福せらるゝと云ふ

時に至るまで爾等我を見ざらん。

第十四章

一イイスス安息日に一の宰なるファリセイの家に入りて、餅を食ふことあ
りしに、人人彼を窺へり。二爰に水腫病を疾める人の彼の前に立てるあり。三イイスス
律法師及びファリセイ等に問ひて曰へり、安息日に醫を施すは宜しきか。四彼等默然た
り。彼は其人に觸れて、之を醫して、去らしめたり。五又彼等に謂へり、爾等の中誰にか驢
或は牛の井に陷ることあらんに、安息の日にも直に之を曳き出さざらんか。六彼等之
に對ふる能はざりき。七招かれたる者の首座を擇べるを見て、譬を設けて彼等に謂へ
り、八爾人より婚筵に招かれん時、首座に坐する勿れ、恐らくは爾より尊き者の招かる
ゝありて、九爾と彼とを招きし者來りて、爾に謂はん、斯の人に座を讓れと、其時爾羞ぢ
て、末座に就かん。一〇乃招かれん時、往きて末座に坐せよ、爾を招きし者來らん時、爾
に、友よ、上座に進めと言はん爲なり、其時爾同席者の前に於て榮あらん。一一蓋凡そ
自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。一二又彼を招きし者
に謂へり、爾午餐或は晩餐を設くる時、爾の朋友をも、兄弟をも、親戚をも、富める鄰をも、

招く勿れ、恐らくは彼等も亦爾を招きて、爾報を受けん。一三　乃筵を設くる時貧乏、廢疾、跛者、瞽者を招け、一四　然らば彼等が爾に報ゆる能はざるに因りて爾福なり、義者の復活の時に爾報を得んさすればなり。一五　彼と偕に席坐する一人、此を聞きて、彼に謂へり、神の國に於て餅を食はん者は福なり。一六　彼は之に謂へ、人大なる晩餐を設けて、多くの者を招きたり。一七　晩餐の時に及び、其僕を遣して、招かれたる者に謂へり、來れ、蓋一切已に備はれり。一八　彼等皆同じく辭したり。第一の者曰へり、我田地を買ひたり、往きて之を見んことを要す、請ふ、我が辭するを允せ。一九　他の者曰へり、我牛五耦を買ひたり、之を試みん爲に往く、請ふ、我が辭するを允せ。二〇　又他の者曰へり、我妻を娶りたり、是の故に來る能はず。二一　其僕歸りて、之を主に告げたれば、家主怒りて、其僕に謂へり、速に邑の衢と巷とに出でゝ、貧乏、廢疾、跛者、瞽者を此に引き來れ。二二　其僕曰へり、主よ、爾の命ぜし如く行ひたれども、尚餘れる座あり。二三　主は僕に謂へり、道路及び籬の間に出でゝ、入らんことを說得して、我が家に盈たしめよ。二四　蓋我爾等に語ぐ、彼の招かれたる人は、一も我が晩餐を嘗めざらん。蓋召されたる者は多けれ

ざる者は少し。二五 衆くの民彼さ偕に行けるに、彼は顧みて、之に謂へり、二六 人若し我に來りて、其父母、妻子、兄弟、姉妹、又己の生命をも憎まずば、我が門徒と爲るを得ず。二七 己の十字架を任ひて、我に從はざる者も、亦我が門徒と爲るを得ず。二八 蓋爾等の中孰か塔を建てんと欲して、先づ坐して、其資金の之を成すに足れるかを計らざらん。二九 恐らくは其基を置きて、終ふること能はずば、見る者皆彼を哂ひて曰はん。三〇 此の人建て始めて、終ふること能はざりきと。三一 或は何れの王か出でゝ他の王と戰はんに、先坐して、一萬を以て夫の二萬を率ゐて來り攻むる者に敵するを得るかを計らざらんや。三二 然らずば、敵の尚遠く在る時彼使を遣して、和を請はん。三三 是くの如く爾等の中、凡そ其有てる所を捨てざる者は、我が門徒と爲るを得ず。三四 鹽は善き物なり、然れども鹽若し其味を失はば、何を以て之を鹹くせん、三五 地にも肥料にも宜しからず、惟之を外に棄つ。耳ある者は聽くべし。

第十五章 一 稅吏及び罪人等はイエスに聽かん爲に、皆彼に近づけり。二 パリセイ人等は罪人等を納れて、之と共に食す。三 彼此の譬を設

けて彼等に謂へり、四爾等の中何人か、一百の羊ありて、其一を失はば、九十九を野に舍
き、往きて、亡はれし者を獲るに至るまで之を尋ねざらんや、五之を獲て、喜びて己の肩
に任ひ、六家に歸りて、其友及び鄰を呼び集めて、彼等に謂はん、我と共に喜べ、蓋我は亡
はれし羊を獲たりと。七我爾等に語ぐ、是くの如く天には一の悔い改むる罪人の爲の
喜は、悔改を要せざる九十九の義人の爲の喜に勝らん。八或は何の婦か、金錢十枚
ありて、其一枚を失はば、燈を燃し、室を掃ひ、獲るに至るまで、勤めて尋ねざらんや、九之
を獲て、其友及び鄰を呼び集めて曰はん、我と共に喜べ、蓋我は失ひし金錢を獲たりと。
一〇我爾等に語ぐ、是の如く神の使等の前には、一の悔い改むる罪人の爲に喜あり。一
一又曰へり、或人に二の子あり、一二其次子父に謂へり、父よ、我が得べき產業の分を我
に與へよ、父其產業を彼等に分てり。一三幾日も經ざるに、次子は其得たる者を盡く集
めて、遠き地に旅行し、彼處に放蕩に生活して、其產業を浪費せり。一四盡く耗しゝに
及びて、其地に大なる饑饉起り、彼始めて乏しきを覺えたり。一五乃往きて、其地の住
民の一に身を寄せたれば、其人彼を田に遣して豕を牧はしめたり。一六彼は豕の食ふ

豆莢を以て、其腹を充さん欲したれども、彼に與ふる者なかりき。一七　遂に自ら省みて曰へり、我が父には幾何かの傭人の糧に餘れるあるに、我は飢えて亡ぶ。一八　起ちて、我が父に往きて、之に謂はん、父よ、我天及び爾の前に罪を獲たり、一九　既に爾の子と稱へらるゝに堪へず、我を爾が傭人の一の如く爲せと。二〇　乃ち起ちて、其父に往けり。尚遠くに在りし時、其父彼を見て憫み、趨り前みて、其頸を抱きて、彼に接吻せり。二一　子は之に謂へり、父よ、我天及び爾の前に罪を獲たり、既に爾の子と稱へらるゝに堪へず。二二　然れども父は其諸僕に謂へり、最も美しき衣を出して、彼に衣せよ、指鐶を其手に、履を其足に施せ。二三　且肥ねたる犢を牽きて、之を宰れ、我等食ひ樂しまん。二四　蓋此の我が子は死して復生き、失はれて又得られたりと。是に於て彼等樂しめり。二五　適〻其長子田に在りしが、歸りて家に近つける時、樂と舞とを聞きたれば、二六　一の僕を呼びて、是れ何事ぞと問ひしに、二七　彼曰へり、爾の弟來りしなり、爾の父は、其恙なくして彼を得たるに因りて、肥ねたる犢を宰りたり。二八　長子怒りて、入るを欲せざりき。其父出でて、彼に勸めしに、二九　彼父に答へて曰へり、視よ、我多年爾に事へて、未だ嘗て爾の命

に違はざれごも、爾未だ嘗て小山羊を我に與へて、我を友と共に樂しまし
○然ろに此の爾の子、妓と共に爾の産業を耗しゝ者の來りし時は、爾彼の爲に肥
たる犢を宰れり。爾は常に我と偕に在り、我に屬する者は皆爾
に屬す。三一父彼に謂へり、子、汝は常に我と偕に在り、我に屬する者は皆爾
しむべきなり。三二惟此の爾の弟は死して復生き、失はれて、又得られたるが故に、我等喜び樂

第十六章

一イエス又其門徒に謂へり、或富める人に管理者ありて、其主の産業を
耗すと彼に訴へられたり。二主彼を呼びて曰へり、我が爾に付きて聞く事は斯れ何ぞ
や、管理の報告を出せ、蓋爾は仍管理すること能はざればなり。三管理者意に謂へり、我が主我より
管理の職を奪ふ、我何を爲さんか、鋤くには力なく、乞ふは恥づ。四我爲すべき事を知る、
我が管理の職を解かれん時、人人に我を其家に接けしめん爲なりと。五乃其主の負
債者を一一呼びて、其第一の者に謂へり、爾我が主に負ふこと幾何ぞ。六曰へり、油百
斗なり。彼に謂へり、爾の券を取り、亟に坐して、五十と書け。七次に他の者に謂へり、爾の券を取りて、八十と書
ふ、こゝ幾何ぞ。曰へり、麥百斛なり。彼に謂ふ、爾の券を取りて、八十と書け。八主は不義な

る管理者を譽めたり、其爲しゝ事の巧なるが故なり、蓋此の世の諸子は、其族類に於て、光の諸子に較ぶれば更に巧なり。九我も爾等に語ぐ、不義の財を以て、己の爲に友を求めよ、爾等の匱からん時、彼等が爾等を永遠の宅に接けん爲なり。一〇少き事に於ても忠なる者は、多き事に於ても不義なる者は、多き事に於ても忠なり、少き事に於て不義なる者は、若し不義の財に於て忠ならずば、誰か爾等に眞の財を託せん。一二若し他に屬する者に忠ならずば、誰か爾等に爾等の物を與へん。一三僕は二人の主に事ふる能はず、蓋或は此を惡み、彼を愛し、或は此を重んじ、彼を輕んぜん。爾等は神と財とに兼ね事ふる能はず。一四利を好むファリセイ等も悉く之を聞き、而して彼を哂へり。一五彼は之に謂へり、爾等人人の前に己を義と爲す、然れども神は爾等の心を知れり、蓋人人の中に高しとする事は、神の前に惡むべきなり。一六律法と預言者とはイオアンに至りて止れり、其時より神の國は福音せられ、人人力を用ゐて之に進む。一七然れども天地の廢るは、律法の一畫の闕くるに較ぶれば、更に易し。一八凡そ其妻を出して、他に娶る者は、姦淫を行ふなり、夫に出されたる婦を娶る者も、亦姦淫を行ふなり。

り。一九 富める人あり、紫袍と細布とを衣、日日奢り樂めり。二〇 亦貧しき者ラザリ
と名づくるあり、全身腫物を病みて、富める人の門に臥し、二一 其食卓より遺つる屑
を以て、腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其腫物を舐れり。二二 貧しき者死して、天使
等に因りてアウラアムの懷に送られ、富める者も死して葬られたり。二三 地獄に苦の
中に在りて、彼其目を擧げて、遙にアウラアム及び其懷に在るラザリを見たり。二四
乃呼びて曰へり、父アウラアムよ、我を憐み、ラザリを遣して、其指の尖を水に蘸して、
我が舌を涼さしめよ、蓋我此の燄の中に苦む。二五 然れどもアウラアム曰へり、子よ、爾
は存命の時爾の善を受け、ラザリは同じく其惡を受けたりしを憶へ、今彼は此に慰み、
爾は苦む。二六 第此のみならず、爾等と我等との間に巨なる淵は限れり、故に此より爾
等に渉らんと欲する者は能はず、彼よりも我等に渉るを得ず。二七 彼曰へり、然らば父
よ、請ふ、ラザリを我が父の家に遣せ、二八 蓋我に五人の兄弟あり、彼をして其前に證
を爲さしめよ、彼等も此の苦の處に來らざらん爲なり。二九 アウラアム之に謂ふ、彼等
にモイセイ及び預言者あり、之に聽くべし。三〇 彼曰へり、否、父アウラアムよ、然れども

若し死の中より彼等に往く者あらば、彼等悔改せイ及び預言者に聽かずば、縦ひ死より復活する者ありとも信ぜざらん。

第十七章

一イエス又其門徒に謂へり、誘惑は來らざるを得ず、惟之を來す者は禍なる哉。二人此の小子の一人を罪に誘はんよりは、寧磨石を其頸に懸けられて、海に投ぜられん。三己を愼めよ、若し爾の兄弟爾に罪を獲ば、彼を戒めよ、若し悔いば、彼に免せ。四若し一日に七次爾に罪を獲、亦一日に七次自ら歸りて、我悔ゆと曰はば、彼に免せ。五使徒等主に謂へり、我等に信を益せ。六主曰へり、若し爾等に芥種の如き信あらば、此の桑に、拔けて海に植われと言ふとも、爾等に聽かん。七孰か爾等の中に耕し、或は畜を牧ふ僕あらんに、其田より歸りて後、之に直に來りて席坐せよと云ふ者あらんや、八豈彼に曰はずや、我が晩餐を備へ、我の食飲する間、帶を束れて我に事へ、後爾食飲せよと。九彼は其僕が命ぜられし事を行ひし爲に、之に謝せんか、我之を意はず。一〇是くの如く爾等も、凡そ爾等に命ぜられし事を行ひし時には謂へ、我等は無益の僕なり、行ふべき事を行ひしのみと。一一彼イエルサリムに往くに、サマリヤとガリレ

り。一二 或る村に入る時、癩病者十人彼を迎へ、遠く立ちて、聲を揚げて曰へり、一三 イエス夫子よ、我等を憐め。一四 イエス彼等を視て曰へり、往きて己を司祭等に示せ。彼等往く時潔まれり。一五 其中一人、己の愈えしを見て、返りて、大聲を以て神を讃美し、一六 イエスの足下に俯伏して感謝せり、彼はサマリヤの人なり。一七 イエス曰へり、潔まりし者は十人に非ずや、其九は何處に在るか、一八 此の異族人の外、如何ぞ返りて光榮を神に歸せざる。一九 又彼に謂へり、起ちて往け、爾の信は爾を救へり。二〇 ファリセイ等に、神の國は何の時に來ると問はれて、彼等に答へて曰へり、神の國は顯に來らず、二一 人、視よ、此處に在り、或は視よ、彼處に在りと、曰はざらん。蓋視よ、神の國は爾等の裏に在り。二二 又門徒に謂へり、爾等人の子の一日を見んと欲する時至らん、而して之を見ざらん。二三 人人爾等に、視よ、此處に在り、或は視よ、彼處に在りと謂はん、往く勿れ、從ふ勿れ。二四 蓋電が天の此の涯より閃きて、天の彼の涯にまで光るが如く、人の子も其日に是くの如くならん。二五 然れども彼は先づ多く苦を受けて、此の世に棄てらるる可し。二六 ノイの日に在りし如く、人の子の日にも是くの如くならん。二七 人

人食ひ飲み、娶り嫁ぎて、ノイの方舟に入る日に至り、洪水來りて、盡く彼等を滅せり。二八同じく又ロトの日に在りしが如し人人食ひ飲み、買ひ賣り、樹ゑ構造せり、二九然れどもロトがソドムより出でし日、天より火と硫黄と雨りて、盡く彼等を滅せり。三〇人の子の顯る日にも亦是くの如くならん。三一當日屋の上に在らん者は、其器家に在らば、之を取らん爲に下る可からず、田に在らん者も、同じく後へ歸る可からず。三二ロトの妻を記憶せよ。三三己の生命を救はんと求むる者は、之を喪はん、之を喪ふ者は、之を存せん。三四我爾等に語ぐ、其夜二人榻を同じくせんに、一人は取られ、一人は遺されん。三五二人の婦共に磨を旋かんに、一人は取られ、一人は遺されん。三六二人田に在らんに、一人は取られ、一人は遺されん。三七彼等問ひて曰く、主よ、何處にか之れ有る。彼は之に謂へり、屍の在る所には、鷲集らん。

第十八章

一イイスス又譬を設けて、彼等に恒に祈禱して倦むべからざることを言へり、二曰く、或邑に裁判官あり、神を畏れず、人に恥ぢず。三其邑に一の嫠あり、彼に來りて曰へり、我を我が仇より援けよ。四彼久しく肯はざりしが、其後自ら思ひて曰へり、我

神を畏れず、人に恥ぢずて、我に賄しくせさらん爲なり。六主曰へり、不義なる裁判官の言ふ所を聽け。七神は晝夜彼に籲ぶ所の其選びたる者を、久しく忍ぶことも、終に援けざらんや。八我爾等に語ぐ、速に彼等に援けん。然れども人の子來りて、信を地に見んや。九又己を義なりと信じて、他人を藐る者に、此の譬を語れり。一〇二人祈禱せん爲に殿に登れり、一はファリセイ、一は稅吏なり。一一ファリセイ立ちて、己の衷に斯く禱れり、神よ、我他人の如く、或は此の稅吏の如くならざるを以てなり。一二我一七日に二たび物のいみし、凡そ得る所の十分の一を獻ぐ。一三稅吏は遠く立ちて、敢て目を擧げて天を仰がず、乃膺を拍ちて曰へり、神よ、我罪人を憐めさ。一四我爾等に語ぐ、此の人は彼の人よりは義とせられて、家に歸れり。蓋凡そ自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。一五嬰兒を彼に攜へ來れるあり、彼等に觸れん爲なり、門徒見て、之を戒めたり。一六然れども イイスス彼等を呼びて曰へり、幼兒の我に就くを容せ、之に禁ずる勿れ、蓋神の國は是くの如き者に屬す。一七我誠に爾等に語ぐ、幼兒の如く

に神の國を承けざる者は、之に入るを得ず。一八 或宰彼に問ひて曰へり、善なる師よ、我永遠の生命を嗣がん爲に何を爲すべきか。一九 イイスス彼に謂へり、爾は誠を誡れり、淫する勿れ、殺す勿れ、竊む勿れ、妄證する勿れ、爾の父母を敬へ。二〇 彼曰へり、我幼きより皆之を守れり。二一 イイスス之を聞きて、彼に謂へり、爾に猶一つの足らざる事あり、悉く爾の所有を售りて貧者に施せ、然らば財を天に有たん、且來りて我に從へ。二二 彼之を聞きて甚憂ひたり、巨に富める故なり。二四 イイスス其甚憂ひたるを見て曰へり、富める者が神の國に入るは難き哉。二五 蓋駱駝が針の孔を穿るは、富める者が神の國に入るより易し。二六 之を聞きし者曰へり、然らば誰か能く救はれん。二七 彼曰へり、所神には能する所なり。二八 ペトル曰へり、視よ、我等一切を舍てゝ爾に從へり。二九 イイスス彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、神の國の爲に家、或は父母、或は兄弟、或は姉妹、或は妻、或は子を舍てて、三〇 而して斯の時に多倍を受け、未來の世に永遠の生命を受けざる者あらず。三一 十二門徒を招きて、彼等に謂へり、視よ、我等イエルサリムに上る、而し

て預言者に因りて人の子を指して錄されし事皆成らん。三二 蓋彼は異邦人に付され、
嘲られ、辱められ、唾せられん。三三 人彼を鞭ち、彼を殺さん、而して第三日に彼復活せん。
三四 然れども彼等少しも之を曉らざりき、斯の言は彼等の爲に隱れて、彼等謂はれし
事を知らざりき。三五 彼がイエリホンに近づける時、或瞽者道の旁に坐して乞へり。三
六 民の過ぐるを聞きて、是れ何事ぞと問へば、三七 人人彼にイイススナゾレイの過ぐ
るなりと告げたり。三八 彼呼びて曰へり、ダヴィドの子イイススよ、我を憐め。三九 前に行
く者彼を禁めて默さしむれども、彼愈大に呼べり、ダヴィドの子よ、我を憐め。四〇 イイ
スス止りて、彼を攜へ來るを命じ、其近づきし時、之に問ひて 四一 曰へり、我が爾に何を
爲さんことを欲するか。彼曰へり、主よ、我が見るを得んことを。四二 イイスス彼に謂へ
り、見るを得よ、爾の信は爾を救へり。四三 彼直に見るを得、神を讃榮して、イイススに從
へり。衆民是を見て、讃美を神に歸せり。

第十九章

一 イイススイエリホンに入りて過ぎ行けり。二 視よ、ザクヘイと名づくる
者あり、稅吏の長にして富める者なり。三 イイススの如何なる人たるを見んと欲した

れごも、人の衆きに因りて見るを得ざりき、身の長短ければなり。四 乃ち趨り前みて、彼を見んが爲に無花果樹に升れり、彼此の旁を過ぎんとすればなり。五 イエス此の處に來りし時、仰ぎて之を見て曰へり、ザクヘイよ、速に下れ、蓋我今日爾の家に寓るべし。六 彼急ぎ下り、喜びてイエスを接けたり。七 人皆之を見て、怨みて曰の客と爲れりと。八 ザクヘ立ちて主に謂へり、主よ、我所有の半を以て、貧しき者に施さん、若し誣ひて人より收りしことあらば、四倍にして之を償はん。九 イエス彼に謂へり、今日救は此の家に臨めり、此の人もアブラハムの子なればなり。一〇 蓋人の子は亡びし者を尋ねて救はん爲に來れり。一一 彼等が之を聞く時、イエス又譬を設けたり、蓋彼已にイエルサリムに近づき、彼等は神の國直に顯るべしと意へり。一二 故に彼曰へり、或貴き人遠き地に往けり、國を受けて歸らん爲なり。一三 往して、彼等に銀十斤を與へて曰へり、我が歸る迄で貿易せよ。一四 其國民彼を憎みて、後より使を遣して曰へり、我等は斯の人の我等に王たるを欲せず。一五 彼が國を受けて歸りし時、彼の銀を與へし諸僕を召すことを命じたり、各幾何か利を獲たるを知ら

ん爲なり。一六 第一の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は十斤を獲たり。一七 主彼に謂へり、善い哉、善き僕よ、爾は小き者に於て忠なりしに因りて、十の邑を管れ。一八 其次の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は五斤を獲たり。一九 之にも謂へり、爾は五の邑を管れ。二〇 又其次の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は此に在り、我巾に裹みて之を藏れり。二一 主よ、爾は嚴酷なる人にして、置かざりし者を取り、播かざりし者を穫るを以て、爾を畏れし故なり。二二 主彼に謂ふ、惡しき僕よ、我爾の口に依りて、爾を鞫かん、爾は我が嚴酷なる人にして、置かざりし者を取り、播かざりし者を穫るを知りたらば、二三 何ぞ我が銀を兌に錢肆に預けざりし、然せば我來りて、之を利さ與に受けしならん。二四 遂に前に立てる者に曰へり、其一斤を取りて十斤を有てる者に與へよ。二五 彼等曰へり、主よ、彼已に十斤を有てり。二六 曰く、我爾等に語ぐ、凡そ有てる者には與へられ、有たざる者よりは、其有てる物も奪はれん。二七 且彼の我が王たるを欲せざりし我が彼等に主たるを欲せざりし者を此に曳き來りて、我が前に誅せよ。二八 之を言ひ畢りて、イエスス前に行き、イエルサリムに向ひて上れり。二九 橄欖山と名づくる山に邇く、ワファギヤ及びワフニヤに近づきし

時、彼二人の門徒を遣して 三〇 曰へり、前なる村に往け、其内に入らば、繋ぎたる小驢、人の未だ曾て乘らざりし者に遇はん、之を解きて牽き來れ。三一 若し爾等に何爲れぞ解くと問ふ者あらば、斯く彼に言へ、主之を需むと。三二 遣はされし者往きて、彼が言ひし如き事に遇へり。三三 小驢を解く時、其主彼等に謂へり、何ぞ小驢を解く。三四 彼等曰へり、主之を需む。三五 乃之をイイススに牽き來り、己の衣を小驢に掛け、イイススを其上に乘せたり。三六 彼が行く時、人人己の衣を途に布けり。三七 已に橄欖山より下路に近づける時、大衆の門徒は喜びて、其見し所の悉くの異能の爲に、大聲に神を讃美して 三八 曰へり、主の名に因りて來る王は祝福せらる、天には和平、至高きには光榮と。三九 民の中より或ファリセイ等彼に謂へり、師よ、爾の門徒を禁めよ、四〇 彼は之に答へて曰へり、我爾等に語ぐ、若し彼等默さば、石は呼ばん。四一 既に近づきし時、城を見て、之が爲に哭きて 四二 曰へり、噫若し爾も、此の爾の日にだに、爾の平安に關する事を知りたらんには。然れども此れ今爾の目に隱れたり。四三 蓋日爾に至りて、爾の敵は壘を築きて、爾を繞り、四方より爾を攻め、四四 爾及び爾の中に爾の諸子を滅

し、爾の中に石を下に遺さざらん、爾の眷顧の時を爾知らざりしに因りてなり。四五遂に殿に入りて、其中に貿易する者を逐ひ出して、四六彼等に謂へり、我が家は祈禱の家なりと錄されたるに、爾等之を盜賊の巢窟と爲せり。四七乃日日殿に在りて、教を宣べたり、司祭諸長、學士等、及び民の長老等彼を滅さんと謀りたれども、四八爲す可き所を知らざりき、蓋民皆離れずして彼に聽けり。

第二十章

一　當時の一日、イエス殿に在りて民を教へ、福音を宣ぶるに、司祭諸長及び學士等は長老等と共に就きて、彼に謂へり、二我等に語げよ、爾何の權を以て是を行ふか、或は誰か爾に此の權に與へたる。三彼は之に答へて曰へり、我も亦一言爾等に問はん、我に語げよ、四ヨハネの洗禮は天よりせしか、抑人よりせしか。五彼等竊に議して曰へり、若し天よりと云はゞ、爾等何ぞ彼を信ぜざりしと云はん、六若し人よりと云はゞ、民皆石を以て我等を擊たん、イエスを預言者と信ずればなりと。七遂に答へて曰へり、實れよりせしを知らず。八イエス彼等に謂へり、我も何の權を以て是を行ふを爾等に語らん。九是に於て彼は此の譬を民に語れり、或人葡萄園を植ゑ、之を園丁

に託して、他方に往きて久しく居たり。一〇期に及びて、彼は僕を園丁に遣して、彼に葡
萄の實を與へしめんとせしに、園丁之を扑ちて、空しく返らしめたり。一一復他の僕を
遣しゝに、彼等之をも扑ち、辱しめて、空しく返らしめたり。一二又第三の者を遣しゝに、
之をも傷つけて、逐ひ出せり。一三其時葡萄園の主曰へり、我何を爲さんか、我が至愛の
子を遣さん、或は彼を見て愧ぢんと。一四然れども園丁彼を見て、相議して曰へり、此れ
嗣子なり、往きて彼を殺さん、其嗣業の我等の有さならん爲なり。一五乃彼を葡萄園
の外に曳き出して殺せり。然らば葡萄園の主は彼等に何を爲さんか。一六彼來りて、其
園丁を滅し、葡萄園を他の者に託せん。之を聞きし者曰へり、願はくは此れ有らざらん。
一七然るにイイスス彼等に目を注ぎて曰へり、錄して、工師が棄てたる石は屋隅の首
石と爲れりと、云ふは何ぞや。一八凡そ此の石の上に倒るゝ者は壞られ、此の石の其上
に墜つる者は碎かれん。一九斯の時司祭諸長と學士等とは彼に手を措かんと謀りた
れども、民を懼れたり、其彼等を指して、此の譬を語りしを覺りたればなり。二〇乃彼
を窺ひて、義者の爲をなせる間者を遣して、言に因りて彼を羅せんと欲せり、彼を有司

に及び方伯の權威に解さん爲なり。二一彼等問ひて曰へり、師よ、我等は爾が正しく言ひ且教へ、貌を以て人を取らず、乃ち眞に神の道を教ふるを知る。二二我等税を該撒に納むるは宜しや否や。二三イエス彼等の惡意を知りて曰へり、何ぞ我を試みる、二四銀一枚を我に示せ、斯に誰の像と號あるか。答へて曰へり、該撒のなり、二五然らばケサリの物をケサリに納め、神の物を神に納めよ。二六彼等民の前に其言を執ふるを得ず、其答を奇として默然たり。二七又復活なしと言ふサドカイ等の數人來りて、二八曰く、師よ、モイセイ我等の爲に書して云へり、若し人の兄弟妻ありて子なくして死せば、兄弟其妻を娶りて、其兄弟の嗣を興すべしと。二九兄弟七人ありしが、第一の者妻を娶り子なくして死せり。三〇第二三一第三の者も之を娶れり、其七に至るまで皆然り、共に子を遺さずして死せり。三二其後妻も亦死せり。三三然らば復活の時彼は其中誰の妻と爲らんか、蓋七人之が妻と爲りたればなり。三四イエス彼等に答へて曰へり、斯の世の諸子は娶り嫁ぐなり、三五然れども彼の世及び死より復活を得るに當れる者は娶るなく嫁ぐなし、

三六 蓋已に死すること能はず、彼等は天使等と侔しく、且復活の子としては神の子な
ればなり。三七 死者の復活することに付きては、モイセイも棘の篇に於て、主をアウラ
アムの神、イサアクの神、イアコフの神と稱ふるを以て之を顯せり。三八 神は死者の神
に非ず、乃生者の神なり、蓋彼に在りては皆生くるなり。三九 或學士等答へて曰へり、
師よ、爾の言ひし所善し。四〇 是より敢て復彼に問ふ所なかりき。四一 イイスス彼等に
謂へり、人如何ぞハリストスをダヴィドの子なりと云ふ。四二 ダヴィド自ら聖詠の書に云
ふ、主我が主に謂へり、爾我が右に坐して、四三 我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れ
と。四四 斯くダヴィドは彼を主と稱ふ、如何ぞ彼は其子たる。四五 民皆聽く時、彼其門徒に
謂へり、四六 謹みて學士等を防げ、彼等は長き衣にて遊ぶを好み、街衢には問安、會堂に
は首座、筵には上席を喜ぶ、四七 彼等は嫠の家を呑み、佯りて長き祈を爲す、彼等尤重
き定罪を受けん。

第二十一章

一 イイスス目を擧げて、富める人人の其獻金を獻賽國に投ずるを見、
二 又一人の貧しき嫠の二「レプタ」を投ずるを見て三 曰へり、我誠に爾等に語ぐ、此の貧

しき嫠は衆人より多く投じたり。四蓋彼等皆其羨餘より獻金を神に投じ、彼は其乏し
き所より、其有てる生計を盡く投じたり。五或が殿の事、其美しき石と奉納品とを以
て飾りたる事を語れる時、彼曰へり、六日來らん、此の爾等が見る物の中、一の石も石の
上に遺らずして、皆圮されん。七彼等問ひて曰へり、師よ、何の時に此の事有らんか、又此
等の成らんとする時は、如何なる兆あるか。八彼曰へり、愼みて惑はさるゝ勿れ、蓋多く
の者は我が名を冒して來り、是れ我なりと云はん、時は邇づけり、彼等の後に從ふ勿れ。
九爾等戰と亂とを聞かん時、懼るゝ勿れ、蓋此等の事は先づ有るべし、然れども末期
は未だ速ならず。一〇其時彼等に謂へり、民は民を攻め、國は國を攻めん、一一處處に
大なる地震、饑饉、疫病あり、畏るべき現象、及び大なる休徵天よりするあらん。一二凡そ
此等の事の先に、人人其手を爾等に措き、爾等を窘逐して、會堂及び獄に解し、我が名の
爲に爾等を諸王諸侯の前に曳かん。一三爾等が此の事に遇ふは證を爲さん爲なり。一
四故に爾等の心を定めて、何を對へんと預め慮る勿れ。一五蓋我爾等に口と智慧
とを與へて、凡そ爾等の仇をして辨駁敵對する能はざらしめん。一六爾等亦父母、兄弟、

親戚、朋友より解され、且爾等の中或者は殺されん。一七 爾等我が名の爲に衆人に憎まれん。一八 然れども爾等の首の髮の一も喪びざらん。一九 忍耐を以て爾等の靈を救へ。二〇 爾等イエルサリムが軍に圍まれたるを見る時は、其亡の近づきしを知れ。二一 其時イウデヤに在る者は山に遁るべし、城の中に在る者は此より出づべし、鄕に在る者は其中に入るべからず。二二 蓋此れ復讐の日なり、凡そ錄されし事の應はん爲なり。二三 當日には妊める者と乳を哺ます者と禍なる哉、蓋大なる菑は地に在りて、怒は斯の民に及ばん。二四 彼等は劍の刃に斃れ、又諸民の中に擄にせられん、イエルサリムは異邦民に蹂られて、異邦民の期の滿つるに迄らん。二五 日月星辰には異象あり、地には諸民の煩悶と顚沛とあらん、海は轟きて濤たゝん。二六 人人畏懼に依り、又全地に來らんとする禍を俟つに依りて、氣の絶ゆるあらん、蓋天勢は震ひ動かん。二七 其時人の子が權能と大なる光榮とを以て、雲に乘りて來るを見ん。二八 此等の事の成り始むる時、起きて爾等の首を翹げよ、蓋爾等の贖は近づけり。二九 又譬を設けて彼等に謂へり、無花果樹及び凡の樹を觀よ。三〇 已に萌す時は、爾等之を見て、自ら夏の近きを知る。三

一是くの如く爾等亦此等の事の成るを見ん時は、神の國の近きを知れ。三二我誠に爾
等に語ぐ、此の世未だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。三三天地は廢せん、然れども我が
言は廢せざらん。三四自ら愼め、恐らくは爾等の心は饕餮、沈湎、及び度生の慮に鈍く
せられて、彼の日突然爾等に至らん。三五蓋斯の日は網の如く、一切全地の面に住む者
に臨まん。三六故に恒に儆醒して祈れ、此等來らんとする事を悉く遁れて、人の子の前
に立つに堪へん爲なり。三七イイススは晝は殿に在りて教を宣べ、夜は出でゝ、橄欖山と
名づくる山に宿れり。三八民皆朝早く殿に來り、彼に就きて聽けり。

第二十二章

一除酵節即逾越と名づくる節は近づけり。二司祭諸長と學士等と
は如何にイイススを殺さんと謀れり、蓋民を畏れたり。三時にサタナは十二の一なる
イウダ、稱して「イスカリオト」と云ふ者に入れり。四彼往きて、司祭諸長及び庶司と共に、
如何にイイススを彼等に付さんことを語れり。五彼等喜びて、銀を彼に與へんことを
約したれば、六彼諾ひて、民の在らざる時にイイススを彼等に付さん爲に、好き機を窺
へり。七除酵日即逾越節の羔を宰るべき日至れり。八イイススはペトル及びイオアン

を遣して曰へり、住きて、我等が食せん爲に逾越節筵を備へよ。九彼等曰へり、何處に之
を備へんことを欲するか。一〇彼は之に謂へり、視よ、爾等が城に入る時、水を盛れる瓶
を攜ふる人爾等に遇はん、之に隨ひて、其入る所の家に入りて、一一家の主に語げよ、師
爾に謂ふ、我が門徒と偕に逾越節筵を食すべき室は何處に在るかと。一二彼爾等に敷
き飾りたる大なる樓を示さん、彼處に備へよ。一三彼等往きて、其言ひし若き事に遇ひ
て、逾越節筵を備へたり。一四時至りて、イイスス席坐し、十二使徒彼と偕にせり。一五彼
等に謂へり、我は苦を受くる先に、此の逾越節筵を爾等と偕に食せんことを甚望めり。
一六蓋我爾等に語ぐ、我復之を食せずして、其神の國に成るに至らん。一七乃爵を
執りて、感謝して曰へり、此を取りて、互に分て。一八蓋我爾等に語ぐ、我復葡萄の實よ
り飲まずして、神の國の臨むに至らん。一九又餅を取り、感謝して之を擘き、彼等に與へ
て曰へり是我の體、爾等の爲に付さるゝ者なり、爾等此を行ひて、我を記念せよ。二〇同
じく晩餐の後に爵を執りて曰へり、此の爵は乃新約、爾等の爲に流さるゝ我が血を
以て立つる者なり。二一視よ、我を賣る者の手は我と偕に席上に在り。二二人の子は逝

く、預め定められしが如し、惟彼を賣る者は禍なる哉。二三 彼等互に誰が此を爲さんと
するを問へり。二四 又彼等の中に、孰か大なると互に爭ふことあり。二五 彼は之に謂へ
り、諸王は其諸民を主り、民の上に權を執る者は恩主と稱へらる。二六 然れども爾等は
斯くある可からず、乃爾等の中に大なる者は、小き者の如く、首たる者は、役はるゝ者
の如くなるべし。二七 蓋孰か大なる、席坐する者か、役はるゝ者か、席坐する者に非ず
や、然れども我は爾等の中に在りて役はるゝ者の如し。二八 爾等我が患難の中に於て
恒に我と偕にせり、二九 我も亦爾等に國を遺し予ふ、我が父の我に遺し予へしが如し、
三〇 爾等が我が國に於て、我が席に食飲し、且位に坐して、イズライリの十二支派を審
判せん爲なり。三一 主又曰へり、シモンよ、シモンよ、視よ、サタナ爾等を麥の如く簸はん
ことを求めたり。三二 然れども我爾の爲に、爾の信の盡きざらんことを禱れり、而して
爾後に轉じて、爾の兄弟を堅めよ。三三 對へて曰へり、主よ、我爾と偕に獄にも死にも往
かんことを備へたり。三四 彼曰へり、ペトル我爾に語ぐ、今日鷄の鳴かざる先に、爾三
次我を諱みて、識らずと言はん。三五 又彼等に謂へり、我が爾等を金囊も、行袋も、屨もな

くして遣しゝ時、爾等缺けたることありしか。曰く、無かりき。三六 彼曰へり、然れども今
は金嚢ある者は、之を取れ、行袋も亦然り、劍なき者は、衣を賣りて之を買へ。三七 蓋我
爾等に語ぐ、錄して、罪犯者と偕に算へられたりと云へることも、我に於て應ふべし、蓋
我を指して錄されし事は終あり。三八 彼等曰へり、主よ、視よ、此に二の劍あり。彼曰へり、
足れり。三九 乃出でゝ、例の如く、橄欖山に往けり、其門徒も彼に從へり。四〇 其處に至
りて、彼等に謂へり、祈禱して誘惑に入るを免れよ。四一 自ら石の投げらるゝ程に彼等
を離れ、膝を屈めて、禱りて 四二 曰へり、父よ、噫若し爾此の爵をして我を過ぎしめんこ
とを肯じたらんには。然れども我の旨成らずして、爾の旨成るべし。四三 天使は天より
現れて、彼を堅めたり。四四 彼痛く哀みて、禱ること愈切なり、其汗は血の滴の如く地
に下れり。四五 祈禱より起きて、門徒に來り、其憂に依りて睡ぬるを見て、四六 彼等に謂
へり、何ぞ寢ぬる、起きて祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり。四七 彼が尚言ふ時、視よ、民
至り、十二の一、イウダと名づくる者、之に先だちて行き、イイススに就きて接吻せり。蓋
此の號を彼等に與へたり、我が接吻せん者は、卽斯の人なりと。四八 イイスス之に謂

へり、イワダよ、爾接吻を以て人の子を付すか。四九彼と僕に在りし者、事の及ばんさを見て、彼に謂へり、主よ、我等劍を以て撃たんか。五〇其中の一人は司祭長の僕を撃ちて、其右の耳を削ぎ落せり。五一イイスス答へて曰へり、此に至りて止めよ、乃其耳に捫りて、之を醫せり。五二イイススは己に向ひ来れる司祭諸長と殿の庶司と長老等さに謂へり、爾等は盜賊に向ふ如く、劍と棒とを持ちて、我を捕へん爲に出でたり。五三我日日爾等と偕に殿に在りしに、爾等我に手を措かざりき、然れども今は爾等の時及び黑暗の勢なり。五四既に彼を執へて、曳きて司祭長の家に至れり。ペトル遠く隨へり。五五人人が中庭の内に火を燃きて、共に坐せし時、ペトルも其中に坐したり。五六一人の婢彼が火に向ひて坐せるを見、之に目を注ぎて曰へり、此の人も彼と偕にありき。五七然れども彼諱みて曰へり、女よ、我彼を識らず。五八少頃ありて、他の者彼を見て曰へり、爾も彼等の一人なり。ペトル曰へり、人よ、然らず。五九約一時を過ぎて、又一人言を力めて曰へり、實に此の人も彼と偕にありき、蓋是ガリレヤの人なり。六〇然れどもペトル曰へり、人よ、我爾が言ふ所を識らず。尚之を言ふ時、忽鷄鳴けり。六一主身を轉じて、

ペトルに目を注ぎたれば、ペトル主の彼に、鷄の鳴かざる先に、爾三次我を諱まんと、云
ひし言を憶ひ起して、六二外に出でゝ、痛く哭けり。六三イイススを執れる者戯れて、彼
を扑てり。六四其目を蔽ひて、其面を批ち、問ひて曰へり、預言せよ、爾を撃ちし者は誰ぞ。
六五其他多くの事を謂ひて、彼を誚れり。六六平旦に及びて、民の長老等と司祭諸長と
學士等と集りて、彼を其公會に曳きて六七曰へり、爾はハリストスなるか、我等に告げ
よ。彼曰へり、我若し爾等に告げば、爾等信ぜざらん、六八若し爾等に問はゞ、爾等應へざ
らん、又我を釋さざらん。六九今より後人の子は神の大能の右に坐せん。七〇僉曰へり、
然らば爾は神の子なるか。彼答へて曰へり、爾等言ふ、我は是なり。七一彼等曰へり、何ぞ
復證を求めん、蓋我等自ら其口より聞けり。

第二十三章

一衆皆起ちて、彼をピラトの前に曳き、二彼を訟へて曰へり、我等は此
の人が我が民を惑はし、税をケサリに納むるを禁じ、自らハリストス王と稱ふるを見
たり。三ピラト彼に問ひて曰へり、爾はイウデヤ人の王なるか。彼答へて曰へり、爾言ふ。
四ピラト司祭諸長及び民に謂へり、我此の人に一も罪あるを見ず。五然れども彼等

益奮ひて曰へり、彼民を亂し、全イウデヤに教へて、ガリレヤより始め、此の處に至れ
り。六 ピラトはガリレヤと聞きて、此の人はガリレヤ人なるかと問ひ、七 既にして其イ
ロドの權下に屬するを知りて、彼を當時同じくイエルサリムに在りしイロドに遣せ
り。八 イロドイイススを見て、甚喜べり、蓋久しく彼を見んと欲せり、彼の事を多く聞
き、且彼に由りて行はるゝ休徵を見んことを望みたればなり。九 故に多くの言を以て
彼に問ひたれども、彼は何をも答へざりき。一〇 司祭諸長と學士等と立ちて、彼を訟ふ
ること甚切なり。一一 然れどもイロドは其士卒と共に、彼を侮り、且嘲弄して、彼に鮮
なる衣を衣せて、復彼をピラトに遣せり。一二 是の日に於て、ピラト及びイロド互に親
しくなれり、蓋先には相讎たりき。一三 ピラトは司祭諸長、有司等、及び民を呼び集めて、
一四 彼等に謂へり、爾等は此の人を以て、民を惑はす者と爲して、我に曳き至れり、視よ、
我爾等が訟ふる所を以て爾等の前に審べて、此の人に一も罪あるを見ざりき。一五 イ
ロドも亦然り、蓋我之を彼に遣したれども、其中に一も死に當る事を得ざりき。一六 故
に我笞うちて、之を釋さん。一七 蓋節期の爲に一の囚を彼等に釋すべき事ありき。一八

然れども民皆號びて曰へり、此を去れ、ワラウワを我等に釋せ。一九 此の人は城の中に
亂を作し、人を殺しゝに因りて、獄に下されたり。二〇 ピラトはイイススを釋さんと欲
して、復聲を揚げたれども、二一 彼等呼びて曰へり、彼を十字架に釘せよ、十字架に釘せ
よ。二二 ピラト第三次曰へり、彼は何の惡を行ひしか、我一も其中に死に當ることを見
ざりき、故に笞うちて彼を釋さん。二三 然れども彼等益聲を厲まして、彼を十字架に
釘せんことを求めたりしが、彼等と司祭諸長との聲は勝てり。二四 ピラト遂に其求の
如く擬めて、二五 亂と殺人との爲に獄に下されたる人、彼等が求めし者を釋し、イイス
スを付して、彼等の意旨に任せたり。二六 彼を曳き往く時、或キリ子ヤの人シモンが田
より來り過ぐるを執へ、之に十字架を負はせて、イイススに從はしめたり。二七 衆くの
民は彼に隨ひ、又多くの婦ありて、彼の爲に哭き哀めり。二八 イイスス彼等を顧みて曰
へり、イエルサリムの女よ、我の爲に哭く勿れ、己及び爾等の子の爲に哭け。二九 蓋視よ
日至りて、人人曰はん、妊まざる者、未だ產まざる胎、未だ哺はせざる乳は福なりと。三〇
其時人人山に對ひて、我等の上に倒れよ、陵に對ひて、我等を掩へと曰はん。三一 蓋若し

青き木に斯く爲さば、枯木は如何にせられん。三二 イイススと偕に亦二人の犯罪者を
死に處せん爲に曳けり。三三 髑髏と名づくる處に來りて、彼處に彼及び二の犯罪者を
十字架に釘せり、一は其右、一は左なり。三四 イイスス曰へり、父よ、彼等を赦せ、蓋彼等は
爲す所を知らず。人鬮を取りて、其衣を分てり。三五 民立ちて觀たり、有司等も衆と與に
嘲りて曰へり、彼は他人を救へり、若し彼ハリストス、神の選びたる者ならば、己を救ふ
べし。三六 兵卒も亦彼に戲れ、近づきて、醋を與へて 三七 曰へり、爾若しイウデヤ人の王
ならば、己を救へ。三八 彼の上にエルリン、ロマ、エウレイの文字を以て書したる標あり、曰
く、是れイウデヤ人の王なりと。三九 懸けられたる犯罪者の一人彼を誚りて曰へり、爾
若しハリストスならば、己と我等とを救へ。四〇 他の一人之を戒めて曰へり、爾豈神を
畏れざるか、蓋爾も同じく定罪せられたり、四一 惟我等に在りては當然なり、我が行に
稱へる事を受くればなり、然れども彼は一も不善を行はざりき。四二 乃イイススに
對ひて曰へり、主よ、爾の國に來らん時、我を記念せよ。四三 イイスス彼に謂へり、我誠に
爾に語ぐ、爾今日我と偕に樂園に在らん。四四 時約六時なり、晦冥は全地を蔽ひて第九

時に至れり。四五 日は晦み、殿の幔は中より裂けたり。四六 イイスス大聲に呼びて曰へり、父よ、我が神を爾の手に託す。之を言ひて、氣絶えたり。四七 百夫長成りし事を見て、神を讃榮して曰へり、此の人は誠に義人なり。四八 之を觀ん爲に聚りたる衆民は、成りし事を見て、膺を拊ちて返れり。四九 彼の相識及びガリレヤより彼に從ひし婦等、皆遠く立ちて、此等の事を見たり。五〇 時にイオシフと名づくる人、義士にして、善且義なる者、五一 彼等の謀と所爲とに黨せず、イウデヤの邑アリマヱヤに屬し、自らも神の國を俟てる者は、五二 ピラトに就きて、イイススの屍を求めたり。五三 既に之を下して、布に裹み、磐に鑿ちたる、未だ人の葬られざる墓に置きたり。五四 是の日は備節日にして、安息日已に邇づけり。五五 ガリレヤよりイイススと偕に來りし婦等後に隨ひて、墓及び如何に彼の屍を置きたるを觀たり。五六 歸りて後、香料と香膏とを備へ、誡に遵ひて安息日を息みたり。

第二十四章

一 七日の首の日、朝甚早く、彼等は備へたる香料を攜へて、墓に來れり、他の婦も彼等と偕にせり。二 石の墓より移されたるを見、三 入りて、主イイススの屍

た見ざりき。四之が爲に惑へる時、視よ、輝ける衣を衣たる二人彼等の前に立てり。五彼等懼れて、面を地に伏せたれば、二人之に謂へり、何ぞ生ける者を死者の中に尋ぬる。六彼は此に在らず、乃ち復活せり、彼がガリラヤに在りし時、如何に爾等に語げて、七人の子が罪人の手に付され、十字架に釘せられ、第三日に復活すべきことを云ひしを憶ひ起し、八墓より歸りて、悉く此を十一門徒及び其餘の者に告げたり。九〇使徒に之を告げたる者は、「マグダリナ」マリヤ、イオアンナ、イアコフの母マリヤ、及び其他彼等と偕に在りし者なり。一一使徒は彼等の言を空言となして、之を信ぜざりき。一二然れどペトル起ちて、墓に趨り往き、俯して、惟裹布の置けるを見、其成りし事を心に異みて歸れり。一三是の日其中の二人、イエルサリムを去ること約六十小里なるエムマウスと名づくる村に往きしが、一四互に凡そ此等の有りし事を語れり。一五語り且論ずる時、イイススも親ら近づきて、彼等と偕に行けり。一六然れども二人の目は捉められて、彼を識らざるを致せり。一七彼曰へり、爾等は行きて何事をか互に論じ、又何ぞ憂ふる色ある。一八其一人、クレヤパと名づくる者、彼に對へて曰へり、イエル

サリムに來りし者の中、爾獨近日其中に成りし事を知らざるか。一九問ひて曰へり、
何の事ぞ。彼等曰へり、イイススナゾレイ、卽神及び衆民の前に行と言とに能力ある
預言者たりし者に在りし事、二〇如何に我等の司祭諸長及び有司等が彼を解して、死
に定め、十字架に釘せし事なり。二一我等は嘗て此の人はイズライリを贖ふべき者な
りと望めり、然れども此れ皆成りしより今已に第三日なり。二二然るに又我等の中の
或婦等は我等を驚かせり、彼等朝早く墓に在りしが、二三其屍を見ずして、來りて、天
使等の現れて、彼は生くと言ふを見しことを語げたり。二四我等の中の數人墓に適き
しに、果して、婦の言ひし如き事を見たり、惟彼を見ざりき。二五イイスス彼等に謂へり、
噫無知にして、凡そ諸預言者の言ひし事を信ずるに心の遲き者よ、二六ハリストスは
此くの如く苦を受けて、其光榮に入るべかりしに非ずや。二七是に於てモイセイより
始めて、諸預言者に及ぶまで、凡そ聖書に彼を指して載することを彼等に說き明せり。
二八往く所の村に近づきしに、彼は尙遠く行かんとする者の若し。二九二人彼を留め
て曰へり、我等と偕に止れ、蓋時暮れんとし、日已に昃けり。彼入りて、偕に止れり。三〇席

坐せる時、彼餅を取りて、祝福し、擘きて彼等に與へたり。三一 其時二人目啓けて、彼を識
れり、而して彼忽見ねずなりき。三二 彼等互に言へり、途中彼が我等と語り、且我等に
聖書を解き明しゝ時、我等の心我が衷に燃ねしに非ずや。三三 卽時に起ちて、イエルサ
リムに歸り、十一門徒及び之と偕に聚れる者に遇へり。三四 僉言ふ、主は實に復活せり、
而してシモンに現れたり。三五 二人も亦途中に在りし事、及び如何に其餅を擘く時彼
等に識られし事を述へたり。三六 此等の事を語れる時、イイスス親ら彼等の中に立ち
て曰へり、爾等に平安。三七 彼等驚き且懼れて、見る所は神なりと意へり。三八 イイスス
彼等に謂へり、何ぞ懼れ惑ふ、胡爲れぞ此の意は爾等の心に起れる。三九 我が手我が足
を視よ、是我自なり、我に捫りて視よ、蓋神には骨肉なし、其我に有るを見るが如し。四
〇 此を言ひて、手足を彼等に示せり。四一 彼等喜に因りて、猶未だ信ぜず、且異める時、
彼曰へり、此に食ふべき物あるか。四二 彼等は炙りたる魚一片と蜜房とを彼に與へた
れば、四三 取りて、彼等の前に食へり。四四 又彼等に謂へり、我猶爾等と偕に在りし時、爾
等に語りて、モイセイの律法、諸預言者、及び聖詠に、我を指して錄されし事、皆應ふべし

さ云ひしは、乃是なり。四五 其時彼等の智識を啓きて、聖書を悟らしめたり。四六 又彼等に謂へり、斯く錄されたり、而して斯くハリストスは苦を受け、第三日に死より復活すべかりき。四七 且其名に因りて、悔改と諸罪の赦とは、イエルサリムより始めて、萬民に傳へらるべきなり。四八 爾等は此等の事の證者なり。四九 視よ、我は我が父の許約せしものを爾等に遣さん、爾等イエルサリムの城に居りて、上より能力を衣するに迄れ。五〇 イイスス彼等を外に率ゐて、ベタニヤに至りて、手を擧げて彼等に祝福せり。五一 祝福する時、彼等を離れ、擧げられて、天に升れり。五二 彼等之を拜し、大に喜びて、エルサリムに歸り、五三 恒に殿に在りて、神を頌美祝讀せり。「アミン」。

イオアンに因る聖福音

第一章

一 太初に言有り、言は神と共に在り、言は即ち神なり。二 是の言は太初に神と共に在り。三 萬物は彼に由りて造られたり、凡そ造られたる者には、一も彼に由らずして造られしは無し。四 彼の中に生命有り、生命は人の光なり。五 光は暗に照り、暗は之を敗はざりき。六 神よりイオアンなる人あり、其名は遣されし人なり。七 彼は證の為に來れり、光の事を證し、衆人をして彼に因りて信ぜしめん為なり。八 彼は光に非ず、乃光の事を證せん為に遣されたり。九 眞の光あり、凡そ世に來る人を照す者なり。一〇 彼嘗て世に在り、世は彼に由りて造られたり、而して世は彼を知らざりき。一一 己に屬する者の所に來れり、而して己に屬する者は彼を受けざりき。一二 彼を受け、其名を信ずる者には彼を神の子と為る權を賜へり。一三 是れ血氣に由るに非ず、情欲に由るに非ず、人欲に由るに非ず、乃神に由りて生れし者なり。一四 言は肉體と成りて、我等の中に居りたり、我等彼の光榮を見たり、父の獨生子の如き光榮なり、恩寵と眞實とに滿てり。一五

イオアン彼の事を證し、呼びて曰へり、我が謂て、我の後に來る者は、我の前と爲れり、蓋其本我より先なる者なりと言ひしは、即斯の人なり。一六　彼の充滿より我等皆恩寵の上に恩寵を受けたり。一七　蓋律法はモイセに由りて授けられ、恩寵と眞實とはイエスキリストに由りて來れり。一八　神を見し人未だ嘗てあらず、惟獨生の子、父の懐に在る者は、彼を彰せり。一九　イオアンの證は左の如し、イウデヤ人イエルサリムより司祭及びレワイト等を遣して、彼に爾は誰たるぞと問ひし時、二〇　彼承けて諱まざりき、承く、非ず。預言者なるか。答へて曰へり、否。二一　又彼に問へり、然らば何ぞ、爾はイリヤなるか。曰に答を爲さしめよ、爾は己の事を如何に云ふか。二三　彼曰へり、我は野に呼ぶ者の聲、主の道を直くせよと云ふ者なり、預言者イサヤの言ひしが如し。二四　遣されし者はファリセイ等に屬せり。二五　彼等又之に問ひて曰へり、爾ハリストスに非ず、イリヤに非ず、預言者に非さるに、何ぞ洗を授くるか。二六　イオアン彼等に答へて曰へり、我は水を以て洗を授く、然れども爾等の中に立てる者あり、爾等の識らざる者なり。二七　彼は則我

の後に來りて、我の前と爲れる者なり。我は其屨の帶を解くにも堪へず。二八 此の事は
イオルダンの外なるヲイファヲ、卽イオアンの洗を授くる處に行はれたり。二九 明日
イオアンはイイススの己に來るを見て曰く、視よ、神の羔、世の罪を任ふ者なり。三〇
我が嘗て、我の後に來る者ありて、我の前と爲れり、蓋其本我より先なる者なりと云ひ
しは、卽斯の人なり。三一 我は彼を識らざりき、然れども來りて、水を以て洗を授くる
は、殊に彼がイズライリに顯されん爲なり。三二 イオアン又證して曰へり、我は聖神、鴿
の如く天より降りて、彼に止るを見たり。三三 我は彼を識らざりき、然れども水を以て
洗を授けん爲に我を遣しゝ者は我に謂へり、爾が聖神の降りて、之に止るを見る者、此
れ卽聖神を以て洗を授くる者なりと。三四 我之を見、而して其神の子たるを證せり。
三五 明日イオアン又立てり、其門徒の二人偕にせり。三六 イイススの行くを見て曰く、
視よ、神の羔なり。三七 二門徒其言を聞きて、イイススに從へり。三八 イイスス顧みて、彼
等の其後に從ふを見て、之に謂ふ、爾等何を求むるか。彼等曰へり、ラウヲ、(譯すれば夫子、)
爾何にか居る。三九 曰く、來りて觀よ。彼等來りて、其居る所を觀、是の日彼と偕に居た

り。時約十時なりき。四〇イオアンに聽きて、イエスに從ひし二人の中一はアンドレイ即シモン・ペトルの兄弟なり。四一彼先づ其兄弟シモンに遇へり、之に謂ふ、我等メシヤ（譯すればハリストス）に遇へたりと。四二乃彼をイエスに攜へたり。イエス彼に目を注ぎて曰へり、爾はイオナの子シモンなり、爾はキファ（譯すればペトル）と稱へられん。四三明日イエスがガリレヤに往かんと欲し、フィリップに遇ひて、之に謂ふ、我に從へ。四四フィリップはヴィフサイダの人にして、アンドレイ及びペトルと邑を同じくせり。四五フィリップはナファナイルに遇ひて、之に謂ふ、我等は、モイセイが其律法に、及び諸預言者が記しゝ所の者に遇へり、是れイオシフの子、ナザレトのイエスなり。四六ナファナイルフィリップに謂ふ、豈ナザレトより善き者の出つるあらんや。フィリップ曰く、來りて觀よ。四七イエスはナファナイルの己に來るを見て、彼を指して曰く、視よ、誠にイズライリ人にして、詭譎なき者なり。四八ナファナイル彼に謂ふ、爾何に由りて我を知れるや。イエス答へて曰へり、フィリップが未だ爾を呼ばざる先、爾が無花果樹の下に在る時、我爾を見たり。四九ナファナイル答へて彼に謂ふ、夫子、爾は神の子、爾はイズライリの王なり。五〇

イイスス答へて曰へり、我が爾を無花果樹の下に見たりと言ひしに因りて、爾信ず、爾此よりも大なることを見ん。五一又彼に謂ふ、我誠に誠に爾等に語ぐ、是より爾等は天開けて、神の使等が人の子の上に陟降するを見ん。

第二章　一第三日に、ガリレヤのカナに婚筵あり、イイススの母も彼處に在りき。二イイスス及び其門徒も亦婚筵に招かれたり。三酒の乏しきに因りて、イイススの母之に謂ふ、彼等に酒なし。四イイスス曰く、婦よ、我と爾と何ぞ與らん、我の時未だ至らず。五其の母諸僕に謂ふ、彼が爾等に命ずる所を行へ。六彼處にイウデヤ人の潔の例に從ひて、石の水甕六あり、各二三斗を容る。七イイスス諸僕に謂ふ、甕に水を滿たせ。之に滿たして、幾ど溢る。八又彼等に謂ふ、今抱みて、司筵者に遞れ。乃遞れり。九司筵者は酒に變じたる水を嘗めて、（其實れより爲する を知らざりき、唯水を抱みし諸僕之を知れり）新婿者を呼びて、一〇彼に謂ふ、凡の人は先づ旨酒を進め、醉なるに及びて、劣酒を進む、爾は旨酒を留めて今に至れり。一一是イイススがリレヤのカナに於て休徴の始を立てゝ、其光榮を顯せり、其門徒彼を信ぜり。一二厥後彼親ら、及び其母、其兄弟、其門

徒はカペルナウムに下りて、彼處に居りし日多からず。一三 イウデヤ人の逾越節近づ
きて、イイススイエルサリムに上れり。一四 殿に於て牛羊鴿を市り、及び兌錢する者の
坐せるを見たれば、一五 繩を以て鞭を爲りて、其衆及び羊牛を殿より逐ひ出し、兌錢す
る者の金を散らし、其案を倒し、一六 鴿を市る者に謂へり、此の物を此より取れ、我が父
の家を貿易の家と爲す勿れ。一七 是に於て彼の門徒は、錄して、爾の家に於ける熱心は
我を蝕むと、云へるを憶ひ起せり。一八 イウデヤ人彼に謂へり、爾に此等の事を行ふ權
あるを、何の休徵を以て我等に示さんか。一九 イイスス彼等に答へて曰へり、爾等此の
殿を毀て、我三日にして之を興さん。二〇 イウデヤ人曰へり、此の殿を建つるには四十
六年を經たるに、爾三日にして、之を興さんか。二一 然れども彼は其肉體の殿を指して
云ひしなり。二二 彼が死より復活せし後、其門徒は、彼が曾て之を言ひしことを憶ひ起
して、聖書とイイススの言ひし言とを信ぜり。二三 彼が逾越節筵にイエルサリムに在
りし時、多くの者彼が行ひし休徵を見て、其名を信ぜり。二四 然れどもイイスス自ら己
を彼等に託せざりき、蓋衆人を知れり、二五 又他人が人を證するを要せざりき、自ら

人の中藏を知りたればなり。

第三章

一 ファリセイ等の中に名はニコヂムと云ふ人あり、イウデヤ人の宰の一なり。二 此の人夜イイスに來りて、彼に謂へり、夫子、我等は爾が神より來りし師なるを知る、蓋爾が行ふ所の休徴は、若し神之と偕にせずば、人行ふ能はず。三 イイス答へて曰へり、我誠に誠に爾に語ぐ、人若し上より生れずば、神の國を見ること能はず。四 ニコヂム彼に謂ふ、人既に老ゆれば、如何ぞ生るゝを得ん、豈再其母の腹に入りて、生るゝを得んや。五 イイス答へて曰へり、我誠に誠に爾に語ぐ、人若し水及び神より生れずば、神の國に入ることを得ず。六 肉より生れし者は肉なり、神より生れし者は神なり。七 我が爾に爾等上より生るべしと云ひしを奇しむ勿れ。八 風は欲する所に吹く、其何へ往くを知らず、凡そ神より生れし者は是くの如し。九 ニコヂけごし、其何ぞ斯の事あるを得ん。一〇 イイス答へて曰へり、爾はイズライリの師たるに、猶斯の事を知らざるか。一一 我誠に誠に爾に語ぐ、我等は知る所を言ひ、見し所を證す、而して爾等は我等の證を受けず。一二 我地の事を言ひしに、爾等信

ぜざれば、若し天の事を言はゞ爾等安ぞ信ぜん。一三天より降りし人の子、仍天に在
る者の外に、天に升りし者なし。一四モイセイが野に在りて蛇を擧げし如く、人の子も
是くの如く擧げらるべし、一五凡そ彼を信ずる者の亡ぶるなく、乃永遠の生命を得ん
爲なり。一六蓋神は世を愛して、其獨生の子を賜ふに至れり、凡そ彼を信ずる者の亡ぶ
るなく、乃永遠の生命を得ん爲なり。一七蓋神が其子を世に遣しゝは、世を定罪せん
爲に非ず、乃世の彼に由りて救はれん爲なり。一八彼を信ずる者は定罪せられず、信
ぜざる者は已に定罪せられたり、神の獨生の子の名を信ぜざりし故なり。一九定罪さ
は左の如し、光世に來りしに、人人光よりも多く暗を愛せり、彼等の行の惡かりし故な
り。二〇蓋凡そ不善を作す者は光を惡みて、光に就かず、彼の行の責められざらん爲な
り、其惡しき故なり。二一然れども眞實を行ふ者は光に就く、彼の行の顯れん爲なり、神
に在りて行はれし故なり。二二斯の後イイスス其門徒と與にイウデヤの地に來り、彼
等と偕に彼處に居りて、洗を授けたり。二三イオアンも亦サリムに近きエノンに在り
て、洗を授けたり、彼處には水多き故なり、人人來りて洗を受けたり。二四蓋イオアン

未だ獄に下されざりき。二五 時にイオアンの門徒はイウデヤ人と潔の事に就きて論を起せり。二六 イオアンに來りて、之に謂へり、夫子、爾と偕にイオルダンの外に在りて、爾が證せし所の者、視よ、彼は洗を授け、人皆彼に往く。二七 イオアン答へて曰へり、天より授けられしに非されば、人一も受くる能はず。二八 我が嘗て、我はハリストスに非ず、乃其前に遣されし者なりと言ひしことは、爾等自ら我が爲に證す。二九 新婦ある者は新壻者なり、新壻者の友、立ちて彼に聽く者は、新壻者の聲の爲に甚喜ぶ。今我が此の喜は滿てられたり。三〇 彼は長ずべく、我は消すべし。三一 上より來る者は萬有の上に在り、地より來る者は地に屬し、其言ふ所も亦地に屬す、天より來る者は萬有の上に在り。三二 彼は其見し所、聞きし所を證す、而して彼の證を受くる者なし。三三 其證を受けし者は神の眞なるを印證せり。三四 蓋神の遣しゝ者は神の言を言ふ、神が神を與ふるには限量を以てせざればなり。三五 父は子を愛し、而して萬物を其手に授けたり。三六 子を信ずる者は永遠の生命を有ち、子を信ぜざる者は生命を見ざらん、乃神の怒は其上に止まる。

第四章

一イイススは、其門徒を得、及び洗を授くることイオアンより多きを、フリセイ人が聞きたりと、知りし時、二(然れどもイイスス親ら洗を授けしに非ず、其門徒此を
爲せり、)三乃イウデヤを離れて、復ガリレヤに往けり。四彼サマリヤを過ぐべきに由
りて、五サマリヤの邑シハリと名づくる處に來れり、イアコフが其子イオシフに與へ
たる地に近し。六彼處にイアコフの井あり。イイスス旅に疲れて、井の傍に坐せり。時約
六時なり。七サマリヤの婦水を汲む爲に來れり。イイスス之に謂ふ、我に飲ましめよ。八
蓋其門徒は食を市はん爲に邑に往けり。九サマリヤの婦彼に謂ふ、爾はイウデヤ人た
るに、如何にして我サマリヤの婦に飲むを求むるか。蓋イウデヤ人とサマリヤ人とは
相交際せざるなり。一〇イイスス之に答へて曰へり、若し爾は、神の賜、及び我に飲ま
しめよと、爾に言ふ者の誰たるを知らば、爾自ら彼に求めん、而して彼は爾に活ける水
を與へん。一一婦彼に謂ふ、主よ、爾に汲む器なく、井も亦深し、然らば何より爾に活ける
水あるか。一二爾豈我が祖イアコフより大なるか、彼は我等に此の井を與へ、己も、其諸
子も、其家畜も、之より飲みたり。一三イイスス答へて謂へり、凡そ此の水を飲む者は、復

渇かん、一回然れども我が與へんとする水は、其中に於て永遠の生命に湧く水の泉と爲らん。一五婦彼に謂ふ、主よ、我に此の水を與へよ、我が渇かず、亦此に來りて汲まざらん爲なり。一六イイスス之に謂ふ、往きて、爾の夫を呼びて、此に來れ。一七婦對へて曰へり、我に夫なし。イイスス之に謂ふ、爾が夫なしと言ひしは是なり、一八蓋爾に五人の夫ありき、而して今有る者は爾の夫に非ず、此れ爾眞を言へり。一九婦彼に謂ふ、主よ、我觀るに爾は預言者なり。二〇我が先祖は此の山に拜せり、然るに爾等は拜すべき處はイエルサリムに在りと言ふ。二一イイスス之に謂ふ、婦よ、我を信ぜよ、此の山にも非ず、イエルサリムにも非ずして、爾等は拜する所を知らず、我等は拜する所を知る、蓋救はイウデヤ人より出るなり。二三然れども時は來る、今は是なり、眞の禮拜者は神を以て眞を以て父を拜する者を覓む。二四神は神なり、彼を拜する者は眞を以て拜すべし。二五婦彼に謂ふ、我知る、メッシヤ、卽ハリストスと稱る者の來らん、彼來る時、悉く我等に告げん。二六イイスス之に謂ふ、是れ我爾と語る者な

り。二七 適其門徒來りて、彼が婦と語れるを異みたれども、一も、爾は何を求むるか、或
は之と何を語るかと、云ひし者なし。二八 時に婦其水瓶を遺して、邑に往きて、人人に謂
ふ、二九 來りて、我が凡そ行ひし事を我に告げし人を觀よ、是れハリストスに非ずや。三
○ 人人邑を出でゝ、彼に往けり。三一 此の際門徒彼に請ひて曰へり、夫子、食へ。三二 然れ
ども彼は之に謂へり、我に食ふべき糧あり、爾等が知らざる者なり。三三 故に門徒互に
言へり、豈孰か彼に食を饋りたる。三四 イイスス彼等に謂ふ、我が糧は我を遣しゝ者の
旨を行ひ、其功を成就するに在り。三五 爾等は尚四月にして收穫は來らんと云ふに非
ずや、我爾等に語ぐ、爾等の目を擧げて、田を觀よ、已に白くして穫るべし。三六 穫る者は
値を得て、實を永遠の生命に積む、播く者も穫る者も共に喜ばん爲なり。三七 蓋彼は播
き此は穫ると云へるは、斯に於て眞なり。三八 我爾等を遣して、爾等が勞せざりし所を
穫らしむ、他人は勞し、爾等は其勞に入れり。三九 彼の邑の多くのサマリヤ人は婦が、彼
は我が凡そ行ひし事を我に告げたりと、證せし言に因りて彼を信ぜり。四〇 故にサマ
リヤ人は彼に就きし時、偕に留らんことを請へり、彼は彼處に留りしこと二日なり。四

一尚多くの者は彼の言に因りて信ぜり。四二而して婦に謂へり、我等は已に爾の言に
因りて信ずるに非ず、蓋自ら聞きて、彼は誠に世の救主ハリストスなりと知れり。四三
二日を越ねて、彼彼處を出でゝ、ガリレヤに往けり。四四蓋イイスス親ら、預言者は其
故土に於て尊ばれずと證せり。四五ガリレヤに來りし時、ガリレヤ人彼を接けたり、凡
そ彼がイエルサリムに節筵の時に行ひし事を見たればなり、蓋彼等も亦節筵に往け
り。四六是に於てイイスス復ガリレヤのカナに來れり、嘗て水を酒に變ぜし處なり。適
一の王臣あり、其子カペルナウムに在りて病めり。四七彼はイイススのイウデヤより
ガリレヤに來りしを聞きて、之に就き、下りて其子を醫さんことを請へり、蓋子は死に
頽めり。四八イイスス之に謂へり、爾等若し休徵と奇蹟とを見ずば、信ぜざらん。四九王
臣彼に謂ふ、主よ、請ふ、我が子の死せざる先に下れ。五〇イイスス之に謂ふ、往け、爾の子
は生く。人はイイススの之に言ひし言を信じて往けり。五一往く時、其諸僕彼に遇ひて、
告げて曰へり、爾の子は生く。五二彼は之に、其何の時に愈ね始めしを問ひたれば、彼に
謂へり、昨日第七時に熱退けり。五三父は、此れ即イイススが彼に爾の子は生くと言

ひし時なるを知れり。是に於て彼自ら及び其全家皆信じたり。五四 此れ第二の休徴な
り、イイススイウデヤよりガリレヤに來りて、之を行へり。

第五章

一 厥後イウデヤ人の節筵ありて、イイススイエルサリムに上れり。二 イエル
サリムに羊の門の側に池あり、エウレイの言にワイフズダと曰ふ。三 之に傍ひて五の廊
あり、此の中に多くの病者、瞽者、跛者、血枯るゝ者臥して、水の動くを待てり。四 蓋主の
使時ありて池に下りて、水を動かせり、水の動く後先づ池に入る者は、何の病を患ふる
に論なく、愈ゆるを得たり。五 彼處に一人三十八年病を患ふる者ありき。六 イイスス彼
が臥せるを見、其之を患ふること已に久しきを知りて、彼に謂ふ、爾愈ねんことを欲す
るか。七 病者答へて曰へり、主よ、然り、但水の動く時、我を扶けて、池に下す人なし、我が來
る時は、他人我に先だちて下る。八 イイスス彼に謂ふ、起きて、爾の牀を取りて行け。九 其
人直に愈ね、其牀を取りて行けり、是の日は安息日なり。一〇 故にイウデヤ人愈されし
者に謂へり、安息日なり、爾牀を取るは宜しからず。一一 彼答へて曰へり、我を愈しゝ者
は、我に爾の牀を取りて行けと言へり。一二 彼等問へり、爾に、牀を取りて行けと言ひし

人は誰ぞ。一三 愈されし者は其誰たるを知らざりき、蓋彼處に人の
スス隠れたり。一四 厥後イイススは此の人に殿に遇ひて、之に謂へり、
復罪を犯す勿れ、恐らくは患に遭ふこと更に甚しからん。一五 彼往
我を愈しゝ者はイイススなりと告げたり。一六 是に於てイウデヤ
して、殺さんことを謀れり、彼が安息日に此くの如き事を行ひし故
彼等に謂へり、我が父は今に至るまで爲し、我も亦爲す。一八 此れに
愈 彼を殺さんことを謀れり、其第安息日を犯しゝのみならず、乃又神を己の父と言
ひて、己を神と齊しく爲しゝ故なり。一九 イイススは彼等に答へて曰
等に語ぐ、子は若し父の行ふ所を見ずば、己に由りて何事をも行ふ能はず、父の行ふ所は、子も亦同じく之を行ふ。二〇 蓋父は子を愛して、凡そ己の行ふ所を彼に示す、且此より大なる事を彼に示さん、爾等の奇まん爲なり。二一 蓋父が死せし者を起して、之を生かすが如く、子も亦欲する所の者を生かす。二二 蓋父は何人をも審判せず、乃悉く
の審判を子に委れたり、二三 衆皆子を敬ふこと、父を敬ふが如くせん爲なり。子を敬はず

ざる者は、彼を遣し給ひし父を敬はず。二四 我誠に誠に爾等に語ぐ、我が言を聽きて、我を遣し給ひし者を信ずる人は、永遠の生命を有ち、且審判の爲に來らず、乃死より生命に移れり。二五 我誠に誠に爾等に語ぐ、時は來る、今は是れなり、死せし者は神の子の聲を聞かん、之を聞きて生きん。二六 蓋父が己の中に生命を有つが如く、此くの如く子にも己の中に生命を有つことを與へたり、二七 且彼に審判を行ふ權をも與へたり、其人の子たるに因りてなり。二八 之を奇む勿れ、蓋時は來る、凡そ墓の中に在る者は神の子の聲を聞かん、二九 而して善を行ひし者は生命の復活に出で、惡を爲しゝ者は定罪の復活に出でん。三〇 我何事をも己に由りて行ふ能はず、聞く所に遵ひて審判す、而して我が審判は義なり、蓋我己の旨を求めず、乃我を遣しゝ父の旨を求むるなり。三一 若し我自ら己の事を證せば、我が證は眞ならず。三二 別に我の事を證する者あり、我其我を證する證の眞なるを知る。三三 爾等嘗て人をイオアンに遣しゝに、彼は眞實の爲に證を作せり。三四 然れども我は人より證を受けず、乃此を言ふは爾等の救はれん爲なり。三五 彼は燃ゆる且光る燈たりき、爾等は其光に在りて暫く喜ばんと欲せり。三六 然るに我にはイオアンの

誰より大なる者あり、蓋父が我に與へて成さしむる事、此の我が行ふ所の事は、我の爲に、父が我を遣しゝことを證す。三七　且我を遣しゝ父自ら我の爲に證を作せり。但爾等未だ曾て其聲を聞かず、其形を見ざりき。三八　且其言を爾等の衷に存せず、蓋彼の遣しゝ者は、爾等之を信ぜざるなり。三九　聖書を探れ、蓋爾等は此に由りて永遠の生命を得んと意ふ、此れ我の事を證するなり。四〇　然れども爾等は生命を得んが爲に我に就くを欲せず。四一　我榮を人より受けず。四二　惟我爾等を知る、爾等の衷には神に於ける愛なきを知る。四三　我は我が父の名に因りて來りしに、爾等我を接けず、若し他人己の名に因りて來らば、爾等之を接けん。四四　爾等互に榮を相受け、獨一の神より來る榮を求めずして、豈信ずるを得んや。四五　我爾等を父の前に訴へんと意ふ勿れ、爾等を訴ふる者にモイセイあり、爾等が恃む所の者なり。四六　蓋爾等若しモイセイを信ぜば、我をも信ぜん、彼は我の事を書しるしたればなり。四七　若し爾等彼の書を信ぜずば、焉ぞ我の言を信ぜん。

第六章

一　厥後イイスス、ガリレヤの海、卽ちテベリアダの海の彼の岸に濟りしに、三衆彼が病者に行ひし奇蹟を見たればなり。二　イイススは山に登りて、

彼處に門徒と偕に坐せり。四時にイウデヤ人の節筵なる逾越節近づけり。五イイスス目を擧げて衆くの民の彼に來るを見て、フィリップに謂ふ、我等何處より餠を市ふことも、彼等の爲に各少しづゝを受くるに足らむ。六其門徒の一、シモンペトルの兄弟アンドレイ、彼に謂ふ、七此に一の童子ありて、大麥の餠五と小き魚二とを有てり、然れども是れ何をか此の多數に爲さん。八イイスス曰へり、人人を坐せしめよ。其處に多くの草あり。是に於て人人席坐せり、數約五千なり。一〇イイスス餠を取り、感謝して、門徒に分ち與へ、門徒は席坐する者に與へたり、魚も亦然り、乃欲する所に從へり。一一イイスス餠を取り、感謝して、門徒に分ち與へ、門徒は席坐する者に與へたり、魚も亦然り、乃欲する所に從へり。一二衆既に飽きて、彼門徒に謂ふ、餘りたる屑を聚めて、廢る所なからしめよ。一三乃聚めて、食ひし者の餘したる五の麥麭の餠の屑を十二の筐に盈てたり。一四人人イイススの行ひし奇蹟を見て曰へり、是れ誠に世に來るべき預言者なり。一五イイススは彼等が來り、急に彼を執りて、王と爲さんと欲するを知りて、復獨山に遁れたり。一六日の暮るゝ時、其門徒下りて海に至り、一七舟

に登りて、海の彼の岸なるカペルナウムに往けり。既に昏くなりて、イイスス彼等に來
らず。一八 風大に吹きて、海は浪たてり。一九 漕ぎ行くこと約二十五或は三十小里にし
て、彼等はイイススの海を履みて、舟に近づくを見て、懼れたり。二〇 彼は之に謂ふ、是れ
我なり、懼るゝ勿れ。二一 門徒彼を舟に接けんと欲せり、舟は直に往く所の地に着きた
り。二二 明日、海の彼の岸に立てる民は、彼處に門徒の登りたる舟の外に他の舟なく、且
イイススは門徒と偕に舟に登らずして、門徒のみ往きしを見たり。二三 時に他の舟は
ティベリアダより、主の感謝して後餅を食ひし所に近く來れり。二四 是に於て民はイイ
ススの此に在らず、其門徒も在らざるを見て、己も亦舟に登り、イイススを尋ねてカペ
ルナウムに來れり。二五 海の彼の岸に於て彼に遇ひて曰へり、夫子、爾は何の時にか此
に來れる。二六 イイスス彼等に答へて曰へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、爾等の我を尋ぬ
るは、奇蹟を見し故に非ず、乃餅を食ひて飽きたる故なり。二七 朽つる糧の爲に勞する
勿れ、乃永遠の生命に存する糧、人の子が爾等に與へんとする者の爲に勞せよ、蓋父な
る神は彼を印證せり。二八 彼等曰へり、我等何を行ひて、神の事を爲さんか。二九 イイス

ス答へて曰へり、神の事とは、爾等が彼の遣しゝ者を信ずること、是なり。三〇彼等曰へ
り、爾何の休徴を行ひて、我等をして之を見て、爾を信ぜしめんか、爾何を爲すか。三一我
等の先祖は野に在りて「マンナ」を食へり、錄されしが如し、天より彼等に餅を與へて食
はしめたりと。三二イイスス彼等に謂へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、モイセイが爾等に
餅を天より與へしに非ず、乃我が父は爾等に眞の餅を天より與ふ。三三蓋神の餅は天
より降りて、世に生命を與ふる者なり。三四彼等曰へり、主よ、恒に我等に斯の餅を與へ
よ。三五イイスス彼等に謂へり、我は生命の餅なり、我に來る者は飢ゑず、我を信ずる者
は永く渇かざらん。三六然れども我爾等に嘗て、爾等我を見たれども信ぜずと言へり。
三七凡そ父の我に與ふる者は、我に來らん、我に來る者は、我之を外に逐はざらん。三八
蓋我が天より降りしは、己の旨を行はん爲に非ず、乃我を遣しゝ父の旨を行はん爲
なり。三九我を遣しゝ父の旨は、卽彼が我に與へし者の中、我其一をも亡はずして、末の
日に於て悉く之を復活せしめんとするに在り。四〇我を遣しゝ者の旨は卽凡そ子を
見て之を信ずる者は、永遠の生命を有ち、我末の日に於て彼を復活せしめんとするに

ある在り。四一 時にイウデヤ人、其我は天より降りし餅なりと言ひしに因りて、彼を怨みて
四二 云へり、此れイオシフの子イイスス、我等が其父と母とを識れる者にして、彼は我天より降れりと言ふか。四三 イイスス彼等に答へて曰へり、爾等相共に怨言すると勿れ。四四 我を遣しゝ父之を引かざれば、人我に來る能はず、我に來る者は我末の日に於て之を復活せしめん。四五 諸預言者に錄せるあり、彼等皆神に教へられんと。凡そ父に聽きて學びし者は我に來る。四六 此れ人曾て父を見たりと言ふに非ず、惟神より爲る者は、彼父を見たるなり。四七 我誠に誠に爾等に語ぐ、我を信ずる者は永遠の生命を有つ。四八 我は生命の餅なり。四九 爾等の先祖は野に在りて「マンナ」を食ひたれども、死せり。五〇 夫れ天より降る餅は、乃之を食ふ者死せざるを致さんと。五一 我は天より降りし生ける餅なり、此の餅を食ふ者は世世に生きん。我が與へんする餅は、即我の體なり、我が世の生命の爲に與へんとするなり。五二 時にイウデヤ人互に論じて曰へり、彼如何ぞ我等に其體を與へて、食はしむるを得ん。五三 イイスス彼等に謂へり、我誠に誠に爾等若し人の子の體を食はず、其血を飲まずば、已の裏に生

ち命を有たざらん。五四 我が體を食ひ、我が血を飲む者は、永遠の生命を有つ、我末の日に於て彼を復活せしめん。五五 蓋我が體は眞に糧なり、我が血は眞に飲物なり。五六 我が體を食ひ、我が血を飲む者は、我に居り、我も彼に居るなり。五七 生ける父我を遣し、且我が父に由りて生くるが如く、我を食ふ者も我に由りて生きん。五八 斯れは乃天より降りし餅なり。爾等の先祖が「マンナ」を食ひて、死せし如きに非ず、此の餅を食ふ者は世世に生きん。五九 此等の事は、彼カペルナウムに教ふる時、會堂に於て言へり。六〇 其門徒の中多くの者之を聞きて曰へり、難い哉斯の言、誰か之を聽くを得ん。六一 イイスス已の裏に其門徒が怨言するを知りて、彼等に謂へり、此れ爾等を惑はすか。六二 爾等若し人の子が曩に在りし處に升るを見ば如何。六三 神は生かす者なり、肉は益なし。我が爾等に語りし言は神なり、生命なり。六四 然れども爾等の中に信ぜざる者あり。蓋イイスス は初より信ぜざる者の誰たる、及び彼を賣らんとする者の誰たるを知れり。六五 又曰へり、故に我曾て爾等に與へらるゝに非ざれば、人我に來る能はずと言へり。六六 是より其門徒多く返りて、復彼と偕に行かざりき。六七 イイスス十二徒に

謂へり、爾等も去らんと欲するか。六八シモンペトル彼に答へて曰へり、主よ、我等誰に往かん、爾は永遠の生命の言を有つ。六九我等は爾がメリストス、活ける神の子たるを信じ、且知れり。七〇イイススに答へて曰へり、我爾等十二を選びしに非ずや而して爾等の中一人は悪魔なり。七一是れ彼はシモンの子イウダ「イスカリオト」を指して言へり、蓋此の人は十二の一にして、彼を賣らんとする者なり。

第七章

一厥後イイススがリレヤを巡れり、蓋イウデヤ人彼を殺さんと謀りたればなり。二イイススの兄弟に謂へり、此を去りてイウデヤに往け、爾が行ふ所の事を見ん爲なり。四蓋人自ら顯れんと欲して、隱に事を行ふ者あらず。若し爾此等の事を行はゞ、己を世に顯せ。五蓋其兄弟も亦彼を信ぜざりき。六イイススは爾等を悪む能はず、然れども我を悪む、我其行ふ所の悪しきを證すればなり。八爾等は此の節筵に上れ、我は未だ此の節筵に上らず蓋我の時未だ盈たさるなり。九之を彼等に言ひて、ガリレヤに留れり。一〇然

れども其兄弟の節筵に上りし後、彼も亦上れり、昭然ならずして、乃隱然なるが如し。
二 節筵の時、イウデヤ人彼を尋ねて曰へり、彼は安に在るか。一二 民の中に彼の事に
於て多くの論ありき、或は善なりと曰ひ、或は否、乃民を惑はすと曰へり。一三 然れど
もイウデヤ人を懼るゝに由りて、顯に彼の事を言ふ者なかりき。一四 節筵已に半にし
て、イイスス殿に上りて教へたり。一五 イウデヤ人奇として曰へり、此の人學ばざるに、
如何にして書を識れるか。一六 イイスス彼等に答へて曰へり、我が教は我に屬するに
非ず、乃我を遣しゝ者に屬するなり。一七 人若し彼の旨を行はんと欲せば、斯の教の神
よりするか、或は我が己に由りて言ふかを知らん。一八 己に由りて言ふ者は、己の榮を
求む、之を遣しゝ者の榮を求むる者は、斯れ眞なる者にして、其衷に不義なし。一九 モイ
セイ豈律法を爾等に與へしに非ずや、而して爾等の中に律法を守る者なし。爾等胡爲
れぞ我を殺さんと謀る。二〇 民答へて曰へり、爾魔鬼に憑らる、誰か爾を殺さんと謀る。
二一 イイスス答へて彼等に謂へり、我一の業を行ひしに、爾等皆之を奇む。二二 モイセ
イ爾等に割禮を授けたり、(此れモイセイに由るに非ずして、先祖に由ると雖)而して

爾等安息日に於て人に割禮を行ふ。二三 モイセイの律法の壞られざらん爲に、人安息日に割禮を受くるに、爾等、我が安息日に於て人の全身を愈しゝに因りて、我に怒るか。

二四 外貌に依りて審する勿れ、乃義の審を以て審せよ。二五 是に於てイエルサリムの或人人曰へり、此れ彼等が殺さんと謀る者に非ずや。二六 視よ、彼明に語る、而して彼等は之に言ふ所なし、豈有司等は彼を誠にハリストスなりと承け認めしか。二七 然れども我等は斯の人の奚れよりするを知る、惟ハリストス來らん時は、其奚れよりするを知る者なからん。二八 厥時イイスス殿に於て、教へて、呼びて曰へり、爾等我をも知る亦我の奚れよりするを知る、然れども我は己に由りて來りしに非ず、乃我を遣しゝ眞なる者あり、爾等の知らざる者なり。二九 我は彼を知る、蓋我は彼よりし、彼は我を遣せり。

三〇 是に於て彼等イイススを執へんと謀りたれども、手を彼に措く者なかりき、彼の時未だ至らざればなり。三一 民の中多くの者彼を信じて曰へり、ハリストス來らん時は、豈斯の人の行ひしより多くの休徵を行はんや。三二 ファリセイ等は民が彼の事を斯く論ずるを聞けり、乃ファリセイ等及び司祭諸長は彼を執へん爲に下吏を遣せり。

三三 イイスス曰へり、我尚暫く爾等と偕に在りて、我を遣しゝ者に往かん。三四 爾等我
を尋ねて遇はざらん、且我が在る所には、爾等來る能はず。三五 イウデヤ人相語りて曰
へり、彼は何に往きて、我等をして彼に遇はざらしめんか、豈彼はエルリン民の中に散じ
處る者に往きて、エルリン人を教へんと欲するか。三六 彼が、爾等我を尋ねて遇はざらん、
且我が在る所には爾等來る能はずと、言ひし言は何の謂ぞや。三七 節筵の末の大なる
日に、イイスス立ちて、呼びて曰へり、人渇かば、我に來りて飲め。三八 我を信ずる者は、聖
書に云へる如く、其腹より活ける水の川は流れん。三九 之を言ひしは、彼を信ずる者の
受けんとする神を指せるなり、蓋聖神未だ降らざりき、イイスス未だ榮を受けざれば
なり。四〇 民の中多くの者此の言を聞きて曰へり、斯の人は誠に預言者なり。四一 他の
者は曰へり、斯れハリストスなり。又他の者は曰へり、豈ガリレヤよりハリストス來ら
んや。四二 聖書には、ハリストスはダヲイドの裔より、且ダヲイドの居りし處なるヲイフレエ
ムより來ると、云へるに非ずや。四三 是に於て民の中に、彼の事に緣りて、紛論起りたり。
四四 其中の或る者彼を執へんと欲したれども、手を彼に措く者なかりき。四五 下吏は

司祭諸長及びファリセイ等に返りたれば、彼等之に謂へり、爾等何ぞ彼を曳き來らざる。四六下吏答へて曰へり、人未だ嘗て斯の人の如く言ひしことあらず。四七ファリセイ等も惑はされしか。四八有司或はファリセイ等の中に彼を信ぜし者あるか。四九惟此の民、律法を識らざる者は、詛はるゝなり。五〇夜イエスに來りしニコヂム、彼等の中の一人なる者は、彼等に謂ふ、五一豈我が律法は、未だ人の訟を聽かず、其行ふ所を知らざる先に、人を罪するか。五二彼等答へて曰へり、爾も亦ガリレヤよりするか、尋ねて見よ、預言者はガリレヤより起ること無し。五三是に於て各其家に歸れり。

第八章

一イエスはエレオンざん橄欖山に往けり。二朝早く復殿に來れるに、民皆彼に就き、彼坐して之を教へたり。三爰に學士等及びファリセイ等は淫に於て執へられたる婦を彼に曳き來り、之を中に立てゝ、四彼に謂ふ、師よ、此の婦は今淫に於て執へられたり。五モイセは律法に、我等に是の若き者を石を以て擊ち殺すを命じたり、爾は何と言はんか。六彼等が之を言ひしは、イエスを試みて、彼を訟ふる由を得ん爲なり。イエス

すして、躬を鞠めて、指を以て地に畫けり。七彼等問ひて已まざれば、イエス起きて、彼等に謂へり、爾等の中罪なき者は、先づ石を以て之に投げよ。八復身を鞠めて、地に畫けり。九彼等之を聞きて、其良心に責められ、長なる者より始めて、末なる者に至るまで、一人一人出で往き、イエス獨遺り、及び婦中に立てり。一〇イエス起きて、人無く、唯婦のみ在るを見て、之に謂へり、婦よ、爾を訟ふる者安に在るか、誰も爾を罪せざりしか。一一彼曰へり、主よ、誰もなし。イエス之に謂へり、我も爾を罪せず、往け、是より罪を犯すな勿れ。一二イエス復衆に語りて曰へり、我は世の光なり、我に從ふ者は暗を行かず、乃生命の光を獲ん。一三ファリセイ等彼に曰へり、爾は己を證す、爾の證は眞ならず。一四イエス彼等に答へて曰へり、我自ら己の事を證すとも、我證は眞なり、蓋我獨在るに非す、乃我及び我を遣しし父在るなり。一七爾等の律法にも錄せる如く、二人の證は眞なりと。一八我は已の事を證す、我を遣しし父も亦我の事を證する

なり。一九 彼等曰へり、爾の父は安に在るか。イイスス答へて曰へり、爾等我も識らず、若し爾等我も識らば、我が父をも識るならん。二〇 此等の言は、イイスス殿に在りて教へし時、獻奠所に於て之を言へり、彼を執ふる者なかりき、彼の時未だ至らざればなり。二一 イイスス復彼等に謂へり、我は往く、爾等我を尋れん、而して爾等の罪の中に死なん。我が往く所には爾等來る能はず。二二 イウデヤ人曰へり、豈彼は己を殺さんか、蓋云ふ、我が往く所には爾等來る能はずと。二三 イイスス彼等に謂へり、爾等は下に屬し、我は上に屬す、爾等は此世に屬す、我は斯の世に屬せず。二四 故に我爾等に謂へり、爾等は其罪の中に死なんと。蓋若し爾等は是れ我なりと信ぜずば、乃爾等の罪の中に死なん。二五 彼等曰へり、爾は誰たる。イイスス曰へり、我は始より爾等に言ふ所の如き者なり。二六 我には爾等の事に於て語り且審すること多くあり、然れども我を遣しゝ者は眞なり、我彼より聞きし事を以て世に語ぐ。二七 彼等は其父を指して言ひしを悟らざりき。二八 故にイイスス彼等に謂へり、爾等人の子を擧ぐる後、是れ我なりと知り、且我が己に由りて何事をも行はず、乃我が父の我に教へし如く之を

語るを知らん。二九 我を遣しゝ者は我と偕にす、父は我を遺して獨在らしめず、蓋我常
に其悅ぶ所を行ふなり。三〇 彼が此を語れる時、多くの者彼を信ぜり。三一 時にイイス
ス彼を信ぜしイウデヤ人に謂へり、爾等若し恒に我が言に居らば、誠に我が門徒たる
なり。三二 爾等眞實を識らん、眞實は爾等を自由の者と爲さん。三三 彼に答へて曰へり、
我等はアウラアムの裔なり、未だ曾て人の奴隷と爲らざりき、爾何ぞ自由の者と爲ら
んと言ふ。三四 イイスス彼等に答へて曰へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、凡そ罪を行ふ者
は罪の奴隷なり。三五 然れども奴隷は永く家に居らず、子は永く居るなり。三六 故に若
し子爾等を自由たらしめば、爾等は誠に自由の者と爲らん。二七 我爾等がアウラアム
の裔たるを知る、然れども爾等我を殺さんと謀る、蓋我が言は爾等の衷に容れられず。
三八 我は我が父に於て見し事を言ひ、爾等は爾等の父に於て見し事を行ふ。三九 彼に
答へて曰へり、我等の父はアウラアムなり。イイスス彼等に謂ふ、爾等若しアウラアム
の子たらば、アウラアムの事を行ふならん。四〇 然るに爾等今我卽神より聞きたる
眞實を爾等に語りし人を殺さんと謀る、アウラアムは之を行はざりき。四一 爾等は爾

等の父の事を行ふ。彼に謂へり、我等は淫に由りて生れしに非ず、我等に一の父あり、即
神なり。四二 イイスス彼等に謂へり、若し神爾等の父たらば、爾等我を愛するならん、我
神より出でゝ來りしに因る、蓋我己に由りて來りしに非ず、乃彼は我を遣せり。四三
爾等何ぞ我が語れることを悟らざる、我が言を聽く能はざる故なり。四四 爾等は爾等
の父惡魔に屬し、爾等の父の慾を行はんと欲す。彼は始より殺人者にして、眞實に立た
ざりき、眞實其衷に在らざればなり。彼は誑を言ふ時、己に屬する者を言ふ、蓋彼は誑
者且誑の父なり。四五 然れども我眞實を言ふに因りて、爾等我を信ぜず。四六 爾等の
中誰か罪を以て我を責めん、若し我眞實を言はゞ、爾等何ぞ我を信ぜざる。四七 神に屬
する者は神の言を聽く。爾等の聽かざるは、神に屬せざる故なり。四八 イウデヤ人彼に
答へて曰へり、我等、爾がサマリヤ人にして、且魔鬼に憑らるゝ者なりと、言ふは宜なら
ずや。四九 イイスス答へて曰へり、我は魔鬼に憑らるゝに非ず、乃我は我が父を尊び、
爾等は我を辱む。五〇 然れども我は己の榮を求めず、一の求むる者、且審判する者ある
なり。五一 我誠に誠に爾等に語ぐ、人若し我が言を守らば、世世に死を見ざらん。五二 イ

ウデヤ人彼に謂へり、今我等は爾が鬼に憑られたるを知れり。アブラハム死し、諸預言者も亦然り、而して爾言ふ、人若し我が言を守らば、世世に死を嘗めざらんと。五三 爾豈我が父アブラハムよりも大なるか、諸預言者も亦死せり、爾は己を誰と爲すか。五四 イイスス答へて曰へり、若し我己を榮せば、我が榮は無に歸す。我を榮する者は我が父、即爾等が我等の神と言ふ所の者なり。五五 爾等は彼を識らずと雖も我は彼を識る、若し我彼を識らずと言はゞ、爾等の如き誑者と爲らん。然れども我は彼を識り、且彼の言を守る。五六 爾等の父アブラアムは我が日を見んことを望めり、彼且之を見しが。五八 イイスス彼等に謂へり我誠に誠に爾等に語ぐ、アブラアムの未だ有らざる先に、我在るなり。五九 是に於て彼等石を取りて、彼を擊たんとせり、然れどもイイスス隱れて、其中を過ぎ殿を出でゝ去れり。

第九章

一 イイスス行く時、生ながら瞽なる人を見たり。二 門徒彼に問ひて曰へり、夫子斯の人の瞽にして生れしは、是れ孰か罪を獲たる、彼か、抑其親か。三 イイスス答へ

て曰へり、彼も踰を獲す、其親も亦然り、乃ち彼に
盡なる間、我を遣し
ろ時は、世の光なり。六之を言ひて、地に唾し、唾を以て泥を成し、其泥を瞽
七之に謂へり、往きて、シロアムの池に洗へ。（シロアム、譯すれば、遣されし者なり。）彼往き
て洗ひ、見ることを得て來れり。八其隣の人及び先に彼が瞽なるを見し者曰
て乞ひし者に非ずや。九或曰へり、彼に似たる者なり、彼は曰へり、我是なり。一〇彼等之に謂へり、爾の目は如何にして啓けたるか。一一彼答へて
曰へり、イイスと云る人、泥を成して、我が目に塗りて、我に謂へり、シロアムの池
に往きて洗へと、我往きて、洗ひて見ることを得たり。一二彼等曰へり、其人安
我知らず。一三此の瞽たりし者をファリセイ等に携へ至る。一四イイスが泥を成して、
其目を啓きし日は、安息日なり。一五ファリセイ等も亦其如何に見ることを得たるを問ひた
れば、答へて曰へり、泥を我の目に置き、我洗ひて見ることを得たり。一六ファリセイ等の中の
或者曰へり、斯の人は神よりするに非ず、安息日を守らざればなり。他の者曰へり、罪あ

る人は安ぞ是くの如き奇蹟を行ふを得ん。是に於て彼等の中に紛論ありき。一七 復瞽
者に謂ふ、爾は彼の事に於て何を言はんか、蓋彼は爾の目を啓きたり。曰く、是れ預言者
なり。一八 イウデヤ人は其素瞽にして、後に見るを得たるを信ぜずして、此の見るを得
たる者の二親を呼び至らしむるを待ちて、一九 之に問ひて曰へり、此れ爾等の子、爾等
が瞽にして生れたりと曰ふ者なるか、今如何にして見るか。二〇 其親彼等に答へて曰
へり、此れ我が子なること、又其瞽にして生れたることは、我等之を知る、二一 然れども
今如何にして見るか、我等之を知らず、或は誰か其目を啓きしを我等知らず。彼は年長
ぜり、彼に問ふべし、自ら己の事を語らん。二二 親の斯く言ひしは、イウデヤ人を懼れし
に因りてなり、蓋イウデヤ人已に相謀りて、若し人彼をハリストスと認めば、會堂より
黜けらるべしと定めたり。二三 是の故に其親は、彼は年長ぜり、彼に問ふべしと曰へり。
二四 是に於て瞽たりし人を再呼びて、之に謂へり、光榮を神に歸せよ、我等は斯の人
の罪人たるを知る。二五 彼答へて曰へり、其罪人たりや否や、我之を知らず、唯一の事を
知る、卽ち我本瞽たりしに、今は見る。二六 又之に謂へり、彼は何を爾に爲しゝか、如何

にして爾の目を啓きし。二七 答へて曰へり、我已に爾等に言へり、而
き、何ぞ復聞かんと欲するか、豈爾等も彼の門徒と爲らんと欲するか。
て曰へり、爾は其門徒、我等はモイセイの門徒なり。二九 我等は神が
を知る、然れども斯の人の奚れよりするを知らず。三〇 其人答へて
奇しき事なり、爾等は彼の奚よりするを知らず、然ろに彼は我が目
等は神が罪人に聽かざるを知る、然れども斯の人神よりせざりしに
く。三三 世の始より以來未だ人の生ながら瞽なる者の目を啓きしを
若し斯の人神よりせざりしに非ずば、何事をも行ふを得ざりしならん。
て曰へり、爾は全く罪の中に生れたり、而して爾我等を教ふるか。遂
せり。三五 イイススは其彼を逐ひ出しゝを聞きて、彼に遇ひて曰
るか。三六 彼答へて曰へり、主よ、是れ誰なるか、我が彼を信ぜん爲
に謂へり、爾已に彼を見たり、且爾と語る者は是なり。三七 イイス之
を拜せり。三八 彼曰へり、我信ず、主よ、我信ず、乃彼

瞽と爲らん爲なり。四〇彼と偕に在りしファリセイ等の中の或者之を聞きて、彼に謂へ
り、豈我等も瞽なるか。四一イイスス彼等に謂へり、爾等若し瞽ならば、罪なからん、然れ
ども今爾等は我等見ると言ふに因りて、爾等の罪尚存す。

第十章

一我誠に誠に爾等に語ぐ、羊の牢に入るに、門よりせずして、他の處より踰ゆ
る者は、竊盜なり、强盜なり。二門より入る者は、羊の牧者なり。三門を守る者は彼の爲に
啓き、羊は其聲を聽く、彼己の羊の名を呼びて、之を引き出す。四己の羊を出す時、之に先
だちて行き、羊彼に從ふ、其聲を識るが故なり。五疎き者に從はず、乃之より逃ぐ、疎き
者の聲を識らざるが故なり。六イイスス此の瞽を彼等に謂へり、然れども彼等は其語
りしことの何たるを悟らざりき。七故にイイスス復彼等に謂へり、我誠に誠に爾等に
語ぐ、我は羊の門なり。八凡そ我より先に來りし者は、竊盜なり、强盜なり、然れども羊は
彼等に聽かざりき。九我は門なり、我に由りて入る者は救を得、且入り且出でゝ、草場を
得ん。一〇盜の來るは、唯盜み、殺し、滅さん爲のみ。我の來りしは、其生命を有ち、且豐に
之を有たん爲なり。一一我は善き牧者なり、善き牧者は己の生命を羊の爲に捐つ。一二

牧者ならざる傭者、羊の己に屬せざる者は、狼の來るを見て、羊を棄て
羊を奪ひ、又之を散す。一三 傭者は逃ぐ、其傭者たるを以てなり、羊を顧みず。一四 我は善
き牧者にして、我に屬する者を識り、我に屬する者も亦我を識る。一五 父の
如く、我も亦父を識る、且我が生命を羊の爲に捐つ。一六 我に又他の羊、此の
る者あり、我は彼等をも引くべし、彼等は我が聲を聽かん、而して一の群一の
ら ん。一七 父の我を愛するは所以は、此れ舊我は
一八 孰も之を我より奪ふなし、乃 我自ら之を捐つ。我に之を捐つる權あり、
くる權あり。我は此の誡を我が父より受けたり。一九 此の言に縁りて、復
間に紛論起れり。二〇 其中多くの者曰へり、彼は寃鬼に憑られて狂ふなり、
く。二一 他の者曰へり、此れ寃鬼に憑らるゝ者の言に非ず、豈寃鬼は瞽者の
得んや。二二 イエルサリムに重修節あり、時方に冬なり。二三 イイスス殿
ロモンの廊を歩めるに、二四 イウデヤ人彼を繞りて曰へり、爾何時までか
せしむる、若し爾ハリストスならば、明に我等に告げよ。二五 イイスス彼等

へり、我爾等に告げたり、而して爾等信ぜず、我の我が父の名に因りて行ふ事は、我が爲に證を作す。二六然れども爾等は我が羊に非ざれば信ぜず。二七我が羊は我の聲を聽く、我は彼等を識り、彼等は我に從ふ。二八我は彼等に永遠の生命を與ふ、彼等は世世に滅びず、誰も彼等を我が手より奪はざらん。二九彼等を我に與へし我が父は萬有より大なり、誰も我が父の手より奪ふ能はず。三〇我と父とは一なり。三一時にイウデヤ人復石を取りて、彼を擊たんとせり。三二イエスは彼等に答へて曰へり、我は多くの善き事を我が父より爾等に示せり、其中何の事に由りて石を以て我を擊つか。三三イウデヤ人彼に答へて曰へり、我等は善き事の爲に石を以て爾を擊つに非ず、乃瀆濱の爲、爾が人さして已を神となす爲なり。三四イエスは彼等に答へて曰へり、爾等の律法に錄されしに非ずや、我曰へり、爾等は神なりと。三五若し神の言を奉ぜし者を神と名づけ、而して聖書廢すること能はずば、三六父が聖して世に遣しゝ者に、其我は神の子なりと云ひしとて、爾等は瀆すと曰ふか。三七若し我が父の事を行はずば、我を信ずる勿れ。三八若し之を行はば、我を

信ぜずとも、我が事を信ぜよ、父の我に在り、我も父に在るを知りて、信ぜんが爲なり。三九是に於て復彼を執へんと謀りたれども、彼は其手を遁けたり。四〇復イオルダンの外に、イオアンが先に洗を授けし處に往きて、彼處に居たり。四一多くの者彼に來り、且曰へり、イオアンは何の休徴をも行はざりき、然れども此人に關してイオアンが彼を指して言ひし事は、皆眞なり。四二彼處に於て多くの者彼を信ぜり。

第十一章

一病めるラザリは彼の兄弟なりニマリヤ及び其姉妹マルファの村の人なり。二マリヤは即香膏を主に灌ぎ、髪を以て其足を拭ひし者にして、病めるラザリは彼の兄弟なり。三姉妹はイイススに人を遣して曰へり、主よ、聞け、汝の愛する者は病めり。四イイススは之を聞きて曰へり、此の病は死を致さず、乃神の光榮を致さん、神の子が之に由りて榮せられん爲なり。五イイススはマルファ及び其姉妹ラザリを愛せり。六既に彼病めりと聞きて、仍其在りし處に留れること二日なり。七其後門徒に謂ふ、我等復イウデヤに往かん。八門徒彼に謂ふ、夫子、イウデヤ人近ごろ石を以て爾を擊たんと謀れり、爾復彼處に往くか。九イイススは答へて曰へり、一日には十二時ある

に非ずや、人若し晝に行かば躓かず、此の世の光を見るに因りてなり。一〇　人若し夜に行かば躓く、彼に光なきに因りてなり。一一　此を言ひし後、彼等に謂ふ、我等の友ラザリは睡れり、然れども我往きて彼を醒まさん。一二　門徒曰へり、主よ、彼若し寢れたらば、愈ん。一三　イイススは彼の死の事を言ひしに、彼等は其寢れて臥すの事を言ふと意へり。一四　其時イイススは明に彼等に謂へり、ラザリは死せり。一五　而して我は、我が彼處に在らざりしを、爾等の爲に喜ぶ、爾等を信ぜしめん爲なり、然れども彼に往かん。一六　フォマ又ディディムと名づくる者、同門徒に謂へり、我等も往きて、彼と偕に死なん。一七　イイススは來りて、ラザリの已に墓に葬られて、四日なるに遇へり。一八　ベタニヤはイエルサレムに近し、相去ること約十五小里なり。一九　イウデヤ人多くマルファ及びマリヤに來れり、其兄弟の事に縁りて彼等を慰めん爲なり。二〇　マルファはイイススの來るを聞きて往きて、彼を迎へたり、マリヤは仍家に坐せり。二一　マルファはイイススに謂へり、主よ、爾若し此に在りしならば、我が兄弟は死せざりしならん。二二　然れども今も爾が若し神に求めん者は、神爾に賜はん。二三　イイススは之に謂ふ、爾の兄弟は復活せん。二四

マルタ曰く、我は末の日の復活の時に彼が復活へり、我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は、世世に死せざらん。斯此を信ずるか。二七曰く、主よ、然り、我は爾がきハリストス、神の子たるを信ぜり。二八之を言ひて後、往きて、潜に其姉妹マリヤを呼びて曰へり、師來りて、爾を呼ぶ。二九マリヤ此を聞き、亟に起ちて、彼に往けり。三〇時にイイスス未だ村に入らずして、仍マルタが彼を迎へし所に在り。三一ここにマリヤと偕に家に在りて、之を慰めしユダヤ人は、其亟に起ちて出でしを見て、之に隨へり、曰ふ、彼は墓に往きて、彼處に哭かんと。三二マリヤはイイススの在りし所に來り、彼を見て、其足下に俯伏して曰へり、主よ、爾若し此に在りしならば、我が兄弟は死せざりしならん。三三イイスス彼が哭なき、又彼と偕に來りしユダヤ人の哭くを見て、心に哀みて、自ら慟めり、三四曰く、爾等何處に彼を置きしか。彼に謂ふ、主よ、來りて觀よ。三五イイスス泣けり。三六ユダヤ人曰へり、觀よ、其彼を愛せしこと如何ばかりぞ。三七其中の或者曰へり、瞽者の目を啓きたる此の人は、彼をも死せざらしむる能はざりしか。三八イイス

ス復裏に哀みて、墓に來る。是れ洞にして、其上に石を置けるあり。三九 イイスス曰く、石を去れ。死者の姉妹マルファ彼に謂ふ、主よ、已に臭し、蓋彼死して四日なり。四〇 イイスス之に謂ふ、我爾に若し信ぜば、神の光榮を見んと云ひしに非ずや。四一 是に於て彼等石を死者の置きたる所より去れり。イイスス目を上に擧げて曰へり、父よ、爾が我に聽きしを、我爾に感謝す。四二 我は爾が恒に我に聽くを知れり、然れども環り立てる民の爲に之を言へり、彼等の爾が我を遣しゝことを信ぜん爲なり。四三 之を言ひて、大なる聲に呼べり、ラザリよ、外に出でよ。四四 死せし者出でたり、手足は布に纏かれ、面は巾を以て裹まれたり。イイスス曰ふ、之を釋きて行かしめよ。四五 其時マリヤに來りてイイススの行ひし事を見たるユダヤ人の中の多くの者彼を信ぜり。四六 然れども其中の或者はファリセイ等に往きて、之にイイススの行ひし事を告げたり。四七 是に於てファリセイ等は公會を集めて曰へり、我等何を爲さんか、蓋此の人は多くの奇蹟を行ふ。四八 若し是くの如く彼を舍かば、人皆彼を信ぜん、而してロマ人來りて、我等の地をも民をも奪はん。四九 其中の一人なるカイアファ、是の歳司祭長たる者は、

彼等に謂へり、爾等何をも知らず、五〇又一人民の爲に死して、全民滅びざらん事の、我等に益あるを思はず。五一彼の之を言ひしは、己に由るに非ず、乃ち是の歳の司祭長として預言せしなり。五二是れ特斯の民の爲のみならず、乃ち亦散じたる神の諸子を一に集めん爲なり。五三是の日より彼等相議して、イイスを殺さんと決せり。五四故にイイスは是より顯にイウデヤ人の中を行かず、乃ち彼處より野に近き地、エフライムと名つくる邑に往きて、此に門徒と偕に居たり。五五イウデヤの逾越節近づきたれば、多くの者は、己を潔めん爲に、逾越節の前六日、イイスを尋ね、殿に立ちて、相語りて曰へり、爾等如何に意ふか、彼は節筵に來らざらんか。五七司祭諸長及びファリセイ等は令を出して云へり、若し人彼の在る所を知らば、之を告ぐべし、彼を執へん爲なり。

第十二章

一逾越節の六日、イイスヲファニヤに來れり、卽ちラザリが死より復活せしめし者の居る所なり。二彼處に於て彼の爲に晩餐を設けたり、マルが供事し、ラザリは彼と偕に席坐せし者の一人たり。三マリヤは純眞なる「ナルド」の價

貴き香膏一斤を執りて、イイスの足に
の香氣に滿たされたり。四其門徒の一、シ
んとするイスカリオトのシモンの子イウダ
を言ひしは、貧しき者を慮るが爲に非ず、
其内に藏めたるを攫へたり。七イイス曰
貯へたり。八蓋貧しき者は常に爾等と偕に
ウデヤの衆くの民は彼の彼處に在るを知
より復活せしめしラザリをも見ん爲に來
二明日、節筵の爲に來りし衆くの民は、イ
樓欄の枝を取り、出でゝ彼を迎へ、呼びて
ライの王は祝福せらる。一四イイス
云く、一五シオンの女よ、懼るゝ勿れ、視よ、爾の王は小驢に乘りて臨むと。一六彼の

門徒は初此を曉らざりき、然れどもイイススの榮せられし後、此の事の彼を指して錄
され、且此を彼に行ひしを憶ひ起せり。一七 先にイイススと偕に在りし民は、彼がラザ
リを墓より呼び出して、之を死より復活せしめし事を證せり。一八 此に緣りて民は彼
を迎へたり、蓋彼が此の奇蹟を行ひしを聞けり。一九 ファリセイ等相語りて曰へり、豈爾
等が謀る所の一も益なきを見ざるか、視よ、世は皆彼に從へり。二〇 節筵に、禮拜する爲
に上りたる者の中に五リン人あり。二一 彼等はガリレヤのヴィフサイダの人なるフィリッ
プに就きて、之に請ひて曰へり、君よ、我等イイススを見んことを望む。二二 フィリップ來り
て、アンドレイに告げ、アンドレイ及びフィリップは又之をイイススに告ぐ。二三 イイスス
彼等に答へて曰へり、人の子の榮せらるゝ時至れり。二四 我誠に誠に爾等に告ぐ、麥の
粒若し地に遺ちて死なずば、獨存す、若死なば、多くの實を結ぶ。二五 己の生命を愛する
者は、之を喪はん、己の生命を斯の世に惡む者は、永生の爲に之を護らん。二六 人若し我
に事へば、我に從ふべし、我が在る所は、我に事ふる者も亦彼處に在らん。人若し我に事
へば、我が父彼を貴ばん。二七 今我が靈は傷めり、我何をか言はん、父よ、我を斯の時より

救へ、然れども我は特に斯の時の爲に來れり。二八父よ、爾の名を榮せよ。時に天より聲來りて云ふ、我已に之を榮せり且復之を榮せん。二九旁に立ちて聞きし民は曰へり、雷の震ひしなり、他の者は曰へり、天使の彼に語りしなり。三〇イエス答へて曰へり、此の聲の有りしは、我の爲に非ず、乃爾等の爲なり。三一今斯の世は審判せらる、今斯の世の君は外に逐はれん。三二我が地より擧げられん時は、衆ての人を我に就かしめん。三三彼が此を言ひしは、其何の死を以て死せんとするを示しゝなり。三四民彼にイエスに答へて曰へり、我等律法に、ハリストスは世に存すと言へるを聞けり、爾何ぞ人の子は擧げらるべしと言ふ、此の人の子は誰ぞ。三五イエス彼等に謂へり、尚少時光は爾等と偕に在り、光ある間に行け、暗の爾等を蔽はざらん爲なり、暗に行く者は何へ往くを知らず。三六爾等光ある間に、光を信ぜよ、光の子と爲らん爲なり。イエス既に此を言ひ、彼等を離れて、隱れたり。三七彼は斯く多くの休徵を彼等の前に行ひたれども、尚彼を信ぜざりき、三八預言者イサイヤの言は、し事を信じたる、主の臂は誰にか顯れたるぞ。三九彼等が信ずること能はざりしは、蓋

イサイヤの復言ひしが如く、四〇其目を瞽にし、其心を頑にせり、恐らくは目にて視、心にて悟り、轉じて我が彼等を醫さんと。四一イサイヤの之を言ひしは、彼の榮を見、彼を指して語りし時に在り。四二然るに有司の中にも多くの者は彼を信ぜり、惟ファリセイ等の故に因りて之を顯さざりき、會堂より逐はれざらん爲なり。四三蓋人の光榮を愛せしこと、神の光榮に過ぎたり。四四イエスス呼びて曰へり、我を信ずる者は、我を信ずるに非ず、乃我を遣しゝ者を信ずるなり。四五我を見る者は、我を遣しゝ者を見るなり。四六我は光にして世に來れり、凡そ我を信ずる者の暗に居らざらん爲なり。四七若し人我が言を聞きて信ぜずば、我彼を定罪せず、蓋我が來りしは、世を定罪せず、世を救はん爲なり。四八我を拒みて、我が言を納れざる者には之を定罪せん。蓋我が語りし言なり、此れ末の日に於て彼を定罪せん。四九蓋我は己に由りて語りしに非ず、卽我を遣しゝ父は、彼我に言ふべき事、語るべき事を命ぜり。五〇我は其命の永遠の生命なるを知る。故に我が語る所は、父の我に言ひし如く語るなり。

第十三章　一逾越節の前に、イイスス既に己が此の世を離れて父に逝く時の至りしを知りて、世に在る己に屬する者を愛せり。二晩餐の時、惡魔已にシモンの子イカダ「イスカリオト」の心に、彼を賣る意を入れしに、三イイススは、父が萬物を其手に授け、且己が神より出でて神に歸る事を知りて、四晩餐より起ち、其衣を釋き、手巾を取りて、自ら帶にし、五次ぎて水を盤に盛りて始めて門徒の足を濯ひ、帶にしたる手巾を以て之を拭へり。六シモン・ペトル彼に來れるに、彼曰く、主よ、爾我が足を濯ふか。七イイスス之に答へて曰へり、我が行ふ所は爾今知らざれども後に之を悟らん。八ペトル彼に謂ふ、爾永く我が足を濯はざらん。イイスス之に答へて曰へり、若し我爾を分なし。九シモン・ペトル彼に謂ふ、主よ、止我が足のみならず、乃亦手と首とを。一〇イイスス之に謂ふ、既に洗はれたる者は、足の外に濯ふを要せず、蓋身皆潔し、爾等も潔しかれども悉くには非ず。一一蓋彼は己を賣らんとする者を知れり、故に悉くには非ずと云へり。一二既に彼等の足を濯ひて、己の衣を衣、復席坐して、彼等に謂へり、我が爾等に行ひし事を知るか。一三爾等我を呼びて師と爲し、主と

爲す、爾等の言ふ所善し、蓋我は是なり。一四 故に若し我、主又師たるに、爾等の足を濯ひ
しならば、爾等も互に足を濯ふべし。一五 蓋我爾等に模範を與へたり、我が爾等に行
ひし如く、爾等も行はん爲なり。一六 我誠に誠に爾等に語ぐ、僕は其主より大ならず、使
者は之を遣しゝ者より大ならず。一七 爾等若し之を知りて、之を行はゞ、福なり。一八 我
盡く爾等を指して言ふに非ず、我は選びたる者を知る。然れども聖書の言ふ所に應
ふを致す、云く、我と與に餅を食ふ者は、我に向ひて其踵を擧げたりと。一九 未だ成らざ
る先に、我預め爾等に謂ふ、其成るに及びて、爾等の是れ我なりと信ぜん爲なり。二〇
我誠に誠に爾等に語ぐ、我が遣す者を接くる者は、我を接くるなり、我を接くる者は、
我を遣しゝ者を接くるなり。二一 イイスス此を言ひし後、心傷みて、證して曰へり我誠
に誠に爾等に語ぐ、爾等の中の一人は我を賣らん。二二 門徒相視て、其誰を指して言ふ
かと異めり。二三 門徒の一、イイススの愛せし者は、イイススの懷に倚りて席坐せり。二
四 シモンペトル彼に首を以て意を示して、其言ふ所の誰たるを問はしめたり。二五 彼
はイイススの胷に就きて言ふ、主よ、是れ誰なるか。二六 イイスス答へて曰く、我が餅の

片を離して與へんとする者是なり。乃ち片を離して、シモンの子イウダ・イスカリオトに與へたり。二七片を受けし後に、サタナ彼の中に入れり。イエス彼に謂ふ、爾が爲すところを速に之を爲せ。二八然れども席坐せる者は一も其何の意を以て之を言ひしを悟らざりき。二九蓋イウダが金匣を管れるに因りて、或者は、イエス彼に、我等が節筵に需むるべき物を市へこと云ひ、或は、貧しき者に何をか施さしむるとの意へり。三〇彼は片を受けて、直に出でたり、時正に夜なりき。三一彼の出でし後、イエス曰く、今人の子は榮せられたり、神も亦彼の中に榮せられたり。三二若し神は彼の中に榮せられしならば、神も亦彼を己の中に榮せん、且速に彼を榮せん。三三小子よ、我尚暫時爾等と偕にす、爾等我を尋れん、而して我が嘗てイウデヤ人に、我の往く所には爾等來る能はずと云ひし如く、今爾等にも亦云ふなり。三四我新なる誡を爾等に與ふ、即ち爾等相愛すべし、我が爾等を愛するが如く、爾等も是く相愛すべし。三五爾等若し相愛せば、人皆此に由りて、爾等の我が門徒たるを知らん。三六シモン・ペトル彼に謂ふ、主よ爾何にか往く。イエス之に答へて曰へり、我の往く所には、爾今我に從ふ能はず、然れど

も後我に從はん。三七ペトル彼に謂ふ、主よ、我胡爲れぞ今爾に從ふ能はざる、我が生命を捐てん。三八イイスス之に答へて曰へり、爾の生命を我が爲に捐てんか、我誠に誠に爾に語ぐ、鷄の鳴かざる前に、爾三次我を諱まん。

第十四章　一爾等の心擾るゝ毋れ、神を信じ、亦我を信ぜよ。二我が父の家に第宅多し。然らずば、我爾等に言ひしならん、我往きて、爾等の爲に所を備へん。三往きて、爾等の爲に所を備へば、復來りて、爾等を接けて、我に就かしめん、我が居る所に爾等も居らん爲なり。四我が何處に往くを爾等知り、其道をも知る。五フォマ彼に謂ふ、主よ、我等は爾の何處に往くを知らず、焉ぞ其道を知るを得ん。六イイスス之に謂ふ、我は道なり、眞實なり、生命なり、人若し我に由らずば、父に來ること能はず。七爾等若し我を識らば、父をも識らん。今より爾等彼を識り、且彼を見たり。八フィリップ彼に謂ふ、主よ、我等に父を示せ、然らば我等に足る。九イイスス之に謂ふ、フィリップ、我斯く久しく爾等と偕にするに、爾未だ我を識らざるか。我を見し者は、父を見しなり、如何ぞ爾我等に父を示せと云ふ。一〇我が爾等に言ふ所の言は、己に由りて

言ふに非ず、我に居る父は、彼事を行ふなり。一一 爾等、我が父に居り、父も我に居ると云
ふを、我に信ぜよ、然らずば、其事に縁りて我に信ぜよ。一二 我誠に誠に爾等に語ぐ、我
を信ずる者は、我が行ふ所の事を、彼も亦行はん、且此より大なる者を行はん、蓋我は我
が父に往く。一三 爾等凡そ我が名に因りて求めん者は、我之を行はん、父が子の中に榮
せられん爲なり。一四 爾等の我が名に因りて求めん者は、我行はん。一五 爾等若し我を
愛せば、我が誡を守れ。一六 我父に求めん、彼は別に撫恤者を爾等に與へて、世世に爾等
と偕に居らしめん、一七 卽眞實の神にして、世は彼を接くる能はず、其彼を見ず、又彼
を識らざる故なり、爾等は彼を識る、蓋彼は爾等と偕に居り、且爾等の衷に在らん。一八
我爾等を捨てゝ孤子とせず、我爾等に來らん。一九 尙頃くして、世は復我を見ず、然れど
も爾等我を見ん、蓋我は生く、爾等も亦生きん。二〇 其日に爾等は我の我が父に居り、爾
等の我に居り、我も爾等に居るを知らん。二一 我が誡を有ちて、之を守る者は、是れ卽
我を愛する者なり、我を愛する者は、我が父に愛せられん、我も彼を愛し、且己を彼に顯
さん。二二 イウダ「イスカリオト」ならざる者、彼に謂ふ、主よ、胡爲れぞ爾は己を我等に顯

んさと欲して、世には然せざる。二三 イイスス之に答へて曰へり、人若し我を愛せば、我
が言を守らん、我が父も彼を愛せん且我等彼に來りて、彼に住居を爲さん。二四 我を愛
せざる者は、我が言を守らず、爾等が聞く所の言は、我が言に非ず、乃我を遣しゝ父の
言なり。二五 我爾等と偕に在りて、此を爾等に言へり。二六 撫恤者、即聖神、父が我の
名に縁りて遣さんとする者は、彼凡の事を爾等に教へ、且我が爾等に言ひし事を、皆爾
等に記念せしめん。二七 我平安を爾等に遺す、我が平安を爾等に與ふ、我が爾等に與ふ
るは、世の與ふるが如きに非ず、爾等の心擾るゝ毋れ、又懼るゝ毋れ。二八 我往きて、復爾
等に來らんと、我が言ひしことは、爾等之を聞けり。爾等若し我を愛せば、我父に往くと
云ひしに縁りて喜ばん、蓋我が父は我より大なり。二九 我今事の未だ成らざる先に、爾
等に言へり、其成らん時に、爾等の信ぜん爲なり。三〇 我既に爾等と語らんこと多から
ず、蓋此の世の君は來る、彼は我の中に有つ所なし。三一 然れども世の我が父を愛し、父
が我に命ぜし如く行ふを知らん爲に、起ちて、此より往かん。

第十五章

一 我は眞の葡萄の樹、我が父は園師なり。二 凡そ我に在りて實を結ばざる

枝は、彼之を去り、凡そ實を結ぶ者は、之を潔む、其益繁く實を結ばん。
三 爾等に我が爾等に語りし言に由りて潔められたり。四 爾等我に居れ、我も爾等に居らん。枝も若し葡萄の樹に居らずば、自ら實を結ぶ能はず、爾等も若し我に居らずば、亦是くの如し。五 我は葡萄の樹、爾等は枝なり、我に居り、我も彼に居る所の者は、斯の者多くの實を結ぶ、蓋爾等我無くしては、何事をも行ふ能はず。六 人若し我に居らずば、枝の如く外に棄てられて枯る、此を集めて、火に投す、此れ乃焚く。七 爾等若し我に居り、我が言爾等に居らば、凡そ望む所を求めよ、然らば爾等に成らん。八 爾等多くの實を結ばゞ、我が父は此に由りて榮せられん、爾等乃我が門徒と爲らん。九 父の我を愛するが如く、我も爾等を愛す、爾等我が愛に居れ。一〇 爾等若し我が誡を守らば、我が愛に居るが如く、我も我が父の誡を守りて、其愛に居らん、我も我が父の喜の全からん爲なり。一一 我が此を爾等に語りしは、我が喜の爾等に居り、爾等の喜の全からん爲なり。一二 我が爾等を愛するが如く、爾等相愛すべし、此れ我の誡なり。一三 人其友の爲に生命を捐つるは、愛此より大なるはなし。一四 爾等若し我が爾等に誡むる事を行はゞ、卽ち我が友たり。一五 我既に爾等を

僕さい曰はす、蓋僕は其主の行ふ所を知らす、乃爾等を友と曰へり、凡そ我が父より聞きし所を爾等に告げしに縁る。一六爾等我を選びしに非す、我は爾等を選び、且爾等を立てたり、爾等が往きて實を結び、且爾等の實の存せん爲、爾等が凡そ我が名に因りて父に求むる所は、彼爾等に與へん爲なり。一七我此を爾等に誡む、爾等相愛すべし。一八世若し爾等を惡まば、爾等に先だちて我を惡めりと知れ。一九爾等若し世に屬せば、世は己に屬する者を愛せん、然れども爾等は世に屬せず、我は爾等を世より選べり、此に由りて世は爾等を惡む。二〇我が嘗て爾等に僕は其主より大ならずと云ひし言を憶へ。人若し我を窘逐せば、爾等をも窘逐せん。若し我が言を守らば、爾等の言をも守らん。二一然れども是皆我の名に因りて爾等に行はん、我を遣しゝ者を識らざる故なり。二二我若し來りて、彼等に言はざりしならば、彼等罪なからん、然れども今は其罪を辭すること能はず。二三我を惡む者は我が父をも惡む。二四我若し彼等の中に、他の者の未だ爲さざりし事を行はざりしならば、彼等罪なからん、然れども今彼等は我及び我が父を已に見、且惡めり。二五是くの如く彼等の律法に、故なくして我を惡めりと、錄せる言

聽へり。二六 我が父より爾等に遣さんとする慰
ん時、彼我の事を證せん。二七 爾等も亦證せん、始より我と偕に在るに因りてなり。
第十六章 一 我り逐はん、且凡そ爾等を殺す者は、此を以て神に奉事すと意ふ時至らん。三 此等の事を
行はんさするは、父と我とを識らざるに因りてなり。四 然れども我が此を爾等に語りしは、爾等が、時の至るに及びて、我が此を爾等に言ひしを憶ひ起さん爲なり、初より此を爾等に言はざりしは、爾等と偕に在りし故なり。五 今我を遣しゝ者に往く、而して爾等の中我に、何に往くさ、問ふ者なし。六 惟我が此を爾等に語りしに因りて、憂は爾等の心に盈てり。七 然れども我眞を爾等に語く、我の往くは爾等の爲に益あり、蓋若し我往かずば、慰藉者爾等に來らざらん、我往かば、彼を爾等に遣さん。八 彼來りて、罪に於て、義に於て、審判に於て、世を責めん。九 罪に於ては、其我を信ぜざるに因りてなり。一〇 義に於ては、我が父に往き、爾等復我を見ざるに因りてなり。一一 審判に於ては、此の世の君の審判せられしに因りてなり。一二 我尚多く爾等に言ふべき事あれど

も、爾等今容ろゝ能はず。一三然れども彼、即ち眞實の神、來らん時、爾等を凡の眞實に導か、蓋彼は已に由りて言はんさすゐに非ず、乃聞かんさする事を言はん、且將來の事を爾等に示さん。一四彼は我を榮せん、蓋我に屬する者より取りて、爾等に示さん。一五凡そ父の有つ所の者は我に屬す、故に我、彼は我に屬する者より取りて、爾等に示さんと曰へり。一六頃しくして爾等我を見ざらん、復頃して我を見ん、蓋我父に往く。一七是に於て其門徒の或者相語りて曰へり、彼が我等に、頃して我を見ざらん、復頃して我を見ん、且我父に往くさ云ふは、是れ何ぞや。一八故に曰へり、彼が頃さ云ふは、是れ何ぞや、我等其言ふ所を知らずと。一九イエスは其己に問はんさ欲するを知りて、彼等に謂へり、我が頃して我を見ざらん、復頃して我を見んさ云ひしを爾等相尋ぬるか。二〇我誠に誠に爾等に語ぐ、爾等は哭き哀まん、世は喜ばん、爾等は憂へん、然れども爾等の憂は變じて喜ならん。二一婦は産むに及びて、憂を憶ふ、其期至りたれども子を生みし後は、喜に因りて復苦を憶はず、人世に生れたればなり。二二是く

よろこび爾等より喜を爾等より奪ふ者なし。二三 其日に於て爾等我に問ふ所なからん、我誠に誠に爾等に語ぐ、凡そ我が名に因りて父に求むる所は、彼爾等に與へん。二四 今に至るまで爾等我が名に因りて求むる所なかりき、求めよ、然らば得ん、爾等の喜の全からん爲なり。二五 我譬を以て此等の事を爾等に語れり、然れども復譬を以て爾等に語らず、乃ち明に父の事を爾等に示す時至らん。二六 其日に於て爾等我が名に因りて求めん、而して我爾等の爲に父に願はんと曰はず、二七 蓋父親ら爾等を愛す、爾等が我を愛し、且我が神より出でしことを信ぜしに因りてなり。二八 我は父より出でて世に來れり、復世を離れて父に往く。二九 其門徒彼に謂ふ視よ、今爾は明に語りて一つも譬を言はず。三〇 今我等は、爾が知らざる所なく、且人の爾に問ふを待たざるを知る、此に縁りて我等は爾が神より出でたるを信ず。三一 イイススス彼等に答へて曰へり、今信ずるか、三二 視よ、時は至れり今已に至れり爾等各其所に散じて、我を獨遺さん、然れども我獨に非ず、蓋父我と偕に在るなり。三三 我が此を爾等に語りしは、爾等我に在りて平安を有たん爲なり。世に在りて爾等患難を受けん、然れども勇めよ、我は世に勝てり。

第十七章

一イイスス此を言ひ竟りて、其目を天に擧げて曰へり、父よ、時至れり、爾の
子を榮せよ、爾の子も爾を榮せん爲なり、二蓋爾は彼に凡の肉體の上の權を與へた
り、彼が凡そ爾の彼に與へし者に永遠の生命を與へん爲なり。三永遠の生命とは、卽
爾、獨一の眞の神、及び爾が遣しゝイイススハリストスを知ること是なり。四我已に
爾を地に榮し、爾が我に與へて行はしむる事を成せり。五今爾父よ、我をして爾に在り
て榮を享けしめよ、卽創世の先に我が爾に在りて有ちたる榮なり。六爾が世の中よ
り我に與へし人人に、我爾の名を顯せり、彼等は爾に屬し、爾彼等を我に與へたり、彼等
爾の言を守れり。七今彼等は凡そ爾が我に與へし者、皆爾よりするを知れり。八蓋我は
爾が我に與へし言を彼等に與へたり、彼等之を受け、且我が爾より出でしを誠に知り、
又爾が我を遣しゝを信ぜり。九我は彼等の爲に祈る、世の爲に祈らず、乃爾が我に與
へし者の爲なり、蓋彼等は爾に屬す。一〇凡そ我に屬する者は爾に屬し、爾に屬する者
は我に屬す我は彼等の中に榮せられたり。一一我は是より世に在らず、彼等は世に在
り、我爾に往く、聖なる父よ、爾が我に與へし者は、爾の名に因りて之を守りて、彼等を我

等の如く、一と爲らしめよ。一二 我彼等と偕に世に在りし時、爾の名に因りて彼等を守
れり、爾が我に與へし者は、我之を守り、其中一も亡びず、惟沈淪の子は亡びたり、聖書の
應ふを致す。一三 今我爾に往く、我世に在りて之を言ふ、彼等が己の中に我の全き喜
を有たん爲なり。一四 我爾の言を彼等に與へたり、而して世は彼等を惡めり、蓋彼等は
世に屬せず、我の世に屬せざるが如し。一五 我が祈るは、爾が彼等を世より取らん爲に
非ず、乃彼等を惡より護らん爲なり。一六 彼等は世に屬せず、我の世に屬せざるが如
し。一七 爾の眞實を以て彼等を聖にせよ、爾の言は眞實なり。一八 爾が我を世に遣しゝ
如く、我も彼等を世に遣せり。一九 我彼等の爲に己を聖にす、彼等も眞實を以て聖にせ
られん爲なり。二〇 我惟彼等の爲にのみ祈るに非ず、乃亦彼等の言に緣りて我を信
ずる者の爲なり、二一 願はくは皆一と爲らん、父よ、爾が我に在り、我も爾に在るが如く、
願はくは彼等も我等に在りて一と爲らん、世が爾の我を遣しゝを信ぜん爲なり、二二
亦爾が我に與へし榮を、我彼等に與へたり、我等の一なるが如く、彼等の一と爲らん爲
なり。二三 我は彼等に在り、爾は我に在り、彼等をして一に成全せしめん爲、且世が爾の

我を遣し又我を愛する如く、彼等を愛することを知らん爲なり。二四父よ、我は爾が我に與へし者の、我が居る所に我と偕に居らんことを望む、彼等が我の榮を見ん爲なり、卽爾が我に與へし榮なり、蓋爾は創世の先より我を愛せり。二五義なる父よ、世は爾を識らず、然れども我は爾を識れり、彼等も爾が我を遣しゝを識れり、二六我爾の名を彼等に示せり、復之を示さん、爾が我を愛する愛は彼等に在り、我も彼等に在らん爲なり。

第十八章

一イイスス此を言ひて後、其門徒と偕にケドロン河の外に出でたり、彼處に園あり、彼及び彼の門徒は其中に入れり。二彼を賣るイウダも此の處を識れり、蓋イイスス屢其門徒と偕に彼處に集りたり。三故にイウダは兵卒一隊を、及び司祭諸長とファリセイ等より下吏を受けて、炬と燈と兵器とを以て、此の處に來れり。四イイススは凡そ己に及ばんとする事を知りて、出でゝ彼等に謂へり、爾等誰を尋ぬるか。五彼に答へて曰へり、イイススナゾレイなり。イイスス彼等に謂ふ、我は是なり。彼を賣るイウダも彼等と偕に立てり。六イイススが我は是なりと言ひし時、彼等後へ退きて、地

に仆れたり。七復彼等に問へり、爾等誰を尋ぬるか。彼等曰へり、イイスス ナザレイなり。
八イイスス答へて曰へり、我爾等に我は是なりと謂へり、故に若し我を尋ぬるならば
此の輩を容して去らしめよ、九彼が言ひし言に應ふを致す、云く、爾が我に與へし者
の中、我一人をも亡さざりきと。一〇時にシモン ペトル劍ありて、之を抜き、司祭長の僕
を撃ちて、其右の耳を削げり。僕の名はマルホなり。一一イイスス ペトル に謂へり、爾の
劍を鞘に納めよ、父の我に與へし爵は、我豈之を飲まざらんや。一二是に於て兵卒と千
夫長とイウデヤの下吏とイイススを執へて、之を縛り、一三先づ之をアンナに曳き至
れり、蓋彼は是の歳司祭長たるカイアファの岳父なり。一四カイアファは、即イウデヤ人
に謀りて、一人民の爲に死するは益ありと、云ひし人なり。一五シモン ペトル及び他の
一人の門徒イイススに從へり、此の門徒は司祭長の識る所の者にして、イイススと僧
に司祭長の中庭に入り、一六ペトルは門の外に立てり。後司祭長の識る所の門徒は出
て、門を守る女に言ひて、ペトルを内に入れたり。一七是に於て門を守る婢ペトルに
謂ふ、爾も此の人の門徒の一に非ずや。彼曰く、然らず。一八時に諸僕及び下吏等寒きに

よ因りて火を焚き、彼に立ちて、煖まり、ペトルも亦彼等と偕に立ちて煖まれり。二五 長はイイスに其門徒及び其教の事を問へり。二〇 イイスに答へて曰へり、我は世に語れり、我常に會堂及び殿、即ユダヤ人の恒に集る所に於て、教を宣べて隠に語りしことなし。二一 何ぞ我に問ふ、聽きし者に我が彼等に何を語りしを問へ、視よ、此の輩は我が言ひし事を知る。二二 彼が此を言ひし時、旁に立てる下吏イイスの頬を批ちて曰へり、爾は司祭長に斯く答へて曰へりや。二三 イイス彼に答へて、若し我が言ひし事悪しくば、其悪しき事を證せよ、若し善くば、何ぞ我を批つ。二四 アンナは彼を縛りたるまゝ司祭長カイアファに送れり。二五 時にシモンペトル立ちて煖まれり。或彼に謂へり、爾も亦其門徒の一人ならずや。彼諱みて曰へり、然らず。二六 司祭長の僕の一人、ペトルが耳を削ぎたる者の親戚、曰く、我爾が彼と偕に園に在るを見しに非ずや。二七 ペトル復諱みたり、忽鶏鳴けり。二八 彼等イイスを曳きて、カイアファより公廨に至れり。時既に平旦なり、彼等は公廨に入らざりき、汚されざらんため、逾越節を食するを得んが爲なり。二九 ピラト出でゝ彼等に謂へり、爾等何事を以て此の人

を訟ふるか。三〇答へて曰へり、彼若し惡を行ふ者に非ずば、我等彼を爾に解さざりしならん。三一ピラト彼等に謂へり、爾等彼を取りて、爾等の律法に循ひて彼を審判せよ。イウデヤ人之に謂へり、我等には人を死に處する權なし、三二是れイエスが、如何なる死を以て死なんとするを指して、言ひし言に應ふを致す。三三其時ピラト復公廳に入り、イエスを召して、彼に謂へり、爾はイウデヤ人の王なるか。三四イエス彼に答へて曰へり、爾已に由りて之を言ふか、抑他の者が我の事を爾に言ひしか。三五ピラト答へて曰へり、我豈イウデヤ人ならんや、爾の民と司祭諸長とは爾を我に解せり、爾何を爲しゝか。三六イエス答へて曰へり我が國は此の世に屬せず、若し我が國は此の世に屬せば、我が諸僕は戰ひて、我がイウデヤ人に付さるゝを免れしめしならん、然れど今我が國は此に屬せざるなり。三七ピラト彼に謂へり、然らば爾は王なるか。イエス答へて曰へり、爾言ふ、我は王なり。我此が爲に世に生れ、此が爲に世に來れり、凡そ眞實に屬する者は我の聲を聽く。四八ピラト彼に謂ふ、眞實とは何ぞや。此を言ひて後、復出でゝイウデヤ人に謂ふ、我は彼に一も罪あるを見ず。三九

然るに爾等には逾越節に於て我が爾等に一人を釋す例あり故に我が爾等にイウデヤ人の王を釋さんことを欲するか。四〇衆人復號びて曰へり、斯の人に非ず、乃ワラウワを。ワラウワは盜賊なり。

第十九章

一其時ピラトイイススを取りて、鞭てり。二兵卒棘の冕を編みて、其首に冠らせ、紫の袍を彼に衣せて、三曰へり、イウデヤ人の王、慶べよ、且其頰を批てり。四ピラト復外に出でゝ、彼等に謂ふ、視よ、我彼を曳きて、爾等の前に出す、爾等が、我の彼に一も罪あるを見ざることを、知らん爲なり。五イイスス棘の冕を冠り、紫の袍を衣て、外に出でたり。ピラト彼等に謂ふ、視よ、人なり。六司祭諸長と下吏等と彼を見て號びて曰へり、十字架に釘せよ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ、爾等彼を取りて、十字架に釘せよ、蓋我彼に罪あるを見ず。七イウデヤ人答へて曰へり、我等に律法あり、我が律法に据れば、彼は死すべし、蓋己を神の子と爲せり。八ピラト此の言を聞きて、益懼れたり。九復公廨に入りて、イイススに謂ふ、爾は奚れよりする。然れどもイイスス彼に答を爲さざりき。一〇ピラト彼に謂ふ、我に言はざるか、爾豈我に爾を十字架に釘する權あ

り、亦爾を釋す權あるを知らざるか。一一 イイスス答へて曰へり、上より爾に與へられ
しに非ざれば、爾我に對して一も權あるなし、故に我を爾に解しゝ者の罪は更に大な
り。一二 是よりピラト彼を釋さんと謀れり。然れどもイウデヤ人號びて曰へり、爾若し
此の人を釋さば、ケサリの友に非ず。凡そ己を王と爲す者は、ケサリに叛く者なり。一三
ピラト此の言を聞きて、イイススを外に曳き出し、審判座に、「リフォストラトン」、エウレイ
の言にガウワフと名づくる所に坐せり。一四 其日は逾越節の備日にして、時は約六時
なり。ピラトイウデヤ人に謂ふ、視よ、爾等の王なり。一五 然れども彼等號びて曰へり、之
を去れ、之を去れ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ、爾等の王を釘せんか。司祭諸長對
へて曰へり、我等にはケサリの外に王なし。一六 其時ピラト彼を十字架に釘せん爲に
付せり。彼等イイススを取りて、曳き行けり。一七 彼己の十字架を負ひ、出でゝ、髑髏の處、
エウレイの言にゴルゴフと名づくる所に至れり。一八 彼處に在りて彼を十字架に釘
せり、又二人を彼と偕に釘せり、一は右、一は左、イイスス中に在り。一九 ピラト標を書し
て、十字架の上に置けり、書して云く、イイススナゾレイ、イウデヤ人の王と。二〇 イウデ

人の多くの者此の標を讀めり、蓋イエスの釘せられし處は城に近かりき、其標エ
ルレイグレチヤ、ロマの文を以て書されたり。二一 イウデヤ人の司祭諸長はピラトに
謂へり、イウデヤ人の王と書す勿れ、乃彼自ら、我はイウデヤ人の王なりと云へりと
書せ。二二 ピラト答へて曰へり、我が書しゝことは書せり。二三 兵卒はイエスを釘せ
し後、其外衣を取り、之を四分して、各一分を得たり、又裏衣を取れり、裏衣は縫なく、上
より渾く織りたる者なり。二四 故に彼等相語りて曰へり、之を裂かずして、誰か之を得ん
すべし、共に我が外衣を分ち、我が裏衣を鬮せよと云ふに應ふを致す、兵卒斯く行へり。二五 イエスの
マリヤと、マリヤ「マグダリナ」と、其十字架の旁に立てり。二六 イエスは其母及び愛す
る所の門徒の此に立てるを見て、母に謂ふ、婦よ、視よ、爾の子なり。二七 次で門徒に謂
ふ、視よ、爾の母なり。其時より此の門徒彼を己の家に取れり。二八 厥後イエス一切の
事已に成りたるを知り、聖書に應ひて曰ふ、我渇く。二九 彼處に醋の滿ちたる器の置
けるあり、兵卒海綿を醋に漬し、牛膝草に束ねて、彼の口に遞れり。三〇 イエス醋を受

けし後曰く、成れり。乃首を俯して、神を付せり。三一其日は備節日にして、彼の安息日
は大なる日なるに因りて、イウデヤ人は安息日に屍を十字架に留めざらん爲、ピラト
に、彼等の脛を折りて、屍を取り下さんことを請へり。三二故に兵卒來りて彼と偕に十
字架に釘せられし第一の者の脛を折り、第二の者にも亦然せり。三三イイススに來り
て、其已に死したるを見たれば、彼の脛を折らざりき、三四然れども一人の兵卒、戈を以
て、其脅を刺せり、忽血と水と出でたり。三五見し者は證を作せり、其證は眞なり、彼は言
ふ所の眞なるを知る、爾等をして信ぜしめん爲なり。三六蓋斯の事の成りしは、聖書の
應ふを致す、云く、其骨は折られざらんと。三七聖書の他篇に又云ふ、彼等は其刺しゝ者
を觀んと。三八其後アリマヱヤの人イオシフ、イイススの門徒にして、唯イウデヤ人を
懼るゝに因りて、自ら隱したる者は、ピラトにイイススの屍を取るを許さんことを請
へり、ピラト之を許したれば、彼來りてイイススの屍を取れり。三九又ニコデム、曩に夜
間イイススに來りし者は、沒藥と蘆薈とを合せたる者約百斤を攜へて來れり。四〇
彼等イイススの屍を取り、布を以て、香料と與に之を裹めり、イウデヤ人の葬の例の如

し。四一彼が十字架に釘せられし所に園あり、園の中に未だ曾て人の葬られざる新なる墓あり。四二其日はイウデヤ人の備節日なるに因りて、イエスを彼處に置きたり。

第二十章　一七日の首の日、朝尚昧き時、マリヤ「マグダリナ」墓に來りて、石の墓より移されたるを見る。二故に趨りて、シモンペトル及びイエスの愛せし他の門徒に往けり。四二人共に趨りしが、他の門徒はペトルより疾く趨りて、先に墓に來れり。五俯して、布の置けるを見たれども、入らざりき。六次ぎて來りペトル墓に入りて、布の置けるを見、七又其首を裹みし巾の布と共に在らず、乃捲きて、別に他の處に置けるを見たり。八其時先に墓に來りし他の門徒も入りて見、而して信ぜり。九蓋彼等は未だ其死より復活すべき聖書に載せたるを知らざりき。一〇是に於て二の門徒復已の所に歸れり。一一マリヤは墓の外に立ちて哭けり。哭く時墓に俯して、一二の天使が、白衣にしてイエスの屍の置かれし處に、一は首に一は

足に坐せるを見る。一三 彼等之に謂ふ、婦よ、何ぞ哭ける。彼曰く、人我が主を取れり、我其
何處に彼を置きしを知らず。一四 此を言ひて、顧みて、イイススの立てるを見る、然れど
も其イイススなるを知らざりき。一五 イイスス彼に謂ふ、婦よ、何ぞ哭ける、誰を尋ぬる
か。婦は園丁なりと意ひて、之に謂ふ、君よ、若し爾彼を移しゝならば、何處に置きしを我
に告げよ、我彼を取らん。一六 イイスス之に謂ふ、マリヤよ、婦顧みて、彼に謂ふ、「ラウヌ
ニ」、譯すれば夫子なり。一七 イイスス之に謂ふ、我に捫る勿れ、蓋我未だ我が父に升らざ
りき、乃往きて、我が兄弟に告げて曰へ、我は我が父及び爾等の父、我が神及び爾等の
神に升ると。一八 マリヤ「マグダリナ」往きて、門徒に己が主を見しこと、及び其彼に之を
言ひしことを告げたり。一九 是の日、即七日の首の日、既に暮れて、門徒の集れる處の
門、イウデヤ人を懼るゝに因りて閉ぢたるに、イイスス來りて、中に立ちて、彼等に謂ふ
爾等に平安。二〇 此を言ひて、彼等に己の手足及び脅を示せり。門徒主を見て喜べり。二
一 イイスス復彼等に謂へり、爾等に平安、父が我を遣しゝ如く、我も亦爾等を遣す。二二
此を言ひて、氣を噓きて、彼等に謂ふ、聖神を受けよ。二三 爾等人に其罪を釋さば、則釋

さる、人に其罪を留めば、則留めらる。二四 イイススの來りし時、十二の一なるフォマ、稱してディディムと云ふ者、彼等と偕に在らざりき。二五 他の門徒彼に謂へり、我等主を見たり。然れども彼は之に謂へり、我若し其手に釘の迹を見ず、我が指を釘の迹に入れず、我が手を其脅に入れずば、信ぜざらん。二六 八日を越ねて、門徒復内に在り、フォマも彼等と偕にせり。門閉ぢたるに、イイスス來りて、彼等の中に立ちて曰へり、爾等に平安。二七 次ぎてフォマに謂ふ、爾の指を此に伸べて、我が手を視よ、爾の手を伸べて、我が脅に入れよ、信ぜざる勿れ、乃信ぜよ。二八 フォマ答へて彼に謂へり、我が主よ、我が神よ。二九 イイススは彼に謂ふ、爾は我を見しに緣りて信ぜり、見ずして信ずる者は福なり。三〇 イイススは其門徒の前に於て、亦他の多くの奇蹟、此の書に載せざる者を行へり。三一 此を載せたるは、爾等がイイススは神の子、ハリストスなりと信じ、且信じて、其名に因りて生命を得ん爲なり。

第二十一章

一 厥後イイスス復其門徒にティヴェリアダの海濱に現れたり。其現れたること左の如し。二 シモンペトル、フォマ、稱してディディムと云ふ者、ガリレヤのカナのナフ

ナイル、ゼワデイの二子、及び他の二人の門徒共に在り。三シモンペトル彼等に謂ふ、我往きて漁せん。彼等曰ふ、我等も爾と偕に往かん。出でゝ直に舟に登りしが、是の夜は獲る所なかりき。四既に明けて、イイスス岸に立てり、然ども門徒は其イイススたるを知らざりき。五イイスス彼等に謂ふ、小子よ、爾等に食ふべき物あるか。彼等答へて曰へり、無し。六彼は之に謂へり、網を舟の右に施せ、然らば得ん。彼等施せしに、之を擧ぐること能はざりき、魚の多きが故なり。七時にイイススの愛せし所の門徒ペトルに謂ふ、是れ主なりと聞きて、裸なりしに因りて、衣を束ねて、海に投ぜり。八他の門徒は舟に乗りて、魚の盈てる網を曳きて至れり、蓋地を離るゝこと遠からず、約二百尺なり。九地に上りし時、燃ねたる火、其上に置きたる魚、及び餅あるを見る。一〇イイスス彼等に謂ふ、今爾等が獲たる魚數尾を攜へ來れ。一一シモンペトル往きて、網を地に曳き上げたり、中に大なる魚一百五十三尾盈てり、斯く多しと雖、網は裂けざりき。一二イイスス彼等に謂ふ、來りて食せよ。門徒一も爾は誰たるかを敢てせざりき、其主たるを知ればなり。一三イイスス前み

り。一四 イイスが死より復活して後、其門徒に現れしこと、此れ其三なり。一五 彼等の食せし時、イイススシモンペトルに謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛すること彼等に過ぎたるか。彼曰ふ、然り、主よ、爾は我が爾を愛するを知る。イイス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。一六 又第二次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。彼曰ふ、然り、主よ、爾は我が爾を愛するを知る。イイス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。一七 第三次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。ペトル第三次に、爾我を愛するかと謂ひしに因りて憂ひて、彼に謂へり、主よ、爾は知らざる所なし、爾は我が爾を愛するを知る。イイス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。一八 我誠に誠に爾に語ぐ、爾少かりし時、自ら帯を束れて欲する所に行けり、老ゆるに及びて、爾の手を伸べん、他人爾を束れて爾が欲せざる所に曳かん。一九 此を言ひしは、ペトルが若何なる死を以て神を榮せんとするを示せるなり。言ひ竟りて、又彼に謂ふ、我に従へ。二〇 ペトル顧みて、イイスの愛せし所の門徒の後に従ふを見る、即晩餐の時、イイスの胸に倚りて、主よ、爾を賣る者は誰ぞと云ひし者なり。二一 ペトル彼を見て、イイスに謂ふ、主よ、斯の人は如何。二二

イイスス彼に謂ふ、我若し彼が存して、我が來るを待つことを欲せば、爾と何ぞ與らん、爾は我に從へ。二三　是に於て此の言は兄弟の間に散じて、此の門徒は死せざらんと言へり。然れどもイイススは彼に、死せざらんと、言ひしに非ず、乃ち我若し彼が存して、我が來るを待つことを欲せば、爾と何ぞ與らんと、言ひしなり。二四　此等の事を證し、且之を書しゝ者は、卽ち此の門徒なり、我輩は彼の證の眞なるを知る。二五　イイススの行ひし事、他にも亦多く有り、若し一一之を書さば、我意ふ、其書は世載するに勝へざらん、「アミ

聖使徒行實

第一章

一 テオフィルよ、我第一の書を作りて、凡そイエスの始めて行ひし所、誨へし所を錄して、二 其選びたる使徒に、聖神に因りて命を降して、天に升りし日に迄れり。三 彼は苦を受けし後、多くの確證を以て、彼等の前に己の活くるを視し、四十日の間彼等に現れて、神の國の事を語れり。四 遂に彼等を集めて、之に命じて曰へり、イエルサリムを離れずして、爾等が我に聞きし所の、父の許約せし者を待て。五 蓋イオアンは水を以て洗を授けたり、爾等は日久しからずして、聖神に由りて洗を受けん。六 是に於て彼等集りて、彼に問ひて曰へり、主よ、爾は此の時に於てイズライリの國を興すか。七 彼は之に謂へり、父が己の權内に置きし時及び期は、爾等の知るべき所に非ず、八 然れども、聖神の爾等に臨まん時、爾等能力を受けて、イエルサリム、全イウデヤ、サマリヤ、及び地の極に至るまで、我が爲に證者と爲らん。九 此を言ひて後、彼等の目の前に擧れり、雲彼等を接けて、彼等に見ざらしめたり。一〇 其升れる時、彼等天を仰ぎたるに、視よ、二人白

衣にして彼等の前に立ちて一一曰へり、ガリレヤの人よ、何ぞ天を仰ぎて立てる、爾等
より天に升りし此のイイススは、爾等が其天に升るを見し如く、是くの如く復來らん。
一二其時彼等は橄欖山と名づくる山よりイエルサリムに歸れり、此の山はイエルサ
リムに近くして、安息日に行く程なり。一三既に來りて、樓に登れり、彼處に留れる者は、
ペトル及びイアコフ、イオアン及びアンドレイ、フィリップ及びフォマ、ワルフォロメイ及びマ
トフェイ、アルフェイの子イアコフ及びシモンジロト、及びイアコフの兄弟イウダなり。
一四彼等皆心を一にして、婦等とイイススの母マリヤと、彼の兄弟と偕に、祈禱祈願を
務めたり。一五彼の日に於て、ペトルは、門徒(共に集れる者約百二十人)の中に立ちて曰
へり、一六兄弟よ、聖神がダヴィドの口を以て、イイススを執へし者の導者と爲りたるイ
ウダを指して、預言せし書は應ふべかりしなり。一七彼は我等の列に加へられて、此の
職の圖を受けたり。一八然れども不義の價を以て田を買ひ、身落ちし時、腹裂けて、其腸
皆流れたり。一九此れ凡そイエルサリムに居る者の知る所と爲りて、此の田を彼等の
方言に「アケルダマ」、卽血の田と稱ふるに至れり。二〇蓋聖詠の書に錄せるあり、云く、彼

の住所は虚しくなりて、其中に居る者なかるべし、又其職位は、他人之を受くべしと。二一是の故に主イイスの我等の中に出入せし時、二二即イオアンの洗禮より始め、其我等を離れて升りし日に至るまで、常に我等と偕に在りし者の中、一人我等と同じく其復活の證者と爲るべきなり。二三是に於て二人即イオシフ、稱してワルサワと云ひ、又イウストと稱へられし者、及びマトフィイを擧げて、二四祈りて曰へり、主、萬人の心を識る者よ、爾は此の二人の中、爾が選びたる一人を示して、二五此の奉事及び使徒職の閻を承けしめ給へ、蓋イウダは此の職を離れて、其所に往けり。二六是に於て彼等に閻を與へしに、閻はマトフィイに當れり、彼乃十一の使徒の列に加へられたり。

第二章

一五旬節の日至りて、使徒皆心を一にして共に在り。二忽天より聲ありて、迅しき風の度るが如し、彼等が坐せる所の家に滿てり。三岐れたる舌、火の如き者、彼等に現れて、各人に止れり。四彼等皆聖神に滿てられて、異方の言を言ひ始めたり、神の彼等に言はしめしが如し。五時に敬虔なるイウデヤ人、天下の諸國より來りて、イエルサリムに居る者あり。六此の聲の作りし時、大衆集りて、躁ぎたり、蓋各己の方言を語

ろを聞けり。七皆駭き且奇みて、互に言へり、視よ、此の語る者は皆ガリレヤ人に非ずや。
八如何にして我等は各〳〵我が生れし所の方言を聞くか。九我等はバルフィヤ、ミディヤエ
ラムの人、メソポタミヤ、イウデヤ及びカッパドキヤ、ポント及びアシヤ、一〇フリギヤ及
びパムフィリヤ、エギペト、及びキリ子ヤに近きリヴィヤの地方に居る者、ロマより來りし
者、イウデヤ人及び進教者、一一クリト及びアラヴィヤの人たるに、如何にして彼等が我
が方言を以て、神の大用を語るを聞くか。一二皆驚き訝りて、互に言へり、是れ何の意ぞ。
一三又或者は嘲りて曰へり、彼等は甜き酒に酣になれり。一四ペトル十一と偕に立ち
て、聲を揚げて、彼等に謂へり、イウデヤの人及び凡そイエルサリムに居る者よ、此れ爾
等の知る所と爲るべし、我が言に耳を傾けよ、一五彼等は、爾等の意ふ如く、醉へるに非
ず、蓋今は日の第三時なり、一六此れ卽預言者イオイリに因りて言ひし所なり、一七
主曰く、末の日に於て、我は我が神を以て凡の肉體に注がん、爾等の子女は預言し、爾等
の少き者は異象を見、爾等の老いたる者は夢の兆を見ん。一八彼の日に於て、我は我が
神を以て、我が僕及び我が婢に注がん、則彼等は預言せん。一九我奇蹟を上なる天に、

休徴を下なる地に施さん、血と火と烟とあらん。二〇日は晦冥に、月は血に變ぜん、此れ主の大にして光榮なる日の未だ來らざる先に在らん。二一凡そ主の名を籲ぶ者は救を得んと。二二イスラエルの人よ、此の言を聽け、イエスナザレイ、即ち爾等の中に於て、神が彼を以て爾等自らも知れる如く、行ひし異能と奇蹟と休徴とに因りて、神より爾等に證せられし人、二三神の定めたる旨と預知とに因りて解されしを、爾等取りて、不法の者の手を以て、十字架に釘して殺せり、二四然れども神は死の繩を釋きて、彼を復活せしめたり、死は彼を留むること能はざりしに因る。二五蓋ダヴィドは彼を指して曰く、我恒に主を我が前に見たり、蓋彼は我が右に在り、我が動かざらん爲なり。二六此に因りて我が心は喜び、我が舌は樂めり、我が肉體も望に安んぜん、二七蓋爾は我が靈を地獄に遺さず、爾の聖者に朽つるを見ざらしめん。二八爾我に生命の道を示せり、爾我を爾が顏の前に於て喜に滿たしめんと。二九兄弟よ、我太祖ダヴィドの事を敢て爾等に言ふべし、彼は死して葬られ、其墓は今日に至るまで我等の中に在り。三〇然れども彼は預言者にして、神が彼に誓ひて、其裔の中より、肉體に依りて、ハリストスを

興して、其位に坐せしめんことを約せしを知りて、三一先見して、ハリストスの復活を
指して、彼の靈は地獄に遺されず、彼の肉體は朽つるを見ざりきと云へり。三二此のイ
イススを神は復活せしめたり、我等は皆其證者なり。三三故に彼は神の右の手にて擧
けられて、父より許約せられし聖神を受けて、此の今爾等が見る所、聞く所の者を注げ
り。三四蓋ダワイドは天に升らざりき、然れども自ら言ふ、主我が主に謂へり、爾我が右
に坐して、三五我が爾の敵を爾の足の凳となすに迄れと。三六然らばイズライリの全
家よ、確に知るべし、爾等が十字架に釘せし此のイイススは、神彼を主と爲し、ハリスト
スと爲しゝことを。三七彼等之を聞きて、心刺さるゝが如し、ペトル及び他の使徒に謂
へり、兄弟よ、我等何を爲すべきか。三八ペトル彼等に謂へり、悔改せよ、而して各罪の
赦の爲にイイススハリストスの名に因りて、洗を受くべし、然らば聖神の賜を受けん。
三九蓋許約は爾等、及び爾等の諸子、又凡の遠き人、卽主我が神が召さんとする者に
屬す。四〇其他多くの言を以て證して、彼等に勸めて曰へり、此の邪なる世より救はれ
よと、四一故に喜びて彼の言を納れし者は洗を受けたり。是の日門徒に加はりし者約

三千人なり。四二彼等は恒に使徒の訓を受け、交際を爲し、餅を擘き、祈禱を行へり。四三人の心皆畏を懷けり、使徒に由りて、イエルサリムに行はれたり。四四信ずる者皆相集りて共に諸物を用ゐたり。四五産業と所有とを賣ぎ、各人の需用に從ひて、之を衆に分てり。四六日日心を一にして殿に在り、家〳〵に餅を擘きて、歡喜と朴直なる心とを以て食を食ひ、四七神を讃美し、衆民の親愛を獲たり。主は救はるゝ者を日日教會に加へたり。

第三章　一第九時の祈禱の時、ペトル及びイオアン共に殿に升れり。二母の胎より跛なる者あり、人日日彼を舁きて、美門と名づくる殿の門の側に置けり、殿に入る者に施濟を乞はんが爲なり。三彼はペトル及びイオアンが殿に入らんとするを見て、施濟を乞へり。四ペトルはイオアンと共に彼に目を注ぎて曰へり、我等を覩よ。五彼は得る所あらんと意ひて、熟彼等を視たり。六ペトル曰ひけるは、金銀は我に無し、然れども我に有る者を爾に與ふ、イエスハリストスナゾレイの名に因りて、起ちて歩め。七乃其右の手を執りて彼を起したれば、其足と踝とたゞちに健くなれり。八彼は踊りて立ち、且歩み、

彼等と偕に殿に入りて、歩み且躍り、神を讃美せり。九民皆彼が歩みて、神を讃美するを見、一〇其素殿の美門に坐して、施濟を乞ひし者なるを識りて、彼に成りしことを甚駭き奇めり。一一愈されたる跛者がペトル及びイオアンを離れざるに因りて、駭けるに、ソロモンの廊と名づくる所に、趨り就けり。一二ペトル之を見て、民に語りて曰へり、イスラエルの人人よ、何ぞ此を奇とする、抑何ぞ我等に目を注ぐこと、我等が己の能力或は敬虔を以て、彼を歩ませし如くするる。一三アブラハム、イサアク、イアコフの神、我が先祖の神は、其子イエスを、爾等が解しゝ者ピラトが彼を釋さんと擬せしに、爾等は聖なる者、義なる者を拒みて、人を殺す者を賜はんことを求めて、一四爾等は聖なる者、義なる者を拒みて、人を殺す者を賜はんことを求めて、一五生命の主を殺せり。神は彼を死より復活せしめたり、我等は其證者なり。一六彼の名を信ずるに賴りて、其名は爾等が見る所識る所の、此の人を健くせり、彼に因る信は、此の人に、爾等衆の前に、此の全愈を與へたり。一七兄弟よ、我今知る、爾等は知らざるに由りて之を行へり、爾等の有司も亦然り。一八神は、其諸預言者の口を以て、キリストの苦を受けんことを預言せし如く、斯く應はり

せたり。一九 故に爾等悔改轉移して、爾等の諸罪の抹さゝるを致せ。二〇 主の顏より安慰の時の來らん爲、彼が爾等に預言せられしイエスキリストを遣さん爲なり。二一 蓋神が古世より、其聖なる諸預言者の口を以て、言ひしことの悉く振興せられん時に至るまで、天は彼を受くべきなり。二二 モイセイは先祖に謂へり、主爾等の神は、爾等の兄弟の中より、我の若き預言者を爾等に起さん、凡そ彼が爾等に語らんことは、彼に聽け。二三 凡そ此の預言者に聽かざる者は、民の中より滅されんさ。二四 サムイルより以來、凡そ語りし所の預言者は、亦此の日を預言せり。二五 爾等は諸預言者、及び許約の諸子なり、卽神がアヴラアムに、爾の裔に由りて地の萬族は祝福せられんさ云ひて、爾等の先祖に賜ひし許約なり。二六 神は其子イエスを復活せしめて、先づ爾等に祝福して、爾等各人を諸惡より轉ぜしめんが爲なり。

第四章

一 彼等が民に語れる時、諸司祭さ殿の司さ撒都該人等さ就きて、二 彼等が民を教へ、及びイエスに由りて死よりの復活を傳ふるに因りて、恤れり。三 乃彼等に手を措きて、旦に至るまで彼等を守らしめたり、時已に暮れたればなり。四 然れども言を聽ける者多かりて、男の數凡五千ばかりなりき。五 翌日に及びて、民の司、長老、文士等、エルサレムに集まりて、六 大祭司アンナス、カヤパ、ヨハン、アレキサンドロ、及び大祭司の族類悉く會せり。七 使徒を中に立てて、何の權威、何の名を以て、此事を爲すやと問ひしに、八 ペテロ聖神に滿たされて、彼等に言ひけるは、民の司、長老等よ、九 我等今日病人に爲したる善事に因りて、何を以て此人の救はれたるかを問はるゝならば、一〇 爾等及びイスラエルの衆人皆知れ、ナザレのイエスキリストの名を以て、此人の爾等の前に健全にて立てるは、爾等が十字架に釘けたるに、神が死より復活せしめたるイエスキリストの名に由りてなり。一一 此イエスは、爾等造家者の棄てたる石にして、隅の首石となれるものなり。一二 他人に由りては救を得ることなし、蓋天下の人の中に、我等の救はるべき名は、此名の外に賜はれざればなり。一三 彼等ペテロとヨハンの辯ずるを觀、且二人が學なき俗人なるを知りて、奇異に思ひ、又二人がイエスと共に在りしを識りて、一四 其癒されたる人が二人と共に立てるを見ては、言ふ所なかりき。一五 乃彼等に公會を出でよと命じ、互に議りて、一六 言ふ、此人等に何を爲すべきや、蓋彼等に由りて顯著なる神蹟の行はれたるは、エルサレムに住める衆人の知る所なれば、我等之を否むこと能はず。一七 然れども此事の民の間に益〻弘まらざらんために、彼等を嚇して、此名に因りて再び人に語ること勿らしめんと。一八 乃彼等を召して、決して此名に因りて言ふことなく、又教ふることなからしめんと命じたり。一九 ペテロとヨハン答へて彼等に言ひけるは、神の前に爾等に聽くは、神に聽くより善きや否、爾等自ら判斷せよ。二〇 我等は見聞きしたることを言はざること能はざるなり。二一 彼等重ねて二人を嚇して、釋ちたり、其は民皆此事に因りて神を崇めたれば、如何にして二人を罰せんやを見出すこと能はざりしなり。二二 蓋此神蹟の行はれたる人は、四十餘歲の男なりき。二三 二人釋ちられて、其儕輩の所に往き、祭司長老等が己に言ひたることを悉く告げたり。二四 彼等之を聞きて、心を一にして聲を擧げ、神に祈りて言ひけるは、主よ、汝は天地海及び其中の萬物を造りたまへる者なり。二五 汝聖神に由りて我等の父ダビデ、汝の僕の口を以て言ひたまへるは、何故に異邦人は騷ぎ、民は虛しきことを謀るや。二六 神は其子イエスを僕として遣し、彼を祝福して、汝等各人を諸惡より轉ぜしめんが爲なり。

第三章

一 ペテロとヨハン祈禱の時、卽第九時に、殿に上りしが、二 母の胎より跛者なりし人を、殿の美門と稱ふる門の傍に、日毎に舁き來りて置きたり、其は殿に入る人に施を乞はしめんが爲なりき。三 彼ペテロとヨハンが殿に入らんとするを見て、施を乞へり。四 ペテロ、ヨハンと共に彼を目注して言ひけるは、我等を視よ。五 彼二人より何か得んとて、目を注けたり。六 ペテロ言ひけるは、我に金銀なし、然れども我に有るものを與へん、ナザレのイエスキリストの名を以て起きて步めよ。七 乃右手を執りて、之を擧げたれば、足と踝とたちまち健かになり、八 躍り上りて立ち、步みなどしたり、而して步みつゝ、跳りつゝ、神を讚めつゝ、彼等と共に殿に入りぬ。九 民皆彼が步みつゝ神を讚めたるを見、一〇 又彼が殿の美門の傍に坐して施を乞ひたる者なるを識りて、其身に起りたることに因りて、驚き且怪しみたり。一一 彼ペテロとヨハンに附きたれば、民皆大に驚きて、ソロモンの廊と稱ふる廊に、彼等に就きて集まりたり。一二 ペテロ之を見て、民に言ひけるは、イスラエルの人よ、何故に此事を怪しむや、何故に我等を目注すや、我等の能力又は敬虔に因りて、此人を步ましめたりと思ふや。一三 アブラハム、イサク、ヤコブの神、我等の父祖の神は、其僕イエスに榮を與へたまへり、爾等は之を賣り、ピラトの前にて之を否みたり、ピラト釋ちんと定めたるに、爾等は之を否みて、一四 聖にして義なる者を否み、却て人殺を釋ちんことを求めたり。一五 生命の主を殺したり、然れども神は之を死より復活せしめたり、我等は此事の證者なり。一六 其名を信ずるに因りて、其名此人を健かにしたり、爾等皆之を見、且知れり、イエスに由る信仰は、此人を爾等皆の前に全くしたり。一七 兄弟よ、我今爾等が此事を、爾等の司等と同く、無知にて爲したることを知る。一八 然れども神は諸預言者の口を以て、其キリストの苦難を受くべきことを豫言したまへるを、此の如く應驗したまへり。一九 故に爾等悔改轉移して、爾等の罪の抹さるゝを致せ。二〇 主の顏より安慰の時の來らん爲、彼が爾等に預言せられしイエスキリストを遣さん爲なり。二一 蓋神が古世より、其聖なる諸預言者の口を以て、言ひしことの悉く振興せられん時に至るまで、天は彼を受くべきなり。二二 モイセイは先祖に謂へり、主爾等の神は、爾等の兄弟の中より、我の若き預言者を爾等に起さん、凡そ彼が爾等に語らんことは、彼に聽け。二三 凡そ此の預言者に聽かざる者は、民の中より滅されんさ。二四 サムイルより以來、凡そ語りし所の預言者は、亦此の日を預言せり。二五 爾等は諸預言者、及び許約の諸子なり、卽神がアヴラアムに、爾の裔に由りて地の萬族は祝福せられんさ云ひて、爾等の先祖に賜ひし許約なり。二六 神は其子イエスを復活せしめて、先づ爾等に祝福して、爾等各人を諸惡より轉ぜしめんが爲なり。

第四章

一 彼等が民に語れる時、諸司祭さ殿の司さ撒都該人等さ就きて、二 彼等が民を教へ、及びイエスに由りて死よりの復活を傳ふるに因りて、恤れり。三 乃彼等に手を措きて、旦に至るまで彼等を守らしめたり、時已に暮れたればなり。四 然れども言を聽ける者多かりて、男の數凡五千ばかりなりき。五 翌日に及びて、民の司、長老、文士等、エルサレムに集まりて、六 大祭司アンナス、カヤパ、ヨハン、アレキサンドロ、及び大祭司の族類悉く會せり。七 使徒を中に立てて、何の權威、何の名を以て、此事を爲すやと問ひしに、八 ペテロ聖神に滿たされて、彼等に言ひけるは、民の司、長老等よ、九 我等今日病人に爲したる善事に因りて、何を以て此人の救はれたるかを問はるゝならば、一〇 爾等及びイスラエルの衆人皆知れ、ナザレのイエスキリストの名を以て、此人の爾等の前に健全にて立てるは、爾等が十字架に釘けたるに、神が死より復活せしめたるイエスキリストの名に由りてなり。一一 此イエスは、爾等造家者の棄てたる石にして、隅の首石となれるものなり。一二 他人に由りては救を得ることなし、蓋天下の人の中に、我等の救はるべき名は、此名の外に賜はれざればなり。一三 彼等ペテロとヨハンの辯ずるを觀、且二人が學なき俗人なるを知りて、奇異に思ひ、又二人がイエスと共に在りしを識りて、一四 其癒されたる人が二人と共に立てるを見ては、言ふ所なかりき。一五 乃彼等に公會を出でよと命じ、互に議りて、一六 言ふ、此人等に何を爲すべきや、蓋彼等に由りて顯著なる神蹟の行はれたるは、エルサレムに住める衆人の知る所なれば、我等之を否むこと能はず。一七 然れども此事の民の間に益〻弘まらざらんために、彼等を嚇して、此名に因りて再び人に語ること勿らしめんと。一八 乃彼等を召して、決して此名に因りて言ふことなく、又教ふることなからしめんと命じたり。一九 ペテロとヨハン答へて彼等に言ひけるは、神の前に爾等に聽くは、神に聽くより善きや否、爾等自ら判斷せよ。二〇 我等は見聞きしたることを言はざること能はざるなり。二一 彼等重ねて二人を嚇して、釋ちたり、其は民皆此事に因りて神を崇めたれば、如何にして二人を罰せんやを見出すこと能はざりしなり。二二 蓋此神蹟の行はれたる人は、四十餘歲の男なりき。二三 二人釋ちられて、其儕輩の所に往き、祭司長老等が己に言ひたることを悉く告げたり。二四 彼等之を聞きて、心を一にして聲を擧げ、神に祈りて言ひけるは、主よ、汝は天地海及び其中の萬物を造りたまへる者なり。二五 汝聖神に由りて我等の父ダビデ、汝の僕の口を以て言ひたまへるは、何故に異邦人は騷ぎ、民は虛しきことを謀るや。二六 神は其子イエスを僕として遣し、彼を祝福して、汝等各人を諸惡より轉ぜしめんが爲なり。

第三章

一 ペテロとヨハン祈禱の時、卽第九時に、殿に上りしが、二 母の胎より跛者なりし人を、殿の美門と稱ふる門の傍に、日毎に舁き來りて置きたり、其は殿に入る人に施を乞はしめんが爲なりき。三 彼ペテロとヨハンが殿に入らんとするを見て、施を乞へり。四 ペテロ、ヨハンと共に彼を目注して言ひけるは、我等を視よ。五 彼二人より何か得んとて、目を注けたり。六 ペテロ言ひけるは、我に金銀なし、然れども我に有るものを與へん、ナザレのイエスキリストの名を以て起きて步めよ。七 乃右手を執りて、之を擧げたれば、足と踝とたちまち健かになり、八 躍り上りて立ち、步みなどしたり、而して步みつゝ、跳りつゝ、神を讚めつゝ、彼等と共に殿に入りぬ。九 民皆彼が步みつゝ神を讚めたるを見、一〇 又彼が殿の美門の傍に坐して施を乞ひたる者なるを識りて、其身に起りたることに因りて、驚き且怪しみたり。一一 彼ペテロとヨハンに附きたれば、民皆大に驚きて、ソロモンの廊と稱ふる廊に、彼等に就きて集まりたり。一二 ペテロ之を見て、民に言ひけるは、イスラエルの人よ、何故に此事を怪しむや、何故に我等を目注すや、我等の能力又は敬虔に因りて、此人を步ましめたりと思ふや。一三 アブラハム、イサク、ヤコブの神、我等の父祖の神は、其僕イエスに榮を與へたまへり、爾等は之を賣り、ピラトの前にて之を否みたり、ピラト釋ちんと定めたるに、爾等は之を否みて、一四 聖にして義なる者を否み、却て人殺を釋ちんことを求めたり。一五 生命の主を殺したり、然れども神は之を死より復活せしめたり、我等は此事の證者なり。一六 其名を信ずるに因りて、其名此人を健かにしたり、爾等皆之を見、且知れり、イエスに由る信仰は、此人を爾等皆の前に全くしたり。一七 兄弟よ、我今爾等が此事を、爾等の司等と同く、無知にて爲したることを知る。一八 然れども神は諸預言者の口を以て、其キリストの苦難を受くべきことを豫言したまへるを、此の如く應驗したまへり。一九 故に爾等悔改轉移して、爾等の罪の抹さるゝを致せ。二〇 主の顏より安慰の時の來らん爲、彼が爾等に預言せられしイエスキリストを遣さん爲なり。二一 蓋神が古世より、其聖なる諸預言者の口を以て、言ひしことの悉く振興せられん時に至るまで、天は彼を受くべきなり。二二 モイセイは先祖に謂へり、主爾等の神は、爾等の兄弟の中より、我の若き預言者を爾等に起さん、凡そ彼が爾等に語らんことは、彼に聽け。二三 凡そ此の預言者に聽かざる者は、民の中より滅されんさ。二四 サムイルより以來、凡そ語りし所の預言者は、亦此の日を預言せり。二五 爾等は諸預言者、及び許約の諸子なり、卽神がアヴラアムに、爾の裔に由りて地の萬族は祝福せられんさ云ひて、爾等の先祖に賜ひし許約なり。二六 神は其子イエスを復活せしめて、先づ爾等に祝福して、爾等各人を諸惡より轉ぜしめんが爲なり。

第四章

一 彼等が民に語れる時、諸司祭さ殿の司さ撒都該人等さ就きて、二 彼等が民を教へ、及びイエスに由りて死よりの復活を傳ふるに因りて、恤れり。三 乃彼等に手を措きて、旦に至るまで彼等を守らしめたり、時已に暮れたればなり。四 然れども言を聽ける者多かりて、男の數凡五千ばかりなりき。五 翌日に及びて、民の司、長老、文士等、エルサレムに集まりて、六 大祭司アンナス、カヤパ、ヨハン、アレキサンドロ、及び大祭司の族類悉く會せり。七 使徒を中に立てて、何の權威、何の名を以て、此事を爲すやと問ひしに、八 ペテロ聖神に滿たされて、彼等に言ひけるは、民の司、長老等よ、九 我等今日病人に爲したる善事に因りて、何を以て此人の救はれたるかを問はるゝならば、一〇 爾等及びイスラエルの衆人皆知れ、ナザレのイエスキリストの名を以て、此人の爾等の前に健全にて立てるは、爾等が十字架に釘けたるに、神が死より復活せしめたるイエスキリストの名に由りてなり。一一 此イエスは、爾等造家者の棄てたる石にして、隅の首石となれるものなり。一二 他人に由りては救を得ることなし、蓋天下の人の中に、我等の救はるべき名は、此名の外に賜はれざればなり。一三 彼等ペテロとヨハンの辯ずるを觀、且二人が學なき俗人なるを知りて、奇異に思ひ、又二人がイエスと共に在りしを識りて、一四 其癒されたる人が二人と共に立てるを見ては、言ふ所なかりき。一五 乃彼等に公會を出でよと命じ、互に議りて、一六 言ふ、此人等に何を爲すべきや、蓋彼等に由りて顯著なる神蹟の行はれたるは、エルサレムに住める衆人の知る所なれば、我等之を否むこと能はず。一七 然れども此事の民の間に益〻弘まらざらんために、彼等を嚇して、此名に因りて再び人に語ること勿らしめんと。一八 乃彼等を召して、決して此名に因りて言ふことなく、又教ふることなからしめんと命じたり。一九 ペテロとヨハン答へて彼等に言ひけるは、神の前に爾等に聽くは、神に聽くより善きや否、爾等自ら判斷せよ。二〇 我等は見聞きしたることを言はざること能はざるなり。二一 彼等重ねて二人を嚇して、釋ちたり、其は民皆此事に因りて神を崇めたれば、如何にして二人を罰せんやを見出すこと能はざりしなり。二二 蓋此神蹟の行はれたる人は、四十餘歲の男なりき。二三 二人釋ちられて、其儕輩の所に往き、祭司長老等が己に言ひたることを悉く告げたり。二四 彼等之を聞きて、心を一にして聲を擧げ、神に祈りて言ひけるは、主よ、汝は天地海及び其中の萬物を造りたまへる者なり。二五 汝聖神に由りて我等の父ダビデ、汝の僕の口を以て言ひたまへるは、何故に異邦人は騷ぎ、民は虛しきことを謀るや。二六 神は其子イエスを僕として遣し、彼を祝福して、汝等各人を諸惡より轉ぜしめんが爲なり。

を聽きし者の中多く、信ぜり、其數約五千人なり。五明日、彼等の司、長老、學士等、六及び
司祭長アンナ、カイアファ、イオアン、アレキサンドル、其他司祭長の族人はイエルサリ
Aに集り、七使徒を中に立てゝ問へり、爾等は何の能、或は何の名を以て、此を行ひしか。
八其時ペトル聖神に滿てられて、彼等に謂へり、民の司有及び長老等よ、
九若し今日我等、病みたる人に行ひし善事に就きて、其如何に愈されしと訊されば、一
〇則爾等衆及び全イズライリ民は知るべし、イエスハリストスナザレイ、爾等
の十字架に釘せしめし者の名に由りて、此の
人健にして爾等の前に立てゐるなり。一一
屋隅の首石と成りたる者なり、一二此の外別に救を得しむる
興へられたる他の名の、我等が由りて以て
びイオアンの殺然たるを見、其無學にして
イススと偕に在りしを知れり。一四然れざ
駁す可き辭なかりき。一五乃之に會所の
外に出づるを命じて後、相議して曰へり、一

六 此の人人に何を爲すにか、蓋彼等に由りて著しき奇蹟の行はれしことは、凡そエルサリムに居る者に顯なり、我等之を無き言ふ能はず。一七 然れども此の事の民間に傳はらざらん爲に、彼等を恐喝して、復其名を以て何人にも語らざらんことを戒むべし。一八 乃ち彼等を召して、更にイエスの名を以て言ふことなく、敎ふることなきを命じたり。一九 然れどもペトル及びヨハネ彼等に答へて曰へり、神に聽くよりも愈りて、爾等に聽くは、神の前に在りて義なるか、自ら判斷せよ。二〇 蓋我等は之を聞き且見し所を語らざるを得ず。二一 彼等は之を罰する所以を得ずして、恐喝を加へて、之を釋せり、民の故を以てなり、衆皆行はれし事に由りて神を讃榮したればなり。二二 使徒釋されて其友に來り、凡そ司祭諸長老等の之に言ひし事を告げたり。二三 彼等之を聞きて心を一にして聲を揚げて、神に籲びて曰へり、主宰よ、爾は天地海及び其中の萬物を造りし神なり。二四 爾は聖神を以て、我が祖爾の僕ダヴィドの口に藉りて曰へり、異邦何爲れぞ騷ぎ諸民何爲れぞ徒に謀る、二六 地の諸王興り、諸侯相集りて、主を攻め、其ハリストスを攻む

さ。二七 蓋誠にイロド及びポンティイピラトは、異邦人及びイズライリ民と共に、此の
城に集りて、爾の聖なる子イイスス、爾に膏つけられし者を攻めたり、二八 爾の手及び
爾の旨の預め定めし事を行はん爲なり。二九 主よ、今も彼等の恐喝を鑒みて、爾の諸僕
に、毅然として、爾の言を言はしめ、三〇 爾の手を伸べて、爾の聖なる子イイススの名を
以て醫を施し、休徵奇蹟を行ひ給へ。三一 彼等の祈禱畢りて後、其集れる處震ひ動き、皆
聖神に滿てられて、侃侃として神の言を言へり。三二 信じたる衆民は心を一にし、靈を
一にし、一人も其所有を己の物と言はずして、共に諸物を公用せり。三三 使徒は大なる
能を以て、主イイススハリストスの復活を證せり、大なる恩寵は彼等衆人に在り。三四
彼等の中に一人も乏しき者なかりき、蓋凡そ地或は家を有てる者は之を售り、其售り
たる價を攜へて、三五 使徒の足下に置き、而して各人に、其需むる所に隨ひて、之を與へ
られたり。三六 斯くレヴィの族にして、キプルに生れしイオシヤ、使徒にワルナワ、譯すれ
ば勸慰の子と稱へられし者は、三七 田疇有りて、之を售り、其金を攜へて、使徒の足下に
置けり。

第五章　一然れども一人、アナニヤと名づくるもの、其妻サプフィラと偕に、產業を售り、二其妻も與り知りて、價の數分を藏し、數分を擔へて、使徒の足下に置けり。三ペトル曰へり、アナニヤ、何爲れぞサタナ爾の心に、聖神に僞りて、地の價の數分を藏す意を滿てたるや。四爾の有せし所は、爾に屬せしに非ずや、之を售りて得し所は、爾の權に在りしに非ずや、何ぞ此の事を心に懷きたる、爾は人に僞りしに非ず、乃神に僞りしなり。五アナニヤ此の言を聞きて、仆れて氣絶ぬたり、之を聞きし者大に懼れたり。六少者等起ちて、之を取り、舁き出して葬れり。七約三時の後、其妻も、來だ有りし事を知らずして、來れり。八ペトル彼に問ひて曰へり、我に告げよ、爾等此の價を以て地を售りしか。彼曰へり、然り、此の價なり。九ペトル彼に謂へり、爾等何爲れぞ共に謀りて、主の神を試みるや、視よ、爾の夫を葬りし者の足は門の前に在り、爾をも舁き出さん。一〇婦立に彼の足下に仆れて氣絶ぬたり。少者等入りて、其死したるを見、之を舁き出して、其夫の側に葬れり。一一全教會と凡そ之を聞きし者とは大に懼れたり。一二使徒の手に由りて、民間に多くの休徵と奇蹟とは行はれたり、衆皆心を一にしてソロモンの廊に在り。一三餘の者

は敢て彼等に附かざりき、然れども民は彼等を崇めたり。一四 男女の信ずる者、増多
く主に就き、一五 人病者を衢に舁き出して、床及び榻に置き、ペトルの過ぎて、其影の或
は之を蔭はんことを冀ふに至れり。一六 又衆くの人は、近傍の諸邑より、病める者及び
汚鬼を患ふる者を攜へて、イエルサリムに集れり、皆愈ゆるを得たり。一七 司祭長及び
凡そ彼と偕にする者、サドゥケイの異端の徒は、起ちて、嫉に満てられ、一八 其手を使徒に
措きて、之を公獄に下せり。一九 然れども主の使夜獄の門を啓き、彼等を引き出して曰
へり、二〇 往きて、殿に立ち、此の生命の言を悉く民に語れ。二一 彼等之を聞きて、早朝殿
に入りて教へたり。時に司祭長及び之と偕にする者、來りて、公會及びイズライリの諸
子の長老等を召し集め、獄に使して、使徒を將ゐ至らんことを命ぜり。二二 下吏往きて、
彼等を獄の中に見ざりき、乃反りて、告げて 二三 曰へり、我等は獄の固く閉され、守る
者の門の前に立てるを見たれども、之を啓けば、内に一人をも見ざりき。二四 司祭長、殿
の司、及び他の司祭諸長は、此の言を聞きて、此れ何ならんと異めり。二五 或來りて、彼
等に告げて曰へり、視よ、爾等が獄に下しゝ者は、殿に立ちて、民を教ふ。二六 其時殿の司

は下吏と偕に往きて、彼等を攝へ來れり、然れども強ふることを爲さず、民が石を以て擊たんことを懼れし故なり。二七攝へ來りて、彼等を公會の中に立てたり。司祭長彼等に問ひて曰へり、二八我等は爾等に、此の名を以て教ふることを、嚴しく禁ぜしに非ずや、然るに觀よ、爾等は其教をイエルサリムに滿たし、而して此の人の血を我等に歸せんと欲す。二九ペトル及び諸使徒對へて曰へり、神に從ふこと、人に從ふより宜しきなり。三〇我が先祖の神は爾等が木に懸けて殺したるイエスを復活せしめたり。三一神は其右の手を以て、彼を擧げて、主宰と救主とを爲し、イスライリに悔改と罪の赦とを與へん爲なり。三二我等は此の事の爲に證を爲す者なり、神が彼に從ふ者に與へし聖神も亦證を爲す。三三彼等之を聞きて、怒に勝へずして、使徒を殺さんと謀れり。三四然れども一のファリセイ人、名はがマリイル、教法師にして衆民に尊ばるる者は、公會の中に立ちて、使徒を暫く外に出だすを命じて、三五彼等に謂へり、イスライリ人よ、爾等此の人人に就きて、何を爲すべきかを自ら愼め。三六曩日テウダ起りて、自ら大なりとし、之に附きし者約四百人ありしが、彼は殺され、從ひし者は皆

散じて、有るなきに歸せり。三七其後登籍の時、ガリレヤ人イウダ起りて、多くの民を誘ひて、己に從はしめしが、彼も亡び、彼に從ひし者も皆散じたり。三八今我等に語ぐ、此の人人を舍きて、彼等を容せ、蓋此の謀、或は此の所爲、若し人に由らば、自ら毀れん、三九若し神に由らば、爾等之を毀る能はず、且恐らくは爾等神に敵する者と爲らん。四〇彼等は之に從へり、乃使徒を召して、之を扑ち、イエスの名を以て言ふことを禁じて、彼等を釋せり。四一彼等公會の前より出で、主イエスの名に因りて、辱を受くるに堪ふる者と爲りしを喜べり。四二日日殿に在り、又人の家に在りて、教を宣べ、イエスキリストの福音を傳へて已めざりき。

第六章

一當日門徒益加はりしに、「ヘレニスト」がエウレイ人に對して怨言せしことあり、彼等の寡が日日の施濟に於て輕んぜられし故なり。二十二の使徒は大數の門徒を招きて曰へり、我等神の言を舍きて、食卓の事を務むるは、宜しからず。三故に兄弟よ、爾等の中より、善き證を得、聖神と智慧とに滿てられたる者、七人を擇べ、我等之を立てゝ、此の事を司らしめ、四我等は專ら祈禱と傳教とを務めん。五此の言は衆民に悦

ばれて、遂に信ぜ聖神さに滿てられたる人ス
ン、パルメン、及びアンテオヒヤの進教者ニコ
ライを選びて、六之を使徒等の
彼等祈禱して、手を其上に按せたり。七神の
に增加し、司祭の中にも多く教に順ひし者あ
は、大なる奇蹟休徴を民間に行へり。九時に
レキサンドリヤ、キリキヤ、アシヤ人の諸會堂に屬する或人人起ちて、ステフ
せり、一〇然れども智慧と聖神さに滿てられたるステフ
時私に人に勸めて、言はしめて曰へり、我等は彼がモイセイ及び神を誘る言を
聞けり。一二是に於て民さ長老等さ學士等さを動かし、突に來りて、彼を執へ、公會に曳
き至り、一三詐妄の證者を立てゝ、言はしめて曰へり、此の人は此の聖なる所及び律法
を誘る言を語りて已めず。一四蓋我等は彼の言ふを聞けり、曰く、イエスナゾレイは
此の所を毀ち、モイセイが我等に授けし例を易へんと。一五公會中に坐せる者、皆彼
に目を注ぎて、其面を見るに、天使の面の如し。

第七章

一時に司祭長曰へり、果して此くの如きか。二彼曰へり、兄弟及び諸父よ、之を
聽け、光榮の神は我が祖アウラアムに、其未だハルランに徙らざる先に、メソポタミヤに
現れて、三彼に謂へり、爾の地を出で、爾の親族及び爾の父の家を離れて、我が爾に示さ
んとする地に往け。四其時彼はハルデヤの地より出でゝ、ハルランに居りたり、其父の死
せし後、神は彼を彼處より、爾等が今住める、此の地に徙せり。五然るに此には足を立つ
るばかりの地の嗣業だに彼に與へざりき、惟彼に、未だ子あらざりし時、此の地を業と
して、彼及び彼の裔に與へんことを約せり。六神は斯く謂へり、彼の裔は他の地に移住
民と爲り、彼處には之を奴隷と爲し、之を苦めて、四百年を歷ん。七神又曰へり、彼等を奴
隷とせん民は、我之を審判せん、厥後彼等は出でゝ、我に此の處に奉事せんと。八又彼に
割禮の約を與へたり。其後アウラアムはイサアクを生み、第八日に於て之に割禮を行
へり、イサアクはイアコフを生み、イアコフは十二の族祖を生めり。九族祖はイオシフ
を妬みて、之をエギペトに賣れり、然れども神は彼と偕に在りて、一〇彼を其悉くの患
難より拯ひ、彼にエギペトの王ファラオンの前に恩寵と智慧とを與へたり、王彼を立て

て、エギペト及び己が全家の宰と爲せり。一一 饑饉と大なる患難とはエギペト幷にハナアンの全地に及びて、我が先祖は糧を得ざりき。一二 イアコフはエギペトに穀物ありと聞きて、初めて我が先祖を彼に遣せり。一三 再遣しゝ時、イオシフは己を其兄弟に識らしめ、且イオシフの族はファラオンの知る所と爲れり。一四 イオシフ遣して、其父イアコフ及び其全族七十五人を迎へたり。一五 イアコフエギペトに下りて、己も我が先祖も終れり、一六 乃シヘムに攝へられて、アウラアムが、銀の價を以て、シヘムのエムモルの諸子より買ひたる墓に藏められたり。一七 神が誓ひて、アウラアムに許約せし期の近づくに隨ひ、民はエギペトに繁殖して、愈多くなり、一八 イオシフを識らざる他の王のエギペトに起るに遣べり。一九 彼は惡を我が族に謀りて、我が先祖を苦しめ、其嬰を棄てゝ、活かさざらんことを命ぜり。二〇 斯の時モイセイ生れて、神の前に美しかりき。三月間其父の家に育てられたり。二一 棄てらるゝに及びて、ファラオンの女彼を取り、養ひて己の子と爲せり。二二 モイセイは盡くエギペトの學術を教へられて、言と行とに能ありき。二三 彼年四十に至りて、其兄弟なるイズライリの諸子を顧み

んこする心起れり。二四 其中一人の虐げらるゝを見て、乞を保護し、屈せらるゝ者の爲に仇を報いて、エギペト人を殺せり。二五 意へらく、其兄弟は、神が救を與ふるを悟るならんと、然れども彼等は悟らざりき。二六 次の日彼等の相鬪へるを見て、和を勸めて曰へり、爾等は兄弟なるに、何ぞ互に不義を爲すやと。二七 然れども其鄰に不義を爲す者は彼を斥けて曰へり、誰か爾を立てゝ、我等の有司及び裁判官と爲し、たるや。二八 豈爾は昨日エギペト人を殺しゝ如く、我を殺さんと欲するか。二九 モイセイ此の言に因りて、奔りて、マディアムの地に移住し、彼處に在りて二人の子を生めり。三〇 四十年を越えて後、シナイ山の野に於て、主の使彼に燃ゆる棘の火焰に現れたり。三一 モイセイ見て、異象を奇み、之を審に視んと爲に近づける時、主の聲彼に在りて曰へり、三二 我は爾が列祖の神、アヴラアムの神、イサアクの神、イアコフの神なり。モイセイ戰慄ひ慄きて、敢て視ざりき。三三 主は彼に謂へり、爾の足の履を解け、蓋爾が立てる處は聖地なり。三四 我はエギペトに在る我が民の苦を見、其歎息を聞き、彼を救はん爲に降れり、今往け、我爾をエギペトに遣さん。三五 此のモイセイ、彼等が拒みて、誰か爾を立て

て、有司及び裁判官と爲したると、云ひし者は、神彼を、棘の中に現れたる天使の手を以て、有司及び救主として遣せり。三六 此の人は彼等を引き出し、奇蹟休徴をエギペトの地に、紅海に、及び野に、四十年間行へり。三七 此のモイセイは、卽イズライリの諸子に語げて、主爾等の神は、爾等の兄弟の中より、爾等に我の若き預言者を起さん、彼に聽けと、云ひし者なり。三八 此の人は、卽野の會に於て、シナイ山に彼に語りし天使、及び我等の先祖と偕に在りて、我等に授けん爲に活ける言を受けし者なり。三九 我等の先祖は彼に順ふを欲せざりき、乃彼を拒み、己の心をエギペトに轉じて、四〇 アアロンに謂へり、我等に先だちて行くべき諸神を我等の爲に造れ、蓋我等をエギペトの地より引き出しゝ此のモイセイに、何事のありしかを我等知らざるなり。四一 當日彼等は犢の像を造り、像に祭を獻じ、己が手の作の前に樂めり。四二 是に於て神は面を避けて彼等が天上の軍に事ふるに任せたり、諸預言者の書に錄されしが如し、云く、イズライリの家よ、爾等は四十年間野に於て犧牲と祭祀とを我に獻げしか。四三 爾等はモロフの幕、及び爾等の神レムファンの星、卽爾等が拜せん爲に造りし形を擧げたり、我爾等を

ワヲロンより遠く徙さんと。四四 我等の先祖には、野に於て證詞の幕ありき、モイヒイ
に語りし者が其見し所の式に遵ひて、之を造らん事を命ぜしが如し。四五 我等の先祖
はイイススと偕に之を奉じて、神が我等の先祖の面前より逐ひし異邦氏の領地に攜
へ入れり。此くの如くにしてダヲドの日に至れり。四六 彼は神の前に恩寵を獲てイア
コフの神の爲に居所を設けんことを願へり。四七 ソロモンは彼の爲に家を建てたり。
四八 然れども至上者は手にて造られたる殿に居らず、預言者の云ふ所の如し、四九 主
曰く、天は我の寶座、地は我の足の凳なり。爾等我が爲に何の家を建てんか、或は我が安
息の爲に何の所あらんか、五〇 我が手皆之を造りしに非ずやと。五一 強項にして、心と
耳とに割禮を受けざる者よ、爾等恒に聖神に逆ふ、爾等の先祖の若く、爾等も亦是くの
若し。五二 爾等の先祖は孰の預言者を窘逐せざりしか、彼等は義者の來るを預言せし
者を殺せり、爾等は今此の義者を解し且殺す者と爲れり。五三 爾等は、乃天使等の捧
持に由りて、律法を受けて、之を守らざりし者なり。五四 彼等此を聞きて、其心怒に勝
へず、切齒して彼に向へり。五五 時にステファン聖神に滿てられ、天を抑ぎて、神の光榮及

びイエスが神の右に立てゐを見て　五六曰へり、視よ、我天開けて、人の子が神の右に立てゐを見る。五七然れども彼等大なる聲を以て叫びて、耳を掩ひ、心を同じくして彼に攘し逼り、五八城の外に曳き出して、石を以て彼を撃てり。證者等己の衣を一の少年、サウルと名づくる者の足下に置き、五九石を以てステファンを撃てり。彼祈りて曰へり、主イエスよ、我が靈を接けよ、六〇乃膝を屈め、大なる聲を以て呼びて曰へり、主よ、是の罪を彼等に歸する勿れ。此を言ひて瞑れり。

第八章

一サウルは彼の殺されしことを可とせり。當日大なる窘逐はエルサリムに在る教會に及び、使徒の外は皆イウデヤとサマリヤとの各地に散じたり。二敬虔なる人人ステファンを葬り、之が爲に大なる痛哭を爲せり。三サウルは教會を殘害し、家家に入り、男女を曳きて、獄に付せり。四時に散じたる者は徧く行きて、言を福音せり。五フィリップはサマリヤの邑に下りて、彼等にハリストスを傳へたり。六民はフィリップが行ひし休徴を聞き且見て、心を一にして謹みて其言ふ所を聽けり。七蓋汚鬼は大なる聲を以て叫びて、之に憑らるゝ多くの者より出で、亦多くの癱瘋及び跛の者は愈されたり。

八 其邑の中に大なる喜ありき。九 爰に一人、シモンと名づくる者あり、素邑に於て魔術を行ひ、サマリヤの民を駭かし、己を大なる者と爲せり。一〇 小より大に至るまで、皆謹みて彼に聽きて曰ふ「此の人は神の大なる能なり。」一一 謹みて彼に聽きしは、其久しく魔術を以て彼等を駭かしゝ故なり。一二 然れども彼等は神の國及びイエスキリストの名の事を福音するフィリプに信ずるに及びて、男女共に洗を受けたり。一三 シモン自も亦信じて、洗を受け、常にフィリプに偕に在りて、行はれたる大なる異能と休徴とを見て駭けり。一四 イエルサリムに在る使徒は、サマリヤが神の言を受けたりと聞きて、ペトル及びイオアンを彼等に遣せり。一五 二人下りて彼等が聖神を受けん爲に祈れり。一六 蓋聖神は未だ彼等の一人にも降らざりき、彼等は第主イエスの名に因りて洗を受けしのみ。一七 其時使徒彼等に手を按せたれば、聖神を受けたり。一八 シモンは、使徒の手の按するに因りて、聖神の授けらるゝを見て、之に金を擲へ至りて一九 曰へり「我にも此の權を與へよ、我が手を按せんとする者の、聖神を受けん爲なり。」二〇 然れどもペトル彼に謂へり「爾の錢は爾と偕に亡ぶべし、蓋爾は金を以て

神の賜を獲んと意へり。二一 爾には此の事に於て分なく關なし、蓋爾の心は神の前に正からず。二二 故に此の爾の惡を悔改めて、神に禱れ、或は爾が心の念は爾に赦されん。二三 蓋我爾が苦き膽に在り、及び不義の繫に在るを見る。二四 シモン答へて曰へり、爾等我の爲に主に禱りて、爾等が言ひしこさの我に及ぶなからしめよ。二五 彼等主の言を證し、且宣たり。二六 主の使フィリプに告げて曰へり、起て、イエルサリムに返り、途にサマリヤの多くの村に福音を傳へ下る路に適け、其路は野なり。二七 彼起ちて往けり、視よ、エフィオピヤの人、エフィオピヤの女王カンダキヤの寺人にして大臣、其悉くの財寶を司る者は禮拜の爲にイエルサリムに來りて、二八 今に返り、其車に乘りて、預言者イサイヤを讀めり。二九 神フィリプに謂へり、前みて、此の車に就け。三〇 フィリプ趨り就きて、彼がイサイヤを讀むを聞きて曰へり、爾讀む所を曉るか。三一 彼曰へり、若し我を導く者なくば、我焉ぞ曉ることを得ん、乃フィリプに升りて共に坐せんことを請へり。三二 其讀める聖書の文は左の如し、彼は羊の如く屠られん爲に牽かれたり、羔が其毛を剪る者の前に在りて聲なきが如く、彼は

此くの若く其口を啓かず。三三 其卑賤に居る時、彼に於ける裁判は行はれたり。然れど も其來歷は孰か能く之を解かん蓋彼の生命は地より取らるさ。 へり、請ひ問ふ、預言者の此を言ふは誰を指すか、己を指すか、抑他人を指すか。三四 寺人フィリプニ謂 プ其口を啓き、此の書より始めて、彼にイエスを福音せり。三六 路を行く時、彼等は水 の有る處に來れり、寺人曰へり、視よ、水あり、我が洗を受くるに何の礙あるか。三七 フィリ プ彼に謂へり、全き心を以て信ぜば、可なり。彼答へて曰へり、我イエスハリスト ス が神の子たるを信ず。三八 乃命じて、車を止めしめ、フィリプと寺人と共に水に下 り、フィリプは彼に洗を授けたり。三九 彼等が水より上りし時、聖神はフィリプを攫 げて去りき、寺人復之を見ざりき、乃喜びて其路を行けり。四〇 フィリプはアゾトに見れ、諸邑を經て、福音を宣べ、ケサリヤに至るに及べり。

第九章

一 サウルはダマスクの諸會堂に寄する書を求めて、イエルサリムに曳かんが爲なり。二 彼往きて、ダマスクに近づける時候

天より光ありて、彼を環り照せり。四彼地に仆れて、彼に言ふ聲を聞けり、曰く、サウル、サウル、何ぞ我を窘逐するや。五彼曰へり、主よ、爾は誰たる。主曰へり、我は爾が窘逐するイエスなり。爾刺を蹈むは難し。六彼戰き懼れて曰へり、主よ、我が何を爲んことを欲するか。主彼に謂へり、起ちて城に入れ、爾が行ふべき事を爾に告げられん。七彼と偕に行ける人人驚きて立ち、聲を聞きて、誰をも見ざりき。八サウル地より起きて、目啓きたれども、見る所なかりき。彼等其手を援きて、ダマスクに入れたり。九彼は三日の間見ることなく、亦食ひ飲むことなかりき。一〇ダマスクに一人の門徒、アナニヤと名づくる者あり、主は異象の中に彼に謂へり、アナニヤ、彼曰へり、主よ、我此に在り。一一主彼に謂へり、起ちて直と名づくる街に往き、イウダの家に、タルスの人、名はサウルと云ふ者を訪へ、彼今禱る、一二而して異象の中に、アナニヤと名づくる人、入りて、見るを得しめん爲に、彼に手を按するを見たり。一三アナニヤ對へて曰へり、主よ、我此の人の事を聞きしに、彼はイエルサリムに於て爾の聖徒に害を加へしこと如何ばかりぞ、一四此に於ても、彼は凡そ爾の名を繋ぶ者を縛らん爲に司祭諸長より得

たる權を有てり。一五 然れども主は彼に謂へり、往け、蓋斯の人は我が選びたる器にし
て、我の名を異邦民と、諸王と、イズライリの諸子との前に播かんとする者なり。一六 我
は彼に、其我が名の爲に、如何ばかりか苦を受くべきを示さん。一七 アナニヤ往きて、家
に入り、手を彼に按せて曰へり、兄弟サウルよ、爾が來れる途に爾に現れたる主イイス
スは我を遣せり、爾が見るを得、且聖神に滿てられん爲なり。一八 忽彼の目より鱗の
如き者脫ちて、彼直に見るを得、乃起ちて洗を受け、一九 既に食して、力を獲たり。サウ
ル數日門徒と偕にダマスクに在り、二〇 直に諸會堂に於て、イイススを擧げて、其神
の子たるを宣べたり。二一 聞く者皆駭きて曰へり、此の人は、イエルサリムに於て、斯の
名を籲ぶ者を殘害せしに非ずや、且此に來りしも、彼等を縛りて、司祭諸長に曳かん爲
に非ずや。二二 然れどもサウル益堅固にして、此は卽ハリストスなりと證して、ダ
マスクに居るイウデヤ人を辯折せり。二三 日を歷ること久しくして、イウデヤ人彼を
殺さんと謀れり。二四 此の謀はサウルに知られたり。彼等晝夜邑の門に伺ひて、彼を殺
さんとせしに、二五 門徒夜彼を取り、筐を以て牆より縋り下せり。二六 サウルはイエル

サリュムに來り、勉めて門徒に交を納れんとしたれども、皆其門徒たるを懼れたり。二七 ヨルナヲ彼を援きて、使徒に擧へ至り、彼等に其如何に途中に主を見し事、及び主が彼に言ひし事、又如何に彼がダマスクに於て毅然として、イエスの名を傳へし事を述べたり。二八 彼はイエルサリュムに在りて、彼等と偕に出入し、毅然として主イエスの名に由りて、教を宣べたり。二九 又「エリニスト」と語り、及び辯論せり、彼等は之を殺さんと圖れり。三〇 兄弟此の事を知りて、タルスに送りて、彼を遣したり。三一 當時全イウデヤ、ガリレヤ、サマリヤの諸教會平安にして成立し、主を畏れ、聖神の慰を得て、數愈增せり。三二 ペトル徧く諸方を行きて、リダに居る聖徒にも詣りしに、三三 彼處に於て彼は一人、名はエネイ、癱瘋を患ひて八年間床に臥せる者に遇へり。三四 ペトル彼に謂へり、エネイよ、イエスキリストス閑を愈す、起きて爾の床を治めよ、彼直に起きたり。三五 リダ及びサロンに居る者は、皆彼を見て、主に歸せり。三六 イオッピヤに一の女徒、名はタビタ、譯すれば鹿と云ふ者あり、彼は善事を行ひ、施濟を爲せり。三七 適〻其日に病みて死せり。彼を洗ひて、樓に置きた

り。三八 ヨッパはリッダに近きに因り、門徒はペトル彼處に在りと聞きて、二人を彼に遣して、其遅はらずして我等に來らんことを求めたり。三九 ペトル起ちて、之と偕に往けり、至るに及びて、彼を引きて樓に登らせ、寡婦皆哭きて、彼の側に立ちたる上衣下衣を示せり。四〇 ペトル彼等を悉く外に出し、膝を屈めて禱れり、而して屍に向ひて曰へり、タヴィタ起きよ。彼其目を啓き、ペトルを見て坐せり。四一 ペトル之に手を授けて、之を起し、聖徒及び寡婦を召して、之を活けて前に立てたり。四二 此の事全イオッピヤに知る所と爲りて、多くの者主を信ぜり。四三 ペトルシモンの家に留りて、數日久しくイオッピヤに居たり。

第十章

一 ケサリヤに或人、名はコルニリイ、イタリヤ隊と稱ふる隊の百夫長、二 敬虔にして、其全家と偕に神を畏れ、民に多くの施濟を爲し、恒に神に禱れる者あり。三 日の約第九時に、彼は異象の中に明に神の使を見たり、彼に入りて曰へり、コルニリイよ。四 彼は之に目を注ぎて、懼れて曰へり、主よ、何事ぞ。彼に謂へり、爾の祈禱と爾の施濟とは升りて、神の前に記念せられたり。五 今人をイオッピヤに遣して、シモン、稱してペトル

と云ふ者を呼べ。六彼は或る皮工シモンに寓れり、其家は海濱に在り、彼は爾及び爾の
全家に救を得しむべき言を爾に語らん。七コルニリイに語れる天使の去りし後、彼は
其僕二人、及び彼に侍する兵卒の一人の敬虔なる者を召して、八盡く之を告げて、彼
等をイオピヤに遣せり。九明日彼等行きて、城に近づける時、ペトル屋上に升りて禱れ
り。時約六時なり。一〇飢を覺ねて、彼食はんと欲せり。人の之を具ふる時、彼の神象外に
遊べり。一一彼は天開けて、一の器の其前に降るを見る、大なる布の如し、四角を繫ぎて、
地に縋り下さる、一二其中に凡そ地の四足の牲畜、野獸、昆蟲、及び天空の鳥あり。一三且
聲ありて、彼に謂ふ、ペトルよ、起ちて、屠りて食へ。一四然れどもペトル曰へり、主よ、然ら
ず、蓋我未だ曾て穢らはしき物、或は潔からざる物を食はざりき。一五聲再彼に謂ふ、
神の潔めたる者は、爾穢らはしと爲す勿れ。一六三次是くの如くして、器復天に上げ
られたり。一七ペトル見し所の異象は何の意ぞと自ら異める時、視よ、コルニリイより
遣されたる人人、シモンの家を尋ね得て、其門の前に立ち、一八呼びて問へり、シモン、稱
してペトルと云ふ者は、此に寓れるか。一九ペトル尙異象の事を思ひ居りしに、聖神彼

に謂へり、視よ、三人爾を尋ぬ、二〇起ちて下り、毫も疑はずして、彼等と與に往け、蓋我彼等を遣せり、二一ペトルはコルニリイより彼に遣されし人人に下り就きて曰へり、視よ、我は爾等が尋ぬる者なり、爾等何の故ありて來りしか。二二彼等曰へり、百夫長コルニリイ、義にして神を畏れ、全イウデヤ民に證せらるゝ者は聖なる天使より、爾を其家に招きて、爾の言を聽かんことの示を受けたり。二三ペトル彼等を延きて館らし、其翌日起ちて、彼等と偕に往き、イオピヤの兄弟數人も之と偕に行けり。二四次の日彼等ケサリヤに入りたるに、コルニリイは已に其親族と親友とを集めて、彼等を候てり、二五ペトルの入る時、コルニリイ彼を迎へて、其足下に伏して拜せり。二六ペトル彼を起して曰へり、起て、我も人なり。二七乃彼と與に語りて入り、多くの集れる者を見て、二八彼等に謂へり、イウデヤ人が異邦人と交り、或は近づくことの法に合はざるは、爾等の知る所なり、然れども神は我に、何人をも穢らはしき者、或は潔からざる者と、云ふべからざるを示せり。二九故に我招かれて、辭せずして來れり。今問ふ、爾等の我を招きしは何の爲ぞ。三〇コルニリイ曰へり、四日前に我齋して此の時に至り、第九時に我

が家に禱りしに、忽光れる衣を衣たる人我が前に立ちて三一曰へり、コルニリイよ、
爾の祈禱は聞かれ、爾の施濟は神の前に記念せられたり、三二故にイオピヤに人を遣
して、シモン、稱してペトルと云ふ者を呼べ、彼は皮工シモンの家に海濱に寓れり、彼
來りて、爾に語らんと。三三故に我直に爾に遣せり、爾の來れるは善し。今我等皆神の前
に立つ、凡そ神より爾に命ぜられん事を聞かん爲なり。三四ペトル口を啓きて曰へり、
今我誠に知れり、神は貌を以て人を取らず、三五即凡の民の中に、彼を畏れて義
を行ふ者は、彼に納れらるゝを。三六彼はイズライリの諸子に言を遣して、和平を福音
せり、イイススハリストスに因りてなり、是れ萬有の主なり。三七イオアンの傳へし洗
禮の後に、ガリレヤより始まりて、全イウデヤに行はれし事は、爾等之を知る、三八即
ナザレトより出でたるイイススは、如何に神より聖神と能力とを以て膏つけられ、徧
く行りて善事を行ひ、凡そ惡魔に制せらるゝ者を醫しゝ事なり、蓋神は彼と偕に在り
き。三九我等は、其凡そイウデヤの地及びイエルサリムに行ひし事、又彼等が之を木に
懸けて殺しゝ事を證する者なり。四〇神は彼を第三日に復活せしめ、彼をして四一衆

民に非ず、爾神が預め選びし證者たる我等、其死より復活せし後彼と偕に食飲せし
者に、現れしめたり。四二 彼は我等に命じて、人人に教を傳へ、又彼が神より定められし
生者死者の審判者たるを證せしむ。四三 彼の事に就きて、悉くの預言者は、凡そ彼を信
ずる者が、其名に因りて罪の赦を得んことを證す。四四 ペトルの尚此を語れる時、聖神
は凡そ言を聽く者に降れり。四五 ペトルと偕に來りし割禮を受けたる信者は、聖神の
賜の異邦人等にも注がれし事を駭けり。四六 蓋彼等が方言を言ひ、神を讃美するを
聞けり。其時ペトル曰へり、四七 我等の如く聖神を受けたる者には、孰か能く水を以て
洗を受くるを禁ぜん。四八 乃彼等にイイススハリストスの名に因りて洗を受くる
を命ぜり。其後彼等はペトルに數日間留らんことを請へり。

第十一章

一 イウデヤに在る使徒及び兄弟は、異邦人等も神の言を受けたりと聞け
り。二 ペトルがイエルサリムに上りし時、割禮を受けたる者彼を詰りて三曰へり、爾は
割禮を受けざる者の中に入りて、彼等と偕に食へり。四 ペトル始より次第に彼等に述
べて曰へり、五 我イオピヤの邑に祈禱せし時、神象外に遊びて、異象を見たり、一の器、

大なる布の如く、四角を縋りて、天より下り、我が前に至れり。六我目を注ぎて、其中を視
るに、地の四足の牲畜、野獸、昆蟲、及び天空の鳥あるを見たり。七且我に言ふ聲を聞け
り、ペトルよ、起ちて、屠りて食へ。八我曰へり、主よ、然らず、蓋穢らはしき物、或は潔から
ざる者は、未だ曾て我が口に入らざりき。九聲再天より我に答へて曰へり、神の潔め
たる者は、爾穢らはしと爲す勿れ。一〇三次是くの如くして、皆復天に上げられたり。一
一適〳〵ケサリヤより我に遣されし三人、我が在りし家の前に立てり。一二聖神我に、毫
も疑はずして、彼等と偕に往くべき事を言へり。此の六人の兄弟も我と偕に往きて、我
等其人の家に入りたり。一三彼我等に告げて云へり、曾て天使の其家に立ちて、彼に言
へるを見たり、曰く、人をイオッピヤに遣して、シモン、稱してペトルと云ふ者を呼べ、一四
彼は爾及び爾の全家に救を得しむべき言を爾に語らんと。一五我が語り始めし時、聖
神彼等に降れり、初に我等にも降りしが如し。一六其時我主の言ひし言を憶ひ起せり、
云く、イオアンは水を以て洗を授けたり、爾等は聖神に由りて洗を受けんと。一七故に
若し神は、我等主イイススハリストスを信じたる者に與へし所に等しき賜を、彼等に

も與へしならば、我何人ぞ、能く神を阻まん。一八 彼等之を聞きて、對ふる所なく、神を讃
榮して曰へり、然らば神は異邦人にも悔改を與へて、生命を得しむるなり。一九 ステファ
ンの時に起りし窘逐に因りて散じたる者は、往きて、フィニキヤ、キプル、アンティオヒヤに
まで至りしが、イウデヤ人の外何人にも言を傳へざりき。二〇 然れども彼等の中にキ
プル及びキリ子ヤの人人あり、アンティオヒヤに入りて、主イイススを福音して、ヱリン
人に傳へたり。二一 主の手彼等と偕に在り、多數の人信じて主に歸せり。二二 此の事の
聲聞イエルサリムに在る教會の耳に及びたれば、ワルナワを遣して、アンティオヒヤに
至らしめたり。二三 彼來りて、神の恩寵を見て喜び、且衆人に、心を堅くして、主に從ふこ
とを勸めたり。二四 蓋彼は善人にして、聖神と信とに滿てられたる者なり。是に於て許
多の民は主に就けり。二五 其後ワルナワはタルスに往きて、サウルを尋ね、之に遇ひて、
アンティオヒヤに攜へ至れり。二六 彼等一年間教會に集りて、許多の民を訓へたり。門徒
が「ハリズティアニン」と稱せらるゝこと、アンティオヒヤより始まれり。二七 當日預言者數
人イエルサリムよりアンティオヒヤに下れり。二八 其一人、アガフと名づくる者、起ちて、

聖神に藉りて、普天下に大なる饑饉あらんとするを示せり、クラウヂイケサリの時に
果して之ありき。二九 其時門徒各其有てる所に隨ひて、イウデヤに居る兄弟に扶助
を餽らんことを定めたり。三〇 遂に之を行ひて、ワルナワ及びサウルの手に託して、長
老等に寄せたり。

第十二章

一 其時イロド王手を擧げて、教會の中の數人に害を加へ、二 劍を以てイオ
アンの兄弟イアコフを殺せり。三 イウデヤ人の之を喜ぶを見て、次ぎて又ペトルを
執へたり、時に除酵節の日なり。四 既に執へて彼を獄に下し、班毎に四人の兵卒四班に
彼を守るを命じて、逾越節の後に彼を民の前に曳き出さんと欲せり。五 是を以てペト
ルは獄に守られ、教會は彼の爲に熱切なる祈禱を神に獻じたり。六 イロドが彼を曳き
出さんと欲せし時、其夜ペトル二の鐵索に繋がれて、二人の兵卒の間に寢ね、守る者
は門の前に在りて、獄を守れり。七 視よ、主の天使前に立ち、光は獄室に輝けり。彼ペトル
の脅を衝きて、之を醒まして曰へり、速に起きよ。鐵索は其手より脱ちたり。八 天使彼
に謂へり、帶を束ねて、履を著けよ。彼斯く行へり。又彼に謂ふ、爾の袍を身に纏ひて、我に

從へ。九ペトル出でゝ之に從ひしが、天使の爲す所の眞なるを知らずして、異象を見る
と意へり。一〇守る者の第一所及び第二所を過ぎて、彼等城に入る所の鐵の門に來り
しに、門自ら彼等の爲に啓けたり、出でゝ、一の衢を過ぎたるに、天使忽ち彼より離れ
たり。一一ペトル悟りて曰へり、今我誠に主が、其使を遣して、我をイロドの手、及び凡
そイウデヤ民の望める所より、拯ひしを知れり。一二乃回顧して、イオアン、稱してマ
ルコと云ふ者の母なるマリヤの家に來れり。彼處には多くの者集りて祈禱せり。一三
ペトル外門を叩く時、婢ロダと名づくる者就きて、之を聽き、一四ペトルの聲を識り
て、喜に因りて、門を啓かず、乃趨り入りて、ペトルが門の前に立てることを告げた
り。一五彼等は之に謂へり、爾狂へるか、女斯くありと言ひ張りたれば、彼等曰へり、是
れ即彼の天使なり。一六ペトル猶叩きて息めず。彼等啓きし時、彼を見て駭けり。一七
ペトル手を搖かして、言ふこと勿らしめて、彼等に主が如何に彼を獄より引き出しゝ
を述べたり、又曰へり、此の事をイアコフ及び兄弟に報ぜよ。遂に出でゝ、他の處に往け
り。一八旦に及びて、ペトルは如何に成りしかと、兵卒の中に騷擾少からざりき。一九イ

ロド彼を尋ねたれども、獲ざれば、守る者を糺して、之を死に處せんことを命ぜり。厥後
イウデヤを離れ、クサリヤに往きて居りき。二〇 イロド甚しくディル及びシドンの民
を怒りたれば、彼等は心を合せて之に就き、王の内室の臣ウラストの親を得て、和を乞
へり、蓋彼等の地は王の國より糧を得たり。二一 定めたる日に於て、イロドは王の衣を
衣、其位に坐し、彼等に向ひて語れり、二二 民呼びて曰へり、此れ神の聲なり人の聲に
非ず。二三 忽主の使彼を撃てり、光榮を神に歸せざりし故なり、彼蟲に噬まれて氣
絶ねたり。二四 時に神の言は増長じて廣まれり。二五 ワルナワ及びサウルは其任
務を卒へて、イオアン、稱してマルコと云ふ者を攜へて、イエルサリムよりアンディオヒ
ヤに返れり。

第十三章

一 アンディオヒヤに在る教會に數人の預言者及び教師あり、即ワルナワ、
シメオン、稱してニゲルと云ふ者、キリネヤの人ルキイ、分封の君イロドと偕に養はれ
しマナイル、及びサウルなり。二 彼等が主に奉事して、禁食する時、聖神曰へり、我が爲に
ワルナワ及びサウルを別ちて、我が彼等を召して任ぜしむる職を行はしめよ。三 是に

於て禁食祈禱し、手を其上に按せて、彼等を往かしめたり。四斯くて、セレウキヤに下り、彼處よりキプルに航れり、五サラミンに在りて、イウデヤの諸會堂に神の言を傳へたり、イオアンは其役者たりき。六彼等島を經て、パフに至り、一人の魔術者にして、僞預言者なるイウデヤ人、名はバルイイススに遇へり、七彼は方伯セルギイパウロと云ふ智なる人と偕に在り。方伯はバルナバ及びサウルを召して、神の言を聽かんことを望めり。八然れども魔術者なり（蓋此の名を譯すれば魔術者なり）彼等に敵して、方伯を信ぜざらしめんと欲せり。九サウル又の名はパウロ、聖神に滿てられて、彼に目を注ぎて、一〇曰へり、噫凡の譎詐と奸惡とを盡つる者、惡魔の子、凡の義の敵よ、爾は主の直き道を枉けて已めざらんか。一一今視よ、主の手爾に在り、爾瞽となりて、暫く日を見ざらん。忽其目曚み暗みて、彼旋りて、相者を尋れたり。一二其時方伯行はれし所を見て、主の教を奇として信ぜり。一三パウロ及び之と偕にせし者はパフより舟行して、パムフィリヤのペルギヤに至り、イオアンは彼等に別れて、イエルサリムに歸れり。一四彼等ペルギヤを經て、ピシヂヤのアンテオヒヤに來り、安息の日に會堂に入

りて坐せり。一五 律法と諸預言者とを讀みて後、會堂の宰等使して彼等に謂へり、兄弟よ、若し爾等に民に勸むる言あらば言へ。一六 パウロ起ちて、手を揺がして曰へり、イスライリの人人及び神を畏るゝ者よ、之を聽け。一七 此の民の神は我が先祖を選びて、民を其エギペトの地に居る時に高うし、又手を擧げて、彼等を彼處より引き出し、一八 約四十年間彼等を野に養ひ、一九 カナアンの地に於て七の民を滅し、其地を分ちて、彼等に嗣業を與へて、二〇 後約四百五十年間彼等に審官を與へて、預言者サムイルに至れり。二一 厥後彼等王を求めたれば、神は彼等にベニヤミンの支派のキスの子サウル、四十年を歷たり。二二 既に彼を廢し、ダヰドを興して、彼等の王と爲し、且彼が旨を行はんと。二三 此の人の裔より、神は其許約に遵ひて、イスライリの爲に救主イエスを興せり。二四 其來らんとする時、イオアンはイスライリの全民に悔改の洗禮を傳へたり。二五 イオアン其職を卒ふるに臨みて曰へり、爾等我を誰なりと意ふか、我は彼に非ず、然れども視よ、我に後れて來る者あり、我其足の履を解くにも堪へずと。二

六 兄弟よ、アブラハムの族の諸子、及び爾等の中に神を畏る〻者よ、此の
に遣されたり。二七 蓋イエルサリムに居る者、及び其有司等は、彼を
罪に定めて、安息日毎に讀む所の預言者の言を應はせ、二八 一も死に
て、ピラトに彼を殺さんことを求めたり。二九 一切彼を指して錄されし事を本へて後、
彼を木より下して、墓に置けり。三〇 然れども神は彼を死より復活せ
は多日の間、彼と偕にガリレヤよりイエルサリムに上りし者に現れたり、彼等は今民
の前に彼を證する者なり。三二 我等も爾等に福音して云ふ、我が先祖に
は、神之をイエスを復活せしめたり。三三 第二
の聖詠にも錄されしが如し、云く、爾は我の子、我今日爾を生めりと。三四 又彼を死より
復活せしめて、朽壞に歸せざらしめんとする事に至りては、嘗く曰へり、我ダヰドに約
せし神聖にして信實なる惠を爾等に與へんと。三五 故に他の章にも云ふ、爾の聖者に
朽つるを見ざらしめんと。三六 蓋ダヰドは其世代中神の旨に役事して後歿り、其先
祖と偕に置かれて、朽つるを見たり。三七 然れども神の復活せしめし者は、朽つるを見

ざりき。三八 故に兄弟よ、爾等知るべし、彼に由よりて罪の赦は爾等に傳へられ、三九 且爾等が、凡そモイセイの律法に由りて義さるゝを得ざりし事は、凡の信ずる者彼に由りて義さるゝなり。四〇 然らば愼みて、諸預言者の言ひし事の爾等に臨むを免れよ、四一 曰く、嘲る者よ、視て駭き、且亡びよ、蓋我爾等の日に於て一の事を行ふ、人之を信ぜざらんさ。四二 彼等がイウデヤの會堂より出づる時、異邦人爾等に告ぐさも、爾等此等の言を語らんことを求めたり。四三 會既に散じて、衆くのイウデヤ人及び敬虔なる進教者はパウルさバルナバさに從へり、二使徒彼等に語りて、恒に神の恩寵に居らんことを勸めたり。四四 次の安息日に、邑の人擧ざ皆神の言を聽かん爲に集れり。四五 然れざもイウデヤ人はパウルさ見て、嫉に滿てられ、逆らひ且詬りて、パウルの言ふ所を拒めり。四六 其時パウルさバルナバ毅然さして曰へり、神の言は先づ爾等に傳へらるべし、然れざも爾等之を棄てゝ、自ら己を永遠の生命に當らさる者さ爲すに由りて、視よ、我等は轉じて、異邦人に向ふ。四七 蓋主は是くの如く我等に命ぜり、云く、我爾を立てゝ異邦人の光さ爲せり、爾が救さ爲りて、地の極に至らん爲な

りと。四八 異邦人此を聞きて喜び、主の言を讃美し、永遠の生命に定められし者は皆信
じたり。四九 是に於て主の言は、徧く是の地に廣まれり。五〇 然れども イウデヤ人は敬
虔なる貴き婦及び邑の尊者を唆して、パヱルとヲルナヲとを窘逐し、之を其境より逐
ひ出せり。五一 二人彼等に對して其足の塵を拂ひ、去りてイコニヤに來れり。五二 時に
門徒は喜と聖神とに滿てられたり。

第十四章

一 彼等イコニヤに於て共にイウデヤの會堂に入り、教を宣べて、イウデヤ
人及びヱリン人の大衆を信ぜしむるに至れり。二 然れども信ぜざるイウデヤ人は
異邦人の心を動かして、兄弟を惡ましめたり。三 彼等は日久しく彼處に留り、主に賴り
て毅然として教を傳へ、主は其恩寵の言を證して、彼等の手を以て休徵と奇蹟とを
行へり。四 時に邑の民分れて、或者はイウデヤ人に與し、或者は使徒に與せり。五 異邦人
及びイウデヤ人は、其有司等と與に、彼等を辱しめ、石を以て擊たんとして擁し集る時、
六 彼等此を知りて、リカチニヤの邑リストラデルヱヤ及び其近傍に逃れ、七 彼處に於
て福音を傳へたり。八 リストラに一の足弱き者坐せり、母の胎より跛にして、未だ曾

て歩まざりき。九彼はパヱルの語るを聽きしが、パヱル彼に目を注ぎて、其愈さるべき
信あるを見て、一〇大なる聲を以て曰へり、主イイススハリストスの名に因りて爾に
言ふ、爾の足にて正しく立て、彼忽躍り、起ちて歩めり。一一民はパヱルの行ひし事を
見て、聲を揚げて、リカヲニヤの言を以て曰へり、諸神は人の形に藉りて、我等は降れり。
一二乃ワルナワを稱してヲイと爲し、パヱルをエルミイと爲せり、彼言に長じたれ
ばなり。一三其邑の前に在るヲイの廟の祭司は、牛を牽き、花冠を攜へて、門に至り、民
と偕に彼等に祭を獻げんと欲せり。一四使徒ワルナワ及びパヱル之を聞きて、己の衣
を裂き、躍りて民の中に入り、呼びて曰へり、一五人人よ、何ぞ此を行ふ、我等も爾等と同
情の人なり、今爾等に福音するは、爾等をして此の虛しき者より活ける神に轉ぜしめ
ん爲なり、卽天地海及び其中の萬物を造りし神、一六過ぎし世には、諸民に各其道
を行くを容したれども、一七己を證するを已めずして、諸恩を施し、我等に天より雨
を降し、豐作の時を與へ、糧と樂とを以て我等の心を盈たしめし神なり。一八此を言
ひて、漸く民を止め、彼等に祭を獻げずして、各其家に歸らしめたり。彼等此に在りて

教を傳へたり。一九 適イウデヤの數人アンティオヒヤ及びイコニヤより來り、使徒が
殺然として教を宣ぶる時、民に彼等を離れんことを勸めて曰へり、彼等が言ふ所は一
も實なし、皆誑なり、乃民を唆して、石を以てパワルを擊たしめ、其已に死せりと
意ひて、邑の外に曳き出せり。二〇 然れども門徒の彼を環りて立てる時、彼起きて、邑に
入り、明日ワルナワと偕にデルワヤに往けり。二一 二使徒是の邑に福音を傳へて、多く
の門徒を獲て、復リストラ、イコニヤ、アンティオヒヤに返りて、二二 門徒の靈を堅め、恒
に信に居らんことを勸め、且我等が多くの艱難を歷て、神の國に入るべきことを教へ
たり。二三 又彼等の爲に教會毎に長老を按手し、禁食祈禱して、彼等を其信ぜし所
の主に託せり。二四 既にピシヂヤを經て、パムフィリヤに來り、二五 主の言をペルギヤに
傳へて、アタリヤに下り、二六 彼處より海に航して、アンティオヒヤに往けり、卽彼等が、
今終へし職を行はん爲に、曾て神の恩誼に託せられし所なり。二七 至るに及び、教會を
集めて、凡そ神が彼等を用つて行ひし事、若何にして異邦人の爲に信の門を開きし事
を告げたり。二八 後彼等は門徒と偕に彼處に久しく居たり。

第十五章

一 或人人イウデヤより下りて、兄弟に教へて曰へり、若しモイセイの例に
依りて割禮を受けずば、救はるゝを得ず。二 パヱル及びワルナワが彼等と大に爭ひ、且
辯論せし時、衆兄弟はパヱルワルナワ及び彼等の中の他の數人が、此の疑問の爲に、
イエルサリムに上りて、諸使徒と長老等とに遇はんことを定めたり。三 故に彼等は
教會に送られて、フイニキヤ及びサマリヤを經、異邦人の歸正の事を述べて、衆兄弟
を大に喜ばしめたり。四 イエルサリムに至るに及びて、彼等は教會、諸使徒、長老等
に接けられて、凡そ神が彼等を用つて行ひし事、若何にして異邦人の爲に信の門を開
きし事を告げたり。五 時にファリセイの宗派の信ぜし者數人起ちて曰へり、彼等に割禮
を行ひ、モイセイの律法を守るを命ずべし。六 諸使徒及び長老等は此の事を議らん
爲に集れり。七 辯論既に久しくして、ペトル起ちて、彼等に謂へり、兄弟よ、爾等此を知る、
神は初の日より我等の中に於て我を選べり、異邦人に、我が口より福音の言を聞きて、
信ぜしめん爲なり。八 且人の心を識る神は、彼等に證を作して、聖神を彼等に與へたり、
我等にも與へしが如し、九 又我等と彼等との間に一も別を立てずして、信を以て彼等

の心を潔めたり。一〇今爾等は何ぞ神を試みて、我が先祖も我等も負ふ能はざりし軛
を、門徒の頸に置かんと欲する。一一然れども我等は、主イイススハリストスの恩寵に
頼りて、救を獲んこと、彼等の如くなるを信ず。一二時に會衆皆默然たり、而してワル
ナワ及びパワルが、神の彼等を以て異邦人の中に、若何なる休徴と奇蹟とを行ひし事
を述ぶるを聽けり。一三彼等が言ひ畢りし後、イアコフ應へて曰へり、兄弟よ、我に聽け、
一四シモンは已に神が初めて異邦民を眷みて、其中より己の名を奉ずる民を取りし
ことを述べたり。一五諸預言者の言も此と合へり、一六錄して云へるが如し、是の後我
轉じて、壞れたるダワイドの幕を起し、其破れたる處を起して、之を立てん、一七餘の人人
及び凡の異邦民我が名を聞くを得る者が、主を尋ねん爲なり、此の諸事を行ふ主は此
を言ふと。一八神は永世より其一切行ふ所を知るなり。一九故に我意ふ、異邦人の中
より神に歸する者を累はす可からず、二〇惟書を彼等に遺りて、偶像に汚れたる物と
淫行と、勒死したる物と、血とを戒め、且凡そ己の欲せざる所を人に行ふ勿らしむべし。
二一蓋モイセイの書は、古代より邑毎に之を宣ぶる者あり、安息日毎に諸會堂に讀

まるゝなり。二二 其時諸使徒及び長老等は、全教會と偕に、己の中より選ばれたる人を、パヱルとワルナワと偕にアンティオヒヤに遣さんことを定めたり、即イウダ、稱してワルサワと云ふ者、及びシラ、共に兄弟中の長者なる者なり。二三 書を彼等の手に託して曰へり、使徒、長老、兄弟等は、アンティオヒヤ、シリヤ、キリキヤに居る異邦中の諸兄弟に安を問ふ。二四 蓋我等は、或者が、我等の中より出でゝ言を以て爾等を擾し、爾等の靈を惑はして、割禮を受け、律法を守るべき事、即我等が彼等に命ぜざりし所を言ふを、聞きしに由りて、二五 我等心を一にして集りて、選ばれたる人を、我等の愛する所のワルナワ及びパヱル、二六 即我が主イイススハリストスの名の爲に己の命を致さんと願ふ者と偕に、爾等に遣さんことを定めたり。二七 故に我等はイウダ及びシラを遣せり、彼等又口づから是の事を爾等に述べん。二八 蓋聖神及び我等は、左の肝要なる事の外、何の任をも爾等に負はしめざらんことを定めたり、二九 即偶像に獻げし物と、血と、勒死したる物と、淫行とを戒むる事、是なり、且凡そ己の欲せざる所を人に行ふ勿れ。爾等之を守らば善し。願はくは爾等平安なれ。三〇 是に於て彼等遣さ

れて、アンテオヒヤに來り、衆人を集めて、書を授けたり。三一衆人之を讀みて、其訓を喜べり。三二イウダ及びシラは、亦預言者たるに因りて、多くの言を以て兄弟を諭へて、之を堅めたり。三三暫く彼處に在りて後、彼等は兄弟より平安にして使徒等に往くを容されたり。三四然れどもシラは彼處に止らんことを定め、イウダは獨イエルサレムに歸れり。三五パウロ及びバルナバはアンテオヒヤに居り、他の多くの者と偕に數を傳へ、主の言を福音せり。三六日を歷て後、パウロはバルナバに謂へり、我等復往きて、諸邑に在る我が兄弟の如何を願みるべし。三七バルナバはイオアン、稱してマルコと云ふ者を共に攜へんと欲せり。三八然れどもパウロはマルコを攜へて、キプルに舟行し、四〇シリヤ及びキリキヤを經て、諸教會を堅めたり。

第十六章

一既にして彼はデルベ及びリストラに至れり。視よ、彼處に一人の門徒、

ティモテイと名づくる者あり、信じたるイウデヤの婦とヱリン人との子にして、ニリス
トラ及びイコニヤに在る兄弟に證せられし者なり。三パヱルは彼を攜へて往かんと
欲し、其處に居るイウデヤ人の爲の故に、彼に割禮を行へり、蓋皆其父のヱリン人た
るを知れり。四諸邑を經る時、彼等はイエルサリムに在る諸使徒及び長老等の定め
たる規程を授けて、之を守らしめたり。五是に於て諸教會の信益堅く、其數日日に增
せり。六フリギヤとガラティヤの地とを經て、彼等は聖神よりアシヤに言を傳へんこと
を止められ、七ミシヤに來りて、ワイフイニヤに往かんと試みたれども、神之を許さざりき。
八乃ミシヤを過ぎて、トロアダに下れり。九是に於て夜異象はパヱルに現れたり、一
のマケドニヤ人立ちて、彼に求めて曰へり、マケドニヤに渉りて、我等を助けよと。一〇
斯の異象の後、我等は主の我等を召して、彼等に福音せしむるを悟りて、速にマケド
ニヤに往かんと定めたり。一一故にトロアダより舟行して、直にサモフラキヤに至り、
次の日子アポリに往き、一二彼處よりフイリッピに至れり、是はマケドニヤの一分の第一
の邑にして、殖民地なり。我等は此の邑に數日間留れり。一三安息の日に我等は邑の外

に、河の邊なる常に祈禱する所に出で、坐してデヤ、フィアティラの邑の者にして、紫布の商人、神を敬ふ者は聽けり、主は其心を啓きて、パウルの語る所に響はしめたり。一五　彼其家族と共に洗を受けし後、我等に求めて曰へり、爾等若し我を視て主に忠なりとせば、入りて我が家に居れ、遂に強ひて我等を留めたり。一六　一日我等が祈禱の所に適きし時、卜筮の鬼に憑らるゝ一の婢我等に遇へり、卜筮を以て其主に多くの利を得しめたる者なり。一七　彼はパウル及び我等に從ひて、呼びて曰へり、此の人人は至上なる神の僕にして、救の道を傳ふる者なり。一八　日久しく之を行ひしに、パウル遂に厭ひ、顧みて鬼に謂へり、我イイススキリストの名を以て、爾に彼より出づるを命ず。鬼忽出でたり。一九　婢の主は其利の望の空しくなりたるを見て、パウルとシラとを執へて、市に有司等の前に曳き來りて曰へり、此の人人はイウデヤ人にして、我等の邑を擾し、二〇　我等ロマ人に受くべからず行ふべからざる例を傳ふ。二一　民も亦齊しく起ちて、彼等を攻め、上官は彼等の衣を褫ぎ、命じて彼等を杖うたしめたり。二二　多く杖うちて後獄に下

し、獄吏に固く彼等を守らんことを命ぜり。二四　獄吏是くの如き命を受けて、神を讃詠せり、囚者之を聞けり。二六　俄に大なる地震ありて、獄の基動き、諸門皆忽ち啓け、各人の械は解けたり。二七　獄吏醒めて、獄の諸門の啓けたるを見て、囚者逃げたりと意ひ、刀を抜きて自殺せんと欲せり。二八　然れどもパウル大なる聲を以て呼びて曰へり、自ら戕ふ勿れ、蓋我等皆此に在り。二九　彼火を索めて躍り入り、戰きてパウル及びシラの前に俯伏し、三〇　彼等を外に導き出して曰へり、君よ、我何を爲して、救を得べきか。三一　彼等曰へり、主イエスを信ぜよ、然らば爾及び爾の全家救を得ん。三二　彼は夜の即時に彼等を取りて、其傷を洗ひ、直に自ら其全家族と洗を受けたり。三四　遂に彼等を引きて、己の家に入れ、食膳を具へ、全家と偕に神を信ぜし事を喜べり。三五　明くるに及びて、上官は吏役を遣して曰へり、彼の人人を釋せ。三六　獄吏は此の言をパウルに告げて曰へり、上官使して爾等を釋す、故に今出でゝ、安然として往け。三七　然れどもパウルは彼等に謂へり、我等ロマ

人たる者を、罪を定めずして、公に扑ちて、獄に下せり、而して、今私に我等を出すか、可からず、乃ち自ら來りて、我等を引き出すべし。三八 吏役此の言を上官に告げたれば、上官その人なるを聞きて懼れ、三九 來りて、彼等に謝し、之を引き出して、邑より出づるを請へり。四〇 彼等獄を出て、リヂヤの家に來り、兄弟を見て、之を誨へて去れり。

第十七章

一 彼等アムヒポリ及びアポロニヤを經て、テサロニカに來れり、此處にイウデヤ人の會堂あり。二 パウル常の如く彼等の中に入りて、三たび安息日に、聖書に本つきて、彼等と辯論して、三 ハリストスは苦楚を受け、死より復活すべく、又我が所傳ふる所のイイスは、卽ちハリストスなりと解きて、之を證せり。四 彼等の中の數人信じて、パウル及びシラに從へり、又敬虔なるエリン人甚だ多くあり、貴き婦も少からざりき。五 然れど未だ信ぜざるイウデヤ人は妒みて、市の匪類を集めて、群を成し、邑を亂し、イアソンの家に逼りて、彼等を民の前に曳き出さんと欲したれど、六 彼等に遇はずして、イアソン及び數兄弟を邑宰に曳きて呼べり、彼の天下を亂したる者は此にも來れり、七 イアソン彼等を接けたり、彼等皆クサリの命に違ひて、他の王イイスありと

言ふ。八乃之を聞く民及び邑宰の心を動かせり。九然れども彼等はイアソン及び其
餘の者より保證を取りて、之を釋せり。一〇兄弟直に夜に乘じて、パヱル及びシラを
ヱリヤに往かしめたり。彼等彼處に來りて、イウデヤの會堂に入れり。一一此の處の人
人はヱサロニカに在る者より善良にして、熱切に言を受け、日日聖書に就きて、是れ果
して此くの如きかと究めたり。一二故に其中の多くの者は信ぜり又ヱリンの貴き婦
及び男も少からざりき。一三然れどもヱサロニカのイウデヤ人は神の言の、パヱルに
由りて、ヱリヤにも傳へられしを知りて、彼處にも來り、民を動かして、之を擾せり。一四
其時兄弟直にパヱルを海の方に適かしめたり、シラ及びティモヱイは尚彼處に留れ
り。一五パヱルを送りし者は彼を攜へてアフィニに至り、而して其シラ及びティモヱイに、
速に彼に來るべし、との命を受けて返れり。一六パヱルはアフィニに在りて、彼等を待
てる時、此の邑に偶像の滿ちたるを見て、其心傷みたり。一七故に會堂に於て、イウデ
ヤ人及び敬虔の者と、又毎日市に於て、遇ふ所の者と辯論せり。一八「エピクリアン」及び
「ストイク」の理學者數人彼と爭論せり。或者曰へり、此の嘐啁者は何を言はんと欲する

か。他の者曰へり、彼は他邦の鬼神を傳ふる者の如し、蓋パウロは彼等にイイスス及び復活を福音せり。一九遂に彼を取り、「アレチパグ」に引き至りて曰へり、爾が語る所の新しき教の何なるを、我等知るを得べきか、二〇蓋爾は奇怪の事を我が耳に入る、故に我等は其何事なるかを知らんと欲す。二一蓋凡のアテネ人及び彼處に居る旅人は、他の務に遑あらずして、惟新しき事を言ひ、或は聽くのみ。二二パウロ「アレオパグ」の中に立ちて曰へり、アテネ人よ、我觀るに、爾等は甚敬虔なるに似たり。二三蓋我行きて、爾等の禮拜する所を巡り視る時、一の壇にも遇へり、書して、識らざる神に献すと曰ふ。斯の爾等が識らずして敬ふ者は、我之を爾等に傳ふ。二四世界及び其中の萬有を造りし神は、天地の主にして、手にて造られたる殿に居らず、二五又需むる所ある者の如くに、人の手の奉事を要せず、自ら生命と呼吸と萬物とを以て衆に與ふ。二六彼は一の血より、悉く人類を造りて、之を地の全面に居らしめ、其預期の時と其住居の界とを定めたり、二七彼等が神を尋れん爲なり、或は彼を揣り、彼を得ん。然れど も彼は我等各人に遠からざるなり、二八蓋我等は彼に賴りて生き、且動き、且存す、爾

等の詩人も言へるあるが如し、云く、我等は其族なりと。二九既に我等神の族たらば、神
體を以て金、若くは銀、若くは石、人の工と機巧とに由りて琢みたる者に似たりと意ふ
可からず。三〇故に神は蒙昧の時を問はずして、今は悉くの人に、何處に於ても、悔改す
るを命ず。三一蓋彼已に日を定め、其立てし所の人を以て、義に由りて全地を審判せん。
衆に之を信ずべき證を與へて、彼を死より復活せしめたり。三二死者の復活の事を聞
きて、或者は嘲り、他の者は曰へり、此の事復爾に聽かん。三三是に放てパヱル彼等の中
より出でたり。三四然れども或者は彼に附きて信ぜり、其中にディオニシイ「アレチパギ
ト」及びダマリと名づくる婦あり、又他の者は彼等と偕にせり。

第十八章

一斯の後パヱルアフィニを離れて、コリンフに來れり。二ポントに生れし一
のイウデヤ人、名はアキラ、(クラウディイ悉くのイウデヤ人にロマを離るゝを命ぜし
に因りて)近ごろイタリヤより來りし者、及び其妻プリスキラに遇ひて、彼等に就き、三
其業の同じきを以て、彼等と偕に居りて、工を作せり、蓋彼等は幕を製るを業とせし者
なり。四安息日毎に、彼會堂に於て辯論し、イウデヤ人とヱリン人とを勸めたり。五シラ

及びティモテイがマケドニヤより來りし時、パウル心甚切迫して、イウデヤ人にイエスのヘリストたるを證せり。六然れども彼等敵し、且誹りたれば、パウル衣を拂ひ彼等に謂へり、爾等の血は爾等の首に歸せん、我は尤なし、今より異邦民に往く。七乃彼處を去りて、神を敬ふ一人、イウストと名づくる者の家に來れり、其家は會堂に隣れり。八會堂の宰クリスプ、其全家と倶に、主を信じたり、又コリンフ人の中多くの者聞きて信じ及び洗を受けたり。九主は夜間異象の中にパウルに謂へり、懼るゝ勿れ、語りて默す勿れ、一〇蓋我爾と偕にし、人爾に害を爲さざらん、我に此の邑に多くの民あればなり。一一彼は彼處に居ること一年六月にして、彼等に神の言を教へたり。一二ガリヨンはアカイヤの方伯たる時、イウデヤ人心を合せて、パウルを攻め、彼を曳きて審判座の前に來りて一三曰へり、彼は人人に律法に違ひて神を敬ふことを勸む。一四パウルが口を啓かんとする時、ガリヨンはイウデヤ人に謂へり、イウデヤ人よ、若し不義或は奸惡の事ならば、我爾等に聽く理あり。一五然れども若し言語及び名字及び爾等の律法に關する論ならば、爾等自ら之を理めよ、我は斯る事の審官たるを欲せず。

一六 乃彼等を審判座の前より逐へり。一七 衆ヂリン人は會堂の宰ソスヱンを執
へて、之を審判座の前に扑てりガリヲンは更に此の事を意と爲さゞりき。一八 パヱル
尙居ること日久しくして、兄弟に別を告げて、シリヤに濟れり、プリスキラ及びアキラ
も彼と偕にせり、ケンフレイに在りて彼髮を剪れり、誓願ありし故なり。一九 エヱスに
至りて、二人を彼處に留め、自ら會堂に入りて、イウデヤ人と辯論せり。二〇 彼等は之に
久しく偕に居らんことを請ひたれども、肯はずして、二一 彼等に別を告げて曰へり、我
は邇づける節筵を必イエルサリムに守るべし、若し神欲せば、復爾等に返らん、乃
舟に乘りてエヱスを去れり。（アキラ及びプリスキラはエヱスに留れり。）二二 ケサリ
ヤに着きて、彼イエルサリムに上り、教會に安を問ひて後、アンヂオヒヤに下れり。二三
暫く此處に留りて後、出でゝ、次を逐ひて、ガラヂヤ及びフリギヤの地を經て、衆門徒を
堅めたり。二四 アレキサンドリヤに生れしイウデヤ人、アポロスと名づくる人、辯才あ
り、且聖書に達したる者は、エヱスに來れり。二五 此の人は主の道の端緒を聞き、心熱し
て主の事を詳に言ひ且誨へたり、然れども惟イオアンの洗禮を知れるのみ。二六 彼

會堂に於て殺然として語れり。アキラ及びプリスキラは聞きて後、彼を延きて、尙詳に彼に主の道を說き明せり。二七彼がアハイヤに往かんと欲せし時、兄弟は門徒に書を送りて、彼を接けんことを勸めたり。彼は彼處に來りて、恩寵に賴りて信ぜし者を多く助けたり。二八蓋公衆の前に强くイウデヤ人を論破し、聖書に據りてイイスのハリストスたるを辯明せり。

第十九章 一アポロスのコリンフに居る時、パウル上地を經て、エフェスに來り、或門徒等に遇ひて、二之に謂へり、爾等は信ぜし後聖神を受けしか。彼等曰へり、我等は聖神の有ることだに聞かざりき。三彼曰へり、然らば爾等は何に因りて洗を受けしか。彼等曰へり、イオアンは悔改の洗體に因りてなり。四パウル曰へり、イオアンは人に彼に後れて來る者、卽ハリストスイイスを信ずべきことを言へり。五彼等之を聞きて、主イイスの名に因りて洗を受けたり。六パウルが彼等に手を按するに、聖神彼等に降り、彼等異方の言を言ひ、且預言せり。七其數約十二人なりき。八パウル會堂に入りて、毅然として言ひ、三月間神の國の事を論じ、且勸めたり。九然れども

或人人剛愎にして信ぜず、主の道を民の前に誹りしに因りて、彼は之を別けて、日日ティラノと云ふ者の學校に辯論せしに、一〇是くの如きこと二年にして、アシヤに居る者、イウデヤ人もギリン人に論なく、皆主イイスの言を聞くに至れり。一一神はパウルの手を以て、希有の異能を行ひ、一二其身より手巾或は襯衣を取りて、病者に加ふれば、病退き、惡鬼出づるに至れり。一三イウデヤ人の中の巡りて誓戒を爲す或者も、惡鬼に憑らるゝ者に對して、主イイスの名を用ゐる事と爲れば、一四或イウデヤの司祭長スケワと云ふ者の七人の子は是を行へり。一五然れども惡鬼答へて曰へり、我イイスを知り、亦パウルを識れり、惟爾等は誰ぞ。一六乃惡鬼に憑らるゝ人躍り攻めて、之に勝ち、之を壓し、彼等裸にし、傷つけられて、其家より逃ぐるに至れり。一七是の事エフエスに居る凡てのイウデヤ人及ひギリン人に知られたれば、彼等皆懼を懷き、主イイスの名は崇められたり。一八信ぜし者多く來りて、其罪を認め、行ひし事を訴へたり。一九邪術を行ひし多くの者は、其書を集めて、衆人の前に焚けり、其價を合せて、銀五萬なるを知れ

り。二〇主の言は盛に長じて、力を獲たること此くの如し。二一是等の事既に成りて、パ
ヱルはマケドニヤ及びアハイヤを經て、イエルサリムに往かんことを意に定めて曰
へり、我彼處に往きて後、ロマをも觀るべし。二二乃彼に事ふる者の中ティモヱイ及び
エラストの二人をマケドニヤに遣して、自ら暫くアシヤに留れり。二三其時主の道に
對して騷動大に起れり。二四蓋一の銀工、名はディミトリイアルテミダの銀の龕
を作りて、工人に少からざる業を得しめし者は、二五彼等及び他の同業の職工を
集めて曰へり、友よ、我等が此の業に賴りて利を獲るは、爾等の知る所なり、二六亦此の
パヱルが、人の手にて作れる者は神に非ずと言ひて、第エヱスのみならず、幾ど全アシ
ヤに於て、多くの民を勸めて惑はしゝことは、爾等が見る所聞く所なり。二七是れ唯我
等の業の輕んぜられん危あるのみならず、即大なる女神アルテミダの殿も藐
にせられ、アシヤ及び全地の尊む者の威嚴は滅されん。二八彼等此を聞きて、烈しく怒
りて、呼びて曰へり、大なる哉エヱス人のアルテミダよ。二九邑擧りて大に騷ぎ、パヱル
の同行者、マケドニヤの人ガイ及びアリスタルフを執へて、心を合せて劇場に擁し入

れり。三〇 パヱル民の中に入らんと欲せしに、門徒之を許さざりき。三一 又アシヤの上官の中に彼と親しき者等ありて、人を彼に遣して、自ら劇場に投ぜざらんことを勸めたり。三二 時に或人は此の事を號び、或人は彼の事を號べり、蓋會衆亂れて、大半は何の爲に集れるかを知らざりき。三三 イウデヤ人の勸に由りて、民の中よりアレキサンドルは呼び出されたり。アレキサンドル手を搖かして、民に言はんと欲せしが、三四 其イウデヤ人たるを知りて、皆聲を同じくして、約二時間呼びて曰へり、大なる哉エヱス人のアルテミダよ。三五 邑の書記官は民を撫めて曰へり、エヱスの人人よ、何人かエヱスの邑が大なる女神アルテミダ及びディヲペトの奉事者たるを知らざらん。三六 此の事既に駁す能はざれば、爾等靖になりて、輕率に事を行ふ可からず。三七 爾等は此の人人を曳き來れり、然れども彼等は未だ曾て殿の物を竊ます、爾等の女神を讒らず。三八 若しデミトリイ及び彼と偕にする工人、人を訟ふることあらば、裁判所あり、方伯あり、互に訟ふ可し。三九 若し他の事に就きて求むる所あらば、法に合ふ會に於て之を議定せられん。四〇 蓋我等は今日行はれし事に就きて、騷亂の爲に罪せらる

ン虞あり、此の紛れたる聚を解くべき辭一もなければなり。貳
たり。

第二十章　一亂の靖まりし後、パウル門徒を召して、之を敎訓し、之に別を告げ出でヽマケドニヤに往けり。二其諸地を經へて、多くの言を以て信者を敎訓して、エラダに來れり。三居ること三月にして、シリヤに航らんと欲せし時、イウデヤ人彼を害せんと謀りたれば、マケドニヤを過ぎて反らんことを定めたり。四彼を送りてアシヤに至りし者は、ピルの子ソシパトル、テサロニカの人アリスタルコ及びセクンド、デルベの人ガイ、及びティモテイ、アシヤの人テヒク及びトロフィムなりヤの人ソシパトル、テサロニカの人アリスタルコ及びセクンド、デルベの人ガイ、及びティモテイ、アシヤの人テヒク及びトロフィムなり。五此の衆は先づ往きて、我等をトロアダに俟てり。六我等は除酵節の後に、フィリピより舟行し、五日にしてトロアダに至り、七日間其處に留れり。七七日の首の日、門徒が餠を擘く爲に集りし時、パウル次の日に往かんと欲して、彼等に講談し、言を續けて夜半に至れり。八我等の集れる樓に多くの燈ありき。九パウルの長く講談する時、一の少年、名はエウテフ、牖の上に坐して、熟睡し、睡に因りて、身傾きて、三層樓より下に墜ちたり、之を扶くれ

ば、已に死せり。一〇 パウル下りて、其上に伏し、彼を抱きて曰へり、慌つるな、其魂は猶其中に存せり。一一 復上りて、餅を擘きて食ひ、語ること久しくして、遂に行けり。一二 彼等少年を擄へ、其生くるを見て、甚く慰めたり。一三 我等舟に往けり、彼處に於てパウルを接けん爲なり、蓋彼自ら歩行せんと欲して、斯く我等に命じたり。一四 彼アッソンに於て我等に會ひたれば、我等彼を接けて、次の日ミテリナに來れり。一五 彼處より舟を出して、次の日ヒチオスの對面に至り、又次の日サモスに着き、トロギリヤに泊りて、明日ミリトに至れり。一六 蓋パウルはエペソに於て時を費さざらん爲なり、彼能すべくば、五旬節の日にイエルサリムに在らんと欲したればなり。一七 彼はミリトよりエペソに人を遣して、教會の長老等を召したり。一八 彼等が來りし時、之に謂へり、爾等は我が始めアシヤに來りし初の日より、恒に爾等と偕にせしことの如何を知れり、一九 我は謙遜を竭し、多くの淚を流して、イウデヤ人の惡謀に由りて我に及びし艱難の中に、主に事へ、二〇 凡そ益あろ所は一も漏さずして、爾等に宣べ、衆人の前にも家家にも教へて、二一 イウデ

十人及びエルリン人に、神の前に悔改して、我が主イエスハリストを信ずべきを勸めたり。二一　今視よ、我神に縛られて、イエルサリムに往く、彼に於て若何なる事に遇はんを知らず。二二　惟聖神邑毎に證して、縲紲と患難とは我を俟つと云ふ。二四　然れども我之を意こに爲さず、又我が生命を貴しとせず、但願はくは忻びて、我が行く程及び主イエスより受けし職、卽神の恩寵の福音を證するこさを盡さんことを。二五　今視よ、我知る、爾等我が面を覩ざらん。二六　故に我今日爾等我が衆巡りて神の國を傳へし所の者は、皆復我が面を覩ざらん。二七　蓋我は神の旨を漏さずして、悉く爾等に傳へたり。二八　故に爾等自ら愼み、亦全群を愼め、乃聖神爾等を其中に立てゝ、監督こ爲し、主神が己の血を以て獲たる教會を牧せしむ。二九　蓋我知る、我が去りし後、殘忍なる狼、群を惜まざる者は、爾等の中に入らん、三〇　爾等の中よりも人人起りて、門徒を誘ひ己に從はしめん爲に、理に悖る事を語らん。三一　故に敬醒して、我が三年間晝夜斷えず、涙を以て爾等各人を諭へしを憶へ。三二　兄弟よ、今我爾等を神及び其恩寵の言、爾等を建て、爾等に凡の聖せられし者の中に嗣業を與ふるを能する者に託す。三三　人の金銀

衣服は、我來だ之を食らさりき。三四 爾等自らも知る、此の我が手は我及び我と偕に在りし者の需に供せしを。三五 凡の事に於て我爾等に斯く勞して、柔弱者を扶け、且主イエスの言を憶ふ可きを示せり、蓋彼自ら云へり、與ふるは受くるより更に福なりと。

三六 言ひ竟りて、彼膝を屈めて、衆と偕に禱れり。三七 彼等皆大に哭き、パウルの頸に俯して、彼に接吻し、三八 其復我が面を覩ざらんと言ひし言に因りて、殊に憂ひたり。遂に彼を舟に送れり。

第二十一章

一 我等は彼等に別れて、舟行して、徑にコスに至り、次の日ロドスに至り、彼よりパタラに適き、二 フィニキヤに濟るべき舟に遇ひて、之に登りて行けり。三 キプルを望み見て、之を左に遺し、シリヤに航りて、ティルに着けり。舟は彼に於て載を卸すべかりしなり。四 我等門徒に遇ひて、此に居りしこと七日。彼等神に因りて、パウルにイエルサリムに上る勿らんことを言へり。五 七日を越ねて、我等出でゝ往きけり。彼等皆妻子と偕に我等を送りて、邑の外に至り、岸に在りて膝を屈めて禱れり。六 互に別を告げて後、我等は舟に登り、彼等は家に歸れり。七 我等ティルより航りて、舟

行を終へたり、彼處に兄弟に安を問ひて、一日與に居りき。八次の日ペロ及び我等彼と偕にせし者は出でゝ、ケサリヤに來り、福音者フィリップ、即七人の役事の一の家に入りて、共に留れり。九彼に四人の女あり、處女にして、預言する者なり。一〇我等が多くの日彼處に居る時、イウデヤより一の預言者、アガフと名づくる者下り、一一我等に來りて、パロの帶を取り、己の手足を縛りて、異邦人の手に付さんと。一二之を聞きて、我等も此の地の者も彼にイエルサリムに於て此の帶の主を此くの如く縛りて、パロル答へて曰へり、閣等胡爲れぞ哭きて、我が心を摧く、蓋我主イエルサリムに死するも、亦甘ずる所なり。一四彼が我等の勸を受けざるを見て、止みて曰へり、主の旨成るべし。一五此の日の後、我等旅裝して、イエルサリムに上らんことを勸めたり。一六ケサリヤの門徒數人亦我等と偕に行きて、我等を一の舊き門徒、キプルの人ムナソンの許に送れり、我等其家に寓らしめん爲なり。一七我等がイエルサリムに至りし時、兄弟欣びて我等を接けたり。一八次の日、パロル我等と

個にイアコフに詣り、長老も皆來れり。一九パウ
ロ彼等の安を問ひて、一一神が彼の職を以て、異邦民の中に行ひし事を述べたり。二〇彼
等此を聞きて、神を讃榮し、又彼に謂へり、兄弟よ、爾は信ぜしイウデヤ人の幾萬なるを見
而して彼等は爾の事に付きて、爾は異邦の中に居る悉くのイウデヤ人に、モイセイに
背くを教へて、其子に割禮を行ふ可からず、先祖の例に從ふ可からざることを言ふと
聞けり。二一然らば若何せん、蓋民は爾の來りしを聞きて、必集らん。二二我等が爾に
言ふ所を爲せ、我等に誓願の者四人あり、二四爾彼等を攜へて、之と偕に潔まれ、代りて
其費を贈ひ、彼等に髮を蘀るを得しめよ、然らば皆爾に付きて聞きし事の虛しくして
爾自も仍律法を守れるを知らん。二五信ぜし異邦人に至りては、我等已に書を遣りて、彼
等が此くの若き事を守らず、惟偶像に獻げし物と、血と、勒死したる物と、淫行とを
戒む可きを定めたりと。二六是に於てパウル彼等此を聞きて、神を讃榮し、又彼に謂
りて、殿に入り、潔の日の盡期、卽彼等各人の爲に獻物を獻ずべき時を告げたり。二七七
日の竟らんとする時、アシヤより來りしイウデヤ人、彼が殿に在るを見て、衆民を騷が

し、手を彼に措きて二八呼べり、イズライリ人よ、助けよ、此の人は四方に衆人に、斯の民と律法と此の所とに敵するを教ふ、且ヱリン人を引きて殿に入れ、此の聖なる所を汚せり。二九蓋彼等は前にエヱス人トロフィムが彼と偕に城に在るを見て、パヱル彼を殿に引き入れたりと意へり。三〇是に於て城擧りて騷ち、民は趨せ集り、パヱルを執へて、殿の外に曳き出だせり、其門直に閉されたり。三一彼等が之を殺さんと謀れる時、イエルサリム擧りて亂れたりとの報、隊の千夫長に至りたれば、三二彼直に兵卒と百夫長とを率ゐ、趨せて彼等に就き、彼等は千夫長と兵卒とを見て、パヱルを扑つことを止めたり。三三千夫長近づきて、パヱルを取り、二の鐵索を以て繫がんことを命じ、其誰たる、又何事を爲しゝかを問へり。三四民の中或人は此の事を號び、或人は彼の事を號べり。千夫長は騷擾に因りて、實情を知る能はずして、彼を曳きて兵營に入れんことを命ぜり。三五パヱル階に在りし時、民の擁るに因りて、兵卒彼を負ふに至れり。三六蓋多くの、民は隨ひて、彼を殺せと呼べり。三七兵營に入らんとする時、パヱル千夫長に謂へり、我爾に言ふ所あり、之を言ふを得べきか。彼曰へり、爾グレチヤの言を知れるか、三八然

らば爾は彼のエギ
非ずや。三九パウロ曰へり、我はイウデヤ人、タルスの產、キリキヤの
り、請ふ、我に民に向ひて言ふを許せ。四〇彼許しければ、パウロ階に
て手を搖かし、大に靜默するに及びて、エウレイの言を以て語りて言へり。

第二十二章

一兄弟及び諸父よ、請ふ、我が今爾等の前に自ら訴ふる所を聽け。二彼
等は其エウレイの言を以て語るを聞きて、愈靜まれり。パウロ曰へり、
三我はイウデヤ人にして、キリキヤのタルスに生れ、此の城の
の法律を數へられ、神の爲に熱心なること、今日の爾等の如く然り。四我
るまで斯の道を窘逐して、男女に論なく、縛りて獄に解せり、五司祭長及び衆長老の
我が爲に證を爲すが如し、盖我は彼等より兄弟に遣る書を受けて、ダマスクに往けり、
彼處に居る者を縛りて、刑を受けしめん爲なり。六我往きて、ダマスクに近づける時、約日中、倏天より大なる光ありて、我を環り照せり。七我
地に仆れて、我に言ふ聲を聞けり、曰く、サウル、サウル、何ぞ我を窘逐するる。八我對へて曰

へり、主よ、爾は誰たる。彼我に謂へり、我は爾が窘逐するイイススナゾレイなり。九我と
偕に在りし者は、光を見て懼れたり、然れども我に語る聲を聞かざりき。一〇我曰へり、
主よ、我何を爲すべきか。主は我に謂へり、起ちてダマスクに往け、彼に於て、凡そ爾が行
はん爲に定められし事を、爾に告げられん。一一其光の輝に緣りて、我見るを得ざり
し故に、我と偕に在りし者に手を援かれて、ダマスクに至れり。一二アナニヤと名づく
る者、律法に循ひて敬虔なる人にして、凡そダマスクに居るイウデヤ人に稱せらるゝ
者は、一三我に來り、旁に立ちて、我に謂へり、兄弟サウルよ、見るを得よ、我即時に彼を仰
ぎ見たり。一四彼我に謂へり、我が先祖の神は、爾が其旨を知り、義者を見、其口より聲を
聞かん爲に、預め爾を選べり。一五蓋爾は見し所聞きし所を、彼の爲に、衆人の前に證
する者と爲らん。一六今何ぞ緩うする、起ちて、主イイススの名を籲びて、洗を受け、爾の
罪を滌へ。一七我イエルサリムに反りて、殿に禱る時、神象外に遊びて、一八我は主の
我に謂ふを見たり、云く、急ぎて、速にイエルサリムより出でよ、蓋此には爾が我の爲に
する證を納れざらん。一九我曰へり、主よ、彼等知る、我嘗て爾を信ずる者を獄に入れ、且

諸會堂に扑ち、二〇又爾の證者ステファンの血の流されし時、我彼處に立ちて、之を
殺すを可とし、之を殺す者の衣を守りしを。二一主は我に謂へり、往け、我爾を遠く異邦
民に遣さん。二二彼等聽きて、此の言に至れり、是に於て聲を揚げて曰へり、此くの如き
者を地より去れ、彼生く可からざればなり。二三彼等號び、衣を擲ち、塵を空中に揚ぐる
時、二四千夫長はパヱルを曳きて、兵營に入るゝを命じ、鞭ちて之を訊すべしと言へり、
何の故に彼に向ひて、斯く號べるを知らん爲なり。二五革帶を以てパヱルを繫ぎし時、
彼傍に立てる百夫長に謂へり、ロマの人、且其罪を定めずして、鞭つは可なるか。二六
百夫長此を聞きて、往きて、千夫長に告げて曰へり、爾の爲さんとする所を愼め、蓋此
の人はロマ人なり。二七千夫長就きて、彼に謂へり、我に告げよ、爾はロマ人なるか。彼曰
へり、然り。二八千夫長答へて曰へり、我多くの金を以て此の民籍を得たり。パヱル曰へ
り、我は生ながらにして然り。二九是に於て彼を訊さんとする者直に退けり。千夫長は
其ロマ人たるを知りて、彼を縛りしことを懼れたり。三〇明日、イウデヤ人が彼を訟ふ
る故を確に知らんと欲して、其縛を解き、司祭諸長と全公會とに集らんことを命じ、パ

ルを擯へ出でゝ、彼等の前に立たしめたり。

第二十三章　一パウル公會に目を注ぎて曰へり、兄弟よ、我眞心を盡し、神の前に生を度りて、今日に至れり。二司祭長アナニヤは側に立てる者に命じて、其口を擊たしめたり。三其時パウル彼に謂へり、粉壁よ、神は爾を擊たん、爾は法に依りて我を審かん爲に坐すると、法に違ひて我を擊つを命ず。四側に立てる者曰へり、爾神の司祭長を詬るか。五パウル曰へり、兄弟よ、我其司祭長たるを知らざりき、蓋錄せるあり、爾の民の有司を詛る勿れと。六パウル其半はサドカイ等、半はファリセイ等なるを知りて、會中に呼びて曰へり、兄弟よ、我はファリセイの子なり、死者の復活を望むに因りて、我今審を受くるなり。七彼が此を言ひし後、サドカイ等とファリセイ等と爭ひしかば、會衆相分れたり。八蓋サドカイ等は復活なく、天使も神もなしと言ひ、ファリセイ等は皆之れ有りと認む。九遂に大なる號起れり、ファリセイの黨學士等起ちて、爭ひて曰へり、我等此の人に一も惡あるを見ず。若し神或は天使の彼に言ひしことあらば、我等神に敵すべからざるなり。一〇爭益〻劇しきに因りて、千夫長はパウルが彼等に

裂かれんことを恐れて、兵卒に命じて、下りて彼を其中より奪ひ、兵營に引き入れしめ
たり。一一 次の夜、主は彼に現れて曰へり、パヱルよ、勇め、蓋爾我の事をイエルサリム
に證せし如く、是くの如くロマにも證すべし。一二 旦に及びて、或イウデヤ人黨を結び、
共に誓ひて、パヱルを殺すに至るまで食はず飲まずと曰へり。一三 此の誓を爲しゝ者
は四十人餘なり。一四 彼等は司祭諸長及び長老等に就きて曰へり、我等はパヱルを殺
すに至るまで何をも食はずと誓を發せり。一五 故に爾等今、公會と與に彼の事を尙
詳に訊さんと欲する狀を爲して、千夫長に告げて、明日彼を爾等の前に引き下らし
めよ、我等は其未だ近づかざる前に、彼を殺す備を爲せり。一六 パヱルの姉妹の子此の
陰謀を聞きて、來り、兵營に入りて、パヱルに告げたり。一七 パヱル一の百夫長を呼びて
曰へり、此の少者を千夫長に攜へ往け、此の者彼に告ぐべき事あればなり。一八 彼は之
を攜へて、千夫長に至りて曰へり、囚者パヱル我を呼びて、此の少者を爾に攜へ往かん
ことを請へり、彼爾に言ふべき事あり。一九 千夫長其手を援きて、僻處に退きて問へ
り、爾は我に何の告ぐる所あるか。二〇 彼曰へり、イウデヤ人は尙詳にパヱルの事を

問はんと欲する狀を爲して、爾に明日彼を公會の前に引き下さんことを請はんと相
約せり。二一 爾彼等に從ふ勿れ、蓋其中の四十人餘は、陰に彼を謀りて、彼を殺すに至る
まで食はず飲まずと誓へり、今彼等備を爲して、爾の許を俟つ。二二 千夫長は少者を戒
めて、爾斯の事を我に告げたりと、何人にも語る勿れと言ひて、之を去らしめたり。二三
乃百夫長二人を召して曰へり、兵卒二百人、騎兵七十人、戟を持つ者二百人を備へよ、
今夜第三時よりケサリヤに往かん爲なり。二四 又畜を備へよ、パヱルを乘せて、方伯ヱ
リクスに送らん爲なり。二五 且書を致せり、左の如し、二六 クラウヂイリシヤは尊憲な
る方伯ヱリクスの安を問ふ。二七 此の人イウデヤ人に執はれ、將に殺されんとせしを、
我其ロマ人たるを知りて、兵卒を率ゐ、趨きて之を拯ひたり。二八 彼等が之を訟ふる故
を知らんと欲して、之を引きて、其公會に至りしに、二九 彼が訟へらるゝは、惟彼等の律
法の論究に因るのみにして、一も死或は縲絏に當る罪あるを見ざりき。三〇 然れども
イウデヤ人が此の人を害せんと謀ることの、我に示されしに因りて我直に彼を爾に
送り、訟ふる者にも爾の前に彼を訟へんことを命じたり。願はくは平安なれ。三一 是に

於て兵卒は命に遵ひ、パウロを取りて、夜アンティパトリダに引き至れり。三二翌日、騎兵はケサリヤに來り、書を方伯に呈をして之を送らしめ、其餘は兵營に歸れり。三三して、パウロを其前に立てたり。三四方伯書を讀みをはりて、彼がいづこの縣に屬するかを問ひ、其キリキヤの人たるを知りて三五曰へらく、汝が訟ふる者の來らん時、我聞に聽かん。乃命じて、彼をヘロデの公廨に守らしめたり。

第二十四章

一　五日の後、司祭長アナニヤは長老等及び一の辯士テルトゥルと與に下りて、パウロを方伯に訟へたり。二パウロが召されし時、テルトゥル訟へて曰へり、三尊憲なるフェリクスよ、我等が爾に由りて太平を獲、且此の民が爾の賢慮に藉りて善く治めらるゝことは、我等時に隨ひ、處に隨ひ感謝に堪へずして、之を承け認む。四然れども我多く爾を煩はさずして、爾の寛宥を以て我等の片言を聽かんを求む。五我等は此の人を見て、疫病の如き者、天下に居る悪くの異端の首たる者、ガ殿を汚すことをも試みし者と爲して、彼を執へ、我が律法に依りて審かんと欲せり。六然れども千夫長リシヤ來りて、甚しく強ひて、彼を我等の手より奪

ひて、爾に遣し、八我等彼を訟ふる者にも爾に往くを命ぜり。爾自ら彼を訟ふる諸端を知るを得ん。九イウデヤ人も之を確めて、此等の事誠に然りと云へり。一〇方伯首を以て示して、パウロルに言はしめたれば、彼答へて曰へり、我爾が多年此の民に公義の審判者たるを知れるが故に、更に喜びて我が事情を辯ぜん。一一爾知るを得べし、我禮拜の爲にイエルサリムに上りしより、十二日を踰えず、一二而して彼も、會堂に於ても、城に於ても、人と爭論し、或は民を亂すを見ざりき。一三亦今我を訟ふる事を確證するを得ず。一四我惟此の事を爾の前に承け認む、即ち我が先祖の神に事へ、凡そ律法と諸預言者とに錄されし事を信じ、一五神に賴りて、義及び不義なる死者の復活のあらんことを望む、彼等も亦望む所の如し。一六故に我自らも勵みて、恒に神の前及び人の前に責なきを勉む。一七多年を歷て後、我は施濟を我が民に爲し、又禮物を獻ぜんが爲に來れり。一八之を行ふ際、我已に潔まりて、民と偕に在らず、騷擾の中に在らざるを、殿に見たる人あり。一九此れ即アシヤより來りし數イウデヤ人なり、彼等若し

我に對して言ふべきことあらば、今爾の前に在りて、我を訟ふべかりしなり。二〇 抑茲に在る者は、我が公會の前に立てる時、我に何の不義あるを見しか、之を言ふべし。二一 或は此の一言か、卽我は彼等の中に立ちて、呼びて、我死者の復活の教の爲に今日爾等より審を受くと、曰ひしことなり。二二 ヱリクス聞き竟りて、更に詳に斯の道を知りて、彼等の事を延ばして曰へり、千夫長リシヤの來らん時、我爾等の訟を定めん。二三 是に於て百夫長に命じて、パヱルを守らしめ、而して之を緩やかにし、其近親の何人にも彼に事へ、或は彼に來るを禁ぜざらしめたり。二四 數日の後、ヱリクスは其妻イウデヤの女ドルシラと與に來り、パヱルを召して、其ハリストスイイススを信ずる道を講ずるを聽けり。二五 彼公義と節制と將來の審判とを講ずるに、ヱリクス漸く懼れて、答へて曰へり、今退け、我暇を得ば、爾を召さん。二六 且彼はパヱルが釋を得ん爲に彼に金を與へんことを望めり、故に屢之を召して共に語れり。二七 然れども二年を越ゐて、ポルチイヱストはヱリクスに代りて、其職を承けたり。ヱリクス悅をイウデヤ人に得んと欲して、パヱルを遺して、仍其繫を釋かざりき。

第二十五章

一 ヱストは任地に蒞みて三日の後、ケサリヤよりイエルサリムに上
れり。二 時に司祭長とイウデヤの尊者とはパヱルを彼に訟へ、且彼に勸めて、三 恩を賜
ひて、之をイエルサリムに召し出さんことを求めたり、竊に之を途に殺さんと謀れる
なり。四 然れどもヱスト答へて曰へり、パヱルは護られてケサリヤに在り、我も速に彼處
に赴かん。五 故に爾等の中の有能なる者、我と偕に下りて、若し此の人に何の不義かあ
らば、之を訟ふべし。六 彼等の中に居ること十日を過ぎずして、ケサリヤに下り、明日審
判座に坐し、命じて、パヱルを引き至らしめたり。七 既に至れば、イエルサリムより下り
しイウデヤ人環り立ちて、多くの重き罪をパヱルに負はしめたれども、其證を擧ぐる
能はざりき。八 彼辯じて曰へり、我はイウデヤの律法、或は殿、或はケサリに對して、一も
罪を犯しゝ事なし。九 ヱストはイウデヤ人の悅を得んと欲して、パヱルに答へて曰へ
り、爾イエルサリムに上りて、彼處に此の事に付きて、我より審判を受けんことを望む
か。一〇 パヱル曰へり、我はケサリの審判の堂に立つ、我此の處に於て審判を受くるは
當然なり。我一もイウデヤ人に不義を爲しゝことなし、爾も善く知る所の如し。一一 蓋

若し我不義を爲して、死に當る事を犯しゝならば、我死を辭せず、然れども我を訟ふる所一も我に有らずば、誰も我を彼等に付す能はず。我ケサリヤに上告す。二一其時フストは議官と相議りて、答へて曰へり、閣ケサリに上告すと言へり、然らばケサリに往かん。二二數日を越ねて、アグリッパ王及びベレニカはケサリヤに來りて、フストの事を王に告げて曰へり、此に一人の囚あり、二三ペリクスの遺しゝ一人の囚あり、二四彼處に居ること日久しきに因りて、フストはパウロの事を王に告げて曰へり、二四彼處に居ること日久しきに因りて、フストはパウロの事を王に告げて曰へり、此に在りし時、司祭諸長老等さイリデヤの長老等さ之を訟へて、罪に定めんことを請へり。二五我イエルサリムに在りし時、司祭諸長老等さイリデヤの長老等さ之を訟へて、罪に定めんことを請へり。二六我彼等に答へて曰へり、訟ふる者の面前に於て、其訟ふる所を辯解すべき機を未だ得ざる先に、之を死に付すは、ロマ人の例に非ず。二七故に彼等が此に來りし時、我遲延せずして、次の日審判座に坐し、命じて、其人を引き至らしめたり。二八訟ふる者彼を環り立ちて、一も我が逆め料りし罪を擧げざりき。二九彼等唯己の宗教の事、及び死せし一人のイエスス、パウロが其生くと云ふ者の事に付きて爭論せり。三〇我此くの若き疑問を決するに惑ひて、彼にイエルサリムに往きて、彼處に此の事の爲

に審判を受けんことを望むかと曰へり、二一パウロトの審問を俟たんと欲せしに因りて、我彼を命ぜり。二二アグリッパは乏スト に謂へり、我も此の人に聽かんことを日爾彼に聽かん。二三明日アグリッパ及び乏レニカが大に威儀を設けて來り、諸千夫長と邑の尊者と偕に審判堂に入りし時、乏ストの命に因りて、パウロは引き出されたり。二四乏スト曰へり、アグリッパ王及び凡そ我等と共に在る人よ、爾等が見る所の者は、即ちイウデヤ人の大衆がイエルサリムにも此處にも我に訴へて、且らずと呼びし者なり。二五然れども我之を糺して、其一も死に當る事を爲さざりしを知れり、而して彼自らアウグストに上告すと言ひしに由りて、彼を送らんことを定めたり。二六我は彼に就きて君主に上書すべき實情を得ず、故に彼を爾等特に爾アグリッパ王の前に引き出せり、豫審の後に、我が上書すべき事を得んが爲なり。二七蓋我は囚人を送りて、其罪案を具へざるを、理に合はずと意へり。

第二十六章

一アグリッパはパウロに謂へり、爾に己の爲に辯ぶるを許されたり。是

に於て、パウロ手を伸べて、辯じて曰へり、ニアグリッパ王よ、我がイウデヤ人に訟へられし事を、今日悉く爾の前に辨解するを得るは、我幸なりとす、三殊に爾がイウデヤ人の盡くの例と爭論の諸端とを知るに因る。故に爾に求む、寛に我を聽かんことを。四始めて我が民の中にイエルサリムに送りたる我が生命は、我が幼より、イウデヤ人皆之を知る、五彼等若し證を作さんと欲せば、素より我が嘗て我等の宗教の中に、ファリセイとして生を度りしを知る。六今も我が立ちて審判を受くるは、神より我が先祖に賜ひし許約の望の爲なり、七是れ我が十二支派が日夜熱心に奉事して、成就するを見んと望む所なり。アグリッパ王よ、此の望の爲に我イウデヤ人に訟へられたり。八何ぞや、神が死者を復活せしむるを爾等信じ難しとするか。九我も曾て多方を以てイエスナゾレイの名に敵すべしと意へり。一〇イエルサリムに於て我果して是を行へり、司祭諸長より權を受けて、我多くの聖徒を獄に閉し、彼等の殺さるゝ時、我之を贊諾し、一一諸會堂に於て屢彼等を苦めて、強ひてイエスを毀らしめ、彼等に敵して甚しく狂ひ、外邑にまで彼等を窘逐せり。一二是が爲に司祭諸長より

權を委任されて、ダマスクに往く時、一三 王よ、我正午途中に於て、天より光あるを見たり、日の光よりも耀きて、我及び共に行く者を環り照せり。一四 我等皆地に仆れ、我はエウレイの言を以て我に言ふ聲を聞けり、曰く、サウル、サウル、何ぞ我を窘逐するや、爾が刺を蹈むは難し。一五 我曰へり、主よ、爾は誰たるぞ。彼曰へり、我は爾が窘逐するイイスなり。一六 然れども起きて、爾の足にて立てよ、蓋我が特に爾に現れしは、爾を立てゝ、役者と爲し、爾が見し事及び我が爾に示さんとする事の證者と爲さん爲なり、一七 我爾を民及び異邦人より拯はん。今爾を彼等に遣して、一八 其目を啓かしむ、彼等が暗より光に轉じ、サタナの權より神に歸し、我を信ずるに因りて、罪の赦、及び聖せられし者と偕に業を獲ん爲なりと。一九 故にアグリッパ王よ、我天の顯現に逆はざりき。二〇 乃先づダマスク及びイエルサリムの人に、次ぎてイウデヤの全地及び諸異邦人に、悔改に合ふ行を爲すべき事を傳へたり。二一 此が爲にイウデヤ人我を殿に執へて、裂き殺さんと欲せり。二二 然れども我は神より佑を蒙りて、今日に至るまで立ちて、小き者にも大なる者にも證を作し、諸預言者及びモイセイが

必成らんと言ひし事の外に、一も言ふ所なし、二三 卽ハリストスは苦を受け、死者
の復活の始と爲りて、此の民及び異邦人に光を傳ふべかりしこと是なり。二四 彼が斯
く辯ずる時、ヱスト大なる聲を以て言へり、パヱルよ、爾は狂へり、博學は爾を狂はしむ。
二五 彼曰へり、尊憲なるヱストよ、我は狂へるに非ず、乃眞實にして正慧なる言を陳
ぶるなり。二六 我が毅然として語るを聞く王は、此等の事を知る。蓋我は此等の一も彼
に隱されしを信ぜず、此れ僻隅に行はれし事に非ざればなり。二七 アグリッパ王よ、爾は
諸預言者を信ずるか、我爾が信ずるを知る。二八 アグリッパはパヱルに謂へり、爾我を勸
めて「ハリスティアニン」たらしめざること少しのみ。二九 パヱル曰へり、神に禱らくは、少
しくも多くも爾のみならず、乃凡そ今日我に聽く者は、此の械繫の外、我に同じき者と
爲らん。三〇 彼が此を言ひて後、王と方伯とヱレニカ及び共に坐する者は起ち、三一 退
きて、相語りて曰へり、此の人は一も死或は械繫に當る事を行はず。三二 アグリッパはヱ
ストに謂へり、此の人若しケサリに上告すと言はざりしならば、釋さるべき者なり。是
を以て方伯は彼をケサリに送らんことを定めたり。

第二十七章

一 我等已にイタリヤに航らんことを定められたれば、パウロと他の或囚者等とを、アウグストの隊の百夫長ユリアスと名づくる者に付せり。二 我等はアシヤの諸所を經んとするアドラミトの舟に登りて行けり。マケドニヤのテサロニカの人アリスタルフ我等と偕にせり。三 次の日シドンに着けり。ユリイは善くパウロを待ひて、彼に親友に往きて、其愛顧を受くることを許せり。四 既に彼處を發ち、風の逆ふに因りてキプルに沿ひて過ぎ、五 キリキヤ及びパムフィリヤに對へる海を渡りて、リキヤのミラに至れり。六 彼處に在りて百夫長はイタリヤに往くアレキサンドリヤの舟に遇ひて、我等を之に乘せたり。七 多日の間舟の行くこと遲く、僅にクニドの對面に至り、風の逆ひて、我等を阻むに因りてクリトの下を行きて、サルモンを經、八 僅に之を過ぎて、佳き邑ありラセヤに近傍にラセヤの對面に至れり、其近傍にラセヤの對面に至れり、其近傍にラセヤの對面に至れり、其

二 此の湊は冬を過すに便ならざれば、多くの者は彼處を離れて、或は能すべくばフィニカに至りて、彼處に冬を過さんことを勘めたり、是れクリトの湊にして、西南と西北との風隙に起りて、之に逆へり。一五 舟は風に勝へずして、駛き去られ、我等其濤ふに任せたり。一六 クラウダさす小島の下に駛せて、我等僅に小艇を收むるを得たり。一七 之を擧げて後、多方を以て舟を纏り、且淺灘に乘り上げんことを恐れて、帆を下して漾へり。一八 風の甚狂へるに因りて、次の日載貨を棄て、一九 第三日に及びて、我等手づから舟具を擲てり。二〇 多日の間日も星も現れず、烈しき風息まざるに因りて、我等の救はるゝ望竟に絶えたり。二一 彼等久しく食はざるに因りて、パウル其中に立ちて曰へり、人々よ、爾等曾て我に聽きて、クリトを離れずして、此の困難と損害とを免るべかりしなり。二二 今も我爾等に心を安んずるを勸む、蓋爾等の中一人も生命を失はず、惟舟を失はん。二三 蓋我が屬する所、我が奉事する所の神の使は、昨の夜我に

現れて二四曰へり、パヱルよ、懼るゝ勿れ、爾ケサリの前に立つべし、視よ、神は爾と偕に
航海する者を悉く爾に賜へりと。二五故に人人よ、心を安んぜよ、蓋我神を信ず、其我に
語りし如く、斯く成らん。二六我等必一の島に擲たるべし。二七第十四夜に至りて、我
等アドリヤの海に飄はさるゝ時、約夜半に、舟人は或岸に近づくと意へり。二八深を測
りて、二十仞を得たり、少しく進みて、又測りたれば、十五仞を得たり。二九石のある處に
擲たれんことを恐れて、舟尾より四の錨を投して、天の明くるを俟てり。三〇舟人は舟
より逃れんと欲し、錨を舟首より投さんとする狀を爲して、小艇を海に下ぐる時、三一
パヱルは百夫長と兵卒とに謂へり、此の人人舟に留らざれば爾等救はるゝ能はず。三
二兵卒即小舟の索を斷ちて、其墜つるに任せたり。三三天明けんとする時、パヱル衆
人に糧を取らんことを勸めて曰へり、爾等食はずして、飢ゑて俟つこと、今已に十四日
なり。三四故に我爾等に糧を取らんことを勸む、是れ爾等の救の助と爲らん、蓋爾等の
一人にも、髮一縷だに首より隕ちざらん。三五言ひ竟りて、餅を取りて、衆人の前に神に
感謝し、擘きて先づ食へり。三六是に於て衆人心を安んじて、亦糧を取れり。三七我等舟

に在りし者は、共に二百七十六人なりき。三八既にに食ひて飽き、麥を海に棄てゝ、舟を輕くせり。三九天明けて、其地を識らざりき、然れども一の海灣の登るべき岸あるを見て、能すべくば、彼處に舟を着けんと謀れり。四〇乃錨を擧げ、舵の繩を緩べ、小き帆を揚げ、風に順ひ、岸を望みて進めり。四一二水の交り流るゝ處に至りて、舟を洲に乘り上げ、舟首は膠く着きて動かず、舟尾は浪の勁きに因りて破れたり。四二兵卒は囚人を殺さんと議れり、其泅ぎて逃るゝ者なからん爲なり。四三然れども百夫長はパウルを救はんと欲して、其議る所を阻み、能く泅ぐ者に、先づ水に投じて岸に登り、四四其餘の者に、或は板に乘り、或は舟の他物に藉らんことを命じたり、是くの如く皆救はれて、岸に登れり。

第二十八章

一パウルと偕に在りし者は、既に舟より救はれて、島のメリトと名づくるを知れり。二土人は少からざる惠を以て我等を待へり、蓋雨ふり、且寒きに因りて、彼等火を燃きて、我等衆人を納れたり。五パウルが多くの柴を集めて、火に置きし時、蝮熱の爲に出でゝ、其手に繞へり。四土人は蛇の其手に懸るを見て、相語りて曰へり、此の

人は必殺人者ならん、海より救はれたれども、義は其生くるを容さず。五然れども彼は
蛇を火に拂ひて、毫も害を受けざりき。六彼等は其腫れんか、或は忽仆れて死なんかと
俟ちたりしに、久しく俟ちたれども、彼に毫も害の及ばざるを見て、意を轉じて、彼は神
なりと謂へり。七此の處に近く、島の長プブリイと名づくる者の田地あり、彼は我等を
接けて、三日間慇懃に待へり。八プブリイの父熱と痢病とを患ひて臥したるに、パヱル
彼に入りて禱り、手を其上に按せて、彼を愈せり。九是の事のありし後、島の中の他の病
者も來りて、醫さるゝを得たり、一〇乃禮を優にして、我等を敬ひ、別るゝに臨みて、需
むる所の者を贈れり。一一三月の後、我等は此の島に冬を過しゝ「ディチスクリ」と號する、
アレキサンドリヤの舟に乘りて發せり。一二シラクジに着きて、三日間止り、一三彼處
より繞り行きて、リギヤに至り、一日を越えて、南風起りたれば、次の日ブテチリに至り、
一四此に兄弟に遇ひ、其請に任せて、七日間彼等と偕に居り、遂にロマに往けり。一五彼
處の兄弟は我等の事を聞きて、アッピイの市及び三の旅館まで出でゝ、我等を迎へたり。
パヱル彼等を見、神に感謝して、心勇みたり。一六ロマに來りし時、百夫長は囚人等を將

軍に交せり、然れごも
三日を越ねて、パウルはイウデヤの諸長者を招けり、彼等の集りし時、之に謂へり、兄弟よ、我は一も民或は先祖の例に悖る事を爲さざりしに、イエルサリムより囚と爲りて、ロマ人の手に付されたり。一八彼等我を審べて、一も死罪なきが故に、我を釋さん欲せり。一九惟イウデヤ人が之を拒みしに因りて、我已むを得ずして、我が民を訟へんが爲に非ず。二〇是の故に我曾等を見、爾等と語らんことを請へり、蓋我はイズライリの望の爲に此の鐵索に繋がれたり。二一彼等之に謂へり、我等はイウデヤより書を受くることなく、又來れる兄弟の中に、爾の事を告げ、或は何の惡しき事をも語る者もなかりき。二二然れごも我等は爾が懷ふ所の若何を聞かんこと欲す、蓋我等は何處に於ても此の宗派に就きて爭論あるを知る。二三乃日を定めて、多數の人彼に旅館に來れり、彼は朝より暮に至るまで、彼等に神の國の教を宣べ、モイセイの律法及び諸預言者より證を引きて、彼等にイイスを信ずるを勸めたり。二四或者は其言ふ所を信じ、或者は信ぜざりき。二五互に相合はずして散ずる時、

パウル一言を發して曰へり、聖神が預言者イザヤを以て、我が先祖に言ひし事は誠に善し、二六云く、斯の民に往きて曰へ、爾等耳にて聽けども、悟らず、目にて視れども、見さらん。二七蓋此の民の心は頑になれり、耳は聽くに慵く、目は自ら閉ぢたり、恐らくは目にて視、耳にて聞き、心にて悟り、轉じて我が神の救は異邦人に遣されたり、彼等は則聽かん。二九彼が之を言ひし後、イウデヤ人多く相論じて歸れり。三〇パウルは滿二年自ら借りたる家に居り、凡そ彼に來る者を接け、三一毅然として、妨なく、神の國を傳へ、主イエスス・ハリストスの事を教へたり。

聖使徒イアコフの公書

第一章

一 イアコフ、神及び主イイスス・ハリストスの僕は、散じ處る十二支派の安を
と問ふ。二 我が兄弟よ、爾等種種の試誘に遇ふ時は、之を大なる喜さ爲せ、三 爾等の信の試
は忍耐を生ずるを知ればなり。四 惟忍耐は完全なる行爲を顯すべし、爾等が完備純全
にして、一も缺くる所なからん爲なり。五 若し
夫の咎むるなくして、徑に衆に與ふる神に求むべし、然らば彼に與へられん。六 惟信を
以て、毫も疑はずして求むべし、蓋疑ふ者は風に掀げられて碎かるゝ海の浪に似たり。
七 此の若き人は何をか主より受けんさ想ふ勿れ。八 貳心の人は其凡の路に於て固か
らず。九 卑き兄弟は其高きを以て誇さ爲し、一〇 富める者は其卑きを以て誇さ爲せ、蓋
彼は草の花の如く逝ぎ去らん。一一 日出でゝ、熱して草を枯らせば、其花は落ち、其容の美し
きは亡ぶ、富める者も是の如く其途に枯る。
蓋 其 試みられて後、主が彼を愛する者に約せし生命の冕を受けん、一二 忍耐して試誘を受くる人は福なり、
誘はるゝ時、

何人も我神に誘はるゝ言ふ勿れ、蓋神は惡に誘はれず、自も亦人を誘はず。一四 即人
各己の慾に引かれ、餌せられて、誘はるゝなり。一五 慾既に孕みて、罪を生じ、罪成りて、
死を生ず。一六 我が至愛の兄弟よ、自ら欺く勿れ。一七 凡の善なる施、凡の全備なる賜
は、上より、光明の父より降るなり、彼には變易なく、遷移の影もなし。一八 彼は己の旨に
循ひて、眞實の言を以て、我等を生めり、我等が其造りし物の初實の果と爲らん爲なり。
一九 故に我が至愛の兄弟よ、凡の人は聽くに速に、言ふに遲く、怒るに遲かるべし。二〇
蓋人の怒は神の義を行はず。二一 是を以て爾等凡の汚と餘れる惡とを去りて、溫柔に
して、栽うる所の言、能く爾等の靈を救ふ者を接けよ。二二 且言を行ふ者と爲れ、第聞く
のみにして、己を欺く者と爲る勿れ。二三 蓋言を聞きて行はざる者は、其本來の面を
鏡に視る人に似たり。二四 彼は己を視て去り、直に其若何なるかを忘れたり。二五 然れ
ども自由の全備なる律法を鑒みて、之に居る者は、彼聞きて忘るゝ者に非ず、乃功を
行ふ者と爲りて、其行ふ所に福ならん。二六 若し爾等の中誰か自ら敬虔なりと意ひて、
己の舌に勒を著けず、乃己の心を欺かば、其敬虔は徒然なり。二七 神及び父の前に純

潔にして無玷なる敬虔は、卽孤と嫠とを其患難の間に顧み、且自ら守りて、世に汚
されざるに在り。

第二章

一我が兄弟よ、爾等は我が光榮の主イイススハリストスを信じて、貌を以て
人を取る勿れ。二蓋若し人金の鐶を穿め、美しき衣を着て、爾等の會堂に入り、亦貧しき
人惡しき衣を着て入らんに、三爾等美しき衣を着たる者を顧みて、之に爾は此に善き
處に坐れと曰ひ、貧しき者に爾は彼處に立て、或は此に我が足下に坐れと曰はゞ、四
則爾等己の衷に判斷して、惡しき念ある裁判者と爲るに非ずや。五我が至愛の兄
弟よ、之を聽げ、神は豈斯の世の貧しき者を選びて信に富ませ、彼を愛する者に約せし
國を嗣がしむるに非ずや。六然るに爾等は貧しき者を藐しめたり。富める者は爾等を
虐げ、爾等を裁判所に曳くに非ずや。七彼等は爾等が稱へらるゝ美名を瀆すに非ずや。
八若し爾等書に載する所の王法、隣を愛すること己の如くせよと云ふを行はゞ、則善
く行ふなり。九然れども若し貌を以て人を取らば、則罪を行ひ、律法に對して犯罪者
と爲るなり。一〇全律法を守りて、其一を犯す者は、全律法を犯すなり。一一蓋淫する母

れこ言ひし者は、亦殺すべしと言へり、然らば爾淫せずこと雖、殺すことを犯す者となるなり。一二　爾等言ふ所、自由の律法に由りて審判を受けんとする者の如くすべし。一三　蓋矜恤を施さゞりし者は審判せらるゝ時に矜恤を獲ざるべければなり。矜恤は審判に勝つなり。一四　我が兄弟よ、若し人自ら信ありこと謂ひて、行なくば、何の益かあらん、信能く彼を救ふか。一五　若し兄弟或は姉妹裸にして、日用の糧に乏からんに。一六　爾等の中の或人、之に安然として往け、温にして飽くを得よと曰ひて、其身に需むる者を之に與へずば、何の益かあらん。一七　是くの如く信も亦行なければ、自ら死せる者なり。一八　人或は言はん、爾に信あり、我に行ありと、我に示せ、我は我が行に由りて、我が信を爾に示さん。一九　爾神は一なりこ信ずるか。善し、魔鬼も亦信じ、而して慄く。二〇　虚誕の人よ、爾は行を兼ねざる信の死せる者なるを知らんこと欲するか。二一　我等の先祖アウラアムが、其子イサアクを祭壇の上に献げて、義とせられしは、行に由ろに非ずや。二二　爾見るか、信は彼の行を助け、又行によりて、信は全きを獲たり。二三　斯く聖書の云ふ所應へり、アウラアムは神を信ぜり、此

れ彼に歸して義と爲れり、且彼は紳の友と稱へられたり。二四 然らば爾等之の義させらるゝは行に由りてなり、唯信に由るには非ず。二六 同じく妓婦ラアフも、偵使を納れて、之を他の途より歸らしめて、義させられしは、行に由るに非ずや。二六 蓋靈なき體の死せる者なるが如く、斯く行なき信も亦死せる者なり。

第三章 一 我が兄弟よ、多くの者師と爲るな勿れ、我等が鞫を受けんこと更に嚴しきを知ればなり。二 蓋我等皆多く愆を爲す。若し人言に愆なくば、是れ全き人にして、其全體をも勒を着くるを得るなり。三 視よ、馬の我等に馴はんが爲に、我等勒を其口に置きて、其全體を駈す。四 視よ、又舟は大なるも者にして、且烈しき風に逐はるゝも雖、小き舵を以て舵手の望む所に運轉せらる。五 是くの如く舌も小き體なりと雖、大なるを以て誇る。視よ、微なる火は物を燃すこと何ぞ多き。六 舌も亦火なり、不義の飾なり、舌は我が百體の中に在りて、能く全體を玷し、能く我が一生の範圍を燃して、已は地獄より燃さる。七 蓋凡の禽獸昆蟲鱗介の類は制せらる且人類に制せられたり。八 惟舌は、人能く之を制すること能はず、惡にして、死の毒を滿つる者なり。九 我等之を以て神及び父を

祝讃し、亦之を以て神の肖に循ひて造られたる人人を詛ふ。一〇一の口より祝讃と詛ふ事あるべからず。一一泉は一の穴より甘き及び苦き水を出すか。一二我が兄弟よ、無花果の樹は橄欖を結び、或は葡萄の樹は無花果を結ぶ能はず。鹹き泉は一つみにては甘き水を出す能はず。一三爾等の中智慧及び見識ある者は誰ぞ、善き行に由りて、智慧の柔和なる温柔を以て、其為す所を彰すべし。一四然れども若し爾等心の中に苦き嫉妬と怨争とを懐かば、誇る勿れ、眞実に対して謊る勿れ。一五此の智慧は上より降るに非ず、乃地に属し、霊に属し、覚鬼に属する者なり。一六蓋嫉妬と怨争とある所には、乱と凡の悪しき事とあるなり。一七上よりする智慧は第一に潔浄、次に和平、温良、柔順にして、矜恤及び善き果を充て、偏視せず、偽善ならず。一八義の果は、和平を行ふ者に、和平を以て種かる。

第四章

一爾等の中に戦闘と争競とは何よりするか、此より、即爾等の百體の中に戦ふ諸慾よりするに非ずや。二爾等貪れども、得ず、殺し嫉めども、及ぶ能はず、爭ひ闘へども、得ず、求めざるが故なり。三求むれども、受けず、爾等の慾の為に費さんとして、妄に求

むろが故なり。四姦淫の男女よ、爾等は世の友たるは、是れ神に對して仇たるか、故に世の友と爲らんと欲する者は、神の仇と爲るなり。五爾等或は聖書の言ふ所を虚しと意ふか、曰く、我等の中に居る神は、愛して嫉に至るまで、大然れども更に大なる恩寵を賜ふ、故に曰く、神は誇る者に敵し、謙る者に恩寵を賜ふと。六是を以て爾等神に服し、惡魔に敵せよ、然らば彼爾等より逃れん。八神に近づけ、然らば彼爾等に近づかん。罪人よ、爾等の手を淨くせよ、二心の者よ、爾等の心を潔くせよ。九苦め、哀め、哭け、爾等の笑は哀に、歡は憂に變ずべし。一〇主の前に自ら卑くせよ、然らば彼爾等を高くせん。一一兄弟よ、相謗ろな、兄弟を謗り、或は其兄弟を議する者は、律法を謗り、律法を議するなり、爾若し律法を議せば、律法を行ふ者に非す、乃審判者なり。一二立法者及び審判者、能く救ひ能く滅す者は一なり、爾他人を議する者は誰ぞ。一三今日或は明日我等某の邑に往き、一年彼處に居り、貿易して利を獲んと言ふ者よ、

一四爾等は明日如何にならんを知らず、蓋爾等の生命は何ぞ、暫く現れて遂に消ゆる霧なり。一五爾等は之に易へて云ふべし、若し主の旨に適ひ、又我等生きば、此或は彼を

爲さんと。一六 爾等驕に依りて高ぶる、凡そ此くの如き高慢は惡なり。一七 故に善を行ふを知りて、之を行はざる者は罪あり。

第五章 一 今聽け、富める者よ、爾等に臨む所の苦難の爲に泣き號べ。二 爾等の衣は蠹くひ、三 爾等の金銀は銹びたり、其銹は證を爲して、爾等を攻め、且火の如く爾等の肉を蝕まん、爾等は末の日の爲に財を積めり。四 視よ、爾等の田を穫りし工人に爾等が給せざる値は顧び、且刈りし者の呼聲は主「サワオフ」の耳に至れり。五 爾等地に在りて奢り樂めり、爾等の心を養ひしこと、屠宰の日に備ふるが如し。六 爾等義者を卽に定めて、之を殺せり、彼は爾等を拒まざりき。七 兄弟よ、恒に忍びて、主の臨むに及べ。視よ、農夫は地の貴き產を待ちて、是が爲に久しく忍び、前後の雨を得るに迨ぶ。八 爾等も恒に忍び、爾等の心を堅くせよ、蓋主の臨むこと邇づけり。九 兄弟よ、相怨む勿れ、恐らくは罪に定められん、視よ、審判者は門の前に立つ。一〇 我が兄弟よ、主の名に依りて言ひし諸預言者を以て、苦難と恒忍との式とせよ。一一 視よ、我等に忍耐せし者を福なりとす。爾等曾てイオフの忍耐を聞き、且主の如何に之を終へしを見たり、蓋主は至仁

にして矜恤なり。一二 我が兄弟よ、首こして誓を發する勿れ、或は天を以て、或は地を以て、或は他物を以て誓ふ勿れ、爾等惟是を以て是と爲し、否を以て否と爲すべし、恐らくは罪に陷らん。一三 爾等の中に苦しむ者あらば、祈禱すべし、樂しむ者あらば、詠を歌ふべし。一四 爾等の中に病む者あらば、教會の長老等を招くべし、彼等主の名に依りて、彼に油を傳けて、彼の爲に祈禱すべし。一五 信に由る祈禱は病める者を救ひ、主は彼を起さん、若し彼罪を行ひしならば、赦されん。一六 爾等互に己の過を認め、又互に祈れ、癒されん爲なり、善義者の熱切なる祈禱は多くの力あり。一七 イリヤは我等と同情の人なりしが、雨ふらざらんことを切に祈りたれば、三年六月を歷たり。一八 復祈りたれば、天は雨を與へ、地は其產を生ぜり。一九 兄弟よ、若し爾等の中に眞の道より迷へる者ありて、孰か之を正しきに反らしめば、二〇 知るべし、罪人を其迷へる道より反らしめし者は、靈を死より救ひ、多くの罪を掩はん。

聖使徒ペトルの前公書

第一章

一 ペトル、イイススハリストスの使徒たる者は、ポント、ガラティヤ、カッパドキヤ、アシヤ、及びフィフィニヤに散じ處る旅客、二 神父の預知に依りて、神の成聖を以て、順服の爲、及びイイススハリストスの血の灑を受くる爲に選ばれたる者に書を達す。願はくは恩寵と平安とは爾等に增さんことを。三 祝讃せらるゝ哉神、我が主イイススハリストスの父、彼は其大なる慈憐に依りて、イイススハリストスの死よりの復活を以て、我等を活くる望、四 朽ちず玷れず衰へざる嗣業の爲に復生せしめたり。是の嗣業は爾等の爲に天に藏められたり、五 蓋爾等は末の時に顯れんとする救の爲に、神の能力を以て、信に由りて、護らるゝなり。六 爾等此に因りて喜べ、今之を要せば、種種の試誘に因りて、暫く憂ふることありと雖、七 是れ特に爾等の試みられたる信は、火に試みらるとも滅ぶべき黃金よりも至と貴くなりて、イイススハリストスの顯現の時に稱讃尊貴光榮を得ん爲なり。八 爾等イイススハリストスを見ずして愛し、今彼を見ざれども、信

じて、言ひ難く且光榮なる喜を以て喜ぶ、九爾等の信の目的、卽靈の救を獲ればなり。
一〇此の救は、爾等が蒙る恩寵を預言せし諸預言者、之を探り、且尋ねたり、一一彼等は
其衷に在りしハリストスの神が、預めハリストスの苦及び之に從ふ光榮の事を證し
て、何の時又如何なる時を示しゝかを究めたり、一二彼等默示に因りて、此等の事は己
の爲ならずして、我等の爲なるを知れり、卽今天より遣されし聖神に藉りて福音せし
者が爾等に傳へし事、天使等も窺はんと欲する所の事なり。一三故に爾等の心の腰を
束ね、敬醒して、イイススハリストスの顯現の時に、爾等に賜ふ所の恩寵を全く望め。一
四孝順なる子の如くにして、先の蒙昧の時の慾に效ふ勿れ、一五卽爾等を召したる
聖なる者に效ひて、己も亦凡そ行ふ所に聖なれ。一六蓋錄して云へるあり、我聖なるに
因りて、爾等も聖なれと。一七爾等若し貌を以て人を取らずして、各人を其行に由りて
審判する者を父と名づけば、惕れて、世に寄る時を度れ、一八蓋知る、爾等が先祖より傳
はりたる空しき度世より贖はれしは、壞るべき金銀を以てせしに非ず、一九乃疵な
く玷なき羔の如きハリストス、二〇創世の先より預定せられ、末の時に及びて爾等の

爲に現れし者の貴き血を以てせしなり、二一 爾等彼に由りて神を信ぜし死より復活せしめて、彼に光榮を賜へり、爾等が二二 爾等聖神に由りて、眞實に循ふを以て、己の眞めて、潔き心を以て篤く相愛せよ、二三 蓋爾等は朽つる者より、生きて世世に存する神の言に由りて重生せられたり。二四 蓋凡の人の光榮は草の如く、凡の人の光榮は草の花の如し、草枯れて、其花は落ちたり、二五 然れども主の言は世世に存す、此れ即爾等に福音せられし言なり。

第二章　一 故に爾等凡の詭譎、僞善、嫉妬、凡の誹謗を去りて、二 嬰孩の如く、純眞なる靈智の乳を慕へ、之に由りて救に長ぜん爲なり、三 蓋爾等は主の仁慈なるを味ひたりや。四 爾等は彼、即人に棄てられ、神に選ばれたる、貴き活ける石に就きて、五 自も亦活ける石の如く、己を以て屬神の堂、聖なる司祭班を建てよ、イエスハリストスに由りて、神の悦び納るゝ所の屬神の祭を獻げん爲なり。六 蓋聖書に錄して云く、視よ、我選ばれたる貴き屋隅の石をシオンに置く、彼を信ずる者は羞を得

さらんと。七 故に彼は爾等信ずる者の爲には寶、信ぜざる者の爲には石にして、屋隅の首石と爲りし者、躓く、彼等亦此が爲に定められたり。九 然れど爾等は選ばれたる族、王たる司祭班、聖なる人民、神の業となりし民なり、是れ爾等を幽暗より其奇妙なる光に召したる者の盛徳を彰さんが爲なり、一〇 爾等素民に非ざりしが、今は神の民なり、我爾等を蒙りし者なり。一一 至愛の者よ、我れ爾等を旅客及び寄寓者として求む、靈を攻むる肉慾を防ぎて、一二 異邦人の中に善き行を爲せ、彼等爾等を惡者と云へる者が、爾等の善き所爲を見て、眷顧の日に於て神を讃榮せん爲なり。一三 故に爾等凡の人の定制に服へ、或は王に於てせよ、其上に在るを以てなり、一四 或は有司に於てせよ、其彼より惡を行ふ者を罰し、善を行ふ者を賞する爲に遣さるゝを以てなり。一五 蓋我等が善を行ひて、愚人の無知の言を止むるは、神の旨なり、一六 我等自由の者なれど、惡を蔽はん爲に自由を用ゐる者に非ず、神の僕なるが故なり。一七 衆人を敬ひ、諸兄弟を愛し、神を畏れ、王を尊め。一八 僕よ、畏れを以て主人に服へ、惟

善良の者、柔和の者に於けるのみならず、苛刻の者にも然すべし。一九 蓋若し人無法の苦を受け、神を念ひて憂に堪へば、此れ神の喜ぶ所なり。二〇 若し爾等罪を犯して、撻たれて之を忍ばゝ、何の譽かあらん、然れども若し善を行ひて、苦を受けて、忍ばゝ、此れ神の嘉する所なり。二一 爾等の召されたるは此が爲なり、蓋キリストも我等の爲に苦を受けて、我等に式を遺せり、我等が其跡に隨はん爲なり。二二 彼は罪を行はず、其口に詭譎なかりき。二三 彼は詬られて、詬を反さず、苦を受けて、喝さざりき、乃之を義なる審判者に託せり。二四 彼は我等の罪を自ら己の身に任ひて、木の上に擧げたり我等が罪を絶ちて、義に生きん爲なり、彼の傷に由りて爾等醫されたり。二五 蓋爾等は素(牧者)なき迷へる羊の如くなりしが、今は爾等の靈の牧者及び監督に歸れり。

第三章　一 婦よ、爾等も亦其夫に順へ、或は彼等の中に言に由らずして、其婦の行に由りて獲られん爲なり、二 即爾等の貞潔にして見るに因りてなり。三 爾等の飾は、髮を辮み、金を著け、或は衣を粧ふ事のみなるべからず、四 乃心の内の隱れたる人、溫柔恬靜なる神の朽ちざる華美を粧ふ者

なるべし、此れ神の前に貴し、五蓋昔神を頼みし聖なる婦も、斯く己を飾りて、其夫に順へり、大サラがアブラアムに順ひて、之を主と稱へしが如し、爾等若し善を行ひて、何の難き事をも恐れずば、彼の子たるなり。七夫よ、爾等も亦智慧を以て其婦と偕に居り、之を愚婦の如く、之を敬ふこと弱き器の如くせよ、爾等恩寵の生命を共に嗣ぐ者の如くせよ、爾等の祈禱に阻礙なからん爲なり。八之を要するに、爾等皆意を同じくし、醯恤を爲し、兄弟を愛し、憐憫を施し、懇切を盡し、謙遜を守れ。九惡を以て惡に、或は詬を以て詬に報ゆる勿れ、反りて祝福を嗣がんが爲に召されたるを知ればなり。一〇蓋生命を愛し、佳き日を見んと欲する者は、其舌を惡より、其口を詭譎の言より止むべし、一一惡を避けて善を行ひ、和平を求めて之を追ふべし。一二蓋主の目は義人を顧み、其耳は彼等の祈を聽く、然れども主の面は惡を爲す者に對ひて、彼等を地より滅さんとす。一三爾等若し義の爲に苦を受くとも誰か爾等を害せん。一四然れども若し義の爲に苦を受くとも福なり。彼等の威嚇を懼るゝ勿れ、亦憂ふる勿れ。一五主神を爾等の心に聖なりとせよ、凡そ爾等の望の由縁を問ふ者に、溫柔と敬虔とを以て答へんことを常に

備へよ。一六 且玷なき良心を有て、爾等を誣ひて、惡者と爲す所以に由りてストスに於ける善き行を誘る者の辱めらんが爲なり。一七 若し神の旨に適はば、善き行の爲に苦を受くるこそ、惡しき行の爲にするより愈れり。一八 蓋しキリストも一次我等の罪の爲に、義者にして不義者に代りて、苦を受けたり、我等を引きて神に詣らん爲なり、彼は身にては殺され、神にて生かされ、一九 此の神を以て下りて、獄に在る諸神に宣傳せり、二〇 昔ノイの日、方舟の造らるゝ際、神が恒忍を以て待ちたる時に於て順はざりし數の者、即八人のみ水より救はれたり。二一 此に象れる洗禮、即肉體の穢を除くに非すして、玷なき良心を神に求むる事は、今我等をも救ふ、イエスキリストの復活に由りてなり、二二 彼は天に升りて神の右に在り、諸天使と權柄と能力とは彼に服せり。

第四章

一 キリストは爾等の爲に肉體にて苦を受けたれば、爾等も亦此の意を以て自ら鎧ふべし、蓋肉體にて苦を受くる者は、罪を息めしなり、二 是れ肉體に寓れる餘日を、已に人の慾に循ひてせんより、神の旨に循ひて度らん爲なり。三 蓋爾等が過ぎたる度

生の時に、異邦人の旨に從ひて、邪僻、縱慾、沈湎、讐釁、醜むべき拜偶像を行ふこと足れり、四故に彼等は、爾等が彼等と偕に、此の放蕩の極に與らざるを異みて、爾等を誘る。五彼等は幾もなくして生者及び死者を審判せんとする者に答を爲なん。六蓋死者にも福音せられしは、彼等人に循ひて、身にて審判を受けたれども、神に循ひて生きん爲なり。七一切の終は邇づけり、故は謹愼し、且敬醒して祈禱せよ。八最要する者は、篤く相愛するに在り、蓋愛は多くの罪を掩ふ。九互に旅人を舘し、怨むこと勿れ。一〇神の種種の恩寵の善き忠信なる家宰の如く、各其受けし賜を以て、互に務めよ。一一人若し言はば、神の言さして言へ、人若し務めば、神の賜ふ力を藉して務めよ。神が凡の事に於て、イエスキリストに由りて、讃榮せられん爲なり、光榮と權能とは彼に無窮の世に歸す、アミン」。一二玉愛の者よ、試の爲に爾等に遭さるゝ火の如き苦を異しみて、異しき事柄等に遭へりとする勿れ、一三乃ちキリストスの苦に與るに因りて喜べ、其光榮の顯現の時にも喜びて樂しまん爲なり。一四若し彼等がキリストスの名の爲に爾等を誘る、彼等に因りて彼は瀆され、爾等に止る、彼等に因りて彼は瀆されず、光榮の神、神の神は爾等に

より因りて榮せらる。一五 惟爾等の中に兇殺者、或は竊盜、或は行惡者、或は猥に人の事に與る者として、苦に遇ふ者あるべからず、一六 然れども若し「ハリスティアニン」として之に遇はゞ、羞づる勿れ、乃此の分の爲に神を讃榮せよ。一七 蓋神の家より始めて、審判を行ふ時至れり、若し先づ我等より始めば、神の福音に順はざる者は、其終如何にぞや、一八 義者僅に救を得ば、不虔者と罪人とは何處にか立たん。一九 故に神の旨に循ひて苦を受くる者は、善を行ひて、其靈を信ずべき造物主に託すべし。

第五章　一 爾等の中の長老、且ハリストスの苦の證者、及び顯れんとする光榮に共に與る者に在る神の群を牧して、之を監督するには、二 爾等に順ふに因り、又神の旨に因り、又神の爲に非ず、乃熱心に因りて爲せ、三 又神の業に主たるに非ず、乃群の式と爲れ、四 然らば牧長の顯れん時に、爾等凋まざる光榮の冕を得ん。五 又爾等少き者は、長老等に順へ、且皆相順ひて謙遜を衣よ、蓋神は誇る者に敵し、謙る者に恩寵を賜ふ。六 故に爾等神の大能の手の下に自ら卑くせよ、彼が期に屆りて爾等を高くせん爲なり。七 凡そ爾等が慮る所を彼に

託せよ、蓋彼は爾等を顧みるなり。八謹愼儆醒せよ、蓋爾等の敵なる惡魔は、吼ゆる獅の如く、巡り行きて、呑むべき者を尋め。九爾等信を堅くして之を禦げ、世に在る爾等の兄弟も同じき苦に遇ふを知ればなり。一〇諸の恩寵の神、ハリストスを以て我等を其永遠の光榮に召し、主は、願はくは爾等が暫時の苦の後に、自ら爾等を全くし、堅くし、強くし、動かざらしめん。一一願はくは光榮と權能とは彼に無窮の世に歸せん、「アミン」。一二我は、シルアン、意ふに忠信なる爾等の兄弟に託して、斯の短言の書を送りて、勸を爲し、且爾等の立つ所の恩寵が神の眞の恩寵なるを證せり。一三ワワイロンに在る爾等と同じく選ばれたる教會、及び吾が子マルコ爾等の安を問ふ。一四爾等愛の接吻を以て互に安を問へ。願はくはハリストスイイススに賴りて平安は爾等衆人に在らんことを。「アミン」。

聖使徒ペトルの後公書

第一章

一シモンペトル、イエスキリストの僕及び使徒たる者は、我等と共に同じく貴き信を獲たる者に書を贈る。二願はくは恩寵と平安とは、神及びハリストスイエスの義に頼りて、我等に増さんことを。三彼の神聖なる能力より、我等に凡ら生命及び敬虔に要する事を以て我等を召し、栄盛徳に依りて、我等に貴くして大なる許約は賜はりたり、光栄さを以て我等を召し徳とを以て我等が此れを識るに由りてなり、四蓋此の光

より潔まりし事を忘れたり。一〇 故に兄弟よ、益々勉勵して、爾等の召されし事、及び選ばれし事を堅固にせよ、此等を行ひて、永く躓かざらん。一一 蓋此の如くの若くば、爾等に我等の主救主イエスス・ハリストスの永遠の國に入る恩惠は裕に加へられん。一二 故に爾等此を知り、且既に受けたる眞實に堅められたれども、我は恒に爾等に此等の事を記念せしむるを息めざらん。一三 我は此の幕に在る時、此の記念を以て爾等を勵ますは、當然の事なりと思へり、一四 蓋我は我が幕を脱せんこと速きを知る、我が主イエスス・ハリストスの我に示しゝが如し。一五 然れども我は我が去りし後にも爾等の常に此等を記念することを勉めん。一六 蓋我等は、巧なる虚説に從ひて、爾等に我が主イエスス・ハリストスの能力と降臨とを告げしにに非ず、乃其威光を親しく見たる者として然せり。一七 蓋至大なる光榮より聲の彼に來りて、此は我の至愛の子、我が喜べる者なりと曰ひし時、彼は神父より尊貴と光榮とを受けたり。一八 天より來りし此の聲は、我等彼と偕に聖なる山に在る時、之を聞けり。一九 且我等に更に確なる預言者の言あり、爾等が之を暗き處に耀く燈として、天明け、晨星の爾等の心に出づるに至るまで

顧みるは善し。二〇 首として知るべし、凡の聖書の預言の己に由りて解く能はざるを、
二 蓋預言は未だ嘗て人の旨に由りて出でしはあらず、乃神の諸聖人が聖神に感
ぜられて之を言ひしなり。

第二章 一 民の中には僞の預言者も有りき、斯く爾等の中にも僞の師は起らん、彼等
は淪亡の異端を入れ、彼等を贖ひし主宰に背きて、自ら速なる淪亡を取らん。二 多くの
者は彼等の放蕩に從はん、彼等に因りて眞實の道は謗讒を受けん。三 彼等は貪婪に由
りて、飾言を以て爾等を餌せん、彼等の審判は昔より定まりて遲はらず、彼等の淪亡は
睡れず。四 蓋神は罪を犯しゝ諸天使を容さず、乃地獄の幽暗の縲紲に繋り、之を刑の爲
に護らしめて、審判を待たしめ、五 又古世を容さず、乃不虔者の世に洪水を施して、惟
義を傳へしノイの一家八人を救ひ、六 又ソドムゴモラの諸邑を滅にて灰に變じて、後來の不虔者の鑒と爲し、七 惟義なるロト、無道の者の淫亂の行に倦みたる者を
救へり、八 蓋此の義人は彼等の中に居り、其不法の行を見且聞きて、日日其義なる靈を
傷めたり。九 然らば則主は敬虔の者を誘惑より救ひ、不義の者を刑の爲に護りて、審

判の日を待たしむるを知る、一〇特に肉に循ひて汚れたる慾を行ひ、首長を藐んずる
者に於て然りと爲す。彼等は狂妄にして我意を張り、尊者を謗るを畏れず、一一然るに
天使等は權威と能力とを以て彼等に勝ると雖、主の前に之を謗りて罪するを爲さ
ず。一二彼等は本性の無知なる獸、執はれて滅さるゝ爲に生れたる者の如く、其知らざ
る所を謗りて、己の敗壞を以て滅されん。一三彼等は不義の報を受けん、蓋彼等日日宴
樂を以て歡と爲し、既に自ら汚し、又爾等を汚す者にして、爾等と共に宴して、其詐騙を
以て樂と爲す。一四彼等は目に色慾を充て、罪を犯して已めず、彼等は堅からざる靈を
惑はす、其心は貪に慣れたり、是れ詛の子なり、一五彼等は正しき道を離れ、迷ひて
ソルの子ワラアムの蹤に從へり、卽不義の利を愛して、一六己の不法の爲に責めら
れし者なり。言なき牝驢は人の聲を出して、預言者の狂へるを止めたり。一七彼等は
水なき泉なり、暴風に逐はるゝ雲及び霧なり、永遠の幽暗は彼等の爲に備へられたり。
一八蓋彼等は誇りたる虛誕を語りて、迷へる者の中より僅に脫れたる者を肉慾と淫
亂とに誘ふ。一九之に自由を與へんと約すれども、自ら敗壞の奴隷たり、勝たるゝ者は

勝つ者の奴隷たればなり。二〇蓋若し彼等我が主救主イイススハリストスを識るに因りて、世の汚を脱れ、復之に纏はれて勝たるゝ時は、彼等の爲に後の患は先より更に甚し。二一彼等義の道を識りて、其傳へられし聖なる誡に反かんよりは、寧之を識らざるを美とす。二二彼等は正に諺に云ふ所に應へり、犬は其吐きたる物に反り、豕は滌ひ潔められて復泥に臥す。

第三章

一至愛の者よ、我今此の第二の書を爾等に達す、此等を以て記念せしめて、爾等の正潔なる意を勵ます。二爾等が先に聖なる預言者の言ひし言、及び爾等の諸使徒の傳へし主救主の誡を記憶せん爲なり。三首として知るべし、末の日に嘲る者來り、己の慾に從ひて行ひて四云はん、彼の降臨の許約は安にか在る。蓋列祖の寢りしより以來、萬物は造成の始より存することは是くの如しと。五蓋彼等は知るを欲せず、太初に神の言に由りて天あり、又地は水より水を以て合成せられたり、六此に緣りて當時の世は水に淹されて滅びたり。七然るに今の天地、同じき言に由りて護らるゝ者は、火の爲に存せられて、審判及び不敬虔の人の淪亡の日を待つなり。八至愛の者よ、此の一事は

爾等に隱さるべからず、主に在りては一日は千年の如く、千年は一日の如し。九主が其
許約を行ふは、或者が遲はると思ふ如く遲はるに非ず、乃人の滅ぶるを欲せず、衆人の
悔改に至らんことを欲して、我等を永く忍ぶなり。一〇然れども主の日の來るは、盜の
夜來るが如くならん、當時天は響きて逝り、體質は燃え毀れ、地及び之に載する事物は
皆焚け盡きん。一一斯くの如く此等皆毀れんとするに由り、一二爾等、卽彼の天焚か
れて毀れ、燃ゆる體質は鎔けんとする神の日の來るを待ち且慕ふ者は、聖行と敬虔と
に於て如何なる者となるべきか。一三然れども我等は彼の許約に依りて、新天新地、卽
義の居る處を俟つ。一四故に至愛の者よ、爾等之を俟ちて、玷なく、疵なく、平安にして彼
の前に現れんことを勉めよ、一五且我等の主の恒忍を以て救を爲せ、我が至愛の兄弟
パワルも、彼に賦へられし智慧に循ひて、爾等に書せしが如く、一六亦其凡の書に之
を述ぶるが如し、其中に曉り難き處あり、學ばず又堅からざる者は、他の聖書の如く、是
をも亦强ひ解きて、自ら敗亡を取るなり。一七至愛の者よ、爾等預め此の事を知りて愼
め、恐らくは無道の者の迷に誘はれて、己の堅固を失はん。一八乃恩寵及び我等の

主救主（しゆきうしゆ）イイススハリストスを知（し）る智識（ちしき）に成長（せいちやう）せよ。願（ねが）はくは光榮（くわうえい）は今（いま）も永世（えいせい）の日（ひ）も彼（かれ）に歸（き）せん「アミン」。

聖使徒神學者イオアンの第一公書

第一章

一 生命の言に關して、始より有りし事、我等の聞きし事、我等の目に見し事、觀
究めし事、我等の手に捫りし事、二（蓋生命は顯れたり、而して我等は之を見、之を證し、
此の永遠の生命、父と共に在りて、我等に顯れし者を、爾等に傳ふ）三 我等が見し事、聞
きし事を以て爾等に傳ふるは、爾等をして我等に共與せしめん爲なり、我等の共與は
父及び其子イイススハリストスに在り。四 我等が此の書を爾等に達するは、爾等の喜
の全からん爲なり。五 夫れ我等が彼より聞きて、爾等に傳ふる所の福音は、乃神は光な
り、其中に一も暗なきことなり。六 若し我等彼に共與ありと云ひて暗を行かば、則我等
謊りて、眞實を行はざるなり。七 若し我等光を行かば、彼が光に在るが如し、則我等互
に共與あり、而して彼の子イイススハリストスの血は我等を悉くの罪より潔む。八 若
し我等罪なしと言はば、則自ら欺きて、眞實は我等の中に在らず。九 若し我等の罪を
認めば、則彼は信且義にして、我等の罪を赦し、我等を悉くの不義より潔めん。一〇 若

し我等罪を犯さゞりきと云はば、則彼を以て諳る者と爲すなり、其言は我等の中に在らず。

第二章　一 吾が小子よ、我が之を書して爾等に達するは、爾等が罪を犯さゞらん爲なり、若し人罪を犯さば、我等に父の前に保惠師あり、卽義人イイススハリストスなり。二 彼は我等の罪の爲に挽回の祭なり、第我等の爲のみならず、亦全世界の爲なり。三 我等若し彼の誡を守らば、是に由りて彼を識れるを曉る。四 我彼を識れりと云ひて、其誡を守らざる者は、諳る者にして、眞實は其中に在らず。五 彼の言を守る者は、神の愛實に其中に全くせられたり、是に由りて我等が彼に在るを曉る。六 彼に居ると言ふ者は、彼が行ひし所に循ひて行ふべし。七 至愛の者よ、我が書して爾等に達するは、新なる誡に非ず、乃舊き誡、爾等が始より有てる者なり。舊き誡とは、爾等が始より聞きし言なり。八 又我新なる誡を書して爾等に達す、彼に在りても爾等に在りても眞實なる者なり、蓋暗は過ぎ、眞の光は已に照る。九 自ら光に在りと言ひて、其兄弟を憎む者は、暗に在る者は光に居り、其裏に躓なし。一〇 其兄弟を愛する者は光に居り、其裏に躓なし。一一 其兄弟を

り、暗に歩み、何に往くを知らず、暗は其目を盲ましゝ故なり。一二 小子よ、我書して爾等に逹す、爾等の罪は彼の名に縁りて赦されたればなり。一三 諸父よ、我書して爾等に逹す、爾等太初より在る者を識りたればなり。少者よ、我書して爾等に逹す、爾等惡者に勝ちたればなり。一四 諸父よ、我書して爾等に逹す、爾等太初より在る者を識りたればなり。童子よ、我書して爾等に逹す、爾等父を識りたればなり。一五 世をも世に在る物をも愛する勿れ、人世を愛すれば父に於ける愛其衷に在らず。一六 蓋凡そ世に在る者、即肉體の慾、目の慾、度生の驕は、父よりするに非ず、乃世よりするなり。一七 世も其慾も逝く、惟神の旨を行ふ者は永く存す。一八 小子よ、末の時至れり、爾等が「アンチハリスト」來ると聞きし如く、今已に多くの「アンチハリスト」あり、是に由りて我等は末の時なるを知る。一九 彼等は我等より出でたり、然れども我等に屬せしに非ず、蓋若し我等に屬せしならば、乃我等と偕に止りしならん、然れども彼等は出でたり、是に由りて皆我等に屬するには非ざること見れたり。二〇 且爾等は聖なる者より傅

育せられて、知らざる所なし。二一 我が書して爾等に達せしは、爾等が眞實を知らざるに因るに非ず、乃之を識り、且凡の謊の眞實に由らざるを知るに因りてなり。二二 謊者は誰ぞ、イイスのハリストスたるを認めざる者に非ずや、是れ卽「アンティハリスト」、父及び子を認めざる者なり。二三 凡そ子を認めざる者は、父なるも有たず、子を承け認むる者は、父なるも有つなり。二四 故に爾等が始より聞きし者は爾等に居るを要せず、乃爾等が始より聞きし者は爾等に居らば、爾等も亦子及び父に居らん。二五 彼が我等に約せし許約は、永遠の生命なり。二六 我は、爾等を惑はす者の事に就きて、此を書しおくれり。二七 且爾等が彼より受けし所の傅膏は爾等に居るなり、故に爾等は人の教ふるを要せず、乃此の傅膏は爾等に凡の事を教へ、且其眞にして、僞ならざるに因りて、其爾等に居れ、彼が顯れん時に我等の爲、彼が臨まん時に彼の前に愧ぢざらん爲なり。二八 小子よ、今彼に居れ。二九 爾等若し彼の義なるを知らば、乃凡そ義を行ふ者の彼より生れしを知れ。

第三章

一 觀よ、父は何等の愛を我等に賜ひて、我等に神の子と稱へらる、且爲るを得

しめしぞ。世は我等を識らず、彼を識らざるが故なり。二 至愛の者よ、我等今神の子たり、然れども若何にならんか、尚未だ顯れず。我等惟其顯れん時、彼に肖たるを知る、蓋其眞の狀に於て彼を見ん。三 凡そ彼に於けるこの望を懷く者は、己を潔くすること彼の潔きが如し。四 凡そ罪を行ふ者は不法を行ふなり、罪とは不法なり。五 爾等は彼の顯れしは我等の罪を負はん爲にして、彼には罪なきを知ろ。六 凡そ彼に居る者は罪を犯さず、凡そ罪を犯す者は未だ彼を見ず、未だ彼を識らざるなり。七 小子よ、人に惑はさるゝ勿れ。義を行ふ者は義なり、彼の義なるが如し。八 罪を行ふ者は惡魔より出づ、惡魔は始より罪を犯せるなり。神の子の顯れしは惡魔の工を毀たん爲なり。九 凡そ神より生れし者は罪を犯さず、神の種は彼の裏に存す、彼は罪を犯す能はず、神より生れしが故なり。一〇 神の子と惡魔の子とは斯く知らる、凡そ義を行はざる者は神より出でず、其兄弟を愛せざる者も亦然り。一一 蓋是れ爾等が始より聞きし所の命なり、乃ち我等相愛すべし、一二 カインの如くすべからず、彼は凶惡者に緣りて己の弟を殺せり、胡爲れぞ之を殺したる、己の行は惡しく、弟の行は義なりしに因りてなり。一

三 我が兄弟よ、若し世爾等を憎まば、奇しむ勿れ。一四 我等は死より生命に移りしを知る、兄弟を愛すればなり、兄弟を愛せざる者は死に居るなり。一五 凡そ其兄弟を憎む者は殺人者なり、爾等は凡の殺人者は永遠の生命を其裏に有たざるを知る。一六 彼は我等の爲に其生命を捐てたり、此により我等も兄弟の爲に生命を捐つべし。一七 然ろに此の世の産業を有つ者にして、其兄弟の乏しきを見て、彼の爲に己の心を閉さば、神の愛安んぞ其裏に在らん。一八 我が小子よ、我等愛すること言を以てし、或は舌を以てすべし、勿く、乃ち行と實とを以てすべし。一九 此に由りて我等の心より大にして、知らざる所なし。二〇 蓋若し我が心我等を責めば、況や神は我等の心より大にして、知らざる所なし。二一 至愛の者よ、若し我が心我等を責めずば、我等神の前に毅然たり、二二 且求むる所は彼より受く、蓋彼の誡を守り、彼の悦ぶ所を行ふ。二三 彼の誡は乃ち我等其子イエスキリストの名を信じ、且彼が我等に誡めし如く相愛するに在り。二四 彼の誡を守る者は彼に居り、彼も亦此に居るなり。彼の我等に與へし所の神に由りて之を知る。

第四章

一至愛の者よ、概神を信ずる勿れ、乃其神の神に屬すや否やを試みよ、蓋多くの僞預言者は世に出でたり。二神の神と迷謬の神とを此くの如く知れ、凡そイイススハリストスが肉體を以て來りしことを承け認むる神は神に屬するなり。三凡そイイススハリストスが肉體を以て來りしことを承け認めざる神は神に屬するに非ず、乃爾等が來らんと聞きし所、今已に世に在る「アンティハリスト」の神なり。四小子よ、爾等は神に屬し、而して彼等に勝てり、蓋爾等に居る者は世に居る者より大なり。五彼等は世に屬す、故に其言ふ所も世に屬す、世は彼等に聽く。六我等は神に屬す、神を識る者は我等に聽く、神に屬せざる者は我等に聽かず。此に由りて我等は眞實の神と迷謬の神とを識るなり。七至愛の者よ、我等相愛すべし、蓋愛は神に屬す、凡そ愛する者は神より生れて、神を知るなり。八愛せざる者は神を識らず、蓋神は愛なり。九神は其獨生の子を世に遣して、我等をして彼に由りて生命を得しむ、此を以て神の我等に於ける愛は顯れたり。一〇我等が神を愛せしに非ず、乃彼は我等を愛し、其子を遣して、我等の罪の爲に挽回の祭と爲せり、此に於て愛あり。一一至愛の者よ、若し神此くの如く我等を愛せば、

我等も相愛すべし。一二 神を見し人未だ嘗てあらず。若し我等相愛せば、神は我等に居り、其愛は我等の裏に全くせられしなり。一三 彼既に其神を我等に與へたれば、我等此に由りて彼に居り、彼も我等に居るを知る。一四 父が其子を遣して世の救主と爲し、これを見且證す。一五 イエスを神の子と承け認むる者は、神は彼に居り、彼も神に居るなり。一六 神の我等に於ける愛は、我等已に之を知り、且信ぜり。神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神も彼に居るなり。一七 愛は我等の裏に全くせられて、我等をして審判の日に毅然たるを得しむ、蓋我等の此の世に在りて行ふ所は、彼の行ひしが如し。一八 愛の中には懼なし、乃ち全き愛は懼を外に逐ふ、蓋懼の中には苦あり、懼るゝ者は未だ愛に全くせられざるなり。一九 我等は彼を愛すべし、蓋彼は先つ我等を愛せり。二〇 人若し我神を愛すと言ひて、其兄弟を惡まば、謊ろ者なり、蓋見ざる所の兄弟を愛せざる者は、焉ぞ見ざる所の神を愛すること得ん。二一 神を愛する者は、亦其兄弟を愛すべし、此の誡は、我等之を彼より受けたり。

第五章

一 凡そイエスのハリストたるを信ずる者は神より生れたるなり、凡そ

生みし者を愛する者は、彼より生れし者をも愛す。二我等若し神を愛し、其誡を守らば、此に由りて我等が神の諸子を愛するを知る。三蓋神の誡を守るは、是れ乃神を愛するなり、其誡は難からず。四蓋凡そ神より生れし者は世に勝つ、世に勝つ者は誰ぞ、イエスが神の子たるを信ずる者に非ずや。五此れ水と血とを以て來りしイエス・キリストなり、獨水のみならず、乃水と血とを以てせり、而して證を作す者は神なり、神は眞實なるに因る。六蓋天に在りて證を作す者三、父なり、言なり、聖神なり、此の三の者は一なり。七又地に在りて證を作す者三、神なり、水なり、血なり、此の三の者は一に歸す。八若し我等人の證を受けば、神の證は更に大なり、蓋是れ神が其子の爲に證せし所の證なり。一〇神の子を信ずる者は己の裏に證あり、神を信ぜざる者は彼を謊る者と爲す、蓋神が其子の爲に證せし所の證を信ぜず。一一此の證は、卽神は我等に永遠の生命を與へ、而して此の生命は其子に在ること是なり。一二神の子を有つ者は生命を有ち、神の子を有たざる者は生命を有たず。一三我之を書して、爾等神の子の名を信ずる者に達せり、爾等が永遠の生命を有つを知

らん爲、又神の子の名を信ぜん爲なり。一四 我等彼の旨に循ひて求むれば聽く、是れ我等が彼の前に毅然たる所なり。一五 凡そ彼が我等の求むる所を聽くを知らば、亦我等の彼に求むる所を得るを知るなり。一六 若し人其兄弟が死を致さざる罪を犯すを見ば、求むべし、然らば神は彼即死を致さざる罪ある者に生命を與へん。死を致す罪あり、我之が爲に祈るべしと云はず。一七 凡の不義は罪なり、但し死を致さざる罪あり。一八 我等は凡そ神より生れし者は己を守り、凶惡者は彼に觸れず。一九 我等が神より生れし者の罪を犯さざるを知る、乃神よ二〇 又知る、神の子來りて、我等に光及び智慧を與へたり、我等が眞の者に居らん爲なり。此れ即眞の神及び永遠の生命なり。二一 小子よ、己を偶像より謹れ」アミン」

イイススハリストスに

聖使徒神學者イオアンの第二公書

一老夫は、選を蒙りたる貴婦及び其諸子、我が實に愛する所、第我のみならず、凡そ眞實
を識りたる者が、二我等に居り且我等と偕に世世に居らんとする眞實に緣りて、愛す
る所の者に書を達す。三願はくは神父及び父の子主イイススハリストスよりする恩
寵と慈憐と平安とは、眞實及び愛に於て、爾等と偕に在らんことを。四我爾が諸子の中
に、我等が父より誡を受けし如く、眞實を行ふ者あるを見て、甚喜べり。五貴婦よ、今も我
が爾に勸むるは、新なる誡を書して爾に達するが如きに非ず、乃我等が始より有つ所
の者なり、卽我等相愛すべし。六愛とは我等が彼の誡に循ひて行ふこと是なり。此の誡
は、乃、爾等が之を行ふ爲に始より聞きし所なり、七蓋多くの惑はす者世に入りて、イイ
ススハリストスが肉體を以て來りしことを承け認めず、此れ乃惑はす者なり、「アンティ
ハリスト」なり。八爾等自ら愼め、我等が勞せし所を失はざらん爲、乃全き賞を獲
ん爲なり。九凡そ罪を犯してハリストスの教に居らざる者は、神を有たず、ハリストス

の教に居る者は、父及び子を有つなり。一〇人若し此の教を佩びずして爾等に來らば、彼を家に納ろゝ勿れ、其安を問ふ勿れ。一一蓋彼の安を問ふ者は、其惡しき行に與るなり。一二我尚多く書して爾等に達すへき事あれども、紙と墨とを以てすることを欲せず、乃ち口を以て口に對ひて言はんことを望む、爾等の喜の全からん爲なり。一三選を蒙りたる爾の姉妹の諸子は爾の安を問ふ「アミン」。

一 老夫は、至愛なるガイ、我が實に愛する者に書を達す。二 至愛の者よ、我祈るは爾が康健にして、且凡の事に進歩するが如くならんことを。三 蓋兄弟來りて、爾が忠信の事、如何に爾が眞實を行ふ事を證せし時、我甚喜べり。四 我には我が諸子が眞實を行ふを聞くより大なる喜なし。五 至愛の者よ、爾が兄弟と旅客とに爲す所は、忠信にして爲す也。六 彼等は教會の前に爾の愛を證せり。爾若し神に合ふが若く彼等の旅行を助けば、其行ふ所善し。七 蓋彼等は異邦人より何をも取らずして、主の名に縁りて出でたり。八 故に我等此くの如き者を接くべし、眞實に同勞する者とならん爲なり。九 我書を教會に達せり、然れども彼等の中に長たるを好むディオトレフ我等を納れず。一〇 故に我若し至らば彼の行ふ事を憶ひ起さん、彼は惡言を以て我等を誚り、且此を以て足れりとせずして、自も兄弟を接けず、接けんと欲する者にも之を禁じて、教會より逐ふ。一一 至愛の者よ、惡に效ふ勿れ、乃善に效へ。善を行ふ者は神に屬し、

惡を行ふ者は神を見ざりき。一二ディミトリイに至りては、衆及び眞實皆彼の爲に證す、我等も亦證す、爾等は我が證の眞なるを知る。一三我尙多く書すべき事あれども、墨と筆とを以て之を書して爾に達するを欲せず、一四乃速に爾を見て、口を以て口に對ひて言はんことを望む。一五平安なれ、諸友爾の安を問ふ、爾諸友に各其安を問へ

「アミン」。

聖使徒イウダの公書

一イウダ、イイススハリストスの僕、イアコフの兄弟は、神父に聖にせられ、イイススハリストスに護らるゝ、召されたる者に書を達す。二願はくは慈憐と平安と仁愛とは爾等に増さんことを。三至愛の者よ、我甚我が共與の救の事を爾等の爲に書するを願ひて、一次聖徒に傳へられし信の爲に力を竭くすべき勸を書して、爾等に達するを必要と爲せり。四蓋或不敬虔の人人、昔より此の刑に預定せられたる者、我が神の恩寵を易へて邪慾の緣と爲し、獨一の主宰神及び我が主イイススハリストスを拒む者は、潛に入りたり。五我が爾等已に之を知る者に憶ひ起さしめんと欲するは、乃主が民をエギペトの地より救ひて後に、信ぜざりし者を滅し、六又己の本位を守らずして、其住處を離れたる諸天使を、永遠の縲絏を以て、幽暗の下に、大なる日の審判の爲に守れること、是なり。七ソドムゴモラ及び近鄰の諸邑、此と同じく淫亂を行ひ、異色を縱にせし者が、永遠の火の刑を受けて、鑑戒と立てられし如く、八此の夢想者、肉體を汚し、首長を藐ん

じ、尊者を誘る者も、此くの如くならん。九 天使首ミハイルは惡魔と論じて、モイセイの屍を爭ひし時、敢て誘りて之を罪せざりき、惟曰へり、主は爾に禁ずべしと。一〇 然れども此の輩は知らざる所を誘り、本性に依りて、無知の獸の如く、知る所を以て己を汚す。一一 彼等禍なる哉、蓋彼等はカインの途を行き、ロラアムの利慾の迷に流れ、コレイの違逆の中に滅びたり。一二 彼等は開等の愛の晩餐を汚す者なり、開等と共に宴して、憚ることなく己を肥す。彼等は風に逐はるゝ水なき雲、再死し根抜かれたる果なき秋の樹、一三 己の穢を沫だつる海の猛浪、永遠の幽暗の備はりて待つ所の迷へる星なり。一四 アダムより第七世なるエノフは此の輩に臨みて、一五 審判を衆人等に行ひ、凡の不敬虔の事を預言して云へり、視よ、主は其萬萬の聖なる天使と共に臨みて、一五 審判を衆人等に行ひ、凡の不敬虔の者が其不敬虔に由りて爲しゝ悉くの事、及び不敬虔なる罪人等が彼に對ひて言ひし悉くの頑なる言を責めんと。一六 彼等は怨言を言ひ、足るを知らざる者、其慾を縦にして不敬虔と不法とを行ふ者なり、其口は誇りたる言を出し、利の爲に人に諂ふ。一七 然れども開等至愛の者よ、我等の主イイスス・ハリストスの諸使徒が曩に言ひし言を憶へ。一八 蓋彼等は開等

に謂へり、末の時に嘲ける者ありて、己の不敬虔の慾に從ひて行はん。一九唯一の信より區別する者は、靈に屬して、神を有たざる者なり。二〇至愛の者よ、爾等己を爾等の至聖なる信に建て、聖神に藉りて禱り、二一己を神の愛に守りて、我等の主イイスキリストより永遠の生命を得しむる憐憫を俟て。二二且或者は懼を以て之を救ひて、火より脫れしめ、自も懼を以て之を賣めて、肉に汚されたる衣だに惡め。二四能く爾等を護りて躓かしめず、爾等を前に立つを得しむる二五獨一智慧の神、我等の救主に、我等の主イイスキリストに由りて、光榮及び威嚴、能力及び權柄は、世世の先にも、今にも、萬世

聖使徒パヱルがロマ人に達する書

第一章

一パヱル、イイススハリストスの僕、召されたる使徒、神の福音、二即神が昔
其諸預言者を以て、聖なる書に於て許約せし福音、三其子、即肉體に依りては、ダヱド
の裔より生れ、四聖德の神に依りては、大能に於て、死より復活するを以て、神の子と顯
れし者の福音、五我等に恩寵と使徒職とを受けしめ、其名に依りて萬民を、六亦其中に
爾等、イイススハリストスに召されたる者を信に從はしむるを致す、我等の主イイス
スハリストスの福音を傳ふる爲に選ばれたる者は、七書して、凡そロマに在る聖徒、神
の愛する所の召されたる者に達す。願はくは恩寵と平安とは神我等の父及び主イイ
ススハリストスより爾等に賜はらんことを。八我は先づイイススハリストスに賴り
て、爾等衆の爲に我が神に感謝す、爾等の信の全世界に傳へらるゝを以てなり。九蓋我
が其子の福音に於て我が神を以て事ふる所の神は我の證者なり、我斷えず爾等を念
ひて、一〇恒に我が祈禱の中に、我が神の旨に依りて、何の時か善き途を得て、爾等に至

らんことを求む。一一蓋我切に爾等を見んことを望む、聊か屬神の賜を爾等に頒ち與
へて、爾等を堅固にせん爲なり、一二是れ卽爾等の中に在りて、爾等と我と共同の信
を以て、相慰めん爲なり。一三兄弟よ、我爾等が知らざるを欲せず、我屢爾等に至らん
ことを志せり、他邦民の中に於けるが如く、爾等の中にも聊か果を獲ん爲なり、然れど
も今に至るまで阻まれたり。一四我はヱリン人及び化外人、智者及び愚者に負ふ所あ
り。一五故に我に於ては、我爾等ロマに在る者にも福音を傳へんことを願ふ。一六蓋我
はハリストスの福音を以て耻とせず、是れ凡の信ずる者、先づイウデヤ人、次にヱリン
人に救を得しむる神の能なればなり。一七其中に神の義は顯れて、信より信に進む、錄
されしが如し、義人は信に由りて生きんと。一八蓋神の怒は天より顯れて、不義を以
て眞實を阻む人人の凡の不虔不義を攻む。一九神の事に於て知るべき所は、彼等の爲
に明なるに因る、神は彼等に之を顯しゝ故なり。二〇蓋彼の見る可からざる事、卽其
永遠の能と神性とは、創世より以來、造られたる物を察するに由りて見るべし、故に彼
等は推諉すべきなし。二一然れども彼等は神を知りて、之を神として榮せず、亦感謝せ

ざりき、乃ち其思念は虚しくなり、其無智の心は昧み、二二 自ら智者と稱へて愚者となり、二三 朽ちざる神の光榮を變じて、朽つる人及び禽獣昆蟲に似たる像となせり。二四 此に縁りて神は彼等を其心の慾に於て汚穢に付して、彼等互に其身を辱しめらるゝ者なり、二五 彼等は神の眞實を易へて、僞となし、受造物に敬拜奉事して、造物主に代へたり。二六 此に縁りて神は彼等を恥づべき慾の用を棄てゝ、嗜慾相機に、男は男と恥づべき事を作して、其迷謬に當れる報を己の身に付せり、蓋彼等の婦女は順性の用を變へて、逆性の用を爲し、二七 男は亦婦女の順性の用を棄てゝ、嗜慾相機に、男は男と恥づべき事を作して、其迷謬に當れる報を己の身に受けたり。二八 彼等は神を其念に存するを願はざりしに由りて、神は彼等を棄てゝ、心の懶きて、不當なる事を行ふに付せり。二九 彼等は凡の不義、淫行、惡慝、貪婪、毒、嫉妬、兇殺、爭鬪、詭譎、刻薄を盈つる者なり、三〇 彼等は隱刺、讒謗する者、神を惡む者、侮る者、傲慢、驕傲なる者、惡事を圖む者、父母に順はざる者、三一 頑愚なる者、約に背く者、無情なる者、怨を構ふる者、憐なき者なり。三二 彼等は此くの如き事を行ふ者は死に當るべき、神の擬定を知ると雖、自ら之を行ふのみならず、之を行ふ者をも嘉す。

第二章　一　是を以て凡そ人を議する者よ、爾推諉すべきなし、蓋他人を議するは、適に之を以て己を罪するなり、爾議する者同じき事を行ふなり。二　我等は此くの如き事を行ふ者を議して、自ら之を行ふ人よ、爾神の審判を逃れんと意ふか、三　抑爾は神の仁慈、寛容、恒忍の豊かなるを藐んじて、其仁慈が爾を悔改に導くを知らざるか。五　然れども爾は剛愎と悔なき心とに循ひて、己の為に神の怒の日、及び其義判の顕現の日に、怒を積む、六　蓋神は各人に、其行に循ひて報いん、七　忍耐して善を行ひ、光榮、尊貴、不朽を求むる者には、永遠の生命を報い、八　爭鬪を為し、眞實に順はずして不義に順ふ者には、恐憚と赫怒とを報いん。九　患難と困苦とは、凡そ惡を為す人、先づイウデヤ人、次にエルリン人の霊に至らん。一〇　光榮と尊貴と平安とは、凡そ善を為す人、先づイウデヤ人、次にエルリン人に至らん、一一　蓋神には偏視することなし。一二　凡そ律法なくして罪を犯しゝ者は、律法なくして滅び、律法ありて罪を犯しゝ者は、律法に由りて審判せられん、一三（蓋律法を聞く者は神の前に義なるに非ず、乃律法を行ふ者は義とせられん、一四　蓋律法を有たざる異

邦人等、性に率ひて律法の事を行ふ時は、律法を有たずと雖、自ら己の律法たるなり、
一五 彼等は律法の工の其心に銘されたるを彰す、此れ彼等の良心、及び互に貶め或は
褒むる思慮の證する所なり、）一六 卽神がイイススハリストスを以て人の密事を審
判する日に於てす、我が福音する所の如し。一七 視よ、爾はイウデヤ人と稱へられ、律法
に安んじ、神を以て誇り、一八 其旨を知り、律法に諭されて最善き事を辨へ、一九 自ら信
じて、瞽者の相、暗に在る者の光、二〇 愚なる者の師傅、幼兒の教師、律法に於て知識と眞
實との式を有つ者と爲す。二一 然らば爾は何の故に他人を誨へて己を誨へざるか、二
二 竊む勿れと勸めて、自ら竊むか、姦淫する勿れと言ひて、自ら姦淫するか、偶像を惡み
て自ら聖物を攘むか、二三 律法に誇りて、自ら律法を犯すを以て神を辱しむるか。二四
蓋爾等に緣りて神の名は異邦人の中に謗らる、錄されしが如し。二五 爾若 律法を
行はば、割禮は益あり、爾若し律法を犯す者ならば、爾の割禮は無割禮と爲れるなり。二
六 故に若し割禮を受けざる者律法の誡を守らば、其無割禮は、彼が爲に割禮に歸せざ
らんや、二七 且性に由りて割禮を受けずして、律法を行ふ者は、壹爾、文書及び割禮あり

て律法を犯す者を罪せざらんや。二八益外面にのみイウデヤ人に非ず、外面に肉體にのみある割禮は割禮に非ず。二九乃內心にイウデヤ人たる者は、イウデヤ人たり、心の割禮、文に由るに由るに非ず、乃神に由るなり。

第三章　一然らばイウデヤ人には何の長ずる所あるか、或は割禮は何の益あるか。二凡の事に於て長ずる所多し、首として神の言の彼等に託せられしに在り。三蓋或者信ぜざりしならば、如何、彼等の不信は神の信を廢せんか。四非らず、神は眞實なり、凡の人は僞なり、錄されしが如し、云く、爾は爾の言に義にして、爾の審判に勝たんと。五若し我等の不義は神の義を彰さば、我等何なにおらずや、我人の情に循ひて言ふ。六非らず、若し然らば、神は如何にして世を審判せん。七蓋若し神の眞實は、我の僞を以て、愈々其光榮を顯さば、我何ぞ猶罪人の如く審判せられん、八又我等は善を來さん爲に、惡を爲すは可ならんか、或者が我等を誘りて我等斯く言ふと語るが如し、彼等の定罪は宜なり。九然らば何ぞや、我等愈れるか、毫もな

し、蓋我等已にイウデヤ人もヱリン人も皆罪に服するを證せり、一〇 錄されしが如し、
云く、義なる者一もあるなし、一一 悟る者なく、神を尋ぬる者なし、一二 皆迷ひ、均しく無
用と爲れり、善を行ふ者なし、一も亦なし。一三 彼等の喉は啓けたる柩、其舌にて欺く、蝮
の毒は其唇に在り。一四 其口は詛と苦とに滿ち、一五 其足は血を流す爲に疾し、一六
毀敗と菑害とは其途に在り、一七 彼等は和平の道を知らず、一八 其目の前に神を畏る
ゝ畏なしと。一九 我等知る、凡そ律法の言ふ所は律法の下に在る者に言ふなり、斯く凡
の口は塞がり、世皆神の前に罪あるを致す。二〇 蓋人一も、律法の行に由りて、彼の前
に義とせらるゝを得ず、律法に由りて罪の知らるゝが故なり。二一 然れども今は律法
の外に神の義は著れたり、律法及び諸預言者の證する所の者なり。二二 即イイスス
ハリストスを信ずるに由りて、悉くの信者に臨み、悉くの信者に在る神の義なり、區別
なきに緣る。二三 蓋人皆罪を獲、神の光榮を失ひて、二四 義とせらるゝを得るは、功な
くして、彼の恩寵を以て、ハリストスイイススの贖に賴りてなり。二五 神は彼を立てゝ、
其血を以て、信に由る挽回の祭と爲せり、是れ曾て神の寛容の時に行ひし諸罪の赦に

於て彼の義を顯さん爲、二六今の時に彼の義を顯して、彼の義なる信ずる人を義と爲すことさを示さん爲なり。二七然らば誇る所安にか在る、除かれたり、何の法を以てせしか、行の法か、非らず、乃信の法なり。二八故に我等は、人の義させらるゝは、信に由りて、行に由らざるを認む。二九神は獨イウデヤ人の神なるか、また異邦人の神なり。三〇蓋同一の神は、割禮を受けし者を信に由りて義と爲し、亦割禮を受けざる者を信を以て義と爲すなり。三一然らば我等信を以て律法を廢するか、非らず、乃律法を堅立するなり。

第四章

一然らば我等は、我が先祖アブラハムは肉體に由りて、何をか得たるさ言はん。二若しアブラハム行に由りて義させられしならば、誇るべき所あり、然れども神の前には有るなし。三蓋聖書は何を言ふ、アブラハムは神を信ぜり、此れ彼に歸して義さなりたり。四行ふ者には、其賞は恩に由りて歸するに非す、債に由りてなり。五然れども行はずして、惟不虔者を義と爲す主を信ずる者には、其信は歸して義と爲る。六斯くダビデも行に由らずして神より義の歸せらるゝ人の福を述べて云く、七

不法を赦され、罪を蔽はるゝ人は福なり、八主が罪を歸せざる人は福なりと。九此の福
は割禮を受くる者に在るか、抑割禮を受けざる者に在るか。蓋我等は信アウラアム
に歸して義と爲れりと言ふ。一〇然らば如何に彼に歸せしか。割禮の後か、抑割禮の
先か。割禮の後に在らず、乃割禮の先に在り。一一割禮の號も、彼は未だ割禮を受けざ
る先に有ちし所の信に由る義の印として、之を受けたり、此れ彼が凡そ割禮を受けず
して信ずる者の父となりて、彼等にも義の歸せん爲、一二亦割禮を受けし者の父、即
第割禮を受けしのみならず、我が先祖アウラアムが未だ割禮を受けざる時に有ちし
所の信の迹を履む者の父と爲らん爲なり。一三蓋アウラアム若くは其裔に、世界の
嗣と爲るべき許約の賜はりたるは、律法に由るに非ず、乃信の義に由るなり。一四若
し律法に由る者嗣たらば、信は虛しく、許約も廢せられたるなり。一五蓋律法は怒を
致す、律法なき處には、犯すことも有るなし。一六故に信に由る、恩に由らん爲なり、是れ
許約はアウラアムの悉くの子孫、第律法に由るのみならず、即信に由る者にも堅固な
らん爲なり、一七蓋錄されしが如し、爾等を立てゝ多くの民の父と爲せりと、アウラア

ムは其信ぜし所の神、死せし者を生かし、無き者を有るが如く稱ふる等衆人の父たるなり。一八彼は望なき時に於て、望を以て、多くの民の父と爲らんことを信ぜり、言ひ及ぼしし所の如し、爾の裔は是くのごとくならんと。一九彼は信に於て弱からず、已の身の已に死せしが如きと、サラの胎の死せしことを顧みず、約百歳なりと雖、二〇不信を以て神の許約を疑はず、乃信に堅固にして、光榮を神に歸し、二一其約せし所、彼亦之を成すを能すと、確に信じたり。二二故に此は彼に歸して義と爲れりと錄されしは、獨彼の爲のみならず、二四亦我等の爲なり、我等、即我が主イエスを死より復活せしめし神を信ずる者にも、歸して義と爲られん、二五蓋主は我等の罪の爲に解され、我等の義と爲られん爲に復活せり。

第五章　一是の故に我等は信を以て義と爲られて、神と和睦するを得たり、我が主イエス、ハリストに賴りてなり。二我等彼に賴りて、信を以て今居る所の恩寵に至るを得、且神の光榮を望むを以て誇と爲す。三第此のみならず乃亦患難を以て誇と爲

す、蓋知る、患難は忍耐を生じ、四忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、五希望は羞を啓
かず、蓋神の愛は、我等に與へられたる聖神に由りて、我等の心に灌がれたり。六蓋ハ
リストスは、我等が尚弱かりし時に於て、期に屆りて、不虔者の爲に死せり。七夫れ義人
の爲には死する者幾ど無し、恩人の爲には敢て死する者或は之れ有り。八然れども神
が其愛を我等に顯すは、我等尚罪人たりし時、ハリストスが我等の爲に死せしを以て
せり。九故に我等已に其血を以て義とせられたれば、況や今彼に由りて怒より救はれ
んをや。一〇蓋若し我等敵たる時、其子の死を以て神と和睦せしならば、況や和睦して
後、其生命に由りて救はれんをや。一一第此のみならず、乃今我等に和睦を得しめたる
我が主イイススハリストスに賴りて、神を以て誇る。一二故に一人に緣りて罪は世に
入り、罪に緣りて死の入りしが如く、死も亦悉くの人の中に入れり、蓋彼の中に在りて
皆罪を犯せり。一三律法の前にも罪は世に在りき、惟律法なき時には罪の歸するなし。
一四然れども死は、アダムよりモイセイに至るまで、アダムの如き罪を犯さざりし者
にも王たりき、アダムは乃未來の者の模なり。一五然れども恩寵の賜は罪の如きに非

す、蓋若し一人の罪に縁りて多くの者の死せしならば、況や神の恩寵と一人イイスキリストスの恩寵とに縁りて、多くの者に溢るゝをや。一六　且賜は罪を犯したる一人に縁る審判の如きに非す、蓋審判は一の罪に縁る賜とその多くの罪より義させらるゝを致す。一七　蓋若し一人の罪に縁りて死は一人に縁りて王たりしならば、況や溢るゝ恩寵と義の賜とを受くる者は、一人イイスキリストスに縁りて、生命に在りて王たらんをや。一八　故に一人の罪に縁りて、悉くの人に定罪の及びし如く、斯く一人の義に縁りても、悉くの人に義させられて生命を獲ることは及べり。一九　蓋一人の不順に縁りて多くの者の罪人となりし如く、斯く一人の順に縁りて多くの者の義さならん。二〇　律法は後に來りて、罪の増すを致せしゝ如く、斯く恩寵も、イイスキリストスに縁りて生命を致さん爲なり。

第六章

一　然らば何をか言はん、我等は恩寵の増さん爲に罪に止るべきか。二　非らず、我等ハ

スに於て洗を受けしなり。四故は我等は死に於て洗を受けし者は、皆彼の死に於て洗を以て彼と偕に葬られたり、ハリストスが父の光榮を以て死より復活せしごとく、我等も新にせられたる生命を度らん爲なり。五蓋我等若し彼の死に接合せられしならば、乃復活に效ふを以ても、接合せらるべし。六蓋我等知る、我等の舊き人は彼と偕に釘せられたり、罪の身滅されて、我等復罪の奴とならざらん爲なり、七死せし者は罪より釋かれしに因る。八我等若しハリストスと偕に死せば、則亦彼と偕に生きんことを信ず、九蓋知る、ハリストスは死より復活して復死せず、死は復彼に主たらざるを、一〇彼の死せしは罪の爲に一次死し、彼の生くるは神の爲に生くればなり。一一是くの如く爾等も、己を以て、ハリストスイイスス我等の主に在りて罪の爲に死し、神の爲に生くる者と惟へ。一二故に罪は爾等の死すべき身に王たらずして、爾等其慾に徇ふことあるべからず。一三亦爾等の肢體を不義の器として、罪に委ぬる勿れ、乃死より復生せし者の如く、己を神に委れ、爾等の肢體を義の器として、神に獻げよ。一四罪は爾等に主たる可からず、蓋爾等は律法の下に在らず、乃恩寵の下に在り。一五

然らば如何、我等は律法の下に在らずして、恩寵の下に在るが故に、罪を犯さんか。非ら
ず。一六豈知らずや、爾等己を委れて僕と爲して、之に順はば、爾等其順ふ者の僕たり、或は罪の僕と爲りて死を致し、或は順の僕と爲りて義を致すなり。一七神に感謝すべし、爾等
素罪の僕たりしに、今は心より其授けられし教の範に服ひ、一八罪より釋かれて、義の僕と爲りて、我人の情に循ひて言ふ、爾等が肉體の弱きに因りて、不法の僕と爲して、不法に委れし如く、斯く今爾等の肢體を義の僕と爲して、成聖に委れよ。二〇蓋爾等罪の僕たりし時は、義より釋かれし者たり。二一其時爾等
に何の結果有りしか、今自ら恥づる所の行爲なり、蓋其終は死なり。二二然れども今爾
等罪より釋かれて、神の僕と爲りし時は、爾等の結果は成聖なり、其終は永遠の生命な
り。二三蓋罪の報は死なり、神の賜は我等の主に由る永遠の生命なり。

第七章

一兄弟よ、蓋我律法を知る者に言ふ、爾等豈知らずや、律法は人に、其生ける時
に於て、主たること乎。二蓋夫ある婦は、律法に由りて、生ける夫に繋がれたり、夫死すれ

ば、彼は夫の法より釋かる。三故に若し夫の生ける時他人に適かば、淫婦と稱へらる、然
れども夫死すれば、彼は法より釋かれて、他人に適くと雖、淫婦たらず。四我が兄弟よ、爾
等も是くの如く、ハリストスの身に由りて、律法の爲に死せり、他の者、卽死より復活せ
し者に適きて、我等神の爲に果を結ばん爲なり。五蓋我等が肉に在りし時、律法に由れ
る罪の慾は我等の肢體に動きて、死の爲に果を結べり。六然れども今我等を繫ぎし律
法の爲に死して、我等此より釋かれたり、文の舊きに由らず、神の新なるに由りて、神に
事へん爲なり。七然らば何をか言はん、律法は罪なるか。非らず。乃律法に由らざれば、我
罪を識らざりしならん。蓋律法慾する勿れと言はざれば、我慾を識らざりしならん。八
然るに罪は誡の機に乘じて、我の中に諸の慾を生ぜり、蓋律法なければ罪は死せる者
なり。九我昔律法なくして生きたり、然れども誡の來りし時、罪は生きて、一〇我は死せ
り、斯く生命の爲に與へられたる誡は我に死を施せり。一一蓋罪は誡の機に乘じて、
我を誘ひ、之を以て我を殺せり。一二故に律法は聖なり、誡も亦聖なり、義なり、善なり。一
三然らば善なる者は我に死を致しゝか。非らず、乃罪は、罪と顯れん爲に、善なる者を以

て我に死を致せり、誡に由りて罪の極めて罪なる者と爲らん爲なり。一四蓋我等知る、
律法は神に屬し、我は肉に屬して、罪の下に賣られたり。一五夫れ我が行ふ所は、我之を
知らず、蓋我が欲する所は、我之を行はず、我が惡む所は、我之を行ふ。一六若し我欲せざ
る所を行はば、乃律法の善なるを證す、一七然らば之を行ふ者は既に我に非ず、乃我の
衷に居る罪なり。一八蓋我知る、善は我の衷即我が肉の衷に居らず、蓋善を欲することは
は我に在れども、之を行ふことを得ず。一九我が欲する所の善は、之を行はず、我が欲せ
ざる所の惡は之を行ふ。二〇若し我欲せざる所を行はば、之を行ふ者は、既に我に非ず、
乃我の衷に居る罪なり。二一故に我此の法を觀る、我善を行はんと欲する時、惡は我
の前に伏す。二二蓋我は內なる人に由りて神の律法を悅ぶ、二三然れども我が肢體の
中に他の律法在りて、我が智慧の律法と戰ひ、我を我が肢體の中に在る罪は律法の據
と爲すを見る。二四噫我は困苦の人なる哉、誰か我を此の死の體より救はん。二五我が
神に感謝す、イイススハリストス我等の主に因りてなり。是くの如く我自ら我が智慧
を以て神の律法に服し、亦肉を以て罪の律法に服す。

第八章

一 故に今ハリストスイイススに在りて肉に從はず、乃神に從ひて行ふ者
には、一も定罪なし。二 蓋ハリストスイイススに在る生命の神の律法は、我を罪及び
死の律法より釋きたり。三 蓋肉に緣りて弱みたる律法は力なかりしが故に、神は其子
を、罪の肉の形を以て、罪の爲に遣して、肉に於て罪を定罪せり、四 律法の義は、我等肉に
從ふに非ず、乃神に從ひて行ふ者の中に成就せん爲なり。五 蓋肉に從ふ者は肉の
事を念ひ、神に從ふ者は神の事を念ふ。六 肉の念は死なり、神の念は生命なり、平安なり。
七 蓋肉の念は神に對して仇なり、神の律法に服せず、且服する能はざればなり。八 故
に肉に在る者は神の悅を爲す能はず。九 然れども爾等は、若し神の神爾等の中に居ら
ば、肉に在らず、乃神に在り。若し人ハリストスの神を有たずば、ハリストスに屬せず。
一〇 若しハリストス爾等の中に居らば、身は罪の爲に死し、神は義の爲に生く。一一 若
しイイススを死より復活せしめし者の神爾等の中に居らば、乃ハリストスを死よ
り復活せしめし者は、爾等の中に居る所の其神を以て、爾等の死すべき身をも生かさ
ん。一二 故に兄弟よ、我等は肉に債ありて、肉に從ひて居るべき者に非ず、一三 蓋爾等

若し肉に従ひて居らば死なん、若し神を以て身の行爲を殺さば生きん。一四　凡そ神の神に導かるゝ者は神の子なればなり。一五　蓋爾等は奴たる神、仍懼を懐く者を受けたるに非す、乃子たる神、我等が之に由りて「アウワ」父と呼ぶ者を受けたり。一六　此の神自ら我等の神と偕に我等が神の子たるを證す。一七　若し子たらば、嗣たり、即神の嗣、キリストと共に嗣たるなり、此れ若し我等彼と偕に苦しまば、亦彼と偕に榮せられん爲なり。一八　蓋我意ふに、今の時の苦は、我等の中に顯れんとする光榮に比ぶるに足らず。一九　夫れ受造物は甚慕ひて、神の諸子の顯を俟つ。二〇　蓋受造物の虚しきに服せしは、其欲する所に由るに非す、乃之を服せしめし者に由れり、而して仍望ありて、二一　即受造物自も亦敗壞の奴より釋かれて、神の諸子の光榮の自由に入らんこと是なり。二二　蓋我等知る、凡の受造物は今に至るまで共に歎き、共に苦しむ、二三　第此のみならず、乃我等神の初實の果を有つ者も、中心に歎きて、子と爲ること、即我等の身の贖を俟つ。二四　蓋我等が救を獲たるは望に在り。望は之を見る時、既に望にあらず、人若し之を見ば、豈猶望まんや。二五　然れども我等若し見ざる所を望まば、忍耐し

て之を俟つ。二六 神も亦我等の弱きを助く、蓋我等は宜しきに合ひて何を求むべきを
知らず、然れども神自ら言ふ可からざる歎息を以て我等の爲に求む、二七 而して心を
察する者は神の意を知る、彼は神の旨に遵ひて、聖徒の爲に求むればなり。二八 且我等
知る、神を愛する者、其旨に依りて召されたる者には、凡の事彼等を助けて、善に進まし
む。二九 蓋神は預知せし者は、之を預定して其子の狀に效はしむ、子が衆くの兄弟の中
に冢子たらん爲なり。三〇 彼は預定せし者は、亦之を召し、召しゝ者は、亦之を義と爲し、
義と爲しゝ者は、亦之を榮せり。三一 然らば我等此に於て何をか言はん。若し神我等を
佑けば、誰か我等に敵せん。三二 己の子を惜まず、乃我等衆人の爲に彼を付しゝ者は、
豈亦彼と偕に一切を我等に賜はざらんや。三三 誰か神の選びたる者を訟へん、神は彼
等を義と爲すなり。三四 誰か罪せん、ハリストスイイススは死せり、而して又復活せり、
彼は神の右に在り、彼は我等の爲に求む。三五 誰か我等を神の愛より離さん、或は憂患、
或は困苦、或は窘逐、或は飢餓、或は裸裎、或は艱危、或は刀劍なるか、三六 錄されしが如し、
云く、爾の爲に我等毎日殺され、人の我等を視ること、屠に定められたる羊の如しと。三

七 然れども我等を愛する者に頼りて、我等悉く此等の事に勝ちて餘あり。三八 蓋
我篤く信ず、死も、生命も、天使も、首領も能力も、現在も、未來も、三九 高さも、深さも、他の何
の受造物も我等をハリストスイイスス我が主に頼る神の愛より離すこと能はず。

第九章

一 我ハリストスに在りて眞を言ひて謊らず、我が良心は聖神に在りて我に
之を證す、二 我に大なる憂、我が心に已まざる痛あり、三 蓋我は我が兄弟、肉に依る我が
親族、卽イズライリ人の爲には自らハリストスより絶たれんことをも或は願ふな
り。四 彼等に子たる事、光榮、盟約、律法、禮儀、許約は屬し、五 彼等に列祖は屬し、ハリストス
も肉體に由りて彼等より出でたり、卽萬有の上に在る神、世世に祝讚せらるゝ者なり、
「アミン」。六 然れども此れ神の言の廢れたりと云ふに非ず、蓋イズライリよりする者
は盡くイズライリたるには非ず、七 亦アウラアムの裔よりするに由りて盡く其子た
るには非ず、乃言へるあり、イサアクに在りて爾の裔と稱へられんと。八 是れ卽肉體の
子は神の子たるに非ず、惟許約の子は裔とせらるゝなり。九 蓋許約の言は此くの如し、
此の期に屆りて我來らん、而して、サラに子あらんと。一〇 第此のみならず、レヱツカも、

我が祖イサアクに由りて同時に二子を孕みし時に、是くの如きことありき。一一蓋二子未だ生れず、未だ善惡を爲さざりし時、選ぶ所に於て神の定が行に由らず、乃召す者に由りて成らん爲に、一二彼に謂へることあり、長子は次子に服役せん、一三錄さ れしが如し、我はヤコフを愛し、イサフを惡めりと。一四然らば我等何をか言はん。神に不義あるか。非らず。一五モイセイに謂ふ、我が矜む所の者は、之を矜み、我が憫む所の者は、之を憫まんと。一六是くの如く望む者に由るに非ず、趨る者に由るに非ず、乃矜む所の神に由る。一七蓋書はフラヲンに謂ふ、我が爾を興しゝは、特に爾に由りて、我が能を顯し、又我が名の全地に傳はらん爲なりと。一八是くの如く其欲する所の者を矜み、其欲する所の者を頑にす。一九然らば爾我に謂はん、彼は何ぞ尙咎むる、蓋孰か彼の旨に逆はん。二〇嗟人よ、爾は誰ぞ、敢て神に抗言するか、造られし者に、爾は何ぞ我を斯く造りしと言はんか。二一豈陶人が同じき塊を以て、一の器を賤しき用の爲に、一の器を貴き用の爲に造るの權あるに非ずや。二二若し神は其惡を彰し、其能を示さんと欲して、滅に備はりたる怒の器を、大なる恒忍を以て

忍び、二三 又光榮に預備せし矜恤の器、二四 即我等、彼が
の中よりも召しゝ 猶太人のみならず、異邦人
にも言ふが如し、云く、我は我が民に非りし者を我が民と稱へ、愛せら
せらるゝ者を愛せらるゝ者と稱へ、二五 其光榮の豐なるを示さんとせば、何ぞや。二六
ん。二六 又曾て彼等に、爾等は我が民に非ずと言はれし處に、彼處に
は彼等活ける神の子と稱へられんと。二七 イザイヤもイズライリの事を呼びて曰く、
イズライリの子の數は海の沙の如くなれども、唯遺餘は救はれん。二八 蓋主は事を終
へ、義に遵ひて之を斷ぜん、斷じたる事を地に行はん。二九 又イザイヤの預言せしが如
し、云く、若し主サワオフ我等に裔を遺さざりしならば、我等はソドムに似、ゴモラの如
くなりしならんと。三〇 然らば我等何をか言はん、義を追はざる異邦人は、義即信に由
る義を得たり。三一 然れども義の律法を追ふイズライリは、義の律法に
二 何の故ぞ、信に由らずして、律法の行に由りたればなり、蓋躓の石に
躓きたり、三三 錄されしが如し、云く、視よ、我躓の石、礙の磐をシオンに置く、凡そ彼を信ずる者は羞を
得ざらんと。

第十章　一兄弟よ、我がイズライリの爲に心に願ふ所と神に禱る所とは、彼等の爲に救に在り。二蓋我彼等の爲に證を作す、彼等は神に於ける熱心あり、然れども智識に循ふに非ず。三蓋彼等は神の義を識らず、己の義を立てんことを圖りて、神の義に服せざりき。四蓋律法の終はキリストなり、凡の信ずる者義ならしめらるゝ爲なり。五モイセイは律法に由る義を指して錄せり、之を行ひし人は之に由りて生きんと。六然れども信に由る義は斯く云く、爾の心に言ふ勿れ、孰か天に升らん、卽ちキリストを降さん爲なり。七或は孰か淵に下らんと、卽ちキリストを死より上せん爲なり。八然るに書は何を言ふ、言は爾に近し、爾の口に在り、爾の心に在りと、是れ卽信の言、我等が傳ふる所の者なり。九蓋若し爾の口にイエスを主と承け認め、爾の心に神が彼を死より復活せしめしことを信ぜば、則救はれん。一〇蓋人心を以て信じて義とせらるゝを致し、口を以て承け認めて救はるゝを致す。一一蓋書に云く、凡そ彼を信ずる者は羞を得ざらんと。一二イウデヤ人とエルリン人とは區別なし、蓋衆人の主は同一なり、凡そ彼を籲ぶ者の爲に豐盛なる者なり。一三蓋凡そ主の名を籲ぶ者は救はれん。一四然れども未だ信ぜざる

者を如何にして額ぶを得ん、未だ聞かざる者を如何にして聞くを得ん、一五若し使を奉ぜずば、如何にして傳ふるを得ん、錄されしが如し、云く、平安を福音し、善事を福音する者の足は美しき哉。一六然れども我等より聞きしことを信じたるとイサイヤ云く、主よ、誰か我等の如く信は聞くに由り、聞くは基督の言に由る。一八然れども我曰ふ、被等豈聞かざりしか。然らず。其聲は全地に傳はり、其言は地の極に至れり。一九又曰ふ、イスラエルは豈知らざりしか。初にモイセイ云く、我は民に非ろ者を以て爾等を嫉ましめ、無知なる民を以て爾等を怒らしめんと。二〇イサイヤは殺然さして云く、我を尋ねざる者には我顯れたり、我を問はざる者には我顯れたり。二一又イスラエルを指して云く、我終日我が手を頑なる民に伸べたりと。

第十一章　一是の故に我曰ふ、神は其民を棄てしか。非らず。蓋我も亦イスラエル人にして、アブラハムの裔、ベニアミンの支派に屬す。二神は其預知せし所の民を棄てざりき。爾等豈聖書がエリヤの事を言ふを知らずや、卽彼はイスラエルを神に訟へて曰ふ、

三 主よ、彼等は爾の預言者を殺し、爾の祭壇を毀てり、我獨遺りしに、彼等は我が生命をも取らんと謀る。四 然れども神の應は何をか彼に言ふ、我已の爲にバアルの前に膝を屈めざりし者七千人を遺せり、ワ 是の如く今の時にも、恩寵の選に依りて遺れる者あり。六 然れど若し恩寵に由らば、則功に由らず、否らざれば恩寵は既に恩寵ならず。若し功に由らば、則此れ恩寵に非ず、七 然らば何ぞや、イズライルは求むる所を得ざりき、選ばれたる者は之を得て、其餘の者は頑になれり、八 錄されしが如し、云く、神は彼等に矇昧の心、見ざる目、聞かざる耳を與へて、今日に至れり。九 ダヴィドも亦云く、願はくは彼等の席は網と爲り、機と爲り、躓と爲りて、彼等に報を爲さん。一〇 願はくは彼等の目は昏みて、見ることを得ず、彼等の背は常に屈まんと。一一 故に我曰ふ、彼等は躓きしは倒れん爲なるか。非らず。然れども彼等の躓きしに由りて、救は異邦人に及べり、彼等を嫉ましめん爲なり。一二 若し彼等の躓は世界の富と爲らば、況や彼等の充滿をや。一三 蓋我は異邦人に言ふ、我は異邦人の使徒として、我が職を榮す、一四 或は如何にしてか我が骨肉の親屬

の嫉を起して、其中の或者を救ふを得ん。一五 蓋若し彼等の棄てらるゝことが世界の
復和と爲らば、彼等の納れらるゝことは、死よりする生命に非ずして何ぞや。一六 若し
初穫聖ならば、全團も亦然り、若し根聖ならば、枝も亦然り。一七 若し或枝は折られ、爾野
の橄欖たる者其中に接がれて、橄欖の根と汁とに與る者と爲りたらば。一八 枝に對し
て誇る勿れ。若し誇らば、爾は根を保つに非ずして、根は爾を保つを思へ。一九 爾曰はん、
枝の折られたるは、我が接がれん爲なりと。二〇 善し、彼等は不信に由りて折られ、爾は
信に由りて立てり、高ぶる勿れ、乃懼れよ。二一 蓋神若し本性の枝を惜まざりしなら
ば、爾をも亦惜まざらん。二二 故に神の慈と嚴しきとを視よ、卽躓きし者には嚴し
きなり、爾若し神の慈に止らば、爾には慈なり、否らずば、爾も斫り離されん。二三 彼等
も亦若し不信に止まらずば、接がれん、神は復彼等を接ぐを能すればなり。二四 蓋若し
爾本性の野の橄欖より斫られ、本性に反して、嘉き橄欖に接がれしならば、況や是の本
性の者が本の橄欖に接がれんをや。二五 兄弟よ、蓋我爾等が此の奧義を知らざるを
欲せず、爾等が己を恃みて智なりとせざらん爲なり、卽頑なる心がイズライリの幾

分にか及びしは、異邦人の滿數の入る時に至らんのみ。二六　斯く悉くのイズライルは救はれん、錄されしが如し、云く、救ふ者はシオンより來りて、不虔をイアコフより退けん。二七　且我が彼等の罪を除かん時、我が彼等と立つる所の約は乃此なりと。二八　福音に對しては、彼等は爾等に緣りて敵なり、選に對しては、先祖に緣りて愛せらるゝ者なり。二九　蓋神の賜と召さは易らざるなり。三〇　昔爾等神に順ならざりしが、今彼等の不順に由りて、矜恤を得しが如く、三一　斯く彼等も、今爾等が矜恤を得ん爲に不順なり、三二　蓋神は衆人を不順の中に閉せり、衆人に矜恤を施さん爲なり。三三　嗚呼深い哉神の富さ智慧さ知識や、其定は如何に究め難き。其道は如何に測り難く、三四　蓋孰か主の智慧を知りたる、或は孰か彼さ共に議る者たりし、三五　抑孰か先づ彼に與へて、其報を受くべき。三六　蓋萬物は彼に本づき、彼に倚り、彼に屬す。光榮は彼に世世に歸す「アミン」。

第十二章

一　故に兄弟よ、我神の慈憐を以て爾等に求む、爾等の身を活ける聖なる祭、神に悅ばるゝ者さして獻げて、爾等の靈智なる役を爲せ、二　且此の世に效ふ勿れ、乃

なんぢら 爾等が智慧の あらた 新なるを以て、自ら へんくわ 變化せよ、神の ぜん 善にして よろこ 悅ぶべき じゅんぜん 純全なる旨の何たるを わきま 辨へん爲なり。三 われ 我に あた 與へられし おんちょう 恩寵に よ 藉りて、我 なんぢらかくじん 爾等各人に い 言ふ、おも 思ふべき ところ 所に すぎ 過ぎて己の こと 事を思ふ勿れ、すなはちけんそん 乃ち謙遜を もつ 以て、かみ 神が かくじん 各人に むか 頒ちたる しん 信の りゃう 量に したが 循ひて思へ。四 けだし 蓋我 われら 等には ひとつ 一の からだ 體に おほ 多くの えだ 肢あり、しかう 而して えだみなそのやう 肢皆其用を おな 同じくせざるが如く、五 かず 斯く われ 我 おほ 多くの もの 者は、へ リストに おい 於て ひとつ 一の からだ 體にして、おのおのたがひ 各 互に えだ 肢なり。六 われら 我等に あた 與へられし おんちょう 恩寵に よ 依りて、我 われら 等 たまもの 賜を 異なる こと 事 え 得ば、しん 信の ど 度に よ 依りて よげん 預言せよ、七 つとめ 役事を 得ば、役事に をし 居れ、教ふる 者ならば、をし 教へよ、八 すすめ 勸 なす 爲す もの 者ならば、すすめ 勸めよ、ほどこ 施す もの 者は、すなほ 朴直にして ほどこ 施せ、理むる もの 者は、いつはり 僞なかるべし、悪を にく 惡み、ぜん 善を したし 親め、九 あい 愛は いつはり 僞なかるべし、悪を にく 惡み、ぜん 善を したし 親め、一〇 けいてい 兄弟の あい 愛を もつ 以て あひあい 相愛し、れいぎ 禮義を もつ 以て あひつつし 相謙れ。一一 つとめ 動に おこた 怠る なか 勿れ、しん 神を もや 熾せ、しゅ 主に つか 事へよ。一二 のぞみ 望を もつ 以て よろこ 喜び、くわんなん 患難に あ 遇ひて しの 忍べ、きたう 祈禱に つね 恒なれ。一三 せいと 聖徒の もと 需むる ところ 所に きょう 供せよ、つと 務めて たびびと 遠人を むか 迎へよ。一四 なんぢら 爾等を ろ 詛ふ もの 者を 祝福せよ、しゅくふく 祝福して、のろ 詛ふ なか 勿れ。一五 よろこ 喜ぶ もの 者と 共に 喜べ、な 哭く もの 者と 共に 哭け。一六 あひたがひ 相互に おな 同じくせよ、おもひ 思を たか 高きに は 馳せず、したが 順へ おのれ 己を もつ 以て ち 智なり

さする勿れ。一七 何人にも惡を以て惡に報ゆる勿れ、務めて衆人の前に善なる事を爲
せ。一八 若し能くすべくば、爾等の力を竭して衆人と相和せよ。一九 至愛の者よ、己の讎
を復す勿れ、乃退きて神の怒を待て、蓋錄して云へるあり、主曰く、讎を復すは我に在
り、我報いんと。二〇 故に若し爾の敵飢ゑば、之に食せ、若し渇かば、之に飲ませよ、蓋爾は
之を行ひて、燕炭を其首に集むるなり。二一 惡に勝たるゝ勿れ、乃善を以て惡に勝て。

第十三章

一 凡の人は上に在る權に服すべし、蓋神よりせざる權なし、有る所の權は
神より立てられたるなり。二 故に權に服せざる者は神の命に逆ふなり、逆ふ者は自ら
其罪を定む。三 有司の畏るべきは善き行の爲に非ず、乃惡しき行の爲なり。爾權を秉る
者を畏れざらんことを欲するか、善を行へ、然らば彼より褒を獲ん。四 蓋彼は神の僕に
して、爾の益の爲に立てられたり。然るに爾若し惡を行はば、畏れよ、蓋彼が劍を佩ぶる
は徒然ならず、彼は神の僕にして、怒を以て惡を行ふ人に報ゆる者なり。五 故に服すべ
きは、惟怒の爲のみならず、乃良心に緣るなり。六 爾等は此が爲に稅をも納む、蓋彼等
は神の役者にして、常に此の職に居るなり。七 故に各人に與ふべき所を與へよ、稅すべ

きには税し、貢すべきには貢し、畏るべきには畏れ、敬ふべきには敬へ。八何人にも何をも負ふ勿れ、唯相愛するを以て債と爲せ、蓋人を愛する者は律法を盡すなり。九蓋淫する毋れ、殺す毋れ、竊む毋れ、妄證する毋れ、貪る毋れ、及び其他の誡は、皆此の言の中に包れり、曰く、爾の鄰を愛すること、己の如くせよと。一〇愛は鄰に惡を爲さず、故に愛は律法を盡すなり。一一斯く行ふべし、今は我等が寐より寤むる時既に至りしを知ればなり、蓋今は我等が初めて信ぜし時に較ぶれば、救は更に我等に近し。一二夜過ぎて、晝邇づけり、故に我等昏昧の行を除きて、光明の甲を衣るべし。一三我等晝に在るが如く、行を美しくすべし、饕餮及び沈湎、好色及び邪侈、爭鬪及び嫉妬すべからず。一四乃爾等は我が主イイススハリストスを衣よ、肉體の慮を慾に變ずる勿れ。

第十四章

一信の弱き者は、意見を詰らずして之を納れよ。二蓋或人は凡の物食ふべしと信じ、弱き者は野菜を食ふ。三食ふ者は食はざる者を藐る勿れ、食はざる者は食ふ者を議する勿れ、蓋神は彼を納れたり。四爾は何人にして他人の僕を議するか、彼は己の主の前に立ち、或は倒る。且彼は立てられん、蓋神は之を立つるを能す。五或人は此の

日を彼の日より異にし、或人は諸日を相同じと爲す。各其眞智に順ふべし。六日を別つ者は主の爲に別たず。食ふ者は主の爲に食ふ、蓋神に感謝するなり。食はざる者も主の爲に食はず、亦神に感謝するなり。七蓋我等生くるも、己の爲に生くる者なく、亦己の爲に死する者なし、八即我等生くるも、主の爲に生き、死するも、主の爲に死す、故に我等或は生き、或は死するも、並に主に屬す。九蓋キリストの死し、復活し生きしは、特に死せし者と生ける者との主たらんが爲なり。一〇然るに爾は何爲れぞ爾の兄弟を議するぞ、或は爾も亦何爲れぞ爾の兄弟を藐るぞ、我等は皆ハリストの臺前に立たん。一一蓋錄せるあり、主曰く、我活く、凡の膝は我の前に屈み、凡の舌は神を承け認めんと。一二是くの如く我等は各己の事を神に陳べん。一三故に我等互に相議すべからず、爾等寧兄弟の前に躓、或は礙を置かざらんことを、是れ議せよ。一四我は主イイススハリストスに由りて知り且確に信ず、物は本潔からざるなり。一五然れども若し爾の兄弟食の爲に憂へば、爾既に愛に順ひて行ふに非ず。ハリストスが爲に死せし者を、此の物潔からざるなり。一五然れども若し爾の兄弟食の爲に憂へば、爾既に愛に順ひて行ふに非ず。ハリストスが爲に死せし者を、

爾の食を以て滅す勿れ。一六 爾等の善は毀らる可からず。一七 蓋神の國は飲食に在ら
ず、乃義と和平と聖神に由る喜とに在るなり。一八 此等を以てハリストスに役むる者
は、神に悅ばれ、人に嘉せらるゝなり。一九 是を以て我等は和平と互に德を建つること
とを追ひ求むべし。二〇 食の故を以て神の工を毀つ勿れ。物皆潔し、然れども食ひて人
を躓かしむる者の爲には惡しきなり。二一 寧肉を食はず、酒を飲まず、及び凡そ爾の兄
弟を躓かせ、或は惑はせ、或は弱らしむることを爲さざらん。二二 爾信あるか、之を己の
衷に、神の前に存せよ。自ら許す所に於て己を罪せざる者は福なり。二三 然れども疑ふ
者は食へば定罪せらる、信に由らざるが故なり、凡そ信に由らざることは罪なり。二四
我が福音及びイイススハリストスの教訓に循ひ、永世より隱され、二五 今顯されて、預
言者の書に符ひて、永遠の神の命に由りて、萬民を信に服せしめん爲に、之を知らせら
れたる奧義の顯示に循ひて、爾等を堅むることを能する、二六 獨一睿智の神に、イイスス
ハリストスに由りて、光榮は世世に歸す、「アミン」。

第十五章

一 我等強き者は強からざる者の弱きを負ひて、己を悅ばしむ可からず。二

我等各其鄰を悅ばしめ、善を以て其德を建つるを致すべし。三蓋ハリストスも己
を悅ばしめざりき、乃錄されしが如し、云く、爾を辱しむる辱は我に及べりと。四凡そ昔
錄されし者は、皆我等を訓へん爲に錄されたり、我等が忍耐と聖書の慰藉とを以て望
を守らん爲なり。五願はくは忍耐と慰藉とを施す神は、爾等にハリストスイイススに
循ひて互に意を同じくすることを賜はん、六爾等が心を一にし、口を一にして、神我が
主イイススハリストスの父を讚榮せん爲なり。七故に爾等相納るゝこと、ハリストス
が神の光榮の爲に爾等を納れしが如くせよ。八我言ふ、イイススハリストスが役者と
爲りしは、割禮の者に於ては、神の眞實に由りてなり、先祖に與へし許約を成就せん爲
なり、九異邦人に於ては、矜恤に由りてなり、彼等が神を讚榮せん爲なり、錄されしが如
し、云く、主よ、故に我爾を異邦の中に讚め揚げ、爾の名に歌はん。一〇又云く、異邦民よ、彼
の民と偕に樂め。一一又云く、諸異邦民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。一二
イサイヤも亦云く、イヱセイの根あらん、起きて異邦民を治め、異邦民は彼を賴まんと。
一三願はくは望を施す神は、爾等を信に由りて凡の喜と平安とに充たさん、爾等が聖

神の能に縁りて望に豐ならん爲なり。一四 我が兄弟よ、我爾等に於ては、爾等自も仁
愛に滿ち、凡の知識に充てられ、互に相訓ふるを能することを確に信ず。一五 然れども
兄弟よ、我が憚る所なく、略書して爾等に達するは、聊爾等に記念せしめん爲なり、是
れ我に神より與へられたる恩寵に因りてなり、一六 卽我をして、異邦民の中にイイ
ススハリストスの役者と爲り、神の福音の聖務を行ひて、異邦民の禮物が聖神に成聖
せられて、神に悅び納れらるべき者と爲るを致さしむる恩寵なり。一七 故に神に屬す
る事に於ては、我ハリストスイイススに由りて誇る可き所あり。一八 蓋ハリストス
が我を用ゐて、異邦人を信に服せしめん爲に、言と行とを以て、一九 休徵奇蹟の能神の
神の能に賴りて行ひし事の外は、我一も敢て言はず。ハリストスの福音は、我に由りて、
イエルサリム及び其近傍よりイッリリクに及ぶまで滿つるに至れり。二〇 且我が勤め
て福音せしは、ハリストスの名の已に稱へられし處に在らず、他人の基に建てざらん
爲なり、二一 卽錄されしが如し、云く、彼の事に於て未だ示を得ざりし者は見ん、未だ
聞かざりし者は悟らんと。二二 此に縁りて我屢阻まれて、爾等に詣るを得ざりき。二

三 然れども今既に此の方に斯る處なく、且多年以來我爾等に詣らんと
よ 由りて、二四 イスパニヤに赴かん時、爾等に至らん。蓋我過ぐる時、爾等
と 偕にして略滿足したる後、爾等が我を彼處に送らんことを望む。二五 然れども今我聖
と 徒に供事せん爲にエルサリムに往く。二六 蓋マケドニヤ及びアカ
イヤは、エルサリムの聖徒の貧者に、或る供給を爲さんことを喜びたり。二七 是た
且斯く爲す負あり、蓋異邦人既に彼等の靈神の事に與る者となりたれば、乃身に屬す
る事に於ても亦供せざるべからず。二八 故に我此の事を畢へ、確に此の果を彼
等に付して後爾等に寄りてイスパニヤに往かん。二九 我知る、爾等に至らん時、ハリス
トスの福音の滿ちたる祝福を以て至らんことを。三〇 兄弟よ、我等の主イエスキリ
ストスに縁り、又聖神の愛に縁りて、我爾等に求む、我と共に力を竭くして我が爲に神
に禱れ、三一 我がイウデヤに在る不信者より拯はれ、且我がイエルサリムに於ける供
事の聖徒に悅び納れらるべき者ならん爲、三二 又我が神の旨に循ひ、歡びて爾等に
詣り、偕に安息を得ん爲なり。三三 願はくは平安の神は爾等衆人と偕に在らん

ことを「アミン」。

第十六章

一我爾等に我等の姉妹、ケンフレアに在る教會の女執事たるフィロを薦む。
二爾等主に緣りて、聖徒に宜しき所の如く彼を接け、其爾等に需むる所あらば、彼に助
けよ、蓋彼も多くの者を助け、亦我をも助けたり。三請ふ、プリスキラ及びアキラに安を
問へ、即ハリストスイイススに於て我の同勞者、四我が生命の爲に其頸を置きし者、我
のみならず凡そ異邦人の諸教會が感謝する所の者なり、又其家の教會に安を問へ。五
我が至愛なるエペネト、ハリストスの爲にアハイヤの初實の果たる者に安を問へ。六
我等の爲に多く勞せしマリアムに安を問へ。七アンドロニク及びユニヤに安を問へ、
即我の親族、我と偕に囚たりし者諸使徒の中に名ある者、我に先だちてハリストス
を信ぜし者なり。八主に於て我が愛する所のアムプリイに安を問へ。九ハリストスに
於て我等の同勞者たるウルバン、及び我が至愛なるスタヒイに安を問へ。一〇ハリス
トスに於て熟練なるアペルレスに安を問へ。アリストウルの家の者に安を問へ。一一
我が親族イロディヲンに安を問へ。ナルキスの家の主を信ずる者に安を問へ。一二主の

爲に勞するトリフォサに安を問へ。又愛なるペルシダ、主の爲に多く勞せし者に安を問へ。一三 主に於て選ばれたるルフ、及びその母に安を問へ。至愛なるペルシダ、主の爲に多く勞せし者に安を問へ。一四 アシンクリト、フレゴント、エルム、パトロフ、エルミイ、及びこれ等と偕に在る諸兄弟に安を問へ。一五 フィロログ及びユリヤ、ニレイ及びその姉妹、又オリンパン及びこれ等と偕に在る諸聖徒に安を問へ。一六 聖なる接吻を以て互に安を問へ。キリストの諸教會は爾等に安を問へ。一七 兄弟よ、我爾等に求む、爾等が學びたる教に反して、分爭と誘惑とを爲す者を注視して、之を避けよ。一八 蓋此くの如き者は、我等の主イエスキリストに事へずして、己の腹に事へ、巧言媚語を以て、質朴なる者の心を欺く。一九 爾等の順從は衆に聞えたり、故に我爾等の爲に喜ぶ、惟願ふ爾等善に智にして、惡に愚ならんことを。二〇 平安の神は速にサタナを爾等の足下に倒さん。願はくは我等の主イエスキリストの恩寵は爾等と偕に在らんことを。「アーメン」。二一 我の同勞者ティモフェ、親族ルキイ、イアソン、ソシパトル、爾等の安を問ふ。二二 我テルティイ、此の書を筆せし者は、主に於て爾等の安を問ふ。二三 我と全教會との旅舘主ガイ、爾等の安を問ふ。邑の司

庫（づかさ）エラスト及び兄弟（およびけいてい）クワルト爾等（なんぢら）の安（あん）を問（と）ふ。二四 願（ねが）はくは我等（われら）の主（しゅ）イイススハリストスの恩寵（おんちょう）は爾等（なんぢら）衆人（しゅうじん）と偕（とも）に在（あ）らんことを「アミン」。

聖使徒パウルがコリンフ人に達する前書

第一章

一パウル、神の旨に由りて召されたるイエスキリストの使徒、及び兄弟ソステネは、二書してコリンフに在る神の教會、即ちキリストイエスに於て成聖せられし召されたる聖徒、及び悉くの人、何の處に在りても、我等の主イエスキリストの名を顧ぶ者に達す。三願はくは恩寵と平安とは、神我等の父、及び主イエスキリストより爾等に賜はらんことを。四我恒に爾等のために我が神に感謝す、キリストイエスに於て爾等に與へられたる神の恩寵に緣りてなり。五蓋爾等は彼に於て凡の事、即ち凡の言と凡の知識に富めるキリストの證爾等の中に堅められしに因る。七故に爾等は一の賜にも缺くる事なくして、我等の主イエスキリストの顯現を俟つ。八彼は爾等を終に至るまで堅めん、爾等が我等の主イエスキリストの日に於て責なからん爲なり。九爾等を召して、其子イエスキリスト我等の主に共與せしめたる神は信なり。一〇兄弟よ、我

等の主イイススハリストスの名に由りて、我爾等に求む、爾等皆言ふ所を同じくし、且爾等の中に分爭なく、乃爾等心を一にし、意を一にして相合ふべし。一一蓋我が兄弟よ、爾等に就きて、ハロヤの家人より、我に爾等の中に爭のあることを告げられたり。一二我が言ふ所は、卽爾等各言へるあり、我はパヱルに屬す、我はアポロスに屬す、我はキファに屬す、我はハリストスに屬すと。一三豈ハリストスは分れしか、豈パヱルは爾等の爲に十字架に釘せられしか、抑爾等はパヱルの名に藉りて洗を受けしか。一四神に感謝す、我はクリスプ及びガイの外、爾等の中誰にも洗を授けしことなし、一五人或は、我は我が名に藉りて洗を授けたりと、言はざらん爲なり。一六我亦ステファンの家に洗を授けたり、此の外何人に授けたりや否やを知らず。一七蓋ハリストスの我を遣しゝは、洗を授けん爲に非ず、乃福音を傳へん爲なり、又言の智慧を用ゐしめず、ハリストスの十字架の虛しくならざらん爲なり。一八蓋十字架の言は、滅ぶる者の爲には愚なり、我等救はるゝ者の爲には神の能なり。一九蓋錄して云へるあり、我智者の智を滅し、識者の識を廢せん。二〇智者は安にか在る、學士は安にか在る、此の世の辯論者

は安にか在る、神は此の世の智慧を愚と爲らしも以て、神を神の智慧に於て識らざりしに出りて、神は傳道の愚を以て、信ずる者を救はんことを喜べり。二二蓋イウデヤ人は休徴なるしを求め、ギリン人は智慧を乞ひ、二三我等は十字架に釘せられしハリストスを傳ふ、此れイウデヤ人の爲には礙、ギリン人の爲には愚、二四惟召されたる者の爲には、イウデヤ人及びギリン人な論ぜず、神の能及び神の智慧なり。二五蓋神の愚は人の智慧に過ぎ、神の弱は人の強に過ぐ。二六兄弟よ、爾等召されたる者の如何なる人たるを觀よ、肉に循ひて智慧ある者多からず、能ある者多からず、貴き者多からず。二七然れざも神は世の愚なる者を選べり、智なる者を愧しめん爲なり、神は世の弱き者を選べり、強き者を愧しめん爲なり、二八神は世の賤しき者、貶んぜらるゝ者、有ることなきが如き者を選べり、有る者を廢せん爲なり、二九此れ凡の肉が神の前に誇らざらん爲なり。三〇爾等は我等の爲に神に由りてハリストスイイススに在りてなり、蓋ハリストスは神より出る智慧と爲り、義及び成聖と爲り、贖ひと爲れり、三一錄して、誇る者は主を以て誇るべしと、云へるが如くな

らん爲なり。

第二章　一　兄弟よ、我が嘗て爾等に至りしは、爾等に言或は智慧の證を傳へん爲に至りしに非す。二　蓋我爾等の中に在りて、イエスス・ハリストス、且つ其十字架に釘せられし事の外は、何をも知らざらんことを定めたり。三　我且爾等と偕にせし時、弱に居り、多く懼慄に居りたり。四　又我が言ひ所、我が傳へし所は、人の智慧の感動せしむる言を以てせずして、神の能に由らんが爲なり。五　爾等の信が人の智慧に由らずして、神の能に由らんが爲なり。六　然れども我等は智慧を以てせり、五爾等の中に語る、惟斯の世の智慧、亦斯の世の過ぎ易き有司の智慧に非す、七　乃神の奥妙にして祕密なる智慧を語る、神が世世の先より我等の光榮の爲に預定せし者、八　斯の世の有司の一も識らざりし者なり、蓋彼等若し之を識りしならば、光榮の主を十字架に釘せざりしならん。九　然れども錄して云へるが如し、神が彼を愛する者の爲に備へし事は、目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心に未だ入らずと。一〇　惟我等には神已の神を以て之を顯せり、蓋神は察せざる所なし、神の深きをも察するなり。一一　蓋人の事は、人

の内に居る神の外、人誰か之を知らん、是くの如く神の事は、神の神の外、之を知る者なし。一二 然れども我等は斯の世の神を受けしに非ず、乃神よりする神を受けたり、神より我等に賜はりし事を知らん爲なり、一三 且我等斯の事を語るに、人の智慧の教ふる所の言を以てせずして、聖神の教ふる所を以てし、神に屬する言を以て、神に屬する事に當つるなり。一四 靈に屬する人は神の神の事を受けず、其彼の爲に愚たるが故なり、且之を識る能はず、蓋此れ神に由りて度らるゝなり。一五 然れども神に屬する人は度らざる所なし、而して己は何人にも度られず。一六 蓋誰か主の智慧を知りて、之を議するを得ん。我等に在りてはハリストスの智慧を有てり。

第三章

一 兄弟よ、我も爾等に語りしこと、神に屬する者に於けるが如くするを得ずして、肉に屬する者に於けるが如く、ハリストスに在る赤子に於けるが如くせり。二 我爾等を養ふに乳を以てして、糧を以てせざりき、蓋爾等之を受くる能はざりき、今も亦能はず、三 爾等尚肉に屬すればなり。蓋爾等の中に娼嫉と爭鬪と分離とあれば、爾等は肉に屬し、人に循ひて行ふに非ずや。四 蓋一は我パワルに屬すと言ひ、他は我アポ

ロスに屬すと言ふ時は、爾等肉に屬するに非ずや。五パヌルは誰たる、アポロスは誰たる。彼等は役者のみ、主の彼等各人に與へし所に隨ひて、爾等が信を得ることに勤めし者なり。六我は種ゑ、アポロスは灌げり、然れども神は長ぜしめたり。七故に種うる者も灌ぐ者も何か有らん、惟長ぜしむる神に在り。八種うる者及び灌ぐ者は一なり、然れども各己の勞に循ひて其値を得ん。九蓋我等は神の同勞者なり、爾等は神の耕へす所の田、神の建つる所の屋なり。一〇我は神より我に與へられし恩寵に循ひて、智なる工師の如く基を置けり、他人は其上に建つ、然れども各如何に建つるかを愼め。一一蓋置かれたる基なるイイススハリストスの外、誰も他の基を置く能はず。一二人若し斯の基の上に金、銀、寶石、木、草、稈を以て建てば、一三各人の工は顯れん、夫の日は之を表さんとすればなり、蓋火に因りて明ならん、火は各人の工の如何なるを試みん。一四若し人の建てし所の工存せば、値を得ん。一五若し其工焚けば、損を受けん、然れども己は火より脫るゝが如く救はれん。一六爾等豈知らずや爾等は神の殿にして、神の神爾等の中に居ることを。一七若し人神の殿を毀たば、神は彼を毀たん、蓋神の殿は聖なり、此の殿

は爾等なり。一八 何人も自ら欺く勿れ、若し爾等の中に斯の世に於て智あらば、智き爲らんが爲に愚き爲るべし、一九 此の世の智慧は神の前に愚なれば也。錄して云く、彼は智者を其詭計の中に拘ふ。二〇 又云く、主は智者の思念の虛しきを知ろと。二一 故に誰も人を以て誇と爲す勿れ、萬皆爾等に屬す。二二 或はパウロ、或はキファ、或は世界、或は生命、或は死、或は現在、或は未來、皆爾等に屬す。二三 爾等はキリストに屬し、キリストは神に屬す。

第四章 一 人我等を視て、キリストの役者、神の機密の家宰と爲すべし。二 家宰に求むる所は、其忠ならんことなり。三 我は爾等或は他人が如何にか我を度ることを、極めて小き事と爲す、我自らも己を度らず。四 蓋我は內に省みて責む可きなしと雖、此を以て義とせられず、我を度る者は主なり。五 故に爾等時未だ至らざる間は、何事をも譏判せず、主の來るを待て、彼は幽暗に隱れたる事を照し、心の謀を顯さん、其時各神より譽を得ん。六 兄弟よ、我は爾等の爲に、此を以て己及びアポロスに擬へたり、爾等が錄されし所に過ぎて思ひ議らざることを我等に學ばん爲、又各相驕らさらん爲なり。

七蓋誰か爾を異にする、爾は何の未だ受けざりし者を有つか、若し受けしならば何ぞ
受けざりし者の如く誇る。八爾等已に飽き足れり、爾等已に富めり、爾等は我等と偕に
せずして王と爲れり。嗚呼願はくは爾等の實に王たらんことを、我等も爾等と偕に王
たらん爲なり。九蓋我意ふに、神は我等使徒を末なる者と爲して、死に定められたる者
の如く顯せり、我等は世界の爲、天使等及び人人の爲に、觀玩と爲りたればなり。一〇我
等はハリストスに因りて愚なり、爾等はハリストスに於て智なり、我等は弱く、爾等は
強し、爾等は榮を享け、我等は辱に處るなり。一一今に迄るまで我等は飢ゑ、渇き、裸裎に
なり、撻たれ、定り居る處なく、一二勞して手づから工を作す。我等詈られては祝福し、窘
逐せられては忍び、一三謗られては禱る、我等は世の汚穢の如く、衆の踐む所の塵垢の
如くせられて今に至れり。一四我は爾等を愧しめんと欲して此を書するに非ず、乃我
が愛する所の子の如く爾等を訓ふるなり。一五蓋爾等には、ハリストスに於て萬人の
師傅ありと雖、多くの父あるなし、我ハリストスイイススに於て福音を以て爾等を生
みたればなり。一六故に我爾等に求む、我に敎ひて、我のハリストスに於けるが如くせ

よ。一七 此に縁りて我爾等に我が至愛にして主に於て忠なる子ヲモヱイを遣せり、彼
は爾等に我がハリストスに於ける諸道、卽我が徧く各教會に教ふる事の如何を記念
せしめん。一八 我爾等に往かざるに因りて、爾等の中の或者は誇れり。一九 然れども主
の旨に適はば、我速に爾等に至らん、而して誇る者の言に非ず、乃其能を試みん。二〇
蓋神の國は言に在らず、乃能に在り。二一 爾等何をか欲する、我杖を以て爾等に臨ま
んか、抑愛と温柔の神とを以てせんか。

第五章

一 確に聞ゆ、爾等の中に淫行あり、異邦人の中にも言はざる所の淫行なり、卽
或者其父の妻を有てるなり。二 爾等誇りて、尙痛哭せず、此の事を行ひし者の爾等の中
より除かるゝを致さゞるか。三 然れども我は肉體を以て爾等の中に在らずと雖、神
を以て在りて、彼處に居るが如く、斯る事を行ひし者を、四 我等の主イイススハリスト
スの名に於て、爾等及び我の神は會して、我等の主イイススハリストスの能に賴りて、
五 已にサタナに付さんことを定めたり、其肉體の惱され、其神の我等の主イイススハ
リストスの日に於て救はれん爲なり。六 爾等の矜誇は善からざるなり。豈知らずや、僅

なる酵は盡くの溲麪を酸くするを。七故に爾等舊き酵を除け、新なる溲麪とならん爲
なり、爾等酵なき者なればなり、蓋我等の逾越節羔なるハリストスは我等の爲に宰ら
れたり。八然らば我等祝ふに、舊き酵を以てせず、姦惡と詭譎との酵を以てせず、乃潔
淨と眞實との酵なき餅を以てすべし。九我書を爾等に達して、淫行者と交る勿らんこ
とを勸めたり、一〇然れども概して此の世の淫行者、或は貪婪者、或は强奪者、或は拜偶
像者を指すには非ず、若し然らば爾等世を出でざるべからず。一一乃我が書して爾
等に達せしは、若し人兄弟と稱へられて、或は淫行者、或は貪婪者、或は拜偶像者、或は詬
誶者、或は沈湎者、或は强奪者たらば、彼と交る勿く、此る者と偕に食ふだに勿らんこと
なり。一二蓋外の者をも擬定するは、我に於て何ぞ與らん、爾等內の者を擬定するに非
ずや。一三外の者は、神之を擬定す。故に惡者を爾等の中より除け。

第六章

一爾等の中に相爭ふ事ある時、何ぞ敢て不義者の前に訟へて、聖徒の前に於
てせざる。二爾等豈知らずや、聖徒が世界を審判せんことを。若し世界爾等に審判せら
れんとせば、爾等は小き事を審判するに堪へざるか。三豈知らずや、我等が天使等を審

判せんことを、況や世の事をや。四 然れども爾等世の事を審判せんとする時は、教會の中に卑しめらるゝ者を審判座に坐せしむ。五 我爾等の愧の爲に曰ふ、爾等の中には、其兄弟の間の事を審斷するを能する智者一もなきか。六 乃兄弟は兄弟と相訟へ、且此の事を不信者の前に爲すか。七 爾等相訟ふることあるは、此れ已に爾等の爲に大なる疵なり。爾等何ぞ寧侵されて、忍ばざる、何ぞ寧損害を受けて、耐ふることをせざる。八 然れども爾等自ら侵し、及び損害を爲す、且兄弟に對して之を爲すなり。九 爾等豈知らずや、不義の者は神の國を嗣ぐを得ざらんことを。自ら欺く勿れ、凡そ淫行、拜偶像、姦淫、孌童、男色、一〇 盜竊、貪婪、沈湎、詬誶、強奪を爲す者は、神の國を嗣ぐを得ず。一一 爾等の中にも曾て此くの如き者ありき、然れども我等の主イイススハリストスの名、及び我等の神の神を以て洗はれ、成聖せられ、義とせられたり。一二 凡の物我に許されたり、然れども凡の物益あるには非ず、凡の物我に許されたり、然れども其一も我に主たるべからず。一三 食は腹の爲、腹は食の爲なり、然れども此と彼と神之を廢せん、身は淫行の爲に非ず、乃主の爲なり、主も亦身の爲なり。一四 神は主を復活せしめたり、其能を以て我

ら等をも復活せしめん。一五豈知らずや、爾等の身はハリストスの肢なるを。故に我ハリストスの肢を取りて淫婦の肢と爲さんか、然すべからず。一六或は知らざるや、淫婦に附く者は一體と爲らんこと。一七然れども主に附く者は一神と爲るなり。一八淫行を避けよ。凡そ人の行ふ罪は身の外に在り、然れども淫行を行ふ者は己の身を犯すなり。一九豈知らずや、爾等の身は爾等の聖神、爾等が神より受けし者の殿にして、爾等己に屬するに非ざるを。二〇蓋爾等は價を以て買はれたり、故に均しく神に屬する爾等の身を以て、爾等の靈を以て、光榮を神に歸せよ。

第七章　一爾等が書して我に達せし事に至りては、男は女に觸れざるを善とす。二然れども淫行を免れん爲に、人各〻其妻を有ち、女各〻其夫を有つべし。三夫は當然の親愛を其妻に與へ、妻も其夫に然すべし。四妻は己の身に主たるに非ず、乃夫なり、同じく夫も亦己の身に主たるに非ず、乃妻なり。五互に相避くる勿れ、惟共に意を合せて、齋と祈禱とを務むる爲に、暫時なるは可なり、後復相合ふべし、サタナが爾等の情の禁

ぜざるに乗じて、爾等を誘はざらん爲なり。六 然れども我が此を言ふは許すなり、命ずるに非ざるなり。七 蓋 我は人皆我の如くならんことを願ふ、然れども神より受けたり、一は此の如く、一は彼の如し。八 我未だ婚姻せざる者及び嫠婦に謂ふ、若し我の如くして居らば、彼等に善し。九 然れども若し自ら制すること能はずば、婚姻すべし、蓋婚姻するは慾の熾ゆるに愈れり。一〇 已に婚姻せし者に命ず、是れ我に非ず、乃主の命なり、妻は夫に離るべからず、一一 若し離れたらば、嫁がずして居るべし、或は其夫と和ぐべし、夫も亦其妻と別るべからず。一二 其餘の者には我之を言ふ、主に非ず、若し兄弟信ぜざる妻を有ち、妻彼と偕に居らんことを諾はば、之と別るべからず。一三 若し妻も信ぜざる夫を有ち、夫彼と偕に居らんことを諾はば、之と別るべからず。一四 蓋信ぜざる夫は信ずる妻に由りて聖にせられ、信ぜざる妻は信ずる夫に由りて聖にせらる。然らずば爾等の子女は潔からざらん、今は乃聖なり。一五 若し信ぜざる者離れんと欲せば、離るべし、兄弟或は姉妹は此くの如き事に於て繋がるゝなし、神は和平の爲に我等を召したり。一六 妻よ、爾 焉ぞ夫を救はざるを知らん、或は爾 焉ぞ夫よ、焉ぞ妻を

救はざるを知らん。二七 惟神が各人に頒ちし所に循ひ、主が各人を召し
行ふべし。我是くの如く諸教會に命ず。一八 人已に割禮を受けて召されしか、之を受くる勿れ。一九 割禮は益なく、無割
も益なし、唯神の誡を守らんのみ。二〇 各其召されし時に在りしまゝ
一爾奴僕にして召されしか、慮ふ勿れ、若し釋さるゝを得さしも、寧之に從へ。二一
は、ハリストスの奴僕なり。二三 爾等は價を以て買はれたり、人の奴僕と爲る勿れ。二四
兄弟よ、各其召されし時に在りし分に於て、神の前に止るべし。二五 童貞に至りては、
我に主の命なし、然れども主に忠ならんことの矜恤を蒙れる者さ
ふ。二六 今の時の危難に因りて、我此を善しとす、人斯く居るは善し。二七 爾妻に繋がれし
か、釋くことを求むる勿れ、妻の繋なきか、妻を求むる勿れ。二八 然れども
た娶ぐさも、罪を獲ざらん。惟此くの如き者は其身難に遭はん、我之を爾
等の爲に惜む。二九 兄弟よ、我爾等に告ぐ、時は已に歷れり、故に妻ある者は、無きが如く

し、三〇 哭く者は、哭かざるが如くし、喜ぶ者は、喜ばざるが如くし、買ふ者は、得ざるが如くし、三一 此の世を用ゐる者は、用ゐざるが如くすべし、蓋此の世の形狀は逝ぐるなり。三二 我は爾等が慮なき所を欲す。娶らざる者は、主に屬する事、如何に主を悦ばしめんと主の慮り、三三 娶りたる者は、世に屬する事、如何に妻を悦ばしめんと慮り、別あり、嫁がざる者は、主に屬する事、如何に主を悦ばしめんと慮る。三四 嫁ぎたる者と處女とは、世に屬する事、如何に夫を悦ばしめんと慮り、嫁ぎたる者は、主に屬する事、如何に主を悦ばしめんと慮る。三五 我之を言ふは、爾等の益の爲にして、爾等に絆を置かんとするに非ず、乃爾等が宜しきに合ひ、紛擾なく、熱心に主に事へん爲なり。三六 若し人己の處女を嫁がざるが如くし、其年已に實ろに及びて、斯く居ることを宜しきに合はずと意はば、其欲する所を行ふべし、罪を獲ざらん、此くの如き者は嫁ぐべし。三七 然れども人若し其心を堅固にし、已むを得ざる事なく、乃其志を爲すに權ありて、已の處女を守らんことを中心に決定せば、其行ふ所善し。三八 故に其處女を嫁がしむる者は、行ふ所善し、嫁がざる者は、行ふ所更に善し。三九 妻は夫の生ける時に於ては、法に繫がれたり、然れども夫死せば、

自由に其欲する所の者に嫁ぐべし、但主に於てすべきのみ。四〇然れども彼若し斯く止らば、更に福なり、此れ我の勘識なり、意ふに我も亦神の神を有てりと。

第八章　一偶像に獻げし物に至りては、我等知る、偶像は世に虚無にして、惟一の神の外に他の神なしと。二若し人自ら知ると誇を致す、惟愛は徳を建つ。三若し人神を愛せば、此の人彼に知られたるなり。四然れども偶像に獻げし物を食ふことに至りては、我等知る、偶像は世に虚無にして、惟一の神の外に他の神なしと。五蓋所謂諸神、或は天に或は地に、多くの神、多くの主の如き者もありさ雖、六然れども我等には一の神父あり、萬物彼自りし、我等彼に歸す、又一の主イエスキリストありて、萬物彼に由り、我等も彼に由る。七然れども人皆此くの如き知識あるに非ず、或者は今に至るまで、偶像を認むる眞心ありて、之を偶像に獻げし物を食へば、彼等の眞心は弱きに因りて汚さる。八食物は我等を神の前に立たしめず、蓋我等は食ふとも得ること所なく、食はずとも失ふ所なし。九然れども汝等の自由は弱き者の躓と爲らん。一〇蓋若し人、爾知識ある者が、偶像の廟に坐して食ふを見ば、彼弱

き者の眞心は、彼にも偶像に獻げし物を食ふを勸めざらんや。一一然らば爾等此かく因りて、弱き兄弟ハリストスの之が爲に死せし所の者は亡びん。一二兄弟に對して罪を獲、彼等の弱き眞心に傷つけて、ハリストスに對して罪を獲るなり。一三故に若し食物我が兄弟を誘はば、我永く肉を食はざらん、我が兄弟を誘はざらん爲なり。

第九章　一我使徒たるに非ずや。我自主たるに非ずや。我イイススハリストス我等の主を見しに非ずや。爾等は主に於て我の工ろこと、他の使徒及び主の兄弟、及びキファの如く然ろ權なきか。六抑獨我とワルナバとは工作せざる權なきか。七誰か軍士として、己の給養を以て動むることをせん。誰か葡萄を樹ゑて、其果を食はざらん。誰か群を牧して、羣の乳を食はざらんや。八我唯人の情に循ひて之を言ふか。律法も亦斯く言ふに非ずや。九蓋モイセイの律法に錄して云く、

穀物を踐み落す牛には口を閉づる勿れと。神は牛の爲に慮るか。一〇抑之を言ふ
は、特に我等の爲にするか。是れ我等の爲に錄されたり、蓋耕す者は、望ありて耕すべ
し穀物を踐み落す者は、其希望する所を獲る望ありて之を爲すべし。一一若し我等爾
等の中に神に屬する物を播きたらば、爾等の身に屬する物を穫るは、豈大事ならんや。
一二若し他人此の權を爾等の中に獲ば、況や我等をや。然れども我等は此の權を用ゐ
ざりき、乃凡の事を忍ぶ、ハリストスの福音に聊も阻礙を置かざらん爲なり。一三爾
等豈知らずや、聖事を務むる者は、殿に由りて食を得、祭壇に事ふる者は、祭壇より其分
を取るを。一四是くの如く主も福音を傳ふる者に、福音に由りて生活するを命じたり。
一五然れども我は此等の事を一も用ゐざりき。亦此を書せしは、此くの如く我に行は
しめん爲に非ず。蓋我寧死すとも、人をして我が誇る所を虛しきに歸せざらしめん。
一六蓋我若し福音を傳へば我に誇るべき所なし、此れ我が分の爲すべき所なればな
り、若し福音を傳へずば、我禍なる哉。一七蓋若し我甘んじて此を行はば、賞を得ん、若し
甘んぜずば、乃我に託せられし職を行ふのみ。一八然らば我が賞は何に由るか。我福

音を傳へて、人をして費なくハリストスの福音を得しめ、福音する時我が權を用ゐざるに由る。一九 蓋我衆に對して自主なりと雖、己を衆に服役せしめたり、更に多くの者を獲ん爲なり。二〇 我イウデヤ人の爲には、イウデヤ人の如く爲れりイウデヤ人を獲ん爲なり、律法下の人の爲には、律法下の人の如く爲れり、律法下の人を獲ん爲なり。二一 律法無き人の爲には、我神の前に律法無きに非ずして、ハリストスの律法下に在る者は律法無き人の如く爲れり、律法無き人を獲ん爲なり。二二 弱き人の爲には、弱き人の如く爲れり、弱き人を獲ん爲なり。凡の人の爲には、凡の者と爲れり、凡の法を以て或人人を救はん爲なり。二三 我が福音の爲に此を行ふは、共に之に與る者と爲らん爲なり。二四 爾等豈知らずや、馳場に趨る者は、皆趨れども、唯一人賞を獲るを。爾等獲んことを期して趨れ。二五 凡そ勝を爭ふ者は諸事を節制す、彼等は壞れ易き冕を受けん爲、我等は壞れざる冕の爲なり。二六 故に我が趨るは、定向なきが如きに非ず、我が戰ふは、空氣を擊つが如きに非ず。二七 乃我の體を制して之を服せしむ、他人を教へて、自ら棄てらるゝ者と爲らざらん爲なり。

第十章　一兄弟よ、我爾等が知らざるを欲せず、我等の先祖は皆雲の下に在り、皆海を過れり、二皆モーセに於て雲と海とに洗禮を受けたり、三皆同じき靈神の飲料を飲めり、此の飲料は隨來の磐より飲めり、磐はキリストなり。四然れども神は彼等の中の多くの者を悅びしに非ず、蓋彼等は野に於て滅されたり。五此等の事は我等の爲に鑒と爲れり、我等が惡を嗜むこと彼等の嗜みし如くならざらん爲なり。六爾等偶像を拜することを、彼等の中の或者の如し、云く、民は坐して食ひ飲み、起ちて舞へりと。七我等淫を行ふこと、彼等の中の或者が淫を行ひて、一日間に二萬三千人殞れしが如くすべからず。八我等キリストを試みて、蛇に由りて滅びしが如くすべからず。九ハリストを試みふこと、彼等の中の或者が怨言を言ひて、誅滅者に由りて滅びしが如くすべからず。一〇怨言を言ふ勿れ。一一此の諸事は彼等に遇ひて、鑒と爲れり、此等の錄されしは、我等世の末に及びし者の警と爲らん爲なり。一二故に自ら立てりと意ふ者は、愼むべし、恐らくは倒れん。一三爾等が遇ひたる試誘は、人の常ならざるなし、神は信なり、爾等が誘はるゝことを、爾

等の能する所に過ぐるを容さず、乃試誘と偕に逃るべき法を備へん、爾等の堪ふる
を得ん爲なり。一四 故に我が至愛の者よ、偶像を拜することを避けよ。一五 我智者に於
けるが如く爾等に言ふ、我が言ふ所を判斷せよ。一六 我等が祝福する所の祝杯は、ハリ
ストスの血に與ることに非ずや、我等が擘く所の餅は、ハリストスの體に與ることに
非ずや。一七 餅は一なるが故に、我等多くの者も一の體を成す、蓋皆共に一の餅より領
くるなり。一八 肉に屬するイズライリを觀よ、祭物を食する者は、祭壇に與る者に非ず
や。一九 然らば我何をか言ふ。偶像は有る者なりと言ふか、抑偶像に獻げし物は有る
者なりと言ふか。然らず。二〇 乃異邦人が祭を獻ぐるは、魔鬼に獻ぐる者にして、神に
於てするに非ざるを言ふなり。然れども我は爾等が魔鬼に與る者と爲るを欲せず。二
一 爾等は主の杯と魔鬼の杯とを兼ねて飲む能はず、主の席と魔鬼の席とに兼ねて與
る能はず。二二 我等主の嫉を激せんか。豈我等は彼より强きか。二三 凡の物我に許され
たり、然れども凡の物益あるには非ず。凡の物我に許されたり、然れども凡の物德を建
つるには非ず。二四 人皆己の益を求むる勿れ、乃各他人の益を求めよ。二五 凡そ市

に告る者は、之を食ひて、問ふ勿れ、良心の爲の故なり、二六 蓋地と之に滿つる者とは皆主に屬す。二七 若し不信者の中の人爾等を邀へ、爾等往かんと欲せば、凡そ爾等に進む所の者は、之を食ひて、問ふ勿れ、良心の爲の故なり。二八 然れど若し人爾等に、此れは偶像に獻げし物なりと言はば、食ふ勿れ、之を告げし者の爲、及び良心の爲の故なり、二九 良心とは、己の者に非ずして、他人の者を言ふなり 蓋我の自由は何ぞ他の良心に議せらるれん。三〇 若し我恩寵に由りて食はば、何ぞ我が感謝する所の者に縁りて譴を受けん。三一 故に爾等或は食ひ、或は飲み、或は何ぞ事を行ふに、凡て榮の爲に行へ。三二 イウデヤ人にも、エルリン人にも、神の教會にも、躓き爲る勿れ。三三 即我が凡の事に於て衆を悦ばしめ、己の利益を求めずして、多くの者の利益を其救を得ん爲に求むるが如くすべし。

第十一章

一 爾等我がハリストスに效ふが如し。二 兄弟よ、我爾等を賞す、爾等我が凡の事を記念し、且我が爾等に傳へし如く、諸傳を守るに因りてなり。三 我又爾等が知らんことを欲す、凡の男の首はハリストスなり、女の首は男なり、ハリ

ストスの首は神なり。四凡の男首に蒙りて祈禱し、或は預言する者は、己の首を辱しむ。五又凡の女首に蒙らずして祈禱し、或は預言する者は、己の首を辱しむ、蓋此れ薙髮と異なるなし。六女若し蒙らずば、髮を翦るべし、然れども女若し翦り或は薙るを辱とせば、蒙るべし。七是を以て男は首に蒙る可からず、其神の像及び光榮なるが故なり、女は男の光榮なり。八蓋男は女よりせしに非ず、乃女は男よりせしなり。九又男は女の爲に造られしに非ず、乃女は男の爲に造られしなり。一〇故に女は其上に在る權の號を首に戴くべし、天使等の爲の故なり。一一然れども主に在りては、男も女に由らざるなく、女も男に由らざるなし。一二蓋女の男よりせしが如く、男も亦女に由りてなり、然れども皆神よりするなり。一三爾等自ら度れ、女蒙らずして神に祈るは宜しきか。一四本性自ら爾等に、男若し髮を長ぜしめば、彼の爲に辱なるを示すに非ずや、一五然れども女若し髮を長ぜしめば、彼の爲に榮なり、蓋髮は蒙に代へて彼に與へられたり。一六惟若し爭論せんと欲する者あらば、我等に此くの如き例なし、神の諸教會にも亦然り。一七然れども我之を勸めて、爾等を賞せざるは、爾等が益の爲に非ずし

て、損の爲に集るを以てなり。一八 蓋先我は、爾等が教會に集る時、爾等の中に分爭ありと聞けり、我暑之を信ず。一九 蓋爾等の中には、異説も無き能はず、練達者が爾等の中に顯れん爲なり。二〇 又爾等の一處に集るは、主の晩餐を食するの宜しきに合はず。二一 蓋各 先だちて己の食を食ふ、是を以て飢うる者もあり、醉へる者もあり。二二 爾等豈食飲する爲に家なきか。抑爾等神の教會を慢り、又乏しき者を辱しむるか。我爾等に何をか言はん。此が爲に爾等を賞せんか。我賞せず。二三 蓋我が爾等に傳へし事は、我 主より受けし所なり、即 主イエスは付さるゝ夜に、餅を取り、二四 感謝して、之を擘きて曰へり、此は爾等の爲なる我體なり、我を記念せよ。二五 同じく晩餐の後に爵を執りて曰へり、此の爵は乃 新約、我が血を以て立つる者なり、爾等此を行ひて、飲む毎に我を記念せよ。二六 蓋爾等此の餅を食ひ、此の爵を飲む毎に、主の死を示して、其來る時に及ばん。二七 故に宜しきに合はずして、此の餅を食ひ、或は主の爵を飲む者は、主の體と血とに罪を負ふなり。二八 人自ら省みて、然る後此の餅より食ひ、此の爵より飲むべし。二九 蓋宜しきに合はすして食ひ

の飲む者は、己の爲に定罰を食ひ飲むなり、主の體を辨へざるを以てなり。三〇 此に縁りて爾等の中に弱き者及び病む者多く、寢る者も少からず。三一 蓋若し我等己を辨へしならば、審を受けざりしならん。三二 然れども審せられて、主より懲を受く、世と與に定罪せられざらん爲なり。三三 我が兄弟よ、故に爾等集りて食すべし、爾等集りて定罰を受けざらん爲なり。其餘の事は、我至る時之を理めん。

第十二章

一 兄弟よ、靈神の賜に至りては、我爾等が知らざるを欲せず。二 爾等が異邦人たりし時、言なき偶像に往きしこと、牽かれたる者の如くなりしは、爾等の知る所なり。三 故に我爾等に告ぐ、神の神に由りて語る者は、一人もイイスに對して「アナヱマ」を言はず、又聖神に由らざれば、一人もイイスを主と稱ふる能はず。四 恩賜は殊なるあり、然れども神は同一なり、五 職務も殊なるあり、然れども主は同一なり、六 行爲も殊なるあり、然れども神は同一なり。七 神の顯はれは各人に與へらる、益の爲なり。八 此の人には神より智慧の言は與へられ、彼の人には同一の神より

知識の言は與へられ、九或には同一の神より信德に與へられ、或には同一の神より醫を施す恩賜は與へられ、一〇或には異能、或には預言、或には諸神の辨別、或には方言、或には方言の譯解は與へらる。一一然れども凡そ此等の事を行ふ者は、同じく一の神なり、彼は己の欲する所に隨ひて、各人に頒ち與ふ。一二蓋體は一にして、多くの肢あり、其一の體の悉くの肢は多しと雖、一の體を爲すが如く、ハリストスも是くの若し。一三蓋我等或はイウデヤ人、或は奴隷、或は自主なる者、皆一の神に由りて洗せられて、一の體と爲り、又一の神に飲ませられたり。一四夫れ體は第一の肢のみならず、乃多くあり。一五若し足は、我手に非ざるが故に、體に屬せずと云はば、果して此に因りて體に屬せざるか。一六又若し耳は、我目に非ざるが故に、體に屬せずと云はば、果して此に因りて體に屬せざるか。一七若し全體目ならば、聽くこと安にか在る。若し全體耳ならば、嗅ぐこと安にか在るか。一八然れども神は其欲せし如く、肢を以て各體に置けり。一九若し皆一の肢たらば、體は安にか在るか。二〇今肢は多しと雖、體は一なり。二一目は手に、我爾を要せずと謂ふを得ず、或は又首は足に、我爾を要せずと謂ふを得

す。二二 惟是のみならず、體の中に關しさ意はるゝ肢は、更に切要なり。
我等の視て尊からずと爲る者は、之を保護すること愈厚し。二四 且我等の美しからざる者は、更に美しく蔽はるゝ、然るに我等の美しき者は、之を要せず。乃神は體を調和して、劣れる者に更に尊きを賜へり、二五 體の中に分爭なくして、肢皆同じく相慮らん爲なり。二六 故に若し一の肢苦しまば、悉くの肢は之と共に苦しみ、若し一の肢榮を得ば、悉くの肢は之と共に喜ぶ。二七 爾等はハリストスの體にして、亦各 其肢なり。二八 神が教會に立てし所の者、第一は使徒、第二は預言者、第三は教師、後は異能、次は醫を施す恩賜、佐くる者、治むる者、方言を言ふ者なり。二九 豈皆使徒たらんや。皆預言者たらんや。皆教師たらんや。皆異能を行ふ者たらんや。三〇 皆醫を施す恩賜を有たんや。皆方言を言はんや。皆譯解せんや。三一 爾等更に大なる恩賜を切望せよ、然らば我尤善き道を爾等に示さん。

第十三章

一 我諸人の方言、及び天使等の言を語るさも、若し愛なくば、我鳴る銅或は響く鉢の如し。二 我預言の能あり、凡の奧義さ凡の知識さを明にするあり、且凡の信、能

く山を移すありと雖、若し愛なくば、我無きが如し。三我悉く我が所有を施し、又我が
軀を焚くに委ぬとも、若し愛なくば、我一も益なし。四愛は寛忍し、矜恤し、愛は妒ます、
愛は誇らず、驕らず、五非禮を行はず、己の利を求めず、怒を發せず、惡を念はず、六不義を
喜ばずして、眞實を喜び、七凡の事を庇ひ、凡の事を信じ、凡の事を望み、凡の事を忍ぶ。八
愛は永く墮ちず。然れども預言は息み、方言は絶ね、知識は息まん。九蓋我等は知ること
全からず、預言すること全からず。一〇全き者の來る時、全からざる者は息まん。一一我
童子たりし時、童子の如く言ひ、童子の如く思ひ、童子の如く謀れり、人と成りて後は童
子の事を息めたり。一二今は我等鏡に緣りて見るが如く、見ること朧朧なり、其時は面
を合せて觀ん今は我知ること全からず、其時は我が知られしが如く知らん。一三今は
信望、愛、此の三の者存す其中に最大なる者は愛なり。

第十四章

一爾等愛を追ひ求め、屬神の賜を慕へ、殊に切要なるは預言することなり。
二蓋方言を言ふ者は、人に言ふに非ずして、神に言ふ、人之を曉らざるに因る、彼は神を
以て奥義を言ふなり。三然れども預言する者は、人に言ひて其德を建て、勸勉を爲し安

慰を興ふ。四 方言を言ふ者は己の徳を建て、預言する者は教會の徳を建つ。五 我爾等が皆方言を言ふを願へども、殊に切要なる者は、爾等が預言するこなり、蓋方言を言ふ者、若し譯解して、教會の徳を建つるを致さずば、預言する者は彼より勝るよ、我若し今爾等に詣り、方言を言ひて、或は默示或は知識、或は預言、或は教訓を以て言はずば、爾等に何の益かあらん。七 夫れ靈なくして聲を出す者、或は笛、或は琴、若し其音別なくば、孰か戰の備を爲さん。八 若し喇叭ふく所、或は鼓く所の何なるを知らざるはなし。一一 然れども我若し其音の義を識らずば、我は言ふ者の爲に異國人なり、言ふ者も我の爲に異國人なり。一二 是くの如く爾等も、若し舌を以て明ならざる言を出さば、孰ぞ言ふ所の何なるを知らん。蓋等空氣に言はんのみ。一〇 世界には土音の類幾何か多き、而して其一も義あらざるはなし。一一 然れども我若し其音の義を識らずば、我は言ふ者の爲に異國人なり。一二 是くの如く爾等も、神の賜を慕ふに因りて、教會の徳を建つるに務むべし。一三 故に方言を言ふ者は、之を譯解せん爲に祈るべし。一四 蓋我若し方言を以て祈らば、我が智は結果なし。一五 然らば若何にせん。我神を以て祈り、亦智を以て祈ら

ん、我神を以て歌ひ、亦智を以て歌はん。一六 蓋若し爾神を以て祝讃せば、俗人の列に立てる者は、焉ぞ爾が感謝の時に「アミン」と言はん。彼爾の言ふ所を知らざればなり。一七 爾は善く感謝す、然れども他人は徳を建つる所なし。一八 我が神に感謝す、我は方言を言ふこと爾等より多し、一九 然れども教會の中に在りては、我方言を以て萬言を言はんより、寧我が智を以て五言を言はん、他人を訓へん爲なり。二〇 兄弟よ、智慧に於ては幼兒と作るなかれ、乃惡に於ては赤子と作れ、惟智慧に於ては成人と作れ。二一 律法に録されたり、主曰く、我異なる舌、異なる唇を以て斯の民に語らん、然れども彼等は猶我に聽かざらんと。二二 故に方言は信ずる者の爲に非ず、乃信ずる者の爲に非ず、乃信ずる者の爲なり。二三 若し全教會一處に集りて、皆方言を言はんに、知らざる者或は信ぜざる者入らば、爾等狂へりと言はざらんや。二四 然れども若し皆預言せんに、信ぜざる者或は知らざる者入らば、彼皆預言に責められ、衆に議せらる。二五 是くの如く其心の隱れたることは顯れ、彼俯伏して、神を拜し、誠に神は爾等と偕に在りと言はん。二六 兄弟よ、然らば何ぞ。爾等が集れる時、

各人に聖詠あり、教訓あり、方言あり、默示あり、譯解あり、皆之を建つるためなり。二七 若し方言を言ふ者あらば、二人或は多くとも三人序を以て言ひ、一人之を譯解すべし。二八 若し譯解する者なくば、教會の中に默して、己と神とに言ふべし。二九 預言する者は、二人或は三人言ひ、其餘の人は之を判斷すべし。三〇 若し他の坐する者默示を得ば、先の者は默すべし。三一 蓋爾等皆一一預言すること得、皆教へられ、皆慰められん爲なり。三二 預言者の神も亦預言者に順ふ、三三 蓋神は亂の神に非ず、乃平安の神なり。斯く聖徒の悉くの教會に在るなり。三四 婦女は教會の中に默すべし、蓋言ふことは彼等に許されず、乃順ふべし、律法にも言ふ所の如し。三五 若し學ばんと欲する所あらば、家に在りて其夫に問ふべし、蓋婦女の教會の中に言ふは恥づべきことなり。三六 神の言は爾等より出でしか、抑爾等にのみ至りしか。三七 人若し己を預言者或は屬神の者と爲さば、我が爾等に書す所を知るべし、蓋是れ主の誡なり。三八 人若し知らざるに任すべし。三九 是を以て兄弟よ、預言することを慕へ、方言を言ふことをも禁ずる勿れ。四〇 惟凡の事端正にして、秩序を以て行ふべし。

第十五章

一兄弟よ、我が嘗て爾等に傳へし福音を復爾等に告ぐ、仍爾等が受けし
所、之を以て立ちし所なり。二爾等若し之を我が福音せし如く守り、且徒に信ずるこ
となくば、之に由りて救を得ん。三蓋我が初に爾等に傳へし所は、我自らも受けし所な
り、即ハリストスは我等の罪の爲に死せり、聖書に錄せるが如し、四又彼は葬られ、第
三日に復活せり、聖書に錄せるが如し。五又キフに、後十二人に現れ、六其後五百餘の兄
弟の共に在るに現れたり、其中多くの者は今に至るまで猶存す、已に寢りたる者もあ
り。七其後イアコフに、又悉くの使徒に現れ、八卒に我月足らぬ如き者にも現れたり。九
蓋我は使徒の中に於て最小き者にして、使徒と名づけらるゝに堪へず、神の教會を
窘逐せしが故なり。一〇然れども神の恩寵に由りて、我は我たるを得たり、且我に存す
る神の恩寵は空しからざりき、乃我は彼等衆よりも多く勞せり、然るに我に非ず、乃
我と偕にする神の恩寵なり。一一故に我と彼等とを論ぜず、我等是くの如く傳ふ、爾等
も是くの如く信ぜり。一二然れども若しハリストスの事、彼は死より復活せりと傳へ
られば、如何ぞ爾等の中に在る者は、死者の復活なしと言ふ。一三若し死者の復活なく

ば、ハリストスも復活せざりしならん。一四 若しハリストス復活せざりしならば、我等の傳ふる所空しく、爾等の信も亦空し。一五 且我等は神の事を證して、彼はハリストスを復活せしと言へり、然れども若し死者復活せずば、彼は之を復活せしめざりしなり、一六 蓋若し死者復活せずばハリストス復活せざりしならん。一七 若しハリストス復活せざりしならば、爾等の信は空し、爾等は猶罪の中に在るなり。一八 故にハリストスに於て寢りし者も亡びしなり。一九 且我等は此生命にのみハリストスを恃まば、我等は悉くの人より不幸の者たるなり。二〇 然れども今ハリストスは死より復活し、死せし者の中に初實と爲れり。二一 蓋死は一人に因るが如く、死者の復活も亦人に因るなり。二二 アダムに在りて皆死するが如く、斯くハリストスに在りて皆復活せん。二三 唯各 其序あり、初實は即ハリストス、次はハリストスに屬する者彼の來らん時に在り。二四 其後は終なり、彼が國を神父に付さん時、即凡の首領、凡の權柄と、能力とを廢せんとする時なり。二五 蓋彼必ず敵を其足下に置くに至るまで王たるべし。二六 最後に滅されん敵は

死なり。二七 蓋萬有を其足下に服せしめたり。惟萬有の彼に服せしめられたりと云ふ
時は、萬有を彼に服せしめし者の其内に在らざること明なり。二八 萬有を彼に服せし
めん時、子も亦親ら萬有を彼に服せしめし者に服せん、神が萬有の中に萬事たらん爲
なり。二九 然らずば、死者の爲に洗を受くる者は何をか爲す。若し死者敢て復活せずば、
何ぞ死者の爲に洗を受くる。三〇 何ぞ我等も時毎に危險に遇ふ。三一 我毎日死す、兄弟
よ、我ハリストスイイスス我等の主に於て有つ所の爾等の譽を以て之を證す。三二 人
の情に循ひて言はば、我エヂスに在りて猛獸と鬪ひしこと、若し死者復活せずば、我に
何の益かあらん。食飲すべし、蓋明日死なん。三三 自ら欺く毋れ、惡しき交は善き習を
壞る。三四 義に醒めよ、罪を犯す勿れ、蓋爾等の中に神を識らざる者あり、我爾等の愧
の爲に之を言ふ。三五 然れども人或は曰はん、死者は如何に復活せんか、何の身を以て
來らんかと。三六 無知なる者よ、爾の播く所の者、若し死なずば、生きざらん。三七 且爾が
播く所は、將來の體を播くに非ず、乃在る所の粒のみ、或は麥、或は他の穀なり。三八 然
れども神は欲する所に隨ひて、之に體を與へ、種毎に其本體を與ふるなり。三九 凡の肉

は同じき肉に非ず、乃人には其肉あり、獸には其肉あり、魚には其肉あり、鳥には其肉
あり。四〇 又天の體あり、地の體あり、而して天の體の榮は地の體の榮と異なり。四一 日
には其榮あり、月には其榮あり、星には其榮あり、又星と星と其榮を異にす。四二 死者の
復活も亦斯くの如し。朽つる者として播かれ、朽ちざる者として起く、四三 尊からざる
者として播かれ、榮ゆる者として起く、弱き者として播かれ、強き者として起く、四四 靈
に屬する體として播かれ、神に屬する體として起く。靈に屬する體あり、又神に屬する
體あり。四五 若く錄す所あり、云く、始の人アダムは生くる靈と爲れり、終のアダムは乃
生かす神なり。四六 然れども神に屬する者先に在らず、乃靈に屬する者先なり、後は
神に屬する者なり。四七 第一の人は地よりして土に屬し、第二の人は天よりして主な
り。四八 土に屬する者は若何、凡の土に屬する者も此くの如し、天に屬する者は若何、凡
の天に屬する者も此くの如し。四九 我等は土に屬する者の狀を衣たるが如く、亦天に
屬する者の狀を衣ん。五〇 兄弟よ、我之を爾等に言ふ、血肉は神の國を嗣ぐ能はず、朽つ
る者は不朽を嗣がざらん。五一 視よ、我爾等に奧義を言ふ、我等皆寢らんとするには非

ず、然れども皆變ぜん、五二 俄頃に、瞬の間に、末の箛の時に於てす、蓋箛は鳴らん。而し
て死者は不朽の者として復活し、我等は變ぜん。五三 此の朽つる者は不朽を衣、此の死
する者は不死を衣るべければなり。五四 此の朽つる者は不朽を衣、此の死する者は不
死を衣ん時、錄されし言は應はん、云く、死は勝に呑まれたり。五五 死よ、爾の刺は安にか
在る、地獄よ、爾の勝は安にか在ると。五六 死の刺は罪なり、罪の能は律法なり。五七 神に
感謝す、其我等に、我が主イイススハリストスに由りて、勝を賜ひしが故なり。五八 是を
以て我が至愛の兄弟よ、爾等堅固にして搖かず、恒に勵みて主の事に進め、爾等の勞の
主の前に空からざるを知ればなり。

第十六章

一 聖徒の爲に施金を集むることに至りては、我がガラティヤの諸教會に命
ぜし如く、爾等も斯く行へ。二 七日の首の日毎に、爾等各其得る所に循ひ、之を積みて、
自ら蓄ふべし、我が來る時に、始めて集むることをせざらん爲なり。三 我れ來る時、爾等
が擇ぶ所の者に書を託して、爾等の惠施をイエルサリムに送る爲に之を遣さん。四 若
し我も亦往くこと適はば、彼等は我と偕に往かん。五 我マケドニヤを經て、爾等に至ら

ん、蓋マケドニヤを經て往くなり。六 便宜を得ば、我爾等の中に留り、或は冬をも過さん、
爾等が我を往くべき所に送らん爲なり。七 蓋我今途次爾等を見んことを欲せず、乃
主若し許さば、暫く爾等の中に居らんことを望む。八 我エヱスに留りて、五旬節に迄ら
ん。九 蓋我の爲に大にして廣き門は啓かれ、敵する者も亦多し。一〇 若しテイモフイ來ら
ば、爾等愼みて、彼が虞なく爾等の中に居るを致せ、蓋彼は主の事を爲すこと我の如し。
一一 故に何人も彼を藐んずべからず、乃平安に彼を送りて、我に來らしめよ、蓋我は
彼が兄弟等と偕に來るを待つ。一二 兄弟アポロスに至りては、我大に彼が兄弟等と偕
に爾等に往かんことを勸めたれども、彼敢て今往くを欲せざりき、然れども便宜を得
たる時に往かん。一三 爾等儆醒せよ、信に立て、勇め、堅固なれ。一四 凡の事愛を以て行へ。
一五 兄弟よ、ステファンの家はアハイヤの初實にして、且己を聖徒に務むることに獻げ
しは、爾等の知る所なり、一六 我爾等に求む、爾等も此くの如き者、及び凡そ助力する者
と、勤勞する者とに服せよ。一七 我はステファン、フォルトゥナト、及びアハイクの來りしを喜
ぶ、彼等は我が爲に爾等の缺くる所を補へり、一八 蓋彼等は我と爾等との心を安んじ

たり。此くの如き者を敬へ。一九 アシヤの諸教會は爾等の安を問ふ。アキラ及びプリス
キラは、其家の教會と偕に、主に在りて切に爾等の安を問ふ。二〇 衆兄弟爾等の安を
問ふ。爾等聖なる接吻を以て互に安を問へ。二一 余パヱル手づから爾等の安を問ふ。二
二 主イイススハリストスを愛せざる者は「アナヱマ」たるべし、「マラン、アファ」。二三 願は
くは我等の主イイススハリストスの恩寵は爾等と偕に在らんことを。二四 我が愛も
ハリストスイイススに於て爾等衆人と偕に在るなり、「アミン」。

聖使徒パワェルがコリンフ人に達する後書

第一章

一パワェル、神の旨に由りてイイススハリストスの使徒と爲れる者、及び兄弟
ティモフェイは、コリンフに在る神の教會、及び遍くアハイヤに在る悉くの聖徒に書を達
す。二願はくは恩寵と平安とは、神我等の父及び主イイススハリストスより爾等に賜
はらんことを。三祝讃せらるゝ哉神、我等の主イイススハリストスの父、慈悲の父、凡の
慰の神。四彼は我等の凡の苦難に於て我等を慰む、我等が自ら、神より慰めらるゝ慰を
以て、凡の苦難に在る者を慰むるを得ん爲なり。五蓋ハリストスの苦の我等の中に
增加するが如く、是くの如くハリストスに由りて我等の慰も增加するなり。六我等が
苦難を受くるも、爾等の慰と救との爲なり、卽我等も苦しむが如き苦を爾等忍ぶに
由りて行はるゝ救なり。七且爾等に於ける我等の望は堅し。我等が慰を受くるも、爾等
の慰と救との爲なり、蓋爾等が我等の苦に與るが如く慰にも亦與ることを知れ
ばなり。八兄弟よ、我等は爾等が我等のアシヤに於て遭ひし所の苦難を知らざるを欲

せず、蓋我等は壓せられしこと甚しくして、勢當る可からず、生命をも保つの望を絶つに至れり。九　即ち我が裏に必死の擬定を爲せり、特に己を恃まずして、只死者を復活せしむる神を恃まん爲なり。一〇　彼は既に我等を此くの如き死より救ひ、今又救ふ、我等彼を恃む、後も亦救はん、一一　爾等も我等の爲に祈禱して助くるが故なり、多くの人が我等の爲に感謝せん爲なり。一二　蓋に依りて、我等が受けし賜の故を以て、多くの人が我等の爲に感謝せん爲なり。一二　蓋我等の誇は乃此、即我が良心の、我等が質朴と神に喜ばるゝ正直さを以て、肉體の智慧に由らずして、神の恩寵に由りて、世に居り、特に爾等の中に居りしを、證するこさなり。一三　蓋我等が書して爾等に達するは、爾等が讀む所、識る所に外ならず、我望む、爾等が終に至るまで之を識らんことを、一四　蓋爾等は略、我が主イエスの日に於て、我等が爾等の誇さ爲り、爾等も同じく我等の誇さ爲らんことを識れり。一五　我此の信に據りて、爾等が再恩寵を獲ん爲に、先に爾等に至り、一六　爾等よりマケドニヤに往き、マケドニヤより復爾等に來り、爾等をして我をイウデヤに送らしめんことを謀れり。一七　我此くの如く謀りて、輕率に行ひしか。抑我が謀る所は肉に由りて

謀り、我に是是及び非非とならん爲にするか。一八 然れども神の信なるが如く、爾等に
於ける我等の言は是及び非なかりき。一九 蓋我等、卽我とシルアンとテイモテイとを
以て、爾等の中に傳へられし神の子イイススハリストスは是及び非なかりき、乃彼
に在りては是ありしのみ、二〇 蓋神の悉くの許約は彼に在りて是なり、彼に在りて
「アミン」なり、我等に由りて神に光榮の歸せん爲なり。二一 我等を爾等と偕にハリス
トスに堅固にし、及び我等に膏つけし者は神なり、二二 彼は我等に印し、且神の聘質を
我等の心に與へたり。二三 我神を籲びて我が靈の證者と爲す、我今に至るまでコリン
フに至らざりしは、爾等を宥恕するが故なり。二四 此れ我等は爾等の信に主たるに非
ず、乃爾等の喜を助く、蓋爾等は信を以て立つなり

第二章

一 我復憂を以て爾等に至らざらんと自ら決めたり。二 蓋若し我爾等を憂
ひしめば、我が憂ひしむる者の外、誰か我を喜ばしめん。三 我が書して爾等に達せしは
卽是なり、我來る時、我を喜ばしむべき者に由りて憂を受けざらん爲なり、蓋我は爾
衆に於て、我が喜は爾衆の喜なりと信ず。四 我大なる哀と心の痛とに緣りて、多くの

涙を以て爾等に書せり、爾等を憂ひしめん爲に非ず、乃我が爾等に於ける愛の深き
を知らしめん爲なり。五若し憂ひしめし者あらば、唯我を憂ひしめしに非ず、乃畧(我
甚しく責むるを欲せず)爾衆を憂ひしめしなり。六斯る人は多くの人の懲戒を受く
ること已に足れり。七然らば爾等寧彼を赦し、彼を慰めよ、恐らくは彼甚しき憂に沈
まん。八故に我爾等に愛を彼に顯さんことを求む。九蓋我が嘗て書せしは、特に爾等を
試みて、爾等が凡の事に於て順ふや否やを知らん爲なり。一〇爾等何をか人に赦すこ
とあらば、我も亦之を赦す、蓋我も若し赦しゝことあらば、爾等の爲にハリストスの面
前に赦しゝなり、一一サタナの我等に勝利を得ざらん爲なり、蓋我等は其詭計を知ら
ざるに非ず。一二我ハリストスの福音の爲にトロアダに來りしに、主に由りて我が爲
に門闢かれたれども、一三我が兄弟ティトに遇はざるに由りて、我が心安からざりき、乃
彼等を辭して、マケドニヤに往けり。一四神に感謝す、彼は常にハリストスイイススに
由りて、我等に凱旋せしめ、且我等を以て、彼を識る香を遍き處に顯す。一五蓋我等は救
はるゝ者の中にも、亡ぶる者の中にも、神の爲にハリストスの馨香なり。一六彼には

死の香にして死に致し、此には生の香にして生を致す。誰か此等に堪へん。一七蓋我等は多くの人の如く神の言を混亂せず、乃誠に由り、神に由り、神の前に、ハリストスに在りて言ふなり。

第三章

一我等復始めて己を薦むべきか、抑或人の如く、我等は爾等に示す薦書、或は爾等よりする薦書を要するか。二爾等は乃我等の書、我が心に書されし者、衆人の知る所、讀む所の者なり。三爾等は明に己がハリストスの書にして、我等の役事に由りて、墨を以てせしに非ず、即活ける神の神を以てし、石碑の上に非ず、即心の肉碑の上に書されたるを示す。四我等ハリストスに頼りて、神の前に此くの如き信あり。五此れ我等が能く己に由りて何をか思ふこと、己に由るが如くするに非ず、乃我等の能する所は神に由るなり。六彼は我等をして能く新約の役者と爲らしめたり、即文に非ずして、神の役者なり、蓋文は死し、神は生かすなり。七若し死の役事、文を以て石に書されたる者は、光榮なる者にしてイズライリの諸子がモイセイの面を、其面の移るふ光榮の爲に、見ること能はざりしならば、八況や神の役事は更に光榮なる者たらざ

らんや。九蓋若し定罪の役事は光榮ならば、稱義の役事は光榮なること益盛なり。一
○舊光榮ありと爲しゝ者は、其分に於て已に光榮ありと爲さず、後の光榮の更に愈
れるに緣りてなり。一一蓋若し移ろふ者光榮たらば、長らふる者は益光榮たるなり。
一二故に我等是くの如き望ありて、毅然として行ふ、一三モイセイが、其面に帕を蒙り
て、イズライリの諸子に移ろふ者の終を見るを得ざらしめしが如きに非ず。一四然れ
ども彼等の思念は昧みたり、蓋今日に至るまで、舊約を讀む時、其帕は存して啓かれず、
此れハリストスに由りて除かるゝ故なり。一五今日に至るまで、モイセイを讀む時、帕
は猶彼等の心に在り。一六然れども彼等が主に歸する時、其帕は除かる。一七主は神な
り、主の神の在る所には、自由あり。一八我等皆露れたる面を以て、主の光榮を鏡に於け
るが如く觀て、其像に變ぜられ、光榮より光榮に進む、主の神よりするが如し。

第四章

一故に我等神の恩惠に依りて、此の職を任じて、敢て倦まず、二乃隱れたる
愧づべきことを棄て、詭譎を行はず、神の言を混さず、唯眞實を顯して、神の前に在りて、
己を衆人の良心に質す。三若し我等の福音擔はるゝあらば、是れ亡ぶる者の爲、卽

此の世の神が智慧を昧ましゝ不信者の爲に掩はる、四彼等には、見る可からざる神の
像たる、ハリストスの光榮の福音の光を照さざらん爲なり。五蓋我等の傳ふる所は己
に非ず、乃ハリストスイイススを主なり、我等はイイススに緣りて爾等の僕なり。六
蓋暗より光の照ることを命ぜし神は、我等の心を照せり、イイススハリストスの面
にある神の光榮を知る知識を以て我等を輝さん爲なり。七然れども我等は此の寶を
土の器に藏む、莫大の能が神に由りて、我等に由らざらん爲なり。八我等四方より患難
を受くれども、窮せず、險しき境に處れども、望を失はず、九窘逐せらるれども、棄てられ
ず、倒さるれども、亡びず。一〇常に身に主イイススの死の狀を佩ぶ、イイススの生命も
我等の身に顯れん爲なり。一一蓋我等生ける者は、常にイイススの爲に死に付さる、
イイススの生命も我等の死すべき肉體に顯れん爲なり。一二是くの如く死は我等の
中に行ひ、生命は爾等の中に行ふなり。一三然れども錄して、我信ず、故に言へりと、ある
が如く、我等も此くの如き信仰の神を有ちて信ず、故に言ふ、一四主イイススを復活せ
しめし者は、イイススを以て我等をも復活せしめ、且爾等と偕に己の前に立たしめん

ことを知るに因る。一五 蓋萬事は偕等の爲なり、豐なる恩寵が、多くの人の感謝に由りて、神の光榮の溢るゝを致さん爲なり。一六 故に我等は倦ます、乃我等の外なる人は壞るとも、内なる人は日々に新なり。一七 蓋我等が暫時の輕き苦は、極めて盛なる永遠の重き光榮を我等の爲に備ふ、一八 我等見ゆる者を顧みずして、見ざる者を顧みるに縁る、蓋見ゆる者は暫時にして、見ざる者は永遠なり。

第五章 一 蓋我等知る、我等の地上の幕屋壞るゝ時は、我等に神より賜ふ所の住居あり、手にて造らざる屋、永遠にして天に在ることを。二 此に由りて我等歎息し、深く我等の天よりする屋を衣んと欲す。三 第願はくは衣たる後にも仍裸ならざらんことを。四 蓋我等は此の幕に居り、重きを負ひて歎息す、脱がんと欲するに非ず、乃衣んと欲するに因る、死すべきの者は生命に呑まれん爲なり。五 此の事の爲に神は我等を造り、亦我等に神の聘賀を與へたり。六 故に我等恒に勇む、我等身に居る時は主より離れたるを知る。七 蓋我等は信を以て行く、視るを以てすることに非ず。八 是の故に我等勇みて、寧身を離れて、主と偕に居らんことを望む。九 是を以て我等或は内に居り、或は離るるとも、彼の喜

を爲さんことを勉む。一〇 蓋我等皆ハリストスの臺前に立つべし、各人が其身に居る時行ひし事、或は善、或は惡に應ふ所を受けん爲なり。一一 故に我等主の畏るべきを知りて、人人を諭す、我等は神に顯明なり、爾等の良心にも顯明なりと信ず。一二 我等復已を爾等に薦めず、乃我等を以て誇るべき機會を爾等に與ふ、爾等が貌を以てせずして誇る者に答ふるを得ん爲なり。一三 蓋我等若し狂せば、是れ神の爲なり、若し謹らば、是れ爾等の爲なり。一四 蓋ハリストスの愛は我等を勵ます、我等若し一人の爲に死せるなりと忖るが故なり。一五 然ろにハリストスは衆に代りて死せり、生くる者は既に已の爲に非ず、乃彼等に代りて死して復活せし者の爲に生きん爲なり。一六 故に我等今より後、肉體に依りて何人をも識らず、嘗て肉體に依りてハリストスを識りたれども、今已に之を識らず。一七 是の故に人若しハリストスに在らば、新なる受造物なり舊きは逝れり、視よ、一切新になれり。一八 且一切神、蓋神はハリストスに於て我等を已と和睦せしめ、並に我等に和睦せしむる職を授けたる者に由る。一九 蓋神はハリストスに於て世を已と和睦せしめて、人に其罪を歸

せず、並に和睦せしむる言を我等に託せり。二〇故に我等はハリストスより遣されし
者なり、神が我等を以て爾等に勸むるが若し、我等ハリストスに代りて爾等に求む、神
に和睦せよ。二一蓋彼は罪を識らざる者を我等の爲に罪の贖と爲せり、我等彼に在り
て神の前に義者と爲らん爲なり。

第六章

一我等は同勞者として爾等に求む、神の恩寵を徒に受くる勿れ。二蓋言へる
あり、納るべき時に我爾に聽き、救の日に爾を助けたりと。視よ、今は嘉く納るべき時、視
よ、今は救の日なり。三我等何事に於ても躓を人に置かず、我が職の謗を受けざらん爲
なり。四我等凡の事に於て己を神の役者と顯す、即多くの忍耐に、患難に、窮乏に、困苦
に、五扑刑に、禁獄に、爭亂に、勤勞に、儆醒に、禁食に、六潔淨に、知識に、恒忍に、仁慈に、聖神に、
僞なき愛に、七眞實の言に、神の能に於てし、左右の手に義の武具を以てし、八尊榮及び
恥辱に、惡評及び令聞に於てす、欺く者に似たれども、眞なり、九知られざるに似たれど
も、知られ、死したるに似たれども、視よ、生けるなり、罰を受くるに似たれども、死に付さ
れず、一〇憂ふるに似たれども、常に喜び、貧しきに似たれども、多くの者を富ませ、有る

なきに似たれごも、有らざるなし。一一コリンフ人よ、我等の口は爾等の爲に啓かれ、我等の心は廣まれり。一二爾等が我等の衷に居るは狹からず、然れごも爾等の心には狹し。一三我子に於けるが如く言ふ、其報として、爾等も已を廣くせよ。一四爾等不信者と與に同じき軛を負ふ勿れ、蓋義は不法と何の侶なるここかあらん、或は光は暗と何の交ろここかあらん。一五ハリストスはベリアルと何の合ふここかあらん、或は信者は不信者と何の與ろここかあらん。一六神の殿は偶像と何の同じきここかあらん。蓋爾等は活ける神の殿なり、神の嘗て言ひしが如し、曰く、我彼等の中に居り、彼等の中に行ら、我彼等の神ならん、彼等我の民ならん。一七主又曰く、故に爾等は彼等の中より出でゝ、自ら離れよ、汚穢に觸ろゝ勿れ、然らば我爾等を納れん、一八我爾等の父ならん、爾等我の子女ならん、主全能者之を言ふ。

第七章　一是の故に此くの如き許約を得たれば、已を凡の肉と神との汚より潔くし、神を畏ろゝを以て聖を成すべし。二爾等我等を容れよ、我等何人をも侵さず、何人よりも利を貪らざりき。三此を言ふは爾等を罪せん

爲に非ず、蓋我が先に言ひしが如く、爾等我が心の内に在りて、我爾等と偕に死し、偕に
生きんことを欲す。四我爾等に於て大に毅然たり、我爾等を以て多く誇る我等の悉く
の患難の中に在りて、我慰に滿ち、喜に溢る。五蓋我等がマケドニヤに來りし時、我が
身少しも安きを得ず、乃我等は諸の患難に遇ひ、外には鬪あり、内には懼ありき。六
然れども謙卑の者を慰むる神は、テトの至るを以て、我等を慰めたり。七唯彼の至るを
以てせしのみならず、卽彼が、我等に爾等の愛慕、爾等の涕泣、爾等が我に於ける熱心の
事を告ぐる時に、慰めたる慰を以てせり、故に我益喜べり。八我が書を以て爾等を憂
ひしめしことは、我曾て之を悔いしが、今は悔いず、蓋見る、彼の書は暫時と雖、爾等を
憂ひしめたり。九今我が喜ぶは、爾等が憂ひしに因るに非ず、乃爾等が憂ひて悔改せ
しに因るなり、蓋爾等は神の爲に憂ひたり、我等より少しも損を受けざらん爲なり。
一〇蓋神の爲にする憂は、悔なき悔改を生じて、救を得しむ、惟世の憂は死を致す。一一
蓋視よ、爾等が神の爲に憂ひし事は、如何なる勵を爾等の衷に生ぜしか、卽自訴、卽
憤慍、卽畏懼、卽戀慕、卽熱心、卽罪を責むること是なり。爾等一切此の事に於て

自ら潔きを表せり。一二 我が書して爾等に達せしも、侵しゝ者の爲に非ず、亦侵されしものの爲に非ず、乃 我等が爾等の爲に神の前に有つ所の熱心の顯れん爲なり。一三 故に我等は爾等の慰を以て慰めたり、猶且ティトの喜を以て喜べり、爾等皆其神を安んぜしめしが故なり。一四 我が曾て爾等を以て彼の前に誇りし事の若きは、我之を愧ぢず、乃 我等が爾等に語りしことの皆眞實なるが如く、斯く我等がティトの前に誇りし所も眞實を爲れり。一五 且彼は爾等皆順從にして、恐懼戰慄を以て彼を接けしことを憶ひ起して、其心甚爾等を愛せり。一六 故に我凡の事を爾等に託するを得べきに因りて喜ぶ。

第八章 一 兄弟よ、我等はマケドニヤの諸教會に賜はりし神の恩寵を爾等に知らしむ、二 即 彼等は大に患難に試みらるゝ時、喜に充ち、又彼等の甚しき貧窮は彼等が廉潔の富に豐なり。三 蓋彼等は其力に循ひ、且其力に逾ねて、甘んじて施す、我之を證す。四 彼等は熱切に我等に、其恵施と聖徒の爲にする職に與る分とを、受けんことを求めたり。五 此れ唯我等が望みし所の如きのみならず、乃彼等は己を以て先づ主に、及び

神の旨に依りて我等に委れたり。六故に我等は|テトに、其爾等の中に此の恵施の事を
も始めしが如く、亦之を終へんことを求めたり。七爾等凡の熱心に、我等に於ける爾等の愛に富めるが如く、此の恵施にも富むべし。八我が此を言ふは、命ずるに非ず、乃他人の熱心に縁りて、爾等の愛の實を試みるなり。九蓋爾等は我等の主イイススハリストスの恵施を知る、彼は富めるに、貧しき者と爲れり、爾等が彼の貧しきに因りて富める者にして、爾等の爲に爲らん爲なり。一〇我此の事に於て勤諭を與ふ、蓋是れ爾等の爲に益なり、爾等は之を行ふのみならず、之を望むことをも、他に先だちて、去年より始めたればなり。一一今其行ふ所を成就せよ、爾等が志を立てしごとく望みし如く、斯く是の事の、爾等の所有に循ひて、成就せられん爲なり。一二蓋若し志あらば、其納れらるゝこと、人の所有に循ふ、其無き所に循ふに非ず。一三蓋他は寛舒にして、爾等は苦しまんことを要するに非ず、乃平均ならんことを要す。一四今爾等の有餘は彼等の足らざるを補ふ、後彼等の有餘も爾等の足らざるを補はんが如し、多く斂めし者は餘なく、少く斂めし者は餘なくして平均ならん。一五錄して云へるが如く

めし者も足らざるなしと。一六 神に感謝す、此の爾等に於ける熱心をテイトの心に賜ひしに縁る。一七 蓋彼は我が勸を納れたり、且甚熱心なるに因りて、自ら望みて爾等に往けり。一八 彼と偕に我等は一の兄弟を遣せり、卽福音の爲に悉くの教會の中に頌美を得、一九 第此のみならず、諸教會より選ばれて、我等と同行して、我等が主の光榮の爲、及び爾等の熱心の爲に務むる所の此の惠施を攜ふる者なり。二〇 此れ我等の務に託する所の惠施の饒なるに由りて、人の謗を受けざらんことを愼むが故なり。二一 蓋我等は主の前のみならず、乃人の前にも善からん事を慮るなり。二二 彼等と偕に我等は又我が兄弟を遣せり、其熱心は、我等屢多くの事に於て、之を試みたり、今彼篤く爾等を信ずるに由りて、更に熱心なるなり。二三 テイトの事を言はば、彼は我の伴侶、及び爾等に在りて我の同勞者なり、我が兄弟等の事を言はば、彼等は諸教會の使者なり、ハリストスの光榮なり。二四 故に諸教會の前に於て、彼等に爾等の愛、及び我等が爾等を以て誇ることの虛しからざる證を示せ。

第九章

一 聖徒に供事することに就きては、我爾等に書するを要せず、二 蓋我爾等の

熱心を知る、之を以て爾等の事をマケドニヤ人の前に誇りて、アハイヤは去年より已に備を爲せりと言ふ、且爾等の熱心は多くの人を激ましたり。三然るに我が兄弟を遣しゝは、我等が此の事に於て爾等の爲に誇る所の虚しくならざらん爲、即爾等が言ひし如く備はれる者さならん爲なり。四恐らくはマケドニヤ人我と偕に來りて、爾等の未だ備はらざるを見ば、爾等を言はず、我等此の誇る所に於て羞を得ん。五故に我兄弟に求めて、彼等が先づ爾等に至り、爾等の既に告げし所の祝福は、之を祝福さしめんこさを要させり。六我且之を言ふ、乏しく播く者は豐に穫らん。七人各其心の欲する所に隨ひ、憂に由るに非す、強ひて爲すに非す、預め備はりたる者さ爲さんこさを要す。八且神は爾等をして、凡の善事を爲すに饒ならん爲なり、九錄されしが如し、云く、彼は散じて、貧者に施せり、其義は世に存すさ。一〇播く者に種を與へ、食の爲に餅を備ふる者は、願はくは爾等が播く種を備へ且殖し、又爾等の義の實を益さんこさを、一一爾等が凡の事に富

むに由りて、博く施すを得ん爲なり、此れ我等に由りて神に奉る感謝を作す。一二蓋此の供事の職は第聖徒の乏しきを補ふのみならず、乃亦許多の人をして多くの感謝を神に奉らしむ。一三彼等は此の職の證に由りて、爾等が承け認むるハリストスの福音に服する爲、及び爾等が彼等と衆人とに於ける厚き共與の爲に神を讃榮し、一四且神が爾等に賜ひし豐なる恩寵に緣りて爾等を慕ひ、爾等の爲に禱る。一五神に感謝す、其言ひ盡されぬ恩賜に由りてなり。

第十章

一余パヱル、面前には爾等に對して謙卑、離れては爾等に向ひて勇ましき者は、ハリストスの溫柔と寬容とを以て爾等に勸む。二切に求む、我をして來りて後、敢爲なる勇を用ゐざらしめんことを、卽我が或人、我等肉に循ひて行ふと、意ふ者に對して、敢て用ゐんと意ふ所の者なり。三蓋我等は肉に在りて行へども、肉に循ひて戰はず。四我等が戰の器は肉に屬せず、乃神に由りて壘を破る能あり、五我等此を以て、諸の謀と凡そ神の知識に逆ふ高慢とを破り、凡の意思を擒にして、ハリストスに從はしめ。六且爾等の順從の全くせられて後、凡の不順を罰するに備はれり。七爾等は外貌

を觀るか。自らハリストスに屬すと信ずる者は、己に憑りて度るべし、彼がハリストス
に屬する如く、斯く我等もハリストスに屬するなり。八蓋我若し主の、爾等を敗るが爲
に非ずして、建つるが爲に、我等に與へし權を以て愈誇るとも、愧を得ざらん。九然れ
ども我は書を以て爾等を驚かすに似んことを欲せず。一〇蓋言ふ者あり、其書は重く
して強し、其會ふ時の容は懦く、其言は陋しと。一一若る者は知るべし、我等が離れ居る
時、書の言若何、會ふ時行ふ所も亦是くの如きを。一二蓋我等は敢て己を彼の自ら譽む
る者に匹べ、或は較ぶるを爲さず。彼等が己を以て己を度り、己を以て己に較ぶるは無
智なり。一三然れども我等は量を踰えて誇らんとするに非ず、乃神が我等に頒らた
る分の量に循ふ、此れ爾等にまで至る所の量なり。一四蓋我等は爾等にまで至らざる
者の如く己を張るに非ず、ハリストスの福音を以て爾等にまで至りたればなり。一五
我等は量を踰えて、他人の功勞を以て誇るに非ず、卽爾等の信の長ずるに隨ひて、爾
等の中に益我等の分を廣大にせんことを望む、一六此れ爾等より遠き處にも福音
を傳へん爲にして、他人の分に於て已に備へたる者を以て誇らん爲に非ず。一七誇る

者は主に由りて誇るべし。一八蓋自ら譽むる者は嘉させらるゝに非ず、卽主の譽
むる所の者なり。

第十一章

一願はくは爾等少しく我の無智を容れよ、然れども爾等は已に我を容る
ゝなり。二我神に於ける熱心を以て、爾等の爲に熱心するに因る、蓋我爾等を一の夫に
聘定せり、淨き處女としてハリストスに獻げん爲なり。三惟我恐る、蛇が其狡猾を以て
エワを誘ひし如く、爾等の意思も壞はれて、ハリストスに由る樸實を失はんことを。四
蓋若し人來りて、我等が未だ傳へざりし他のイイススを傳へ、或は爾等が未だ受けざ
りし他の神を受け、或は未だ承けざりし他の福音を承くる時は、爾等善く之を容るゝ
ならん。五我意ふに、我は一も至大なる使徒に亞る所なし。六蓋我言には俚しと雖、
知識には然らず。然れども我等は一切の事に於て全く爾等に知られたり。七我爾等の
高くせられん爲に、自ら卑くなり、價なくして爾等に神の福音を傳へしは罪を犯しゝ
か。八我他の教會に費を爲さしめて、爾等に役めん爲に、之より供給を受けたり爾等の
中に居りし時、乏しかりしと雖、何人をも累はさざりき。九蓋マケドニヤより來り

し兄弟は我の乏しきを補ひたり、且凡の事に於て、我自ら守りて、爾等を累はさざりき、後も亦自ら守らん。一〇 我に在るハリストスの眞實に由りて云ふ、此の誇はアハイヤの諸方に於て我より奪はれざらん。一一 何の故ぞ、爾等を愛せざるに由るか、神之を知る。一二 然れども我が行ふ所は、仍之を行はん、機を尋ぬる者には機を絶たん爲、彼等をして其誇る所の我等と同じからしめん爲なり。一三 盖此くの如き僞の使徒、詭譎の工者は、ハリストスの使徒の貌に變ずるなり。一四 此れ奇さするにも足らず、サタナ自ら光明の天使の貌に變ずるに因る。一五 故に彼の役者が義の役者の貌に變ずるも、亦大なる事に非ず、彼等の終は其行に循はん。一六 我又曾ふ、人我を無智なる者と思ふ勿れ、然らずば、或は我を無智なる者として受けよ、我も聊か誇るが爲なり。一七 我が言ふ所は、主に循ひて言ふに非ず、乃此の誇の分に於て、無智者の如く言ふなり。一八 多くの人肉に循ひて誇るが故に、我も亦誇らん。一九 盖爾等は智なる者にして、喜びて無智なる者を容る。二〇 人若し爾等を奴隷と爲し、人若し爾等を呑み、人若し爾等を擄り、人若し爾等の面を批たば、爾等之を容る。二一 我恥ぢて言ふ、是が爲に

は我等弱かりき、然れども人若し何をか敢てすること
なり。二三　彼等エウレイ人なるか、我も然り。イスライリ人なるか、我も然り。アブラハムの裔なるか、我も然り。二三　ハリストスの役者なるか、狂して言ふ、我愈れり。我勞に服せしこと較多く、獄に繋がれしこと更に多く、死に瀕せしこと屢なりき。二四　我五次イウデヤ人より鞭を受けたり、四十に一を減ぜり。二五　三次杖にて撲たれ、一次石にて撃たれ、三次舟壊られて、一日一夜我深淵に在りき。二六　屢旅を爲し、河の難、盜賊の難、異邦人の難、邑の中の難、野の中の難、海の中の難、僞兄弟の中の難に遇ひ、二七　勞し、疲れ、屢〻眠れず、飢ゑ渇き、屢〻禁食し、凍に裸なりき。二八　他の諸事の外に、我に毎日人の衆合、悉くの教會の慮あり。二九　誰か弱りて、我も弱りらざらん、誰か躓きて、我熱中せざらん。三〇　若し我誇るべくば、我の弱きを誇らん。三一　神、我等の主イイススハリストスの父、世世に祝讃せらるゝ者は、我が謊らざるを知る。三二　ダマスクに於て、アレタ王の邑宰我を執へんと欲して、ダマスクの邑を守れり、我籠を以て扉より墻に循ひ縋り下されて、彼の手を脱れたり。

第十二章

一 誇ることは我が爲に益する所なし、蓋我主の顯現と默示とに及ばん。二
我ハリストスに在る一人を知る、此の人は十四年前に、(肉體に在りてか、知らず、肉體の
外に在りてか、知らず、神之を知る、)第三重の天に擧げられたり。三 我此の人に於て、其(肉
體に在りてか、肉體の外に在りてか、知らず、神之を知る、)四 樂園に擧げられて、道ひ難き
言、人の語る能はざる者を聞きしを知る。五 我此くの若き人を以て誇らん、己を以て誇
らず、或は我の弱きを誇らんのみ。六 我若し誇らんと欲せば、無智なる者と爲らず、蓋眞
を言はん、然れども我自ら戒む、恐らくは人、我に見る所、或は我に聞く所に過ぎて、我を
擬らん。七 默示の至大なるに因りて我が高ぶらざらん爲に、一の刺は我が肉體に與へ
られたり、卽サタナの使なり、我を擊たん爲、我が高ぶらざらん爲なり。八 我三次主に之
を我より離さんことを求めたり。九 然れども主は我に謂へり、我の恩寵は爾に足れり、
蓋我の能は弱き中に行はる。故に我寧甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの能
の我の內に寓らん爲なり。一〇 是を以て我柔弱、陵辱、窮乏、窘逐、艱難をハリストス
の爲に受くるを以て喜と爲す、蓋我が弱き時に於て我强し。一一 我誇りて無智に至れ

り、爾等我に此を爲さしめたり。我は反りて爾等より譽めらるべかりき、蓋我無きが如
き者なりと雖、何事に於ても至大なる使徒等に亞らざるなり。一二 使徒の證は爾等の
中に、凡の忍耐に於て、休徵、奇跡、異能に於て顯れたり。一三 蓋爾等には、他の教會の前
に、何の虧くる所あるか、或は我が自ら爾等を累はさざりし事のみか、請ふ、此の罪を我
に恕せ。一四 視よ、我第三次に爾等に往く備を爲せり、又爾等を累はさざらん、蓋我爾等
の所有を求めず、乃爾等を求む。子は親の爲に積むべきに非ず、親は子の爲に積むべ
ければなり。一五 我甚爾等を愛して、爾等に愛せらるゝこと少しと雖、爾等の靈の
爲に、甘んじて我が物を費し、及び我が身を盡さん。一六 或は言はん、我自ら爾等を累は
さざりしと雖、巧なる者にして、詭計を以て爾等より取れりと。一七 我は爾等に遣は
しゝ者の中、誰に由りて爾等より利を獲しか。一八 我ティトに請ひ、又一の兄弟を彼と偕
に遣せり、ティトは何の利を爾等より獲しか、我等は同じき神を以て行ひしに非ずや、同
じき跡を履みしに非ずや。一九 爾等又我等は爾等に自訴すと意ふか。我等はハリスト
スに在りて神の前に言ふなり、至愛の者よ、是れ皆爾等の德を建てん爲なり。二〇 蓋

我恐る、我が來りて爾等を見んこと、我が欲する所の者の如くならず、又爾等の我を見
んこと、爾等の欲する所の者の如くならず、卽我が爾等の中に爭鬪、娼嫉、忿怒、分爭、讒
言、隱刺、驕矜、混亂に遇はんことを。二 且恐る、我が復來る時、我が神は我を爾等の中に
卑うし、我多くの者が先に罪を犯して、其行ひし汚穢、淫行、邪侈を悔ハざりしに緣りて、
哭かんことを。

第十三章

一 此れ我第三次に爾等に往く、二三證者の口を以て凡の言は確められん。
二 我先に言へり、復預め言ふ、再爾等に會ふが如し、今離れ居る時、書して、先に罪を
犯しゝ者、及び其餘の衆に達す、我復來る時恕さざらん。三 爾等ハリストスが我の中に
語る證を求むるに因る、彼は爾等の爲に弱きに非ず、乃爾等の中に强し。四 蓋彼は弱
きを以て十字架に釘せられしと雖、神の能を以て生く、我等も彼に在りて弱しと雖、神
の能を以て、彼と偕に爾等の中に生きん。五 爾等信に居るか、自ら省みよ、爾等自ら試み
よ。豈自ら知らずや、若し爾等の中に宜しからざる所なくば、イイススハリストスが爾
等の中に居ることを。六 我等に至りては、爾等が我等の宜しからざるなきを知らんこ

さを信ず。七神に祈ろ、爾等何の惡をも行はざらんことを、これ我等の宜しき事の彰れん爲に非す、乃我等善を行はん爲なり。八蓋我等は眞實に逆ひて力なく、眞實に順ひて力あり。九我等の弱くして、爾等の強き時は、我等喜ぶ、我等の祈ろ所は、即爾等の全備ならんことなり。一〇故に我離れ居る時、此を書す、會はん時に、主が我に敗ぶる爲に非ずして、建つる爲に與へし權に由りて、嚴責を用ねざらん爲なり。一一末之を要するに、兄弟よ、喜べ、全備に進め、慰を得よ、意を同じくせよ、和睦せよ、然らば仁愛和平の神は爾等と偕に在らん。一二爾等聖なる接吻を以て互に安を問へ。衆聖徒爾等の安を問ふ。一三願はくは我等の主イエスキリストの恩寵、神父の仁愛、聖神の交親は、爾等衆と偕に在らんことを。「アミン」。

聖使徒パウルがガラティヤ人に達する書

第一章

一パウル、人に由るに非す、人を以てするに非す、乃イエスハリストス、及び彼を死より復活せしめし神父を以て立てられたる使徒、二及び我と偕に在る衆兄弟は、書してガラティヤの諸教會に達す。三願はくは恩寵と平安とは、神父及び我等の主イエスハリストスより爾等に賜はらんことを。四彼は神我等の父の旨に遵ひて、我等を今の惡しき世より救はん爲に己を我等の罪の爲に與へたり。五光榮は彼に歸し て無窮の世に至らん、「アミン」。六我怪しむ、爾等が斯く速に爾等をハリストスの恩寵に召しゝ者を離れて、他の福音に遷れることを、七 他の福音に非す、但或人人が爾等を擾して、ハリストスの福音を紛更せんと欲するのみ。八然れども或は我等も、或は天より下る使者も、我等が曾て爾等に福音せし所に異なる福音を傳へば、「アナゼマ」たるべし。九我等が先に言ひし如く、今も亦言ふ、爾等に傳ふる者あらば、「アナゼマ」たるべし。一〇我今人の心を得んと欲するか、神の心

を得んと欲するか、抑人を悦ばしめんことを勉むるか、若し我仍人を悦ばしめんとせばハリストスの僕たらざらん。一一兄弟よ、我爾等に告ぐ、我が傳へし福音は人に由るに非ず。一二蓋我人より之を受け、之を學びしに非ず、乃イイスス ハリストスの默示に由るなり。一三爾等は我が先にイヲデヤ教に在りし時に行ひし所を聞けり、卽我甚しく神の教會を窘逐し、之を殘害し、一四且イヲデヤ教に進歩して、我が同族の中の年相若しき多くの人に超ゆ、極めて先祖の遺傳に熱中せり。一五然れども我が母の胎より我を簡びて、其恩寵を以て我を召しゝ神が、一六悦びて、其子を我が内に顯し、我をして之を異邦人に福音せしめんとせし時、我直に血肉と相謀らず、一七亦イエルサリムに上りて、我より先に使徒と爲りし者を見ず、乃アラビヤに往き、後又ダマスクに返れり。一八嗣ぎて三年を越にて、ペトルを見ん爲にイエルサリムに上り、十五日間彼と偕に居たり。一九他の使徒は、主の兄弟イアコフの外、誰をも見ざりき。二〇我が爾等に書する所の者は、視よ、神の前に在りて誑らず。二一厥後我シリヤ及びキリキヤの諸地に往けり。二二イウデヤに在るハリストスの諸教會は我が面を識らざりき、二三彼等

は第先に我等を寵遂せし者、今其先に殘害せし教を福音すと聞き、二我に因りて神を讃榮せり。

第二章　一嗣ぎて十四年の後、我バルナバと偕に復イエルサリムに上れり、ティトをも共に攜へたり。二我默示に依りて上り、彼等に我が異邦人の中に傳ふる所の福音を告げ、又私に名ある人等に告げたり、我が勤勞し、或は勤勞せしことの、徒然に歸せざらんが爲なり。三然れども彼等は我と偕に在りしティトにも、其元リン人なりさ雖、强ひて割禮を受けしめざりき。四私に入りし僞兄弟、竊み入りて、我等がハリストスイエスに於て有つ所の自由を窺ひ、我等を奴隷さ爲さんと欲せし者には、五我等一時も之に譲りて服せざりき、福音の眞實の爾等の中に存せん爲なり。六名ある者に至りても、其昔て何如なる人たりしさ雖、我に於て異なる所なし、神は人を取らず。名ある者も我に增益せし所なし。七是に反して、福音が割禮を受けざる者の爲に委ねられたるを見、八（蓋ペトルに割禮を受くる者の爲にペトルに委ねられし如く、我には割禮を受く

へられし恩寵を知りて、イアコフ、キファ、イオアン、柱と意はるゝ者に、我及びワルナワに
交親の證として、右の手を與へたり、我等は異邦人に、彼等は割禮を受くる者に往かん
爲なり。一〇 唯彼等の願ひし所は、我等が貧者を記念せんことに在り、我勉めて是の事
を行へり。一一 ペトルがアンティチヒヤに來りし時、我面り彼を詰れり、責むべき所あ
りし故なり。一二 蓋イアコフより來る者の未だ至らざる先には、彼異邦人と偕に食
へり、其至りし後には、割禮を受くる者を畏れて、退きて別れたり。一三 其餘のイウデヤ
人も彼と偕に僞を爲せり、ワルナワも其僞に與するに至れり。一四 我は彼等が福音
の眞實に循ひて正しく行はざるを見て、衆人の前に於てペトルに謂へり、若し爾イウ
デヤ人たるに、度生すること異邦人の如くにして、イウデヤ人の如くならずば、何ぞ異
邦人をしてイウデヤ人の如く度生することを使むる。一五 我等は本性イウデヤ人に
して、異邦よりせし罪人に非ず、一六 然れども人は律法の行に由るに非ず、唯イイスス
ハリストスを信ずるに由りて義とせらるゝを知りて、我等もハリストスイイススを
信ぜり、ハリストスを信ずるに由り、律法の行に由らずして、義とせられん爲なり、蓋律

法の行に由りては、人一も義とせらるゝなし。一七若し我等ハリストスに由りて義とせられんことを求めて、自も猶罪人たらば、豈ハリストスは罪の役者たるか。非らず。一八蓋若し我が毀ちたる者、我復之を建てば、則己の罪人たるを示すなり。一九我律法に由りて律法の爲に死せり、神の爲に生きん爲なり。二〇既に我生くるに非ず、卽ハリストスは我の中に生くるなり。我が今肉體に在りて生くるは、我を愛して我が爲に己を捨てし神の子を信ずるに由りて生くるなり。二一我神の恩寵を廢せず、蓋若し義さるゝことは律法に由らば、ハリストスの死せしことは徒然なり。

第三章

一無知なるかな、ガラテヤ人よ、誰か爾等を惑はして、眞實に從はしめざる、蓋イエスス、ハリストスは爾等の目の前に像られしことこと、爾等の中に釘せられしが如くなりき。二我惟此の事を爾等に問はんと欲す、爾等が神を受けしは、律法の行に由るか、抑聽きて信ぜしに由るか。三爾等斯く無知なるか、神を以て始めて、今肉を以て終ふるか。四爾等斯く多く苦を受けしこと徒然なるか、豈止徒然ならんや。五爾等に神を賜ひ、且

爾等の中に異能を行ふ者は、律法の功に由るか、抑聞きて信ぜしに由るか。六斯くア
ウラアムは神を信じたり、此れ彼に歸して義と爲れり。七故に信に由る者は、是れ即
アウラアムの子なりと知れ。八聖書も預め神が信に由りて異邦人等を義と爲さんこ
とを見て、預めアウラアムに福音して言へり、萬民は爾に由りて祝福せられんと。九是
くの如く、信に由る者は信なるアウラアムと偕に祝福せらるゝなり。一〇凡そ律法の
行に由る者は詛に服す、蓋錄せるあり、凡そ恒に律法の書に載する所に遵ひて之を
行ひ盡さざる者は詛はるゝなりと。一一律法に由りては人一も神の前に義とせられ
ざること明なり、蓋曰ふ、義人は信に由りて生きんと。一二然れども律法は信に由らず
乃曰ふ、此を行ふ人は此に由りて生きんと。一三ハリストスは我等の爲に詛と爲り
て、我等を贖ひて、律法の詛より免れしめたり、蓋錄せるあり、凡そ木に懸れる者は詛は
れたりと。一四是れアウラアムの祝福がハリストスイイススに由りて、異邦人に及ば
ん爲、我等信に由りて許約せられし聖神を受けん爲なり。一五兄弟よ、我人の情に循ひ
て言ふ、人の契約すら既に定まりたらば、之を廢し、或は之を加ふることなし。一六夫れ

約はアウラアム及び其裔に賜はりたり。多くの者を指して云ふが如くに、諸裔と云はず、乃一の者を指すが如くに、爾の裔と云ふ、是れ即ハリストスなり。一七 我之を言ふ、先に神より定められたる、ハリストスにありてアウラアムに於ける契約は、四百三十年の後に顯れし律法、之を廢して、約を虛しくする能はず。一八 蓋嗣業若し律法に由らば、已に許約に由りて之を賜へり。一九 然らば律法は何ぞや。此れ後に、罪の故に由りて、アウラアムに許約に由りて、許約の屬する所の裔の來るに及ぶまで設けられしものにして、天使等に依りて、中保者の手を以て授けられたり。二〇 夫れ中保者は一の者に有るなし、而して神は一なり。二一 然らば律法は神の許約に反るか。非らず。蓋若し生かすを得る律法興へられしならば、義さするものは眞に律法に由るならん。二二 然れども聖書は萬人を罪の下に閉せり、許約がイイスス ハリストスを信ずるに由りて信者に與へられん爲なり。二三 信の來らざる先には、我等律法の下に護られ、閉されて、信の顯るゝを俟てり。二四 斯く律法は我等をハリストスに導く師傅たりき、我等信に由りて義させられん爲なり。二五 信の來りし後、我等は已に師傅の下に在らず。二六 蓋嗣等

皆ハリストスイイススを信ずるに由りて神の子なり。二七 爾等皆ハリストスに於て
洗を受けし者はハリストスを衣たり。二八 既にイウデヤ人もヱリン人もなく、奴隷も
自主もなく、男性も女性もなし、蓋爾等皆ハリストスイイススに在りて一なり。二九 若
し爾等ハリストスに屬せば、則アウラアムの裔たり、且許約に由りて嗣子たるなり。

第四章

一 我亦曰ふ、嗣子は全業の主たりと雖、其童蒙の時に於ては、僕に異なるなし。
二 乃父の定めし期に至るまで、受託者及び家宰の下に在り。三 是くの如く我等も、童
蒙の時に於ては、世の元行に服役せり。四 然れども期滿つるに至りて、神は其子を遣し、
彼は女より生れ、律法下の者となれり、五 律法下の者を贖ひ、我等をして子たるを得し
めん爲なり。六 且爾等子たるに由りて、神は爾等の心に其子の神、「アウワ」父と呼ぶ者
を遣せり。七 故に爾既に僕ならず、乃子なり、若し子ならば、イイススハリストスに由り
て神の嗣なり。八 然れども曩に爾等神を識らずして、本性神ならざる者に事へたり。九
今神を識りて、寧神に識られて、何ぞ復弱く且卑しき元行に返りて、再之に事へんと
欲する。一〇 爾等日と月と節と年とを守る。一一 我爾等の爲に恐る、我が爾等の中に勞

せしことの徒然に歸せんことを。一二 兄弟よ、爾等に求む、我の如くなれ、蓋我も爾等の如き者なり。爾等一も我を侵しゝことなし。一三 爾等知る、我初身の弱きを以て爾等に福音したりと雖、一四 爾等は我の身に在りし我が試誘を卑しめず、厭はず、乃神の使の如く、ハリストスイイススの如く、我を受けたり。一五 其時爾等何如に福なりしか。我爾等の爲に證す、若し能す可くば、爾等己の目を抉りて、我に與へしならん。一六 然らば我眞實を爾等に言ふに緣りて、爾等の敵と爲りしか。一七 彼等が爾等の爲に熱中するは善き意に非ず、乃爾等を離して、爾等が彼等の爲に熱中せんことを欲するなり。一八 善事の爲に恒に熱中するは善し、唯我が爾等と偕に居る時に於てするのみならず。一九 我が小子よ、我復爾等の爲に產の劬勞に在りて、ハリストスが爾等の中に形づくらるゝを待つ。二〇 冀はくは我今爾等と偕に在りて、我が聲を變ぜんことを、蓋我爾等の爲に惑ふ。二一 爾等律法の下に在らんと欲する者は、我に語れ、爾等律法を聞かざるか。二二 蓋錄せるありアウラアムに二人の子あり、一は婢よりし、一は自主の婦よりせり。二三 然れども婢よりせし者は肉に循ひて生れ、自主の婦よりせし者は許約に因

れり。二四斯に譬あり、此れ二約なり、一はシナイ山よりし、生みて奴隷と爲す、此れ卽
アガリなり。二五蓋アガリはアラヂヤのシナイ山なり、今のイエルサリムに當る、彼は
其諸子と共に奴隷たればなり。二六然れども上なるイエルサリムは自主にして、是れ
我等衆の母なり。二七蓋錄せるあり、妊まず生まざる者、樂め、產に苦しまざる者、聲を揚
げて呼べ、蓋棄てられたる婦は、夫ある者に較ぶれば、更に多くの子ありと。二八兄弟よ、
我等はイサアクの如く許約の子なり。二九惟其時、肉に循ひて生れし者が、神に循ひて
生れし者を窘逐せし如く、今も亦然り。三〇然れども聖書は何をか言ふ、婢及び其子を
逐ひ出せ、蓋婢の子は自主の婦の子と共に嗣子と爲るを得ず。三一故に兄弟よ、我等は
婢の子に非ず、乃自主の者の子なり。

第五章

一是の故に爾等ハリストスが我等に賜ひし所の自由に堅く立ちて、復奴隷
の軛に服する勿れ。二視よ、我パヱル爾等に言ふ、若し爾等割禮を受けば、ハリストスは
更に爾等に益なし。三我復凡そ割禮を受くる人に證す、彼は全律法を行ふべし。四爾等
律法に由りて義とせらるゝ者は、ハリストスを離れ、恩寵より絕たれたり。五我等に至

りては、神を以て、信仰に由りて義とせらるゝを望を得んことを俟つ。六　蓋しイエスに在りては、割禮を受くるも、割禮を受けざるも、益なく、唯愛を以て行ふ信は益あり。七　爾等善く行けり、誰か爾等を阻みて、眞實に順はしめざる。八　此の勸は爾等を召す者より[1]すること非ず。九　僅なる酵は塊くの[2]渡鬱を酸くす。一〇　我主に由りて爾等に他意なからんことを傳ふるならば、何ぞ尚割禮を宣ふ者は、何人に論なく、其定罰を受けん。一一　兄弟よ、我若し尚割禮を宣ふ者は、何人に論なく、其定罰を受けん。一一　兄弟よ、我若し尚割禮を宣ふ者は絶たれん。一二　願はくは爾等を亂す者は絶たれん。一二　願はくは爾等を亂す者は絶たれん。一二　願はくは爾等を亂す

巫術、仇讐爭鬪、娼嫉、憤怒分爭、朋黨、異端、二一怨恨、兇殺、沈湎、饕餮等の類、是なり。我が先
に爾等に言ひし如く、今復預め言ふ、此くの如き事を行ふ者は神の國を嗣がざらん。
二二神の果は仁愛、喜悅、平安、恒忍、仁慈、矜恤、信仰、二三溫柔、節制なり。此くの如き者に
は律法なし。二四凡そハリストスに屬する者は、肉體を其情及び慾と共に十字架に釘
せり。二五若し我等神に依りて生きば、亦神に依りて行ふべし。二六虛榮を尙び、相怒り、
相妒む勿るべし。

第六章

一兄弟よ、若し人過に陷らば、爾等屬神の者は、溫柔の神を以て、之を規し、且
自省みるべし、恐らくは爾も亦誘はれん。二爾等互に荷を負へ、是くの如くしてハ
リストスの法を盡さん。三蓋人若し有るなくして、自ら有りとせば、是れ自ら欺くなり。
四人各其行を勘ふべし、然らば其誇る所は唯己に在りて、他人に在らざらん。五蓋
人各己の任を負はん。六教を受くる者は、其所有を以て教ふる者に分つべし。七自
ら欺く勿れ、神は慢る可からず。人の種く所の者は、亦其穫る所と爲らん。八其肉に種く
者は、肉より腐敗を穫り、神に種く者は、神より永遠の生命を穫らん。九我等善を行ひて

倦む可からず、蓋若し弛まずば、期に屆りて穫らん。一〇故に我等時の尚存する間は悉くの人に、特に同信の者に善を爲すべし。一一視よ、我手づから爾等に幾許か多く書しやりたるを。一二肉を以て誇らんと欲する者が爾等を強ひて割禮を受けしむるは、唯キリストの十字架の故に逼害を受けざらん爲のみ。一三蓋割禮を受くる者は己も律法を守らず、然るに爾等に割禮を受けしめんことを欲するは、爾等の肉を以て誇らん爲なり。一四我に在りては、我等の主イエスキリストの十字架の外に誇る所なし、此に由りて世は我の爲に釘せられたり、我世に於ても亦然り。一五蓋キリストイエスに在りては、割禮も亦無し、無割禮も亦然り。一六凡そ此の規に遵ひて行ふ者は、願はくは平安と慈憐とを蒙らん、神のイズラエルの上に。一七今より後人我を擾す勿れ、蓋我は主イエスの瘡痕を我が身に負へり。一八兄弟よ、願はくは我等の主イエスキリストの恩寵は爾等の神と偕に在らんことを、「アーメン」。

聖使徒パワェルがエフェス人に達する書

第一章

一 パワェル、神の旨に由りてイイススハリストスの使徒と爲れる者は、エフェス
に在る聖徒、ハリストスイイススに於て信なる者に書を達す。二 願はくは恩寵と平安
とは、神我等の父及び主イイススハリストスより爾等に賜はらんことを。三 祝讃せら
るゝ哉神、我等の主イイススハリストスの父、彼はハリストスに緣りて、天に於て、凡の
屬神の祝福を以て、我等を祝福せり。四 蓋我等を創世の先より彼の中に簡べり、我等が
彼の前に愛を以て、聖にして、疵なからん爲なり。五 我等を其旨の惠に循ひて、イイスス
ハリストスに由りて、己の子と爲さんことを預定せり、六 其至愛の者に在りて我等に
賜はりし恩寵の光榮の讃美せられん爲なり。七 我等彼に在りて、其恩寵の豐厚なるに
循ひて、其血を以て贖を蒙り、諸罪の赦を得るなり。八 神は我等に其恩寵を增加して、凡
の智慧と知識とを賜へり。九 蓋神は預め彼の內に藏めたる己の惠に循ひて、我等に
其旨の奧義を示せり。一〇 是れ定めたる期の滿つるに屆りて、天に在り地に在る萬物

をハリストスの下に歸一せしめんとする者なり。一一彼に在りて我等嗣子と爲れり、
蓋己の意の欲する所に隨ひて萬事を行ふ者の旨に緣りて、預め此が爲に定められ
たり、一二我等先にハリストスを賴める者が、彼の光榮の讚美を爲さん爲なり。一三彼
に在りて、爾等も眞實の言、爾等の救の福音を聞き、且彼を信じて、許約の聖神に印せ
られたり、一四是れ我等の嗣業の聘質にして、業の贖を爲す者、彼の光榮を讚美せしむ
る者なり。一五故に我も、爾等がハリストスイイススに於ける信、及び衆聖徒に於ける
愛の事を聞きて、一六斷ねず爾等の爲に感謝し、我が祈禱の時に爾等を記憶す。一七願
はくは我等の主イイススハリストスの神、光榮の父は、爾等に智慧と默示との神を與
へて、彼を識らしめ、一八及び爾等が心の目を明にせんことを、爾等が其召の望何如、其
聖徒の爲に備ふる嗣業の光榮の豐厚なること何如、一九及び我等、彼が權の力の行爲
に由りて信ずる者の中に、其能の極めて大なること何如を知らん爲なり。二〇蓋彼は
其力をハリストスの中に顯して、之を死より復活せしめ、之を己の右に天に坐せしめ
て、二一凡の首領、權柄、能力、主制、及び凡そ此の世のみならず、來世にも稱ふる所の名

の上に置き、二二且一切を以て其足下に服せしめ、彼を一切の上に立てゝ、教會の首と
爲せり、二三教會は乃彼の身にして、一切を以て一切を滿つる者の充滿なり。

第二章

一神は爾等、罪と愆とに緣りて死せし者をも生かせり、二蓋爾等曩に此等
を行ひて、斯の世の風習に循ひ、空氣中の權ある君、今悖逆の子の中に行爲する神の旨
に從へり。三我等も皆曩に其中に在りて、我が肉體の慾に循ひ、肉體と意念との欲する
所を行ひて、他の者の如く、本性に由りて怒の子たりき。四然るに矜恤に富める神は、其
我等を愛する大なる愛に緣りて、五我等罪に由りて死せし者をハリストスと偕に生
かせり、(爾等恩寵を以て救はれたり)六彼と偕に復活せしめ、ハリストスイイススに
在りて天に坐せしめたり、七未來の世に於て、其ハリストスイイススに在りて我等に
施しゝ仁慈を以て、恩寵の溢れたる富を示さん爲なり。八蓋爾等は恩寵を以て信に
由りて救はれたり、是れ爾等に由るに非ず、神の賜なり、九行に由るに非ず、人の誇る
ことなからん爲なり。一〇蓋我等は彼の造りし者にして、ハリストスイイススに在り
て善き功の爲に造られたり、卽神が我等の行はん爲に預め備へし所なり。一一故に記

憶せよ、爾等曩に肉體に緣る異邦人、手を以て肉體に行ふ割禮と稱ふる者より無割禮と稱へられし者は、一二 其時ハリストス無くイズライリの民に疏く、應許の諸約に與らず、望を有たず、世に在りて神なき者たりき。一三 然れど今は ハリストスの血に由りて近くなれり。一四 蓋彼は我らの和平なり、二の者を一と爲し、隔の牆を毀ち、一五 己の身を以て仇を廢し、教を以て諸誡の律法を廢せり、是れ和平を爲して、二の者を以て己に於て、一の新なる人を造り、一六 又十字架にて仇を殺し、此を以て、一の身に於て、二の者を神と復和せしめん爲なり。一七 且來りて、爾等遠き者及び近き者に和平を福音せり、一八 蓋彼に由りて、我等二の者は、一の神に在りて父に近づくを得るなり。一九 故に爾等既に異民、或は他邦の人、神の家屬なり、二〇 爾等は諸使徒と諸預言者との基に建てられたり、イエスス ハリストスは自らその隅石なり。二一 此の上に全屋は組み立てられ、次第に築きて、主に於ける聖殿と爲る、二二 此の上に爾等も、神に由りて、神の居處と建てられて、共に建てらるゝなり。

第三章

一此に縁りて我パヱル、爾等異邦人の爲に、イイススハリストスの囚人と爲
れり。二爾等は已に爾等の爲に我に與へられし神の恩寵の定制を聞けり、三卽默示を
以て我に奥義の示されし事なり、我が前に略書しゝが如し。四爾等之を讀みて、之に由
りて、我がハリストスの奥義を曉れることを知るを得。五此の奥義は、前代に於て人の
諸子に示されしこと、今聖神を以て聖使徒と預言者とに顯されしが如く爲らざりき、
六卽異邦人等もハリストスイイススに在りて、福音に由りて、共に嗣子と爲り、共に
一體と爲り共に神の許約に與る者と爲ること是なり。七我は神の能の行ふ所を以て
我に與へられし其恩寵の賜に縁りて、此の福音の役者と爲れり。八我衆聖徒の中に最
小き者に、ハリストスの量り難き富を異邦人に福音し、九且イイススハリストスを以
て萬物を造りし神の中に永世より隱れたる奥義の定制の何なるを衆人に顯す所の、
此の恩寵は與へられたり、一〇今教會に由りて、天に在る首領、權柄に神の萬殊の智慧
の示されん爲なり、一一是れ永世よりの定、神がハリストスイイススの我等の主に因り
て行ひし者に循ふなり。一二彼に在りて、我等彼を信ずるに由りて、毅然として、切望を

懷きて、神に近づくを得。一三 故に我爾等に求む、我が爾等の爲に受くる患難に由りて
心を失ふ勿れ、此れ爾等の光榮なり。一四 此に緣りて我は我が主イイススハリストス
の父、一五 卽天に在り地に在る凡の父たる事の由りて名づけらるゝ者の前に我が
膝を屈む。一六 願はくは彼は其光榮の富に循ひ、其神を以て、爾等に、內なる人に於て強
く堅められ、一七 信に由りて、ハリストスの爾等の心に居るを賜はんことを、一八 爾等
が愛に根ざされ、基づけられて、衆聖徒と偕に闊さと長さと深さと高さとの何なるを
悟り、一九 及びハリストスの測り難き愛を知るを得ん爲、爾等が凡の神の充滿に滿て
られん爲なり。二〇 夫の我等の中に行爲する能に循ひて、我等が凡そ求むる所或は思
ふ所よりも極めて多く爲すを得る者には、二一 願はくは光榮は、教會に於て、ハリスト
スイイススに因りて、萬代彼に歸して、世世に至らん、「アミン」。

第四章

一 此に緣りて我、主の爲に囚たる者は、爾等に求む、爾等が召されたる召に稱
ひて行へ、二 凡の謙遜と溫柔と恒忍とを以て、愛に因りて互に恕せよ、三 務めて和平の
繫を以て、神の一なるを守れ。四 體は一、神は一、爾等が召されたる召の望の一なるが如

し、五 主は一、信は一、洗禮は一、六 神萬衆の父は一、
我等萬人の中に在り。七 然れども我等各人に恩寵の與へられしは、
量に循ふなり。八 故に云へるあり、高きに登り、擄者を擄にし、人人に賜を與へたりと。
夫れ登れりとは、彼が先づ地の最下なる處に降りしを示すに非ずや。一〇 降りし者
は、彼即諸天の上に登りし者なり、此れ萬有を充たさん爲なり。一一 彼が與へし者に
は、使徒あり、預言者あり、福音者あり、牧師及び教師あり、一二 聖徒を全備せしめ、服役の
事を行ひ、キリストの體を建てゝ、一三 我等皆信と神の子を識る知識さの一なるに、
成全の人さ爲るに至るに迨ぶ、一四 我等は復嬰兒にして、凡の教の風に搖かされ漾はされて、人の詭計及び試誘の巧なる術に惑はさるゝ者さ
爲らず、一五 乃愛を以て眞實を守りて、一切の事を彼、即首たるキリストに於て
生長せしめん爲なり。一六 彼よりして全體は、凡の相聯れる關節を以て組織結合せら
れ、百體各其分量に協ひ、其力行に循ひて、益〳〵生長し、愛を以て自ら建つるを致す。
一七 故に我之を言ひ、且主に由りて戒む、爾等は復他民が其慮しき智慧に循ひて行ふ

が如く行ふ勿れ。一八 彼等思念暗く、其無知及び心の頑なるが故に、神の生命に離れ、一
九 其本心を失ひて、邪侈を恣にし、凡の汚穢を貪り行ふ。二〇 然れども爾等は斯くハリ
ストスを學びしに非ず。二一 蓋爾等が彼に聞き、且眞實はイイススに在るに由りて、
彼に學びしは、二二 惑を爲す慾の中に朽つる舊き人の先の習を脱ぎ、二三 爾等の智慧
の神を新にして、二四 眞實の義と聖とを以て、神に循ひて造られし新なる人を衣るこ
となり。二五 故に爾等謊を去りて、各其隣に眞實を言へ、蓋爾等は互に肢なり。二六
怒りて罪を致す勿れ、日は爾等の怒の間に入る可からず。二七 惡魔に處を與ふる勿れ。
二八 竊みし者は復竊む勿れ、寧勞して、手づから善き工を爲せ、乏しき者に施すを得ん
爲なり。二九 凡の腐敗したる言は爾等の口より出づべからず、唯善き言、信を建つるに
益ある者は出づべし、聽く者に恩寵を與へん爲なり。三〇 爾等が贖の日に印せられし
神の聖神を憂ひしむる勿れ。三一 凡の苦很、憤懣、忿怒、誼譟、謗讟は、凡の撩惡と共に、爾等
の中より去らるべし、三二 乃仁愛憐憫を以て相待ち、相赦すこと、神もハリストスに
縁りて爾等を赦しゝが如くせよ。

第五章

一 故に爾等は至愛の子の如く神に效へ、二 愛を以て行ふこと、ハリストスの
我等を愛し、我等の爲に己を付して、神に獻ずる禮物及び祭祀と爲し、馨しき香と爲し
ゝ如くせよ。三 淫行と凡の不潔と貪婪とは、爾等の中に名づけらるゝことだに在る可
からず、聖徒に符ふが如し。四 又淫辭、浮言、戲謔は、皆宜しからず、寧感謝せよ。五 蓋知
るべし、凡の淫行の者、或は不潔の者、或は貪婪の者、卽拜偶像者は、ハリストス及び神
の國に於て嗣業を得ず。六 人虛しき言を以て爾等を惑はす可からず、蓋此等の事に因
りて、神の怒は悖逆の子に臨む。七 故に彼等に與する勿れ。八 爾等は素暗なりしが、今は
主に在りて光なり、光の子の如く行へ。九 蓋神の實は凡の慈愛と公義と眞實とに在り。
一〇 爾等神の悅ぶ所の何なるを審にせよ、一一 實を結ばざる暗昧の行に與る勿れ、寧
之を責めよ。一二 蓋彼等が隱に行ふ事は、言ふも亦耻づ可し。一三 凡そ責めらるゝ事は
光に由りて顯る、蓋凡そ顯るゝ事は光なり。一四 故に云へるあり、寐ぬる者起きよ、死よ
り復活せよ、ハリストス爾を照さん。一五 是を以て視よ、行を愼みて、無智の者の如くせ
ず、乃智ある者の如くせよ、一六 時を惜むべし、日は惡しければなり。一七 是の故に思慮

なき者と爲る勿れ、乃神の旨の何なるを覺れ。一八 又酒に醉ふ勿れ、此に由りて放蕩あ
り、乃神に滿てられよ。一九 聖詠と歌頌と屬神の詩賦とを以て、口に唱へ、心に和して、主
を讃美せよ。二〇 凡の事、常に我等の主イイススハリストスの名に因りて、神父に感謝
せよ。二一 神を畏るゝ心を以て互に順へ。二二 婦よ、己の夫に順ふこと、主に於けるが如
くせよ、二三 蓋夫は婦の首たること、ハリストスが教會の首たるが如し、彼は亦體の
救主なり。二四 乃教會のハリストスに順ふが如く、斯く婦も凡の事に於て夫に順ふ
べし。二五 夫よ、己の婦を愛すること、ハリストスが教會を愛するが如くせよ、彼は己を
此が爲に捨てたり、二六 是を水の洗を以て、言に由りて、潔めて聖にせん爲、二七 是を己
の前に光榮なる教會、汚或は皺、或は此くの如き類なき者として立てん爲、卽是が
聖にして疵なき者とならん爲なり。二八 夫は己の婦を愛すること、己の身の如くすべ
し、己の婦を愛する者は、己を愛するなり。二九 人未だ己の身を惡む者有らず、乃之を養
ひ、之を溫むること、主の教會に於けるが如し、三〇 蓋我等は彼の體の肢にして、彼の肉
よりし、彼の骨よりす。三一 是の故に人は其父母を離れ、其妻に著きて、二の者一體とな

らん。三二 此の奥義は大なり、我ハリストスと教會とに於て之を言ふ。三三 然らば爾等
各其婦を愛すること、己の如くすべし、而して婦は其夫を畏るべし。

第六章

一 子よ、爾等主に在りて己の父母に順へ、蓋此れ宜しきに合ふなり。二 爾の父
及び母を敬へ、此れ許約を加へたる第一の誡なり、曰く、三 爾福を獲、地に壽からん爲
なりと。四 父よ、爾等も己の子を怒らしむる勿れ、乃主の警戒と教訓とを以て之を養育
せよ。五 僕よ、恐懼戰慄を以て、樸直なる心に於て、肉體に屬する爾等の主に順ふこと、ハ
リストスに於けるが如くせよ。六 人の悅を取る者の如く、唯目の前に勤むるなく、乃ハ
リストスの僕の如く、心より神の旨を行へ、七 甘んじて事ふること、人に於けるが如く
せずして、主に於けるが如くせよ、八 蓋知る、人或は僕、或は自主に論なく、各其行ひし
善に循ひて、主より報を受けん。九 主なる者よ、爾等も是くの如く彼等に行ひて、嚴しき
を和げよ、天には爾等と彼等との主、偏視せざる者あるを知ればなり。一〇 之を究むる
に、我が兄弟よ、主及び其權の力に賴りて堅固になれ。一一 神の全備の武具を衣よ、爾等
が惡魔の奸計を禦ぐを得ん爲なり、一二 蓋我等の戰は血肉に於てするに非ず、乃首

領に於てし、權柄に於てし、此の世の暗昧の世君に於てし、天空に在る凶惡の諸神に於
てするなり。一三 此に因りて神の全備の武具を取れ、惡しき日に於て禦を爲し、凡の事
を成就して、立つを得ん爲なり。一四 故に立ちて、眞實を爾等の腰に束ね、義の甲を衣、一
五 和平を福音する預備を以て足に履はき、一六 更に信の盾を執れ、之を以て惡敵の悉
くの火箭を滅すを得ん、一七 又救の冑、及び神の劍、卽神の言を取れ。一八 常に凡の
祈禱と祈願とに於て、神を以て禱れ、凡の敬醒忍耐を以て此を務めて、衆聖徒の爲に求
め、一九 亦我の爲にも求めよ、我に言は與へられ、我が口は啓かれて、二〇 我をして縲絏
に在りて使を奉ずる所の福音の奧義を侃侃として宣べしめん爲、我が宜しきに合ひ
て言ふべき所に毅然たらん爲なり。二一 爾等も我の事、我が爲す所の事を知らん爲に、
至愛の兄弟、主に在りて忠信なる役者ティヒクは、悉く之を爾等に告げん、二二 我特に此
が爲に彼を爾等に遣せり、爾等が我等の事を知り、且彼が爾等の心を慰めん爲なり。二
三 願はくは諸兄弟は神父及び主イイススハリストスより平安と愛と信とを獲ん。二
四 願はくは恩寵は純ら我等の主イイススハリストスを愛する衆人と偕に在らん。

また「アミン」。

聖使徒パウロがフィリピ人に達する書

第一章

パウロ及びテモテ、イエスキリストの僕たる者は、フィリピに在るイエスキリストに於ける衆聖徒、及び諸監督と諸役事とに書を達す。二願はくは我等の父及び主イエスキリストより爾等に賜はらんことを。三我が凡の祈禱に於て、爾等衆の爲に欣び、四恒に我が神に感謝し、五爾等が初の日より今に至るまで、共に福音に與れるが故なり。六我深く信ず、爾等の中に善き工を始めし者は、之を迫ばん。七我が此くの如く爾等衆を思ふは宜しきなり、蓋爾等我が心に在り、我が縲紲の日に、及び福音を辨明し堅固にする時に於て、爾等皆我と共に恩寵に與ればなり。八神は我の證者なり、我イエスキリストの心を以て爾等衆を愛す。九且我が祈る所は、乃爾等の愛は益知識と凡の心情とに長じて、一〇爾等最善き事を辨へ、キリストの日に於て、純潔にして、疵なく、一一イエスキリストに由りて義の實を滿て、神の光

榮と讃美とを顯さんとするに在り。一二 兄弟よ、我爾等が、我に在りし事が福音の益
廣布するに助けしを知らんことを欲す、一三 我の縲絏は、ハリストスに由りて、全公廨
及び各處に著るゝに至れり。一四 主に於ける諸兄弟の中多くの者は、我が縲絏に由り
て力を獲て、益毅然として、懼るゝなく神の言を傳ふ。一五 或る者は猜忌と競爭とに因
りてハリストスを傳へ、或る者は善意を以て之を傳ふ。一六 彼の者は分爭に因りて、正
直ならずしてハリストスを宣べて、我が縲絏の苦を益さんと欲し、一七 此の者は愛を
以て之を宣ぶ、我が福音を辨明する爲に立てられたるを知るに因る。一八 然らば何ぞ
や。何如に論なく、或は僞の心を以ても、或は誠を以ても、ハリストスの傳へられば、我之
を喜び、且之を喜ばん。一九 蓋我此の事の我が救を致さんを知る、是れ爾等の祈禱とイ
イススハリストスの神との助に由りてなり。二〇 蓋我何事に於ても愧を得ず、卽凡の
勇敢に依りて、今も常の如く、我が身に於て或は生、或は死を以て、ハリストスの讃榮せ
られんことを確信希望するなり。二一 蓋我の爲には、生くることハリストスなり、死す
るも亦益なり。二二 若し肉體に於て生くること我が功に果を增さば、我何れを擇ぶべ

きを知らす。二三 我二の者の間に介まれたり、釋かれてハリストスと共に在らんことを願ふ、蓋是れ最も美なり、二四 然れども肉體に留るは、爾等の爲に更に切要なり。二五 且我確に知る、爾等の信の進さ喜さの爲に、我が留りて、爾等衆と偕に居らんことを、二六 我が再び爾等に來る時、爾等のハリストスに於ける誇が、我に因りて益加はらん爲なり。二七 惟ハリストスの福音に符ひしく生せよ、我が或は來りて、爾等を見、或は離れて、爾等が一神を一にして立ち、心を一にして共に福音の信の爲に戰ひ、二八 何事に於ても諸敵に恐れざるを聞かん爲なり。是れ彼等には亡の徴、爾等には救の徴なり、此れ神に由るなり。二九 蓋ハリストスの事に關して爾等に賜はりしは、唯彼の爲に苦を受くるなり、三〇 乃爾等が曾て我に於て見し所、今我に於て聞く所の苦の如き者是なり。

第二章　一 故に若しハリストスに於て安慰あり、若し愛の喜悦あり、若し靈の共與あり、若し慈憐及び矜恤あらば、二爾等我の喜を滿たして、爾等の意を同くし、愛を同じくし、靈を一にし、念ふ所も一にせよ。三 何事をも分爭或は虛榮に由りて行ふ勿れ

乃謙遜にして、互に人を以て己より愈れりとせよ。四各唯己の事を顧みるなく、乃
各人の事をも顧みよ。五蓋爾等はキリストス、イエスの意を以て意とすべし。六
彼は神の像にして、神と匹しくなることを慊ふとせざりき、七然れど己を虚しくし
て僕の貌を受け、人と同じき者と爲りて、外形に於て人の如くなり、八己を卑くして、死
にまで順ひ、且十字架の死に至れり。九故に神も彼を無上に高くして、彼に凡の名
に超ゆる名を賜へり、一〇凡そ天に在り、地に在り、及び地の下に在る者の膝は、イエス
の名の前に屈み、一一且凡の舌は、イエスキリストスが主たるを承け認めて、光榮
を神父に歸せん爲なり。一二故に我が至愛の者よ、爾等常に我に從ひしが如く、我が共に
在る時のみならず、乃今我が在らざる時に於ては、更に恐懼戰慄を以て己の救を成
せ。一三蓋神は其善旨を以て、爾等の裏に望む事をも、行ふ事をも爲すなり。一四凡の事
を怨言なく疑惑なく行へ、一五爾等が此曲の横なる悖れる世代の中に於て、疵なく玷な
く、神の子と爲らん爲なり。爾等は、彼等の中に、星の世に於けるが如く光りて、一
六生命の言を保つなり、我がキリストスの日に於て趨りしこと徒然ならず、勞せし

ことの徒然ならざるを誇らん爲なり。一七 若し我爾等の信の祭と奉事との上に灌奠
とせらるとも、我喜び且爾等衆と偕に喜ぶ。一八 此の事爾等も亦喜び、且我と偕に喜べ。
一九 我主イイスに頼りて速にティモテイを爾等に遣さんことを望む、我も爾等の諸
事を知りて、心を慰めん爲なり。二〇 蓋我に復同じき心を以て、眞實に爾等の事を慮
る者なし、二一 人皆己の事を求めて、ハリストスイイススの事を求めざるに因る。二二
然れども彼の忠信は爾等の知る所なり、蓋彼は子の父に於けるが如く、我と偕に福音
に役事せり。二三 故に我己の事の何如にならんを知らば、直に彼を遣さんことを望む。
二四 我主に頼りて、自も亦久しからずして爾等に至らんことを信ず。二五 然れども我
兄弟エパフロディト我の同勞者及び同戰者、爾等の使者及び我の乏しきに供せし者を、
爾等に遣すを切要なりと意へり、二六 蓋彼甚爾等衆を見んことを望めり、且爾等
が其病みたるを聞きしを以て、深く憂ひたり。二七 彼は實に病みて死に近づけり、然れ
ども神は彼を恤みたり、惟彼のみならず、我にも及べり、我が憂の上に憂の加はらざら
ん爲なり。二八 故に我愈速に彼を遣せり、爾等が復彼を見て喜ばん爲、我が憂も滅

ぜん爲なり。二九 爾等主に由りて喜を盡して彼を接けよ、且此くの如き者を敬へ。三〇
蓋彼はハリストスの事の爲に、死に近づくに及び、己の命を顧みざりき、爾等も我に於
ける供事の欽くるを補はん爲なり。

第三章

一 之を要するに、我が兄弟よ、主に於て喜べ。此等の事を書して爾等に達する
は、我が爲に煩はしからず、爾等の爲に益あり。二 爾等犬を愼め、惡を行ふ者を愼め、割を
愼め。三 蓋割禮とは、卽我等、神を以て神に事へ、ハリストスイイスを以て誇と爲し、肉
體を恃まざる者、是なり。四 然りと雖我も肉體を恃むを得べし。若し他人肉體を恃むを
得と意はば、我更に之を得るなり、五 我第八日に割禮を受け、イズライリの族、ワニアミ
ンの支派に屬し、エツレイ人よりするエツレイ人、律法に由りてはファリセイ、六 熱心に
由りては神の教會の窘逐者、律法の義に由りては玷なき者なり。七 然れども我が益た
りし者は、我之をハリストスの爲に損と爲せり。八 且一切を以て損と爲す、ハリストス
イイスス我が主を識る智識の勝れたるが故なり。彼の爲に我一切を棄て、一切を以て
芥蔕と爲す、ハリストスを獲ん爲、九 且律法に由る己の義を以てせずして、ハリストス

を信ずるに由る者、卽信に循ひて、神に由る義を以て、彼の中に居らん爲、一〇彼及び其復活の能を知り、且其苦に與るを知りて、彼の死に效はん爲なり、一一或は如何にしてか死より復活するを得ん。一二我已に獲たり、或は已に全くなれりと、言ふに非ず、惟我追ふ、或は之を獲ん、ハリストスイイススの我を獲たるが如し。一三兄弟よ、我己を以て獲たりと意はず、我惟一事を務む、卽後を忘れて、前に進む、一四標準に向ひて、ハリストスイイススに於ける神の上よりの召の褒賞を追ふなり。一五故に我等の中全き者は、此くの如く思ふべし、若し爾等に何事に於てか異なる思あらば、神は之をも爾等に示さん。一六然れども我等の已に到りし所は、我等之を思ひ、此の規に遵ふべし。一七兄弟よ、我に效へ、且我等を模範として行ふ者を視よ。一八蓋多くの人、我が屢爾等に言ひ、今又泣きて言ふ所の者は、ハリストスの十字架の敵の如くに行ふ。一九彼等の終は滅なり、彼等の神は腹なり、彼等の榮とする所は辱なり、彼等は地上の事を思ふ。二〇我等の居處は天に在り、我等は彼處より救主、卽我等の主イイススハリストスの來るを待つ。二一彼は萬物を已に服せしむるを得る能に因りて、我等の卑しき體を化して、其彼

の光榮の體に象れる者と爲るを致さん。

第四章

一 故に我が愛する所、慕ふ所の兄弟、我の喜、我の冕、我が至愛の者よ、斯く主に
在りて立てよ。二 我エワヂヤに勸め、シンヂヒヤに勸む、主に在りて意を同じくせんこ
とを。然り、親しき朋よ、我亦爾に求む、此の二の婦、我とクリメント、及び其餘の我の同
勞者、其名の生命の書に錄されし者と偕に福音に勞せし者に助けよ。四 爾等恒に主に
在りて、喜べ、又言ふ、喜べ。五 爾等の溫柔は衆人に知らるべし。主は近し。六 何事をも慮る
勿れ、乃凡の事に於て、祈禱、祈願、且感謝を以て、爾等の求むる所を神に告げよ、七 然らば
神の平安、凡の知識に超ゆる者は、ハリストスイイススに於て、爾等の心と爾等の念と
を守らん。八 之を究むるに、我が兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊きこと、凡そ義なること、
凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと、凡そ稱すべきこと、如何なる德、如何なる譽も、爾等之
を念へ。九 爾等が我に學びし所、受けし所、聞きし所、見し所は、之を行へ、然らば平安の神
は爾等と偕に居らん。一〇 爾等が已に復我を慮る意を起しゝは、我主に於て甚之を喜
ぶ、爾等先にも慮れり、唯機を得ざりしなり。一一 我乏しきに因りて此を言ふに非ず、蓋

遇ふ所を以て足れりとするを學べり。一二 我貧しきに居ることをも知り、富に居ることをも知る、凡の事に於て、飽くことにも、飢うることにも、豊なることにも、歉しきことにも、皆熟練せり。一三 我を堅むるイイススハリストスに由りて、我能せざる所なし。一四 然れども爾等は我が患難に與りて、行ひし所善し。一五 フィリッピ人よ、爾等知る、福音を傳ふる始、我がマケドニヤを出でし時、與ふること及び受くることに於て我に與りし者は、唯爾等のみにして、他の教會は一もなかりき。一六 爾等ヱサロニカにも、一次も、二次も、我の乏しきに供する爲に送れり。一七 我が之を言ふは、贈を求むるに非ず、乃爾等を益する實の繁からんことを求むるなり。一八 我一切を得て餘あり、我エパフロディトより爾等が送りたる諸物を、馨しき香、納れらるべき祭、神の悅ぶ所の者として受けて、滿ち足れり。一九 願はくは我の神は、其光榮の富に循ひて、ハリストスイイススに依りて、爾等が凡の需むる所を充たさん。二〇 願はくは光榮は神我等の父に無窮の世に歸せん、「アミン」。二一 爾等ハリストスイイススに在る衆聖徒に安を問へ。我と偕に在る諸兄弟は爾等の安を問ふ。二二 衆聖徒、特にケサリの家に屬する者は、爾等の安を問

ふ。三　願(ねが)はくは我等(われら)の主(しゅ)イエスキリストの恩寵(おんちょう)は爾等(なんぢら)衆(そも)と偕(とも)に在(あ)らんことを、「アミン」。

聖使徒パヱルがコロサイ人に達する書

第一章

一パヱル、神の旨に由りてイイススハリストスの使徒と爲れる者、及び兄弟
ティモヱイは、二書してコロサイに在る聖徒、ハリストスイイススに於て信なる諸兄弟
に達す。願はくは恩寵と平安とは、神我等の父及び主イイススハリストスより爾等に
賜はらんことを。三我等恒に爾等の爲に祈禱して、神、我等の主イイススハリストスの
父に感謝す。四是れ爾等がハリストスイイススに於ける信、及び衆聖徒に於ける愛、五
卽爾等が先に福音の眞の言の中に聞きし如く、天に爾等の爲に備へたる所に於け
る望に由る者を聞きたればなり。六此の福音は爾等の中に存すること、全世界に於け
るが如し、且果を結び、又蔓延すること、爾等の中に於て、爾等が之を聞きて、神の恩寵を
眞實に知りし日よりするが如し。七此れ爾等が我等の至愛なる同勞者、爾等の爲にハ
リストスの忠信の役者たる、エパフラスより學びしが如し。八彼は爾等が神に緣る愛
を我等に告げたり。九故に我等も之を聞きし日より、爾等の爲に絶ねず祈禱して、爾等

に、凡の智慧と神識とを以て、盡く神の旨を知るを得しめんことを求む、一〇 爾等が神に宜しき所の如く行ひて、凡の事彼を悦ばせ、凡の善事に於て果を結び、神を知る知識に長じ、一一 其光榮の權能に循ひ凡の力に堅められて、凡の事喜びて、忍耐恒忍せん爲なり。一二 我亦神父に感謝す、其我等を召して、諸聖徒と與に光明の業に分あらしむるを以てなり。一三 彼は我等を黑暗の權より拯ひて、其至愛の子の國に遷せり、一四 蓋我等彼に由りて、其血を以て贖罪の赦を得たり。一五 彼は見る可からざる神の像にして、萬物の先に生れたる者なり。一六 蓋萬物は彼に由りて造られたり、天に在る者、地に在る者、見る可き者、見る可からざる者、或は寶座、或は主制、或は首領、或は權柄、一切彼を以て、且彼の爲に造られたり。一七 彼は萬物より先にして、萬物は彼に由りて立つ。一八 且彼は其體たる敎會の首なり、彼は元始にして、死の中より首めて生れたる者なり、其萬事に於て首たらん爲なり。一九 蓋父の喜ぶ所は、彼の中に凡の充滿の存在し、二〇 且彼に由りて、其十字架の血を以て、地に在る者をも天に在る者をも復和せしめて、彼に由りて、一切を己に和せしむるに在り。二一 爾等素遠ざかりて、意念を以て惡しき

行を以て敵たりし者をも、二二今彼の肉の體を以て、其死に由りて和せしめたり、爾等を、聖にして疵なく責なき者として、己の前に立たしめん爲なり。二三爾等若し信の基に立ちて、動きなく止り、福音の望より移らずば、必之を得ん、此の福音は卽爾等の聞きし所、天下の悉くの受造物に傳へられし所、我パワルが其役者と爲りし所の者なり。二四今我爾等の爲に受くる所の苦を喜び、且我が肉體に於て、ハリストスの體、卽教會の爲に、我に缺くる所のハリストスの患難を補ふ。二五我は爾等の爲に我に託せられし神の定制に循ひて、教會の役者と爲れり、神の言、二六卽歷世歷代に隱され、今彼の聖徒に顯されたる奧義を徧く傳へん爲なり。二七神は此の聖徒に、異邦人の中に於て此の奧義の光榮の富の如何なるを、知らしめんと欲せり、是は卽ハリストス爾等の中に在り、光榮の望なり。二八我等彼を傳へて、凡の人を諭し、悉くの智慧を以て之を誨ふ、凡の人をハリストスイイススに於て、完全なる者として、立たしめん爲なり。二九我此が爲に其大能を以て、我が衷に行爲する力に循ひて、勞苦勤勉するなり。

第二章

一我爾等の爲、ラチディキヤとイエラポリとに居る者の爲、及び凡そ肉體に於

て未だ我が面を覩ざりし者の爲に、如何に心勞するかを、爾等が知らんことを欲す。二
願はくは彼等の心は愛に和合せられて、完全なる穎悟の富を得、神父及びハリストス
の奥義を知りて、慰を受けんことを、三智慧と知識との一切の寶は、ハリストスの中に
隱るゝなり。四我が此を言ふは、人が巧なる言を以て、爾等を惑はさざらん爲なり。五
蓋我身は偕に居らずと雖、神は爾等と偕に居りて喜び、爾等の秩序、及び爾等かハリ
ストスに於ける信の堅きを見るなり。六故に爾等が主ハリストスイイススを受けし
如く、彼に在りて行へ、七彼の中に根を深くし、堅く建てられ、爾等が教へられし如く信
に堅固になり、之に增長じて感謝せよ。八兄弟よ、愼め、人が、ハリストスに循はずして、
人の遺傳に循ひ、世の元行に循ふ理學と空術とを以て、爾等を惑はさざらん爲なり。九
蓋神性の充滿は、悉く實體を以てハリストスに居るなり。一〇爾等も彼、卽凡の首
領權柄の首たる者に在りて、充滿せられたり。一一彼に在りて、爾等は亦手を以てせ
ざる割禮を受けたり、卽肉身の罪の體を脫ぐ所のハリストスの割禮なり。一二洗禮
を以て、爾等は彼と偕に葬られて、亦彼を死より復活せしめし神の力を信ずるを以て、

彼と偕に復活せり。一三 爾等嘗て諸罪と身に割禮なきさに因りて死せし者を、神は彼と偕に生かして、我等に悉くの罪を赦し、一四 我等に對する禮儀の書を抹し、彼は之を中間より取りて、十字架に釘せり。一五 首領權柄よりも力を奪ひて、彼は顯に之を曝しめ、十字架を以て彼等に勝てり。一六 是を以て食物、或は飲物、或は節期、或は新月、或は安息日の故に縁りて、人爾等を議す可からず、一七 此れ皆將來の者の影にして、實體はハリストスに在り。一八 何人も任意の謙遜と、天使等に奉事することさを以て、爾等を欺くべからず、彼等は未だ見ざる事を窺ひ、己の肉の智慧を以て妄に誇り、一九 首に倚らず、盖全體は首より、諸の節と維さに由りて、相助け相繋がりて、神の生長を以て長ずるなり。二〇 故に爾等、若しハリストスさ偕に、世の元行の爲に死せしならば、何ぞ世に居る者の如く禮儀に遵ふ、二一 即ち觸るゝ勿れ、嘗むる勿れ、捫る勿れさ、二二 此等皆用ゐるに因りて朽つ、是れ人の誡と教さに遵ふなり、二三 此れ唯智慧の外表にして、任意の奉事と謙遜と、身を惜まざることさ及び肉體を養ふを重んぜざるに在り。

第三章

一 故に爾等若しハリストスと偕に復活せしならば、上にハリストスの神の右に坐する處の事を尋ねよ。二上に在る事を以て念とし、地に在る事を以てする勿れ。三蓋爾等は死し、爾等の生命はハリストスと偕に神の中に藏れたり。四爾等の生命たるハリストスの現れん時、爾等も彼と偕に光榮の中に現れん。五故に爾等の地に在る肢體を殺せ、即淫行、汚穢、邪僻、惡慾、及び貪婪、即拜偶像是なり、六此等の爲に神の怒は悖逆の子に臨むなり。七爾等も曩に、彼等の中に居りし時、之を行へり。八今は爾等も忿怒、恚恨、謗讟、爾等の口より出す愧づべき言、一切之を去れ、九互に謊を言ふ勿れ、舊き人をその行ひと共に脱ぎて、一〇新なる人、即彼を造りし者の像に循ひて知識の改めらるゝ者を衣たり。一一此には希利臣人及びイウデヤ人、割禮及び無割禮、夷狄及び奴隸及び自主の者無し、即ハリストスは一切なり、及び一切の中に在り。一二故に爾等神の選を蒙りし、聖にして愛せらるゝ者さながら、憐憫、仁愛、謙遜、温柔、恒忍を衣よ、一三若し互に責むべき事あらば、相恕し、相敎せ、ハリストスの爾等を敎しゝ如く、爾等も此くの如くせよ。一四凡そ此等の上に愛を衣よ、是れ完備の總綱な

り。一五 且神の平安は爾等の心の中に宰たるべし、爾等は一體に於て之に召されたり、爾等又恩に感ぜよ。一六 ハリストスの言は豐に爾等の中に居るべし、凡の智慧を以て相誨へ、相儆め、聖詠と歌頌と靈神の詩賦とを以て、恩寵に由りて、爾等の心に和して、主を讃美せよ、一七 爾等が凡そ爲す所の事、或は言、或は行、皆主イイスス ハリストスの名に因りて之を爲し、彼に由りて神父に感謝せよ。一八 婦よ、爾等の夫に服へ、主に在りて宜しき所の如くせよ。一九 夫よ、爾等の婦を愛せよ、苛く之を待ふ勿れ。二〇 子よ、凡の事に於て爾等の父母に順へ、蓋此れ主の悦ぶ所なり。二一 父よ、爾等の子を怒らしむる勿れ、其氣の餒ゑざらん爲なり。二二 僕よ、凡の事に於て、肉體に屬する爾等の主に順へ、人の悦を取る者の如く、第目の前に於てするのみならず、乃樸直なる心を以て、神を畏れて勤めよ、二三 凡そ爾等の爲す所は、心より之を爲し、人に於けるが如くせずして、主に於けるが如くせよ、二四 爾等主より嗣業の報を受けんことを知ればなり、蓋爾等はハリストスに勤む。二五 非義を行ふ者は、亦非義の報を受けん、主は偏視すること無し。

第四章

一 主なる者よ、義と公平とを以て僕に施せ、天には爾等にも主あることを知

ればなり。二 祈禱に恒にして、之に敬醒し、且感謝せよ。三 亦我等の爲にも祈禱せよ、神が
我等に言の門を開きて、ハリストスの奥義、我が縲絏に在る所以の者を言はしめん爲、
四 我が之を言ふべきが如く、我をして之を顯さしめん爲なり。五 智慧を以て、且機に乘
じて、外の者に行へ。六 爾等の言は恒に恩を以てし、且鹽を調和すべし、爾等が何如にか
各人に答ふべきを知らん爲なり。七 至愛の兄弟、主に在りて忠信なる役者及び同勞者
ティヒクは、我の事を悉く爾等に告げん。八 我特に此が爲に彼を爾等に遣せり、彼が爾等
の事を知り、且爾等の心を慰めん爲なり。九 彼と偕に我等の忠信にして至愛なる兄弟
オニシム、爾等の中の一人の者を遣せり。彼等は此の處の事を悉く爾等に告げん。一〇
我と偕に囚と爲れるアリスタルフ、及びワルナワの甥マルコは爾等の安を問ふ、マル
コの事に關しては、爾等曾て命を受けたり、若し彼爾等に來らば、之を接けよ、一一 又イ
イスス、稱してイウストと云ふ者は、爾等の安を問ふ、彼等は割禮を受けし者なり。唯彼
等のみ、我と共に神の國の爲に勞して、我の慰と爲れり。一二 爾等の一人なるエパフラ
スイイススハリストスの僕は、爾等の安を問ふ彼は恒に務めて爾等の爲に祈禱し、爾

等が全備にして立ち、悉くの神の旨を全く守らんことを請ふ。一三 我彼の爲に證す、彼は爾等及びラヲディキヤとイエラポリとに在る者の爲に甚熱心す。一四 至愛なる醫師ルカ、及びディマス爾等の安を問ふ。一五 爾等ラヲディキヤに在る諸兄弟、及びニムファンと其家の教會とに安を問へ。一六 此の書、爾等之を讀みて後、ラヲディキヤの教會も之を讀まんことを至せ、ラヲディキヤよりする書は、爾等も之を讀め。一七 アルヒップに告げよ、爾が主に在りて受けし所の職を愼みて、之を盡せと。一八 我パワル手づから安を問ふ。我の縲絏を念へ。願はくは恩寵は爾衆と偕に在らんことを「アミン」。

聖使徒パヱルがヱサロニカ人に達する前書

第一章

一パヱル、及びシルアン、及びテモヱイは、書して、神父及び主イイススハリス
トスに在るヱサロニカの教會に達す。願はくは恩寵と平安とは、神我等の父及び主イ
イススハリストスより爾等に賜はらんことを。二我等は爾等を我が祈禱の中に記憶
して、恒に爾等衆の爲に神に感謝す。三是れ爾等が神我等の父の前に在る信の行、愛
の勞、我等の主イイススハリストスに於ける望の忍耐を、絶えず念ひ、四且神に愛せら
るゝ兄弟よ、爾等の選を知るに因りてなり。五蓋我等の福音は爾等の中に言を以てせ
しのみならず、乃能を以てし、聖神を以てし、多くの保證を以てせり、爾等自ら、我等が
爾等の中に在りて、爾等の爲に如何なる者たりしかを知るが如し。六而して爾等は我
等及び主に效ふ者と爲り、多くの患難の中に、聖神の喜を以て、言を受けて、七凡そマケ
ドニヤ及びアハイヤの中に信ずる者の爲に模範と爲るに至れり。八蓋主の言は爾等
より唯マケドニヤ及びアハイヤに響きしのみならず、乃凡の處に於て爾等が神に

於ける信は傳はりて、我等何事をも言ふを要せざるに至れり。九蓋彼等自ら我等の
事を述べて、我等が如何に爾等の中に入り、爾等が如何に偶像より神に歸して、生ける
眞の神に事へ、一〇天より其子、彼が死より復活せしめしイイスス、我等を將來の怒よ
り拯ふ者の來るを待つことを言ふ。

第二章

一兄弟よ、爾等自ら我等が爾等の中に入りしことの徒然ならざるを知る、二
乃我等は、爾等の知れる如く、先にフィリッピに於て苦を受け、且辱しめられて後、我等の神
に賴りて、毅然として、多くの勤勞を以て爾等に神の福音を傳へたり。三蓋我等の勸諭
は惑よりするに非ず、邪よりするに非ず、譎よりするに非ず。四乃神が我等を試みて、福
音を託するに堪ふる者と爲しゝ如く、我等斯く之を言ふ人の喜を取るが如くならず、
乃我等の心を試みる神の喜を取るが如し。五蓋爾等の知れる如く、我等未だ曾て爾
等の前に諛の言を出さず、又何の事に於ても貪ることをせず、神は證者なり。六我等は
人よりする光榮を爾等よりも他人よりも求めず。七我等はハリストスの使徒として、
威嚴を示すを得べかりしと雖、爾等の中に溫柔なりしこと、乳母の其子を愛育するが

如し。八斯く我等は爾等を慕ひて、第神の福音のみならず、我等の靈も爾等に與へんことを望めり、蓋爾等は我が至愛の者と爲れるを記念す、爾等の中一人をも累はさざらん爲に、我等夜晝工を作して、爾等の勞苦と勤勉とを記念す、爾等の中一人をも累はさざらん爲に、我等夜晝工を作して、神の福音を爾等に傳へたり。一〇爾等及び神は證す、我等如何に聖潔、公義、無玷にして、爾等信ずる者の中に行ひしを、一一蓋爾等は知ろ、如何に我等は、父が其子に於けるが如く、爾等各人に、一二爾等を其國と光榮とに召しゝ神に合ひて行はんことを勸め、勵まし、求めしを。一三故に我等も、爾等が我等より聞きし神の言を受けて、之を人の言の如くならず、乃神の言の如く受けしを、神に感謝して息めず、是れ誠に神の言にして、爾等信ずる者の中に力行するなり。一四蓋兄弟よ、爾等はイウデヤに在るハリストスイイスにある神の諸教會に效ふ者と爲れり、爾等も、彼等がイウデヤ人より受けし如き苦を、己の同族より受けたればなり。一五イウデヤ人は主イイスと其預言者とを殺し、我等を逐ひ出し、神の悦を取らず、悉くの人に逆ひ、一六我等が異邦人を訓へて救を得しむるを拒む、是くの如く常に己の罪の量を盈たす、然れど王極の怒は彼等に臨め

り。一七兄弟よ、我等暫く面を以てし、心を以てせずして、爾等を離れて、愈切に望みて、爾
等の面を見んことを務めたり。一八故に我等、即我パヱル、一次又二次、爾等に至らん
と欲したれども、サタナ我等を阻みたり。一九蓋誰か我等の望、或は喜、或は誇の冕
たる。爾等も我等の主イイススハリストスの前に、其降臨に於て此れなるに非ずや。二
○蓋爾等は我等の光榮及び喜なり。

第三章

一故に我等復忍ばずして、獨アフィニに留るを意に定め、二我が兄弟、神の役者、
ハリストスの福音に於ける我等の同勞者たる、ティモヱイを遣せり、爾等を堅め、爾等の
信に於て爾等を慰めん爲、三一人も此の患難に在りて搖かざらん爲なり、爾等自ら我
等が此に定まりたるを知ればなり。四蓋我等は爾等の中に在りし時、我等が難に遇は
んことを預め爾等に告げたりしが、果して是くの如く成れり、爾等之を知る。五故に我
も復忍ばずして爾等の信を知らん爲に遣せり、恐らくは試誘者爾等を誘ひ、而して我
等の勞は徒然ならん。六今はティモヱイ爾等より我等に來りて、我等に爾等の信と愛と
の嘉音を報じ、又爾等が常に懇に我等を念ひ、我等の爾等に於けるが如く、我等を見

んと欲するを告げたり、七故に兄弟よ、我等は我が凡の患難急迫の中に於て、爾等の信に由りて、爾等の爲に慰を得たり、八蓋爾等主に於て堅く立つに因りて、我等今生く。九我等は爾等の爲、凡そ我等の神の前に爾等に因りて喜ぶ所の喜の爲に、如何なる感謝を神に歸するを得んか。一〇夜晝切に禱るは、爾等の面を見、及び爾等が信の足らざる所を補はんことなり。一一願はくは神我等の父、及び我等の主イエスが、親ら我等の途を爾等に向はしめん。一二願はくは主が凡の人に於ける愛を增し、且滿たして、我等が爾等に於けるが如くせんことを、一三爾等の心を聖潔無玷にして、神我等の父の前に、我等の主イエスがその衆聖者と偕に來らん時に、立たしめん爲なり、「アミン」。

第四章　一之を究むるに、兄弟よ、我等イエスに因りて請ひ勸む、爾等は既に如何に行ひ、及び神を悅ばしむべきを我等より受け、且之を行ふに由りて、益〻之に進歩せよ、二爾等は我等が主イエスに由りて、如何なる誡命を爾等に授けしを知ればなり。三蓋神の旨は、爾等の聖潔なり、即爾等が自ら淫行を戒むるに

在り、四爾等が各己の器を守るに、聖潔尊貴を以てして、五神を識らざる異邦人の如
く、情慾を以てせざるを知るに在り、六又何事に於ても、己の兄弟に對して、法に違ひ、利
を貪りて行はざるに在り蓋主は凡そ此等の爲に報を爲す者なり、我が先に爾等に言
ひ且證せしが如し。七蓋神の我等を召しゝは、汚穢の爲に非ず、乃聖潔の爲なり。八故
に拒む者は、人を拒むに非ず、乃我等に其聖神を與へたる神を拒むなり。九兄弟の愛
に至りては、我が爾等に書するを要せず、爾等自ら相愛することを神より教へられた
ればなり、一〇蓋爾等果して是くの如く全マケドニヤに在る諸兄弟に行ふ。兄弟よ、
我等爾等に勸む、益此に進歩し、一一且務めて安靜を守り、己の事を行ひ、手づから工
を作さんことを、我が爾等に戒めしが如し、一二爾等の行が外の人の前に端正にして、
亦自ら乏じきことなからん爲なり。一三兄弟よ、寢りし者に至りては、我爾等が知らざ
るを欲せず、爾等が望なき他の者の如く哀しまざらん爲なり。一四蓋若し我等イイス
スの死して復活せしことを信ぜば則神はイイススに在りて寢りし者をも彼と偕
に攜へん。一五蓋我等主の言を以て爾等に語ぐ、我等、生きて主の來る迄存する者は、寢

りし者に先だたざらん、一六蓋主親ら號令と、天使首の聲と、神の籥に伴はれて降らん、而してキリストスに在りて死せし者は先づ復活せん、一七其後我等生きて存する者は、彼等と偕に雲に擧げられて、主を空中に迎へん、是くの如くして常に主と偕に居らん。一八故に爾等此等の言を以て互に慰めよ。

第五章　一兄弟よ、時及び期に至りては、我が爾等に書すろを要せず、二蓋爾等自ら、主の日の來らんこと、明に知ろなり。三蓋人が平安無事なりと謂はん時、滅亡は忽彼等に至らん、產苦の妊めろ婦に於けろが如し、彼等避くろを得ざらん。四然れども兄弟よ、爾等暗に在らずして、其日を盜の如く爾等に及ばしめざらん。五蓋爾等皆光の子、晝の子なり、我等は夜の者、暗の者に非ず。六故に他人の如く寢ぬ可からず、乃敬醒謹愼すべし。七蓋寢ぬろ者は夜に寢れ、醉ふ者は夜に醉ふなり。八我等は晝の子なるに因りて、信と愛との胸當を衣て、謹愼すべし。九蓋神は我等を怒の爲に定めしに非ず、乃我主イエスキリストスに由りて救を得しめん爲なり、一〇彼は我等の爲に死せり、我等儆醒するも、寢ぬろも、彼と偕

に生きん爲なり。一一 故に爾等互に慰め互に德を建てよ、爾等の已に行ふ所の如し。一二 兄弟よ、我等爾等に求む、爾等の中に勞し、主に在りて爾等を認めて、一三 彼等の工の爲に彼等を尊びて、篤く愛せよ。爾等互に睦しくせよ。一四 兄弟よ、我等爾等に勸む、妄行なる者を戒め、氣餒ゑたる者を慰め弱き者を扶け、衆人を待つに寛忍を以てせよ。一五 愼みて惡を以て惡に報ゆる毋れ、常に互に善を追ひ、又之を衆人に及ぼせ。一六 常に喜べ。一七 禱めずして斬れ。一八 凡の事感謝せよ、蓋是れ爾等の爲にイエスに頼るイエスの旨なり。一九 神を熄す毋れ。二〇 預言を藐んずる毋れ。二一 凡の事を察して、善き者を執れ。二二 凡の惡の類に離れよ。二三 願はくは平安の神は親ら爾等を全く聖にし、爾等の神さ靈さ體さは全うし譴められて、我等の主イエススハリストスの降臨の時に疵なからん。二四 爾等を召す者は誠信なる者にして、彼は之を行はん。二五 兄弟よ、我等の爲に祈れ。二六 聖なる接吻を以て悉く兄弟の安を問へ。二七 我主を以て爾等に此の書を悉く聖兄弟の前に讀まんことを誓はしむ。二八 願はくは我等の主イエススハリストスの恩寵は爾等さ偕に在らんことを。「アメン」。

聖使徒パウルがテサロニカ人に達する後書

第一章

一パウル及びシルアン、及びテモテオ、テサロニカの教會に達す。二願はくは恩寵と平安とは、神我等の父及び主イエスキリストより爾等に賜はらんことを。三兄弟よ、我等爾等の信は大に長じ、爾等恒に爾等衆の中に各人の相互の愛は彌増すべし、是れ宜しきに合ふなり。蓋爾等は諸教會の中に誇るに至れり、蓋爾等は凡の窘逐患難を受くるなり。五此れ爾等が苦みて待つ所の神の國を得しめん爲に、神の義なる審判あらんことの明なる徴なり。六蓋爾等苦しむる者に、我等と偕に安悦を以て報ゆるは神の前に義なるなり、是れ主イエスの天より、其能力の天使等と偕に、現るゝ時に在り。八彼は火燄を以て、神を識らざる者及び我等の主イエスの福音に服はざる者に、報を與ふ、九彼等は主の顔及び其大能の光榮より永遠の滅の罰を受けん、一〇即

彼が來りて、其日に諸聖者の中に光榮を得衆信者の中に威嚴を顯さん時に在り、爾等
が我等の證を信ぜしが如し。一一此に由りて、我等恒に爾等の爲に祈禱して、我等の神
が爾等を召に任ふる者と爲し、且大能を以て凡の仁愛の善旨と信の功とを成就せん
ことを求む、一二我等の主イイススハリストスの名は爾等の中に、爾等も彼の中に於
て、我等の神及び主イイススハリストスの恩寵に依りて、榮せられん爲なり。

第二章

一兄弟よ、我等の主イイススハリストスの臨むこと、及び我等が彼に集るこ
とに就きては、我等爾等に求む、二爾等或は神に由り、或は言に由り、或は我等の遺れる
に似たる書に由りて、ハリストスの日今已に至ると云ふを以て、輒く心を動かし、且怖
るゝなからんことを。三人何の法を以ても、爾等を惑はすべからず、蓋反離は先に來ら
ず、且不法の人、淪亡の子、四背逆の者、自ら高くして、凡そ神或は拜まるゝ者と稱する者
に超ゑ、甚しきに至りては、神の如く神殿に坐し、己を示して神と爲す者現れずば、其日
至らざらん。五我が尚爾等の中に在りし時、此を爾等に言ひしを、爾等記憶せざるか。六
爾等今彼を捉むる者を知る、彼が其時に至りて現れん爲なり。七蓋不法の秘密は已に

行はる、唯今に於て之を捉むる者が中間より除かるゝに至るまでは、成就する能はず。
八 其時に不法の者現れん、主イエスは己の口の氣を以て彼を殺し己の降臨の現を以て廢せん。九 其來るはサタナの行爲に循ひて、凡の僞の異能と、奇蹟と、
一〇 且凡の不義の詭譎を以て亡ぶる者の中に在らん、蓋彼等は己の救の爲に眞實の愛を受けざりき。一一 是の故に神は彼等に迷謬の行爲を遣して、彼等が誑を信ずる
一二 然れども主に愛せらるゝ兄弟よ、我等は爾等の爲に恒に神に感謝すべし、蓋神は始より、神の成聖と眞實を信ずる信とに因りて、爾等を救の爲に選び、一四 我等の福音を以て、爾等を此に召せり、我が主イエスキリストの光榮を得ん爲なり。一五 兄弟よ、故に爾等堅く立ちて、我等の言、或は書を以て教へられし所の傳を守れ。一六 願はくは我が主イエスキリスト及び神我等の父、我等を愛して、其恩寵に由りて、永遠の慰と善き望とを賜ひし者は、一七 親ら爾等の心を慰めて、爾等を凡の善言善行に堅めん。

第三章

一 終に言ふ、兄弟よ、我等の爲に祈禱せよ、主の言の疾く廣まりて、榮せらるゝ

ここ爾等の中に於けるが如く、二且我等が非理及び悪なる人人より救はれん爲なり、蓋人皆信あるには非す。三然れども主は信なり、彼は爾等を堅めて、凶悪者より護らん。四我等主に頼りて爾等の事を確信す、爾等が我等の命ずる所を行ひ、且行はんことを。五願はくは主は爾等の心を神の愛、及びハリストスの忍耐に導かん。六兄弟よ、我等ハリストスの名を以て、爾等に命ず、凡そ妄に行ひて、我等より受けし所の傳に循はざる兄弟より遠ざかれ。七蓋爾等自ら如何に我等に效ふべきを知る、我等は爾等の中に在りて妄なる事を爲さざりき、八亦何人にも徒食せざりき、乃勞さ苦さを以て、夜晝業を作せり、爾等の中の一人をも累はさざらん爲なり、九此れ我等に權なきが故に非す、乃己を模範として爾等に與へて、我等に效はしめん爲なり。一〇蓋我等爾等の中に在りし時、此を以て爾等に命ぜり、人若し業を作すこを欲せずば、食ふ可からず。一一今聞くに、爾等の中或者は妄なる事を行ひ、何事をも爲さず、唯よじ餘事を務む。一二此くの如き者に我等は、我が主イイススハリストスを以て、命じ且勸む、安靜に業を作して、己の餅を食はんことを。一三

一四 若し此の書に言ふ所の我等の言を聽かざる者あらば、彼を誌して、與に交る勿れ、彼を辱しめん爲なり。一五 然れども彼を敵の如くする勿れ、乃兄弟の如く訓へよ。一六 願はくは平安の主親ら恒に凡の事に於て爾等に平安を賜はん。願はくは主は爾等衆と偕に在らん。一七 我パヱル手づから爾等の安を問ふ、書毎に之を以て誌と爲す、我が書する所此くの如し、一八 願はくは我等の主イイススハリストスの恩寵は爾等衆と偕に在らんことを、「アミン」。

聖使徒パウルがテモテイに達する前書

第一章

一 パウル、神我等の救主及び主イエス・キリストスの使徒と爲れる者は、二 書して信に於て我が眞の子なるテモテイに達す。願はくは恩寵と慈憐と平安とは、神我等の父及びキリストスイエスに留りて、或人人に誡めて、異なることを教ふるなく、四 又虚誕及び窮りなき系圖、卽神に於ける信の建立よりも多く爭論を生ずる者に、意を用ゐざらしめんことを求めしが如く、今も亦然り。五 誡の目的とする所は愛なり、乃潔き心と、玷なき良心と、僞なき信とに由る者なり。六 或者は此に違ひて、虚しき論に轉じ、七 教法師と爲らんと欲して、自ら其言ふ所斷むる所を知らず。八 我等は律法の善きを知る、惟人法に循ひて之を用ゐるに在り、九 蓋知る、律法は義人の爲に設けたるに非ず、乃不法の者、不服の者、不虔の者、罪惡の者、放肆の者、不潔の者、父母を弑する者、人を殺す者、一〇 淫行の者、男色の者、人を

讀む者、誰を言ふ者、曾に背く者、及び其他健全なる教に悖る事の爲に設けたるなり、
一一　我に託せられし洪福なる神の光榮の福音に循へるなり。一二　我リストイエス我等の主に感謝す、其我を忠なる者と視て、役事の職に任ぜしに因行ひし故に、矜恤を蒙りたり。一四　我が主の恩寵は、ハリストイエスに於ける信及び愛と共に豐に我の内に顯れたり。一五　ハリストイエスは罪人を救はん爲に世に來れり、此信なる、全く受くべき言なり、罪人の中我第一なり。一六　然れども我に於て全き寛忍を示して後、彼を信じて永遠の生命を得んと欲する者の模範と爲さん爲なり。一七　願はくは尊敬と光榮とは、萬世の王、壞る可からざる獨一智慧の神に、無窮の世に歸せん、「アミン」。一八　吾が子テモテよ、我爾に、曾て爾を指しゝ、預言に符ひて、此の誡を託す、爾が預言に循ひ、信と玷なき良心とを保ちて、善き戰をん爲なり。一九　蓋或者は良心を棄てゝ、其信を溺らせり、二〇　其中にイメナイ及びアレキサンドルあり、我彼等をサタナに

付せり、彼等が神を譴らざることを學ばん爲なり。

第二章　一　故に我凡の事に先だちて勤む、衆人の爲、帝王、及び凡そ權ある者の爲に、祈禱、祈願、懇求、感謝を爲さんことを、二我等が全き敬虔と聖潔とを以て、平安にし靜なる生を度らん爲なり、三蓋此れ我等の救主神の前に善にして納れらるゝ事なり、四彼は衆人が救を得、及び眞實を知るに至らんことを欲す。五蓋神は一なり、神と人との間には中保者も亦一なり、乃人ハリストスイエスス、六衆人の贖の爲に己を與へし者なり。此の證は其期に於て已に在りき、七我之が爲に立てられて、宣傳者と爲り、使徒と爲り、ハリストスに在りて眞實を言ひて謊らず、信と眞實とを以て異邦人を教ふる師と爲れり。八故に我望む、男は潔き手を擧げて、怒なく、疑なく、何の處にも祈禱を爲さんことを。九女も亦宜しきに合ふ衣を以て、廉耻貞潔にして自ら飾ること、或は金、或は眞珠、或は高價なる衣を以てせず、一〇乃神に事ふることを約せし女に稱ふが如く、善行を以てせんことを。一一女は幽靜にして、全く順ひて學ぶべし。一二女に教ふることと、又男の上に權を執ることとを許さず、乃幽靜なるべし。一三蓋アダムは

前に造られて、エヴは後なり。一四 且アダムは誘はれしに非ず、乃婦は誘はれて罪に陥れり、一五 然れども若し信と愛と聖と貞潔とに居らば、子を産む事を以て救を得ん。

第三章 一 信ずべき言、人若し監督の職を得んと欲せば善き事を望むなり。二 唯監督は、責む可き所なく、一婦の夫たるべく、謹慎、廉節、端正たるべく、教訓を施し、三 酒を好まず、人を殴たず、汚利を圖らず、温和にして、爭を好まず、財を貪らず、四 善く其家を齊へ、凡の端荘を以て其子女を順従せしむべし、五 蓋其家を齊ふる を知らざる者は、如何にして神の教會を理むるを得ん。六 新に教に進みし者たるべからず、恐らくは誇りて、惡魔と同じく審判に服せん。七 亦外の人より善く證せらるゝ者たるべし、恐らくは誹毀及び惡魔の網に陥らん。八 役事も亦端荘にして、二舌ならず、酒を嗜まず、汚利を貪らず、九 潔き良心に信の奥義を保つ者たるべし。一〇 是くの如き者は、先づ之を試みて、若し責むべき所なくば、則役事の職に當つべし。一一 婦も亦端荘にして、凡の事に忠信なる者たるべし。一二 役事は一婦の夫にして、善く其子女と其家とを理むる者たるべし。一三 蓋善く役事せし者は、己の爲に、上

級と、ハリストスイイススに由る所の信に於ける大なる勇敢とを得るなり。一四我
速に爾に至らんことを望めども、此を書して爾に達す、一五我若し遲はらば、爾が如
何に神の家、即活ける神の教會、眞實の柱及び固なる者に、行ふべきを知らん爲なり。
一六論なく、敬虔の奥義は大なり、神は肉體に顯れ、神に由りて義とせられ、天使等に見
られ、諸民に傳へられ、世界に信ぜられ、光榮の中に擧げられたり。

第四章

一神は明に言ふ、後世或人人信を離れて、誘惑の諸神、及び魔鬼の教を納るゝ
あらん、二是れ其良心の烙かれたる虚言者の僞善に由りてなり。三彼等は嫁娶を禁じ、
信じて眞實を知る者が感謝して食はん爲に神の造りたる食品を斷つことを命ず。四
蓋悉くの神の造物は善にして、棄つべき者なし、惟感謝して之を受くべし、五神の言
と祈禱とを以て聖にせらるゝが故なり。六爾此等を兄弟に勸めば、イイススハリスト
スの良き役者、信の言及び爾が從ひし善き教に育はるゝ者と爲らん。七卑しき虚説及
び老婦の奇談を避けよ、自ら敬虔に練習せよ。八蓋肉體の練習は益少し、惟敬虔は一切
の事に益ありて、現在及び未來の生命の許約を得るなり。九此れ信なる全く受くべき

言なり。一〇蓋我等は此が爲に勞して誘を受く、乃ち活ける神に望あるに因りてなり、彼は悉くの人、特に信者の救主なればなり。一一爾此等の事を戒め且教へよ。一二人爾の年少きを以て輕んずべからず、乃爾言に行に愛に神に信仰に潔淨に於て信者の模範となれ。一三讀書と勸論と教訓とを務めて我が來るを俟て。一四爾に在る恩賜、預言に由りて、長老の按手を以て爾に授けられし者を忽にする勿れ。一五此等の事を慮り、恒に之に居て、爾の上達が衆に顯れん爲なり。一六己と教ふる事とを愼め、恒に之に居よ、斯く行ひて、爾は己及び爾に聽く者を救はん。

第五章　一老人を嚴むること勿れ、乃彼に勸むること父に於けるが如くせよ、少き者には兄弟に於けるが如く、二老女には母に於けるが如く、少き女には凡の潔淨を以て姉妹に於けるが如くせよ。三孀婦を敬へ、卽眞の孀婦なる者を。四然れども若し孀婦に子或は孫あらば、彼等先づ己の家に孝敬を行ひ、其親に恩報ゆる事を學ぶべし、蓋是れ美にして神の前に納れらるべき事なり。五眞の孀婦にして獨なる者は、神を頼みて晝夜祈禱祈願を爲す、六然れども樂を縱にする者は、生くるも、死せるなり。七爾此を以て彼等を戒めて、責

むべき所なからしめよ。八人若し己に屬する者、殊に己の家族を顧みずば、信に背き、不
信者よりも惡しき者なり。九嫠の籍に登せらるゝは、六十歳より少からず、一夫の婦たり
し者、一〇善行を以て證せらるゝ者、若くは子女を育て、若くは遠人を館し、若くは聖徒
の足を濯ひ、若くは患難の人を助け、若くは凡の善事に從ひし者たるべし。一一然れど
も少き嫠を受くる勿れ、蓋彼等ハリストスに背きて、心を亂す時は、復嫁がんと欲す。一
二彼等は罪に定められん、其初の信を棄てし故なり。一三且彼等は間暇にして、人の家
を廻るを習ひ、第間暇なるのみならず、亦多言を爲し、見聞を好み、言ふべからざる事を
言ふなり。一四故に我少き嫠の復嫁ぎ、子を生み、家を齊へ敵に一も譏るべき機を與へ
ざらんことを欲す。一五蓋彼等の中には已に轉じてサタナに從ひし者あり。一六若し
信男或は信女に嫠あらば、之を養ふべし、教會を煩はす可からず、之をして眞なる嫠を
養ふを得しめん爲なり。一七善く治むる長老は、倍して之を敬ふべし、言と教とを以て
勞する者には、殊に然すべし。一八蓋書に云く穀物を踐み落す牛には口を閉づる勿
れ、又云く、勞する者其値を得るは宜しきなりと。一九長老を訟ふることあらば二三の

證者あるに非ずば、之を受くる勿れ。二〇 罪を犯す者を衆の前に責めよ、他の者も懼を
抱かん爲なり。二一 我は、神及び主イイススハリストス、及び其選びたる天使等の前に
於て、爾に戒む、此を守りて預見を執る勿く、一も偏視して行ふ勿らんことを。二二 遽に
何人にも手を按する勿れ、人の罪に與る勿れ。自ら潔きを守れ。二三 是より水のみを飲
む勿れ、乃少しく酒を用ゐよ、爾の腹の爲、及び爾が屢疾むに因りてなり。二四 或人の罪
は明にして、直に審を受けしめ、或人の罪は後に顯る。二五 是くの如く善行も亦明なり
然らざる者も隱るゝ能はず。

第六章

一 凡そ軛の下に在る僕は、己の主を以て全く敬ふべき者と爲すべし、神の名
と教との謗られざらん爲なり。二 信者たる主に屬する僕は、其兄弟なる故を以て、之を
輕んずべからず、乃益勤むべし、其信者にして、愛せらるゝ者、恩寵に與る者たるに因
りてなり。爾此等を教へ且勸めよ。三 異なることを教へ、我等の主イイススハリストス
の醇正なる言、及び敬虔の教に從はざる者は、四 自ら驕り、知る所なく、討論爭辯の病あ
り、之よりして娼嫉、分爭、訕謗、惡しき疑、五 又智慧を亂し、眞實を失ひ、敬虔を以て利を

獲ろ者なりと意ふ人の空論は生ず。明是くの如き者より遠ざかれ。六敬虔にして、足ることを知るは、大なる利なり。七證我等は何者をも之より攫へ去ろを得ざること明なり。八食あり、衣ありて、我等足れりと爲すべし。九富を得んと欲する者は、誘に、網に、人を災難と沈淪とに溺らす所の無智にして害ある多くの慾に陥るなり。一〇蓋利を貪るは萬惡の根なり、或者は之に耽りて、信より離れ、多くの苦を以て自ら刺せり。一一神の人よ、爾此等を避けて、義、敬虔、信、愛、忍耐、温柔を追へ。一二信の善き戦を戦ひ、永遠の生命を執れ、爾はこれに之に召されて、多くの證者の前に善き承認を作せり。一三我萬有に生を施す神の前、及びポンテイピラトに對して善き承認を證せしハリストスイエスの前に於て爾に命ず、一四玷なく、責むべきなく、我等の主イエスハリストスの顯現を守らんことを。一五神は其期に顯現に至るまで、誠を示さん、即有つ者、近づく可からざる光に居ろ者、人の未だ曾て見ず、又見ること能はざる者なり。一六獨一不死を有つ神、諸王の王、諸主の主、一七爾此の世に於て富める者

に戒めよ、彼等が高ぶらずして、定まりなき富を恃むなく、乃我等に樂の爲に豐に一切を賜ふ活ける神を恃み、一八 恩惠を行ひ、善き事に富み、惜まずして施を爲よ、善く人と交り、一九 斯くして永遠の生命を得ん爲に、未來に善き基を爲す財を己に蓄へんことを。二〇 嗚呼テモテよ、爾に託せし事を守りて、妄なる虛言、及び僞りて知識と稱する反論を避けよ、二一 或者は之に耽りて、信に背けり。願はくは恩寵は爾と偕に在らんこと

を「アメン」。

聖使徒パウルがティモテイに達する後書

第一章

一パウル、神の旨に由りて、イエスキリストのイエスに在る生命の計約に循ひて、キリストイエスの使徒と爲れる者は、二書して至愛の子ティモテイに達す。願はくは恩寵と慈憐と平安とが父なる神及びキリストイエス我等の主より爾に賜はらんことを。三我先祖より潔き眞心を以て事ふる所の神に感謝す、晝夜我が祈禱の中に爾を記念して已めざるに因る、四且爾の涙を念ひて、切に爾を見んことを望む、我が喜に満てられん爲なり。五蓋我爾の偽なき信を憶ひ起す、此れ先に爾の祖母ロイダ、及び爾の母エウニカに居りき、我確に信す、爾の中にも居ることなり。六是の故に我爾に、我の按手に由りて爾の中に在る所の神の恩賜を熾さんことを、記念せしむ。七蓋神の我等に賜ひしは、畏の神に非ず、乃ち能と愛と警智との神なり。八故に爾我等の主イエスキリストの證、及び彼の囚人たる我を以て、恥と爲す勿れ、乃神の能に循ひて、福音と共に苦しみを受けよ。九神は我等を救ひ、且聖なる召を以て我等を召せり、是

れ我等の行に由るに非ず、即其旨と恩寵とに由るなり、是の恩寵は世世の先よりハリストスイイススに於て我等に賜はり、一〇今我等の救主イイススハリストスの現るゝを以て、明になりたり、蓋彼は死を滅し、生命と不朽とを照せり、福音に由りてなり、一一我之が爲に立てられて、宣傳者と爲り、使徒と爲り、異邦人の教師と爲れり。一二是の故を以て、我此等の苦を受く、然れども恥とせず、蓋我は我が信ずる者を知り、且彼が我の託せし者を彼の日に至るまで守らんことを能すと確信す。一三爾ハリストスイイススに於ける信と愛とを以て、我に聞きし所の醇正の言の模範を保て。一四我等の中に居る聖神を以て、善き委託を守れ。一五アシヤの者皆我を棄てたり、爾之を知る、其中にフィゲル及びエルモゲンあり。一六願はくは主は慈憐をオニシフォルの家に賜はんことを、蓋彼は屢我を慰め、且我が縲絏を恥とせざりき、一七乃ロマに在りし時、務めて我を尋ねて、我に遇へり。一八願はくは主は彼に、彼の日に於て、主の慈憐に遇ふことを賜はん、エフェスに在りて彼が如何ばかりか我に事へしは、爾更に能く之を知る。

第二章

一吾が子よ、是を以て爾ハリストスイイススに在る恩寵に堅固なれ。二又多

くの證者の前に於て我に聞きし事を、忠信にして他人を教ふるを能する人に託せよ。
三 故に爾苦を忍ぶこと、イイススハリストスの善き軍士の如くせよ。四 凡そ軍士たる者は、度生の務を以て己を累はさず、彼を募れる者を悅ばしめん爲なり。五 又力を角ふ者は、若し法に遵ひて角はずば、冕を得ず。六 勞する農夫は先づ實を食ふを得べし。七 我が言ふ所を察せよ、願はくは主は爾に萬事を曉らしめん。八 ダヴィドの裔たる主イイススハリストス、死より復活せし者を、我が福音に循ひて、記念せよ。九 此の福音の爲に我苦を受けて、犯罪者の如く繫がるゝに至れり、然れども神の言は繫がれず。一〇 故に我選ばれたる者の爲に一切の事を忍ぶ、彼等もハリストスイイススに於て、救と永遠の光榮とを得ん爲なり。一一 信なる哉是の言、若し我等彼と偕に死せば彼と偕に生きん。一二 若し忍ばゝ、彼と偕に王たらん、若し諱まば、彼も我等を諱まん。一三 若し我等信ならずば、彼は恒に信なるなり、蓋己に違ふ能はず。一四 爾此等の事を記念せしめ、主の前に戒めて、爭論なからしめよ、是れ一も益なくして、聽く者を亂すのみ。一五 務めて己を嘉すべき者、耻を得ざる工者、眞實の言を正しく傳ふる者として、神の前に立てよ。

一六 妄なる虚言を避けよ、蓋彼等益不虔に進まん、一七 彼等の言は脱疽の如く廣まらん。イメネイ及びフィリトは是くの如き者の中に在り、一八 彼等は眞實に離れ、復活已に過ぎたりと言ひて、或者の信を圮る、一九 然れども神の堅き基は立てり、是に印あり、云く、主は己に屬する者を知れり、又云く、凡そ主の名を稱ふる者は不義を離るべしと。二〇 大なる屋には、第金及び銀の器あるのみならず、亦木及び土の器あり、或は貴き用と爲る者あり、或は貴からざる用と爲る者あり。二一 故に人若し此等を離れて、己を潔くせば、貴き用と爲り、聖にせられて、主宰の用に合ひ、凡の善行に備へられたる器と爲らん。二二 爾少年の慾を避けて、義、信、愛、凡そ清き心より主を籲ぶ者に於ける和平を追へ。二三 愚魯不學の辯論を避けよ、爭の是より生ずるを知ればなり、二四 然れども主の僕は爭ふ可からず、乃柔和に衆人を待ひ、喜く教訓を施し、忍耐を爲し、二五 溫柔を以て、逆ふ者を戒むべし、神或は彼等に悔改を與へて、眞實を識らしめん、二六 彼等が惡魔卽彼等を捕へて己の旨を行はしむる者の網より脱れん爲なり。

第三章

一 爾之を知れ、末の日に於て艱難の時至らん。二 蓋人は自愛、貪婪驕傲、矜慢な

る者、誹謗する者、父母に順はざる者、恩を識らざる者、不虔なる者、二無情なる者、和を好
まざる者、讒言する者、慾を縱にする者、殘刻なる者、善を好まざる者、四信義を破る者、放
肆なる者、自負なる者、神を愛するよりも佚樂を愛する者、五敬虔の貌ありて其實を棄
てし者と爲らん。爾是くの如き者を避けよ。六人の家に竊み入りて婦を惑はす者は、若
る輩に屬す、此の婦は卽罪に溺れ、種種の慾に誘はれ、七常に學べども、眞實を識るに至
る能はざる者なり。八イアンニイ及びイアムブリイのモイセイに敵せしが如く、斯の
輩、卽智慧の壞られたる者、信の理に昧き者は、亦是くの如く眞實に敵するなり。九然
れども彼等は多く進まざらん、蓋彼等の無智は、彼の二人の遇ひし所の如く、衆人の前
に露れん。一〇爾に至りては、我が教訓、品行、意志、信仰、寛容、仁愛、忍耐、一一我がアンテ
チヒヤ、イコニヤ、リストラに在りて遇ひし所の窘逐、及び苦難に於て、我に從へり、此の
窘逐は我之を忍び、主は我を悉く其中より救へり。一二凡そ敬虔を以て、ハリストスイ
イススに在りて生を度らんと欲する者は、皆窘逐せられん。一三惡しき人、及び人を欺
く者は、益惡に進みて、人を惑はし、自も惑はされん。一四然れども爾は學びし所、及び爾

に託せられし所に居れ、爾誰より學びしかを知ればなり。一五 且爾は幼より聖書を
知る、卽能く爾に、ハリストスイイススに於ける信に由りて、救を得しむる智慧を與ふ
る者なり。一六 聖書は皆神の感ずる所の者にして、教訓、督責、矯正、及び義に導くに益あ
り、一七 神の人が全き者と爲りて、凡の善行に備へられん爲なり。

第四章

一 故に我は神及び我等の主イイススハリストス、卽其顯現の時、其國に於
て、生者及び死者を審判せんとする者の前に在りて爾に戒む、二 言を傳へ、時を得るも、
時を得ざるも、勵みて之を勉め、凡の恒忍と教訓とを以て責め、戒め、勸めよ。三 蓋時至ら
ん、人人醇正の教を容れず、卽其私慾に循ひて、己の爲に耳を悅ばしむる教師等を擇び、
四 耳を眞實より避け、轉じて虛說に向はん。五 然れども爾は一切の事に敞醒し、苦を忍
び、福音者の工を行ひ、爾の職を盡せ。六 蓋我已に祭として獻ぜらる、我が逝く時至れり。
七 我善き戰を戰ひ、馳すべき程を盡し、信を守れり。八 今より後、義の冕は我の爲に備へ
らる、主、義なる審判者は、彼の日に於て、之を我に賜はん、第我のみならず、乃凡そ彼の顯
現を慕ふ者にも賜はん。九 爾務めて速に我に來れ。一〇 蓋ヂマスは斯の世を愛し、我

を棄てゝ、ヱサロニカに往き、クリスケントはガラテヤに、テトはダルマテヤに往けり。
獨ルカのみ我と偕に在り。一一爾マルコを攜へて、偕に來れ、蓋彼は役事の爲に我に
要する所あり。一二我テヒクをエヱスに遣せり。一三爾來る時、我がトロアダに於て、カ
ルプに託せし外服を攜へ、又書籍殊に革の者を攜へよ。一四銅工アレキサンドル我に
多くの害を爲せり。願はくは主は其行に循ひて彼に報いん。一五爾も彼を防げ、蓋彼は
甚しく我等の言に敵せり。一六我が始めて己の事を訴ふる時、一人も我と偕にせざり
き、皆我を離れたり。願はくは此れ彼等に歸せざらん。一七然れども主は我と偕に立ち
て、我を堅めたり、我に由りて福音は證明せられて、異邦人皆之を聞かん爲なり、我獅の
口より脱れたり。一八主は又我を諸の惡事より脱れしめて、我を其天國の爲に救はん。
願はくは光榮は無窮の世に彼に歸せん、「アミン」一九爾プリスキラ及びアキラ、及
びオニシヱルの家に安を問へ。二〇エラストはコリンフニ留れり、トロフィムは病を患
ふるに因りて、我彼をミリトに留めたり。二一爾務めて冬の前に來れ。エワルプド、リン、
クラウディヤ及び衆兄弟爾の安を問ふ。二二願はくは主イイススハリストスは爾の神

と偕(とも)にせん願(ねが)はくは恩寵(おんちょう)は爾等(なんぢら)と偕に在(あ)らんことを「アーメン」。

聖使徒パウルがテトに達する書

第一章

一 パウル、神の僕、イエスキリストの使徒、神の選びたる者を信に導き、彼等をして敬虔に屬する眞實を知らしめ、二 彼等をして、謊なき神が世世の先より約し、三 期に屆りて、其言を以て、我等の救主神の命に循ひて、我に託せられし宣傳に由りて顯し、永遠の生命の望を得しめん爲に立てられたる者は、四 書して、共同の信に由りて眞の子なるテトに達す。願はくは恩寵と憐憫と平安とは、神父及び主イエスキリストより爾に賜はらんことを。五 我爾をクリトに留めしは、爾が缺けたる所を補ひ、及び各邑に長老を立つることを、我が爾に命ぜし如くせん爲なり、六 即責むべき所なき者を擇び、一婦の夫たる者、其子女の信者にして、放蕩、或は不順の訴なへらるる者を立つるなり。七 蓋監督は、神の家宰たるに依り、責むべき所なき者、己を恣にせず、人を慍たず、汚利を貪らず、八 乃慈に遠人を待ふ者、善を好む者、愼み、義、聖潔、節制なる者、九 學びし所の信なる言を堅く執る者たるべし、醇正の教を

以て人に勸め、且抗論する者を折くを得ん爲なり。一〇蓋順はざる者、空論を爲す者及
び惑はす者多くあり、割禮者に於て殊に多し、一一是くの如き者の口を箝ぐべし、彼等
は汚利の爲に宜しからざることを教へて、全家を覆へす。一二彼等の中の一なる、彼等
に屬する預言者は云へり、クリト人は恒に謊る者、惡しき獸、懶惰なる腹なりと。一三此
の證は眞なり。故に爾嚴しく彼等を責めよ、彼等が信に健全にして、一四イウデヤ人の
虛說、及び眞實に背く人人の律令に意を用ゐざらん爲なり。一五潔き者の爲には、凡の
物潔し、汚れたる者及び不信者の爲には、一も潔き者なし、卽彼等の知識も良心も汚れ
たるなり。一六彼等は神を識ると言ふ、然れども行を以て之を諱む、蓋惡むべき者、順は
ざる者、凡の善事を絕ちたる者なり。

第二章

一然れども爾は醇正の教に合ふことを言へ、二卽老人には、謹愼、端莊、廉節
にして、信と愛と忍耐とに健全なるべきことを勸め、三老婦には、同じく其外儀聖潔に
合ひ、讒毀せず、多くの酒を飮まず、善を以て人に教ふべきことを勸め、四彼等をして、少
き婦に、夫を愛し、子を愛し、五自ら制し、貞潔にして、家を守り、善良にして、其夫に從ふこ

こを教へしむべし、神の言が謗を受けざらん爲なり。六亦少年に、自ら制すべきことを勸めよ。七爾は一切の事に於て己を以て善行の模範と爲し、傳敎に於て、誤なきことを、八言の醇正にして、責むべきなきことを表せ、敵が自ら愧ぢ、我等に對して何の惡しき事をも言ふを得ざらん爲なり。九僕には、其主に從ひ、一切の事に於て彼等に悅ばれ、咈はず、一〇竊まず、乃全き忠信を顯すべきことを勸めよ、彼等が一切の事に於て我等の救主神の敎の飾と爲らん爲なり。一一蓋神の恩寵、衆人に救を施す者は現れて、一二我等に、不敬虔と世俗の慾とを離れて、自ら制し、義と敬虔とを以て今の世に生を度り、一三望む所の福、及び大なる神、我等の救主イエスキリストの光榮の現を待つことを敎ふ。一四彼は我等の爲に己を與へたり、我等を凡の不法より贖ひて、己の爲に選ばれたる民、善行に熱心なる者を潔めん爲なり。一五爾此等を言ひ、此等を勸め、一切の權を以て責めよ、人をして爾を輕んぜしむる勿れ。

第三章　一爾彼等に、政を執る者及び權を有つ者に服し且順ひ、凡の善行に備へ、二人を誇らず、爭はず、柔和にして、悉く凡の人に溫柔を表さんことを、記念せしめよ。

三 蓋我等も曩には愚なる者順はざる者、迷へる者、種種の慾と樂との奴隷たる者、怨恨
娼嫉を以て日を送りし者、惡むべき者、又互に惡める者たりき。四 然れども我等の救主
神の恩寵と仁愛との顯れし時、五 彼は我等が行ひし所の義の功に由るに非ず、乃己
の慈憐に由りて、重生の洗、及び聖神の復新を以て、我等を救へり。六 聖神は、卽神之をイ
イススハリストス我等の救主に由りて、豐に我等に注げり、七 我等が彼の恩寵を以て
義とせられて、望に循ひて、永遠の生命の嗣と爲らん爲なり。八 信なる哉此の言、我爾が
此等の事を確に證するを望む、神を信ずる者は務めて善行を行はん爲なり、此は美に
して人に益あり。九 愚なる辯論と、系圖と、爭鬪と、律法の爭とを遠ざけよ、蓋此等は益な
くして、虛しき事なり。一〇 異端者を、一次及び二次警めて後に、擯けよ、一一 是くの如き
者が道に背き、罪を犯して、自ら擬定するを知ればなり。一二 我がアルテマ或はテヒク
を爾に遣さん時、爾速に我にニコポリに來れ、蓋我彼處に冬を過ごさんことを定め
たり。一三 律法家ジナ、及びアポロスを懇に送りて、彼等に一も乏しきことなからしめ
よ。一四 我等の徒も善行を務めて需むる所の用に備ふるを學ぶべし、果を結ばざる者

と爲らざらん爲なり。一五　我と偕に在る者皆爾の安を問ふ。爾は信に在りて我等を愛する者に安を問へ。願はくは恩寵は爾等衆と偕に在らんことを「アミン」。

聖使徒パワェルがフィリモンに達する書

一パワェル、イイススハリストスの囚たる者、及び兄弟フィモフェイは、書して、至愛なるフィリ
モン、我等の同勞者、二及び至愛なる姉妹アプフィヤ、及び我等の同戰者アルヒップ、幷に爾
が家の教會に達す。三願はくは恩寵と平安とは、神我等の父及び主イイススハリスト
スより爾等に賜はらんことを。四我恒に我が祈禱の中に爾を念ひて、我が神に感謝す、
五爾の愛及び主イイススと衆聖徒とに於ける信を聞くに因る。六願はくは爾が信の
共與は力行して、爾等の中に於て、ハリストスイイススに由る凡の善を知るを致さん。
七蓋我等は爾の愛に因りて、大なる喜と慰とを得たり、兄よ、爾に由りて、聖徒の心安ん
ぜられたればなり。八故に我ハリストスに在りて毅然として、爲すべき所を爾に命ず
るを得と雖、九寧愛の故を以て、爾に求む、我是くの如きパワェル、老いたる者、今猶イイス
スハリストスの囚と爲れる者は、一〇我が子オニシム、我が縲絏の中に生みし者の爲
に、爾に求む。一一彼先には爾に益なき者たりしが、今は爾及び我に益ある者と爲れり、

我彼を爾に歸す。一二 爾彼を我が心として受けよ。一三 我彼を我が側に留めて、我が福
音の爲に受くる所の縲絏の中に、爾に代りて我に事へしめんことを望めり、一四 然れ
ども爾の旨を得ずしては、我何をも爲すことを欲せざりき、爾の善事は已むを得ざる
が如くならずして、心願に由らん爲なり。一五 蓋知らず、彼が暫時爾に離れしは、或は爾
が永く彼を受けん爲、一六 已に僕の如くならず、乃僕に超ゑて、我が甚愛する所爾が、肉
體に於ても主に於ても更に愛する所の兄弟として受けん爲ならん。一七 故に若し爾
我を友と爲さば、彼を受くること我の如くせよ。一八 彼若し爾を侵し、或は爾に負ふ所
あらば、之を我に歸せよ。一九 我パワヱル手づから之を書せり、我償はん、我爾は已を以て
我に負へりと言はず。二〇 然り、兄よ、我に爾より主に於て得る所あらしめよ、我が心を
主に於て安んぜしめよ。二一 我爾が順はんことを深く信じて、之を爾に書せり、我知る、
爾は我が言ふ所よりも多く爲さん。二二 爾且我が爲に寓所を備へよ、蓋我信ず、爾等の
祈禱に由りて、我の爾等に賜はらんことを。二三 ハリストスイイススに緣りて我と偕
に囚と爲れるエパフラス、及び我の同勞者マルコ、アリスタルフ、ヂマス、ルカ爾の安を

と問ふ。二四願はくは我等の主イエスキリストの恩寵は爾等の神と偕に在らんことを「アミン」。

聖使徒パウルがエウレイ人に達する書

第一章 一昔歴多方を以て、預言者に藉りて、先祖に語りし神は、二此の末の日に於て、其子、即之を立てゝ萬物の嗣と爲し、之を以て世世を造りし者に藉りて、我等に語れり。三彼は神の光榮の光、其本性の像として、己の能力の言を以て萬物を持ち、既に己を以て我等の罪の浄を爲して、高處に在りて威嚴の寶座の右に坐せり。四彼が天使等に超ゆるは、其嗣ぎたる名の彼等より尊きが如し。五蓋神は何の天使に對ひて曾て云ひしか、爾は我の子、我今日爾を生めりと、又我は彼に於て父と爲り、彼は我に於て子と爲らんと。六又冢子を引きて世に入るゝ時曰く、神の悉くの使は彼を拜す可しと。七天使等に及びては曰く、其使者を以て風と爲し、其役者を以て火燄と爲すと。八子には曰く、神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり。九爾は義を愛し、不法を惡めり、故に神よ、爾の神は爾に歡の膏を傳けしこと、爾の侶に勝れり。一〇又曰く、主よ、爾初に地を基りたり、天も爾が手の造工なり。一一此等は亡びん、然れども爾は永く

存す、此等は皆衣の如く古び、一二爾衣服の如く之を捲き、此等は易らす、爾の年は終らさらんと。一三神は何の天使に對ひて曾て云ひしか、爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れと。一四彼等は皆奉事する神、遣されて、救を嗣がんとする者の爲に役事する者に非すや。

第二章 一是の故に我等聞きし所を尤も愼むべし、恐らくは或は離れ落ちん。二蓋若し天使等に藉りて告げられし言は堅く立ちて、凡の違背と不順とは公正の報を受けしならば、三我等此くの如き救を顧みずして、如何ぞ逭るゝを得ん。斯は始主に因りて傳へられ、彼より聞きし者に因りて我等の中に堅く立てられ、四神に縁りて、其旨に循ひて、休徴、奇蹟、種種の異能、及び聖神の分予を以て證せられたり。五蓋神は我等が言ふ所の未來の世を天使等に服せしめしに非す、六然れども或人一篇に證して曰へり、人は何物たる、爾之を憶ふか、人の子は何物たる、爾之を顧みるか。七爾彼を天使等より少しく遜らせ、彼を爾が手の造りし者の上に立て、八萬物を彼に服せしめたれば、乃一も彼に服せざりしを其足下に服せしと。既に萬物

者を遣さざりき。然れども今我等は未だ萬物の彼に服せられしを見ず、九唯我等は天使等より少しく遜らしめたるイイススが、死を受くるを見るに由りて、衆人の爲に死を嘗めん爲なり。一〇蓋萬物の本つく所、萬物の歸する所の者が、多くの子を光榮に導きて、彼等の救の君をして、苦を以て成全せしむるは、宜しきに合へり。一一蓋聖にする者と聖にせらるゝ者とは、皆一の者より出づ、是の故に彼等を兄弟と稱ふるを恥ぢずして、一二曰く、我弟に傳へ、爾を會中に詠はん。一三又曰く、我彼を賴まん。又曰く、視よ、我及び神が我に與へし諸子は此に在りと。一四夫れ諸子は肉と血とに屬するが故に、彼も亦親しく之を受けたり、死を以て、死の權を乘る者、卽惡魔を空しくし、一五死を畏るゝに因りて生涯奴役に服せし者を釋たん爲なり。一六蓋彼は天使等より受くるに非ず、卽アウラアムの裔より受く。一七故に凡の事に於て兄弟に肖るべかりき、神の前に矜恤、忠信なる司祭長と爲りて、民の罪を贖はん爲なり。一八蓋彼親ら試みられて、難を受けしが故に、誠みらるゝ者にも能く助くるを爲すなり。

第三章

一 是を以て聖なる兄弟、共に天の召に與る者よ、我等の承認の使徒及び司祭
長たるイイススハリストス、二 彼を立てし者に忠信なること、モイセイが其全家に於
けるが如くなる者を深く思へ。三 蓋彼が光榮を受くべきことの、モイセイに超ゆるは、
家を造りし者の、家より尊きが如し。四 蓋凡の家は之を造る者あり、惟萬有を造りし
者は神なり。五 モイセイも、彼の全家に在りて、僕の如く忠信たりき、告げらるべきこと
を證せん爲なり、六 然れどもハリストスは、彼の家に在りて、子の如し。我等若し勇敢と
望の誇とを終に至るまで堅く守らば、乃彼の家たるなり。七 故に聖神の云ふ所の如く、
今日爾等彼の聲を聞かば、八 曾て野に在りて、試の日に、激怒の時に於けるが如く、爾等
の心を頑にする勿れ。九 彼處に在りて、爾等の先祖は我を試み、我を驗し、四十年間我が
所爲を見たり。一〇 故に我其代を憤りて云へり、彼等は常に心迷ひ、我が道を識らざり
き。一一 故に我は我が怒に於て誓へり、彼等は我が安息に入らざらんと。一二 兄弟よ、愼
みて、爾等の中に、不信の惡しき心を懷く者なからしめよ、活ける神より離れざらん爲
なり。一三 乃今日と稱ふるを得る間、日日相勸めよ、爾等の中一も罪に迷はされて、頑

に爲らざらん爲なり。一四蓋我等若し始の本位を終に至るまで堅く守らば、ハリスト
スに與る者と爲れるなり。一五今日と言ふ間、爾等彼の聲を聞かば、激怒の時に於ける
が如く、爾等の心を頑にする勿れ。一六蓋聞きし者の中に怒を激せし者あり、然れども
モイセイに從ひてエギペトより出でし者、皆然せしに非ず。一七然らば彼は四十年間
誰に向ひて憤りしか、罪を犯して、其屍の野に仆れし者に非ずや。一八誰に向ひて彼の
安息に入らざらんと誓ひしか、順はざる者に非ずや。一九是を以て我等は彼等が不信
に由りて入るを得ざりしを觀るなり。

第四章

一故に我等畏るべし、彼の安息に入る許約の尚存する時に於て、恐らくは爾
等の中に之に及ばざる者あらん。二蓋我等にも福音せられしこと、彼等に於けるが如
し、然れども彼等には、聞きし所の言は益を爲さざりき、聞きし者の信を和せざるに由
りてなり。三安息に入る者は、我等信ぜし者なり、彼の言ひし所の如し、我は我が怒に於
て誓へり、彼等は我が安息に入らざらんと、然れども彼の工は世の始より成れり。四蓋
一篇に第七日の事を云へるあり、神は其悉くの工を竣へて、第七日に安息せりと。五又

云に云ふ、彼等は我が安息に入らざらんこと。六是を以て猶之に入らざりして、入らざりしが故に、又一日を定めて、多年の後に、ダヴィドにて先に福音を受けし者は、順はざるに由り等の心を頑にするな勿れと。入蓋若しイエス（ナヴィン）彼等を安息せしめしならば、後に他の日の事を言はざりしならん。九故に神の民には猶安息存するなり。一〇蓋彼の安息に入りし者は、其工を竣へて安息せり、神が己の工に於けるが如し。一一故に我等其安息に入ることを勉むべし、何人も彼の例に效ひて、不順に陷らざらん爲なり。一二蓋神の言は活きて能あり、凡の兩刃の劍よりも利く、刺して、靈及び魂、節節及び骨髓の間を剖くに至り、且心の意と念とを鑒察す。一三又物として彼の前に顯れざるはなし、乃皆裸にして、其目の前に露る、我等彼に事を陳べん。一四故に我等に大なる司祭長、諸天を經たる者、イエス神の子有るに由りて、我等の承認を固く守るべし。一五蓋我等の司祭長は、我等の柔弱を體恤する能はざる者に非す、乃罪の外一切の事に於て、我等の如く試みられたる者なり。一六故に我等殺然として、恩寵の寶座に就くべし、矜恤

を受け、機に合ふ助こと。

第五章　一　蓋凡そ人の中より選ばるゝ司祭長は、人の爲に神に奉事するこ
られて、禮物と祭祀とを贖の爲に獻ずる者にして、二無知なる者及び迷ふ
能す、蓋自も亦柔弱に纏はる、三故に彼は、民の爲にするが如く、己の爲に
ふ祭を獻すべし。四且人誰も自ら此の尊貴を受くるなし、乃神に召さるゝ者
ロンの如く然り。五是くの如くハリストスも、自ら司祭長の尊榮を以て、己
非す、乃彼に爾は我の子、我今日爾を生めりと、言ひし者なり、六又他章に云
爾メルヒセデクの班に循ひて司祭と爲り、世世に迄らんと。七彼は肉體に
なる聲と涙とを以て、彼を死より救ふを能する者に祈禱祈願を奉れり、而
に由りて聽かるゝを得たり。八彼は子なりと雖、其受けし苦に由りて順ふ
り。九已に全くせられ、凡そ彼に順ふ者の爲に永遠の救の原と爲りて、一〇
ヒセデクの班に循ふ司祭長と稱へられたり。一一此に就きては、我等爾等
べき事あれども、爾等聽くに鈍くなりたるに因りて、解き難し。一二蓋爾等は、時の久

しきに因りて、教師たるべき者なり、然るに爾等は復神の言の小學を教へられんことを要す、爾等は乳を要する者と爲れり、堅き食に非す。一三凡そ乳に養はるゝ者は義の言に熟達せす、赤子たるが故なり。一四堅き食は、乃ち熟練を以て善惡を別つことに習ひたる感覺を具ふる成人の用ゐる所なり。

第六章　一故に我等ハリストスの教の初端を舍きて、完全に進むべし、復死の行の悔改、神に於ける信、二諸洗禮、按手、死者の復活、及び永遠の審判の教の基を復置かざるべし。三若し神許さば、我等是を行はん。四蓋一たび照されて天の賜を味ひ、聖神に與る者と爲り、五神の善なる言、及び來世の能を味ひて後、六墮落せし者は、復悔改にすること能はず、彼等己の中に再神の子を十字架に釘して、之を顯に辱しめむるに因る。七蓋地、屢之に降る雨を飲みて、之を耕す者の爲に用に適する野菜を生ずる者は、神より祝福を受け、八荊棘と蒺藜とを生ずる者は、用なくして、詛に近く、終には焚かれん。九至愛の者よ、我等斯く言ふと雖、爾等が此に愈り、且救に關する情を有てるを深く信ず。一〇蓋神は義ならざる者に非すして、爾等の行、及び爾等が已に聖

徒に務め、今も務むるを以て、彼の名に由りて顯しゝ愛の勞を忘れざらん。一一我等は爾等が其望の全からん爲に、各是くの如き熱心を終に至るまで顯さんことを欲す、一二爾等が怠らずして、彼の信と恒忍とを以て許約を嗣ぐ者に效はん爲なり。一三夫れ神はアウラアムに許約を賜ふ時己より大なる者の一も指して誓ふべきなきが故に、己を指して誓ひて一四云へり、我必祝福して爾を祝福し、益して爾を益さんと。一五斯くアウラアムは恒忍して、許約せられし所を獲たり。一六蓋人は己より大なる者を指して誓ふ、且事を確證する誓は彼等の凡の爭論を息む、一七故に神も許約を嗣ぐ者に、己の旨の易らざるを更に明に示さんと欲して、別に誓を立てたり、一八斯の二の易らざる者に於て神は謊る能はざるが故に、我等斯の二の者を以て確なる慰を得ん爲なり、蓋我等は趨りて我が前に在る望を執る者なり。一九此の望は我等の靈の爲に堅くして、動かざる錨の如し、且幔の内に入る、二〇卽イイススがメルヒセデクの班に循ひて、世世の司祭長と爲りて、我等の爲に前驅として入りし所なり。

第七章

一蓋此のメルヒセデクはサリムの王、至上の神の司祭なり、諸王を敗りて歸

れるアウラアムを迎へて、之を祝福せし者なり。二アウラアムは彼に一切の十分の一
を分ちたり。先づ其名を譯けば、義の王なり、次にサリムの王、卽平安の王なり。三父なく、
母なく、系圖なく、日の始なく、生命の終なく、神の子に似たる者にして、恒に司祭たるな
り。四觀よ、太祖アウラアムは其尤善き抄掠品の十分の一を彼に與へたれば、其人如何
にか大なる。五レヴイの諸子の中司祭職を受くる者は、律法に由りて、民、卽己の兄弟
より、彼等もアウラアムの裔なりと雖、其十分の一を取るべき命を奉ず。六然れども
其人は、彼等の族より出でずして、アウラアムより十分の一を受け、且許約を奉ずる者
を祝福せり。七夫れ小なる者が大なる者より祝福せらるゝは一も論なきなり。八且此
には、十分の一を取る者は死すべき人なり、彼には、己の事を彼は生くと、證せらるゝ者
なり。九又斯く言ふべし、十分の一を取る所のレヴイは、自らアウラアムに由りて、十分
の一を供せり、一〇蓋メルヒセデクがアウラアムに遇ひし時、彼は尙其祖の身に在
りたり。一一是を以て、民はレヴイ司祭職の下に律法を受けたるが故に、若し此の司祭
職に由りて完全なることを得べくば、何ぞ亦メルヒセデクの班に循ひて他の司祭の

興り、アアロンの班に循ひて稱へられざる者を須ゐん。一二 蓋司祭職は、蓋メルヒセデクに似たる他の司祭の興ることなり、一三 此等の言の指す所の者は、他の支派に屬すればなり、即其中一人も祭壇に奉侍せざりし支派なり。一四 蓋我等の主がイウダより出でしことは明なり、モイセイは此の支派に於て司祭職の事を一も言はざりき。一五 其更に明なる非すして、無窮の生命の能に循へる者なり。一七 蓋證すること有り、云く、爾メルヒセデクに循ひて稱へられざる者を須ゐん。一二 此等の言の指す所の者は、他の支派に屬すればなり、即其中一人も祭壇に奉侍せざりし支派なり。一三 此等の言の指す所の者は、他の支派に屬すればなり、即其中一人も祭壇に奉侍せざりし支派なり。一四 蓋我等の主がイウダより出でしことは明なり、モイセイは此の支派に於て司祭職の事を一も言はざりき。一五 其更に明なる非すして、無窮の生命の能に循へる者なり。一七 蓋證すること有り、云く、爾メルヒセデクに循ひて稱へられざる者を須ゐん。一八 前の誡の廢せらるゝは、其弱くして益なきが故なり。一九 蓋律法は一も全うせしところなし、乃更に善き望は入れらる、我等を神に近かづかしむる者なり。二〇 且此れ誓なくしてあらざりしに因る、二一（蓋彼の司祭等は誓なくして立てられたり、蓋彼の事を言へるあり、主は誓ひて悔いず、爾メルヒセデクの班に循ひて司祭と爲り、世世に迄らんさ、）二二 乃イイススは更に善き約の保證者と爲れり。二三 又彼の司祭等は多く有りき、死は永く存するを許さざりし故なり。二四 然れども彼は世世に存する司祭職を有てり。二五 是を

以て彼は恒に彼に頼りて神に就く者を救ふを得、其恒に生きて彼等を得ろに因る。二六我等の司祭長は實に是くの如き者たるべし、乃聖にして、悪に與らず、垢なく、罪人に遠ざかり、且諸天より高き者、二七彼の司祭長等の如く先づ己の罪、後に民の罪の爲に、日日祭を獻ぐろを要せざる者なり、蓋彼は己を獻げて、一次之を成せり。二八蓋律法は柱弱ある人を立てゝ、司祭長と爲せり、然れども律法の後の誓の言は、世世に完全なる子を立てたり。

第八章　一我が茲に言ふ所の首要は左の如し、我等に是くの如き司祭長あり、彼は天に於て威嚴の寶座の右に坐せり、二且聖所、及び眞の幕、卽人に非すして、主の設けし者の聖務者なり。三凡の司祭長は禮物と祭祀とを獻ずるが爲に立てらる、故に彼も亦獻ずべき者なかろべからざりき。四彼若し地に在りしならば、司祭と爲らざりき。蓋此には律法に循ひて禮物を獻ずる司祭等、五天上の者の形と影とに奉事する者あり、モイセイに其幕を造らんとせし時に、告げられしが如し、曰く、愼みて山に於て爾に示されし式に遵ひて、一切を造れと。六然れども彼が今更に優れる奉事を得たるは、更に善

き許約に基ける更に善き約の中保者と爲りしに稱ふ。十蓋若し第一の約の虧くることなかりしならば、第二の者を立つる爲に處を索めざりしならん。八然れども預言者は彼等を責めて曰ふ、主云く、視よ、日至らんとす、我イズライリの家、及びイウダの家と新なる約を立てん、九我が彼等の先祖に、其手を執りて、エギペトの地より引き出しゝ日に立てし約の如きに非ず、蓋彼等我が約に止らざれば、我彼等を顧みざりき、主の言是くの如し。一〇主又云く、厥日の後に、我がイズライリの家に立てんとする約は是なり、我は我が律法を彼等の念に置き、之を彼等の心に銘さん、我は彼等の神と爲り、彼等は我の民と爲らん。一一且各其隣に、及び各其兄弟に教へて、主を識れと、云はざらん、蓋小より大に至るまで、悉く我を識らん。一二蓋我彼等の不義を矜み、彼等の罪と不法とを復記念せざらんと。一三新なると謂ひて、第一の者の舊きを示せり、舊びて衰ふる者は亡に近し。

第九章

一第一の約には奉事の例と地に屬する聖所とありき。二蓋第一の幕は設けられて、其内に燈臺と、案と、供前の餅とありき、是を聖所と稱す。三第二の帷の後に至聖

所と稱する幕ありき。四茲には金の香爐と、徧く金を蔽ひたる約匱とあり、其内に「マンナ」を藏めたる金の壺、アアロンの萠せる杖、及び約の碑あり、五其上に贖罪所を覆へる光榮のヘルヴィムありき。此等の事は今詳に言ふを庸ゐず。六此等の物斯く備はりて、第一の幕には司祭等恒に入りて、奉事を行ひ、七第二の幕には獨司祭長のみ、一年に一次、血を攜へざるなくして入り、之を己の爲及び民の愆の爲に獻ず。八此を以て聖神は先の幕の尚存する時は、聖所に入る途の未だ啓かれざるを示す。九此の幕は今の時の表式を爲す、其中に獻ずる所の禮物と祭祀とは、奉事する者の良心を全うする能はずして、一〇僅に飲食と、種種の洗滌と、肉體に屬する儀式と與に設けられて、改新の時を待てり。一一然れどもハリストス、將來の福の司祭長は來りて、更に大に、更に全備なる幕、手の造る所に非ず、卽其造式に非る者に緣りて、一二牡山羊と牡犢との血を以てするに非ず、乃己の血を以て、一次聖所に入りて、永遠の贖を獲たり。一三蓋若し牡牛と牡山羊との血、及び牝犢の灰は、穢れたる者に灑がれて、之を聖にし、肉體の潔淨を致さば、一四況や聖神に由りて、瑕なくして、己を神に獻げしハリストスの血は、我等の良心

を死の行より潔めて、活ける眞の神に奉事せしむるをや。一五 故に彼は新なる約の中保者なり、是れ第一の約の時に犯せる諸罰の贖の爲に成りたる彼の死により、永遠の嗣業に召されたる者が、許約せられしことを受けん爲なり。一六 蓋遺命は、遺命する者の死の證を要す。一七 蓋遺命は人の死後に於て固し、遺命する者の生ける時には力なし。一八 故に第一の約も血なくしては立てざりき。一九 蓋モイセは律法に遵ひて、悉くの誡を全民の前に宣べし後、犢と牡山羊との血、及び水と、絳聖と、牛膝草とを取りて、其書及び全民に灑ぎて二〇 曰へり、此は神が爾等に命じ給へる約の血なりと。二一 同じく血を以て幕及び悉くの奉事の器に灑げり。二二 又諸物は殆ど皆律法に循ひて血を以て潔めらる、血を流すに非ざれば、赦なし。二三 故に天の物の像は此等より以て潔めらるべかりき、然れども天の物は此等より更に善き祭を以て潔めらるべし。二四 蓋キリストスは手にて造られたる聖所、眞の聖所の像れる者に入りしに非ず、乃天に入りたり、今我等の爲に神の顏の前に立たん爲なり、二五 又司祭長が年毎に、他の物の血を以て聖所に入るが若く、屢〻已を獻ずるが爲に入りし

に非ず、二六若し然らば、彼は創世より以來屢苦を受くべかりしなり、然れども今季の世に、一次已の祭を以て罪を滅さん爲に顯れたり。二七又人に、一次死して、後に審判あること定められしが如く、二八斯くキリストも、多くの者の罪を任はんために、一次已の祭に獻じて、復罪の爲に非ず、乃彼を待つ者の救の爲に再顯れん。

第十章　一律法は將來の福の影にして、本物の眞の形に非ざるに因りて、年毎に恒に獻ぜらるゝ所の同一の祭を以て、之に就く者を永く全うする能はず。二否らずば、獻ずること は止まん、蓋寒事する者は一たび潔められて、復一も其罪心に罪を覺ねざるならん。三然れども此の祭に由りて、年毎に罪の事は記念せらるゝなり。四蓋牡牛と牡山羊との血は罪を除く能はず。五故にキリストは世に入る時曰く、祭祀と禮物とは爾之を欲せず、然れども肉體を我が爲に備へたり。六全燔と罪祭とは、爾之を悦ばざりき。七其時我言へり、視よ、我往く、書の首に我の事を記せるが如し、神よ、爾の旨を行はんと。八前には「祭祀と、禮物と、全燔と、罪祭とは、即律法に循ひて獻ぜらるゝ者は、爾之を欲せず、爾之を悦ばざりき」と言ひて、九後には「視よ、我往く、神よ、爾の旨を行はんと言へり。第

一の者を除く、第二のものを立てん爲なり。一〇 此に
トスの肉體の一次獻ぜらるゝを以て聖にせられたり。一一 凡の司祭も日日に立ちて
一四 蓋彼は一の獻祭を以て聖にせらるゝ者を永遠に全き者と爲せり。一五 聖神も亦
之を我等に證す、蓋先に言へるが如し、一六 主曰く、
之を彼等の心に置き、之を彼等の念に銘さん、一七 次ぎて主
曰く、且我彼等の罪と不法とを復記念せざらんと。一八 夫れ罪已に赦さるゝ
爲に獻祭すること無し。一九 故に兄弟よ、我等イ
エスの血に由りて、聖所に入る勇敢を得、二〇 且神の家を宰る大なる司祭を得て、二一 誠の心と全き
心を惡しき意念より灑がれ、身を清き水に洗はれて、近づくべし。二二 我等の
を固く執りて移らざるべし、蓋許約せし者は信なるなり。二四 我等互に顧みて、愛と善

き行さを勵ますべし。二五會集を輟むること、或人の習の如くすること勿れ、彼の日の愈近づくを見て、益是くの如くすべし。二六蓋若し我等眞實を識るを得たる後、縱に罪を犯さば、復贖罪の祭あるは無し。二七乃惕れて審判を待つこと、及び敵を食まんとする烈火あるのみ。二八若しモイセイの律法に背きし者が、二三人の證者あるなし、憖なく死に處せられれば、二九況や神の子を踐み、自ら聖にせられし約の血を聖なりとせず、恩寵の神を侮る者は、其人の罰を受くべき罰、更に重きこと幾何なりと意ふか。三〇蓋我等は言ひし者を識る、主曰く「讐は我に在り、我報いん。又曰く、主は其民を審判せん。三一活ける神の手に陷るは畏るべき哉。三二爾等の初の日、卽ち爾等が光照せられて後、患難の多くの戰を忍びし日を憶へ、三三爾等或は自ら誹謗と迫害とに由りて人の觀玩にせられ、或は斯る事に遇ふ者に與る者と爲れり。三四蓋爾等は我の縲紲をも體恤し、爾等の產業の奪はるゝことをも喜びて受けたり、爾等には更に美にして恒に存する業の天に在るを知ればなり。三五故に爾等の勇敢を失ふ勿れ、此れ大なる賞を得ん。三六忍耐は爾等に要する所なり、爾等が神の旨を行ひて、許約せられ

しことを受けん爲なり。三七 蓋尚片時ありて、來る者臨まん、必遲ばらざらん。三八 義人は信に由りて生きん、人若し退かば、我が靈彼を悦ばず。三九 然れども我等は退きて沈淪に屬する者に非ず、乃信に立ちて、靈の救を得べき者なり。

第十一章

一 夫れ信とは、望む所を確認し、見ざる所を確證する者なり。二 古の人は之に由りて證せられたり。三 信に由りて我等は世界が神の言に造られ、見ゆる者より成りたるを知る。四 信に由りてアベルはカインに較ぶれば更に善き祭を神に獻げたり、之に由りて義なりと證せられたり、神が其獻物の事を證せしが如し、之に由りて彼は死して後にも亦言ふ。五 信に由りてエノフは死を見ずして移されたり、人彼に遇はざりき、神彼を移しゝに由る、蓋其未だ移されざる先に、神の悦を獲しものと證せられたり。六 然れども信なければ、神に悦ばるゝ能はず、蓋神に就く者は、彼の有ることと、及び其彼を尋ぬる者に報を爲す者なることを信ずべし。七 信に由りてノイは未だ見ざる事に於て啓示を蒙りて、敬みて、其家族を救はん爲に方舟を備へ、之に由りて世を罪し、及び信に由る義の嗣となれり。八 信に由りてアウラアムは嗣業と

して受けんとする地に往くべき召に遵ひ、自ら何に往くを知らずして往けり。九信に由りて彼は許約の地に在りて、己に屬せざる地に於けるが如く、イサアク及びイアコフ、即同一の許約を同じく嗣ぐ者と偕に幕に居りたり、一〇蓋彼は基ある城、神の營み造る者を俟てばなり。一一信に由りて坑ヲ胎妊の力を得、已に生育の期を過ぎたり、蓋彼は許約せし者の信なるを知れり。一二故に一人、猶已に死せし如き者より天の星の多きが如く、海邊の沙の數へ難きが如く多く生れたり。一三此等皆信を抱きて死せり、許約を受けずして、惟遠に之を望みて欣び、且自ら地に在りて旅人なり、寄寓者なりと言へるを表すなり。一四蓋斯く言ふ者は、自ら其家國を求むるを表すなり。一五彼等若し其出でし國を念はば、歸るべき時ありしならん。一六然れど彼等は更に善き國、即天に在る者を慕へり、故に神は彼等を耻させずして、已を彼等の神と稱ふ、蓋彼等の爲に城を備へたり。一七信に由りてアウラアムはイサアクを獻げたり、許約を受けし者にして、其獨生子を獻げたり、一八即爾の裔はイサアクに由りて稱へられんと、曾はれし所の者なり。一九蓋彼意へり、神は亦死より

復活せしむるを能すこと。故に之を預表として受けたり。二〇 來の事を指して、イアコフ及びイサフを祝福せり。二一 さする時、イオシフの二子を祝福し、且其杖の上に拜せり。二二 終らんとする時イズライリの諸子の出でんことを憶はしめ、且己の骸骨の事を遺命せり。二三 信に由りてモイセイは生れし後、三月閉其父母に匿されたり、蓋彼等は子の美しきを見て、王の命を畏れざりき。二四 信に由りてモイセイは長ずるに及びて、ファラオンの女の子と稱へらるゝを辭みて、二五 暫時の罪惡の樂を享けんよりは、寧神の民と共に苦しまんことを願ひ、二六 ハリストスに縁る誹毀を、エギペトの資よりも更に大なる富なりと意へり、蓋彼は賞を仰ぎ望めり。二七 信に由りて彼はエギペトを離れて、王の怒を畏れざりき、蓋彼は見ること如くに爲して忍耐せり。二八 信に由りて彼は過越節と血の灑ぎを行へり、長子を滅す者の彼等に觸れざらんが爲なり。二九 信に由りて彼等は紅海を陸地の如くに渉れり、エギペト人は之を行はんと試みて溺れたり。三〇 信に由りてイエリホンの城垣は、七日之を巡りたる後に墮ち

たり。三一 信に由りて妓婦ラアフは平和を以て偵使を納れ、他の路より彼等を送りて、
不信の者と偕に亡びざりき。三二 我復何をか言はん、若しゲデヲン、ヨラク、サムプソン、
イエフテイ、ダヴィド、サムイル、及び他の預言者の事を述べんには、我に時足らざらん。三三
彼等は信に由りて諸國を從へ、義を行ひ、許約を受け、獅の口を箝ぎ、三四 火の勢を滅し、
劔の刃を避け、弱きよりして強くせられ、戰に勇み、異邦の軍を潰せり、三五 婦は其死者
を復活せし者として受けたり、亦或者は更に善き復活を得ん爲に、免るゝを欲せずし
て、酷く戮されたり、三六 他の者は嘲弄と鞭扑と、又縲絏と囹圄との試を受け、三七 石に
て擊たれ、鋸にて解かれ、栲問に遇はせられ、刃にて殺され、綿羊と山羊との皮を衣て流離
し、窮乏、患難、辛苦を忍び、三八 世界の置くに堪へざる者は、曠野、山嶺、巖穴、地窟に徨へり、
三九 此等皆信に由りて證せられたれども、許約せられし所を獲ざりき、四〇 蓋神は我
等の事に於て更に善き事を預見せり、彼等は我等と偕にせずしては全きを得ざらん
爲なり。

第十二章

一 故に我等も證者の斯く雲の如く衆きに圍まれて、凡の重負と我等を阻

む罪さを去り、忍耐を以て、我等の前に在る馳場を趨りて、二我等の信の首、及び成全者なるイイススを仰ぎ望むべし、彼は其前に在りし喜に易へて、辱を忍びて、神の寶座の右に坐せり。三故に爾等は罪人等の斯く己に逆ひしを忍びたる者を思へ、爾等が倦みて靈の弱らざらん爲なり。四爾等は罪に敵し、之と鬪ひて、未だ血を流すに至らざりき。五又子に於けるが如く爾等に告ぐる所の勸を忘れたり、曰く、吾が子よ、主の懲戒を輕んずる勿れ、又彼に責めらるゝ時、心を喪ふ勿れ。六蓋主は其愛する者を懲し、凡そ納るゝ所の子を鞭つさ。七爾等若し懲戒を忍ばゝ、神は子の如く爾等を待つなり。蓋子にして父の懲さざる者あらんや。八爾等若し衆の與る所の懲戒に遭はずば、乃私生の子にして、嫡子に非ず。九又我等は肉體の父より懲さるれて、彼等を敬へり、況や我等益諸神の父に從ひて、生を得べからざらんや。一〇彼等は己の意に任せて、暫時の爲に我等を懲せり、然れども彼は我等をして、我等が彼の聖に與らん爲にするなり。一一凡の懲戒は、今は喜に非ずして、悲なりと意はるゝ、然れども後には、之に由りて練達せし者に、義の平安なる果を結ばしむるなり。一二故に爾等衰へたる手、弱りたる

膝を健にし、一三 爾等の足を以て直き徑を行け、跛者の迷ふなり。一四 務めて爾等 愼め、恐らくは神の恩寵を失ふ者あらん、恐らくは苦き根は萌え出でゝ、害を爲し、多くの者之に由りて汚されん、一六 恐らくは淫行の者、或は不敬虔なること｜イサフの如き者あらん、卽ち一食の爲に其長子の業を讓ぎたる者なり。一七 壹爾等知る、其後彼は祝福を嗣がんと欲したれども、棄てられたり、涕を流して求めたれども、父の志を回す能はざりき。一八 爾等の就きし所は、捫ろべき山に非ず。此の聲を聞きしに非ず。此の聲を聞きしに非ず。此の聲を聞きしに

約の中保者たるイイスス、及び灑ぐ所の血、卽アヱリの血に較ぶれば更に善く言ふ者なり。二五愼みて、告ぐる者を拒む勿れ。蓋若し彼等地に在りて命を傳ふる者を拒みて、免れざりしならば、況や我等天より命を傳ふる者に背かば、更に免れざらん。二六彼の聲は其時地を震はせたり、然れども今彼は約して曰へり、我又一次地のみならず、天をも震はせんと。二七又一次と言へるは、震ふべき者の、其造られしを以て、移さるゝを示す、震ふべからざる者の留らん爲なり。二八故に我等は震ふべからざる國を受けて、恩寵を保ち、之に由りて、敬虔と寅畏とを懷きて、神の悅ぶ所の如く奉事すべし。二九蓋我等の神は燬き盡す火なり。

第十三章

一兄弟の愛爾等の中に存すべし。二遠人を善く待ふことを忘るゝ勿れ、蓋或者は、之に由りて、知らずして天使等を待へり。三囚者を念ふこと、爾等も彼等と偕に囚はれしが如くせよ、苦しむ者を念へ、爾等も亦身に居るが故なり。四婚姻は衆の中に貴くして、牀は玷なかるべし、邪淫の者姦淫の者は、神之を審判す。五貪婪に習ふ勿れ、有つ所を以て足れりとせよ、蓋彼自ら云へり、我爾を棄てず、爾を遺さざらんと。六故に

われら我等殺然として曰ふ、主は我を助くる者なり、我懼れざらん、人何たか我に爲さんと。一四 爾等の教導師、神の言を爾等に傳へし者を記念せよ、彼等の生命の終を鑒みて、彼等の信に倣へ。一五 イイスス・ハリストスは昨日、今日、及び世世に變らざる者なり。一六 種種の異なる教に搖かされ勿れ、蓋恩寵を以て心を堅むるは善し、食物を以てするに非ず、之に遵ひし者は、是に依りて益を得ざりき。一七 我等には祭壇あり、幕に事ふる人は、此の上の物を食ふ權なし。一八 司祭長が、罪を潔むる爲に、血を聖所に攜ふる所の牲の體は、營の外に焚かる、故にイイススも、已の血を以て人人を聖にせん爲に、門の外に於て苦を受けたり。一九 蓋我等には此に恒に存する邑なし、即將來の者を求む。二〇 故に我等は彼の辱を任ひて、營の外に出でゝ彼に就くべし。二一 是を以て我等は彼の名を讃榮する口の果なり。二二 惠施を忘るゝ勿れ、蓋此なる犧牲を以て神は悅ぶ所なればなり。二三 爾等の教導師に順ひて之に服せよ、蓋彼等は神の前に答を爲すべき者として、爾等の靈の爲に儆醒す、彼等をして悅びて之を行はしめよ、歎息して行はしむる勿れ、此れ爾等に益なきが

故なり。一八 我等の爲に祈禱せよ、蓋我等は善き良心を有てるを信ず、一切の事に於て善きを行はんことを望めばなり。一九 我が殊に祈禱を爲すを求むるは、速に爾等に還されん爲なり。二〇 願はくは平安の神、永遠の約の血に由りて羊の大なる牧者たる我等の主イイススハリストスを死より起しゝ者は、二一 其悅ぶ所を爾等の中に爲して、其旨を行はん爲に、爾等を凡の善事に全うせんことを、イイススハリストスに由りてなり。願はくは光榮は彼に無窮の世に歸せん「アミン」。二二 兄弟よ、我略書して爾等に達せり、請ふ我が勸の言を容れよ。二三 知るべし、我等の兄弟ティモテイ已に釋されたり、若し彼速に來らば、我彼と偕に爾等を見ん。二四 悉くの爾等の教導師及び衆聖徒に安を問へ。イタリヤの者は爾等の安を問ふ。二五 願はくは恩寵は爾等衆と偕に在らんことを「アミン」。

神學者聖イオアンの默示錄

第一章

一イイスス、ハリストスの默示、即神が速に成る可き事を其僕に示さんが爲に、彼に與へし者なり、彼は其天使を以て之を遣して、其僕イオアンに示せり。二イオアンは神の言と、イイスス、ハリストスの證と、其凡そ見し所の事とを以て、證を作せり。三此の預言の言を讀み、又之を聞きて、此の中に錄されし事を守る者は福なり、蓋時は近し。四イオアン書して亞西亞に在る七教會に達す。願はくば恩寵と平安とは、今在り、先に在りし、後に在らんとする者、及び彼の座の前に在る七神、五及び忠信なる證者、死の中より首生せしイイスス、ハリストスより、爾等に賜らんことを。願はくは彼、卽ち我等を愛し、其血を以て我等を罪より洗ひ、六我等を王となし、神其父の前に司祭となしたるイイスス、ハリストスに、光榮と權能とは無窮の世に歸せん、「アミン」。七視よ、彼は雲に乘りて來る、悉くの目は彼を見ん、彼を刺しゝ者も亦然り、且地の萬族は彼の前に哭かん。誠なる哉「アミン」。八主曰く、我は「アリフア」及び「オメガ」、始及び終なり、

今在り、先に在りし、後に在らんとする者なり、全能者なり。九我イオアン、爾等の兄弟、及
びイイススハリストスに於ける患難と國と忍耐とに共に與る者は、神の言、及びイイ
ススハリストスの證の爲に、パトモスと名づくる嶋に居りたり。一〇主の日に、我神に
在りて、我が後に狐の如き大なる聲を聞けり、云く、我は「アリフ」及び「チメガ」、第一の者
及び末の者なり、一一爾の見る所を書に筆して、アシヤに在る諸教會卽エフス、ス
ミルナ、ペルガム、フィアティラ、サルディス、フィラデルフィヤ及びラチディキヤに送れ。一二我身を
轉じて、我に語りし聲を觀んと欲せり、既に轉ずれば、七の金の燈臺、一三及び七の燈臺
の間に、人の子に似たる者あるを見たり。其身には長衣を衣、胸に金の帶を束ね、一四其
首髮とは白きこと、皓き羊の毛の如く、雪の如く、其目は火燄の如く、一五其足は精銅
に似、鑪に燒かるゝが如く、其聲は多くの水の聲の如し。一六其右の手に七の星を執り、
其口より兩刃の利き劍出でたり、其面は盛に輝く日の如し。一七我彼を見し時、其足下
に俯伏せしこと、死せる者の如し。彼は其右の手を我に按せて曰へり、懼るゝ勿れ、我は
第一の者及び末の者なり、一八我は生ける者なり、先に死せしことあり、視よ、我生きて

無窮の世に在り」アミン」。我は地獄と死との鍵を持てり。一九故に爾が見し所の事、及び今有る事と、此の後に在らんとする事とを書せ。二〇爾が我が右の手に見し所の七の星の奥義、及び七の金の燈臺は、左の如し、七の星は七の教會の天使なり、爾が見し所の七の燈臺は七の教會なり。

第二章

一エフェスの教會の天使に書して曰へ、其右の手に七の星を執りて、七の金の燈臺の間を歩む者は是くの如く云ふ、二我は爾の所爲、爾の勞、爾の忍耐、爾が惡人を勝ふる能はざる事、自ら使徒と言ひて實は否らざる者を試みて、其虚謬を露しゝ事を知る。三爾は多く勝へたり、忍耐は爾に在り、我が名の爲に勞して倦まざりき。四然れども我爾に責むべきことあり、是れ爾が初の愛を離れしことなり。五故に爾何より隕ちしかを憶ひ、悔改して初の行爲を行へ、然らずして、若し爾悔改せずば、我速に爾に來りて、爾の燈臺を其處より移さん。六然れども爾に取るべきことあり、爾がニコライ黨の所爲を惡むことこれなり、我も亦之を惡む。七耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし勝つ者には我神の樂園の中に在る生命の樹に由りて食ふを賜はん。八又スミルナ

の教會の天使に書して曰へ、第一の者及び末の者、曾て死し今生ける者は是くの如く
曰ふ、九我爾の所爲と、患難と、窮乏とを知る、然れども爾は富める者なり、又彼の自らイ
ウデヤ人なりと言ひて、實は然らず、乃サタナの會を成す者の謗讟を知る。一〇爾受
けんとする苦を懼るゝ勿れ。視よ、惡魔は爾等の中の者を獄に下さん、爾等の試みられ
ん爲なり、爾等は患難を受けんこと十日間ならん。死に至るまで忠信なれ、然らば我爾
に生命の冕を與へん。一一耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし、勝つ者は第二
の死より害を受けざらん。一二又ペルガムの教會の天使に書して曰へ、兩刃の利き劍
を有てる者は是くの如く云ふ、一三我爾の所爲、及び爾がサタナの座の在る處に居る
を知り、又爾が我の名を執り、我の忠信なる證者アンティパが、爾等の中に、サタナの居る
處に殺されたる日に於ても、我の信を棄てざりしを知る。一四然れども我聊爾に責
むべきことあり、蓋爾には彼處にワラアムの教を執る者あり、彼はワラクに、イズライ
リの諸子を誘惑に引きて、偶像に獻げし物を食ひ、又淫を行はしむるを教へたり。一五
是くの如く爾にもニコライ黨の教、我が惡む所の者を執る者あり。一六悔改せよ、然らず

ば、我速に爾に至りて、我が口の劍を以て彼等と戰はん。一七 耳ある者は諸教會に言ふ所を聞くべし、勝つ者には我祕藏の「マンナ」を與へて食はしめ、又白き石、及び石の上に書されたる新なる名を與へん、之を受くる者の外に其名を知る者なし。一八 又ティアテラの教會の天使に書して曰へ、神の子、其目は火焰の如く、其足は精銅に似たる者は、是くの如く言ふ、一九 我爾の所爲と、愛と、服役と、信と、爾の忍耐と、且爾が後の所爲の前の所爲よりも多きを知る。二〇 然れども我爾に責むべきことあり、蓋爾は婦イエザベルを容れ、自ら預言女と言ふ者に、我が諸僕を教へ惑はして、淫を行ひ、偶像に獻げし物を食はしむるを容す。二一 我彼に其淫行を悔改する時を與へたれども、彼は悔改せざりき。二二 視よ、我彼を牀に投げん、又彼と姦淫する者も、若し其所爲を悔改せずば、之を大なる患難に投げん。二三 彼の諸子は、我死を以て之を滅さん、而して諸教會は、我が人の心腸を鑒察する者なるを知らん、我爾等各人に、其行に循ひて報いん。二四 然れども、ティアテラに在りて、此の教を受けず、所謂サタナの奥祕を知らざる者に言ふ、我爾等に他の任を負はせざらん、二五 惟有つ所の者を固く執りて、我が

來るに及べ。二六勝を得て、終に至るまで我が所爲を守る者は、我彼に異邦民の上に權を與へん、二七彼は鐵の杖を以て彼等を牧せん、彼等は陶器の如く碎かれん、我も我が父より受けし權の如し。二八且我彼に晨の星を與へん。二九耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし。

第三章　一又サルヂスの教會の天使に書して曰へ、神の七の神及び七の星を有つ者は是くの如く言ふ、我爾の所爲を知る、爾は生ける名ありさ雖、死せるなり。二爾儆醒し て、死に幾き餘情を堅めよ、蓋我爾が所爲の、我が神の前に全備なるを見ず。三故に爾は 受けし所、聞きし所を憶ひ、之を守りて悔改せよ。若し爾儆醒せずば、我盜の如く爾に至らん、爾は我が何の時に爾に至るを知らざらん。四然れど も爾には、サルヂスに、猶數名其衣を汚さざりし者あり、彼等は白衣にして我と與に歩まん、蓋之に當る者なり。五勝つ者は白衣を衣ん、我其名を生命の書より抹さざらん、又其名を我が父及び彼の天使等の前に承け認めん。六耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし。七又フィラデルフィヤの教會の天使に書して曰へ、聖なる者、眞實なる者、ダビデの鑰を持つ者、開けば閉ぢ

もの者なく、閉(とざ)せば開(ひら)く者なき者は、是(か)くの如く言ふ、八我爾(われなんぢ)の所爲(わざ)を知る、門(もん)を開(ひら)けり、能(よ)く之(これ)を閉(とざ)す者(もの)なし、蓋爾(けだしなんぢ)は僅(わづか)に力(ちから)ありて、我(わ)が言(ことば)を守(まも)りしが故(ゆゑ)に、我(われ)も爾(なんぢ)を守(まも)りて、地(ち)に居(を)る者(もの)を試(こころ)みん爲(ため)に全世界(せんせかい)に臨(のぞ)まんとする試煉(こころみ)の時(とき)より免(まぬか)れしめん。一一 視(み)よ、我(われ)速(すみやか)に來(きた)るあり、爾(なんぢ)が有(も)つ所(ところ)の者(もの)を固(かた)く執(と)れ、人(ひと)爾(なんぢ)の冕(かんむり)を奪(うば)はざらん爲(ため)なり。一二 勝(か)つ者(もの)は、我(われ)彼(かれ)を我(わ)が神(かみ)の殿(でん)に柱(はしら)となしめて彼(かれ)は復(また)外(そと)に出(い)でざらん、我(われ)は又(また)我(わ)が神(かみ)の名(な)、及(およ)び我(わ)が新(あらた)なる、イエルサリムの名(な)、及(およ)び我(わ)が新(あらた)なる名(な)を其上(そのうへ)に書(しる)さん。一三 耳(みゝ)ある者(もの)は、御靈(みたま)が諸教會(しよけうくわい)に言(い)ふ所(ところ)を聞(き)くべし。一四 又(また)ラヲヂキヤの教會(けうくわい)の天使(てんし)に書(しよ)して曰(い)へ「アメン」たる者、忠信(ちゆうしん)にして眞實(しんじつ)なる證者(しようしやかみ)、神(かみ)の造化(ざうくわ)の元始(はじめ)なる者(もの)は、是(か)くの如(ごと)く言(い)ふ、一五 我爾(われなんぢ)の所爲(わざ)を知(し)る、爾(なんぢ)は冷(ひや)やかなるにも非(あら)ず、熱(あつ)きにも非(あら)ず、望(のぞ)むらくは爾(なんぢ)は溫(ぬる)くして、熱(あつ)きにも非(あら)ず、冷(ひや)やかなるにも非(あら)

ざるに由りて、我爾を我が口より吐き出さん。一七 蓋爾は、我富み、財を積み、匱しき所
なしと、言ひて、自ら不幸なる、憐むべく、貧しく、譬にして、裸なるを知らず。一八 我爾に勸
む、爾富を得ん爲に、火に煉りたる金を我より買へ、衣て爾が裸體の羞の露れざらん爲
に、白き衣を買へ、見るを得ん爲に、目の藥を爾の目に抹れ。一九 我が愛する者は、我之を
責め、之を懲す、故に爾熱中し、且悔改せよ。二〇 視よ、我門の外に立ちて叩く、若し人我の
聲を聞きて、門を闢かば、我彼の處に入りて、彼と偕に、彼も我と、偕に飲食せん。二一 勝つ
者は、我彼をして、我と偕に我が寶座に坐せしめん、我も勝ちて、我が父と偕に其寶座に
坐せしが如し。二二 耳ある者は神の諸教會に言ふ所を聞くべし。

第四章

一 此の後我仰ぎ觀しに、爰に天に門闢けて、先に聞きし所の箛の如く我に語
れる聲は曰へり、此に上れ、我此より後に成るべき事を爾に示さん。二 我忽神に在り
き、視よ、天に寶座は設けられ、寶座の上に坐する者あり。三 此の坐する者は、貌碧玉瑪
瑙に似たり、虹は寶座を繞りて、其色葱珩の如し。四 寶座を繞りて、又二十四の寶座あ
り、此の寶座には、我二十四の長老の坐するを見たり、白き衣を衣、其首に金の冕を戴け

り。五 寶座より閃電と迅雷と聲と出でたり、寶座の神なり。六 寶座の前に玻瓈の海の水晶に似たるあり、寶座の生物の前にも後にも目滿ちたり。七 第一の生物は獅に似たり、第二の生物は人の如き面あり、第三の生物は飛ぶ鷲に似たり。八 四の生物は各〻周體に六の翼あり、內には目滿ちたり、日夜息めずして曰ふ、聖なる哉、聖なる哉、主神全能者、先にも在りし、今在り、後に在らんさする者よ。九 生物が寶座に坐する者に、光榮と尊貴と感謝さを歸する時、一〇 二十四の長老は寶座に坐する者の前に俯伏し、無窮の世に生くる者を拜し、其冕を寶座の前に置きて曰ふ、

一一 主よ、爾は光榮と尊貴と權力さを受くるに當れり、蓋爾は萬物を造れり、爾の旨に由りて萬物は存し、且造られたり。

第五章

一 我又寶座に坐する者の右の手に書を執れるを見たり、其內外に書せるあり、七の印を以て封ぜられたり。二 我又有能の天使が大なる聲を以て宣ぶるを見たり、曰く、誰か此の書を開き、其印を脫くに堪ふる。三 天にも、地にも、地の下にも、誰も此の書

を開き、或は之を觀ることを得る者なかりき。四一も此の書を開きて、之を讀み、或は之
を觀るに堪ふる者を得ざりしに因りて、我多く哭けり。五長老の一人我に言ふ、哭く勿
れ、視よ、イウダの支派より出でたる獅、ダワイドの根は、勝を得たり、彼は此の書を開き、其
七の印を解くを得るなり。六我又觀しに、爰に寶座及び四の生物の中、及び長老等の中
に、屠られしが如き羔の立てるあり、七の角、及び七の目、卽全地に遣されたる神の七の
神を有てる者なり。七彼來りて、寶座に坐する者の右の手より書を取れり。八其書を取
りし時、四の生物、及び二十四の長老は、羔の前に俯伏せり、各琴と香を滿つる金の鼎と
を執れり、是諸聖人の祈禱なり、九乃新なる歌を歌ひて曰ふ、爾は書を取りて、其印を
開くに堪へたり、蓋爾は屠られて、己の血を以て、諸族、諸音、諸民、諸國の中より我等を贖
ひて、神に歸せしめ、一〇且我等の神の前に、我等を王及び司祭と爲せり、我等地に王た
らんと。一一我又見且聞きしに、寶座と生物と長老等との周圍に多くの天使の聲あり、
其數は萬萬千千なり、一二彼等大なる聲を以て言へり、屠られたる羔は權威と、富有と、
睿智と、能力と、尊貴と、光榮と、祝讃とを受くるに當れり。一三我又凡の受造物、天に在り

地に在り、地の下に在り、海に在り、及び凡そ其中に在る者の言ふを聞けり、曰く、寶座に坐する者及び羔に、祝讃と、尊貴と、光榮と、權能とは無窮の世に歸す。一四 四の生物は曰へり、「アミン」。二十四の長老は俯伏して、無窮の世に生くる者を拜せり。

第六章

一 我羔が七の印の第一を開けるを見たり、時に我四の生物の一が雷の如き聲を以て言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。二 我觀しに、爰に白き馬あり、之に乘れる者弓を執れり、且冕は彼に與へられたり、彼は勝を得たる者として出で、又勝たん爲に出でたり。三 第二の印を開きし時、我第二の生物の言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。四 乃他の馬、色の赤き者出でたり、之に乘れる者には、地より和平を奪ひ、互に相殺さしむる權は與へられ、又彼に大なる刃は與へられたり。五 第三の印を開きし時、我第三の生物の言ふを聞けり、曰く來りて觀よ。我觀しに、爰に玄き馬あり、之に乘れる者は其手に權衡を執れり。六 我四の生物の中に聲あるを聞けり、曰く、銀一枚に麥一量、銀一枚に麪麥三量なり、油と酒とを傷ふ勿れ。七 第四の印を開きし時、我第四の生物の言ふを聞けり、曰く、來りて觀よ。八 我觀しに、爰に灰色の馬あり、之に乘れる者は其名を死と曰ふ、地獄は其

後に隨へり、彼に地の四分の一に權は與へられたり、以て殺さん爲なり。九第五の印を開きし時、我祭壇の下に於て、神の言の爲、及び立てし所の證の爲に殺されたる者の靈を見たり。一〇彼等は大なる聲を以て呼びて曰へり、聖にして眞實なる主宰よ、爾は何の時に至るまで審判せず、地に居る者に、我等の血の爲に報を爲さざるか。一一即ち彼等各人に白き衣は與へられ、且彼等に言はれたり、尙少時安んじて、其同勞者及び兄弟が、彼等の如くに殺されて、其數を盈たすに至るべし。一二第六の印を開きし時、我觀しに、爰に大なる地震あり、日は毛衣の如く黑くなり、月は血の如くになれり。一三天の星は地に隕ちしこと、無花果樹の大なる風に搖られて、其の未だ熟せざる果を落すが如し。一四天は逝きしこと、書卷を捲くが如く、山と嶋と皆移りて、其處を離れたり。一五地の帝王と、侯伯と、富める人と、千夫長と、勇士と、凡の奴僕と、凡の自主の者とは、洞及び山の巖に匿れ、一六山と巖とに言ふ、我等の上に墜ちて、我等を寶座に坐する者の面、乃び羔の怒より匿せよ、一七蓋其怒の大なる日至れり、孰か能く立たん。

第七章

一此の後、我四の天使が、地の四隅に立ち、地の四の風を執りて、地にも、海にも、凡の樹にも、風を吹かしめざるを見たり。二又他の天使が、日の出づる方より上りて、活ける神の印を有てるを見たり。彼は大なる聲を以て、地と海とを傷ふ權の與へられた四の天使に呼びて曰へり、三我等が我が神の諸僕の額に印するに至るまで、地をも、海をも、樹をも傷ふ勿れ。四且我印せられし者の數を聞きしに、イズライルの諸子の諸派より十二千印せられし者一百四十四千ありき。五イウダの支派より十二千印せられ、ルベムの支派より十二千印せられ、ガドの支派より十二千印せられ、六アシルの支派より十二千印せられ、ナフタリの支派より十二千印せられ、マナセの支派より十二千印せられ、七シメオンの支派より十二千印せられ、レワイの支派より十二千印せられ、イッサハルの支派より十二千印せられ、八ザブロンの支派より十二千印せられ、ヨセフの支派より十二千印せられ、ベニアミンの支派より十二千印せられたり。九此の後我觀しに、看よ誰も數ふる能はざりし大衆、諸國、諸族、諸民、諸音より及び羔の前に立ち、白き衣を衣、其手に棕櫚の枝を執り、一〇大なる聲を以て呼びて曰

へり、救は寶座に坐する我等の神及び羔に在り。一一 悉くの天使は寶座と、長老等と、
四の生物との周圍に立ち、寶座の前に俯伏し、神を拜して 一二 曰へり、「アミン」、願はくは
祝讃と、光榮と、睿智と、感謝と、尊貴と、權威と、能力とは、我等の神に無窮の世に歸せん、「ア
ミン」。一三 時に長老の一人我に問ひて曰へり、此の白き衣を衣たる者は誰ぞ、且何より
來りしか。一四 我對へて曰へり、主よ、爾之を知る。彼我に言へり、此れ大なる患難より來
りし者なり、彼等は羔の血を以て己の衣を滌ひて、之を白くせり。一五 故に彼等は神の
寶座の前に在り、其殿に於て日夜彼に奉事す、寶座に坐する者は彼等の中に居らん。
一六 彼等は復飢ゑず、復渴かず、日と凡の熱とは彼等を侵さざらん、一七 蓋寶座の中に
在る羔は彼等を牧し、彼等を活ける水の泉に導かん、且神は盡く其涙を其目より拭は
ん。

第八章

一 第七の印を開きし時、天靜なりしこと約半時。二 我七の天使が神の前に立
てるを見たり、七の箛は彼等に與へられたり。三 又他の天使來りて、祭壇の前に立ち、金
の香爐を持てり、多くの香は彼に與へられたり、彼が之を悉くの聖人の祈禱と偕に、寶

座の前に在る金の祭壇の上に獻げん爲なり。四 香の烟は諸聖人の祈禱と偕に、天使の手より神の前に升れり。五 天使は香爐を執り、之に祭壇の火を盛りて、地に投げたるに、雷と、迅雷と、閃電と、地震とは起れり。六 七の鉱を持てる七の天使は之を吹く備を爲せり。七 第一の天使鉱を吹きたるに、雹と火とは血に雜りて、雨りて地に隕ちたり。樹の三分の一は焚け、青き草も悉く焚けたり。八 第二の天使鉱を吹きたるに、大なる山の如き者火に燃ゐて、海に投ぜられたり、海の三分の一は血と爲り、九 海に在る生ける物の三分の一は死し、舟の三分の一は滅びたり。十 第三の天使鉱を吹きたるに、大なる星は燈の如くに燃ゐて、天より隕ち、河の三分の一及び水の泉に隕ちたり。十一 星の名を茵陳と曰ふ、水の三分の一は茵陳の如く爲れり、多くの人は水に因りて死せり、其の苦くなりたる故なり。十二 第四の天使鉱を吹きたるに、日の三分の一、月の三分の一、星の三分の一は擊たれて、其三分の一は暗くなりたり、晝の三分の一は光なく、夜も亦然の天使が吹かんとする鉱の聲に因りて、地に居る者は禍なる哉、禍なる哉、禍なる哉。

第九章

一 第五の天使箛を吹きたるに、我星の天より地に隕ちたるを見たり、淵の坑の鑰は彼に與へられたり。二 彼淵の坑を啓きしに、坑より烟上れり、洪なる爐の烟の如し、日と空氣とは坑の烟に因りて暗くなれり。三 烟より蝗は地に出でたり、之に權の與へられしこと、地の蠍にある權の如し。四 又之に地の草と、凡の綠と、凡の樹とを傷ふ勿く、第其額に神の印なき人のみを傷ふべきを命ぜられたり。五 且之に彼等を殺すこと勿く、第五月間苦しむるを許されたり、其苦は蠍が人を螫す時の苦の如し。六 其日人人死を求むとも、之を得ざらん、死せんと望むとも、死は彼等より遁れん。七 蝗の狀は戰に備へられたる馬の如し、其首に金に似たる冕の如き者あり、其面は人の面の如し。八 其髮は女の髮の如く、其齒は獅の如し。九 其甲は鐵の甲の如く、其翼の聲は、多くの馬が戰に馳せて、引く所の車の聲の如し。一〇 其尾は蠍の如し、尾に蠆あり、其權は五月間人人を傷ふなり。一一 其王は淵の使者なり、彼の名は、エウレイの言にてはアヴッドンと曰ひ、モリンの言にてはアポリヲンと曰ふ。一二 一の禍は去りて、視よ、其後尚二の禍は來る。一三 第六の天使箛を吹きたるに、我は神の前に在る金の祭壇の四の角より出づる一

の聲が、一四 箙を持てる第六の天使に言ひしを聞けり、曰く、大なる河エフラトの邊に繋がれたる四の天使を釋け。一五 乃四の天使は釋かれたり、是れ一時、一日、一月、一年間に、人人の三分の一を殺さん爲に備へられたる者なり。一六 騎軍の數は二萬萬あり、我其數を聞けり。一七 是くの如く我異象に於て馬と之に乘れる者とを見たり、彼等の甲は火と、紫石と、硫磺との如し、馬の首は獅の首の如く、口より火と、烟と、硫磺と出でたり。一八 斯の三の者、卽其口より出づる火と、烟と、硫磺とに由りて、人人の三分の一は殺されたり。一九 蓋馬の勢は其口及び其尾に有りき、其尾は蛇に似て、首あり、之を以て傷を爲せり。二〇 其餘の人、此の災に殺されざりし者は、猶其手の所爲を悔改せずして、魔鬼及び金銀銅石木の偶像、見ること、聞くこと、行くこと能はざる者を拜するを止めざりき、二一 又其兇殺、其魔術、其淫行、其盜竊を悔改せざりき。

第十章

一 我又有能なる他の天使の、雲を衣て天より降るを見たり、其首の上に虹あり、其面は日の如く、其足は火の柱の如し。二 其手には披きたる小卷を持てり、其右の足を海に、左の足を地に立てたり。三 彼大なる聲を以て獅の吼ゆるが如く呼べり、彼が呼

びし時、七の雷はその聲を以て語れり。四七の雷が其聲を以て語りし時、我之を書さんとせしが、天より我に言ふ聲を聞けり、曰く、七の雷の語りしことは、之を封じて、書す勿れ。五我が見し所の海及び地に立てる天使は、其手を擧げて天に向ひ、六無窮の世に生くる者、即ち天及び其中の物、海及び其中の物、地及び其中の物を造りし者を指して誓ひて曰へり、此より復時無からん、七第七の天使が籟を吹きて、聲を出さん日に、神の奥義は成就せられん、彼が其諸僕預言者に福音せしが如し。八我が天より聞きし聲、又我に語りて曰へり、往きて、海及び地に立てる天使の手に拔きたる小卷を取れ。彼に謂へり、小卷を我に與へよ。彼我に謂ふ、取りて之を食へ、此れ爾の腹を苦からしめん、然れども爾の口には、甜きこと蜜の如くなるべし。九我天使の手より小卷を取りて、之を食へり、此れ我が口に甜きこと蜜の如くなりしが、之を食ひし後、我が腹苦くなれり。一〇彼我に謂ふ、爾復多くの民と、族と、音と、王との事を預言すべし。

第十一章　一

杖に似たる葦を我に與へて曰く、起ちて、神の殿と、祭壇と、其中に拜する者を測れ。二殿の外の庭は棄て測ること勿れ、之は異邦人に與へられたればなり。彼等は聖城を四十二月踐まん。三我二人の證者に權を與へん、彼等は荒布を纏ひて千二百六十日預言せん。四此二人は地の主の前に立てる二の橄欖樹と二の燈臺なり。五人若害せんとせば、火その口より出でて敵を呑盡さん、人若害せんとせば、必かく殺さるべし。六此二人は預言する日の間雨降らぬ樣に天を閉ぢんことの權を有す、又水を變じて血となし、何時にても欲する所の災を以て地を擊つことの權を有す。七彼等その證を終へんとする時、底なき所より上る獸、彼等と戰ひて勝ち、之を殺さん。八彼等の屍は大なる城の街に在らん、其城は靈的に之をソドム又はエジプトと稱ふ、彼等の主も亦十字架に釘けられたり。九諸民、族、音、國の人、三日半の間彼等の屍を見、其屍を墓に葬ることを許さざらん。一〇地に住む者は彼等の事を喜び、樂み、且互に贈物を爲さん、是二人の預言者地に住む者を苦めたればなり。一一三日半の後、神より生命の氣彼等に入りて、彼等足にて立ちたれば、之を見る者大に懼れたり。一二彼等天より大聲の我に此に昇れと言ふを聞けり、彼等雲に乘りて天に昇れり、其敵之を見たり。一三其時大地震ありて、城の十分の一崩れ、地震にて七千人死し、餘の者は恐懼して天の神に榮光を歸したり。一四第二の禍は過ぎ去れり、視よ第三の禍速に來らん。一五第七の天使吹きたれば、天に大聲ありて言ふ、世の國は我主とその基督の國となれり、主は世々限なく王たるべし。一六二十四の長老神の前に其座に坐せるが、俯伏して神を拜し、一七言ふ、昔在り今在す全能の神、我等爾の大なる權を執りて王たるを感謝す。一八諸國民怒りたれば、爾の怒の來れり、死人を審く時、僕預言者と聖徒と爾の名を畏るる者と、小なる者と大なる者とに賞を與へ、地を亡す者を亡す時來れり。一九神の殿天にて開かれ、其殿の中に其契約の櫃見えたり、又電光、聲、雷、地震、大雹起れり。

第十二章　一

天に大なる徴現はれたり、一人の婦日を衣、月を足の下に踏み、頭に十二の星の冠を戴けり。二彼孕みて、產の苦痛と艱難とにて叫べり。三又天に徴現はれたり、視よ大なる赤き龍あり、七の頭と十の角とを有し、頭に七の冠を戴けり。四その尾天の星の三分の一を掃ひ、地に投げたり、龍その產まんとする婦の前に立てり、其產まば其子を呑まんとせるなり。五婦男子を產めり、此子は鐵の杖を以て萬國の民を牧すべき者なり、其子神の前と其座の前とに擄げられたり。六婦は荒野に逃げ往けり、其處に千二百六十日養はるる爲に神の備へたる所なり。七天に戰ありき、ミカエルと其使等龍と戰ひ、龍とその使等戰ひたれども、八勝つこと能はず、天に最早その處なかりき。九かの大なる龍、即ち古の蛇、悪魔又サタンと稱へらるる者、全世界を惑す者、投げ出されたり、地に投げ出されたり、その使等も共に投げ出されたり。一〇我天に大聲の言ふを聞けり、曰く、今我等の神の救と能と國と、その基督の權とは來れり、我等の兄弟を晝夜神の前に訴へたる者投げ出されたればなり。一一彼等は羔の血と己が證の言とに因りて勝ち、死に至るまで己が生命を愛せざりき。一二是故に天と其中に住む者とは喜べ、地と海とは禍なるかな、悪魔大なる憤を以て爾等に下れり、その時の短きを知ればなり。一三龍は己が地に投げ出されたるを見、男子を產みたる婦を逐ひたり。一四婦は荒野に己が處に飛び往くために、大鷲の二の翼を與へられたり、其處にて蛇の面を避けて、一時二時半時養はるるなり。一五蛇その口より水を河の如く婦の後に出して、婦を流れに沒せしめんとせり。一六地婦を助けんとて口を開き、龍その口より出せる河を呑めり。一七龍婦を怒りて、神の誡命を守り、イエスの證を有てる其餘の子孫と戰はんとて往けり。一八龍海の濱に立てり。

第十三章　一

我一の獸の海より上るを見たり、其獸十の角と七の頭とを有し、その角に十の冠を戴け、その頭に神を瀆す名あり。二我が見し獸は豹に似、その足は熊の足の如く、その口は獅子の口の如し、龍その權と位と大なる權とを獸に與へたり。三その頭の一は死に至る傷を受けたるが如くなりしが、その死に至る傷癒えたり、全地擧りて獸に從ひ、四龍の獸に權を與へたるを拜し、又獸を拜して言ふ、誰か獸に比べ得べき、誰か之と戰ひ得べきと言へり。五獸大言と瀆言とを言ふ口を與へられ、四十二月權を行ふことを許されたり。六獸その口を開きて神を瀆し、その名と、その幕屋と、天に住む者とを瀆せり。七又聖徒と戰ひて之に勝つことを許されたり、又一切の族と、民と、音と、國とを治むる權を與へられたり。八地に住む者の中、世の創より屠られたる羔の生命の書に、その名を記されざる者は皆獸を拜せん。九耳ある者は聽け。一〇人を擄にする者は擄にせられて往かん、劍にて殺す者は劍にて殺されん、此に聖徒の忍耐と信仰とあり。一一我又一の獸の地より上るを見たり、その角羔の如く二あり、龍の如く言へり。一二その前に在る第一の獸の一切の權を行ひ、地と其に住む者とに、その死に至る傷癒えたる第一の獸を拜せしむ。一三又大なる徴を行ひ、人の前にて火を天より地に降らしむ。一四その獸の前に行ふことを許されたる徴を以て、地に住む者を惑し、劍の傷を受けて生きたる獸の像を造ることを地に住む者に命じたり。一五又その獸の像に生氣を與へて、獸の像物言ひ、又獸の像を拜せざる者を皆殺さしむることを許されたり。一六又小なる者と大なる者と、富める者と貧しき者と、自主の者と僕とを皆その右の手又は額に印せしめ、一七その印ある者の外は、誰も買ひ賣りすることを得ざらしむ、その印は獸の名又はその名の數なり。一八此に智慧あり、智ある者は獸の數を算へよ、其數は人の數なり、その數は六百六十六なり。

第十四章　一

我又視しに、視よ羔シオンの山に立ち、その額に羔の名とその父の名とを記されたる者十四萬四千人之と共にあり。二我天より大水の聲の如く、大雷の聲の如き聲を聞けり、我が聞きし聲は琴を彈ずる者の琴を彈ずるが如し。三彼等は座の前と四の活物と長老の前とにて新しき歌を歌へり、地より贖はれたる十四萬四千人の外は、誰も此歌を學ぶこと能はざりき。四彼等は婦人と汚れたることなき童貞なり、羔の往く所には何處にても隨ふ者なり、彼等は人の中より贖はれて、神と羔とに初穗となりたり。五その口に虚言なく、その前に瑕なし。六我又一の天使の中天を飛ぶを見たり、彼は地に住む者、即ち一切の國と、族と、音と、民とに傳ふる爲に、永遠の福音を携へたり。七彼大聲にて言ふ、神を畏れ、之に榮光を歸せよ、その審判の時來れり、天と地と海と水の源とを造りし者を拜せよ。八又第二の天使之に從ひて言ふ、大なるバビロンは倒れたり、倒れたり、その淫行の怒の酒を萬國の民に飲ませたればなり。九又第三の天使之に從ひて大聲に言ふ、若獸とその像とを拜し、その印を額又は手に受くる者あらば、一〇神の怒の杯に調へられたる混ぜ物なき怒の酒を飲まん、又聖なる使等と羔との前にて火と硫黄とにて苦めらるべし。一一その苦の煙は世々限なく騰り、獸とその像とを拜する者と、その名の印を受くる者とは、晝も夜も休息なかるべし。一二ここに聖徒の忍耐あり、神の誡命とイエスの信仰とを守る者是なり。一三我又天より聲あるを聞けり、曰く、書せよ、今より後主に在りて死ぬる死人は福なり、聖霊言ふ、然り、彼等その勞を息むべし、その行爲は彼等に隨ふなり。一四我又視しに、視よ白き雲あり、その雲の上に人の子の如き者坐せり、その頭に金の冠あり、その手に利き鎌あり。一五又他の天使殿より出でて、雲の上に坐せる者に大聲にて呼ばはり言ふ、爾の鎌を入れて刈れ、刈るべき時來れり、地の穀物熟したればなり。一六雲の上に坐せる者その鎌を地に入れたれば、地の穀物刈られたり。一七又他の天使天の殿より出でたり、彼も利き鎌を有てり。一八又他の天使祭壇より出でたり、彼は火を治むる權を有てり、利き鎌を有てる者に大聲にて呼ばはり言ふ、爾の利き鎌を入れて地の葡萄の房を刈れ、その葡萄熟したればなり。一九天使その鎌を地に入れて地の葡萄を刈り、神の怒の大なる酒榨に投げ入れたり。二〇酒榨城の外にて踐まれたり、酒榨より血出でて、馬の轡に及ぶまで、千六百スタディアに亘りて流れたり。

第十五章　一

我又天に大にして奇なる他の徴を見たり、即ち七の天使七の災を持てり、是最後の災なり、神の怒これを以て終る。二我又火の交れる玻璃の海の如きものを見たり、獸とその像とその名の數とに勝ちたる者、玻璃の海の上に立ちて、神の與へたる琴を持てり。三彼等神の僕モーセの歌と羔の歌とを歌ひて言ふ、全能の神ヱホバ、爾の作爲は大にして奇なり、萬國の王よ、爾の道は義にして眞なり。四ヱホバよ、誰か爾を畏れ、爾の名に榮光を歸せざらん、爾のみ聖なればなり、萬國の民來りて爾の前に拜せん、爾の義き審判顯はれたればなり。五此後我見しに、天にある證の幕屋の殿開かれたり。六七の災を持てる七の天使、殿より出でたり、彼等は潔き明かなる麻布を纏ひ、胸に金の帶を束ねたり。七四の活物の一、世々限なく生くる神の怒の滿ちたる七の金の鉢を七の天使に與へたり。八殿は神の榮光とその權とより出づる煙にて滿ちたり、七の天使の七の災畢るまでは、誰も殿に入ること能はざりき。

第十六章　一

我又殿より大聲の七の天使に言ふを聞けり、曰く、往きて神の怒の七の鉢を地に傾けよ。二第一の者往きてその鉢を地に傾けたり、獸の印ある者と、その像を拜する者とに惡しき腫物出でたり。三第二の者その鉢を海に傾けたり、海死人の如き血となり、海の中の生物皆死せり。四第三の者その鉢を河と水の源とに傾けたり、血となれり。五我水を掌る天使の言ふを聞けり、曰く、今在り昔在す聖なる者よ、爾此等の審判を行ひたれば義なり。六彼等は聖徒と預言者との血を流したれば、爾彼等に血を飲ませたり、是彼等の當然の報なり。七我又祭壇の言ふを聞けり、曰く、然り、全能の神ヱホバよ、爾の審判は眞にして義なり。八第四の者その鉢を日に傾けたり、日火を以て人を燒くことを許されたり。九人大なる暑熱にて燒かれ、此等の災を行ふ權ある神の名を瀆せり、而して悔改めて神に榮光を歸することを爲さざりき。一〇第五の者その鉢を獸の座に傾けたり、獸の國暗くなり、人その舌を噛みて苦痛を忍び、一一その苦痛と腫物とに因りて天の神を瀆せり、而して其行爲を悔改めざりき。一二第六の者その鉢を大河ユフラテに傾けたり、日の出づる方より來る王等の爲に道を備へんとて、その水涸れたり。一三我龍の口より、獸の口より、僞預言者の口より、蛙の如き三の汚れたる靈の出づるを見たり。一四是悪魔の靈にして、徴を行ひ、全世界の王等を集めて全能の神の大なる日の戰に備へんとて、之に往けり。一五視よ我盜人の如く來らん、裸にて行きて恥を見られざらんために、目を覺まし衣を守る者は福なり。一六彼等ヘブル語にてハルマゲドンと稱へらるる處に王等を集めたり。一七第七の者その鉢を空中に傾けたり、殿の座より大聲出でて、成就せりと言へり。一八是に於て電光、聲、雷ありき、又大地震ありき、人の地に生じてより、かかる地震ありしことなく、かく大なる地震ありしことなし。一九大なる城三に裂け、諸國の民の城倒れ、大なるバビロンは神の前に思出されて、その烈しき怒の酒の杯を與へられたり。二〇凡の島逃げ去り、山見えざりき。二一又一タラントの重さある大なる雹天より人に降れり、人この雹の災の甚だ大なるに因りて神を瀆せり。

第十七章　一

七の鉢を持てる七の天使の一、來りて我に語りて言ふ、此に來れ、我多くの水の上に坐する大淫婦に對する審判を爾に示さん。二地の王等彼と姦淫を行ひ、地に住む者その淫行の酒に醉ひたり。三彼我を御靈に感じたる儘に曠野に携へ往けり、我見しに、婦人緋色の獸に乘れり、その獸神を瀆す名滿ちたり、七の頭と十の角とを有てり。四婦人は紫と緋色とを着、金と寶石と眞珠とにて飾り、憎むべき物と其淫行の汚穢とに滿ちたる金の杯を手に持てり。五その額に奥義バビロン大なる者、淫婦と地の憎むべき物との母と記されたる名あり。六我婦人の聖徒の血と、イエスの證者の血とに醉ひたるを見たり、我彼を見て大に驚けり。七天使我に言ふ、何故に驚くや、我婦人の奥義と、彼を載せたる七の頭と十の角とある獸とを爾に告げん。八爾の見し獸は昔在りしが今在らず、將に底なき所より上りて滅に入らんとす、地に住む者の中、世の創より生命の書にその名を記されざる者は、昔在りしが今在らず、後來らんとする獸を見て驚かん。九此に智慧ある心あり、七の頭は婦人の坐する七の山なり、又七の王なり。一〇五は既に倒れ、一は今在り、他の一は未だ來らず、來れども暫時の間のみ留まるべし。一一昔在りしが今在らざる獸は第八なり、又七の中より出でて滅に入る者なり。一二爾の見し十の角は十の王なり、未だ國を受けざれども、獸と共に一時王たる權を受くべし。一三彼等は一の意を有てり、その權と力とを獸に與へん。一四彼等は羔と戰ふべし、羔は王の王、主の主なれば、羔と共にある召されたる者、選ばれたる者、忠なる者、之に勝つべし。一五彼我に言ふ、爾の見し水、即ち淫婦の坐する所は、民と、群と、國と、音とにして、一六爾の見し十の角と獸とは淫婦を憎み、之を荒し且裸にし、その肉を食ひ、之を火にて燒き盡さん。一七神その意を成し、一の意を成し、その國を獸に與へて、神の言の成就するまでは、之をなさんと彼等の心に入れたればなり。一八爾の見し婦人は地の王等を治むる大なる城なり。

第十八章　一

此後我他の天使の大なる權を有てり、天より降るを見たり、地その榮光にて明かになれり。二彼力ある聲にて呼ばはり言ふ、大なるバビロン倒れたり、倒れたり、悪魔の住所、諸の汚れたる靈の巢窟、諸の汚れたる憎むべき鳥の巢窟となれり。三諸國の民その淫行の怒の酒を飲み、地の王等彼と姦淫を行ひ、地の商人その奢侈の餘力にて富を得たればなり。四我又他の聲天より言ふを聞けり、曰く、我民よ、彼より出でよ、その罪に與らざらんため、その災を受けざらんためなり。五その罪は積りて天に及び、神その不義を憶ひ給へり。六彼が與へたる如く彼に與へ、その行爲に隨ひて二倍に報いよ、彼が人に與へたる杯に、二倍の分を入れよ。七彼が己を榮光し奢侈に過ごしたる如く、之に苦と悲とを與へよ、彼その心に我は女王の座に坐す者にして寡婦にあらず、決して悲を見ざるべしと言へばなり。八是故に一日の間に、その災、死と悲と飢饉とに來らん、又火にて燒かれん、その審判を行ふ主神は強ければなり。九地の王等彼と姦淫を行ひ、その奢侈に與りたる者、その燒かるる煙を見て、彼の爲に泣き悲しまん。一〇その苦の畏れて遠く立ち、言ふ、禍なるかな、禍なるかな、大なる城バビロン、強き城、一時の間に爾の審判來れりと。一一地の商人彼の爲に泣き悲しまん、その貨物を買ふ者なければなり。一二その貨物は金、銀、寶石、眞珠、細布、紫、絹、緋、諸の香木、諸の象牙の器、諸の貴き木、銅、鐵、大理石の器、一三肉桂、香料、香、沒藥、乳香、葡萄酒、油、麥粉、小麥、牛、羊、馬、車、奴隷、人の魂なり。一四爾の心の慕ひし果物は爾を離れ去り、諸の美しき物と光ある物とは爾を離れ去りたり、人再び之を見ざるべし。一五此等の物を賣りて富を得たる商人、彼の苦を畏れて遠く立ち、泣き悲しみて言ふ、一六禍なるかな、禍なるかな、細布、紫、緋を着、金と寶石と眞珠とにて飾りたる大なる城、一七一時の間に此の如き大なる富滅びたりと。又凡の船長、凡の航海する者、水夫、海にて働く者皆遠く立ち、一八その燒かるる煙を見て叫びて言ふ、此大なる城の如き者何處にかあらんと。一九又その頭に塵を撒き、泣き悲しみて叫びて言ふ、禍なるかな、禍なるかな、海に船ある凡の者その貴きことに因りて富を得たる大なる城、一時の間に荒されたりと。二〇天よ、聖徒よ、使徒よ、預言者よ、彼の爲に樂めよ、神彼に對して爾等の爲に審判を行ひ給へばなり。二一一の力ある天使大なる碾臼の如き石を取りて海に投げ入れ言ふ、大なる城バビロンは此の如く激しく投げ出されて、再び見られざるべし。二二又琴を彈ずる者、樂人、笛吹、喇叭吹の聲再び爾の中に聞かれず、凡の技藝ある工人再び爾の中に見られず、碾臼の音再び爾の中に聞かれず、二三燈の光再び爾の中に照らず、新郎新婦の聲再び爾の中に聞かれず、爾の商人は地の大人なりしが、爾の魔術にて諸國の民迷はされたればなり。二四又預言者と聖徒と地に殺されたる凡の者の血、彼の中に見出されたり。

第十九章　一

此後我天に大なる群衆の言ふ聲を聞けり、曰く、ハレルヤ、救と榮光と權とは我等の神に屬す。二その審判は眞にして義なり、彼その淫行にて地を汚したる大なる淫婦を審き、その僕の血を彼の手より討ち復讐したればなり。三又言ふ、ハレルヤ、その燒かるる煙は世々限なく騰るなり。四二十四の長老と四の活物とは俯伏して、座に坐せる神を拜して言ふ、アメン、ハレルヤ。五又座より聲出でて言ふ、我等の神に讃美せよ、神を畏るる者、小なる者と大なる者とは皆讃美せよ。六我又大なる群衆の聲、多くの水の聲、強き雷の聲の如きを聞けり、曰く、ハレルヤ、全能の神ヱホバ王たり。七我等喜び樂み、神に榮光を歸せん、羔の婚姻の時來れり、その妻は己を備へたればなり。八彼は潔き明かなる麻布を着ることを許されたり、麻布は聖徒の義なり。九又我に言ふ、書せよ、羔の婚姻の宴に招かれたる者は福なりと。又我に言ふ、此は神の眞の言なり。一〇我彼を拜せんとて、その足の前に俯伏したるに、彼我に言ふ、爾之を爲すこと勿れ、我は爾と爾の兄弟等とイエスの證を有てる者と共に僕なり、神を拜せよ、イエスの證は預言の靈なり。一一我又天の開けたるを見たり、視よ白き馬あり、之に乘る者を忠信と眞實と稱へ、義を以て審き且戰ふ。一二その目は燄の如く、その頭には多くの冠あり、その身には己の外誰も知らざる名記されたり。一三その着たる衣は血に染みたり、その名は神の言と稱へらる。一四天にある軍勢白き馬に乘り、白く潔き麻布を着て彼に從へり。一五その口より利き劍出でたり、是にて諸國の民を擊ち、鐵の杖を以て之を牧し、全能の神ヱホバの烈しき怒の酒榨を踐むべし。一六その着たる衣と腿とに王の王、主の主と記されたる名あり。一七我又一の天使の日に立つを見たり、彼大聲にて呼ばはり、天の中を飛ぶ凡の鳥に言ふ、來れ、神の大なる宴に集まれ、一八王の肉、將軍の肉、勇士の肉、馬とそれに乘る者の肉、凡の人の肉、自主の者と僕と小なる者と大なる者との肉を食へと。一九我獸と地の王等とその軍勢とを集めて、馬に乘る者とその軍勢とに戰を挑むを見たり。二〇獸は捕へられ、獸の前にて徴を行ひ、之を以て獸の印を受けたる者と、その像を拜する者とを惑したる僞預言者も共に捕へられたり、此二者は硫黄の燃ゆる火の池に活きながら投げ入れられたり。二一其餘の者は馬に乘る者の口より出でたる劍にて殺されたり、凡の鳥その肉に飽きたり。

第二十章　一

我又一の天使の天より降るを見たり、彼底なき所の鍵と大なる鎖とを手に持てり。二彼龍、即ち古の蛇、悪魔又サタンと稱へらるる者を捕へ、之を千年の間縛り、三底なき所に投げ入れ、之を閉ぢ且その上に印して、千年の終るまでは、諸國の民を惑すこと無からしめたり、其後暫時の間解かるべし。四我又座を見たり、審判を行ふ權を與へられたる者坐せり、又イエスの證と神の言とのために首を斬られたる者の靈魂を見たり、彼等は獸とその像とを拜せず、その印を額又は手に受けざりし者なり、彼等生きかへりて千年の間キリストと共に王たるべし。五其餘の死人は千年の終るまでは生きかへらざりき、是第一の復活なり。六第一の復活に與る者は福なり聖なり、第二の死は之に權なし、彼等は神とキリストとの祭司となりて、千年の間キリストと共に王たるべし。七千年終らば、サタンその獄より釋かれ、八出でて地の四方の諸國の民、即ちゴグとマゴグとを惑し、之を集めて戰はしめんとす、その數は海の濱の砂の如し。九彼等地の廣き所に上り、聖徒の陣營と愛せられたる城とを圍みたり、然るに天より火降りて彼等を呑盡せり。一〇彼等を惑したる悪魔は、獸と僞預言者との居る火と硫黄との池に投げ入れられたり、彼等は世々限なく晝夜苦められん。一一我又大なる白き御座と、其に坐する者とを見たり、地も天も其面より逃げ去りて、その處なかりき。一二我又死人の大なる者も小なる者も神の前に立てるを見たり、諸の書開かれたり、又他の書開かれたり、是生命の書なり、死人その書に記されたる事により、その行爲に隨ひて審かれたり。一三海その中の死人を出し、死と陰府とその中の死人を出したり、各その行爲に隨ひて審かれたり。一四死と陰府とは火の池に投げ入れられたり、是第二の死なり、一五凡そ生命の書にその名を記されざる者は火の池に投げ入れられたり。

第二十一章　一

我又新しき天と新しき地とを見たり、前の天と前の地とは既に去り、海も亦なかりき。二我聖なる城新しきエルサレムの神の許を出で、天より降るを見たり、その夫の爲に飾りたる妻の如く備へたり。三我又大聲の天より出づるを聞けり、曰く、視よ神の幕屋人と共にあり、神彼等と共に住み給ふ、彼等は神の民となり、神自ら彼等と共にいまして、彼等の神となり給ふ。四神その目より凡の涙を拭ひ給ふ、死も悲も叫も苦も再びあらざるべし、前のものは既に去りたればなり。五座に坐する者言ふ、視よ我凡の物を新にす、又言ふ、書せよ、此言は信實にして眞なり。六又我に言ふ、事既に成れり、我はアルパとオメガ、初と終なり、渇く者には我生命の水の泉より價なくして飲ません。七勝つ者は此等の物を嗣ぐべし、我その神となり、彼は我が子となるべし。八但し怯者、不信者、憎むべき者、人を殺す者、淫行する者、魔術を行ふ者、偶像を拜する者、凡の虚僞を行ふ者は、火と硫黄とにて燃ゆる池に與るべし、是第二の死なり。九七の災を盛りたる七の鉢を持てる七の天使の一、來りて我に語りて言ふ、此に來れ、我羔の妻なる新婦を爾に示さん。一〇彼御靈に感じたる儘に我を携へて大なる高き山に往き、聖なるエルサレムの神の許を出で、天より降る城を我に示せり。一一その城は神の榮光を有てり、その光は最も貴き寶石の如く、碧玉の如く水晶の如く明かなり。一二大なる高き城壁と十二の門とあり、門に十二の使ありて、門の上に名を記せり、是イスラエルの子孫十二の族の名なり。一三東に三の門、北に三の門、南に三の門、西に三の門あり。一四城壁に十二の基あり、羔の十二の使徒の十二の名その上に記されたり。一五我と語ひし者は城と其門と城壁とを測らんとて、金の測竿を持てり。一六城は四方にして、長さと幅と同じ、彼その測竿にて城を測りたるに、一萬二千スタディアなり、長さと幅と高さと同じ。一七又その城壁を測りたるに、人の測即ち使の測にて百四十四キュビトなり。一八城壁は碧玉にて造られ、城は純金にて、清き玻璃の如し。一九城壁の基は諸の寶石にて飾れり、第一の基は碧玉、第二は藍玉、第三は瑪瑙、第四は緑玉、二〇第五は紅縞瑪瑙、第六は紅玉髓、第七は橄欖玉、第八は綠柱玉、第九は黄玉髓、第十は青玉、第十一は青玉、第十二は紫水晶なり。二一十二の門は十二の眞珠にて、門毎に一の眞珠なり、城の大路は清き玻璃の如き純金なり。二二我その中に殿を見ざりき、全能の神ヱホバと羔とは其殿なればなり。二三城は日月の照すを要せず、神の榮光之を照し、羔は其燈火なればなり。二四諸國の民その光の中に歩み、地の王等その榮光を携へ來らん。二五その門は晝閉ぢられず、夜なければなり。二六人々その榮光と貴重とを携へ來らん。二七凡そ汚れたる者、憎むべき事と虚僞とを行ふ者は、決して入ること能はず、羔の生命の書にその名を記されたる者のみ入ることを得べし。

第二十二章　一

彼又生命の水の河を我に示せり、その水晶の如く清く、神と羔との座より出でて、二城の大路の中を流れ、河の此岸彼岸に生命の樹ありて、十二の果を結び、毎月その果を出し、その樹の葉は諸國の民を醫すなり。三凡そ呪ふべき者は再びあらざるべし、神と羔との座その中にあり、その僕等は之に事へ、四その面を見ん、その名は彼等の額にあるべし。五夜なかるべし、燈火の光も日の光も要せず、主神彼等を照し給ふ、彼等は世々限なく王たるべし。六彼我に言ふ、此言は信實にして眞なり、預言者の靈の神主その僕等に、速に成るべき事を示さんとて、その使を遣し給へり。七視よ我速に來らん、此書の預言を守る者は福なり。八我ヨハネ此等の事を聞き且見たり、聞きて且見たる時、此等の事を我に示したる使の足の前に俯伏して拜せんとしたるに、九彼我に言ふ、爾之を爲すこと勿れ、我は爾と爾の兄弟等預言者と此書の言を守る者と共に僕なり、神を拜せよ。一〇又我に言ふ、此書の預言の言を封ずること勿れ、時近ければなり。一一不義を行ふ者は猶不義を行へ、汚れたる者は猶汚れよ、義を行ふ者は猶義を行へ、聖なる者は猶聖くあれ。一二視よ我速に來らん、我報酬を携へ來りて、各その行爲に隨ひて報いん。一三我はアルパとオメガ、初と終、最初の者と最後の者なり。一四その衣を洗ふ者は福なり、彼等は生命の樹に與ることを得、門を通りて城に入ることを得べし。一五犬、魔術を行ふ者、淫行する者、人を殺す者、偶像を拜する者、凡そ虚僞を愛し且行ふ者は外に在るべし。一六我イエス我使を遣して、諸教會の爲に此等の事を證せり、我はダビデの根また裔、輝ける明星なり。一七御靈と新婦とは言ふ、來れと、聞く者も來れと言へ、渇く者は來れ、願ふ者は價なくして生命の水を飲め。一八我此書の預言を聞く凡の者に證す、若人此に加へば、神此書に記されたる災を彼に加へ給ふべし。一九若人此預言の書の言より何を省かば、神その人の生命の樹と聖なる城とより、その分を省き給ふべし。二〇此等の事を證する者曰く、然り、我速に來らん、アメン、主イエスよ來り給へ。二一願くは主イエスの恩惠凡の聖徒と共にあらんことを。

に拜する者とを度れ、二然れども殿の外の庭は、之を除きて、度る勿れ、蓋此れ異邦人等に與へられたり、彼等は聖なる城を躙すこと、四十二月ならん。三我は我が二の證者に與へん、彼等は麻の衣を衣て、預言すること、一千二百六十日ならん。四此れ乃二の橄欖樹、及び二の燈臺にして、地の神の前に立つ所の者なり。五若し人彼等を害せんと欲せば、火は彼等の口より出でゝ彼等の敵を嚙まん、若し人彼等を害せんと欲せば、其人是くの如く殺さるべし。六彼等には、天を閉ぢて其預言する日に雨を地に降らせざる權あり、又水の上に權ありて、之を血に變ずるを得、且何の時に於ても、之を欲せば、凡の災を以て地を擊つを得るなり。七彼等が其證を畢へん時、淵より出づる獸は彼等と戰を爲し、彼等に勝ちて、彼等を殺さん。八其屍を大なる邑の衢に遺さん、此の邑は譬へてソドム及びエギペトと名づく、我等の主の十字架に釘せられし處なり。九諸民、諸族、諸音、諸國に屬する者は、三日半の間彼等の屍を見ん、且其屍を墓に藏むるを許さざらん。一〇地に居る者は之が爲に喜び、樂み、互に禮物を贈らん、蓋此の二の預言者は地に居る者を苦しめたり。一一然れども三日半の後に、生命の神は神より彼等の中に入り、彼

ら等は其足を以て立てり、而して大なる懼は彼等に及べり。一二彼等に言ふ大なる聲を聞けり、曰く、此に升れ。乃雲に乘りて天に升れり、彼等の敵も之を見たり。一三是の時大なる地震ありて、邑の十分の一は倒れ、地震に由りて殺されし者七千名あり、餘の者は懼を懷きて、光榮を天の神に歸せり。一四第二の禍は去りて、視よ、第三の禍は速に來る。一五第七の天使號を吹きたるに、天に大なる聲ありて曰へり、世の國は我等の主及び其ハリストスの國と爲れり、彼は王と爲りて無窮の世に至らん。一六神の前に已の寶座に坐する二十四の長老は俯伏して神を拜し、一七曰へり、主神全能者、今在り、先に在りし、後に在らんさすろ者よ、我等爾に感謝す、爾の能を執りて、王と爲りしに因る。一八諸民は怒れり、爾の諸僕、即預言者、聖人、及び小大を論ぜず、爾の名を畏るゝ者に賞を與へ、且地を壞ろ者を壞る時至れり。一九乃神の殿は天に開かれ、其殿の中に彼の約匱は見れたり、又閃電と、衆くの聲と、迅雷と、地震と、大なる雹とありき。

第十二章

一大なる異象は天に現れたり、日を衣たる婦あり、月は其足下に在り、首に

は十二の星の冕を戴けり。二彼孕み居りしが、產苦を病みて號べり。三又他の異象は天に現れたり、視よ、大なる、赤き龍あり、之れに七の首、十の角ありて、其首に七の冕を戴けり。四其尾は天の星の三分の一を曳きて、之を地に墮せり。龍は產まんとする時に、其子を食はん爲なり。五彼は男の子を生めり、此れ鐵の杖を以て萬民を牧せんとする者なり、子は神及び其寶座に擧げられたり。六婦は野の彼處に神より彼の爲に備へられたる處あり、彼を彼處に於て一千二百六十日閒養はん爲なり。七天には戰起れり、ミハイル及び其天使等は龍と戰ひしが、八敵すること能はずして、復天に彼等の處を得ざりき。九大なる龍は卽ち昔の蛇、惡鬼及びサタナと名づくる、全世界を惑はす者は地に墮されたり、其使等も亦墮されたり。一〇我天に大なる聲あるを聞けり曰く、今我等の神の國と、及び其キリストの權は至れり、蓋我等の兄弟の讒者、日夜我等の神の前に彼等を讒する者は墮されたり。一一彼等は羔の血及び己の證の言を以て之に勝ち、死に至るまで己の生命を愛まざりき。一二故に諸天及び之に居る者は樂しめ。地及び海に居

る者は禍なる哉、蓋惡魔は爾等に降り、且つ大なる怒を懷けり、其時の幾くもなきを知
るに因りてなり。一三龍は己が地に墮されしを見て、男の子を生みし婦を逐へり。一四
婦には大なる鷲の二の翼與へられたり、彼が野に飛び、己の處に至り、彼處に蛇の面を
避けて、一期、數期、及び半期の閒食はれん爲なり。一五蛇は婦の後に於て、其口より水を
河の如くに吐きて、彼を漂はさんと欲せり。一六然れども地は婦を助けたり、地は其口
を啓きて、龍が己の口より出しゝ河を呑めり。一七龍は婦を怒りて、彼の其餘の裔、卽
神の誡を守り、イイススハリストスの證を有つ者と戰はん爲に往けり。

第十三章

一我海の沙に立ちて、海より獸の出づるを見たり、之れに七の首、十の角あ
り、其角に十の冕を戴き、其首に神を讟る名を記せり。二我が見し所の獸は豹に似たり、
其足は熊の如く、其口は獅の口の如し、龍は彼に己の能、己の座及び大なる權を與へた
り。三我其首の一が傷を受けて、死せんとするが如きを見たり、此の死を致す傷愈えた
れば、全地奇として、獸に從ひ、四權を獸に與へし龍を拜し、且獸を拜して曰へり、誰か此
の獸の如きある、誰か能く彼と戰はん。五彼には誇大と謗讟とを言ふ口は與へられ、又

四十二月間行爲するの權は與へられたり。六彼は口を啓きて神を譖り、その名、その幕、及び天に居る者を譖れり。七且彼に聖徒と戰を爲すなど諸族、諸民、諸音、諸國の上に權は與へられたり。八凡そ地に居る者にして、世の始より屠られし羔の生命の書に名の錄されざる者は、皆彼を拜せん。九耳ある者は聽くべし。一〇人を擄にする者は、己も亦擄にせられ、劍なる者は、己も亦劍なるべし。此には聖徒の忍耐と信と在り。一一我又他の獸の地より出づるを見たり、羔に似たる二の角あり、其言ふこと龍の如し。一二彼は第一の獸の凡そ之に屬する者をして、死を致す傷の愈えたる第一の獸を拜せしむ。一三彼又大なる奇徴を行ひ、人の前に於て火を天より地に降らしむるに至り、一四且與へられし權に由りて、獸の前に行ふ所の奇徴を以て、地に居る者に言ひて、劍の傷を受けて尙活ける獸の像を造らしむ。一五又彼に獸の像に靈を入るゝ權は與へられたり、獸の像が言ふをして、凡そ獸の像を拜せざる者の殺さるゝを致さん爲なり。一六彼は衆人をして、小大、貧富、自主奴僕の別なく、其右の手、或は

その額に印誌を受けしめ、一七此の印誌或は其名の數ねらざる者をして、買ふことなし、賣ることをも得ざらしめん。一八此に智慧あり。智力ある者は獸の數を計へよ、蓋此れ人の數なり。其數は六百六十六なり。

第十四章

一我又觀しに、爰に羔はシオン山に立ち、彼と偕にする者一百四十四千あり、彼等の父の名は彼等の額に記されたり。二且我天より聲あるを聞けり、其聲は大なる雷の聲の如く、我又琴を彈く者が其琴を彈くが如き聲なり。三彼等は寶座の前、及び四の生物と長老等との前に、新なる歌の如きを歌ふ、此の歌は、地より贖はれたる一百四十四千の者の外に、誰も之を學ぶ能はざりき。四此の衆は婦女に玷がれざる者なり、彼等は羔の往く何處にも從ふ。彼等は人の中より贖はれて、神と羔とに初實の果たるなり。五彼等の口には詭譎なし、彼等は神の寶座の前に實むべきなし。六我又他の天使が中天に飛ぶを見たり、彼は地に居る者、諸國、諸族、諸音、諸民に福音を有ち、七大なる聲を以て言へり、神を畏れて、光榮を彼に歸せよ、蓋其審判の時至れり、天、地、海、及び水の泉を造りし者を拜せよ。八

又他の天使は其後に從ひて言へり、大なる巴比倫は傾れたり傾れたり、其淫亂の怒の酒を萬民に飲ましめたればなり。九第三の天使は彼等の後に從ひて、大なる聲を以て言へり、人若し獸と其像とを拜し、其印誌を己の額、或は己の手に受けば、一〇神の怒の酒、卽ち其怒の杯に盛りたる、雜なき酒を飲み、又聖なる天使等及び羔の前に於て、火と硫磺とを以て苦しめられん。一一彼等の苦の烟は上りて、無窮の世に至らん、獸と其像とを拜し、其名の印誌を受くる者は、日夜安息を得ざらん。一二此に於て、イイススを信ずる聖徒の忍耐在り。一三我天より我に言ふ聲を聞けり曰く、之を書せ、今より後、主に在りて死する死者は福なり。神曰く、然り、彼等は其勞を休めて、其業は彼等に隨はん。一四我又觀しに、爰に白き雲あり、雲の上に人の子に似たる者坐せり、其首に金の冕、其手に利き鎌あり。一五又他の天使は殿より出で、大なる聲を以て雲に坐する者に呼びて曰へり、爾の鎌を遣して刈れ、蓋刈る時至れり、地の刈るべき物熟したればなり。一六雲に坐する者其鎌を地に投げたれば、地は刈られたり。一七又他の天使は、天に在る殿より出でたり、彼も利き鎌を持てり。一八又他

の天使、火に權ある者は、祭壇より出で、大なる聲を以て、利き鎌を持てる者に呼びて曰へり、爾の利き鎌を遣して、地の葡萄の房を剪れ、蓋其果は熟せり。一九天使は其鎌を地に投げて、地の葡萄を剪り、之を神の怒の大なる醡に投じたり。二〇果は醡の中に在りて、城外に於て踐まれたれば、血は醡より出でゝ、馬の勒にまで至り、一千六百小里に及べり。

第十五章

一　我又他の大にして奇妙なる異象を天に見たり、七の天使は七の末時の苗を持てり、神の怒の此を以て終る所の者なり。二　我は玻璃の海の如きを見、且獸と、其像と、其印誌と、其名の數とに勝ちたる者が、此の玻璃の海に立ちて、神の琴を執れるを見たり。三　彼等は神の僕モイセイの歌、及び羔の歌を歌ひて曰ふ、主神全能者よ、爾の所爲は大なる哉、奇妙なる哉、諸聖の王よ、爾の道は義なる誠、誠なる哉。四　主よ、誰か爾を畏れざらん、爾の名を讃榮せざらん、蓋聖は獨聖なればなり、萬民來りて爾の前に拜せん、爾の義判顯れたればなり。五　此の後我觀しに、爰に天に於て證詞の幕の殿は開けたり。六　七の天使は七の苗を持てる七の天使は殿より出でたり、潔くして光れる棄の衣を衣、胸

に金の帶を束れたり。七 四の生物の一は七の天使に、無窮の世に生くる
たる七の金の鼎を與へたり。八 殿は神の光榮と其能力とに由りて烟に
滿てられたり、七の天使の七の苗の畢るに至るまでは、誰も殿に入る能はざりき。

第十六章　一 我聞けり、殿より七の天使に、言ふ大なる聲を聞けり、曰く、往きて
鼎を地に傾けよ。二 第一の天使往きて、其鼎を地に傾けたれば、毒惡にして
は、獸の印誌ありて其像を拜する人人に生じたり。三 第二の天使其鼎を
ば、海は死人の血の如くに爲りて、海中の生物皆死せり。四 第三の天使其鼎を河及び水
の泉に傾けたれば、乃血と爲れり。五 我水の天使の言ふを聞けり、曰く、
在りし主よ、爾は此くの如く審判せしを以て、義なり、聖なり。六 彼等は諸聖と諸預言者
さの血を流しゝに因りて、爾は彼等に血を與へて飮ましめたり、蓋彼等は之に當れり。
七 我又他の者の祭壇より言ふを聞けり、曰く、然り、主神全能者よ、爾の審判は誠なる哉、
義なる哉。八 第四の天使其鼎を日に傾けたれば、此に火を以て人人を焚く權は與へら
れたり。九 人人は大なる熱に焚かれて、此等の苗に權ある神の名を讀り、悔改せずして、

光榮を彼に歸せざりき。一〇第五の天使其鉢を獸の座に傾けたれば、其國暗くなりて、人人苦に因りて其舌を齧み、一一且其苦と瘡とに因りて天の神を詛ひ、其行爲を悔改せざりき。一二第六の天使其鉢を大なる河エフラトに傾けたれば、其水は涸れたり、東方の諸王の路を備へん爲なり。一三我は龍の口と、獸の口と、僞預言者の口より、蛙に似たる三の不潔なる神の出づるを見たり。一四此は靈鬼の神にして、奇徴を行ふ者なり、彼等は出でゝ全地の諸王に就く、之を神全能者の彼の大なる日の戰に集めん爲なり。一五視よ、我盜の如くに來る、儆醒して其衣を守り、裸にして行かず、其羞を見ざらしむる者は福なり。一六乃彼等をエヘレイの言にてアルマゲッドンと名づくる所に集めたり。一七第七の天使其鉢を空氣に傾けたれば、天の殿より寶座より、大なる聲出でて曰く、成れり。一八乃閃電と、迅雷と、衆くの聲と、大なる地震と作り、又大なる地震あり、人の地に在りしより以來、未だ有らざりし者なり、是くの如き地震、斯く大なる者なり。一九大なる邑は裂けて三と爲り、異邦の諸の邑は傾れたり、大なるバビロンは神の前に記念せられたり、之に彼の烈しき怒の酒の杯を與へん爲なり。二〇凡の嶋は奔り、諸山は見えず

なれり。二一又大なること鈞の如き雹は、天より人人に降りたり、人人雹の菑に因りて
神を讙れり、其菑甚大なればなり。

第十七章

一七の鼎を持てる七の天使の一は來り、我と與に語りて、我に謂へり、來れ
我爾に多くの水に坐する大なる淫婦の審判を示さん。二地の諸王は彼と淫し地に居
る者は其淫亂の酒に醉ひたり。三乃我を神に於て野に攜へたれば、我絳き獸に坐す
る婦を見たり、獸は神を讙る名に滿てられ、七の首、十の角あり。四婦は紫布と絳布とを
衣、金と寶石と眞珠とを妝ひて、其手に憎むべき者と其淫亂の穢とを滿つる金の杯を
執れり、五其額に名の記せるあり、曰く奥義、大なるワヲロン、地の諸淫婦及び憎むべき
者の母と。六我婦が諸聖の血とイイススの證者の血とに醉へるを見たり、彼を見て、大
に驚き奇しめり。七天使我に謂へり、何ぞ奇しむ、我爾に此の婦、及び彼を乘する獸、七の
首十の角ある者の奥義を語げん。八爾が見たる獸は、先に有り、又無し、後淵より上り、又
沈淪に往かん、地に居る者にして、世の始より其名の生命の書に錄されざる者は、獸が
先に有り、又無く、後復出づるを見て、奇しまん。九此には智なる意義あり。七の首は婦の坐

する所の七の山なり。一〇又七の王なり、其五は已に傾れ、其一は尚在り、餘の一は未だ來らず、來らば、暫く存すべし。一一先に有り又無き獸は、其第八なり、七より出でゝ、沈淪に往かん。一二爾が見たる十の角は、十の王なり、未だ國を受けざるも、一時獸と偕に王の如き權を受けん。一三彼等は旨を一にして、己の能と權とを獸に與へん。一四彼等は羔と戰ひ、羔は彼等に勝たん、蓋彼は諸主の主、諸王の王なり、彼と偕にする者は、召され、選ばれたる、忠信なる者なり。一五又我に謂ふ、爾が見たる諸水、淫婦が坐する所の者は、諸民、群衆、諸國、諸音なり。一六爾が獸に於て見たる十の角は、淫婦を惡み、之を荒し、之を裸にし、其肉を食ひ、火を以て之を焚かん。一七蓋神は己の旨を行ふことを彼等の心に納れて、彼等に其國を獸に與へて、神の言の成就せんことを待たしめたり。一八爾が見たる婦は、地の諸王に王たる大なる邑なり。

第十八章　一此の後、我又他の天使の、天より降り、大なる權を乘れるを見たり、地は其光榮に由りて照さされたり。二彼は厲しく呼ぶ、大なる聲を以て言へり、大いなるバビロン は傾れたり、傾れたり、魔鬼の居處、凡の不潔の神の巢、凡の不潔にして憎むべき鳥の巢

と爲れり。三蓋彼は萬國に其淫亂の怒の酒を飲ましめたり、地の諸王は彼と淫し、地の
諸商は彼が奢華の甚しきに因りて富を獲たり。四我又天より他の聲を聞けり、曰く、我
が民よ、爾等彼の中より出でよ、其罪に與らず、其災を受けざらん爲なり。五蓋其罪は天
にまで滔り、神は其不義を憶ひ起せり。六彼が爾等に與へし如く、彼に與へ、其行に依り
て、倍して彼に報い、其斟みたる杯に、倍して彼の爲に斟め。七彼が自ら榮え、自ら奢れる
度に適ひて、彼に苦と哀とを與へよ。蓋彼は其心の中に言ふ、我女王の位に坐す、我嫠に
非ず、哀を見ざらんと。八故に一日の間に其災に至らん、即死、哀、饑饉なり、彼且火を以
て焚かれん、蓋彼を審判する主神は大能あるなり。九彼と淫し、彼と與に奢りたる地の
諸王は、彼が焚かるゝ烟を見る時、彼の爲に哭き號び、一〇彼の苦を畏るゝに由りて、遠
く立ちて曰はん、禍なる哉、禍なる哉、大なる邑ワワロン、堅固なる邑よ、蓋一時の間に爾
の審判は至れり。一一地の諸商も彼の爲に哭き哀しまん、蓋復彼等の貨物を買ふ者な
し。一二其貨物は金、銀、寶石、眞珠、細布、紫布、絹、絳布、凡の香木、象牙の諸器、佳木銅鐵蠟石の
諸器、一三肉桂、香品、香膏、乳香、酒、油、麵、麥、牛、羊、馬、車及び人の身靈なり。一四爾の靈の

嘗めろ果實は爾に離れ、凡の珍奇華美の物は爾に離れたり、爾復之を見ざらん。一五此等の諸商、彼に由りて富を獲たる者は、彼の苦を畏るゝに由りて、遠く立ち、哭き哀しみて、一六曰はん、禍なる哉、禍なる哉、細布と紫布と緋布とを衣、金と寶石と眞珠とを飾りたる大なる邑よ、蓋一時の間に是くの如き富は滅びたり。一七凡の舟長と、凡の舟に乘れる者と、凡の舟人と凡そ海に貿易する者とは遠く立ち、一八彼が焚かるゝ烟を見て、號びて曰へり、何の邑か此の大なる邑に似ろを得ん。一九又其首に塵を撒りて、哭き哀しみ、號びて曰へり、禍なる哉、禍なる哉、爾大なる邑、凡そ海に舟を有つ者が彼の奢華に由りて富を獲たる者よ、蓋一時の間に彼は荒墟と爲れり。二〇天及び聖使徒、預言者よ、之が爲に樂しめ、蓋神は爾等の審判を彼に行へり。二一又一の有能なる天使は大なる磨の如き石を取り、海に投じて曰へり、ロマロン、大なる邑は、斯く烈しく傾されて、復之を見ざらん。二二琴を彈き、歌を歌ひ、笛を吹く者の聲は、復爾の中に聞えざらん、凡の工藝は、復爾の中に見えざらん、磨の聲は、復爾の中に聞えざらん、燈の光は、復爾の中に照らさ

らん、蓋爾の諸聖は地の侯伯と爲れり、爾の魔術に由りて萬國は惑はされたり。
の中に、諸預言者、諸聖人、及び凡そ地に於て殺されたる者の血は見られたり。

第十九章

一此の後、我多くの民の呼ぶが如き大なる聲の天に在るを聞けり、曰く、「アリルイヤ」、救贖と、光榮と、尊貴と、權能とは、我等の主に歸す。二蓋其審判は誠なり、義なり、蓋彼は淫亂を以て地を敗壞せし大なる淫婦を定罰し、己の諸僕の血を其手より索めたり。三再言へり「アリルイヤ」。彼の烟は上りて、無窮の世に息ます。四又二十四の長老及び四の生物は俯伏し、寶座に坐する神を拜して曰へり「アーミン」「アリルイヤ」。五寶座より出でて曰へり、「アリルイヤ」。六我多くの民の聲の如く、多くの水の聲の如く、烈しき雷の聲の如く、聞けり、曰く「アリルイヤ」、蓋主神全能者は王と爲れり。七我等は喜び樂しみて、光榮を彼に歸すべし、蓋羔の婚姻は屆り、其婦は已を備へたり。八彼に潔くして光れる細布を衣ることは與へられたり、細布とは諸聖の義なり。九天使我に言へり、之を書せ、羔の婚姻の筵に召されたる者は福なり、又曰へり、是れ神の眞の言なり。一〇我其足下に俯

伏して、彼を拜せんとせしに、彼我に言へり、不可なり、我は爾とイエスの證を有つ爾の兄弟との同僚なり、神を拜せよ、蓋イエスの證は預言の神なり。一一我天の開けたるを見たり、看よ白き馬あり、之に乘れる者は、忠信及び眞實なる者と稱へられ、義を以て審判を行ひ、及び戰を爲すなり。一二其目は火燄の如く、其首に多くの冕を戴けり彼は錄されたる名を有てり、彼の外之れを識る者なし。一三彼は血に染みたる衣を衣たり、彼の名は神の言と稱へらる。一四天の軍は皎くして潔き細布を衣、白き馬に乘りて、彼に從へり。一五彼の口より利き劍出づ、之を以て彼等を擊たん爲なり。彼は鐵の杖を以て諸民を牧せん、彼は神全能者の憤怒の酒醡を踐む。一六彼の衣と股とに名の書されたるあり、曰く、諸王の王、諸主の主と。一七我一の天使の日に立てるを見たり、彼は大なる聲を以て、中天に飛ぶ凡の鳥に呼びて曰へり、來りて、神の大なる筵に集れ、一八諸王の肉、千夫長の肉、勇士の肉、馬と之に乘る者との肉、凡の自主と奴僕と、小なると大なる者との肉を食はん爲なり。一九我獸と、地の諸王と、彼等の軍とが、馬に乘れる者及び其軍と戰はん爲に集りたるを見たり。二〇獸及び彼と偕に僞預言者、卽曾て

彼の前に奇徴を行ひ、之を以て獸の印誌を受けて、其像を拜する者を惑はし、又獸の像に生きながら、硫黄を以て燃ゆる火の池に投ぜられたり。二其餘の者は馬に乘れる者の口より出づる劍を以て殺されたり、凡の鳥は彼等の肉に飽きたり。

第二十章

一我天使の天より降るを見たり、其手に淵の鑰と大なる鏈とを持てり。二彼は龍、昔の蛇、卽惡魔及びサタナなる者を執へて、之を一千年の間縛り、三之を淵に投げ、之を閉ぢて、其上に封印せり、一千年の終るに至るまで、復諸國民を惑はさざらん爲なり、其後彼は暫時の間放たるべし。四我列座及び之に坐する者を見たり、彼等に審判の權は與へられたり、我又イイススの證及び神の言の爲に斬られたる者、卽獸とその像とを拜せず、己の手に印誌を受けざりし者の靈を見たり。彼等は生きて、一千年の間キリストと共に王たりき。五餘の死者は一千年の終るに至るまで生きざりき。此れ第一の復活なり。六第一の復活に分ある者は福なり、聖なり、第二の死は彼等の上に權を有たず、乃彼等は神及びキリストの司祭と爲りて、彼と偕に一千年

の間王たらん。七一千年の終るに及びて、サタナは其牢獄より釋かれ、出でゝ、地の四極
の諸民、ゴグ及びマゴグを惑はして、之を戰の爲に集めん。其數は海の沙の如し。八彼等
は地の廣き處に上りて、諸聖の陣營と愛せらるゝ城とを圍みたるに、九火は神より天
より降りて、彼等を囓みたり。一〇彼等を惑はしゝ惡魔は火と硫磺との池に投ぜられた
り、卽獸と僞預言者との在る所なり彼に於て彼等は日夜苦しみて、無窮の世に熄ま
ざらん。一一我大なる皎き寶座、及び之に坐する者を見たり、天と地とは彼の顏より遁
れて、其所を得ざりき。一二我死者の小なる者及び大なる者が神の前に立てるを見た
り、諸書は披かれ、又他の書、卽生命の書なる者は披かれたり、死者は此等の書に錄され
たる事に由り、其行に循ひて、審判を受けたり。一三海は其內の死者を出し、死と地獄と
は亦其內の死者を出せり、各其行に循ひて審判を受けたり。一四死も地獄も火の
池に投ぜられたり。此れ第二の死なり。一五凡そ生命の書に錄されざりし者も火の池
に投ぜられたり。

第二十一章

一我新なる天及び新なる地を見たり、蓋先の天及び先の地は逝れり、

海も亦有るなし。二又我イオアンは聖なる城、新なるイエルサリムが、其夫の爲に飾られたる新婦の如く預備せられて、神より天より降るを見たり。三我大なる聲の天より言ふを聞けり、曰く、視よ、神の幕は人人と偕に在り、彼は彼等と偕に在りて、彼等の神と爲らん。四神は彼等の目より凡の淚を拭はん、死は復有らざらん、悲哀も、號泣も、疾痛も、復有らざらん、蓋前の事は逝れり。五寶座に坐する者は曰へり、視よ、我一切新なるを造る。又我に言ふ、之を書せ、蓋此の言は眞實にして、信ずべきなり。六彼我に言へり、成れり、我は「アリフア」及び「オメガ」、始及び終なり、渴く者には、我價なくして生命の水の泉より飲ましめん。七勝つ者は一切を嗣がん、我は彼の神と爲らん、彼は我の子と爲らん。八然れども臆する者、信ぜざる者、憎むべき者、人を殺す者、淫行の者、魔術を行ふ者、偶像を拜する者、凡そ謊を言ふ者の分は、火と硫磺との池に在り、此れ第二の死なり。九七の末時の首を滿つる七の鉢を持ちし七の天使の一、我に就きて曰へり、來れ、我爾に新婦、卽ち羔の妻を示さん。一〇乃我を神に於て大なる高き山に攜へて、我に大なる城、聖なるイエルサリム、天より神よ

り降る者を示せり。二城には神の光榮あり。其光は至りて寶なる石に似、透明なる碧玉の如し。二城には大なる高き垣あり、十二の門あり、門には十二の天使あり、又名の書されたるあり、即ちイズライリの諸子の十二の支派の名なり。一三東に三門、北に三門、南に三門、西に三門あり。一四城の垣には十二の基址あり、其上に羔の十二の使徒の名あり。一五我と語れる者は金の竿を持てり、城と其門と其垣とを度らん爲なり。一六城は四方にして、其長さは、其濶に異なるなし。彼竿を以て城を度りしに、一千二千小里を得たり。其長さ、濶さ、高さ、相等し。一七又垣を度りしに、一百四十四尺を得たり、是れ人の度、亦天使の度なり。一八垣の締構は碧玉なり城は純金にして、淨き玻璃の如し。一九城の垣の基址は諸の寶石を以て飾れり。第一の基址は碧玉、第二は青玉、第三は蒼玉、第四は蔥珩、二〇第五は雜紅玉、第六は瑪瑙、第七は黄玉、第八は綠玉、第九は淡黄玉、第十は翡翠、第十一は赤玉、第十二は紫玉。二一十二の門は十二の眞珠なり、一の門を爲せり。城の衢は純金にして、透明なる玻璃の如し。二二我其中に殿を見ざりき、蓋主神全能者及び羔は其殿なり。二三城は日月の之を照すを需めず、蓋神の光榮は之を照し、且

燈は其燈なり。二四 救はれたる諸民は其光の中に歩み、地の諸王は己の光榮と尊貴とを其中に攜へん。二五 其門は終日閉ぢず、夜は彼處に無からん。二六 諸民の光榮と尊貴とは其中に攜へられん。二七 凡の不潔、及び憎むべきことゝ謊とを行ふ者は、其中に入ることを得ず、惟羔の生命の書に錄されたる者は入らん。

第二十二章

一 彼また我に生命の水の清き河を示せり、澄めること水晶の如し、神及び羔の寶座より出づ。二 其衢の中及び河の此方彼方に生命の樹ありて、十二次、月毎に其果を出す、樹の葉は諸民を醫すが爲なり。三 凡の呪詛は復有らざらん、神及び羔の寶座は其中に在らん、彼の諸僕は彼に奉事し、四 彼の顏を見、彼の名は其額に在らん。五 夜は復有らず、燈と日の光とを需めず、蓋主神は彼等を照すべくして、眞實なり、聖なる諸預言者の主神は、速に成るべきことを其諸僕に示さん爲に、其天使を遣せり。七 視よ、我速に來る、斯の書の預言の言を守る者は福なり。八 我イオアンは此等の事を見、且聞けり、我は聞きかつ見し時、此等の事を我に示せる天使の足下に俯伏して拜せんとせしに、九 彼我に言

へり、不可なり、蓋我は開と、開の兄弟諸預言者と、斯の書の言を守る者とを拜せよ。一〇又我に言へり、斯の書の預言の言を封ずる勿れ、蓋時は近し。一一不義なる者は仍不義を爲すへし、汚穢なる者は仍汚穢を爲すへし、聖なる者は仍聖にせらるへし。一二視よ、我速に來る、我の報は我と偕に在り、各人にその行に依りて報いん爲なり。一三我は「アリファ」及び「オメガ」、始及び終、第一の者及び末の者なり。一四生命の樹に權を得、及び門より城に入らん爲に、彼の誡を守る者は福なり。一五犬と、魔術者と、淫亂者と、拜偶像者と、凡そ謊を好みて之を行ふ者とは外に在り。一六我イエスは我が天使を遣せり、之を開等に諸教會に證せん爲なり。我はダビデの根、及び苗裔なり、光れる晨の星なり。一七神と新婦とは曰ふ、來れ、渴く者は來るべし、望む者は假なくして生命の水を取るべし。一八我亦凡そ斯の書の預言の言を聞く者に證す、若し之に加ふる者あらば、神は斯の書に錄されたる災を彼に加へん。一九若し斯の預言の書の言を削る者あらば、神は彼に生命の書と、聖なる城と、斯の書に錄されたる事とに與る分を削らん。二〇此を證する者

は曰ふ、然り、我速に來る。「アミン」。然り、主イエスよ、來れ。二一我等の主イエスの恩寵は爾等衆と偕に在らんことを。「アミン」。